
有朋堂文庫

Takizawa, Bakin
Kinsesetsu bishonen roku



近世說美少年錄

上巻

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

緒言

近世說美少年錄は、馬琴の著作中、所謂四大作(八犬傳、弓張月、巡島記、俠客傳)と雁行せる鏤心の長篇也。其始めて稿を起せるは、文政十一年八月、六十二歲の時にして、續編玉石童子訓は眼疾の爲め之を口授刊行し、當時述作の途中に在りし八犬傳、巡島記、及び新たに著手したる俠客傳と共に其完結を急ぎたりしも、天、壽を作者に假さず、遂に未完の書たるに終りしは、讀者の等しく遺憾とする所也。

本書は、戰國時代の二雄、毛利元就、陶晴賢を拉し來りて、之を善惡二種の美少年に假作して主人公とし、例の勸懲の旨趣を明かにせんとせしものゝ如し。然れども他の諸作に於て、主として局面の變化に得意の手腕を發揮

したるに反し、本書に於ては、作中人物の性格に特殊の注意を拂ひ人情の機微を穿ち、心理の變化を明かにするの點に於て、詳密自然を期したる痕あり。是れ本書が、馬琴が數百種の著作中にありて、特に一異彩を放てる所以の一なるべし。

今新たに本書を鉛槧に附するに方りては、文政十一年第一集刊行の木板本に據り、語格、用字例の如きも、すべて舊に從ひて改めず、唯、明かに傭書の誤寫と認むべきものに就きては一々訂正を加へ、振假名は凡て歴史假名遣に據れり。

大正元年七月

校訂者　武笠　三

近世說美少年錄第一輯序

將帥無常任。初出世也。乘風雲之會。而得其主。則佐順以討逆。功成而名爵丕顯。子孫承嗣。而爲一方屛翰者。爲不尠矣。昔者周防有大內氏焉。其先出於百濟國王。東明八世孫。王餘璋第三子琳聖。　天朝　推古天皇卽位一十九年。琳聖避唐兵之亂投化。而處于周防州佐波郡多多良濱。因賜姓多多良公。王子七世孫。多多良公正恆。稱大內氏。又數世。而至　朱雀朝。有大內藤根者。藤根十世孫備盛。壽永役從東軍。而有功焉。因任大內介。當時與千葉三浦富樫俱。謂之元功四介。人以爲榮。備盛玄孫周防權介重弘。補於六波羅評定衆。重弘孫弘世。法名道階。自元弘建武擾亂。從事足利氏。依功爲周長石三州守。弘世生義

弘。義弘武略過父祖矣。明德役。與山名氏淸戰。獲其首。相國道義公。嘉之賜豐前及紀伊和泉。與舊封三州倂管領六州。威名自是盛也、應永六年。義弘以佐界反。將襲華洛。軍敗見誅。其子持世遁去。隱于周防山口。相國則削豐紀泉三州。與之於有功者。且使義弘弟盛見繼其家、持世亦會赦、事得散。數年之後、盛見請持世爲嗣。相國可之、持世生教弘。教弘生政弘。政弘生義興。義興輔佐將軍慧林公。還於京師、其忠且有功、如五霸一般。由茲除三位補管領、時爲周長豐筑藝石及山城七州守。在京八年。財用不足。辭而歸周防、又數年而薨、義興生義隆、義隆暗弱。不思民之憂苦。豪奢無節。以富貴自負、於是爲其臣陶晴賢所弒。國竟亡矣。予一日繙軍記。讀而至義隆滅亡條下。未嘗掩卷不浩嘆也。蓋

義隆雖暗弱。然非有桀紂之悪。且封疆之廣。豈無一箇比干耶。而其身殂于斧鉞。七州瓦解。所以然者何也。位高德寡。帷簿不修。親愛佞人。是以禍發自蕭墻之内。不亦宜乎。乃者書賈千翁軒。揣刻又徵予著編。予意在前條。卽便編次興隆二世事蹟。及美悪少年列傳以塞責。皆是寓言。以勸懲。意匠類似唐山小說。寓言小說。君子不取也。譬之春華驪目。觀華銷日。寔無益也。然可醫鬱遺悶焉。是書亦有然。君子以此破獨坐睡魔。蒙昧以此爲迷津一筏。則勝於不見之歟。本輯方成。書賈又求序。搦管之際。思出于此。遂是爲序。

文政十一年暢月之吉

曲亭蟫史撰

近屬院本雜劇に載て、美少年と稱するものは、梅稚、愛護、粂之助、吉三などいふ類に過ぎず。多は皆是眉目の美にして、眞の美少年にはあらず。夫美は醜の對、惡は善の偶なり。然れば世に美少年あるときは、又惡少年なきことを得ず。且その美たるや、眉目の美あり、又稟性の美なるあり。惡にも亦相貌の醜惡あり、心術の醜惡あり。かゝれば容貌は美麗といふとも、その性毒惡なるものは、惡少年といはまくのみ。又容止は醜しとも、その性の美たらんものは、美少年とこれをいはん。況性と容止と、共に善美なるものは、是眞の美少年ならずや。よりてこの書のはじめには、貌は美にして性の美ならぬ、少年等が傳を作りつ。後に性と容止と、美なる少年傳をもて旨とす。是則善美あるときは、醜惡なきことを得ざるの義にして、書名に所云美少年は、末松鷲津日高等の、三少年の事に似て、その事にしもあらずかし。作者の用心數輯を累て、漸々にして見はるべきを、いまだ其所まで至らぬ程に、看官思ひ惑んかとて、聊こゝに自註を贅して、このことわりを書つくるになん。

近世説美少年録 上卷 目錄

近世說美少年錄續編（新局玉石童子訓）

近世説美少年録

第一輯 巻之一

東都 曲亭主人 編次

第一回

諫を拒て管領古廟に陣す
屯を驚して水火驕將を懲す

聞道、往昔、惠林院足利義植卿（初名義尹）將軍重任たりし時、周防長門、豐前筑前、安藝石見、山城七箇國の守護なりける、大内左京權大夫多々良義興は、興復の功あるをもて、先代には例もなかりし、管領職に補せられて、その身京師に在りしかば、執權政務一家に歸して、威勢高く時めきたり。時に永正六年、己巳の春の比、南朝の大將なりし、菊池武政が嫡男、肥後守武朝が殘黨に、菊池肥後太郎武俊と喚るゝもの、先亡の餘類を鳩めて、肥後國阿蘇郡、阿蘇山の古城に盾籠り、近郷隣郡を亂妨して、をさ〳〵猛威を振ふよし、鎭西の守護大伴親春、太宰少貳等が進らせし、急脚遞の使者、既に京師に到著して、具に注進したりける。是により室町殿には、

前管領高國、新管領義興、畠山尾張入道卜山、近江判官高頼等の諸老臣を、おん前に召聚合て、群議を凝し給ひけり。時に畠山尾張入道卜山、進出て稟すやう、菊池は元弘建武年間、入道寂阿、宮方にて、後醍醐天皇のおん爲に、戰歿をしたりしより、武光武政に至るまで、南朝に隨從して、一たびもその志を移さず、鎭西數箇國を横領して、犄角の勢ひを張りたれども、南北兩朝おん和睦ありしより、渠が弓箭は衰へたり。然ればこの時に方りて、先將軍鹿苑院義滿公、菊池武政を征伐の爲、みづから數萬の精兵を將て、九州に御下向あり。武政路次に出迎へて、霎時は防戰ふものから、處々の支城を攻落されて、降參するもの多かりければ、終に弓折れ勢究り、せん術のなき隨に、旗を卷き兜を脱ぎ、阿容々々と御陣に參りて、陣謝の辭を盡せしかば、即便寛仁の御沙汰をもて、和順の義を御許容あり。肥後半國を賜りて、聽て凱陣ましく〵けり。然りけれども武政は、なほ野心を改めず、一味の武士も彼此なる、城々に籠居つ、動すればおん下知に、從ざること多かりき。有恁程に武政は、老病に犯されて、終に身まかりたりし後、その子武朝も陣歿して、子孫民間に落魄り、その家終に絶たるよしは、人みな是を知ざるものなし。粤に年紀を僂れば、彼武俊は、武政が孫、武朝が子なるべし。父祖の武勇を繼んとて、纔に古城に寓るといふとも、いかばかりの事のあるべき、とは思へども

彼地の武士に、舊交を懐ふもの、走集りて多勢にならば、由々敷大事に候はずや。小火滅ずんば、燄々を奈何、兩葉にして斷ざれば、斧を用るの患あり。はやく討手の軍將をもて、誅伐せしめ給はん事、勿論に候べし、といひつゞ傍を見かへれば、義興莞爾とうち笑て、現微妙くもいはれしものかな。去歳の冬小夜深て、御所に盜賊の入りしとき、宿直の近臣多からねば、我君おん手をおろさせ給ひて、賊徒を斫伏給ふ程に、九箇所まで痍を負せ給へど、幸ひにして恙なく、日ならず平愈ましく／＼たり。件の賊等は遺なく、當座に伏誅してければ、本人定かならざれども、今更思へば武俊が、刺客なりしも知るべからず。渠を討手の大將は、その任に勝たるものを、擇ませ給はん事をのみ、願しくこそ候へ、といふに衆皆諾なひて、某等が思ふよしも、その外は候はず、と應て御氣色を伺へば、義植頻りに頷き給ひて、然らば討手の大將を、甲乙と擇むに及ばず、當管領左京兆義興は、中國七州の大諸侯、勇にして且武略あり。大功空しからざるよしは、世もつて人の知る所、逆徒追討の摠大將は、京兆ならで、誰やはある。今は政務に暇なき身の、いとゞ大義に思ふべけれど、はやく周防に立かへりて、近國の躬方を駈催し、一擧に孤城を攻落して、武俊が首を獲んこと、更に踵を旋らすべからず。偏に頼む、と他事もなき、仰に義興推辭に由なく、畏りをぞ稟しける。有斯而次の日義興は、將軍のおん

旗と、軍兵催促の御教書を給はりて、猛に歸國の准備を整へ、隊兵三千餘騎を將て、京師を出て草枕、旅路に幾日有明の、月毛の駒も西天に、ゆくてを只管急ぎしかば、その如月の下澣、周防州吉敷郡、山口の城にかへり來つ、御教書をもて筑紫なる、御方の武士を催促せしかば、西國の大小名、大伴備前守親春、太宰新小貳教頼、原田、山鹿、宇佐千手、宗像酒殿、立石等、各々隊兵を引率して、日ならず來會してければ、義興が七州の士卒と共に五萬餘騎、肥後國に推寄て、阿蘇山近くなりにたり。是より先に義興は、兩個の間諜者をもて、敵の分野を捗らせしに、その者聽てかへり來つ。扨も阿蘇山の古城には、籠れる賊徒一千餘、二千には過ぎ候はず。しかはあれども武俊は、些も怕るゝ氣色なく、敵推寄なば一箭射んとて、鏃を磨く防戰の、准備に暇なく候、と報るを義興うち聞て、原來思ひしにも似ざりけり。武俊武勇の癖者なりとも、纔に烏合の兵もて、京軍數萬の精兵と、雌雄を爭んと欲するは、彼精衞が海を塡め、螳螂が斧をもて、車に逆ふに異ならず。賊に勢の附ぬ間に、大軍、山の三方より、攻登りて蹈潰さん。さばれ長途の疲勞もあるべし。今宵は是首に人馬を憩へて、曉るを齊一侯んとて、射方の諸陣に徇示しつ、阿蘇沼の畔なる、靈蛇の神社を搔帝して、本陣にぞしたりける。不題、安藝州高安郡治比の郷の人氏に、備中介大江弘元といふ武士ありけり。遠くその祖を原れば、

鎌倉の將軍賴朝卿の時、政所の別當なりし、前陸奥守大江廣元の四男、安藝介秀元十一代の裔孫なり。寔に名たゝる世家なれども、纔に一千貫の鄕士にて、大内氏の隊に屬たれば、這回義興の催促に從ひて、主從この陣中にあり。弘元文武の才長く、且嚴嶋なる辨才天を、年來の信者なりければ、今義興が阿蘇沼の、靈蛇の神社を本陣にせよ、と下知するを聞て諫るやう、當社は菊池武光が時、初てこの地に建立して、嚴島の神を合祭りしより、靈驗筑紫に隱れなかりき。某曾故老の物語に聞候ひしに、初武光阿蘇山に、城郭を執立んとて、屢繩張をしたれども、彼山の麓には、阿蘇の神の祟あり。山には硫黄燃出て、常に煙の絶ざること、信濃の淺間嶽、日向の霧嶋山と相似たり。この故に武光が、欲せし城は硫黄の爲に、幾回となく燒崩されて、成就することなかりしかば、いといたう困じ果て、誰にもあれ彼城の、繩張をよくとり定めて、落成せしむるものあらば、賞祿は乞に依るべしと、遺る隈なく徇たりける。有斯程に同國、山鹿郡木山村に、浮木と喚るゝ嫗ありけり。故鄕は安藝の廣嶋にて、最はやくより宮嶋なる、辨才天を信ずること、大かたに過たれども、過世惡くて良人に後れ、獨子さへに先たてて、よるべなき身となりしかば、些の由緣を心當に、件の邨に流れ來つ。日每に木山川に下立て、人の被舊せし衣を洗ふを、生活にしてけるに、有一日彼川の上にていと大きなる一箇の卵

の、草叢陰にありけるを、心ともなく見出して、拾ひて宿所にもてかへり、苧桶に綿を布などしつ、その内に斂養ふて、既に日ごろを歷る隨に、件の卵は自然と破れて、一箇の赤子の生れにけり。あるべき事とも覺ねば、且駭き且憐み、とかくして字育む程に、纔に半年許にして、その子の大きうなりし事、七八歲の童子に優たり。こゝをもて隣村近鄕、堺を隔し田舍まで、傳聞あやしみて、日々に觀るもの堵の如し。原是卵の中よりして、生出たる子でありければ、玉五郎とぞ名づけたる。俚語に、卵を名づけて、玉子ともいへばなるべし。邈に唐山の故事を思ふに、帝嚳の少妃簡狄は、春玄鳥の卵を呑て、契を生りといふめれど、それにも倍ていと怪し、と村學究の呟きしを、浮木は物とも思はずして、なほ慈む情を感ずる、玉五郎は浮木にいふやう、過世ありてやかくまでに、養育の恩いと高きに、何をもて報ふべき。傳聞にき菊池殿は、阿蘇山の城成就せず、よく彼山に繩張をして、落成せしむるものあらば、賞祿は請ふによるべし、と徇られたるに侍らずや。われこの事をよくすべし。おん身居多の賞財を獲て、一期を優に送り給へ。まづこの由を訴へてよ。やよとく〳〵と急すを、浮木の媼は今さらに、心もとなく思へども、要あるべしと思ひかへして、菊池が城に赴きつ、云々と訴るに、武光も亦疑ふて、益なからんと思ふものから、媼が月ごろ養ふたる、その子玉五郎の怪談を、傳聞たる事

しもあれば、且試みに請ふに任して、功成らば形の如く、賞祿を取せんといひしらするに、浮木は歡び宿所に退りて、玉五郎に首尾を報しかば、然らば灰を嚢に裝て、そを携て共侶に、阿蘇山に赴くべし。急せ給へ、と扶掖て、郡を隔し路の程を、只一日に走り著きしを、高峰さへなほ易らげに、浮木を脊負ふて攀陟るに、疾きこと馬も如ざるべし。有之而嶺に近づく隨に、玉五郎は、この山に立つ、煙を佶と瞻仰て、霎時咒文を唱る程に、恠むべし昔より、一日も絶ぬ山の猛火は、立地に滅失せて、煙も立ずなりにけり。登時玉五郎は、浮木の嫗を見かへりて、おん身は慈善の人なれども、前世の惡報にて、所天を喪ひ子を先たてて、孤獨の老女となりにたり。さばれ業因やうやく殫て、餘命安樂なるのみならず、死しては神佛に擬せられて、永く祀らるゝ德あるべし。けふまでも尙しらでやおはする。おん身はむかし壽永の比、鎭西にその名聞えし、尾形三郎惟義が、庶流の末孫なり。尾形は大蛇の子孫といふ、皸大太の因みを引て、おん身がわれを字育しも、又辨天を信ずるも、因緣なきにあらずかし。親子の契りも是までなり。今より長く別るべし。わが本形を顯すとも、必な怕れ給ひそ。わが行遶る後に跟て、嚢の灰を揮布給はば、おのづからに繩張成ん。おん身の爲に、この城郭を成就せしむる事はさらなり、阿蘇の社頭に神泉なければ、この山と楢木野の、間に廣き沼を做りて、彼神にこれを

進らせ、われその邊に栖んと欲す。いでく、といひかけて、身を翻すと見る隨に、八尋あまりの白蛇と變りて、山の平坦嶮岨に從ひ、伸つ屈みつ跂たりける。豫て期したる事なれば、浮木は戰く胄を鎭めて、教誨のごとく跡に跟て、携たりける嚢の灰を、彼此と散し布くに、大蛇の涎沫の黏り著けん、灰は地上に凝たる似く、後々までも耗ざりけり。既にして城郭の、繩張早に成しかば、白蛇は浮木を見かへりて、別を告る面色しつゝ、忽然として雲を起し、麓の方に飛去て、野中の古井に入ると見えしが、その井の四下幾十町か、大地陷り沼となりて、その深きこと測るべからず。形樣琵琶に似たればとて、野人琵琶の沼と唱へ、又阿蘇沼とも喚做したり。然程に菊池武光は、浮木が再度の訴によりて、靈蛇の奇特を感悟しつ、そが繩張に從ひて、阿蘇山に城を造るに、麓の神の祟もなく、山の煙さへ絕にければ、思ひの隨に成就せり。武光既に懇み足りて、浮木の媼には、二十町の良田と、沙金千兩を取らせしに、浮木は只その金を受て、田圃は辭ひてこれを受ず。金をば邨長に預措て、貧者にこれを施し、我は里の路を造り、橋を作りなどする程に、三稔に及びてその金の、餘少くなりし比、浮木は病苦を覺ずして、睡るがごとく身まかりけり。登時邨長は、里人等と相計つゝ、遠く浮木が亡骸を、阿蘇沼のほとりに葬り、件の遺れる財をもて、神に齋き禿倉を建て、浮木の辨天と稱へたり。是よ

りして武光は、戰ふ毎に必利あり。肥前肥後、日向大隅、薩摩の盡處まで討從へて、威を西海に振ふこと、靈蛇の擁護なるべしとて、阿蘇沼の畔に、靈蛇の社を建立して、嚴島の辨才天を合し祭り、浮木の禿倉を末社にしたり。その子武政が時までも、年毎の祭禮懈ることなく、その奇麗壯觀は、阿蘇の神社に優るとも、劣るべしとは見えざりしに、武政が兒孫に至りて、神を敬ふ心なく、神社は頽破に及べども、修復を加ることなければにや、彼家遂に衰へて、零落したるその比より、件の山々燃出て、煙の立ことはじめの如し。かゝる先蹤も候に、靈蛇の神社を御陣になされて、雜兵の亂妨すら、制し給はぬはいかにぞや。御祈願までに及ばずとも、御陣を他所を移さして、敬神の義を表し給へ。然らずば神の憎みに迫る、御後悔もや候はん、と故事を述理を盡して、潛やかに諭したる、諫言は耳に逆ひ、良藥は口に苦しといふ、譬に漏れず義輿は、頭を左右にうち掉りて、大江殿は先祖より、和漢の故實を諳じたる、文武の達者といはるゝに、似げなきことを聞くものかな。菊池が大蛇を崇しは、愚民を惑はす奸計なりけん。よしやその事ありとても、毒蛇は蟲の類なり。これを靈あるものといふとも、神とし祭るは淫祠ならずや。淫祠は民に害あるをもて、賢官循吏は必毀てり。然るを某その議に及ばで、本陣にしたる事、彼早蠅鳴邪神の僥幸といはまくのみ。正なきことを喋々しく、人を

な惑し給ひそ、と辭尖鋭く窘めて、從ふべくもあらざれば、弘元はふたゝび諫めず。その身の陣所に退きても、鬱々として樂しからねば、ひとりつら〳〵思ふやう、大内氏は七箇國を、領するすら分に過ぎたる、果報なりとは思はずや。例もなき管領に、なり升りしより權威を恃みて、諫を拒み橫紙を、破らるゝこそうたてけれ。這囘の軍に功ありとも、久後はいかゞあるべき。とは知らずして催促に、從ひぬるこそ悔しけれ、とひとりごちても今さらに、その甲斐とてはなかりけり。有右而日は暮れ雨降そゝぎて、夜は丑三とおぼしき比、疾風颯とおとし來て、阿蘇沼に集る水鳥の、群立騷ぐ汀渚の陣に、雜兵等が燒捨たる篝火はみな滅果たり。寄手の軍兵この物音に、驚覺て罵散動き、原來夜討の入るにやあらん。出よ禦げ、と呼りつゝ、騎馬武者は繫る馬に、鞭を揚て焦燥もあり。士卒は箭を索ね弓を爭ひ、或は鎗長刀を逆さまに挾み、劍後れじと陣門を、走り出て四下を見るに、敵にはあらで漫々たる、阿蘇沼の水逆立て、岸に溢れ陸を浸す。沼水猛に突衝して、人馬の足を拂ひたる、勢ひ當るべうもあらざれば、諸陣齊一避易して、矢庭に溺死するもの、いくばくなることをしらず。辛じて脫るゝものも、弓箭を流し、器械を失ひ、岡をたづねて登らんとするに、如法暗夜の事にしあれば、東西だにも辨へず。主は溺るれども、家隷はこれを拯ふに由なく、父と兄は流されても、とり留んとする子弟

もあらず。瞬間に水炭の、常にもあらずなりしかば、有し阿蘇沼は其處ともわかたず、吉田楢木野の是方より、阿蘇山の麓まで、はや大湖になりにけり。有是けれども總大將義興はさらなり、大伴太宰、その餘の諸將も、辛く水厄を免れて、走退くこと一里許、小印き處に聚ふ程に、天は朗々と明にけり。多くは是幕を失ひ、甲冑を脱捨て、今さら綷を缺のみならず、兵粮さへに出水に取られて、大將も士卒も、饑に臨まぬもののなければ、義興即近鄉に、下知して多く糧を送らせ、又阿蘇宮の大宮司に、兵粮を催促して、稍口腹を養ふ物から、倘かゝる弊に乘て、敵逆寄せばいかゞはせん。抑彼沼の水大く溢れて、かう大水に及びしは、靈蛇の祟なるべき歟。然らずは螺脱なんどいふ、山崩にもやあるべからん。攻べき城へまだ寄もせで、御方を夥喪はれ、世の胡盧にならんのみ。左にも右にもこの軍、果敢々々しき事はあらじとて、呟くものなん多かりける。かゝる騷ぎに一兩日、みな徒に過したる、第三日の夜艾に、水は遺りなく落竭して、故の陸地になりしかば、義興誘や寄せんとて、先陣後陣と部を定め、名におふ高峰の麓路より、阿蘇山深く攻登りて、鬨を咄と颺りつゝ、早雄の壯武者等、いと淺間なる敗城の、前門より後門より、塀を踰城戸を破て、先陣齊一攻入りたる、その甲斐はあらずして、何の程に落亡けん、敵一人もあらざりけり。是は甚麼、とばかりに、疑惑ふて立在折から、

武俊等が落るとき、こゝらの地中に機關り措けん、忽地山も裂るが如く、足下に發る地雷火に、撃仆され身を燔れし、叫嗟と騒ぐ大叫喚、さらでも山に硫黄の氣あれば、四方八面猛火となりて、城の櫓に燃移る、燄を避る遑なければ、城戸より内に攻入りたる、士卒はこゝに四五百名、一箇も脱るゝものなくて、灰燼となりて亡にけり。摠大將義興は、城を距ること七八町、程よき山路に馬を立て、士卒を獎し進る折から、件の緈の爲體に、驚くこと大かたならず。崩れ立たる諸軍勢に、崩を突れて推戻され、おもはず麓に退きて、太息吻てぞゐたりける。されば又彼地雷火は、山の硫黄に移りけん、峯上頻りに鳴動して、菊池が城は一字も殘らず、石垣さへに燒碎けて、煙は年を歷るまでも、立升りつゝ絶ざりけり。この日陣中の衆評に、賊にはあれど武俊は、寡をもて衆に敵しがたき、始終を揣て落亡たる、空城に地雷火を、遺し置たるは智なるかな。現鋒をまじへずして、夥の敵を殺せしは、唐山の常言に、彼死せる孔明が、活る仲達を走せし、といへるにも優す計略なり。然はあらずや、と濳めきて、われを忘るゝ雜兵の、善惡なき言を洩聞くにも、義興いと面なきを、扨あるべきにあらざれば、麓の阿蘇谷に屯しつ、心の鬱悶を慰んとて、身近き兵のみを將て、大宮司の宿所に赴きけり。當下阿蘇の大宮司は、出迎へ席を儲て、茶を薦め果子を羞め、軍旅の疲勞を問慰る、款待等閑ならざれば、

義興感謝に堪ずして、這回武俊追討の、大將を奉りしに、勞して功なき事の顛末、思はざりける水火の爲に、多く士卒を喪ひたる、爲體を説示して、彼沼水の涌出て、里を浸せし例やある。空城の地中より、猛火忽然と發りしは、武俊が豫て巧し、地雷火の所爲なるべし。嚮彼水の出沒のみ、こゝろ得がたく候、といふに大宮司頭を傾け、わが家は遠祖より、當社に仕奉りて、位高く職重く、不肖の某に至るまで、舊記を相傳したれども、沼水の涌出て、人馬を害ひしなどいふ事は、傳へも聞候はず。上古には阿蘇山の、麓はすべて湖水にて、山は湖中にあり。爾るを我阿蘇の神、往古國造たりし時、西なる山を穿通して、水を落し湖を乾し、遂に田圃になし給ひき、と世々の口碑に傳へたり。有斯ば件の沼の四下は、むかしの湖水の跡なれば、出水なしとはいひがたし。又阿蘇山の古城より、火の燃出しは地雷火ならで、おのづからなる硫黃火の、燒拔たる歟、しるべからず。本山の燃ること、往古より一所にあらず。近屬は法性崎と、北と中の岬稜のみ、間なく煙は升るなり。不入斧斤の神山なれども、菊池氏の精忠を、神も憐み給ひけん、武光が時に至りて、山の煙の絕しかば、城郭をすら執立たり。かくて子孫の衰微に及びて、又硫黃火の燃出て、煙絕せぬのみならず、這回城さへ燒れしは、神所行なる歟、測がたかり。近世南北朝と別れ給ひしより、一統の今に至るまで、なほ干戈はをさ

まらず。兵革年々に彌增て、當社數萬貫の神田も、凡夫の爲に橫領せられて、神社は頽破に及べども、修復すべき便著もあらず。澆季の世にはあなれども、神威は今も衰へ給はで、登山のものに賞罰あり。奇異なる事のなきにあらねば、君が刃に衂らずして、武俊を追走し、城さへ燒し給ひしは、神慮に稱せ給ふもの歟。その功なしといふべからず。さのみな思ひ屈し給ひそ、と慰られて義興は、いと憑しき心地しつ。阿蘇の社に參詣して、白銀幾枚か獻り、大宮司に別れを告て、軈て本陣に立かへり、死亡たる兵の、その員數を撿するに、水に溺れしもの一千餘騎、火に燔れしも尠きにあらねど、皆是士卒のみにして、一陣に將たるものは、死ざることを得たりしに、只彼弘元主從の、一箇も遺るものなければ、今の世に稀なるべき、博識者と聞えしに、彼折終に脱れがたき、命運にこそありけれとて、人僉これを惜みけり。

第二回

窮厄を脱れて弘元漁家に宿る
理亂を辨して陀六俊士を資く

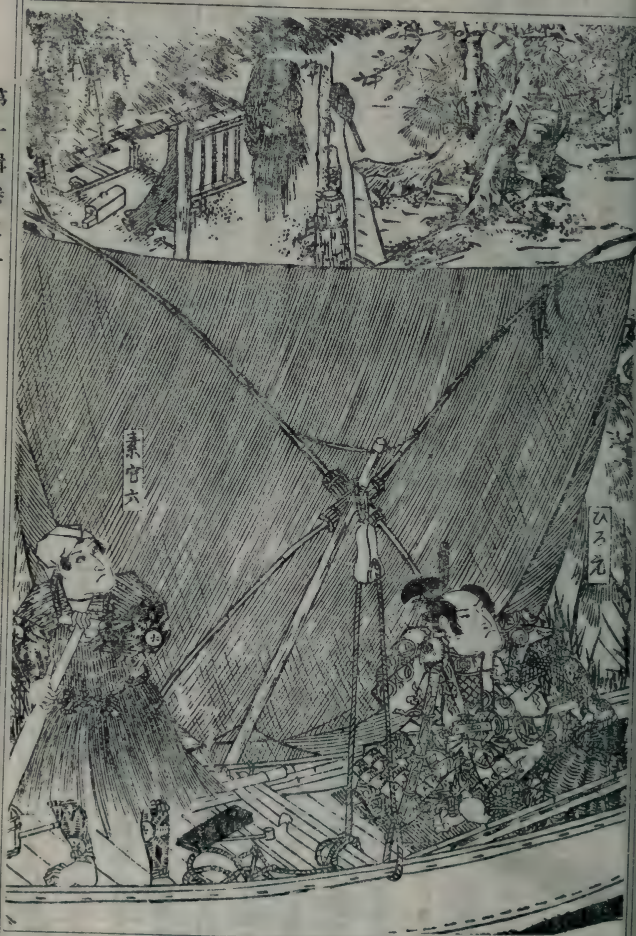
再說、備中介弘元は、當夜沼上の陣にあり。この故に出水の爲に、いちはやく推流されて、せん術のなかりしを、かゝる時にもこゝろ利て、臂近く浮揚りし、盾を掻よせ胸に當て、且く

は泅ぎしかども、水勢の湊なきに、身さへ心も疲勞果て、流れゆくこと幾町なるをしらず。命根今や絶なん、と思ふものから年來信ずる、辨才天を念ずる程に、年ふりたる樹の大枝に、おもはず流れ掛りにければ、携著き息を吻て、猶も木梢に攀登り、覺束なくも曉るを俟に、その明かたより雨歇て、水は大かた落たりける。浩處に一箇の漢子、柹染の栲の衣に、腰蓑を著たるが、平駄船にうち乘て、艣を推立て、漕つ來にけり。船中には四手の網あり。昨夜の水を物とも思はで、漁獵に出たるなるべし。弘元これを見てしより、海月の骨にあふ心持して、やよや舟人、われを救へ、われを救へ、と叫ぶになん、彼人遙にうち向上て、こは甚麼、かばかりの、水を怕れて樹に緣ることかは。昨夕の水は陸も川も、ひとつにはなりたれども、こゝらは人身長の屆べかりしを、今朝は大かた落たれば、歩行よりも行ばゆきてん。いでく〜といひながら、そが艤船を漕よすれば、弘元は遽しく、木梢より携降て、後ざまに乘移るを、漁者は見かへりて、おん身は肚甲錮手臑盾の、打扮いかめしう見え給へば、乃者風聲に聞えたる、阿蘇の寄手の刀禰們ならん。彼處は水の高かりし歟。山より里へ流され給ふは、こゝろ得がたき事にこそ、と詰れば弘元頷きて、寔に推量せらるゝごとく、吾は管領麾下の武士、備中介大江某と喚るゝものなり。いまだ阿蘇山へは寄せずして、きのふは官軍五萬餘騎、阿蘇沼の邊に

あり。爾るに思ひかけなくも、昨夜の水に陣所を喪ひ、小勢なれどもわが一隊の、主従凡三十餘名、一箇も漏るゝものあらで、齊一水に溺れしを、幸ひにして吾身ひとつ、彼樹枝に堰留られて、不思議に露命を繋ぎつゝ、今又和主の資を得たり。是再生の恩にこそ。抑こゝらは川歟、里歟、何と喚做す處ぞや、と問復されて漁者は、手洟かみつゝ又見かへりて、原來如右候ひし歟。彼處は濕地なるをもて、秋の雨には水も出れど、只一宵の春雨に、諸陣難義におひしとは、まことしからぬ珍事なり。勿論こゝらの川々も、昨夜の雨に水の増て、見給ふごとく低き處は、陸もひとつになりたれども、かゝる事はをり〱あり。怪むものも候はず。今すこし滞下さば、川脈は定かにしられて、おん疑ひの釋ぬべし。抑このわたりは阿蘇沼へ、路の程近くもあらぬ、高森川で候なり。この川下は木山川、そが末は海へ入りぬ。さればこの川脈は、阿蘇、合志、菊地、山鹿、玉名、飽田の六郡を、彼此と流通て、菊地、山鹿の堺まで、兩岐に分れたり。そはともあれかくもあれ、思ひかけなき水難にて、饑も疲勞もし給ひけめ。俺們が宿所は遠くもあらず、この川添なる白屋の、雨さへ月の漏るのみなれば、管待まゐらする物はなけれど、一兩日休らひて、寛やかに還らせ給へ。その間には阿蘇の水も、落竭して舊の沼にならん。急ぐは要なき事にこそ、とよに憑しく慰めたる、人の誠に弘元は、歡びを述その意に任して、頻りに感

じて已ざりける。かくて又漁者は、艫聲をかけて漕ぐ程に、定かに川脈顯れて、十町ばかり川下は、只その水の濁れるのみ、常にかはらずと見る隨に、既にして漁者は、宿所のほとりに船を繋ぎて、扶けて弘元を岸に登し、網を攜へ艫を肩にして、先に立つゝ案内をすれば、妻にやあらん出迎へて、只今かへり給ひし歟。いかに獲ものは多かりしや、と問へば頭をうち掉て、否、咋夜の水に落さるゝ、鯉鯽なりとももの せんとて、曉かけて出たるに、させる獲ものはあらずして、思ひもかけぬ阿蘇沼わたりの、沼暴波に流され給ひし、大爺を伴ひまゐらせたり。這回菊池を討手の大將、管領ざまに隸せ給ひし、大官人におはするを、等閑にな思ひ奉りそ。魚籃中には些の雜魚あり。船より揚てとく灸ね。物欲しうおはするぞ、といふに女房こゝろ得て、水際へ走りて船なる魚籃を、もて來て庖湢に撲地と措く、立働きも精悍しく、弘元にうち對ひて、時ならざりし水難に、あはせ給ひし危さも、命めでたくましませば、緣しに觸て歡び侍り。見れば衣裳もまだ乾かず。春寒は殊更に、堪がたきものに侍れば、さこそ便なくおぼすらめ。柴折燒て進らせん。地炕の緣へよらせ給へ。痛ましさよ、と他事もなく、夫婦等き管待態に、弘元いよ〳〵感謝に堪ず。額に雲時手を加て、危窮の折に邂逅せられし、あるじのみかは和女郎まで、かく正首にものいはるれば、初對面なる心地はせず。都會の人は勢利に走り


出像第二


素宮六
ひろ元

て、交遊の間すら、憂ひを共にするものは、今の世に得がたきを、田舎人の心直かる、十室の邑にも忠信あり。心裡恥しく思ふのみ、といふにあるじは微笑て、否、寒貧なし給ひそ、危きを見て是を救ふは、人の性の善なる所以、誰もかくこそあるべきに、といふ間に女房は、ひとり庖湢に退きて、雑魚に鹽ふる炙網の、面を抓む勤はしさも、客を愛する手料理に、飯盛る椀と羹椀の、剝て揃はぬ五器々々と、拭ひ榮せぬ脚附の、折敷の縁は離れても、繕ひのなき白杉の、洗濯箸も時にあふ、春の菘漬は君が爲に、野にこそ摘ねあはせ物の、數に向へとり添て、いざとて軈てもて出て、恭しく安排つ、夫婦右より左より、とく食給へ、と羞るを、弘元饑て辭するに及ばず、歡びを述箸を揚て、思ひの隨にたうべしかば、快然として愉く、遂に睡眠を催しけり。登時あるじは忙しく、女房を呼立て、綾女よ、大爺の臥簟を儲て、些休はせまゐらせよ。きのふ通宵樹の杈に、足踏掛ておはせしかば、疲勞給ふは理りなり、やよとく〳〵といそがすを、弘元急に推禁めて、こは甚麼、日は尙高きに、今より臥簟に入られんや、と推辭をあるじは聞あへず、こゝも旅宿でをはするに、誰に憚りのあるべしやは、よき程に覺してん、納戸はこゝより陜けれど、南面で溫暖なり。枉て且く睡らせ給へ、としば〳〵いふに辭ひかねし、弘元は引るゝ儘に、やうやく納戸に赴きつ、霎時寢に就くと思へば、われにもあらで熟睡

しつ。その日も既に暮果て、子二刻の左側ひとり覺けり。枕邊に措れたる、燈火の光幽にて、あるじ夫婦は寢まりにけん、寂寞として音もせず。噫鈍ましやわれながら、暮るゝもしらでよく寢たり。淨手せばや、と身を起して、晝見し隨を心當に、竹縁に掻撈出れば、背門のかたに馬嘶て、人夥相譚聲の、遠くもあらず聞えにけり。弘元耳を欹て、肚裏に思ふやう、田家はなべて小荷駄あれども、こゝは川添の孤屋にて、漁獵して世を渡れば、素より馬を豢ふべくもあらず、加旃小夜深て、背門備に人の聚合しは、怪しむべきことになん。こゝのあるじは盜賊の、頭領にはあらざる歟。さる人柄には見えねども、貌をもつて人の心の、善惡は定め難かり。用心するに優ものあらじ、と深念をしつゝ臥簟にかへりて、はやく曉よ、と東雲を、俟ば春の夜も長く覺て、烏と倶に起出れば、あるじの妻はいつの間にか、起て早飯を炊ぎてをり。弘元を見かへりて、こはいとはやく侍るかし。おん口嗽せ給へとて、小盥皿碗に湯を汲みたると、小皿に鹽と養齒を添て、竹縁にもて來る程に、あるじも出て安否を問けり。とかくする程に女房は、弘元に茶を薦め、早飯を羞めたる、あるじ態の懇切なる、きのふにもなほ優たり。弘元は食了て、窓下に退けば、あるじの漢子は身邊邇く、侍りて江湖上の雜談に、姑く時を移すほどに、弘元は又あるじに對ひて、きのふは大く疲勞にけん、日の暮るゝをも知らずして、半日一

夜熟睡せしは、われながら鈍ましかりき。かういへば何とやらん、疑ふに似たれども、こゝは川添の孤屋にて、鄰家ありとは見えざるに、昨夜眞夜中比にやあらん、背門に馬の嘶て、人の相譚聲したり、といへばあるじは微笑て、現然ることもありつらん、背門には艫械と魚網を藏る、敗小屋の候を、前夜人に貸たれば、人馬の聲はそのものならん、といふに弘元は頷きながら、こゝろ得がたき面色なるを、あるじはさこそ、と又含笑て、只今具に告まうさずとも、遠からずしておのづから、曉得せ給ふことあるべし。疑ひ給ふことかは、といふを弘元聞あへず、いかでかは疑ふべき。一河の流も他生の縁。きのふ危窮を拯れて、居亭儲の管待は、身を終るまで忘るべからず。後に報いを受んとての、所爲にはあらじと思へども、再會の爲なれば、姓名を聞まほし。けふも天よく晴たれば、水も大かた落たらんに、舊の陣所へ立かへりて、管領の安否を問ふべく、わが從卒等の存亡も、心に係りて不便なり。彼等が往方も索ぬべし、といふにあるじは沈吟じて、現縁あれば千里も合壁、縁なければ肝膽胡越、不測の値偶に候へば、有繫に名殘惜けれども、かくておはすべきおん身にもあらず。爾りともなほ早かり。亭午の比までかたらせ給へ。不慮にお宿は仕れど、既に賢察し給ふごとく、賞祿なンどは望しからず。素より匹夫で候へば、名告るべき名はなけれども、世人名づけて在下を、子自素陀六と喚做し

つ。妻は名を綾女といへり。子共も夥候ひしを、彼此へ巣立して、今は宿所に候はず。これらの事も後々に、みづから暁得り給ふよしあらん。漫に人にな告給ひそ、と聶き示せば弘元は、思はず貌を更めて、いはるゝ趣こゝろ得たり。思ふに和主は生れながらの、漁者ではあるべからず。賢にして時に遇ねば、一葉舟に塵を避て、蓑笠に光を包むもの歟。嘉吉應仁の擾亂より以來、室町殿の武威行れず、諸候おの／＼割居して、強きは必弱を征し、上下交利をのみ取れる、その權多くは下に移りて、家臣はその主君を弑し、子はその親を害へども、人見て不忠不孝とせず。三綱滅びて、順逆に暗く、五常絶なんとして、骨肉仇となる。偶志操あるものは、官低くして言行れず。果は群小に憎れて、不測の罪に陷るもの多かり。和主この義を何とか思ふ。教給へ、と他事もなく、問れて素陀六膝推進め、言腐亂しく候へども、嘉吉應仁の大亂は、男色龍陽より禍萌して、君驕り臣奢る、最肩の制度に成れるなり。その故をいかにとなれば、普廣院義教將軍のおん時に、不覺に赤松貞村が、男色に惑せ給ひて、最肩の濫賞ありしかば、そが族滿祐父子、ふかく怨み奉りて、遂に義教公を弑し奉りき。しかるを慈照院義政公も亦懲ずまに、赤松彥五郎則倘が、美少年なるをもて、恩祿の御沙汰ましく／＼き。おん父義教公の讐なりける、滿祐が甥なるをも、うち忘れさせ給ひけん、當時好らぬ風聞あり、山

名宗全これらの事を、只管恨憤りて、彦五郎則尙に、詰腹を切らせたる、禍も胎あり、福も基あり。彼男色に濫賞ありしが、亦應仁の亂根なるを、只今出川殿義視卿を疎せ給ひし、御家督の變改より、勝元宗全兩驕臣の、確執威勢爭ひに、起るとのみいふべからず。貴衞徹漢董の、禍を做のみならんや。むかし北條義時が、童屋從に殺されしも、これ男色の嫉妬に起れり。近世戰國となりしより、大將も士卒も、戰場をもて家とすなれば、男色を愛で妻妾に、易て陣中の徒然を慰る。この故に、美童龍陽のもの、齒を染紅粉を施して、女子に彷彿たるも多かり。こゝをもて、その年二十四五までも、額髪を剃らずして、なほ少年の面色すなる。なべて今の世の風俗なれば、怪むものもあらずかし。されば繻葛倒に覆り、冠履地を易るに至りし、緣故を原るに、最も恐きことながら、等持院尊氏卿、さしも後醍醐天皇の、寵恩を讐もて復し、南北朝兩天子の、御位爭ひにとり成して、逆に取て逆に守り給ひし、餘殃眼前に報い來て、直義直冬、師直等の逆亂に、父子兄弟攻戰ひ、家臣は主君を禁錮たり。是よりして清氏直常、氏淸義弘等謀反して、君臣下剋上の戰ひ絶ず。鎌倉管領、諸國の領主も、亦かくの如くにして、終に嘉吉應仁の大亂こゝに極りぬ。便是汝に出て、汝に返るものなるを、前轍屢覆れども、後車の誡を知ずして、これを恨は愚にこそ。然は思ひ給はずや、と辭せはしく論ずれ

ば、弘元頻りに嘆息して、和主は寔に辯者なり。彼鄙食其酷仲連と、いふとも加ることなかるべし。可惜しき才をもて、釣綱に老朽んより、良主を擇て仕よかし。然らば汲引をすべきに、といへば素陀六頭を掉て、在下仕官に望なし。縦その望ありとても、仇の爲に逼られて、夫婦が命運既に盡たり。後日を思ふに遑なし、といふに弘元驚きて、そは安からぬ事なりけり。和主の仇は何ものぞ、われも一臂の力を勠して、救厄の恩に答ふべし。憑ず告よ。いかにぞや、と問れて素陀六嗟嘆に勝ず。そは辱きことながら、大爺はさらなり、幾百人の、助劍を得たりとも、免れ果べきわが命にあらず。是則命數なれば、又奈何ともすべからず。これらのよしも遠からず、思ひ合し給ふことあらん。在下夫婦は仇の爲に、命果敢なくなりぬとも、冤魂は生を易て、必仇を復すべし。人は終焉の一念にて、生を引くといふ佛理の輪回も、善人には善もて報い、惡事には惡もて報ふ。これも亦自然の理なり。かゝれば在下が後身は、甚麼なるものになるべからん。是も亦料り難かり。もし詳に說ときは、天機を漏すの怕れあり。みづから悟り給へかし、といふに弘元慰めかねて、頭を低て默然たり。且くして素陀六は、又弘元にうち對ひて、大爺は中州の舊家にして、且惻隱の心敦く、よろづに信ましませば、祈らでも神の擁護あるべし。況て信心淺からねば、今こそあれ後に至りて、必興るものあらん。就

て報まうすべき一條あり。這回阿蘇山の城攻は、一个の功もなかるべし。管領この義を竊に羞て、怒を移すことあらば、その禍誰うへに、被るべしとはしらねども、未然の禍を避んには、その功なきを補ふべし。就て當國山本郡、飯田山の洞中に、川角頓太連盈といふ山賊あり。はじめ菊池武俊が、阿蘇山の古城に籠りしとき、鄰郡の野武者等を、招鳩ると聞えしかば、連盈則手下の賊徒、五十餘名を從へて、第一番に馳加り、その隊に屬んと願ふにより、武俊則渠を留めて、一方を守らせしに、忽地に心變りて、城中の軍要金、幾百兩をか竊取て、手下の小賊共侶に、彼城を逐電して、飯田山に立かへり、今も件の山中にあり。大爺はこゝより彼山へ、潛やかに推寄て、川角頓太を搦捕り、これを管領に進らせ給はゞ、その功なきを補ふの功あり。疑はずして從ひ給へ、といと懇切に薦れども、弘元答へず沈吟じて、そは歡ぶべきすぢながら、賊は主從五十餘名、山寨に籠れるを、わが身只一箇にて、捷を取ること難からずや、といへば素陀六莞爾と笑て、その義は御心安かるべし。今よりこゝを立出て、彼山に赴き給はば、中途にしてゆくりなき、夥の援助を得給はん。疑ふときは遂に功なし。いで〳〵といひながら、身を起して戸棚より、地圖一枚をとり出して、これを弘元に示していふやう、この圖によらば彼山なる、賊の巣穴は具にしられん。是覧せ、彼巣穴は、北のかたに脫穴あり。只

一方より攻撃ば、捕迯すこともあるべきを、從兵を二隊に分て、前後より攻入らば、嚢の物を取るより易く、そが一箇をも漏すべからず。よくし給へ、と說示して、件の地圖を贈るになん、弘元はなほ心もとなく、思ひながらも受收め、この事教諭に違はずば、かさね〴〵し恩義なり。然るを報んよしもなき、夫婦の命は旦夕に、逼ると聞くこそ哀しけれ、といふを素陀六推禁めて、そは益もなき愁歎なり、這回大爺の資となりしも、在下が自力にあらず。この年來信じ給ふ、神の冥助で候へば、來世は仇となるとても、必な怪み給ひそ。今はしも是までなり。とく出給へ、と薦めたる、聲聞えけん女房綾女は、庖湢のかたより出て來つ。何ともわかぬ草葉の、陰乾にしたりしを、弘元に贈りていふやう、もし中途にて饑給はば、この草葉を舐せ給へ。しからんには五六日、物をたうべ給はずとも、氣力いよ〳〵健ならん、と示せば弘元受とりて、遺る方なき惠には、只感涙の外はあらず。さらば、とばかり告別、はや緣頰よりおり立て、刀を腰に草鞋の、紐を締て出てゆけば、名殘をしや、とばかりに、目送る夫婦は柴戶の、ほとりに霎時立在たり。却說備中介弘元は、素陀六が宿所を出て、ゆくこといまだ幾ならず。と見れば路傍に、わが隊の軍兵三十餘名、一人も恙なく、馬を牽き兵器を横佩て、左右二側についゐたれば、こは甚麽、と驚きて、且歡び且怪み、綷の趣を詰れば、衆皆齊一答るやう、在下等は

彼夜さり、沼水の爲に推流されて、君の先途にあひ奉らず、浮つ沈みつせし折に、誰とはしらず一箇の漢子、快船を漕もて來て、在下等はさらなり、おん馬までも助け乘して、そが宿所に漕かへし、扨潛やかに示すやう、和殿等且くこゝにあらば、主に再會するの歡びあらん。音なせそ、と諭めて、背門なる小屋に容措きつ、生枯なる草葉を、三十餘枚取もて來て、和殿等しばしばこれを舐らば、五六日は饑ざるべし、馬にも舐らせよ、といひけり。いと怪くは思ひしかども、敎の如くものせしかば、忽地心持淸やかにて、今に至るまで饑を覺ず。晝は疲勞て睡りし甲斐に、昨夜は通宵いもねられず。翌は御主君にあひ奉る、こともやあらん、と憑しくて、心勇のせらるゝまゝに、うち相譚て候ひし。扨又けふはさきの程、あるじの女房が走來て、和殿等こゝを竊に出て、相距ること二町許、辰巳のかたなる巷にをらば、御主君に再會しつべし、とく〳〵せよ、といはるゝに、歡しくて霎時もあらず、敎に任しこゝにをりて、俟奉れば果して違はず、恙なきおん顏を、見奉るこそ嬉しけれ、と異口同音に報知するを、弘元はつくづくと、聞つゝ忽地意中に悟て、原來昨夜背門のかたに、人馬の聲の聞えしは、汝等なるを今知りぬ。われも彼漁者、素陀六に拯れて、彼處に在りし縡の趣、首をいへば如此々々なり。尾は箇樣々々なり、と遺もなく説示すを、衆皆聞つゝ呆るゝまでに、なほ疑ひは釋ざりけり。登

時弘元眉うち顰て、さるにても彼素陀六は、素是いかなる術ありて、わが主從の危難を知りて、はやく船もて救ひけん。これ將因緣ある事歟。且治亂得失の理りを論じたる、才學言下に顯れて、耳新しく覺しに、藥草をもて主從に、贈りて路次の割籠に換たる、その計ひ意外に出て、凡夫のよくすべき事ならず。爾るを渠は讐の爲に命旦夕に逼りぬ、といひしを思へば異類にして、水泊水虎などにやあらん。然らずば狐狸の種類歟。左にも右にもいと怪し。吁奇なるかな、と歎賞して、後方遙に見かへれば、今まで有ける川の方の、白屋は迹もなく、春の川風にうち靡く、岸の柳のいたづらに、人を招くに似たりけり。從卒等はこの光景に、駭嘆じて舌を吐き、いよ〳〵奇異の思ひをなしたる、そが中に弘元は、とさまかうさま惟るに、この條の一奇異は、よしや變化の所爲なりとも、わが敬信空しからで、嚴島なる辨才天の、擁護利益と覺るに、今さら何をか疑ふべき。はやく飯田山に赴きて、川角頓太連盈を、捕捕るこそ緊要なれ。その故は箇樣々々、と素陀六が贈りたる、地圖を披きて指示せば、衆皆有理と齊一悟りて、歡び勇みて從ひけり。如之而備中介弘元は、件の馬にうち跨り、三十餘名の從者を將て、飯田山に赴くに、彼藥草の奇特なりけん、人馬共に饑ることなく、氣力日ごろに十倍して、長途なれども疲勞を覺ず。阿蘇の城攻の期に後れじ、と思へば些も休らはで、その宵も終夜急ぎしかば、

幾日もあらで既にはや、件の麓に著にけり。這山高峯ならねども、樹木森林として晝も暗く、鳥路熊徑の外に路もなければ、弘元は復地圖を披きて、嶮岨方位を分別し、心利たる一箇の奴隷を、樵夫の貌に打扮して、潛やかに山に登し、賊の巣穴を張するに、半日可にしてかへり來つ。扨弘元に報るやう、件の川角連盈は、五十餘名の小賊と共に、山中なる洞の中に在り。その洞はいと廣やかにて、石を疊たる門戶あり。その餘の爲體は如此々々と、仔細に注進してければ、弘元斜ならず歡びて、三十餘名を二隊にわかち、計策を詳示して、前後より推寄するに、弘元は從兵十餘名を將て、洞の後門のかたに赴き、前後より取籠て、一箇も漏さじとぞ計ひける。表話不題、川角頓太連盈は、曩に菊池武俊が、軍要金を竊取て、走りて舊巢に還りしより、日々に手下の賊を聚へて、酒うち飮てありけるに、この日思ひかけもなく、一隊の軍兵推寄せ來て、賊首連盈とく出よ。京都の管領大内殿、武俊誅伐の序次をもて、汝等をも亦誅せん爲に、馬をこの山の麓に寄せ給ひ、數萬の官軍稻麻のごとく、四方八面をとり詰たる、天羅を漏さんや。とく〳〵出て綁の、繩を受よ、と喚りて、鬨を咄と揚たりける。その聲山谷に響きて夥しく、勢ひ大軍に異ならねば、山賊等は僉胸を潰して、戰んとする心なく、北のかたなる脫穴より、逃去らんとて撐擇するを、待設たる弘元の勇卒等、洞口に立塞り、一箇も漏さず砍仆せば、

駭忙て引かへし、南のかたより逃んとせしは、前なる寄手に砍伏られて、脱るゝものは稀なりけり。畢竟弘元、小賊等を討捕て、後話甚麽ぞや。そは次の巻に、解分るを聴ねかし。

第一輯　卷之二

第三回

賊巣を突て弘元連盈を捕ふ
蛇穴を焼て義興禍胎を遺す

紹前齣復說、備中介弘元は、川角頓太連盈が、洞の前後を捕籠て、脫出んとせし山賊等を、或は砍伏せ、或は生拘る、その隊の勇卒三十餘名、奮擊突戰術を摧けば、いづれに間はなかりけり。有之程に連盈は、透を闞ひ殺脫んとて、憑切たる手下の山賊、十名あまりを前後に立して、這脫路より出んとす。弘元これを佶と見て、彼免すな、と下知したる、烈しき聲と共侶に、遮留る寄手の兵、競蒐るを物ともせず、先に立たる五六賊、手に〳〵刃を拔晃めかして、霎時は挑戰ふものから、賊徒は既に狩場の野猪の、箭面にあふ心地して、只管路を殺開んと、思ふ足並取次にて、大痍を負ぬものもなく、斫立られ追籠られて、ふたゝび故の脫穴へ、入らんとするを、寄手の兵、透間もなく踉入て、擊留んとぞ進みたる。件の洞の中よりして、川角頓太連盈が、擊出す鳥銃に、先に進みし一兩人、矢庭に擊れて仆れたり。是時に鳥銃は、倘世間に

あることなく、只筑紫なる嶋人の、近會私に傳へたる、舶來新渡の火器なれば、誰か驚き怕れざるべき。寄手はこれに避易して、左右へ發と退たりける。透を得たり、と連盈は、皐禽のごとく、脫穴より、跳出足に信して、迯去んとする程に、弘元はやくこれを見て、渠は必連盈ならん、と思へば聲をふり立て、川角等、と呼被るを、連盈遙に見かへりて、引提たる鳥銃に、鐵丸を籠んと拏直す、程もあらせず弘元が、丁と擊たる銑鋧の、箆ひ違はず連盈は、右の腕を打傷られて、戞哩と落す鳥銃の、石に當りつ溪川の、深き底にぞ沈みける。既にして弘元は、賊の神器を打落せしかば、驀直に走寄するを、連盈はなほよせじとて、左手に引拔く銑鋧の、矢聲をかけて擊返すを、弘元騷がず身を外して、刀の柄に受留め、走蒐れば、連盈は、刀を拔て砍んとするを、拔しもやらず引組だり。さばれ連盈も覺ある、猛者なりければ、なほ怯まで、上になり下になり、且くは相撲ひしに、腕に深痍を負たりければ、終には膝に組布れしを、反かへさんとて搖撥程に、寄手の兵五六名、折累りて動かせず、押へて索を被にけり。是時その手の小賊等の、擊れたるもの三十餘名、生拘十名に餘りしかば、辛くして脫れしもの、兩三名に過ざりけり。されば寄手の雜兵も、摸負ふたるものなきにあらねど、彼鳥銃にて擊れしものだに、幸ひにして死に至らず。却說弘元は、洞の前門を攻さしたる、隊兵をもこゝに來合て、

功あるを譽め、疲勞れたるを勞ひ、且被傷者等を勦るに、藥の準備あらざれば、はやくも心つくよしありて、きのふ素陀六夫婦が贈りたる、草藥を推揉て、その瘡口に布させしに、僉立地に疼痛去て、幾程もなく愈にけり。左右する程に、この日も既に暮にければ、雜兵等は、樹枝を伐とりつ、通宵火を焚て、生虜を守りて曉るを俟に、春の宵なれば、短くて、東の山峽のしらむ比、弘元猛に下知するやう、彼鳥銃とかいふものは、世に珍しく覺るに、底を撈りて取揚よとて、水煉を得たる雜兵を、溪川に下立して、半日ばかり漁獵せしに、その川は湍の早ければ、推流されてや失にけん、とり得ずして已にけり。現物の流行せる、時至らねば世に出ず、鳥銃はこれよりして、三十一个の春秋を歷て、天文八年の比よりぞ、なべての軍器になりにける。閒話休題、この日又弘元は、隊兵等と共侶に、連盈が住做したる、洞中に入て見るに、なほ三四百兩の金銀あり。この餘、調度衣衾の類、酒器骰子などに至るまで、物みなあらずといふことなし。登時弘元は、隊兵等を見かへりて、今この洞を毀ずは、後に又山賊の、巢穴となることなからずやは。かゝれば山の木を伐て、燒崩さんと思ふなり。さばれ金銀は國の至寶、土石と倶に棄べきにあらず。這財帛をのみ取出して、如此々々にせよ、と指示せば、隊兵等はこころを得て、形のごとく相計ひつ。夥しく樹を伐て、前後の洞門を燒崩すに、石もて疊し門戸

なれどもその石悉燒碎けて、前後の口を埋めしかば、復入るべうもあらざりけり。これらの事に時移りて、日景斜になりしかば、弘元は隊兵等に、生虜を牽しつゝ、麓に下らんとする程に、連盈は右の腕に、深痍を負たるそがうへに、最も緊しく綁られて、さながら毬を聯たるごとく、段々として縊入たる、苦痛にや堪ざりけん、昨夜通宵噓きしが、この日途にて死にけり。唯これのみにあらずして、深痍を負たる生虜の、死するもの五六名に及びしかば、そは皆棄て見かへらず。連盈をのみ頸を捕して、雜兵に齎しつ。生殘りたる賊を牽して、當夜は麓より程遠からぬ、道場に宿を投め、爰にて京軍の安否を問ふに、摠大將大内殿は、既に諸軍勢を牽て、阿蘇の古城へ寄せ給ひしといふ、風聞定かなりければ、弘元頻りに焦燥て、われ思はずも連盈等を、追捕の事に日を過しつ。這回菊池征伐の、期に後れなば遺恨ならん。翌は未明に立出て、夜を日に繼ていそがんとて、その曉に宿を出て、馬の足掻を早めけり。扨も昨夜弘元等が、旅宿は貧院なりければ、三十餘名の主從を、款待すべき糧なかりしに、この時までも彼草薬の、效能はじめに變らねば、弘元も隊兵等も、これを舐り食に換て、その夜優に睡りしかば、氣力は些も衰へず。袷といひ恰といひ、素陀六夫婦が賜ものなれば、僉その恩義を感じつゝ、只管路をぞ急ぎける。案下某生復說、大内左京權大夫義興は、その日大宮司の宿所より、

阿蘇谷の陣にかへり來て、大伴親春、太宰教頼等と譚ずるやう、武俊はやく山の城を落亡て、當國に賊徒なし。者ば華洛へかへり參りて、綷の趣を言上せん。各々も某と、共侶に上洛して、這回の保徵たるべきもの歟。原田以下の人々は、當國の守護なれば、身の暇をとらせんとて、卽原田山鹿、宇佐千手、酒殿立石等、諸隊の主將を、本陣に招き聚へて、件の由を說示し、各位は是よりして、采邑にかへり給へ、勿論時々穿鑿て、武俊が所在を知らば、速に推寄て、討果さん事肝要なり。この義もこゝろ得給へかし、といふに衆皆一議に及ばず、言承しつゝ退きて、その明旦阿蘇谷なる、陣帚して、己が知る、居城々々へ還りけり。然ば大内等の三將も、歸洛に大軍は要なしとて、隊兵過半は、本國に返し遣し、僅に四五千の人馬を將て、且阿蘇沼まで退きける。不題、阿蘇沼辨才天の別當を、鱗角院法橋と喚做たるが、嚮に義興が大軍を將て、沼上に陣せしとき、當社は菊池武光が、建立たる事かくれもなきに、這回武俊が事の起りしより、出家なれども舊緣の、祟を怕れて出も迎へず、姑く山林に引籠て、事の容を覵ひしに、武俊ははやく落亡て、阿蘇山の城を破却せられ、摠大將義興は、さらに又大伴太宰の兩將と共に、阿蘇沼の邊まで退き來るよし、その聞えありしかば、鱗角院思ふやう、曩には緣坐の憚あれば、姑く影を躲せしかども、武俊既に落亡たれば、寄手は刃に衂らずして、當國はやく

治りたり。かくて又大内殿は、當社近く陣し給ふを、知りつゝ迎接の義に及ばずは、更に後日に咎めに遭ん歟、これも亦影護かり。縱はじめは菊池氏に、建立せられし神社なりとも、われ武俊が謀反の議には、一毫も與からず。わが身出家の事なるに、さばかりの舊緣ありとて、首を召るゝことはあらじを、何日までかかくて在るべき。出迎るに優すことなけん、と尋思をしつゝ宿院に立かへり、兩箇の徒弟を從へて、義興の陣に赴んとす。この日大内義興は、身近き士卒百名ばかり將て、親春教頼等と共侶に、沼上を徘徊して、遂に辨天の社頭に來つ。こゝに牀几を立させて、事を談じてありければ、鱗角院は便宜を得て、即大内家の近臣に、由を報名簿を遞與して、云々と陳しかば、軈て披露に及びけり。是により義興は、鱗角院を召近つけて、社頭に在て對面す。主客の勢ひ異なりし、鱗角院はおそるく、歸陣の祝ぎを述けるを、義興聞つゝ冷笑ひて、某觸にもこの所に、軍兵を屯せしに、院主は絕て出も迎へず、武俊はやく落亡たれば、軈て退陣のけふに及びて、出て來つるは遲からずや。當社は菊池武光が時、建立のよしその聞えあり。院主は武俊贔負の人歟、今も舊緣を思ふをもて、その旗色を見ん爲に、遲參したるものなるべし。然にこそあらめ、いかにぞや、と詰問れて鱗角院は、やうやくに頭を擡け、摠大將上に在すを、貧道いかでかさまで正なき、意匠を仕らん。御諚では候へど

も、當社は初菊池氏の、建立せしよりいくばくの、歳月を歷て候に、子孫はその祖の心に似ず、信仰疎なるのみならで、年來の兵亂に、社壇は大く荒果しを、修復すべきよすがもなければ、嚮には劵緣せん爲に、貧道師弟他鄕にあり、こゝをもて見參に、入り候はで候ひしを、御下向のよし聞えしかば、きのふ歸院仕りぬ。これらの趣賢察有て、宥免を願ふのみ。南無阿彌陀佛、と念ずれば、義輿頭をうち掉て、理りめかしていひ釋るゝを、實事なりとは思はねども、そはともあれかくもあれ、當社は菊池が祈願所ならば、逆徒を守護の神なること、問ずとも定かなり。這回武俊追討の、序次をもつて棄毀ん、この義をこゝろ得られよ、といふに鱗角院驚きて、こは物體なき事をのみ、承り候ものかな。よしや菊池が建立でも、祭る所は安藝州、嚴嶋の神と一體なり。菊池氏の滅亡は、當社の見放給ひにけんを、初を追ふて今さらに、神社を毀せ給はんとは、いと憚に候へども、感心しがたきおん下知ならん歟。古例をおもひ候に、筑紫の廣嗣、東の將門、逆惡謀反の骨張なりしも、死後には神に齋れて、その神社は今もあり。況當社は、その類にあらず。むかしは菊池が建立たりとも、今は菊池に拘らず、只寛容のおん沙汰を、願ぎ奉るのみにこそ、と思ひ入てぞ口說たる。現その言の理りなるを、側聞する親春は、太宰少貳に目を注して、齊一義輿を諫るやう、菊池に由ある神社なれば、破却せんと宣

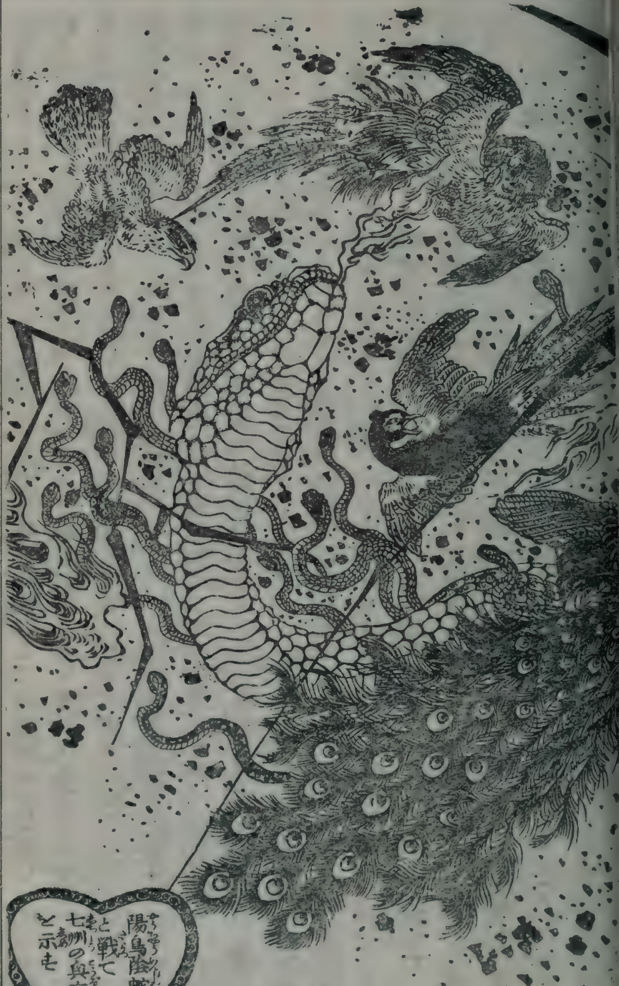
ふを、傾けまうすにあらねども、別當の陳ずるよしも、亦捨がたき所あり、鬼神は敬して遠ざくべし。凡夫に等く征伐を、加ん事は物體なし。賢慮を旋らし給へかし、と迭代に寛解るにぞ、義興僅に頷きて、いはるゝ趣その意を得たり。某なりとて權威に誇りて、神を神ともせざるにあらず。鱗角院の遲參のよしを、いと疑しく思ふをもて、そを試ん爲にのみ、言のこゝに及べるなり。然らば本社はこの儘に、立措く事を許すとも、免しがたきは當社なる、彼毒蛇の事なりかし、嚮に某諸將と共に、この處に陣せし折、その夜沼水猛に暴れて、人馬を夥損傷れしは、件の神の祟ならんと、人喋々しく僉いへり。大蛇にもあれ、鬼にもせよ、逆徒の討手を奉りし、義興が軍兵を、害せしはこれ邪神なり、いかで毒蛇を退治して、士卒の魂を祭らんと、豫てより思ひしかば、阿蘇谷よりこの處へ、來ぬる途にて焰硝硫黃の、火藥を多く買取せ、且このわたりなる樹を伐して、薪も夥準備せり、聞くに件の毒蛇の穴は、この社頭にありといへり、東のかたに年ふりて、虚になりたる榎見ゆ。そこらに件の穴はあるべし。僉立遶りて索ねよ、と辭せはしく下知するを、鱗角院推禁て、いと慌たる聲を戰し、おん慣はさることながら、白蛇の神は靈驗ありて、祈るものに利益多し。素是雌雄の白蛇にて、大約夏四月より、秋九月の比までは、穴を去て沼の底にあり。又冬十月より、春三月の比までは、沼を

出て穴の中にあり。雌雄かはる〴〵に穴より出て、沼水を飲給ふを、見たるものゝ候へども、怕れて近くはよらずといへり。倘其方に向て尿なンど、不淨の所行をなすものあれば、立地に祟を受て、病煩はずといふことなし。穴は禿倉を相距ること、凡五六十間にして、いと大きなる檟あり。只今にも覽せ、幹は十人して抱くとも、なほ餘りある巨樹なるが、その虚の中にこそ、春冬は栖せ給ふなれ。かゝる靈蛇をいかにして、輙く退治せられんや。非如管領のおん威德もて、燒亡し給ふとも、後の祟をいかゞはせん。思ひ止り給へかし、と辭を盡して諫るを、義興聽かで聲を苛立、復しても諄々と、毒蛇を神とし敬ふは、愚民を惑す賣僧の奸計、武弁の人の欺れんや。この議を禁るものあらば、穴の燒草になさんのみ、毒蛇の祟がおそろしとて、わが軍令を用ひずや。奈何々々、と敦圉たる、面色凄じかりければ、鱗角院は怕惑ひて、ふたたび口を開き得ず。大伴太宰の兩將も、權に怕れ威に憚りて、寔に然なり、と答るのみ、又いふよしもなきものから、士卒はすべて鬼胎を抱きて、かくても霎時立難しを、義興頻に焦燥て、者共などて猶豫せる、毒蛇が沼にある折ならば、輙く退治しがたからんを、今なほ春の季なれば、穴に居らんこと疑ひなし。とく〳〵せずや、と牀几を放ちて、檟の邊に赴くにぞ、親春も教頼も、夥の士卒共侶に、後方に跟て倶しゆけば、鱗角院も徒弟を將て、おなじ所に聚合たり。

當下大内義興は、仰ぎて件の樹を見るに、幾歳月を經たりけん、枝は四方に蔓ひて、瓠形の日景を遮り、幹は幾間にか廣り杭て、朽て虚になりたる内には、席拾枚ばかり敷つべし。東西にさし出たる大枝に、注連を引渡したる、下には編小なる雞栖を建たり。義興見つゝ冷笑ひて、者共はやく燒草を、虚の内に積容れて、燒殺さずや、疾々、と猛く烈しき主命に、雜兵等はかねてより、准備の薪焰硝硫黃を、扛擔ひ來つ樹の虚へ、いくらともなく投入れて、火を移しつゝ燒立れば、義興等は十反ばかり、西のかたに退きて、瞬もせず目戍りたり。然程に、猛火熾々として幹を焦し、烈燄漸々に立升りて、大枝細條を燒落す、勢ひいふべうもあらざるに、虚の内、幹外に、積累ねたる薪には、硫黃焰硝をまじへたれば、爆燧たる音凄じく、煙は虚空に布滿て、有頂天にも屆くべく、燹は四下の壤を焦して、その炁坤軸までも通るべからん、と覺て、人僉魂を落し、胷を潰さずといふものなきに、薪盡んとするときは、義興下知して、初より、なほ夥しく燒草を、虚内へ投入れさせて、些も間斷あることなければ、甚なる靈蛇神龍なりとも、免れ果べうは見えざりけり。如是而燔と燒く程に、この事巳牌に刱りて、申の比に及びしかば、さしも稀なる大樹に、火炁の至らぬ隈もなければ、終に幹まで燒摧けて、灰燼となりて、倒るゝ折から、倏忽大地震動して、轟然たる物響、譬ば百千の雷電の、一度に墜

て霹靂く如く、穴の中より兩道の、白氣忽然と煙を衝て、立升ると見る程に、兩箇の白蛇隱々と、煙の中に顯れたる、その長各廿仭あまり、眞白き絹を引るが如く、翩翻として東へ靡き、西へ流れて閃きたり。浩處に沼上より、最美しき山雞と、逞しげなる雄野雉と、翥き高く翔出て、件の白蛇を追んとす。登時白蛇の身中より、薄黑色なる兩箇の蛇、走り出遮留て件の鳥と戰ふ程に、なほ又夥の小蛇共、空中に顯れて、その鬪戰を援けしかば、山雞野雉はうち負て、既に危く見えたる折、又沼上より、いと大きなる雎鳩と一隻の錦雞翺翔て、山雞野雉に力を戮し彼薄皀き兩箇の蛇と、夥の小蛇を追散し、突落々て、倶に白蛇を撃んとす。然ども白蛇は怕るゝ色なく、頭を擡舌を吐きて、四箇の鳥を吞んとしつゝ、且く挑爭ふ程に、又西の方よりして、形狀鷲より巨大かるべき、一隻の孔雀翔り來つ、山雞等を又相資けて、はや四方より捕籠て、嘴もて突くとみる隨に、兩箇の白蛇は四段となりて、地上廻に墜んとす。時に疾風吹暴れて、沙を起す天色の、朧々となる隨に、白蛇はさらなり五隻の鳥も、何處ゆきけんかき消す如く、影だに見えずなりにけり。是なん後に大內家に、大奸雄の逆臣いで來て、黨を樹、主を惑し、その家をしも倒すに至る。この時義勇の少年あり、又毒惡なる少年ありて、怨を結び相剋し、その良善の徒は、百折千磨の艱苦を禀て、必死の厄に及ぶといへども、又


出像第五


陽鳥陰蛇と戦て
七州の興亡
を示も

両雄の俠客ありて、善に興し悪を夷げ、世の英雄と相會して、奸を鋤き逆を滅し、彼七州を討治めたる、是その前兆なりとは、神ならぬ身の誰か知るべき。唯この奇異なる光景を、目前に見し衆人の、驚き怪ざるものなく、後の祟を測りかね、今も安危を定めかねて、大伴太宰の両將すら、只管駭嘆したるのみ。辭を出すものなければ、悍く勇る義興も、惘然として醉るが如く、呆果たる可なり。折衷本齣遞說、備中介弘元は、日者山賊連盈が、首級を齎し、生虜を牽したる、隊兵三十餘名を將て、阿蘇谷の陣に赴きしに、總大將義興は、大伴太宰の両將と共侶に、けふ朝未明に陣帚して、阿蘇沼の邊まで、退きぬるよし聞えしかば、迹を慕ひ路を急ぎて、今又こゝに走著ぬ。さるにより義興が、靈蛇の祟を媢く思ひて、蛇穴を燒くといふ縡の趣を、彼隊の士卒に傳聞て、且驚き且阽み、いかで義興を諫んと、思へば陣門に入らずして、直に阿蘇沼辨才天の、雞栖前まで來つるとき、靈蛇の冤魂煙火の中より、虚空遙に飛揚して、互隻の鳥と戰ひし、その縡の爲體を、圖らず目擊してければ、主從齊一驚き嘆じて、怪まずといふものなし。就中弘元は、思ひあはするよしあれども、心に祕て言に出さず。事果て後社頭に入て、義興に見參す。然るに義興は、嚮に當社を陣所にせしとき、不幸にして弘元が、諫言暗に的中しつ。その宵沼暴の祟あり、軍兵夥喪ひしを、意中に羞て弘元を憐まず。そが主從の

かへらずなりしを、物怪の幸ひなり、と思ひたりしに、誰か料ん弘元は、隊兵三十餘名を將て、坐皆恙なくかへり來にければ、義興これを歡ばず、竊に憎み思ひしを、色には出さで弘元を、坐右近く招きよせて、左見右見つゝうち含笑み、和殿は曩に沼暴の宵、隊兵と共に漂沒したれば、世になき人と思ひしに、日比經てかう恙なく、かへり來ぬるは以こそあらめ、と問れて弘元さン候、かの夜在下も漂流して、垂死としたる折、漁舟に助乗せられ、そが宿所に伴れて、其處に一宵曉せしに、不意隊兵等が、索來つるに環會にき。爾るに當國飯田山に、川角頓太連盈といふ山賊あり、手下の小賊、五十餘名を從へて、彼山の洞を小寨にしたり。抑件の連盈は、近曾菊池武俊が、招きに應じて、阿蘇山の城に籠りしに、忽地に心變りて、武俊が軍要金、四五百兩を竊取り、手下の賊と共侶に、逃て飯田山に歸りきといふ由を、定かに告るもの候ひき。是により在下は、連盈等を搦捕ん爲、隊兵を將て彼山に推寄せつゝ、如此々々に計ひて、遂に連盈を搦捕り、その餘の奴原は、或は砍伏せ、或は生拘り、洞の石門を燒毀て、その巢穴を帚ひ候ひき。爾るに連盈は、初負たる深痍に堪ず、次の日山を下るとき、途にて息絶候を、首領なれば馘りて、即首級を齎したり。且生拘りし小賊等も、五六名死したりしを、これらは棄て首を捕らず。かくてその宵の旅宿にて、管領は諸軍を牽て、阿蘇山へ寄せ給ひしといふ、風聲

仄に聞えしかば、夜を日に繼て路を急ぎ、軈て彼山の麓なる、阿蘇谷に走著しに、菊池ははやく落亡たれば、管領は屯を釋て、大伴太宰の兩將と共に、この處まで退き給ひぬるよし、彼處の里人等に傳聞て、心いよ〳〵慌しく、時を移さずおん迹を、慕ひて唯今參著せり。作下士從脱れがたき、命を保るのみならで、武俊に舊縁ありし山賊を討滅せしは、是將軍家のおん餘光、且管領の御威福に因れるのみ。遲參の趣かくのごとし、と言詳に報しかば、義興歡び斜ならず、うち含笑つゝ額を拊て、這回某辱も、武俊討手の摠大將を、奉りたる甲斐もなく、賊徒ははやく落亡て、一たびも刄をまじえず、剩不慮の水火によりて、夥の士卒を喪ふたれば、歸洛の日將軍家に、まうし釋ん辭はあらず。これらの事の心にかゝりて、いかにせましと思ひ不樂しに、御邊圖らず武俊が、餘類を一擧に討滅せしは、某さへに面を起す、是莫大の勳績なり。こゝは社頭の事にしあれば、本陣に立かへりて、首級實撿に及ぶべし。先度某この地にて、士卒を多く喪ひしは、この社頭に年を歷る、毒蛇の所爲であるべしといふ、人の口には戸も建られず、もしその毒蛇を殺さずは、何をもて死亡たる、士卒の魂を慰むべき、と思ひにければ如此々々に、計りて蛇穴を燒崩して、件の怨を復したり。某も是よりして、本陣にかへるべし。長途の疲勞を憩へ給へ、と亦他事もなく應たる、心の中に思ふやう、初われ弘元が、

いかに博士態たる諫言の、快らでありけるに、その言果して當りしかば、是よりわれを侮るべし。いかにせまし、と思ひしに似ず、弘元不測の功を立て、菊池が餘類の山賊の首級をこゝに齎せしは、わが爲に忠ありといはまし。然るをなほ娼しとして、執念深く祟らば人にあらじ、と思ひかへしつうち解て、應當叮嚀なりければ、親春も教頼も、又大内が老黨近習も、弘元を勞ふて、齊一嚮て已ざりけり。却說大内義興は、雜兵等に火を滅させ、灰を搔帚して、親春教頼弘元等と共侶に、蛇穴のほとりに赴きて、つら〳〵と是を見るに、白蛇は火攻の苦みにや堪ざりけん、穴より半身を出しつゝ、遺る隈なく燒亡たる、その白骨兩骸あり。頭骨の大きなること、籾挽臼にも勝りつべし。この餘小蛇の骨多かり。さればこの爲體に、觀るもの毛骨竦立までに、駭嘆せずといふことなし。そが中に義興は、つく〴〵と見てうち微笑み、人々何とか思ひ給ふぞ。靈蛇といひしは虛名なり。寔に靈ある物ならば、雲を起し雨を降して、火の害を避くべきに、燒れて骨のみ留めしは、その靈なきを知るべきのみ。嚮に立升る煙の中に、怪しきものゝ顯れしは、皆觀る者の惑ひにこそ、譬ば杞人と目を患て、日華を見たるに同じかるべし。疑心暗鬼を生ずといふ、世の常言は以あるかな。必こゝろにかけ給ふな。人に聞して笑れなば、武士たるものゝ恥ならずや。わが家隷等もしかこゝろ得て、雜兵等に口を喈せな、といふ誇貌に窘れ

ば、衆皆齊一額をつきて、承りぬ、と應けり。既に事果興竭たる、義興は社頭を出て、夥の士卒を前後に立し、手綱搔繰る三歳駒の、足搔しづかに陣所にかへれば、親春教頼は途より別れて、その隊の陣へ退きけり。當下麟角院法橋は、義興の後に跟て、送りて陣門のほとりに赴き、禮を舒て宿院に退る程に、弘元も亦義興が陣所に到て、連盈が首と生虜を實檢に備へ、且分捕の金銀を、そがまゝ披露に及びしかば、義興則、生虜の小賊等は、京師まで牽べからずとて、士卒に下知して頭顱を刎させ、皆陣前に梟させつ。唯連盈が首級をのみ、京師へ上せんとてその准備あり。かく捉果しより、この地の所要なくなりたる、義興はその夜さり、弘元を招きていふやう、某は翌の朝、親春教頼等を相伴て、急ぎて歸洛に赴くべし。御邊は殊さら大功あり、共侶にと思へども、いかにせん、武俊既に落亡て、いまだその往方をしらず。渠當國に躲居らば、後の患をなさんものなり。御邊は姑くこの地に遺りて、這奴が所在を穿鑿し給へ。當國には原田の徒、しかるべき武士なきにあらねど、かゝる事に熟たるものは、御邊の外にありとしも覺ず。某這回凱陣の日に、御邊の功は遺もなく、將軍家に聞えあげて、恩賞は後日の御沙汰に及ん。且當座の牽出物には、賊の巢穴を燒毀ちしとき、分捕の金銀を、すべて御邊の所得にし給へ。こゝろ得てよ、と懇切に、私恩を被けて說示せども、弘元はその金を受ず、謹で答る

やう、仰承り候ひぬ。しかはあれども年來の、兵亂に民疲勞て、上の財用乏しき折に、よしや九牛の一毛なりとも、この金銀を受奉るは、臣たるものゝ志にあらず。この義は許させ給へとて、幾遍も只固く辭ひて、受べうもあらざれば、義興いよ〳〵賞嘆して、御邊は實に廉直人なり。凡世に武士たるもの、誰もかくこそあるべけれ、この義も披露に及ぶべし。然らば件の金銀は、水火の爲に死したる士卒の、妻子等に分與んとて、一議やうやく果しかば、弘元陣後に退きて、ひとり熟思ふやう、曩にわが主從の、必死を救ひて、山賊を、討と誨し素陀六夫婦は、この阿蘇沼邊に年ふりし、雌雄の白蛇の化したるならん。その所以を甚麼と推すに、彼漁者の姓名は、卽子自素陀六なり。そが妻の名を綾女といひにき。素陀の素は是白なり。陀は是蛇字の片傍也。子より六目に當れるは、これ巳にして、巳も亦蛇なり。且蛇の異名をあやめといへり。然ば永承年間、殿上の根合に、良暹法師が、

　筑摩江の底のふかさをよそながら引るあやめのねにぞしらるゝ

とよみけるを、あやめとは童女などが、常に蛇蝎をこそいふなれと、右府の難じ給ひしとかや。袷といひ恰といひ、素陀六夫婦は白蛇なりしを、今やうやくに思ひ得たり。彼等が命數竭たれば、仇の爲に逼られて、その死期近きにありといひしは、大內殿に燒殺さるゝを、豫てより知

ればならん。かゝる靈蛇も前世の、業報によることありて、左にも右にも脱れがたけん。穴をも去らず猛火を受て、灰燼となりて亡し事、かへすぐ〳〵も不便なり。かの折丌る煙の中に、兩箇の白蛇の見えたるは、そが冤魂にてあらんかし。然るにても彼白蛇に、戰捷たる五隻の鳥は、これ何等の因縁ぞ。天機は側りがたけれども、靈蛇を殺せし管領の、久後はいと心もとなし、縱その身に報はずとも、子孫の爲によき祥あらじ。思ひ難しは是のみならで、素陀六夫婦が贈りたる、彼草葉も亦奇なり。こは外朝劉宋の、武帝が賤しかりしとき、蛇穴に入て獲たりといふ、劉奇奴草の類なる歟。件の草はわが主從の、饑に充たる物なるに、昨日途にて皆失ひて、今はもてるもの一人もなし。只彼飯田山の地圖のみ、幸ひにしてこゝにあり、とひとりごち取出して、打披きつゝ再見るに、初の地圖は耗失せて、四言四句の漢語になりたり。こは什麼いかに、と怪みながら、睛を定めて能視れば、

今生相識　　來世做仇　　木兎參處　　是興亡秋

とあり。とさまかうさま思へども、その句は讀易うして、その意は究めて悟り難かり。要あるべし、と思ひしかば、ふかく篋底に祕て、遂に又人に知らさず。是よりの後年を歷て、その子晉就の成長りしとき、白蛇の事を讘示して、件の隱語を見せしとぞ。然程に、大内義興は、

その次の日に、大伴親春と、太宰教頼を相伴て、三將の軍兵四千餘騎、旣に歸洛に赴きしを、弘元はなほ阿蘇郡に留りて、武俊が往方を索るに、些の便宜を得ざりけり。凡この逗留の間、麟角院と相譚ひて、白蛇の骨をその處に瘞め、灰をよせ塚を築きて、標識に弱樹の櫁を植けり。よりて土人これを名づけて、蛇塚と喚做したり。弘元はかくても飽ず、是年の秋、安藝の釆邑にかへりし比、素陀六夫婦を追薦の爲に、法師を聚合て、經を讀し、石塔婆さへ建て、叮嚀に弔ひけり。これらの意を人はしらねど、弘元は後の蓄害を思ふゆゑに、飯田山なる賊巢を燒毀て、その金を受ず。又義興は、士卒の敗亡を羞て怒を移し、阿蘇沼なる蛇穴を燒て、漫に後の患を思はず。行ふ所は相似たれども、用心各異なり、と識者は評論したりける。

第四回

御廟野に興房阿夏に遭ふ
鴨河原に兩情春夢を結ぶ

却說大內義興は、大伴親春、太宰教頼等を伴ふて、その夏四月の下澣に、異なく凱陣してければ、室町殿へ出仕して、菊池武俊が沒落の事の趣、竝に安藝州の人氏、備中介弘元が、自己の才覺をもつて武俊が餘類なりける、川角連盈といふもの、肥後の飯田山なる寨に在たるを、推

寄て討滅せし、その絆の爲體を聞えあげて、且親春教頼を、將軍家義植卿の見參にぞ入りにける。この日義興親春教頼等、各土產の貢獻あり。登時將軍は、みづから緣由を聞食て、義興等を勞ひ給ひ、武俊はやく落亡て、九州無異に治りしは、皆是管領の武略によれり。和泉紀伊の二箇國は、鹿苑院殿將軍義滿の御時、當管領の曾祖なりける、大內義弘に、御加恩の地なりしを、義弘不軌の行ひありて、一旦滅亡の折、被二个國を召放されにき。よりて這回の勸賞として、和泉州堺の城に、如干の城地を添て賜ふべきよしを仰あり。九州無異になりぬといへども、武俊が往方定かならねば、親春教頼は、はやく釆地に立かへりて、非常の備怠るべからず。又連盈が首級は、例に任して、河原に梟て惡を懲し、遠近人に示すべし。就て賊徒を討亡せし、備中介弘元は、なほ肥後にありといへば、彼地へ感狀を賜らん。この義もこゝろ得候へ、と遺なく掟給ひしかば、義興これを承りて、形のごとくに行ひつ。親春と教頼は、京師の逗留いく日もあらず、各その隊の兵を將て、皆本國にぞ還りける。是よりして義興が、權威をさく〳〵日ごろに倍して、在京の武士はさらなり、公卿殿上人までも、或は凱陣の壽きを述、或は加祿を賀するもの、幾百人といふことを知らず。門前日々に市のごとく、絡繹として絕ざりけり。不題、大內義興の近習の士に、陶瀨十郎興房といふものありけり。そが素生を原るに、大內家第一の

老黨と聞えたる、陶遠江守政房が子なり。その身遊佇なりければ、周防の山口にありけるを、この春主の義興が、菊地武俊征伐の爲、山口の城にかへりしとき、召出して、その軍陣に從しめ、そが儘京師へ將て上りて、身邊近く使ひけり。扨も這瀬十郎は、今茲廿一になりぬ。女子にして見まく欲しき、相貌いと美しく、心ざま亦風流を好みて、詩を賦し歌をよむに疎鹵ならず。且雜樂艷曲の技をすら、愛歡ずといふことなければ、いとはやくより多藝の聞えあり。さばれ周防に在りし程こそ、人も譽めわれも亦、こゝろ得貌なりけるに、今茲皇城の地を踏初て、京師の手ぶりを見てしより、心裏恥しき事多かり。日野西中納言兼顯卿及、萬里小路中納言賢房卿は、大內家と疎からね、由緒をはしましければ、瀬十郎は勤仕の暇ある每に、必この二位の君達を訪奉りて、歌を學び、又雅樂音律の技をしも、問聞奉るに、兼顯卿も、賢房卿も、この時は尙生上達部にて、年齡も共に弱かり。應仁の兵亂以來、公家武家倶に衰微して、朝の烟細からぬ、貴人は稀なるに、日野西萬里小路のみ、大內家の資けによりて、乏しからずをはすれば、その方ざまの人としいへば、召入れて對面し給はぬはなし。況瀬十郎興房は、彼家の老權なる、陶政房が愛子なれば、大かたならず款待して、辭敵にしたまふにぞ、瀬十郎はいと辱しと思ひつゝ、晤譚に小夜を深すこと屢なりき。有如之程に、陶瀬十郎興房は、一日

十禪寺村の邊に、私の所要ありて、赴きしかへるさ、夏の日の癖なれば、御廟野の邊にて、猛に夕立の雨ふりそゝぐに、雨具をもたせざりければ、只一箇なりし從者に、傘を借もて來よとて、栗田口なる、相識許走らしつ。われはこゝにて俟んずとて、路の傍に荒傾きたる、圓通堂の檐を仰上て、遽しく走り入るに、われより先にこの處に、笠やどりするものありけり、と見れば、年紀は十八九にやとおぼしき、一箇の女子の、人待貌に立りける、顏は暮春の櫻花の如く、雨に窶れ、風に惱る風情あり。姿は仲秋の新月に似て、雲を恨み、霽るゝを遲しと思ふめり。西施が心を患るとき、太眞が渴に堪ざりしも、かくや有けん、と見ゆる可なるに、羅衣ながら花やかにて、頭上の飾まで、玳瑁白銀のいろ〳〵なる、流行を旨とせざるはなし。瀨十郎はわれにもあらぬ、胷のみ頻りにうち騷れて、問よるべくもあらざりしを、女子も亦瀨十郎が、儔多からぬ男子風流に、はやくもこゝろありげなる、秋波に見てうち微笑み、やゝ殿、是方へ入らせ給へ。其處は濕吹の被るべし。けふは朝よりよく晴たるも、虛憑めにて侍りき、と狎々しげにものいひし、聲は宛、鶯の、初音に似たり。春ならで、春の心の動き初し、瀨十郎も又見かへりて、噫おぼつかな。おん身も亦、こゝに霽間をまつにやあらん。從者を倶し給はずや、と問つゝ身邊に立よれば、女子も有繋に恥しの、森の木葉歟もみぢする、顏を背向て、されば

とよ、妾は大津に所要ありて、きのふ彼處に赴きし、かへるさに侍るかし。伴なる男の侍りしかど、渠は衣裳何くれの、物とり集めて后より行ん、といはれしにうち任して、獨いそぎし甲斐もなき、臂笠雨に路去りあへず、往還稀なる十字堂に、立も鎖さん日の惜くて、心細さは限りもなかりき。かゝる時とて憑しく、言問るゝも他生の緣、一樹の蔭の笠宿り、おん身の御坐す程は、心つよく侍るめり、何處の殿にてましますぞ。おん從者は侍らずや、と問かへされて瀨十郎は、よに笑しげにうち頷き、吾儕は二條の邊なる、某甲殿の家臣なり、從者なきにあらねども、傘を借せん爲に、粟田口まで走らしたるが、いまだ借得て歸來ず。おん身も京の人にやあらん。ちかき比東なる、太田持資入道が、

　いそがずは濡ざらましを旅人の迹より晴るる野路のむら雨

とよめたる如く、且く俟ば霽ぬべき、雨にはあれど程もなく、暮かゝる日をいかゞはせん、應仁以來京師すら、荒たる儘の處多かり。況こゝらは人家も、稀なる夜行をいかにして、女子一人でかへられんや。寔に便なき事にこそ、といふに女子は嗟嘆して、こゝらは熟たる路ながら、宣ふ如く雨は歇とも、暮れては獨歸りがたかり。然ればとて這十字堂に、立曉すべくも侍らずかし。かういはば狎々しくて、いと無禮なりとおぼさん歟、おん從者のかへり來ば、おん傘の

端に添して、宿所へ送り給はらば、鄙語にいふ六道の、衢で佛に遭るに似たる、わらはが爲に慈悲善根、こよなき功徳ならんかし。妾は名を夏と喚れて、宿所は三條大橋のあなたに侍り。借屋住ひの無造作なる、留守するものの侍らねど、母屋は名たゝる酒樓にて、いと熱鬧しき商賣なるに、背門の地尻がわが宿なれば、さる用心にも及ばず侍り。いと不樂しくは侍れども、東道儲は母屋より、執運してまゐらせん。けしうあらずは立よりて、憩せ給へ、と他事もなく、いふは津に舟ながら、虚とは乘らぬ瀬十郎は、應かねつゝ沈吟じて、そは歡しきすぢながら、彼瓜田に履、李下に冠、人の疑難の影護きに、弱き婦人と一傘、さす方ありとも送られんや、といふをば聽かずうち笑みて、そは宣はすることなれども、人視多かる白晝ならば、影護き事もあらんを、小歇は今になつの雨、夕こえ行かば途にて暮ん。枉て救はせ給ひね、とかき口説つつ果しなき、折から瀬十郎が從者は、粟田口にて借得たる、簑笠を身に著て、雨衣木履傘を、引提て頻りに走り來つ。這十字堂を忘れてや、行過んとする程に、瀬十郎やゝと呼返して、やよや折介、倏不樂たり。見よ、この婦人はわれより先に、こゝに霽間をまつ雨の、生憎に歇まで、暮るゝに近かり。三條わたりの宿所まで、相傘を借んといはる。斯と知らば傘を、彼處で二柄借せんに、今にしてはその甲斐なし、といふに折介はと見かう見て、そは痛ましき事にな

ん。些は細雨になりたれば、おん傘の片端を、貸給ふとも共侶に、濡させ給ふ事はあらじを、ともかくもして誘給へ、といひつゝ袱に包たる、雨衣をとり出すを、瀬十郎推禁めて、現汝がいふごとく、既に細雨になりたるに、雨衣被てはいよ〳〵暑かり。そはその儘に包みて持ね。よしや濡るとも麻衣の、袂涼しくならんのみ。喃阿夏どのとやらん。今さら捨ては去がたき、便路なれば送るべし。さばれ足駄をいかゞはせん、われは跣足でゆかんのみ。折介それをまゐらせよ、といひつゝ袴の稜とり揚るを、阿夏は急に推禁めて、そは物體なき事に侍り。傘の庇を假初ながら、送り給はるそがうへに、おん身の足駄をいかにして、妾が穿ていなれんや。思ひもかけぬ事にこそ、と推辭つ聽て遽しく、裳裹げて副帶を、締易んとする程に、折介は獨笑して、女中且く等給へ。あの片隅の小暗き處に、女子の足駄一雙あり。這御佛に詣し者の、置遺れし歟、脱捨し歟。そはともあれかくもあれ、臘塗足駄の巳時なるに、しかも革緒で阽氣なし。いざ〳〵と眞實たちて、取出しつゝ推直すを、阿夏は見つゝ含咲て、こは思ひかけざりき。物怪の幸で侍るかし。この年來清水寺の、觀世音を信じ侍れば、地方かはれどこゝも亦、おなじ菩薩の利益にこそ。有がたきまで尊やと、霎時本尊を伏拜めば、瀬十郎もこれを見て、彼太山に貨あり。貨に心なかりしもの、これを得る、と老氏はいへり。こは細小なる物なれども、時

に取ては千里の駿足、圖らざりける大士の冥助歟、寔に奇なり妙なりけり。とく出給へ、といひかけて、先に立つゝ傘を、披く轆轤の出納牙、かたき郎にあひ形の、草鞋を其處に脫棄て、足駄穿つゝ立出る、阿夏が迹へ折介は、立替りつゝ取揚る、裏附草履うち合し、主の半履共侶に、二雙抓みの作態を、見かへる阿夏は手を抗て、憚さまや、とばかりに、夕暮近き野路の雨、おもふ郎と相合傘の、人視罕なる横頻吹、濡ぬ先こそ今はしも、厭ひはせじな百稔の、露の命よ君が爲に、照る日の閒も數ならぬ、雨は今宵の媒妁と、思へば娛し傘の柄の、手に手をやならとり部山、吉田黑谷横に見て、辿る凸凹高足駄、路の泥土も苦にならで、後の歎きはしら川橋に、尙秋風は吹ざりし、阿夏瀨十郎が惡因緣、むすび初たる賀茂川の、水漏さじと思ふ事、胸にたゝえてまだいはぬ、維摩の悟道墮落して、渡る三條大橋の、袂涼しく暮果て、稍その宿所に著にけり。登時阿夏は遽しく、懷帋の間より、鎰とり出し門の戶閤て、走り入りつゝ火を鑽て、はや行燈に移す程に、瀨十郎は門邊より、告別して去んとするを、阿夏はやよ、と呼被て、袂に携掖留め、思ひかけなきおん庇蔭にて、足も汚さず濡もせで、かへり著ぬる歡びを、得述ずしてこの儘に、果敢なく還しまつらんや。家路を急ぎ給ふとも、暮果てまだ程は侍らず。枉て且く憩せ給へ、とわりなく留めて放さねば、瀨十郎は又さらに、心よわくて揮も拂はず。

そは時宜ならぬ事にこそ、と言にはいへど阿容々々と、引れて上座に坐を占れば、折介も笠を脱て、框に尻をかけてをり。有右而阿夏は背門に立て、掌をうち鳴らせば、母屋より應と答て、一箇の小厮の走り來ぬるを、そが儘耳を掖よせて、如此々々と囁くにぞ、小厮はこゝろ得果て退りつ。時を移さず酒殽を、廣蓋とか唱たる、塗折敷に處狹まで、種々載てもて來るを、障子のほとりに措したる、阿夏は折介を見かへりて、おん身にも薄酒一椀、まゐらせんと思へども、見給ふごとく人手なければ、母屋へゆきて思ひの隨に、たうべたまはば幸ひならん、といふを瀬十郎推禁めて、いかでかはその義に及ん。うち捨て措給へ、といふ間に母屋の小厮ば、庇間よりうち遶りて、折介がほとりに來つ、いざ案内を仕らん。是方へ來ませ、と誘引ふを、折介はなほ立難て、そは忝き事ながら、殆迷惑仕りぬ。やようち置し給ひね、と陽辭して手を捺むを、小厮はなほも推立して、そが儘母屋へ伴ひけり。當下阿夏は莞やかに、瀬十郎にうち對ひて、こゝは特さら端近かり。矮樓へ登らせ給ひね、といひつゝ軈て燭臺に、火を移し携て、先に立つゝ案内をすれば、瀬十郎慭に、去にいなれぬいな船の、否にはあらで、思ふ事胸に支る刀を把て、登る階子は戀の山、浮名取川最上川、濡にぞ濡て阿武隈川に、迷ひ初けん道ならぬ、その陸奥の名蹟の、京師にもある心地して、やをら頭を廻しつ、四下を見るに這矮樓

は、席薦六疊を布設たる、東のかたに置床あり。次の間はそが半にて、衣物を斂る料にか、棚架なるべし、二枚の、蒸襖を建たるが、柱には櫻の花笠、牡丹の扇笠兩三箇と、近屬より世間に弄ぶ、三絃胡弓なンどを掛たり。かゝれば這女あるじは、絃管をもて世を渡る、歌伎ならずは儛姫ならん、とやうやくに猜するのみ。まだ詳なる事を知らず。却說阿夏は酒殽を、しば〱矮樓に運び登しつ。思へば奇しきおん緣にて、今より親しくならせ給はん。見參のはじめに侍れば、いと恥しき款待に、御足を駐めまゐらせし、妾がこころは告ずとも、大抵猜し給ひけめ。春花より芳しからん、君が御名こそ聞まほしけれ。いざいざ、といひかけて、盃を薦れば、瀨十郎は推辭に由なく、寔に不測の値偶に依り、某のみか從者まで、酒食の饗應にあへる事、過世あやしき歡びなり。今は何をか愿むべき。吾儕は大內殿の近臣にて、陶瀨十郎興房と喚るるものなり。四月の比より在番すなれば、京師の手ぶりに疎かるを、傍痛く思はれん。女あるじであなるとも、獨居ではなからんに、家內に人しもをらぬ、夜飲に耽るは大膽不敵、罪得がましき事にこそ、といふを阿夏はうち笑ひて、噫ものかたき殿もぞある。妹伕の緣しは出雲にて、神の結せ給ふといへば、迭に胸をうち明て、正木のかつら末ながく、通せ給はん事をのみ、祈るより外はなきものを、うち解給へ、とばかりに、後は口隱る裡雲の、土器ならぬ朱杯

に、蒔繪の鶴も雌雄となる、千歳といへど容あるじの、年齢は若の浦や、蘆の葉濡れて滿潮の、さしつさゝれつ餘念なき、酒は禮に始まりて、亂に終る、と莊周の、いひけんも現宜なるかな。男女席を同うせる、飲酒は則色の媒、心猿狂ひ意馬走る、瀬十郎はわれからに、よるとはなしに苧環の、三輪のすさびは酒の過、酔にも堪ず輾寐の、果敢なき夢を結びけり。この時從者折介は、飽までに飲食して、阿夏が宿所にかへり來つ。泥のごとくに酔たれば、框に尻を掛たる隨に、反仰倒れ熟睡して、蚊に刺るゝも知ざりけり。夏の夜なれば短くて、枕に響く明六の、鐘に瀬十郎は驚覺て、後悔すること大かたならず。きのふは主君に願ひまうさで、私に出たるに、昨夕かへらさりしずかば、幸にして咎なくとも、先輩の甲乙が、思はん程も影護し。いかにすべきと搔拊る、額を頻りに病すれば、阿夏もさこそと慰わねて、あふは別のはじめぞ、と唄ふ曲子は聞ながら、逢ねばすまぬ色の慾。御宿の首尾の今さらに、あし分船の譯立て、繕ふ術は侍らずや、と問ば瀬十郎沈吟じて、武家は門戸の限りあり。凡私要に出るもの、夜を犯して還るときは、咎にあはずといふことなし。さばれ纔に便點を得たり。箇様々々の所以ありて、吾儕ばかりは日野西殿と、萬里小路殿を訪ひ奉るに、本日夜深てかへるとも、次の日に至るとも、主君の許させ給ふをもて、朋輩も亦この義を咎めず。かゝれば昨夕も日野西殿へ、參

りきといはんのみ。斯誘詐るに優ことあらじ、といふに阿夏は胸押撫て、そは歡しき事になん。首尾整へて遠からず、便り聞して給ひね、といふ間に瀨十郎は、蚊帳の吊緒に掛たる袴を、はや取卸して足蹈入るゝ、背後に阿夏が腰板の、紐ふり分て推當るを、手はやく結ぶ二世の緣、憑むや妹と瀨十郎は、懷にしたりける。鼻紙囊を搔撈りて、方位二枚とり出し、こは聊なる物ながら、酒食の料に、といひかけて、紙に捻りて取らするを、阿夏は受ず推返して、優なる身に侍らねども、財帛に愛て客を惹く、宿遊女には侍らぬものを、さる貺ものはこゝろにず。願ふはそれをおん從者に、取して口を鉗め給はゞ、後々までも障はあらじ、といふに瀨十郎は強かねて、且羞て頷くのみ。然らばその意に任せんとて、刀引提て遽しく、下屋に到る箱階子の、手摺も高き足音に、蹈覺さるゝ折介は、稍身を起し見かへりて、慌忙き徐と直す、足駄は雨後の旦開、天は晴てものち濕る笠屋阿夏が別路の、名殘はをしや鴨河原、情郎はゆく水と、どゞめかねつゝ目送りけり。扨も這笠屋夏は、親の名を續たるなりけり。これが母なりし笠屋夏は、女歌舞伎の大柏にて、大頭といふはなまりんなりとぞ　年來四條河原にあり、常に歌舞伎を興行して、生活にしたりしに、應仁の內亂に、洛中も洛外も、兵燹の爲に餘波なく、郊原荒土となりしかば、世渡りの便著なくなりて、初には似るべうもあらず。とかくする程に母の夏は、長き病著に臥たりし

より、朝開の烟も病人と、共侶にいよゝ細りつ、今の阿夏が、年二八ばかりなりし秋の比、遂にむなしくなりにけり。是よりしてそが女兒は、母の名を承續て、笠屋夏と喚れたり。歌舞艶曲も容止も、その親に優りしかども、常歌舞伎の勾欄絕てより、再興すべくもあらねば、或は俳優、或は絲竹の技をもて、富る家の酒宴に招れ、吹鼓舞奏つゝ、壽を述興を添るを、活業にするなりけり。爾るに、母の夏が世にありし時、伊勢なる安濃津の商賈に、末松屋木偶介と喚るゝもの、年毎に京上りして、貿易を宗とする程に、今の阿夏に眷想して、これが爲に錢鈔を費すこと、いくそばくそなるを知らず。さばれ阿夏は木偶介が、男態田舍備て、面の色如赭く、眼圓に、脣厚く、鼻は左右の頰まで開きて、田樂能の獅子頭に、相似たるを忌嫌ひて、風なき門の垂柳、靡くべうもあらざりしを、木偶介はなほ懲ずまに、櫻が下の蘿蔓、綾に黃緣思ひをよせて、舊里へ立もかへらず。有如之程に阿夏が母親は、病著に臥たるより、衣食住の三が一ッも、資るものゝあることなければ、況藥劑の價などは、かき集めても藻鹽草、足らぬ世帯に困じたりしに、木偶介よろづを賄ひて、藥種も價直貴きを厭はず、晝夜となく存問て、資となること大かたならねば、阿夏は恩義の枷に被られ、親の爲に、疎しき、郞と枕を並べにけり。この時にこそ木偶介は、年來の本意を遂て、いよゝ活業は手につかず。阿夏が母の身まか

りては、送葬の事、七々の法筵雜費も、總て木偶介が嚢中より抓出せば、物とゝのはずといふことなし。限なき情慾の爲に、限ある貨を喪ふ。これらの所以に本錢はさらなり、舊里にも京師にも、遺るはその身と借財のみ。伊勢の津なる家も庫も、古借の債に沽取られ、妻子の離別せし時に、幼稚き女兒を括著られ、從僕東西に去て、親戚義絕に及びしを、木偶介は悔もせず、故鄕より推上されし、五才なりける女兒とともに、阿夏が宿所に寓りてをり。阿夏は素より好しからぬ、郎なれども受たる恩あり、出ていねともいひかねて、遂それなりに夫婦になりぬ。木偶介は今さらに、賣買せんにも本錢なければ、阿夏が酒讌の席へ召れて、彼此へ赴くをり、そが俳優の衣裳を携、三絃箱を肩にして、送迎をしつるのみ。これ將親子三人の、衣食に貢足るべくもあらねば、阿夏は暇ある每に、木偶介が携子なる、女兒に儛蹈を誨などして、その名を小夏と喚做たり。然程に木偶介は、米薪の竭んとするとき、阿夏を招く花だになければ、已ことを得ず小夏を將て、四條河原に立消し、小夏に舞をまはさして、その身は沒管笛を吹き、細腰鼓を鳴らし、纔に錢を得てかへりて、親子の口を餬ふ日もありけり。有之程に隔昨日は、大津なる良賈の家に、算賀の酒宴ありとて、音曲の爲に阿夏を招きしかば、阿夏は女兒を伴ひて、木偶介に衣裳三線箱なゝどを背負しつ、その家に赴きしに、その終夜の酒もりに疲勞れて、

きのふの亭午まで彼處にをり。辭し去らんとせし比に、小夏は腹の痛むとて、厠がよひに時の移れば、阿夏は木偶介を遺し置て、小夏が瘥り果るをまちて、將てかへり給へとて、ひとり家路へ急ぎしに、御廟野の邊にて、夕立雨に笠やどりして、圖らず陶瀨十郎に邂逅しつ。木偶介も小夏も、その宵はかへらじと思ひしかば、わりなく瀨十郎を宿所に留めて、事の其處に及べるなりけり。色は思念の外とはいへど、阿夏は素より艷曲歌舞もて、生活となす手弱女なれば、操を扇の松に傚ふ、貞實節義に疎しとて、咎るに足るものならねど、陶瀨十郎は陪臣にこそあれ、采邑幾萬貫か領したる、陶遠江守政房が子なるに、路の柳牆の花に、甚なれば心迷ひて、人の譏を思はざりけん、過世あやしき惡緣なり。閒話休題、却說瀨十郎興房は、その日管領邸にかへりても、阿夏が事のみ心にかゝりて、遣れんとするに忘られず。渠は絃管をもて世を渡る、歌妓ならんとは猜せしかども、家の內に人なかりしも、こゝろ得がたきことになん。ふたたび行て問ばや、と思ふものから左に右に、勤仕に暇なかりしかば、五六日を過す程に、有一日相番の甲乙と、江湖上の話說の序に、瀨十郎はそれとはなしに、三條大橋の西町に、如此々々なる美女ありと聞にき。渠はいかなるものやらん、と外がましく諮るに、その人々含笑て、そは笠屋夏が事なるべし。素是渠が母親は、女歌舞伎の大柏なりき。今の夏もその技に、堪能の

聞えあり。箇樣々々の義によりて、末松木偶介といふ、醜郎と夫婦になりたり。又小夏とか喚れて、年五六可なる小女兒あり。そは木偶介が携子なり。夏が事は世に隱れもなきを、今まで知らぬは疎鹵にこそ。渠はやごとなき方ざまにも、召ることありと聞ぬ。況市人の富るものは、渠を飲酒の敵手にして、艷曲を聽歌儛を觀るを、最上の樂とするなめり。但我殿ざまのみ、管領の、重職にをはしますなれば、俺們だにも世に憚りて、渠等を得こそ招かぬなれ、と正首に說示しけり。畢竟瀨十郎、阿夏が素生を詳に知りて、又甚麼なる話說かある。そは次の卷に說分るを聽ねかし。

第一輯　卷之三

第五回

綠巽亭に蛇孽胎に憑る
千本畛に兇徒命を喪ふ

再說陶瀨十郎與房は、朋輩の話說にて、阿夏が素生云々と、聞得て肚裡に思ふやう、わが推量に違はずして、渠は名たたる歌妓なりき。遮莫財をもて、側室嬖妾に娶るとも、かたくもあらぬ㕝ながら、とばかりならで良人あり、子さへあるものならんには、虛々とゆく處にあらず。然りとも知らずはかよひ路の、數累りて禍を、惹出すことならずやは。他の馬には乘るべからず、人の妻には親むべからず。只情を割き慾を制めて、遠離るに優ことあらじ、と深念をしつゝ爾后は、天飛ぶ雁の翅に寄する、毫の便りもせざりけり。表話休題末松木偶介は、かの日大津に居遺りて、ひとり小夏を看とりしに、小夏が病著早に愈ねば、その家のあるじ夫婦も、うち驚きて內藥を與へ、昨夕の臥房に臥さしめて、奴婢をかはる〲に隷措けり。とかくする程に夕立の、雨さへ大く降そゝぐ、その日も果敢なく暮しかば、木偶介は三條なる、宿所へか

へることを得ず。阿夏がさそな俟やわびん、と思ひつゝ又その夜を明すに、小夏が病著稍瘥りて、はやく宿所へかへらんといふ。起出て見れば天は明たり。早飯果て木偶介は、あるじ夫婦奴婢等にも、歡びを述別を告げて、きのふ阿夏が遺し置たる、衣裳三絃箱などを、袱に包み背に負ふて、小夏を先に立しつゝ、急ぐとすれど小兒を倶したる、ゆくて三里の路果敢どらず。巳もはや半過る比、親子宿所にかへり來て、縡如此々々と阿夏に報るに、阿夏は竊に瀨十郎が事のみ思へばよくも得聞かで、樹に竹を接ぐ應答を、木偶介は訝りながら、情由を知らねば詰りも問はず、昨夜かへらで俟せしを、恨みにけり、と思ひけり。それより後は幾日も〳〵、阿夏が生活暇ありて、疎きはさらなり、親しきも、招く花主のなかりしかば、木偶介は又小夏を將て、四條河原に赴きつ、吹鼓し舞蹈らして、僅にその日を送る程に、夏は過て秋もはや、八月中浣になりにけり。棚に物措く商買だにも、大かたは暇ある、杪枯比の事にしあれば、河原に人歩留らず、物觀る人の稀になりては、木偶介小夏は錢を得取らで、むなしく歸る日の多かれば、舞の衣裳を典などしつゝ、薪炊の代となすものから、阿夏はそれを憂とせで、只瀨十郎が事のみ、牡鹿の角の束の間も、忘られればこそ物おもふ、天を瞻めて送る日の、門の柱に身を倚せて、立盡せども來ぬ人を、松吹く風の便りすら、只一遍も聞えねば、果は怨みてうち歎く、

わが身ひとつの秋ながら、なほ捨がたき扇あり。此は是いぬる比、瀬十郎が腰にしたるを、別るゝときに遺れしなり。且その扇に一首の歌あり。いと徒然なりし折の、筆すさびにや、とおぼしくて、

夕立のはれ間〳〵に苔むしてかはかぬ檐にかよふ秋風　　興　房

とぞしるしたる。草書の美しき、人柄見えていと愛たし。阿夏は歌をよまねども、左さま右さま思惟るに、ゆくりなくも彼人に、あひ初し日は夕立の、避雨の折なるに、歌のこゝろも自然に稱へり。加旃下の句に、乾かぬ簷にかよふとあれば、只一回の縁しならんや。後にあふ瀬はあるなるべし、とは思へども心にかゝるは、あきかぜの四言なり。されば古歌にも、

夏果る扇と秋のしら露といづれか先におきふしの床

となん、野上の斑女がよみたるを、謠曲にも載られたれば、靜心なきわが身すら、聞得て今の歌を思ふに、郎のこゝろに秋風の、はやくも立といふ兆歟。それかあらぬ歟、とばかりに、安からぬ胸は有也無也の、鬩ならなくにうちあけて、憂をやるせはなきものから、記念の扇は身をしも放さず、人なき折にはとり出し、うち披き膝に措て、見つゝ吟じつ又さらに、果しなげきを慰めけり。不題、木偶介が母屋のあるじは、京に名たたる庖丁戸にて、家號を池澄、名

を龜六と喚れたる、そが獨兒の鯽九郎は、今茲二十五歲になりぬ。色黑く肥脂滿たれば、よき男にはあらねども、色好みの癖なれば、早晚阿夏にこゝろ惑ひて、思ひをよせ情を運ぶを、阿夏は腌臢く思へども、有繫に母屋の息子なれば、强顏くは答も得せず、唯成る如く成らぬが如く、逼るを外して月ごろを過せしに、秋よりしては去歲に似ぬ、阿夏が生活間ありて、朝の煙の細かるを、鯽九郎はよく知りて、米を贈り薪を遣し、月每の僦賃も、取らぬを取れり、と親には告て、いと憑しくものせしかば、俗にいふ棄る神あれば、又祐けざる神なし月の、夜の衾も喪はで、親子爐による冬構、きのふと送りけふとくらす、阿夏はさしも戀慕ひぬる、瀨十郎が事はしも、忘れたるにあらねども、物乏しきと鯽九郎に、引るゝ袖を拂難て、靡けばこそあれ初のごとく、うちも歎かずなりにけり。案下某生再說、陶瀨十郎は、舅父の爲に身を愼みて、阿夏に音耗をせざりしより、寒暑はやくも代謝りて、十月の上浣になりぬ。かゝりし程に、一日日野西兼顯卿より消息を贈り給はりしを、受戴きて披見るに、嵯峨なる予が山莊の丹楓八入に染て、その色既に濃に過たり。褻雨にあはば搗散るべし。いかで賢足下と共に、百首題をよまんと欲す。未後より彼處に來會せよ。上客は萬里小路賢房卿以下、兩三友に過ず。この義京兆に請まうさば、障りあるべくもあらずかし。怠慢遲滯なからんことを惟祈る、と書せ給へり。

瀬十郎歡びて、乃者勤仕に暇なくて、久く彼卿を訪ひ奉らず、心苦しく思ふ折、かゝる佳會に招せ給へば、いかでかは猶豫せんやとて、霎時宿所におん使を、俟して主の義輿に、よしを告げ免許を得て、報翰をまゐらせけり。却說陶瀬十郎は、次の日嵯峨なる兼顯卿の、山莊に赴きしに、あるじの君は先だちて、こゝに來まして俟給ひしかば、軈て召入れて對面しつゝ、別後の情を述給ふ程に、賢房卿も訪來給ひて、おなじ圓居に入り給ふ。この餘兩三箇の殿上人は、障ることありとて、來給はずなりたれども、辭敵は客あるじ、這三人にて足れりとて、兼顯卿は先に立て、假山のほとりなる、綠巽亭に誘引給ふ。この別莊は應仁の、兵燹を脱れたる、現塵外の良園なり。宗と栽られたる丹楓葉の、曲演に落浮るは、龍田の川も外ならず。むかし京極黄門卿定家の、小倉山なる山莊も、かくありけんと思ふ可に、牝戀ひ後れし挾牡鹿の、鳴聲遠く聞えけり。亭は四間と三間を、二房に分ちて方爐あり。坐右には料帋硯と、些の調度を置れしのみ。あるじの儉素も亦愛たし。有右而賓主の坐定りて、晤譚の間々に、瀬十郎は彼此と、頭を囘らしつゝ、樹々の梢を瞻仰るに、眞紅なるあり薄紅あり、黄なるあり黄黑なるあり。そが中に、青葱として緣なるは、常葉樹のまじれるなり。彼廿谷に瀑すといふ、蜀錦を被たるにあらずば、便是、蓬萊五色の雲かと疑ふ。秋色の日に美しく、秋情こゝに閑なり。然程に、

給仕配饌の童扈從等、割籠土器をもてまゐりて、席上に安排べたり。登時兼顯卿は含笑ながら、賢房卿にうち對ひて、けふの圓坐は多く得がたし。瀬十郎も聞候へ。豫ては百首の題をわかちて、歌をよまんと思ひしかども、昔定家卿の、小倉の山莊に押れたる、色紙も皆是古歌にして、自己の歌は一首のみ、然るを輇才薄學なる、吾儕が分際で、幾百首よめばとて、人に聞する歌は得がたし。かゝれば只淸談して、盃を巡らすこそ、眞の保養といふべけれ。席上尊卑をわかつことなく、官を語らず、米錢を談ぜず。或は歴世名人の得失、或は江湖風流の事、街說新聞才に任して、共に醉を盡すべし。この義はいかが、と問給へば、賢房卿も瀬十郎も、素より望む所なれば、誰か亦異議すべき。しかるべしとぞ答ける。有此而酒讌はじまりて、盃しば〳〵巡る程に、兼顯卿又宣ふやう、酒ありといふとも佳肴なきは、東道するものの罪なり。某既にこの罪を得たり。さばれ佳殽なしといふとも、佳人ありて酌を乘り、且歌曲もて興を添なば、罪免さるゝこともやあらん、誰かある。折こそよけれ、彼もの召べ、といそがし給へば、近習の侍こゝろを得て、承りつ、と應けり。且くして、いと艶妖なる一箇の女子の、風俗浮世めきたるが、件の近習の後に跟て、外面より來る程に、更に阿容たる氣色もなく、引るゝ隨に緣頬に、うち登り額をつきて、上つがたさまいよゝます〳〵、おん恙なくまします事、いと歡し

うこそ、といふ、姿辭も愛敬づきたる、さこそと思へど間も遐く、うちも仰がで在りけるを、兼顯卿見かへりて、喃賢房卿、渠は名たたる白拍子にて、槐門貴介の公子にも、招れてまゐりし折、某もその席上にて、聊相識ることを得たれば、君にも知られたるならん。目今も賠話たるごとく、酒ありて佳肴なき、罪を贖ふ料までに、召よせて候なり。おんゆるしを蒙りて、近く侍らすべうもや、と眞實だちて問給へば、賢房卿はつく〴〵と、見つゝ莞然とうち笑て、寔に渠は或かたにて、某も相識れり。妙音にして妙手なる、何ものかよく渠に優べき、なん管待の叮寧なる、佳肴なしといふべからず。然るを添るにかくのごとき、佳人をもてし給ふこと、意外に出たる幸ひなり。やよや女子、進めよかし、と招せ給ふに辭ひかねたる、白拍子は又額つきて、爾らばゆるさせ給ひね、と僅に膝を進めつゝ、瀬十郎が、背のかたに、坐るを見かへる瀬十郎と、思はずも面をあはして、迭に欻、と驚くまでに、心慌て、陶ぬし歟、阿夏なる歟、とばかりに、背向になりて口隱る。顏のもみぢは庭面なる、樹々よりも色増りけり。今この男女の爲體に、情由ありけり、と猜したまふ、兼顯卿も賢房卿も、呵々とうち笑ひ給ひて、瀬十郎は四月の比より、在京すなればそこらの事に、疎かるべしと思へるに、はやくも夏を知りたるな。由斷のならぬ漢にこそ、と調戯給へば瀬十郎も、阿夏も倶に困じ果て、この席上に穴あら





ば、入らまくほしと思ひけり。當下兼顯卿は莞やかに、瀬十郎さのみ羞ることかは。嚮にも既にいひけらし。この席上は尊卑の禮なし。浮世に遠き山莊なれば、歌舞艶曲を聽まく欲する、俺們にやは憚りあるべき。さばれけふまで初心なる、面色したる罰盃は、脱るゝ路のなからんに、二つも三も傾けて、夏にさしね、と強給へば、賢房卿も笑坪に入て、宣ふ趣寔に爾なり。此彼共に介意せで、やようち解て酒を喫むべし。やよく〳〵、と薦め給ふを、瀬十郎は辭するによしなく、盃を受二度傾けて、軈て阿夏にさしにけり。是より席上亂酌して、その興闌なりければ、主客歡びを盡す折から、近習の侍緣頰のほとりに來て、兼顯卿に稟すやう、今日關白殿下植房公より、御館へおん使を進せられて、猛に御對面を欲し給へば、早の御來臨を俟せ給ふとなり。この義おん留守なるもの共より、おん宅書をもて稟來しにき。いかが相計候はんやと、報るに兼顯卿眉を顰めて、そは忽にしがたき事なり。直に殿下に參上して、おん承に及ぶべし、とせはしく聞え給ひしを、賢房卿うち聞て、某もいぬる比、殿下の問せ給ひし事あり。稍考案を得たれども、まだ報まうさでうち過にき。かゝれば亦某も、共侶にまゐるべし。月に叢雲花に風、可惜佳會を得果さぬも、盈しめずして虧くの義なり。然はあらずや、と潛めきて、相譚給へば、うち頷きて、和君はけふとて殿下より、召せ給ふにあらねども、某と莫逆の、友た

るよしを豫てより、殿下のしらせ給ふをもて、語次に噂あらば、後に便なき事もやあらん。かかれば強てこの處に、留り給へともいひがたし。同件の義は貴意に任せん。先はや准備をし給へ、と應て又瀬十郎にうち對ひて、猛に障りのいで來しよしは、目今聞れたる如し。日は暮れ燭を秉るに至らば、豫ては足下をそゝのかして、細腰鼓を擂すべく、夏が本事の舞を觀ばや、と思ひしをいかがはせん、といひつゝ外面をうち仰ぎて、短景既に傾き盡して、下晡になりたれども、轎子を飛して彼處に赴き、又轎子を飛して歸路を急がば、遲くとも甲夜の程、初更前後には歸來つべし。かくて又夜と共に、遊び曉さば樂しかりなん。夏共侶に俟ねかし、と正首に示し給ふを、瀬十郎は聞あへず、仰では候へども、是處と彼處は近くもあらず。殿下に見參し給ふて、御長談に及ばせ給はば、ふたゝびこゝに來まさん、と思召すとも更闌て、そらだのみにこそなるべけれ。願ふは亦某等も、身の暇を給はりなん。今宵に限ることかは、と固辭むを兼顯卿推返して、それは遠慮に過たることなり。この頃は夜の長かるに、彼處で時を移すとも、かへり來ん事易かるべし。足下は天明てかへるとも、京兆に乞まうして、わが方に來にたれば、させる咎のあるべくもあらず。夏も如右こゝろ得て、從者あらば俟するも要なし。それらは返して翌の朝、迎へに來よといふこそよけれ。枉てこの議に從ひてよ、と辭せはしく諭

し給へば、賢房卿も共侶に、あるじの君のかくまでに、宣はするをいかゞはせん。不樂しかるとも霎時の程なり。夏とともにまちねかし。急ぐことかは、と期を推して、留め給へば瀬十郎は、ふたゝび固辭によしなくて、御意に從ひまつらん、と應てそが儘留りける。然程に、兼顯賢房の兩卿は、猛に從者を促して、急ぎて關白家へまゐり給へば、給事に侍し青侍等は、各主の作に立て、こゝには僅に一兩箇の男童を遺されたり。この餘は年來耳房に住る、園吏夫婦あるのみ、忽地人影すくなくなりて、日は垂暮とする程に、阿夏が衣裳を携て、倶して來たる木偶介は、園吏の宿所にをり、緣由を傳聞て、さでは阿夏は翌ならでは、得かへさせ給ふまじけれ。獨宿所に留守さしたる、小夏が事の心にかゝれば、翌の朝出なほして、迎に來め、といひ措て、はや三條にぞ還りける。とかくする程に、冬の日はやく沒果しかば、童扈從等は彼此と、坐席に燈燭を點しなどしつ、且くこゝに在りしかど、寂寥々しきに堪ざりけん。園吏の宿所に退りて、爾後は出て來ず。四下に人のなくなりし。阿夏はやをら背より、郎の袂を掖動かして、喃瀬十郎ぬし、薄情にも程こそあらめ、雲にも山を見な月の、野路の御堂に笠やどり、利生は千手の汲引にて、其處に初てあひ合傘の、濡れて嬉しき夜の雨、辛崎ならで三條に、渡せる橋は長かれと、短夜明て起別れ、後のあふ瀬を身ひとつに、まつとしいへどかへり來ぬ、君

ゆゑにこそわが胸の、左に右く須磨のうらやさん、理なき願ひを掛向は、恐惶き神にも佛にも、祈竭してこの頃は、病を生平なる身の痩り、おん身の日にはまだ見えずや。宿所は豫て知りながら、音耗がたき管領の、御館といへば憚の、關に虚音は立ざりし、八聲の鷄をひとり聞く、寤寐不樂しくうれはしく、幾夜曉してゆくりなく、ふたゝび相見るのみならで、首尾さへ夜間の人影なき、こゝで怨をいはずもあらば、何日か岩間の遺水、今まで忘れ給ふとも、あふての後も强顏きは、心つよしと、聲立て、泣つ口說つ堪かねて、胸前拿て引よする、白く手弱き拳のうへに、たばしる雨は涙なり。瀨十郎は理り、と思ひながらもやうやくに、引放ちつゝ嗟嘆に堪ず。衣領搔合して、やよ阿夏、人木石にあらざれば、われとてもいぬる夜の、假寐の夢を忘れんや。一日も胸に絕ずもあるを、故意音耗をせざりしは、おん身には木偶介とかいふ、良人あり子もあり、とわれ人傳に聞けばなり。よしや浮たる技をもて、浮世を渡る手弱女なりとも、ぬしあるを猶密にあはば、君父にも世人にも、何をもてこの身の越度を、いひとくよしのあるべきや。死すとも汚名を雪めがたき、愆しつ、と心つきては、ふたゝびあひ見んことを欲せず。われからわが身を戒めて、遠離りしは今さらに、情をしらぬに似たれども、おん身の爲さへ思ふ實情。只一宵の緣しなりき、と思ひ諦めなば恨みもあらじ。聞わき給へ。やよ喃、と背捺りて寛

解れども、阿夏は聞かず頭を掉りて、理りめかしく云々と、いひわきをのみし給へども、男をみなの情の僞には、身をし忘れて共侶に、命を捨たる者多かり。況宜ふ木偶介は、良人にして良人に侍らず。實をあかせば小夏といふ、女兒とともにわが宿の、寓居人で侍るかし。さればこそ月比日ごろ、妾が細き絲竹の、技もて養ひ侍りにき。そは舊恩に報ゆるなり。有如之者おん身と情由あるよしを、彼人はやく知らば知れ。妾は何とも思ひ侍らず。然るをいはんや、まうさんや、おん身のうへに一毫も、事あるべうはあらずかし。これらのよしをよくも得しらぬ、人語をのみ眞に信て、妾を疎み給ひしは、いと淺はかに侍るめり。とてもかくても過世より、結びし縁しなればこそ、果敢なく別れし後朝に、遺れ扇はおん身の手迹、おん身の歌を像見ぞ、と見つゝ愛つゝ深雪ふる、こしに放さぬ冬の日の、今宵あふぎの歌占は、現憑しきものになん。僞りならぬ證には、これ見て疑ひ散してよ、と披きて示すは興房と、正しく識せし自筆の咏歌。

舊のしら地にして欲しき、筆の科ぞと、

夕立のはれ間〳〵に苔むしてかはかぬ檐にかよふ秋風

現さる事もありけるよ、とふたゝび驚く瀨十郎を、なほ恨しげにうち向上て、あひ初し日は夕立の、雨に霽間のありぬとも、涙の雨は小歇なく、乾かぬ袖の苔蒸すまでに、かよふ心を得ぞ

汲まぬ。おん身ははやくあき風と、なり果てかう強面くは、樂しくもあらぬ世の間に、存命て何にせん、よるべは絕し柴船の、こがれ〳〵て死んより、今面りに身を劈きて、赤心を見せまゐらせん。南無阿彌陀佛、と唱へも果ず、傍にありし瀨十郎が、刀を手ばやく引よせて、拔放さんとする程に、吐嗟、と騷ぐ瀨十郎は、抱き禁めて、やよ阿夏、短慮なることし給ふな。彼木偶介は寓居人にて、おん身が眞の良人ならずは、わが罪輕くなるに似たれど、われは武弁の家に生れて、周防には二親あり、京師には主君をはしますなるに、この身の謹愼疎ならば、忠孝兩ながらその方缺て、戲けきものといはれんのみ。有斯者あふ日の罕なりとも、迭にこゝろ變らずは、久後たのもしく有ぬべし。されば古歌にも、

年每にあふとはすれど牽牛織女のぬる夜の數ぞすくなかりける

今宵は下界の天乃河、又來る秋を契らんのみ。疎むとな思ひ給ひそ、と慰められて姥捨の、月の夜許呂と表裡なる、阿夏は怨稍解けて、然る御こゝろであらんには、よしやあふ夜の稀なりとも、おなじ京師の月と花、北山の雪、河原の避暑、暑し寒しの折々に、そよとの風の音信を、田面の雁の翅にも、便聞して給ひね、と繰返したる苧環の、より添易き牽牛花も、一ト盛なる諸蔓、迷ひぞ色の花なりける。却說這男女二人は、會話に時移りて、人定ははや過たれども、兼

顯卿も賢房卿も、再こゝに來給はず。彼男童等は退りし儘に、其處に假寢やしたりけん。閽吏はその職ならねば、この亭上に出て來て、瀬十郎阿夏等を、諮慰ることもなくて、深ゆく夜間の膚寒ければ、阿夏は瀬十郎を誘ひ立て、次房に退くに、こゝにはいと大きなる華氈、三四枚措れたり。推ひらきてこれを見るに、その柔きこと羅紗にも優たり。是を今宵の衾にとて、軈て布寢の假枕、かさねて夢を結ぶなるべし。現男女閑室に相會て、遂に惑ひなからん事、柳下惠ならざるもの、いとなしがたき所行なれば、瀬十郎は月來の、謹愼忽地空となりて、雲起り雨降そゝぐ、楚臺の快樂に餘念なく、後の患を省るに遑もあらず。されば世の常言にいふ、焦材には移り易き、火と木の相生相歡びて、恰も是漆のごとく膠にも似たるべし。既にして瀬十郎は、寢るともしらず熟睡しつ。丑三の比ひとり覺て、起て厠に赴きたるに、紙窗の格子の間に、晃々として光る物あり。紙燭を抗てつら〳〵見るに、眞白き小蛇にぞありける。瀬十郎は幼稚きころより、その性蛇を嫌ふをもて、こはいかに、と驚怖れて、走りて臥簟にかへり來つ、と見ればいと美しき少年の、齡は二八可なるが、阿夏と枕を竝べて臥たり。あるべき事とも覺ねば、復うち驚訝りながら、睛を定めて再見るに、少年は掻滅す如く、忽地耗てなかりけり。怪しき事いふべうもあらぬを、こはわが心の惑ひにこそ、と思ひ捨て阿夏を見る

に、異なる事もあらずして、快げに熟睡をしたり。軈て衾を推褰て、側によりて臥さんとするに、なにかあらんさら〳〵と、大くざらめく物ありて、心ともなく手に障るを、怪しと思ひて又よく見るに、いと大きなる蛇の、阿夏が腰を卷締て、頭を擡げ舌を吐きて、胸下を舐りてをり。瀨十郎はこの光景に、霎時も得堪ず吐嗟とばかり、一ト聲叫苦む隨に、仰反倒れて息絕けり。阿夏は今瀨十郎が、叫びし聲と倒るゝ音に、駭覺て身を起し、見れば瀨十郎は轉輾びたる、面色恰土のごとく、拳を握り齒を切りて、氣息は旣に絕たる似し。こは淺ましや、とばかりに、慌迷ひつ抱き起して、呼活ること幾聲となく、果は枕邊に措遺れたる、茶碗の冷茶を吹被るに、瀨十郎は云と噫きて、漸くわれにかへりつゝ、頭を囘らし四下を見て、阿夏は恙なかりし歟、と問ふに阿夏は背を捺りて、喃瀨十郎ぬし、心を慥にし給ひね。妾に恙あるべしやは、おん身は魘れ給ひし歟、所以こそあらめいかにぞや、と問かへされて瀨十郎は、ふたゝび息を吻とつきて、されはとよ聞給へ、嚮にわれはひとり覺て、淨手せんとて厠に登しに、紙窻の篇子上に、白き小蛇のをるを見たり。わが性蛇を嫌ふをもて、走りてこゝにかへり來つるに、二八可なる美少年の、おん身と添臥したるあり。怪しと思ひて猶よく見るに、彼美少年は消失せて、おん身は熟く睡りたり。こはわが心の惑ひにこそ、と思ひ捨つゝ衾を褰て、共に睡らんと

する程に、いと大きなる蛇の、その色は白かりし歟、青かりけん歟、よくも見ねど、おん身の腰を巻締てありともしらず、搔抓みにき。われは幼稚きころよりして、性として蛇を嫌へば、曩に肥後なる阿蘇沼にて、主君の蛇穴を焼給ひし日も、猛に病痾に假托て、おん伴に立ざりき。然るを今宵この臥簟にて、大蛇を抓みし事にしあれば、悔しくも昏絶して、爾后の事をしらず。辛くして呼吸通て、見ればおん身は恙もなく、又彼大蛇もあらずなりぬ。夢か現か、怪しとも、あやしき事でありける、と報るを阿夏は聞あへず。そはおん身の性として、いたくも蛇を怕れ給へば、さもなき物を疑ふて、虚驚きをし給ひけん。みづから思ひ給へかし。今は小春の初旬に侍れば、蛇蝎はみな蟄居して、人に見らるゝ事ははべらず。況臥房に大蛇あらんや。妾は霎時熟睡して、おん身の浄手に起給ひしすら、知らで在りしをいかにして、何物歟身に纏繞るべき。よしもなき事宣ふな、と慰められて瀬十郎は、さもありけんと思へども、騒ぎし胸はなほおち著かで、黙然たる程に、清涼寺の鐘にやあらん、鎬々として近く響く。数僂れば五更なり。登時瀬十郎がいふやう、吾推量に違ふことなく、兼顯卿は關白殿下へ、參り給ひて、夜の深たれば、こゝに來給ふべくもあらで、御館にかへらせ給ひしならん。爾りともわれとおん身と、こゝに在りて夜を明しなば、傍難遂に脱れがたくて、はやく浮名の立ことあらん。今に

暁るに程もなし。われは急ぎて御館へかへらん。おん身はこゝに迎の人を、俟て翌の朝かへり給へ。倘人問はば瀬十郎は、甲夜の間にかへりき、と答て疑ひを避んこそ、是緊要の便直なれ。こゝろ得給へ、と聶き示して、身装しつゝ遽しく、出る袂を掖留る。阿夏は霎時と推居て、宣ふよしは聞えて侍れど、かへり給ふはなほ速かり。彼處にゆき著給ふとも、御館の關戸開かずは、立わびしくぞあらんずらん、いひ遺せし事なほ多かり。さのみな急ぎ給ひそ、と惜む餘波はわれもかも、おなじ思ひに躊躇ひし、瀬十郎は八聲の鷄の、鳴くに驚き復身を起して、告別しつ庭面より、樹の間遶りてあさもよし、木戸あるかたに出てゆくを、阿夏はなほも縁頬に、立暁すまで目送りけり。表話不題、兼顯卿は、賢房卿と共侶に、只管轎子を急して、關白殿下へまゐり給ふに、途にして日は暮たり。扨まゐり給ひしかば、殿下御對面まし〳〵て、御示談數刻に及びしうへに、翌は夙めて參内すべき、公務を仰合されければ、更に又別莊へ赴き給ふこと克はず。是により賢房卿も、われひとり彼處にゆくとも、要なしと辭し別れて、宿所に歸り給ひけり。然ればこの義に時移りて、兼顯卿は子二刻の左側、やうやく歸館し給ふ物から、猶是彼に事の多くて、よしを瀬十郎等に告遣り給ふに遑あらず。天は明なんとする比に、一箇の近習に奴隷を倶さして、嵯峨なる別莊へ遣し給ひ、瀬十郎に云々と、絆の趣を報知よ。夏には形の

如く襷物を、取らして還すべし、と吩付給へば、近習の侍こゝろ得果て、急ぎて嵯峨に赴く程に、路にして天は明けり。有此而件の侍は、別莊に走りゆきて、瀬十郎を諮るに、綠巽亭には阿夏ひとりをり、瀬十郎は昨夜甲夜の間に、退りにき、と聞えしかば、先阿夏によしを告て、襷物を取らしつ、直に管領の邸に到りて、瀬十郎に對面して、主命を述傳へ、再別莊に立よりて、盃盤割籠をとり斂め、昨夜こゝに遺されたる、童扈從等を相伴て、西の館にぞ還りける。是より先に笠屋阿夏は、その詰朝木偶介が、迎に來つるを俟つけて、三條の宿所にかへりしより、更に又瀬十郎を、思ふ事初に優して、しのび〳〵に玉梓の、使をもて安否を問せ、東西など贈る事もありしを、瀬十郎は固く禁めて、これよりの後月毎に、薪炊の價を資しかば、阿夏は生活に暇ありても、衣裳を褻ふ迄に至らず、左も右もして浮世を渡るに、月雪花の折を得て、瀬十郎が出て來るを、俟わびしとのみ思ひけり。爾るに阿夏は綠巽亭にて、瀬十郎と再會せし、その比より有身りて、姙娠十三个月に及びたる、明年の冬、十月の初つかたに、男兒を産けるに、この夜は巽風吹暴れて、沙を飛し瓦を落す、眞夜中比の屋棟に、頻鳴く梟鴟の聲聞えたり。されば、この時に方りて、阿夏は産の紐を解けり。不祥大かたならざれども、母も子も恙なくて、日比歷る隨肥立にけり。さばれ木偶介は、阿夏が懷胎の人なみならで、十三个月に及びし

事、心にかゝらざるにあらねば、一條反橋の邊なる、賣卜者は、百中の妙ありと聞て、有一日彼處に赴きて、その子の爲に本命終始の吉凶を問けるに、賣卜翁はよしを聞て、蓍を拿り卦を布て、霎時考てひとり點頭、硯を引よせ筆を染て、

　子而非レ子　非親是親　一窮一達　因果輪々

と書寫して、これを木偶介に授けていふやう、天機は叨に漏すべからず。よくこの四句を記憶せば、後に思ひ合する事あらん。祕よ人にな知らしそ、といふに木偶介こゝろを得ず、頭を掻きつゝ左見右見て、いと恥しき言ながら、僕は文盲なれば、一句も得讀がたし。願ふは和解して給ひね、といへば賣卜翁頭を掉て、否、今讀て聞するとも、目今知らるゝ事にはあらず。とくとく持てゆきねかし、と強面く答へてとりあはねば、木偶介は疑ひながら、宿所にかへりて云云と、阿夏に報て賣卜翁の、書與へたる讖語を見するに、阿夏もいかでか讀得べき、頭を傾け沈吟じて、當るも八卦、當らぬも八卦と世話にいふものを、今とて知れぬ事ならば、人に問ふともその甲斐なからん。こはこの儘におくこそよけれ、と答て軈て嬰兒の、護身囊に斂めけり。然程に阿夏が子は、五十日百日と日を歴る隨に、全身やうやく美しく、肌膚潔白にして珠玉の如し。容止さへ母に肖たれば、亦いふべうもあらざりけり。木偶介は愚魯にも、わが胤ならず

と思はねば、慈愛むこと限りもあらず。おなじくは女の子にして、産ざることよと呟きて、その子を珠之介と名つけにけり。却説阿夏は瀬十郎許、安産の事如此々々と、竊に人をもて報知し、生れし赤子はおん身に肖て、目上に黒子あり。おん身の黒子と一對なれば、親子なる事疑ひなし。悦せ給へかし、と筆にいはして誇りにけれど、瀬十郎は疑ふて、實事なりとは思はねども、そが爲に錢鈔を贈り、衣裳を遣しなどせしを、木偶介はなほ曉得らで、只是阿夏を最負の財主の、貺ものなりとて歡びけり。然程に、光陰箭のごとく梭のごとく、燕來たり雁かへる、三稔の春秋を歴にければ、珠之介はよくあるきて、ものいひ習ふ愛々しさは、雛人形にも優したりとて、親はさらなり他人も、愛せざるものなかりけり。かくは阿夏は子に絆されて、思ひの隨に生活に、出ることを得ざりしかども、瀬十郎が資あれば、然とて饑も凍もせず。既にして珠之介は、稍懐を離れしかば、又生活に出ること、初にかはらずなりにけり。不題末松木偶介が母屋のあるじ、池澄屋龜六が獨子なりし鰤九郎は、曩に阿夏に懸想して、錢鈔多く費せしに、阿夏はその年の十月、陶瀬十郎と再會せしより、根柢に優る杪材なければ、敢又鰤九郎を見かへらず、いとも強面くものせしかば、鰤九郎は瀬十郎と、情由あるをまだ知らねども、阿夏が手管にかけられて、空費を遣ひたる、果は冬野の枯尾花、靡くともなくなりぬるを、只

管怨慣れども、木偶介といふ良人ある、ものにしあれば當面に、いひ罵らんは有繋にて、いかにせましと思ふ程に、鯽九郎が放蕩なる、唯この一事のみならで、賭錢を好みて洛外なる、破落戸を友としつ、或は花街かよひして、親の貨財を竊出せし、その事の發覺れたる、折から筋ずき借財の、債彼此より起り來て、親の難義に及びしかば、龜六驚き且怒りて、鯽九郎を追出し、遂に京師の住ひを免さず。この故に鯽九郎は、阿夏に恨みを舒るによしなく、和泉の佐界に赴きて、或ときは小料理の技をもて、人の爲に傭れ、又或ときは、燗酒烹魚の夜販などをしつゝ、辛くその日を送る程に、旣にして四稔を歷たり。この時又京師には、鯽九郎が父、池澄屋龜六は、齡六十にあまりしかば、烹炙の技もおもふに任せず、身さへ心の衰へて、惡棍ながら親子の恩愛、折に觸ては鯽九郎を、なつかしく思ふ氣色の、言の葉末に顯れしを、四隣の市人さこそと猜して、商量しつゝ親子の爲に、幾遍となく勸解しかば、龜六やうやくうけ引て、鯽九郎を召返しにけり。然程に鯽九郎は、親の勘當を免されて、京師に歸著きしより、且くは身を愼みて、漫行もせでありしが、吭下過て熱を忘るゝといふ、世の常言に漏るゝことなく、遂に又舊病起りて相識る破落者等と交る程に、阿夏は四稔前つ比より、陶瀨十郎と情由ある事を、よく知れるものありて、鯽九郎を很せんとて、渠が產たる珠之介は、瀨十郎が子なる事、誰

とて知らぬものなしなゝど、向火焼て説示せば、鯽九郎は大く怒りて、原來いぬる比阿夏奴が、寐かへりを打て強面かりしは、さる間夫ありし所以なりけり。先その陶奴を結果て、爾後阿夏を殺すべし、と思ひ決めつ瀬十郎を、狙撃んと欲すれども、いまだその面を認らず。このゆゑに管領家の、雜色奴隷に緣を討めて、酒を飲し東西を贈り、遂にそのともがらと、交る事を得たりしかば、外ながら陶瀬十郎を、認ることさへ得たりけり。是により瀬十郎が、微行をしたる日に、途にて撃ばやと尋思をするに、さしも敵手は武士なるに、微行の折なりとも、一兩箇の從者はあらん。然るをわが身ひとつにて、いかにして捷を攬るべき。友垣結びし甲乙は、皆是微力の博徒なれば、かゝる時の援にはたのもしからず。烏部野にをる乞兒等には、心悍く力ありて、武藝相撲に長たるものの、落魄たるもありと聞ぬ。いかで彼等に錢を抓せ、慾より誘引て相譚はば幾人の得易かるべし。縱彼等は一兩箇、返撃になるとても、原是乞丐の事なれば、わが所爲なりとは知るものなからん。是に優たる心術はあらじ、と心ひとつに思ひ定めて、有一日烏部野に赴きつ。こゝに多かる乞兒の中に、筋骨の逞しげなる、魂面の一ト癖あらんと見ゆるを、三四人樹陰に招きて、縡の機密を囁示し懐にしたりける、圓金四枚をとり出して、四箇の乞兒に取らせけり。抑這乞兒等は、霜避孤六、兎脣卒八、癩の猪彌介、犬蒲團鄙太郎

なゞど喚れたる、剛慾無慙の癖者なれば、一議に及ばず承引て、悪事を謀し合せけり。既にして鯽九郎は、四箇の躬方を得たれども、陶瀬十郎が微行を、何日と定かに知るよしなければ、又管領家の奴隷に因みて、件のよしを捜問ふに、瀬十郎ははやくより、天満宮を信じまつれば、曩に京師に來つる比より、必月の二十五日に、北野の神社へ詣る事、雨の日風の朝といふとも、懈ることなし、と聞えしかば、そは究竟と歡びて、又乞丐等に報知し、無鐵では克じ、と潛やかに、兵器五口准備しつ。乞丐等にその四口を授けて、千本條路に埋伏して、陶か北野よりかへるさを、撃果さんとて相譚ふに、乞丐等も亦歡びて、その日を遲しと俟たりける。然程に、陶瀬十郎興房は、身に仇あるを知らずして、本月二十五日にも、北野へ詣んと欲するに、その日は勤仕に暇なくて、時もはや後れしかども、然とて已べきにあらざれば、事果てより遽しく、從者佐三次折介等を將て、北野の神社へ詣つゝ、霎時神前に默禱して、下向も路を急ぐとすれど、千本畛を過るとき、はや黄昏になりにけり。折からこゝに埋伏したる、鯽九郎は樹蔭に添ふて、陶が迹より跟て來つ、乞兒等は道中に、横はり列臥して、竊にゆくてを遮りしを、瀬十郎は心いそしき、夕間暮の事にしあれば、臥たる乞兒をよくも見ず、礙と跌きけしとんで、先なる鄙太を蹂躪れば、鄙太は忽地苦と叫ぶを、暗號に衆皆身を起して、瀬十郎主從を、遮り

畱め抓蒐りて、諸聲高く眼を瞪らし、這阿侍はまだ日も暮れぬに、達手に目玉を著てや措たる。過世すくてこのざまに、なり果たる俺們でも、親にも蹈せぬ五尺の軀を、蹂躙られて堪るものかは。見よこの鄙太は膊骨を、蹈折られにけん腰さへ立ず。夥計の冤家迯るとて、何處へか逃すべき、覺期をせよ、と闘諍の掛艮、憎しと思へど瀬十郎は、柳に流して些も騒がず。乞丐等にうち對ひて、いはるゝよしは無理ならねど、前路定かに見えざりし、黄昏時にかへさを急げば、こゝらに臥せる人ありしを、思はざりける愆なり。さばれ又儞等も、この道中に横臥しは、人に蹈して物にせん、と計校たる歟。然はあらざめれど、みづから傷を求るに似たり。爾りとも避ずして、蹈掛たるはわが疎忽、大人氣もなく爭んや。佐三次錢を取らせよ、といふに若黨佐三次は、いと朽をしく思へども、俗にいふ乞兒に棒撃と、思ひかへしつ折介と、目を注しつゝ、應をしつゝ、携たりける袱包を、立ながら解ひらきて、錢一緡を出しけり。畢竟乞兒等錢を受て、瀬十郎を放つや否や、そは且こゝに見したる、出像を觀ても、大かたを知りねかし。

第一輯　卷之四

第六回

密使茶店に貴翰を傳ふ
美婦子を携て情人を送る

登時若黨佐三次は、錢一緡をとり出し、乞丐等にうち對ひて、やをれ野臥們、汝等が大膽なる、這道中に列臥して、人に踏して物にする、鈍き伎倆は憎けれども、神詣のかへさでをはせば、施行こゝろで取らせ給ふ。かゝる檀那は得がたからん。口唔ずに受載きて、とく退ずや、と窘て、遞與すを受取る霜避菰六、冷笑ひつゝ見かへりて、鄙太よ、蹈れて膊三枚、折かれて扨膏藥代は、鐚百文でをはします。慳貪無慈悲、吝嗇なる、かゝる檀那は寔に得がたし。堪忍する歟、いかにぞや、と問へば鄙太は頭を掉て、菰公むごきことをないひそ。世に捨られたる俺們でも、膊三枚蹈折られたる、膏藥代が鐚百ならば、無慙や肋一枚が、三十二文と知られたり。野猪の胴殼膘鮪の麁骨でも、爾いふ時價が何處にある。返してくれよ、聽ぬぞよ。きかぬきかぬ、と臥ながら、嘘くを然こそ、と猪彌介卒八、鹹聲を苛立て、噫菰六が心弱さよ。物吝

みせぬ檀那にあへば、寢てゐても貰ふ錢百で、人の背肉を買れんや。然るを受取ることやはある。乞兒冥利に竭たる歟。適夥計の汚面奴が。さでば濟ぬぞ、濟さぬぞ、と麪桶鼓くも相槌の、調子外れの高揺榻。孤六騒がず、噫咻や。われ倩と按ずるに、鐚百ばかりと口にはいへど、一文檀那百人に、貰ねば都合らぬ。這一綹は優徳衆の、金百兩にも當れるものを、受とらで何とせん。菰夥計では齢役なる、己に女才のあるべき歟。鄙太よ、これで堪忍せよ。僉共倶に和解ずや、といひつゝも目を注すれば、氣色に曉得る卒八猪彌介、否とはいはぬ陽笑して、誠にこれはいはれたり。縡を分たる哥々の差配で、肋骨より氣が折れたらん。鄙太も看際て往生せよといふに、頷く犬蒲團、新前なりし去々歳まで、一菰にも寢かされし、兄弟品の寛解ならば、恩愛半等、血をわけし、虱こそあれ恨みはなし。いかでよろしく宜く、と圓く治る麪桶の、まくら擡げて蠢くを、見つゝ笑つゝ孤六は、佐三次にうち對ひて、目今聞せ給ふが如し。敵手が町人百姓ならば、かばかり脆く折れまじきに、お腰に怕れて形のごとく、衆皆納得仕りぬ。とく〳〵とほらせ給へかし。といふを見かへる瀨十郎、爾らば汝等いひぶんなき歟、と問も果ぬに四箇の乞兒等、いかでかいひぶん候べき、嚮には腹の立しき隨に、まうし過して今さら後悔、宥させ給へ、と逡巡して、そが儘ひらく玉鉾の、路の障りも凍解に、釋て溫とき夕南風、

頭痛病せし折介も、したり貌なる佐三次も、疾視囘しつ、いへばえに、いはねど共に意氣揚々と、主の後方に隷添ふて、齊一急ぐ夕間暮の、山斷を謀る四箇の乞兒は、菰の下に隱したる、巨刀手々に引き拔て、聲をもかけず後より、竊歩しつゝ追撝て、あびせ被たる刃の電光、不意を撃れし佐三次折介、背の深痍に霎時も得堪ず。苦と叫びて仆れたる、程もあらせず乞兒等は、瀬十郎をとり籠て、競ひ掛るを物ともせず、こゝろ得たり、と身を淪して、左右に近づく猪彌介と、鄙太が刃をうち落して、怯むを透さず項上抓んで、撻と投伏せ聲ふり立て、汝等乞丐に似げもなく、刃を隱し拿たるは、剪徑せんとの爲なる歟。然らずは人に頼れし歟、と問せも敢ず菰六卒八、青年奴よくも推したり。左ても右ても活ては還さぬ。この世からなる引導に、意趣の本末說示さん。本はといへば色の仇、笠屋阿夏に兩箇の密夫、一箇は和郎がわが物貌に、子さへ産して今一人の、財主に空箭を喫したる、遺恨をこゝで霽さんとて、憑れて扨晝間から、埋伏せしをしらざるや。今の浮世は倒で、素人に施す乞兒の手のうち、受ても見よや、と調謔にほざきて、兩人齊一撃んとす。戰世の習俗にて、市人莊客乞兒等まで、只殺伐を旨として、土一揆なンど喚れたる、兵法武藝を眊傚ふて、悍からざりしものなければ、瀬十郎は又さらに、問答の遑もなく、刀を晃りと拔合して、蹈込々々戰ふ程に、猪彌介鄙太も身を起し來て、

落たる刃を搔取りはやく、亦背後より撃んとしつゝ、歩許わかぬ甲夜闇に、倒臥したる兩箇の傷者に、思はず撲地と跌きたる、響に佐三次折介は、忽地に呼吸通て、刃を杖に立あがりつゝ、主を援けて猪彌介と、鄙太を撃んと殺締ぶ。いづれに隙なき奮撃突戰、入紊れたる七口の、鍔音高く丁々發打と、互に鎬を削りたる、勝負の間に佐三次は、又卒八と戰ふて、やうやくに砍伏せしが、その身も深痍に瞑眩きて、再撑と倒れけり。そが間に折介は、鄙太が肩尖砍下げて、仆るゝ處を乘し懸て、十々滅を刺んとする程に、鄙太は伏しつゝ刃を揚て、折介が乳の下を、刀尖ふかく咼煞と刺す。刺れながらも折介は、鄙太が胸前刺串きて、此彼共に魂消る、聲を末期の一句にて、臥累りて死ンでけり。然程に瀨十郎は、はや猪彌介に大痍を負して、僂偬く處を疊かけて、細頸丁と撃落し、返す刀に菰六が、向脛拂て薙倒す。背後に闘ふ鯽九郎、聲をも被ず礑と砍る、刃を外す瀨十郎は、修煉の大刀風撓ず去らず、又鯽九郎と戰ふたる、一上一下虛々實々、然しも烈しき拳の冴に、鯽九郎は右の腕、小鬢の髮際彼此と、既に深痍を負しかば、難捷じとや思ひけん、透を窺ひ引脫して、足に信して逃走るを、瀨十郎は脫さじとて、反たる刃を拭ひもあへず、喘々追ふ程に、ゆくこといまだ幾ならず。近邊の里人等、手に／＼棒を挾み、蕉火を振照して、群々と走り來つ、瀨十郎を抑留めて、縡の始末を詰問ふ、聲囂々と

罵騒ぎて、頻に捫擇してければ、瀬十郎は逃たる奴こそ、われを狙撃んとしたる、本人ならんと思ふものから、勢ひ恁地なれば、遂に亦追ふべうもあらず。引提し刃を拭ひ斂て、里人等に這條の、縡の趣如此々々と、首より尾まで、詳に報知して、われは管領家の御内人、陶瀬十郎と喚るゝものなり。倶したる二箇の從者あり。一箇は死して一箇も亦、大痍に死生定かならず。彼惡棍に頼れたる、四箇の乞丐等は討留たるが、いまだ死ざるものもあらん。誘共侶に、と先に立て、舊所にかへり來つ、なほ片息なる菰六を、項搔抓み掕掲起して、縡の機密を責問ふに、菰六苦痛に堪ずして、艄九郎に頼れたる、伎倆を遺なく首伏す。瀬十郎うち聞て、爾らば惡事の本人は、三條西町のほとりなる、池澄屋龜六とかいふものの、孩兒艄九郎にこそあンなれ。者奴ははやくも逃亡たれど、既に深痍を負せしかば、追捕んこと輒かるべし。わが從者佐三次は、幸ひにしてなほ死なず。渠はこの儘遺し置てん。里老達速に、醫療を加へ給はるべし。又この乞丐等は死せるも活るも、護りて沙汰をまちねかし。われは君所に立かへりて、これらのよしを聞えあぐべし。里人の中兩三箇、われと倶に管領家へ、まゐりてよしを訟まをさば、撿屍の使を給はらん。夜の深ぬ間にとく／＼と、いふに里人等はこの議に任して、表立たるもの兩三人、瀬十郎に附添ふて、管領邸に赴きつ。遺れる里人は佐三次が、爲に醫師を招き

などして、療養に術を盡しけり。然程に、管領大内義興主は、陶瀬十郎興房と、千本の里人等が、その夜猛の訴によりて、言の虚實を問質さしめ、則家臣朱野丹三に、夥兵を隷て、千本の畷へ遣し、猶且夥兵を部して、悪事の本人鮒九郎を、搦捕るべし、と命ぜらる。却説朱野丹三は、時を移さず宿所を出て、千本へ赴く程に、彼處よりは十町あまりこなたなる路傍に、鮮血に塗れて臥したるものあり。引起さして責問ふに、是則別人ならず、鮒九郎なりければ、その儘索を被さして、千本へ牽もて來つ。こゝに遺れる里人等を、召聚へてよしを問ふに、嚮に瀬十郎等が聞えあげたる、趣と違ふことなし。爾るに乞兒孤六は、深痍なれば得堪ずして、その曉がたに息絶たり。陶が若黨佐三次も、露命危く見えたりしを、丹三則里人に、下知して、後に扶乗しめ、折介が屍と共に、瀬十郎が宿所へ遣し、遂に鮒九郎を牽し、里人を將て、管領邸にかへり來つ。次の日鮒九郎を鞫問するに、則陳じまうすやう、在下はこの年來、陶瀬十郎に恨みあり。且そのよしを申しあげん。末松木偶介といふ河原人は、笠屋夏が良人にて、在下が親、龜六が借屋にをり。爾るに御内人陶瀬十郎は、件の夏と密通して、産したる子は三歳になれり。この事誰とてしらぬはなきを、木偶介は管領家のおん威福に憚りて、阿容々々として做ことなきは、いと朽をしく腹立しき。在下借屋の好をもて、渠が爲に妻敵を、撃て得させん

と欲せしかども、身ひとつにては力及ばず。よりて四箇の乞丐等を、賴みて助劍をさせたれども、反撃に撃果されて、在下さへに深痍を負にき。この外に情由は候はず、といふに丹三冷笑ひて、借屋の好ありとても、そが良人すら意趣を述ぬに、人も憑ぬ妻敵三昧、寔に烏滸の癖者なり、と叱懲しつ。木偶介と、そが妻夏を召よして、鯽九郎が陳じたる、綷の趣云々と、詳に說示して、この事汝等覺やある、と問へば木偶介頭を擡て、おそれながら巾上ん。陶瀨十郎とかいふ者は、在下いまだこれを知らず。そを鯽九郎が云々と、まうすよしこそこゝろ得ね、といふに丹三頷きて、然らば夏はいかにぞや、と問れて阿夏ば阿容たる色なく、問せ給へることには侍れど、そは濡衣を被せんとはかりし、人の虛言で侍るかし。おもふに四稔前つ比、鯽九郎が妾をとらへて、しうねくも口說しを、そが度每に窘めて、情らしうも物せぎりき。かゝりし程に鯽九郎は、身のもちざまの歹ければ、親龜六に勘當せられて、京師にをらずなり侍り。然るをやうやく免されて、喚かへされて幾日もあらぬに、何を證に云々と、事を好みし闇撃は、物狂ひにやあらんずらん。思ひがけなき禍鬼の、いたくも暴れて侍るかな。願ふは察し給へかし、と應て傍に牽居られたる、鯽九郎を見かへるに、證據なければ惡棍も、そを非とは爭ひかねて、頭を低て跪居たり。登時丹三聲高やかに、やをれ鯽九郎聞たる歟。譬ば夏に不誼ありとても、

汝が妻にあらざるに、非法の働き言語道斷。況や不諠の證據なし。さればこそあれ木偶介は、瀬十郎を知らずといへり。思ふに汝が情慾を、得遂ざりけん遺恨によりて、咎なきものを誣たるならん。われ龜六を召よして、年來汝が放蕩無頼の趣さへに定かに知れり。今俺までに毆懲ずは、いかにして實を吐くべき。とく〱彼奴を毆ずや、と烈しき指揮に雜兵等は、承りつ、と立かゝりて、鯽九郎を推伏せて、笞を揚て、背の皮肉の、破るゝ迄に毆しかば、弱り果つゝさていふやう、在下は四稔前より、阿夏に舊き怨あり。乃者人の噂によりて、渠が心の變りしは、瀬十郎殿と情由ある故ぞ、と報たる者のありしかば、思ふ恨の累りて、やる方もなきまゝに、先彼人を闇撃にして、後に阿夏を殺さん、と計較しは現疎忽の愆、この義に相違候はず、とやうやく首伏したりけり。丹三聞て爾らんには、陶瀬十郎が事はさらなり、夏にも亦罪はなし。人の噂を實事として、管領家の御内人を、撃んとしたる大膽不敵、その罪尤輕からず。木偶介夏等千本なる、里人も僉この意を得よ、といと嚴に聞えしらして、身の暇をとらせつゝ、鯽九郎をのみ獄舍に繫ぎて、この日の廳は果にけり。有右而朱野丹三は、鯽九郎が首伏の、事の顚末云々と、主君義興に聞えあげて、その讞斷を請ひしかば、義興勃然と太く怒りて、然るときは、鯽九郎は、些も借まじき罪戾なり。速に梟首して、都下の惡俗を懲すべし、と敦圉たけく

下知せらる。これにより丹三は、次の日鯽九郎が首を刎て、軈て河原に梟にけり。然程に、陶瀬十郎は、嚮に千本の里人等と共侶に、鯽九郎が悪事のよしを、聞えあげしその夜より、させる咎めはなけれども、藻にすむ蟲のわれからと、よに憚りの關を置て、宿所に籠り居る程に、若黨篠野佐三次は、刀瘡終に癒ずして、黄泉の客となりにけり。有右而五十日ばかり歴る程に、この年肆月の初旬なるべし、有一日朱野丹三は、主君の使を奉りて、瀬十郎が宿所に詣來て、君命を傳るやう、陶瀬十郎興房事、當家第一の老黨たる、政房が子でありながら、行状よからざる風聞あり。よりて山口へ返し遣さる。歸著の後も御沙汰あるまで、佗と愼みをるべし、と嚴に命ぜらる。瀬十郎は幸ひに、罪鯽九郎ひとりに歸して、阿夏が事の祟はなけれど、身に覺ある愆に、まうし解くべきよしもなく、太くおそれて言承しつ。猛に旅の准備をしつゝ、次の日京師をたち出るに、後者なども格を省きて、兩三人に過ざりけり。かゝれば浪速の浦邊より、水行を周防へ急んとて、その日巳の比及に、深草の里を過る程に、京家の侍とおぼしきが、僅に一箇の從者を將て、茶店に尻を掛てをり。今瀬十郎が過るを見て、遽しく從者に、こゝろ得さしつゝ途に出して、瀬十郎を留めさせ、竊に對面せまくほしきに、霎時立よらせ給へとぞいはせける。瀬十郎は訝しく、思ひながらも引るゝ隨に、軈て茶店に近づきて、と見れば件の


出像第九
古句



侍は、是則別人ならず、日野西中納言兼顯卿の近習の青侍に、辛踏无四郎寧成と喚れたる、年來相識るどちなれば、思ひかけず、とばかりに、且歡び且恥て、床几の傍に立よりつゝ、迭に寒暖を述恙なきを、祝し祝さるゝだも面ぶせなる。瀨十郎は聲を密めて、某事は口づから、いひがたき越度によりて、月ごろ垂籠て候ひしが、這囘周防へ追返さる。かう慌しき旅なれば、俄の首途にて餘日もなく、四稔以來懇命を、承りし方ざまに、おん辭別の暇もあらず、心くるしく候ひしに、圖らずもこの處にて、貴兄と對面しつること、月來の本意に稱へり。兼顯卿はいよゝます／＼、恙なくをはしますや。貴兄は又何等の所以に、こゝらを徘徊し給ふやらん。稻荷へ詣給ひし歟、と問へば无四郎も亦聲を低めて、某がけふこゝに來つるは、主君の使を承りて、貴公にあはん爲のみなり。寡君竝に賢房卿の、おん消息も齎したるに、こゝはあまりに端近かり、誘こなたへ、と母屋に入りて、障子の陰に坐を占れば、瀨十郎も推辭によしなく、そがほとりに對ひてをり。登時无四郎がいふやう、この春貴公の災難は、寡君も賢房卿も、かの折に傳聞せ給ひて、おん駭き大かたならず。爾后も左に右に、胸安からずをはしませども、籠居のよし聞えしかば、左京兆に憚りて、故意安否を諮給はず。既に斯日ごろ經て、貴公は周防の山口へ、返され給ふ迴行の事、風聲はやく聞えしかば、中途に出て如此々々と、竊に予が

意を傳へよとある、君命を奉りて、こゝに俟こと久しかりき。そは只寡君のみならで、萬里小路賢房卿も、おん使を立給はんとて、仰合されたりけれども、多人數にては人覩に立ん、こなたへよせさせ給ひね、と寡君これを禁め給ひて、彼卿のおん消息をも、某に齎し給へり。廼こゝに、と翰匣より、二通の書簡をとり出して、遞與すを瀬十郎は受戴きて、ひとつ〲に披き見るに、兼顯卿も賢房卿も、共に名殘を惜ませ給ふ、愛顧は筆に顯れたる。そが中に、兼顯卿の消息に、今より四稔前つ比、綠巽亭に空待させしは、もみぢ見ならでものいふ花を、手折れといわぬばかりなりし、わが愆こそ悔しけれ。今さら恨みられやせん、鈍ましかりき、と書せ給ふを、見れば顏且赧うなりしを、さらぬさまにてさや〲と、手ばやく卷て懷にうち斂め、今にはじめぬ兩卿の、おん情こそ辱けれ、前路を急ぐ旅なれば、おん答書を奉る遑もあらず、不敬を允させ給はんや。只是貴所のおん執成を、賴み奉るのみにこそ、といひつゝもはや立まくするを、无四郎霎時と推禁めて、させる儲にあらねども、君命に依りて遙々と、齎したる偏提あり。一盞薦めて袂を分たん。然しも日ながき肆月の旅に、いそぐことかは、と慰めて、徒者に携來たせし、偏提をひらきて薦めしかば、瀬十郎は感謝に堪ず。これ彼共に下戸ならねば、さしつおさえつ盃の、數累るも覺ぬまでに、晤譚に時を移したる。瀬十郎は淨手に立て、

天井を遶りつゝ、奥まりたる緣頰に到て、遽しく出て來る程に、忽地背後に人ありて、こや喃喃と、呼留るを、誰なるらん、と見かへれば、思ひがけなき笠屋阿夏が、珠之介を携て、來つつこゝにて俟たるなり。登時阿夏は遽しく、瀨十郎を掖留め、涙さしぐみ聲ひそまして、喃瀨十郎ぬし、鯽九郎が大膽なる、かの闇撃のもつれより、おん身のうへのとやあらん、かくやあらんと思ひわびて、安き心のなかりしに、幸ひにして祟りもなく、歡ぶ甲斐もなつ木立、はゞかり多きふたりが中の、末も得遂ず栲繩の、ながき別れになりにき、といひかけてよゝと泣沈めば、瀨十郎も嗟嘆して、かくまで慕ふそなたの誠心、そを憎しとていふにはあらねど、親しうせしは若氣の愆、過世に結びし惡緣なりとも、思ひしきらば斷らざらんや。公廳沙汰は脫れても、世の風聲をいかゞはせん。主君の御氣色宜しからで、猛に周防へ還させ給ふも、そなたと情由のありといふ、風聲あるによりてなり。爾るを今亦こゝに來て、別を惜み泣口說かば、わが身の罪を增するのみ。そは情に似て情にあらず。かゝれば人視に被らぬ間に、背門より出てゆき給へ。それこそわが身の爲なりかし。然るにてもそなたは亦、いかにしてけふわがこゝに、立よることを早くも知りて、こゝらに在て俟たるやらん。汲引をしたる人もやある、と問ふに阿夏は涙を斂めて、おん身がけふの首途を、昨宵仄に聞しかば、いかで遭んと思ひつゝ、

稲荷詣に假托て、今朝とく宿所を出しかど、稚兒を携たる、女の歩の果敢どらで、纔にこの里まで來つる折、認られもしつ認りて侍る、西ざま兼顯卿をいふの御内人、辛踏ぬしのこの茶店に、憩せ給ふにゆき遭侍り。竊によしを諮ねしに、おん身をこゝに俟とある、言葉の露を汲見ては、今さら隱すに隱されず。妾もおん身に遭んとて、こゝまで來つるよしを告しに、辛踏ぬしの宣ふやう、爾りともわれ共侶に、そなたを彼人に遭せなば、そをわが手挽したるに似て、人の批評を脱れがたけん。そなたは奥に退きて、便宜もあらば遭ねかし。われは知らざるおもゝちして、外にこそ見ゆ、といはれたる、人の情の憑しさに、俟かひは將ありながら、さまで強面く宣はずとも、山海千里を隔ては、又あふ事はかた糸の、より添ふも今を限りなる。そは諦めて侍れども、珠之介はおん身の胤、這眉上の黒子さへ、一對なるは親子の徴、この兒の顔とおん身の容止、似ずや肖ざるや見給へ、といひつゝ鼻紙に附たりし、懐中鏡をとり出して、照して見せつ、推向けて、珠よ、そなたの爹々公ぞや、抱れ給へ、と掻遣れば、尚いわけなき珠之介も、爭ひがたき血脈の恩愛、爹々さま喃、と呼かけて、携るを軈て引よせて、膝に載たる瀬十郎。歎けばこそあれ目に脆き、涙歟、露の一ト滴。辭はなくて脇挿の、刀に附たる小刀子を、遽しく抜とりて、珠之介が右の手の甲を、わが左の手の甲に、推竝べつゝ小刀子もて、一寸許、壓割

て、瀬十郎は信と見て、疑ひは稍解たれども、わが兒といはれぬわが兒の久後、名告あふ日のありもせば、只叔侄といはんのみ、さばれ年長面遺れして、それともわかずならん時、再會の符契には、這手の疵に優ものなし。金銀珠玉、得がたき貨を、像見となすとも喪ひ易かり。いでく、といひかけて、墨汁の墨を指に染て、珠之介が手の疵と、わが手の疵に搨入れば、眞一字の假墨子、はや鮮明に見えてけり。右右面後瀬十郎は、腰著の財嚢より、圓金十兩とり出して、これを阿夏に遞與していふやう、こは思ふにも似ず細小なれども、珠之介を養育の、爲に取らする寸志なり。さらば、とばかり遽しく、立まくするを掖留る、阿夏は洟をうちかみて、絆をわけたるおん教諭に、久後邂しき再會の、符契はこの子の東西を、稍辨ん比にこそ、說示さんと思ひ侍れ。遭はば左いはん右いはん、と思ひし事も今さらに、胷に支てわれながら、近まさりしてくちなしの、花より脆き別に待り。長き旅宿は旦夕の、食物にもこゝろをつけて、恙もあらず彼地より、音耗聞して給ひね、と携る袂を振拂へば、綴けらし腋著の、糸の紊れのくるしさを、思ひ捨てぞ瀬十郎は、外面に立出て、こは辛踏ぬし、心ともなき、中座の失敬、ゆるし給ひね。既に時刻の移りにき。

おん盃を納給へ、といふに无四郎こゝろ得て、現いつまでも名残は竭じ。されば古語にも、送君千里、須一別といへり。强るは要なき事なるべし、と應て偏提をとり斂め、猛に從者を呼立して、茶價を茶博士に取らせなどしたる、その間に瀬十郎は、わが從者を呼聚して、无四郎に別を告、嚮にもまうせしことながら、兩卿の御懇命は、身を終るまで忘るべからず。なほ西歸の日に卑札をもて、おん請を申上ん。向暑是より幾もあらじ。貴兄も彌紈袴の爲に、自愛し給へ、と述了て、刀を引提て立あがるを、无四郎も亦幾條の、口誼を舒て目送る程に、阿夏は隔亮を寸と開て、出も得やらず外ながら、送る歎きは深草に、淚歟露の珠之介が、手を掖立てぞ立在たる。これを一期の別とは、知るやしらずやしら雲と、流るゝ水の定めなき、人さまざまの江湖上に、一世の夫婦ありといへども、なべて百年の情人なし。倘人情をもてこれを見ば、女貌郎才憐むべし。亦公道をもて論ずれば、菲德亂行、人にして、人にも似ずといはまくのみ。噫嘻。

第七回

二賊剪徑して父女を屠る
一妻羞を忍て兩讐に從ふ

再說、鯽九郎が親なりける、三條西町の庖丁洒賈、池澄屋龜六は、憎しといへど獨子に、後れたりける哀傷悲泣は、亦いふべうもあらざりけり。現鯽九郎が短慮淺計、恨むまじき人を怨みて、可惜命を隕せし事は、自業自得といひながら、初を推せば借屋なる、阿夏より事起りたり。さればこそあれ世の風聞にも、彼陶生と情由ありしを、鯽九郎は媢く思ひて、罪を醸しつ身を殺して、獨沒になりにき、と人僉いへば虛說ならじ。恨めしの淫婦や、彫なのわが身や、といはねど胸に燃る火の、やるせなければ折に觸て、木偶介を追立ばや、と思ふ心のつきしより、僦賃なンども常に變りて、債ること苛刻く、阿夏と面を對しても、睨詰て辭を被けず。胡越の思ひをなすものから、木偶介が愚魯なる、事情をよくもしらねど、人の噂を洩聞しより、瀨十郎が事の趣、今さら半信半疑して、それ歟と思ひ合する事の、なきにしもあらざるに、彼美男子は故もやありけん、周防の山口へかへりき、と告たる人のあるにより、そこらは後安くなれども、主屋のあるじ龜六が、乃者猛に氣色立て、疎々しきも愉からず。況や口の祥なかりける、人の噂の耳に障れば、京師に住も果がたかり。鎌倉は京に劣らぬ、繁華の都會なりしかど、彼地も亦兵火に荒て、且兩管領山內家と、扇谷殿と睦しからず。剩伊豆相摸なる北條殿と、戰ひ年々に絕ずもあれば、今は昔の鎌倉に、似るべうもあらざめれど、然とても生活

の、便著なしといふべからず。彼地に移り住むならば、又佳事のなからずやは、と思ひ起しつ云々と、阿夏に告て相譚ひしを、阿夏は聞て思ふやう、よしや京師に住果るとも、なつかしとのみ思ふ瀬十郎ぬしに、逢るゝといふにもあらず。世間舅姑の咻しきに、他郷に移らば人改りて、なか〳〵に後やすかるべし、と尋思をしつゝ一議に及ばず、妾もしかぞ思ひ侍るに、とくとく准備し給へ、といふに木偶介歡びて、家財雜具は遺もなく、沽却して盤纏としつ、行装を整へたる、その日借屋を龜六に返して、四鄰合壁に別を告、今茲九歳になりける小夏と、三歳になりける珠之介を、負ひもしつゝあるかせもして、夫婦父子すべて四人、この年捌月の下浣に、東を投て起行けり。東海道はこの春より、處々に戰ひ絶ず、新關も亦多かり、と豫て聞えし事なれば、岐岨路こそよかめれとて、この日は七八里の路を辿りて、守山の驛に宿りを投め、ゆき〳〵て第三日の未の比に、磨鍼嶺を越んとす。然でも折々行艱む、女兒小夏が手を掖扶けて、珠之介を背負ふたる、夫婦が辛苦はいふべうもあらず、急ぐとすれど果敢どらぬ、山路は人の往還稀なる、下晡になる隨に、茅萱小篠原に聚く蟲の聲も、高峰に近づく程こそあれ、一ト叢繁き樹拉の間より、顯れ出たる兩箇の癖者、身長五尺七八寸、一箇は六尺にも及ぶべし、莚頭巾に胴金作の、巨刀腰に苛めしき、そが打扮は問でもしるき、彼張樊が儔ならずは、關の

太郎が子孫ならんと思ふも僻目にあらざりける。當下兩箇の癖者は、先後に立塞りて、徐に礫く聲をふり立、やをれ行客騒ぎなせそ、多寡の知れたる盤纏身皮、骨折甲斐のあらじと思へど、杪枯比の酒價には、さのみ捨べき東西にもあらず。とく脱ずや、と左右方齊一、刀を光りと引拔けば、吐嗟と叫ぶ女房女兒と、共に魂銷る木偶介は、齒牙も合ず戰慄れて、腰うち脱し手を抗て、噫是山の豪君達、やよ、俺們は京師にて、世渡る櫂が廻らねば、世帶果せし倉卒廻國、路費といふては候はず。懷貯限り進せん。衣裳は免し給ひね、と賠つゝ腰を搔撈りて、稍とり出す連緡錢を、兩箇の賊は見かへりもせで、眼を瞪らす聲高やかに、一文野郎が諄々と、憖ぬ事を誰かは聽ん。覺期をせよ、と諸聲に、罵も終らず蹴倒して、起んと盗く項を踏へて、手ばやく剝略る衣物と、腰に纏ひし財嚢も漏さず、奪ふを見るに堪かねし、阿夏小夏は叫嗟と叫びて、携禁んとしたれども、睨哮てよせ附ぬを、猶賚緣りて號哭ぶ、小夏が項上搔抓む、一箇の山賊胴聲悍く、這女の子奴が懲ずまに、妨すな、と敎閙て、宙に引揚け手玉に弄て、矢聲を被て投蕫せば、憐むべし是這小夏は、底廻なる深谷の中に、身を翻し陷りて、骸も得見えずなりにけり。既にして木偶介は、今眼前に女兒小夏を、投喪れし怨に堪ねば、身さへ命も惜ばこそ、わが子の冤讎と呼りて、立あがり抓かゝりて、一箇の賊の睾丸を、拉んとしてけるを、

転蓬すな、と又蹴倒して、起しも立ず礑と砍る、刃の冴に木偶介は、苦と一ト聲叫びもあへず、肩尖より乳の下まで、韓竹割の身は赤裸、遺るは舂褌の、紐より短きこの世の別路、命墓なくなりにけり。阿夏は女兒と良人の枉死に、その身も生たる心地せず。今さら逃とも脱さじ、と思へばいとゞ弱り果て、共に屢泣く珠之介を、抱き締め眼を閉て、年來信ずる觀世音の、冥助を禱る一生懸命、念誦に他事もなかりけり。登時兩箇の山賊は、木偶介が亡體を、又谷底へ蹴落して、刃を鞘に袖埃、等しく拂ふて徐々と、阿夏が身邊に立よりて、右ひだりより、やよ女、汝は殺さず、怕れなせそ。花もていはゞ八重櫻、月に譬へば十六夜の、色も香もある女房盛りを、售るすら惜きにいかにして、むごくやはものすべき、とく〳〵あゆめよ、と手を拿るを、見かへりもせず振拂ひて、噫狎々し、殺さば殺せ。生さぬ中でも小夏は女兒、良人も共に命を隕せし、その仇人に伴れんや、といはせもあへず兩人齊一、足踏鳴らし冷笑ひて、顔に似げなく强情張て、適じといへば活しもせず、殺しもやらで憂目を見せん。這餓饑奴を、と右手なる賊が、跳りかゝりつ、珠之介を、矢庭に挑拿る鷲抓み、喃哀しや、と聲立て、携る阿夏を、させじとて、左手の賊が捩禁て、小腕攬て動かせず。當下右に立たる賊は、駭怕れて泣入るばかりに、手足を悶搔く珠之介を、目上高くさし揚て、やよ是女これを見よ。俺們兩箇の御

こゝろに、從はじといへば詞も語も用らず。今この餓鬼を谷底へ、小女良とおなじ土にせん。はやく思案を切替て、俺們さまの御こゝろに、從はば親も子も、魚肉で美飯の年中安樂。否歟、應歟、と左右より、邪慳で口說く小兒を質種。回報ひとつが存亡の、堺と思へば口隱る、母の歎きと子の叫び、冥土の呵責磨鍼の、名にし負けん、劍の山、紅蓮の涙焦熱の、湯となるまでにわくよしもなき、阿夏は擣く胸を鎭めて、涙の間に思ふやう、今怨を述て爭ふとても、兩箇の讐を擊にもあらず、又徒に親も子も、殺されて何の益かあらん。わが身はとまれかくもあれ、偶擧けし男兒の、珠之介だに恙もなくは、年長人成る後に、怨を復すよすがもあらん。歌舞伎にもすなる常磐前は、子の爲仇に從ひし、例もあるをいかでわれ、さばかりの思慮なからずやは。這身ひとつを兩箇の男に、任するは宿遊女にも、等しかるべき恥なれども、時の要には鼻も劓。わが身は只今この山路にて、殺されにきと思ひなば、何かは厭ふことのあるべき。吁然なり、と肚裡に、尋思をしつゝ涙を斂めて、彼方此方の兩箇の賊を、うち向上又見かへりて、喃刀禰達、宣ふ趣聞わきたり。あの谷底へ投一投に、喪れしは繼子にて、その穉兒は血をわけし、わが身勝手にあらねども、地を走る獸天飛ぶ鳥も、子ゆゑに迷はぬものあらんや。今よりしてその穉兒を、養ふて給はらば、なでふ御こゝろに背くべき、命を助け給ひね、といふに歡ぶ兩箇の

山賊、はや珠之介を扛卸して、泣なく〳〵、と頭を捺り、背拊つゝ遽しく、阿夏に遞與して、圓なる、目を細やかにうち含笑み、適怜悧き女房かな。路傍の芒背門の柳、靡きて損のなきものなれば、今よりして俺們を、慰めて給はらば、この子は俺們兩箇の兒なり、親なるものを疎にせんや。しかはあれども機を緩さして、脫走らんと謀るにあらずや。虛とは肌を寬しがたかり。向に霏哩と當て知れり。そなたの腰にも十兩あまり、且その金を預けよかしと、いひつゝ軈て左右より、はや引出す長財囊は、珠之介の爲にとて、瀨十郞ぬしの貺はせし、置土產なる金なれば、わが夫にすら深く隱して、もて來しものを情なや、といふにいはれず阿容々々と、取られて措しげに見かへるのみ。亦せん術はなかりけり。却說兩箇の山賊は、木偶介が行李と、衣裳を取て肩にうち被、阿夏親子をいそがし立て、何處とはなく伴ふ程に、幾もあらで日は暮けり。この地は總て山又山の、羊腸たる細道を、辿るもくるし蘿蔓、松柏枝をまじへて、樹下彌闇く、嵓石道に横はりて、樵路言に滑なり。仰ぎて蒼天を瞻れば、閃々たる星の光に、夜風の秋既に深かり。俯て山河を渡るとき、滔々たる水の音に、壺折る裳且濡んとす。本邦の大江山、唐土の白猿傳、鬼魅妖怪に捉られたる、良家の婦女子もかくありけん、と思ふ阿夏はゆき難みて、岩根に身を倚せ、樹幹に携などして、動もすれば後るゝを、一箇の賊は、手を拿り、腰

を推て扶掖き、又一箇の賊は、珠之介を打抱きて、聲をかけ氣を獎し、左右に慰めつゝ行めり。有如之程に時移りて、天ははや明なんとする比に、這兩賊が巣穴に來にけり。登時阿夏は彼此と、頭を回してこの家の光景を見るに、素朴の柱萱の檐、月の漏てふ宿にもあらず。素是何人か住捨けん、道場めきたる庵室なりけり。庖湢は筧をもて水を引き、座席は庭を旨として、天然の風景あり。大約その爲體、彼金山が洞[illegible]と思へば、亦支黨あるを見ず。膽吹の鬼の宿ならずは、袴垂保輔が、隱宅にも似たるなるべし。然程に件の二賊は、阿夏珠之介を勸りて、奥まりたる處に休はせ、早飯を炊ぎなどして、叮嚀に管待けり。抑この山賊の、一箇は十々鬼夜行太と喚れ、一箇は野干玉黑三と喚れて、初は肥後の飯田山なる、川角頓太連盆が手下なりき。爾るに連盆は、いぬる永正六年の春の比、備中介弘元に搦捕れて、支黨もなごりなく、討滅されたりしとき、この夜行太と黑三のみ、辛く討手の鋒頭を殺脱て、遠く近江路に落留り、坂田郡佛生山の奥深く、巣穴を占て、三稔以來こゝにをり。然ば這地方は、磨鍼、中山、菩谷、佛生と、連山波濤の如く聳立て、樵夫も到がたき嶮岨多かり。住人とてはなき山の、鳥路熊徑嵯峨として、音づるゝものは松ふく風、伴ふものは白雲の、外には慰むよすがもあらず。有右而夜行太黑三は、

をり〳〵街頭に出て、行客を剪徑しつ。又あるときは里閭に入て、民屋を掠奪しつゝ、浮る雲の富を欲して、跖が榮華を羨みたる、殘忍無慙の癖者なれども、住る深山は人家遠く、出沒定かならざれば、これを知るものなかりけり。既にして夜行太等は、阿夏が儔多からぬ、美女なるをもてふかく歡び、まづその素生を諮るに、勢ひ恁地なれば、阿夏は隱すことを得ず。京師の歌妓なりけるよしを、明々地に報しかば、二箇の賊は商量して、次の日何の里にてか、筑紫琴三絃なンどを竊み來つ、この兩種を阿夏に授けて、鼓せもし歌せもして、時なく酒の敵手とす、只この遊興のみならで、黑三が宿所にをらぬ日は、阿夏を夜行太が妻にしつ、又夜行太がをらぬときは、黑三が妻にもす。譬ば是兩箇の犬の、孤牝を愛るに相似たり。淺ましきこといふべうもあらねど、有繫にわが兒のいと惜しければ、阿夏はこれすら推辭によしなし。逃去らんと欲すれども、夜行太と黑三と、迭代に宿所にをれば、思ふのみにて便りを得ず。よしや些の透ありとても、山深くして道遠かり。何方を人家ある處ぞ、と豫てしらねば愁に、走り出路に迷ふて、程もなく追詰られ、引戻さるゝこともあらば、わがうへのみ歟珠之介が、命も保ちがたかるべし。畜生にだも劣る山賊の、しかも良人の寃讐なる、二人の爲に身を瀆されて、調戲ものとなれる事、抑甚麼なる惡業ぞや。好しからぬ夫でも、ぬしありながら岐道かけて、

瀨十郞ぬしと淺からず、契りし罪の報い來て、活る地獄に墮にけん。世に薄命なる女子はあれども、わが身にますものあるべしや、と過來しかたを胸にのみ、思ひぞくらす秋の山に、牝戀ふ鹿も恨しく、籬笆にからむ薯蕷蔓、子に羈されて捨かねし、身のなる果をあはれ世に、訪ふ人絕てなかりけり。畢竟阿夏が這窮阨の、後の話說いかにぞや。そは次の卷に、解分るを聽ねかし。

第一輯 巻之五

第八回

神僧歌を詠じて解脱を示す
阿夏計を定めて舊怨を雪む

十々鬼夜行太、野干玉黑三等の兩賊は、佛生山なる隱宅に、阿夏を伴ひ來つる比より、或は一ト日、或は兩三日、迭代に挊了に出て、獲物なければ歸らざりしが、有一日黑三は、藥種多く竊み來つ、そを又市にもてゆきて、沽却んとて擇分たる、そが中に砒霜あり。こは極めたる毒石にて、人はさらなり鳥獸も、服するときは免れがたし。さばれ病の症によりて、用ることもありとか聞にき。しかりとてかゝる物を、市にもてゆきて售んとせば、忽地に疑れて、わがうへになることもやあらん。なれども棄べき物にはあらず。是はこの儘祕置んとて、幾重ともなく帋に包みて、索もて地炕の邊なる、梁に吊せしを、阿夏は見つゝ、慾深き人の心のいかにぞや。かゝる物すら捨難し、いと淺ましと思ひけり。是よりの後這兩賊等は、京鎌倉いへばさらなり、北越奥羽の盡處までも、赴くことのある折は、或は半年、十四五箇月も、歸ざること

前路のなきにあらず。かゝる首途の折からは、遺れるものゝ東道して、酒醮して遊びにけり。前路の賣買多からん、兆祝のこゝろなるべし。然ば夜行太も黒三も、珠之介を愛るにあらねど、阿夏が心を攪ん爲に、一日這山中にて、獼猴一隻を捕へ來つ、廳下に繋措て、稚きものを慰めしが、兩三年を歴る隨に、その獼猴のよく狎しかば、放養にぞしたりける。現禽獸と羣居して、浮世に疎き山住ひは、春來たれどもなほ年の、新しきを知るよすがもあらず。かはらぬものは開花と、樹間隱れに鳴く鳥の、聲より外に音づるゝ、友なき宿の夏衣、織るとはなしに脫更て、袂涼しき朝な夕な、炊の桶に汲む水も、羨しきはけふもかも、流れ〳〵て人間に、出やしぬらん本の露、末の霤歟、玉ぞ散る。軍茶花の上風秋深て、鶉の床の草莚、霜冰る夜の冬構、日毎の深雪降埋み、九折なる玉鉾の、路は絕ても近くなる、鄰もあらず母と子が、憂歲月をふる鄉の、空なつかしく思ふおもひかねて、立出て見れば舊の庵主の、護持佛などにやありつらん、背門を距ること一ト町あまり、枯殘りたる叢陰に、石の馬頭觀世音立せ給へり。阿夏は京都に在りしときより、這御佛を信じまつれば、花を折水を手向て、しのび〳〵に念ずらく、南無救世圓通大菩薩、願ふは親子が厄を釋て、はやく京都へ歸させ給へ。わが身はとまれかくもあれ、珠之介が幼稚きより、好らぬ所行を見習ふて、偸竊の子になり果なば、いよゝ悲しく朽措から

ん。念々感應觀音力、無量の利益を施して、救せ給へ、と默禱じたる、深信懈らざりけれども、いまだ時運の至らぬにや、とばかりにして利生もあらず、はや七稔を經にければ、珠之介は既にして、九歲にぞなりにける。その性の愚魯には、見えずもあれど母親は、渠が素生もわがうへも、明々地には告ざりしを、珠之介は稍訝りて、抑われには甚麼なる故にて、兩箇の爹々公のあるやらん、と折々母に問けるを、阿夏は羞たる面色にて、そは今定かに告ずとも、後におのづから知るよしあらん、と答て他事に紛らしつ。諦て岩間の苔淸水、深く慿みてありければ、珠之介はこゝろ得がたく、思ひながら問も果さず。兩箇の賊が身の護りとて、壁に掛たる弓と箭を、携つゝ山をあさりて、兎をも射つ、鳥をも射るに、度をかさね月日を累て、漸々に自得して、日每に獲ものあるをもて、這獵弓に遊耽りて、宿所にあること稀なりけり。有如此程に、この年の秋の比、夜行太は遠く出て、美濃路より、信濃上野を徘徊し、兩三月の程にして、十月の比かへり來つ。這囘の賣買には、白くて逞しげなる馬一疋と、金銀衣裳種々あり。そを黑三に見せ、阿夏に見せて、只管技に誇りたる、そが中に、いと美しき五色の玉を、眞紅の緒に串きたるあり。阿夏はこれを手に拿て、左さま右さまよく見るに、その玉每に或は山水、或は人物、宮殿花鳥の、鏤れるがごとく透徹りて、鮮明に見えしかば、頻りに愛て放ちも遣らず、

夜行太を見かへりて、こは珍しき物に侍り。釵兒の餝にせまほし。いかで妾に賜へかし、といふを夜行太聞あへず、噫よき事をいはるゝよ。捨賣にするとても、百金にはなるべきものを、何でふ釵兒の餝にやはせん。然ればとてかゝる物は、京鎌倉にあらざれば、買ふものも亦なかるべし。この後かの地にもてゆくまで、姑くそなたに預け措くべし。等閑になし給ひそ、といへば阿夏は微笑て、世の常言に預りぬしは、半分とかいふなれば、兩三箇は返し侍らじ。然らばこれを與りても、妾に要なきものなれば、うち摧けても知らず侍り。その折叱り給ふな、とうち戲れてそが儘に、袖に裹みてもて立けり。登時黒三は、庭の樹下に繫ぎたる、彼白馬を見かへりて、哥々よ、這回の賣買は、近年罕なる造化よかりき。金銀衣裳で物足れば、あの馬は售らずして、この隱宅の非常に備ん。よしや近鄕なる城主に聞えて、討手の兵よせ來るとも、騎馬なるときは、身ひとつにて、敵十人にも當るべし、といふに夜行太頷きて、その用心も然ることながら、俺們こゝに十稔あまりの、光陰を送れども、知るもの絶てあらざれば、討手の備は、遠慮に過たり。そはとまれかくもあれ、馬あるときは物を負して、麓に到るに便りよし。賣らずに繫ぎ措くべけれ、といふに黒三は身を起して、背門の空房に牽入るゝ。件の馬を象立て、愛たきものに思ひけり。却說次の日黒三は、夜行太が旅かへりの壽きと、その身は渠に立

代る、首途の祝ひを兼て、一ト宵酒もり遊んとて、朝未明より宿所を出て、麓のあなたなる里に赴き、酒一ト罇を沽もて來たれど、いまだ殺の足らずとて、ふたゝび里へ赴きつ。夜行太は長途の疲勞に、復寢の枕鱗する、納戸に鼾睡の聲したり。阿夏は今這間を得たるに、けふはいまだ拜ざりける、觀音薩埵に詣んとて、遽しく背門より出て、はや佛前に近づく隨に、と見れば飄々然たる一箇の行僧、眉秀眼淸しく、檜笠を仰ざまに戴きたる、面色凡相ならざるが、鼠色なる梼の衣に、麻の腰法衣を被て、網代の笈の細小なるを負做しつ、白梼の甲被脚絆して、杖を衝こなたに向て、觀世音の御前に立り。思ひがけなき事なれば、阿夏は驚き怪みながら、恭しく進み對ひて、聖は什麼何處より、こゝらへ到らせ給ひしやらん。妾は罪障深かる所以にや、寃家の爲に伴れて、この山に入りしより、はや七稔になりぬれど、こゝに來たれる人を見ざりき。然るを今ゆくりなく、聖に見えまゐらするは、年來信ずる這御佛の導せ給ひし歟、有がたきまで尊く侍り。妾は一箇の男兒ありて、今玆九歳になり侍り。願ふは聖のおん慈悲もて、俺們母子を救ひとりて、竊に故鄕へ送らせ給はば、そは再生の御恩に侍らん。救せ給へ、とかき口說くを、法師は聞つゝつく〴〵、と見つゝ屢嗟嘆して、そは痛しき事なりかし。われはいとはやくより、大約皇國に在とある、佛を拜奉らんといふ、大願を發せしかば、深山

幽谷、人の至らぬ、海岸喦の陝まで、佛像ましますゞ處には、索て到らずといふことなし。然ればこの功德によりけん、人を相してその人の、過去未來まで知ることを得たり。そなたは京師にありし時、初は客にて入夫に、なりたるものゝありしならん。爾るを浮たる心より、他し男にあひ初て、岐道かけたるのみならず、衣食の爲に又一箇の、男に昵き、そをふり棄て、又彼他し風流士と、相馴れしより子を産たれども、天の允さぬ惡緣なれば、四稔の月日は夢とし過て、彼風流士に遠離り、遂に京師の住ひすら、こゝろに任せずなりしかば、他鄉に赴く道中にて、山賊に奪去られ、贍良人は殺され、織女さへ喪れて、その身は質子を救ん爲に、仇たる一賊に從ふて、耦妻になりしより、人のかよはぬ這深山に、七稔といふ光陰を、送りしは是則、汝に出て汝に返る、惡報なるを曉得らずや。そなたの如き淫婦の、筑摩の祭祀にあふことあらば、載く鍋はいくばくならん。みづからこれを思へかし。さばれその罪障は、只婬慾のうへのみにして、させる惡心あるにあらねば、自今われを賴ずとも、その厄解けて、志を、行ふの時近きにあらん。然ればその折はからずも、鄉導するものありて、浮世に出るよしありとても、いまだ故鄉にかへりがたけん。これも亦命なり運なり。そなたの良人の殺されしも、色に迷ひて家を忘れ、妻子にいくその歎きをかけて、離別しても後悔せず、人の債も贖はで、父祖相傳の家

産を果せし、悪報なればいかゞはせん。そが女兒の喪れしも、親の因果の子に報ふ、餘殃と悟らば怨もあらじ。好も歹もその身に返して、己を責て人を怨まず、よく行狀を愼むものは、一ト日も煩惱あることなし。されば歌にも、

あしきには染りやすきを搨る墨のわれから枉るこゝろ習ひに

こゝろ得たる歟。と說示して、立別れんとする程に、阿夏は羞たる頭を擡て、遽しく掖留め、綷をわきたるおん諭しに、身の罪障を今ぞしる。無明の醉の醒侍れども、なほ心もとなきは、わが兒珠之介が久後なり。渠が命運いかにやあらん、その吉凶をしらまほし。襁褓の中にありし比、賣卜翁に判斷を書示されし事のありしを、讀も得解かで今までも、心にかゝり侍るかし。よしや兎毛の頭に置く、露ばかりなりとても、示させ給へ、と請問へば、法師は頭をうち掉て、そは益もなき事にこそ。親子の厄の解るをしらば、意外の幸ひなるべきに、子の久後をも示せといはる。糠を舐りて糟に及ぼす、慾には限りなきものかな。いかでか天機を漏すべき。さらばとばかり袖うち拂ひて、復立去んとする程に、阿夏はやよや、と又掖留て、ふたゝび問ふを問しもあへず、法師は太く焦燥て、其處退ずや、と杖振擧て、阿夏が拳を礙と歐つ。歐れて吐嗟と叫びたる、聲に阿夏は駭覺て、四下を見れば其處にはあらで、身はなほ地炕の邊にをり。

寢るとも思はで目睡けん、是假寢の夢なりければ、覺ての後もなほ燥く、胸を推撫、心を鎭めて、紙窗を仰瞻るに、日影はいまだ晡時なり。つく〴〵と見し夢を思ふに、教化せられし行僧は、年來信じ奉る、觀音菩薩にこそおはすらめ。倘是薩陲の示現ならば、親子の厄の解んこと、近きにありと示させ給へば、終には驗なからずやは。然るにてもその機に臨みて、志を行ふことのあるべし、と宣はせしは、抑甚なる事にやあらん、と思ひかねつゝ思ひを凝らす、折から梁を渡る鼠の、三ツ鼣、ふたつ鼣嚙あふて、迭に衷々と鳴ながら、堪ずやありけん地炕の邊へ、忽地礑と墜しかば、阿夏は吐嗟と駭きながら、見れば鼠にはあらずして、煤けし紙に包みし物の、吊緒斷離れて梁の、上よりかくは墜たるなり。かゝれば鼠が緒を嚙絕りし歟、然らずは暴るゝ勢ひにて、緒のおのづから斷離れしならん。こはいぬる歲黑三ぬしが、もて來てこゝの梁に、繋ぎて貯措たりし、毒石なるを今こゝに、思ひ出れば五六年、そが儘にしてぬしさへに、措忘れたらんこの物の、墜たるも亦奇なるかな、と思ひつゝ復尋思をしつゝ、獨莞爾とうち笑て、肚裏に思ふやう、曩に黑三ぬしが心祝の、酒醼せんといはれしは、是究竟の折なりき。この毒石を酒に浸して、兩箇の漢に薦めなば、磨鍼山にて殺されし、木偶介ぬしと小夏が爲に、怨を復すのみならず、俺們親子は後やすく、這山を出て里に到らん。かくてぞ厄は解ぬ

べし。女子の所行には似げもなき、わが身ながらおそろしき、伎倆なりとてせで已まば、仇も得撃ず埋れ果て、恥を雪るときやはある。されば夢想の示現にも、親子の厄の解んとするとき志を行ふよしの、ありといはれしはこの事ならん。もし躊躇て時を移さば、奥なる人の睡りも覺、外に出し人もかへり來てん。かくて又謀を行んと欲するとも、終に得がたく悔しかるべし。嗚呼しかなり、と只管に、慫る心を鬼にしつ、竊に件の毒石の、紙うち開き火箸もて、一ト塊を打缺て、黑三が沽もて來ぬる、罇に入れ酒に浸して、その餘は手ばやく紙に包みて、簀子の下へ隱せしが、只四下のみうち見られて、左に右に胸安からねば、件の酒を試に、おそるおそる茶碗に移して、見るにその色濁りたり。軈て茶碗共侶に、密と外面へ投棄て、更に亦尋思をするに、かくまで大く濁りし酒を、薦んとせば疑れて、禍この身に及ぶのみかは、珠之介さへ殺されなん。然ればとてこの酒を棄なば、その替りにせん酒はあらず。こは憖なる事をしたり、と悔しく思へど今更に、又せん術のあらざれば、いよ〳〵胸は安からぬ。獨頭を病しつゝ、親子の存亡こゝにあらん、と思へば一生涯の智囊を餙ひて、ふたたび一計を心に思ひ起しにけり。吁われながら謀りにき、と思ひつゝ外をうち仰げば、下晡になりにたり。登時奥のかたに假寢したる、夜行太は欠伸して、起て地炕の邊に來つ、阿夏よ、黑三はまだ還らずや。珠之

介はけふも亦、殺生に出たる歟。この頃の日の短きをも、童ごころにはさもありなん。黒三が些ばかりの、肴を求めかねたるは、無働なる漢にこそ、といへば阿夏は見かへりて、さまで劬勞にし給ふな。おん身は年來野干玉ぬしを、一腹より生れたる、弟の如く思ひ給ふは、いと淺はかに侍らずや、といふを夜行太聞咎めて、こゝろ得ぬことをいふものかな。我と彼とは西國の、窮難を共に脱れて、等しく當國に落留り、この山住ひをなせし比より、莫逆にして苦樂を俱にす。然れば實の胞兄弟にも、をさ／＼劣らぬ心もて、迭に些も疑はず。わがこの宿所に在るときは、そなたをわが妻とし つ。渠がこゝにあるときは、渠に與へて耦配の、女房にすらなす中なるに、渠又何等の不足ありて、吾を疎に思ふべき。さりとも渠が心變りし、證もやある。いかにぞや、と問へば阿夏は冷笑ひて、如右思ひ給ひなば、いはでもあるべき事ながら、妾はおん身を眞の夫と、思へば火急の厄難を、告侍らんに聞給へ、といふに夜行太膝推進めて、その厄難とは何事ぞや、とせはしく問へば、四下を見かへり、乃者おん身を俟程に、三四日前に彼人の、竊に妾にいひけるやう、われそなたをもて吾身ひとりの、妻にせまく思へども、夜行太ありてはその事かなはず。且渠は先輩なれば、よろづを渠に問定めて、自由を得ざる事多かり。いかで彼奴を結果て、本意を遂んと思ふなり。就て一計あり。夜行太がかへるに及びて、

届家の壽きと倡へ、一ト宵酒醮を催すべし。その折酒に毒を加えて、飽まで渠に薦めなば、是刃に衂らずして、命を斷の捷徑なり。そなたはこの義をこゝろ得て、毒ある酒を渠にもり、われには篩やうにして、篩ぬ手術が緊要なり。凡貴も賤も、家に兩箇の良夫なし。爾るに兩夫を耦配に、なすはそなたの恥ならずや。かゝればわが爲のみならで、そなたの爲にこの事を、竊に思ひ起したり。努氣色にな曉得られ給ひそ。よくし給へ、といはれたり。有右而おん身のかへらせ給ひて、いまだ幾日もあらざれば、この議を告るに暇なく、心ぐるしく侍りにき。さればこそあれ、野干玉ぬしは、今宵の酒醮の料にとて、今朝とく酒を沽もて來つ。いまだ肴の足らずとて、兩三遍里に出て、常にはあらぬ馳走態は、意中に物のあればなり。よく〳〵用心し給へ、と誡しやかに聶き示せば、夜行太驚き且怒りて、思ふにも似ぬ畜生奴が、吾は妬娟の心なく、一箇の婦人を耦配にして、者奴にも賞翫せしめしは、分に過たる幸ひなるに、なほ足ることを知らずして、吾を害せんと謀るにこそ。今にもあれかへり來ば、矢庭に者頭撃落して、この憤怨を散さんず、と敦圉猛く罵りたる、心を纔に推鎮め、更に又阿夏に對ひて、現憑しきそなたの誠心、そを疑ふにあらねども、黑三が沽もて來たる、酒あらば見せ給へ、といふに阿夏はこゝろ得て、こゝに侍り、と三升罇を、腕撓げに引提つゝ、地炕の邊に撲地と措くを、夜行

太やをら引よせて、茶碗を索て移し見るに、その酒果して濁りたり。こゝに至て十二分の、疑ひはありながら、嘗して見ばや、と思ふになん、彼此と見かへるに、年來豢れし老獼猴の、窓の夕日を貪りて、隔子の下にをりしかば、阿猨よく、と呼立て、膝うち鳴らせば跳下りつ、あるじの身邊に來る獼猴に、件の酒を與れば、獼猴は茶碗を兩手に受て、そが儘に飲竭せども、飽ずやありけん茶碗を放さず、舌垂遺るを幾遍となく、指に染つゝ舐りしが、忽地に阿と叫びて、手を張り足を空にしつ、悶苦しむ七顚八倒、血を吐くこと夥しく、九竅すべて朱に染て、霎時もあらず息絶けり。夜行太はこの光景に、いかでか阿夏を疑ふべき。只憤胸に盈て、黑三を恨るのみ。思はずも嘆息して、嗚呼危きかなこの酒を、知らずしてわれ喫ば、わが身も獼猴のごとくならんを。其首の底まで黑三が、伎倆を知るは吾妹子の、吾に誠のあればなり。賞すべし賞すべしと、屢譽て已ざりしを、いと鈍しと思ふ阿夏も、目前に見し大毒の、驗に竦々髮立までに、駭怕れ舌を振ふて、共侶に嗟嘆しつ、現爭れぬ毒酒の效驗、主に代りて命を隕せし、阿猨が最期の痛ましさよ。これに就ても珠之介は、獵くらしつゝまだかへらずや、といふ間に夜行太は、鎍刃磨する準備の巨刀、黑三遲し、と俟たりける。とは知らずして黑三は、一隻の兎を肩に被け、又一籃の鯉鮒を、引提てかへり來つ。門より聲をふり立て、哥々よ、肴も

整ふたり。是見給へ、と誇貌に、はや緣頰にうち卸す、兎と鑑を見かへりもせぬ、夜行太眼を瞪らして、黑三汝は女色に惑ふて、われを害せんと謀りしな。その術は喫はぬ、毒酒の返報、覺期をせよ、と罵も訖らず、巨刀晃りと引拔きて、左の肩尖丁と砍る。砍られて駭く黑三は、こは何事ぞ、とばかりに、言問ふ遑あらざれば、腰なる刀を拔合して、受流し〳〵、こゝを先途と戰ひけり。阿夏は既に計りしことの、思ひの隨になるものから、刃に怕るゝ有繫は女子、こは淺ましや阽なや、と陽制しつゝ身を措かねて、次の一室に逃籠り、礑と閉たる蒸襖の、建附牙き間より、勝負いかに、と闕窺たり。然程に黑三は、已ことを得ず夜行太と、戰ふ大刀音いと烈しく、一上一下と術を竭せば、夜行太も亦痍を負ふて、此彼共に身の中より、流るゝ鮮血に些も怯まず、命限りの奮擊突戰、兩虎山谷に肉を爭ひ、毒龍深潭に珠を挑むも、かくやあらんと思ふばかりに、進て退くことのなければ、いよ〳〵負ふたる迭の深痍に、衰果つゝ相擊に、刺串きてぞ死でける。

第九回

駿馬流に臨て母子を全うす
美玉介と做て孤客を留む

天網恢々疎にして漏さず。扨も十々鬼夜行太は、阿夏が巧る言の葉に、說惑され不覺に愆りて、大く黑三を恨みしより、擊つ擊れつ共侶に、辱に命を隕せしは、是積惡の冥罰にて、かくありぬべき事ながら、膂力餘りあるものは、その智足らざる故にこそ。阿夏は輙く本意を遂て、やをら隔亮を推開て、出て兩箇の亡骸を、一間許こなたより、おそるおそる得と見て、呼吸絕たりと思ふにぞ、やうやく胸はおちゐても、まだ落著ぬ身の往方、定めかねつゝ面杖をつく〴〵とうち按じたる。かゝる折から珠之介は、けふも終日彼此と、獵くらしつゝ獲ものなく、只徒に手夾みし、弓と弦なる捷徑の、阻陰傳ひかへり來つ。黃昏ちかき門邊より、母御よ、只今かへりにき、と呼かけてはや緣頰に、うち登るとき夜行太と、黑三が血塗れたる、亡骸を見て、こはいかに、と駭騷ぎて思はずも、拿たる弓を落せしを、又遽しくとり揚て、四下を睨て立たるが、小暗き方に恙もあらで、をる母親を見出して、母御は其處にをはせし歟。おん身に傷はなかりしや、と問つゝ側に立よりて、喃母御、うたてや兩箇の爹々さまの、倶に刃に伏し給ひしは、故こそあらめ。いかにぞや、と屢問へばうち頷く、阿夏は形を更めて、やよ珠之介、平にゐよ。きのふまでもけふまでも、情由をそなたに告ざりければ、這人々を今もなほ、爹々公といへる鈍ましさよ、といはれて訝る珠之介、噫こゝろも得ね爹々さま達が、親にはあ

らで是何ぞや、と問へば阿夏は目をしばたゝきて、可愛や情由を知らざれば、その疑ひは理りなり。今こそ告ん聞給へ。這夜行太と黑三は、そなたの爲には親の仇、義理ある姉の怨敵ぞかし、と諦す言葉の緒を、なほ分かねし珠之介、膝を進めて喃母御、この人々はわが爲に、親と姉との讐ならば、おん身はなどてこの年來、身をし任してあちこちの、隔もあらで連添給ひし。こゝろ得がたく侍るかし、と詰れば阿夏は恥らひて、さればとよその事なれ。年には倍て理に聰き、わが兒に報るも今さらに、恥かゞやかしき所行ながら、この身ひとつを兩箇の讐に、任せしは只そなたの可愛さ。投殺されんとせし折に、とりも留めし玉の緒は、三歳の秋より七稔の、長き月日を深山樹の、日蔭に育し艱難苦勞は、言一朝に盡されんや。はや日は暮るゝに且立て、門の戸をよく鎖し給へ、といひつゝその身も立あがりて、板厨を開てとり卸す、菅薦ならで三布七布、蒲團ふたつを彼此と、兩箇の死骸にうち被せて、又拿出す行燈の、置所すら血を避て、焠兒引裂く片袖に、鼻を掩ふて地炕なる、埋火に徐と措翳し、手ばやく移す燈火の、光りは高く仰窻を、引忘れじ、と掛る手も、辛苦に瘦て細索に、戸走り輕き錢車、背門へも遶る珠之介は、前後の門の戸鎖固めて、舊の處に走り來つ、母に對ひて、やよ母御、いわれし縡の趣を、詳に聞まほし。とく〳〵示し給ひね、といふに阿夏はさもこそ、とそが儘傍に引つ

けて、こや珠之介よく聞給へ。吾儕は素より京師の歌妓、親の時まで世に知られたる、女歌舞伎の長にして、屋號を笠屋と呼れたり。爾るに京師も年あまた、兵亂に荒果しより、生活も亦衰へて、當歌舞妓の勾欄絶しかば、吾儕は舞と絲竹の、技もて細き朝夕の、煙を立てありける比、そなたの爹々公は神風の、伊勢の安濃なる商賈にて、末松屋木偶介となん呼れたる。吾儕を贔屓の客なりしが、遊興に身を蕩かして、債の爲に家を喪ひ、伊勢なる妻子親類に、疎果られ離別して、よるべなき身となり給ひつ、獨女を携て、吾儕の宿所にかゝり舟、はじめ客にてありし時、受たる恩義の淺くもあらねば、出て去ともいひ難て、共そが儘に人贅の、携子は則そなたの姉品、小夏と喚れて年は尚、七ツばかりでありし比、そなたを舉侍りにき。有有之程に木偶介ぬしは、生活のうへ疎にて、年來吾儕に養れ、左も右もせでありけるに、吾儕も子もちになりしより、世渡る技もおもふに任せず、よからぬ人の怨さへ、うけて口舌の起りしより、いかで他鄉に移らんと、思ひ起せし良人の隨意、そなたと小夏を携て、鎌倉を投て赴く道中、磨鍼といふ山中にて、兩箇の山豪に撞見つ、木偶介ぬしは欲殺され、小夏は深き谷底へ、礫に打れて亡たりき。かくて兩箇の山豪は、吾儕を挑みて耦配の妻にならずは稚兒を、屠らんといふ邪怪の難題、朽をしき事限りもなきを、この身ひとつであるならば、よしや八創せらる

るとも、良人と女兒の讐敵、しかも兩箇の山豪の、調戯ものとなるよしあらんや。こゝで節操し盡さずは、人の妻たる甲斐あらじ、と思ふものから靡じと、いひも難たる繁芸、ほだしとなるはそなたのうへのみ。恥を忍び身を捨て、そなたの命をとり留めなば、年長、人となる後に、怨を復すこともあらん、と深念をしつゝ、阿容々々と、兩箇の冤家に伴れて、この山中の隱宅に、晴ぬ陰陽を送りてぞ、はや七稔になりにたる。これらの情由をけふまでも、そなたにいまだ告ざりしは、穉心の淺はかなる、怒に乘して愸に、仇も得撃で禍を、惹起す事あらん歟、と阽みおもひし所以なりけり。爾るに罪障消滅の、時至りぬる祥なるべし、年來念じ奉る、觀世音菩薩の示現あり、その故は如此々々と、見し夢の事、毒酒の事、終には十々鬼夜行太を、謀りて黑三を疑せて、同士撃さして命を果させ、舊怨を復したる、縡の顚末箇樣々々と、首より尾まで、說示しつゝ又いふやう、初吾儕が計りしは、此彼刃を交るとき、一箇は必撃るべし。然らば一箇も痍を負ん。よしや恙のあらずとも、一人ゝ缺なば宿に居て、吾儕を戍るもの誰やはある。護る人なければ留守をしも、吾儕に任して擀了に出ん。その折そなたによしを告て、脫去んと思ひしに、鄙語にいふ按ずるより、產には易きけふの首尾、兩箇の冤家は自滅して、怨を越に雪めたり。そなたは京都に立かへりて、更に周防へ赴き給へ、今京師には親類なし。周

防州山口なる、大内家の御内人に、陶瀬十郎興房と聞えしは、そなたの叔父でをはするなり。彼人京師に在番して、四稔許在りし比、そなたの生れたりければ、襁褓の中より愛慈みて、何くれとなく東西あまた、年々贈り賜りにき。然る程に瀬十郎ぬしは、愆る事ありて、そなたが三歳の秋捌月に、主君の氣色を蒙りて、周防へ還され給ひしかども、年尚わかき身にしあれば、恙もなくて彼地にゐまさん。竊に諮て行給へ。血脈の叔父でをはせども、表向たる親族ならねば、竊に對面せられて後に、そなたの素生を報よかし。名告あふ日の徴には、といひつゝ右手を引よして、是見よ、そなたの手の甲に、眞一文字の青筋あり。又叔父君の手の甲にも、よく相似たる青筋あり。只これのみにあらずして、眉上にある黒子さへ、自然と肖たるは叔侄の、明徴では侍れども、黒子の似たるは外にもあらん。この手の甲の青筋こそ、類はあらぬ再會の、符契に侍れば、疑はで、必愛顧給はなん。かへす〲も忘るなよ。そなたの生れたりし比、賣卜翁が云々と、識して贈りし一期の命運、吉か凶歟得も讀ず、言のこゝろは知らねども、臍帶産毛共侶に、護身嚢の中にあり。今より手習學問を、心にかけて懋よかし。漢文を克讀習はば、賣卜翁の判斷も、定かに知るゝ時あらん、いひ措べきは是等の事のみ。名殘惜しや、とうち泣て、夜行太等が亡骸の、邊にありし血刀を、掻よせつ拿直して、吭に突立んとする程に、吁嗟

と騒ぐ珠之介は、透さずその手をとり禁めて、こは母御何事ぞ。おん身が自殺し給はば、吾身ひとつで、この山を何處へとて歟出らるべき。この餘もいふべき事多かり。且この刃を放ちてよ、と辭せわしく諫れば、阿夏はよゝと又泣て、扨は死ぬにも死れずやとて、刀を捨て伏沈めば、珠之介も堪難し、涙をしば〳〵押拭ひて、喃母御、けふまで知らで過したる、己が素生も、おん身の苦心も、定かに知られて今さらに、歎きの中なる歡びなり。親の讐とは思ひもかけず、親と呼びたる悔しさよ。さばれおん身の智計逞しく、此彼共に自滅を取らして、怨を雪め給ひしは、身を濆されぬになほ優れり。かゝれば翌は山を出て、共に周防へ赴くべし。然るを倏りて死し給はば、おん身の操は立もせん。吾儕は誰をちから草に、路覺束なきこの山を、出て遙遙周防なる、叔父公を諮る便著あらんや。命は物種なればこそ、七稔以來生延て、浮世に歸るけふにもあひにき。この義をおもひ給はずや、といふに阿夏は頭を擡て、適微妙くいはれたり。十にも滿たぬそなたの惺憁しさ、現陶ぬしの侄なりけり。然ば吾儕も存命て、そなたの旅宿の後見しつゝ、倶に山口へゆくべけれ。就て相譚ふこと多かり。夕饍果して後にこそ、といふに頷く珠之介も、等しく庖湢に退きて、迭に箸をとり膳に、夜食ながらの親椀と、子皿のみなる掛向ひ、饑たる腹を繕ひけり。當下阿夏は沈吟じつゝ、珠之介を見かへりて、年來吾儕

が察するに、こゝらは總て山多かり。山又山なる深山路の、彌が上に生茂りたる、茅萱藤蔓に前路をわかで、樵夫も入らぬ嶮岨に臨まば、必迷ふて一ト日には、人家ある地方に出がたからん。今倩と思惟るに、馬は舊來し路を忘れず、在ける里に還るものぞ、と京にて人に聞しことあり。幸ひなるかないぬる日に、彼人達が奪ふて來たりし、馬を深山の鄕導にして、出なば里に到りもせん。然るときはそなたと吾儕が、足を休る乘下に、行李も盤纏も皆附ん。是に優たる便利はあらじ。宵より秣をよく飼ふて、翌の准備をし給へかし。吾儕は馬頭觀音大士へ、參りてなほも久後の、利益を禱り奉らん。さるにても自滅せし、あの人々は讐ながら、七稔そなたを養れたる、庇蔭なしとはいひがたし。情は情仇は仇、切て兩箇の亡骸を、今宵瘞て首途せん。そなたもこの義を資よかし、といふを珠之介は聞あへず、母御の了簡寔によし。就中那馬は、俺們親子の爲にとて、佛の賜ひしものにやあらん、とく觀音へまゐり給へ。秣の事はこころ得たり、といふに阿夏は歡びて、背門に立出行水しつゝ、月を燭に程近き、彼觀音へぞ詣ける。その間に珠之介は、馬に飽まで秣を飼ふて、母の歸るを俟程に。阿夏は久しく祈念を凝して、背門のかたより歸り來つ。又夜行太と黑三が、亡骸を瘞ん、といへば珠之介含笑て、母御よ、さのみ急ぎ給ふな。期に至りてせんすべあり。吾儕は大く疲勞たり。暫時寢まりて後に

こそ、と辭ひて納戸に退きて、板厨の蒲團とり卸し、臥すよりはやくすや〳〵と、鼻聲幽に聞えけり。阿夏はこれを見かへりて、慳惚しけれども有繋は童、賴甲斐なく睡りにき。さればとてわが手ひとつにて、瘞ん事はいと難かり。翌の准備を急んとて、脚絆杖笠これ彼と、行裝を整へて、有とある錢帛を、ひとつに集めて革財襲に、歛めて馬に負したる。この餘衣裳も二袱に、包みて馬の鞍下に、結び附などする程に、十日の月は沒果し、夜は深て山靜なり。有而阿夏は臥房に入て、睡んとするに宿も寢られず。その曉がたに起出しが、飯はきのふの餘りあり、炊ぐに及ばず茶を沸らして、珠之介を呼覺し、親子等しく早飯を、たうべてこの日一日の、割籠の准備などしたる。阿夏は又彼亡骸を、擡出して瘞ん、といふを珠之介推禁めて、母御その義は心安かれ。吾儕疾より分別あり。益なき事に氣を揉んより、錢一文でも取遺しなば、一生涯の損なりかし。盤纏はいかにし給ひたる、と問るゝ阿夏 本意なげに、さればとよ金も錢も、革の財囊に遺なく容て、衣裳と共に馬に附たり。衣はともあれかくもあれ、盤纏は分ちて吾儕とそなたの、腰に著べきものなれども、重やかなれば山路の程を、馬に負してゆくべけれ。心にかゝるは亡骸を、あの儘措かば狼の、腹を肥さんうたてさよ。そなたの分別心もとなし。さりとも思ふよしある歟、と問へば珠之介は空嘯きて、さまで苦勞にしたまふな。は

や天は明たり出給へ、と促す聲と共侶に、森を離るゝ鳥の音に、阿夏は今さら猶豫も得ならず、草鞋穿締めをり立て、牽出ず馬にうち對ひて、畜生なりとも喜怒哀樂の、七情はありつらんに吾いふよしを聞わけよ。吾儕親子は七稔以來、不善人の隱宅に、わりなくも作れて、憂歲月を送りしに、その窮厄の稍解て、故鄉へ還る歡びあり。そなたもこゝに竊れ來て、きのふけふにはあなれども、さこそは舊の豢生を、慕しく思ふらめ。然るを今さら捨てゆかば、いかにして豺狼の、害を脫るゝよしあらんや。よりてそなたも共侶に、舊里へ返すべし。就て吾儕はこゝを出て、里に至らん路を知らず。この鄉導を賴むのみ。俺們親子をうち乘して、はやく舊來し路に出よ。然るときはそなたの主を、索ねて其處へ返すべし。よしや故主の知れずとも、愛する者に賣與ん。聞わきたる歟、と叮寧に、宛人にものいふごとく、思ふ限りを說示せば、馬は、その意を知りたりけん、聞るが如く思ふに似て、霎時頭を垂てをり、忽地に身振して、一ト聲高く嘶くにぞ、阿夏ば見つゝ歡びて、原來いふよしの聞えしならん。尋常の旅路にて乘る馬ならば鑣奴の、なくて愜はぬ事なれども、這馬は俺們を、鄉導の爲なれば、珠之介先乘り給へ。吾儕も相鞍にうち騎て、誘初より足を休ん。とく〳〵と急せば、珠之介は有理と應て、腰なる短劍を背に遶し、鐙に諸手を掖けながら、鞍高ければ乘りがたきを、阿夏がやをら後より、抱

き揚れば甦乗りつ。阿夏も裳を壺折て、そが尻鞍にうち乗りけり。却說件の白馬は、阿夏親子をうち乘して、ゆくこといまだいくばくならず。後方猛に物の音の、燁燚として恒ならぬを、阿夏ははやく聞つけて、彼は奈、と見かへれば、はや黒煙天に滿て、今までありける隱宅より、火の燃發て燒るなり。これにぞいよ〳〵驚て、失ても惜かる宿ならねど、立出るとき忙しくて、爐の火を滅さで燒捨たる、そが上に物の落被りて、燃移りしにあらんずらん、といひつゝも又見かへるを鈍やと笑ふ珠之介は、些も騷ぐ氣色なく、母御よ吾儕が分別あり、と嚮にいひしはあの火の事なり。柱礎堅固なる、宿所をそが儘住捨て、出てゆきなば今宵より、狐狸の棲とならん。爾らずは復山賊の、隱宅にせられんのみ。市に近くは沽却して、金に易べき家なるを、這深山ではその事得ならず。爾りとて遺し措て、人の得となさんは娼かり。よりて吾儕が出るとき、彼此に火を投たれば、程しもあらず燒るなり。有如之者仇の亡骸も、共に燒れて灰にならん。大約人を葬るに、土葬もあり火葬もあり、又水葬もあるよしを、豫て彼人々の、夜話に聞たるを、はやくも思ひ出しかば、扨火葬にはしたるなり。石のみ多かる山路を穿て、土葬に骨を折んより、輒き所爲に侍らずや、といふに阿夏は又驚きて、原來そなたの所爲なりし歟、尚九歲なる童の智には、怜悧さ過て成長らん、後こそ心もとなけれ。さても〳〵、とば

かりに、呟きつ嘆息して、又いふよしもなかりけり。然程に、馬は羊腸たる深山路を、足掻徐に乘せてゆく。頃は初の冬なれば、谷の丹楓の濃薄き、宛錦を掛たる如し。阿夏は遥に馬上より、うち眺め見かへりて、今より十稔前つ比、綠巽亭のもみぢ見に、思ひがけなく陶ぬしと、再あふたるその宵の首尾の、末は得遂ず西東、別々て散る花の、洛も外になりぬるを、けふ立かへる草枕、旅の宿りを何處ぞと、定めなき身の近江路に、あはで過して來し方を、思へば夢の世なりき、とかこち歎きをいへばえに、岩が根傳ひ岨傳ひ、危かるべき處では、馬乘放つ母も子も、辛して辿る路もあり。或は疎林枝をまじえて、馬上の頭髻を取らんとすれば、鞍に伏つゝゆく路あり。谷深くして峯高く、苔滑らかに石多かれば、戰々として馬蹄の、跌んことを陷み、流遠く音のみ聞えて、水を掬ぶによしなき折は、渴して梅林をおもふ遑もあらず。既にこの日の亭午比、馬を駐めて路傍なる、枯草を食しめて、親子は土坐て割籠を開くに、一チ碗の湯も誰にか乞ん。疏飯の噎ぶを忍べども、有繋に猛獸の害怕なきにしもあらねば、久しうは得憩はで、馬牽よして又乘りつ。前面幽に見わたせば、聳然として雲を吐く、那山は是何處の高峯ぞ。颯々として風に調る琴曲は、是這山の松なりけり。嚶々と鳴く鳥の聲は、友を求めて窮谷より、喬木に遷るにやあらん。蔓延と懸る枯藤は、猿に引れて蜘網の、斷離たるにも似

たりけり。目に見るもの耳に聞くもの、心寂しくも悲しさに、阿夏は只顧觀音薩埵の、御名を唱へつ背には、冷たき汗を流せども、珠之介は物をも思はず、馬上ながら睡りては、滾落んとせし事屢なり。冬の日なれば短くて、下晡になりたれども、いまだ人家ある處に到らず。と見れば前路に溪川あり。その廣凡五六間、流速く音凄じきは、水中に巖あり、碎けて左右へ落るなり。橋もやある、と伸上りて、四下を遙に見わたせども、橋はさらなり船もなし。馬は川邊に駐りて、主共侶に眺めてをり。阿夏はこれに駭き患ひて、こはいかにせん珠之介、一ト日の山路を來し甲斐もなく、この速河に留られて、今宵をこゝに立曉さば、猛き獸の菑害あらん。然ばとて淺瀬を知らねば、騎入るべうもあらずかし、といふを珠之介は聞あへず、おもふに流の速くとも、馬の三頭を越すべくもあらず。一畝あまり乘戻して、一ト鞭拍なば輒く渡さん。おん身は吾儕と立替りて、前鞍に乘給へ。いで〳〵、といひつゝも馬より閃りと降立て、蒐來し方へ牽戻せば、阿夏はなほも馬上にあり。馬の項をうち敲きて、やよや白、聞ねかし。そなた今あの速河を、ともかくもして渡さねば、人家あるかたに到りがたかり。然るときはそなたも亦、故主にやは遭るべき。勉よかし、といふ間に、珠之介は路傍に、出たる石を足代にして、ふたゝび母の尻鞍に、うち乘つ鞭を揚て、馬の尻を礙と拍つ。拍れて馬は驀直に、走り出しつ

件の川を、只一ト反に越んとせしが、前面の岸まで屆かずして、間は旣に僅なる、水中に出たる石に、前足を折掛て、忽地𡚒と伏す勢ひに、阿夏はさらなり珠之介も、共侶に反撥されて、鞍を離れて前面の岸に、筋斗を拍てぞ落たりける。しかはあれども母も子も、幸ひにして身を傷らず。齊一吐嗟と叫びつゝ、起あがりて見かへれば、憐むべし件の馬は、推流されて亡にけん、影もとゞめずなりにけり。登時阿夏は愀然と、淚さしぐみ嘆息して、俺們親子は辛して、この速川を渡したる、歡びに就て哀しきは、資けし馬のこなたには至らで、推流されたる不便さよ、といへば珠之介も嗟嘆して、里に到りて彼奴を售らば、よき直には估とならんを、いまだ質にも得還ずして、流されたるは殘念なり、と吃きつゝ又驚として、悲しや、母御よいかにせん。鬻におん身が路用の金も、衣裳も總て那馬に、括著給ひしかば、馬共侶に推流されて、手提編笠になりにたり、といはれて心つく母も、困じ果たる面色は、水中にたつ石よりも、蒼くなるのみ術もなし。倘やと思へば珠之介と、倶に川邊に立在て、視る目の限り索れども、馬さへあらずなりぬれば、いかにして革財襲の、浮て水中に漂ぶべき。悔みて返るよしのなければ、只俺們に授らぬ、貨とおもひ諦めよ。親子の命恙なければ、乞食をしてもゆかざらんや。物皆失ひたりけれども、小費の爲吾儕が腰に、著たる金は二分許、錢も四五百あるなれば、京師ま

での路費は足らん。さるにても那駛馬は、わがいふよしを聞とりてや、往方も知らぬ深山路の、鄕導をしてこゝまで來つ。その身は水に陷りても、吾儕とそなたを反越させしを、思へば奇しき事ならずや。倘那馬は觀音薩陲の、假に貌を顯して、助け給ひしにあらざる歟。爾らんには金銀衣裳を、失ふたりとて惜むに足らず。只御佛の方便に、任しまつらば這艱難を、昔語にする日もあらん。誘ゆくべし、といそがせば、珠之介は舌うち鳴して、後になり先にたち、暮ぬ間にと走れども、いまだ里には辿りも著かず、日は沒て月さし昇り、天よく晴て風もなし。前路は大かた蕃山にて、處々に刈果し、山田あれば住む人も、あらんと思ふに歩も進みて、又ゆくと行程に、一ト叢繁き冬樹の邊に、燈火の光洩りて、閃心と見えしかば、親子は轍魚の江に臨み、孤孫の林にあへるがごとく、こゝろ歡び力づきて、頻に走りつ、走り著て、見れば果して白屋なり。軈て門の戸うち敲きて、行くらしたる同行二人ゝに、宿貸給へ、と呼門けり。當下裡面より訛聲立て、今宵はこゝに緊要の、一議あれば村の衆の、此彼となく聚合れて、今商量の最中なり。右冗紛たる折なれば、お宿は愜ひ候はず、といとも強面く答るを、阿夏はなほも推返して、宣ふよしは然ることながら、吾等は路に迷ひしもの、知らぬ深山にわけ入て、賊に赶れつ、辛して、脫れてこゝまで來つるなり。簀子の下でも、柴菰屋でも、臥房は厭ひ侍ら

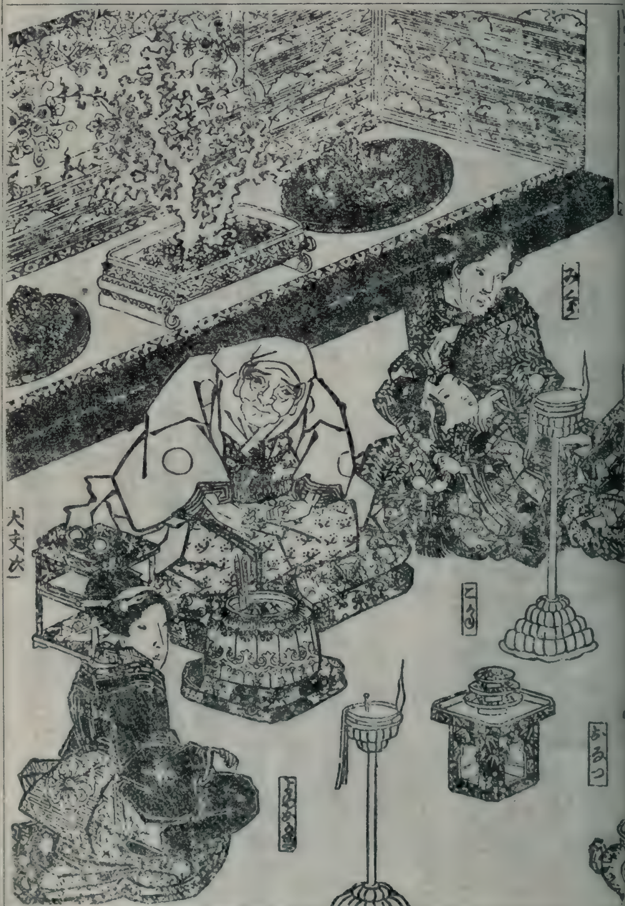
ずかし。一ト宵留め給ひね、と珠之介共侶に、幾遍となく呼かけて、立去べうもあらざれば、裡面には老女の聲として、聞けば女子と童とおもほゆ。路に迷ひつ、山豪に、追れたる人々ならば、さこそ難義にあらんずらめ。甲夜には臥房のあらずとも、露宿にはなほ優ことあらん。飯もなけれど這冗紛で、炊ぎて進らする暇はなし。かくても好といはれなば、宿していなすも世は情、旅は伴侶兩箇の衆、いひつるよしを聞れしならん。愛々しからぬあるじ態を、得心で泊り給はば、誘且裡面に入り給へ、といひつゝ軈て門の戸を、開るを遲し、と阿夏等は、うち微笑つゝ會尺して、そは歡しき事になん。許し給へ、と遽しく、草鞋解捨珠之介と、倶に引れて母屋なる、簀子に躪登りたる。這時地炕の邊には、家あるじを首として、本郁の故老五六名、甲乙團坐したりしが、齊一阿夏を見かへりて、女中よ息子共侶に、地炕の緣へうち寄て、足踏伸して溫まり給へ。抑お身等は何處より、何地へ赴き給ふぞ、と問ふにお夏は膝を進めて、吾儕は京師のものに侍り。近屬良人の身まかりて、便著なければ鎌倉なる、由緣の人を心當に、獨子携て、這回が初旅、爾るに今朝しも路に迷ふて、得しらぬ山に入りしより、徒に日を消したる、折から一箇の山豪に、撞見つ痛く赶れて、行李も盤纏も皆うち捨て、脱れてやうやく這里へ、迦り著侍りにき、と實事しやかにいひ瞞るを、衆皆聞て嗟嘆しつ、そは痛ましき事なり

かし。息子を携たる女中の初旅、其首を見入て悪棍が、剪徑せんとて跟たるならん。しかはあれども運つよく、命めでたく逃果せしは、切てもの事になん。やゝ喃爐邊へ寄給へ。山茶は鑵子に沸りたり。聊も介意せで、手づから汲て啜り給へ、といへば阿夏は珠之介を、見かへりながら進みよりて、あるじ夫婦にうち對ひて、おん事多かる團坐の中へ、今宵のお宿は一刻千金、こよなき情で侍るめり。就てこの地は近江の中歟、何と喚るゝ村やらん。願ふはおん身の姓名も、具に聞まく欲しけれ、といふにあるじは頷きて、問るゝ如くこのわたりは、美濃近江の封彊にて、嶺を越て東に到れば、美濃州池田郡、又信濃にも鄰りたる。こゝは近江の坂田郡、久禮畑莊、三池邨なり、員ならねども某は、名を宿六と喚れたる、村に數代の貧農にて、妻は名を阿可加といへり。おん身は京師の人ならば、這田舍備たる爲體を、傍痛く思はれん。旅宿は殊さら憂ものなるに、尚總角なる息子を倶に、前路遠かる女人の道中、うたてや剪徑に赶威されて、行李も路費も遺りなく、喪ひ給ひしよしなれば、心の中さへ推量られて、痛ましくこそ思ふなれ。大凡人の愛情は、富たる人でも異なることなし。こはいはでものことながら、この地に福富大夫次と喚れ給ふ、いと優富なる長者あり。福富三池、落合の郷、今畑入谷なンどいふ、合保十个村を差配し給ふ、大莊屋でをはするが、山田火田いへばさらなり、家には幾十

名の奴婢を使ふて、織出す近江布を、京鎌倉へ賣遞與し、又山野には牧ありて、牛馬許多を豢殖して、年々に賣出し給へば、富が上にも富榮て、足ざるものはなけれども、そが孫女の弄翫に、取らし給ひし五色の玉の、いぬる日に喪たりとて、索求めて今なほ休まず。件の玉は五顆あり。その色各々同じからで、玉の裡には人物宮殿、山水花鳥の種々なる、鏤れるが如く透徹りて、定かに見ゆるものになん。然れば幼穉き孫女の、愛翫びて霎時も放さず、眞紅の組緒に串きて、護身嚢と共侶に、腰に著させ給ひしに、盜れたる歟遺せし歟、往方も知らずなりにたり。この故に彼娘さまは、件の玉をいと惜みて、人の諭解も聽給はず、夜に日にむつかり給ふになん、大父大母の二柱は、愛孫女の事にはあり、左も右もして慰んと、思ひ給へど彼玉は、世に又得がたき貨にて、百金をもて買んといふとも、輙くいで來る者にあらねば、いぬる日より部して、失たる玉を索求め、或は卜筮加持祈禱、みな術を盡し給へども、けふまでもその便りを得ず、討めかね困じ果て、玉は黄金（孫女の名なり）が遺せしを、福富三池の郷人などが、拐取り慾に惑ひて、隱して出さぬ事もや、と疑るゝとか聞えたり。この故に今晩は、甲乙こゝにうち聚合て、僉議を凝らす最中にこそ、と辭せはしく說示すを、阿夏は聞つゝ思ふやう、無慙やいぬる日十々鬼の叟が、竊もて來てそが儘に、吾儕に預けし五色の玉の、主を定かに今知れり。件の

玉は愆て、うち摧くこともあらん歟、と思へばはやくその折に、膚神符の嚢の中に、斂て衣領に掛てをれば、幸ひにして喪はず、今これをもて主に還さば、求めずとも盤纏は獲易し。情は人の爲ならず、と尋思をしつゝ聞果て、宿六夫婦に對ひていふやう、只今のおん物語に、思ひ合する事さへあるに、吾儕も五色の玉をもてり。件の主の徵め給ふと、異なることのなきものならば、進らせんとこそ思ふなれ、といふに歡ぶ宿六阿可加、その餘のものも勢ひ溯て、そは耳よりの喜悦なり。且その玉を見せ給へ、といへば阿夏は頭を掉て、吾儕が玉も江湖上に、絕て得がたきものなるに、輕々しくやは人に見せん。先そのぬしに對面して、いはるゝよしの吾儕が玉に、符節を合するごとくならば、そがうへにて左も右もせん。とくこのよしを傳へてよ、といふに衆皆頷きて、いはるれば現然もあるべし。おん身が玉にて緈理らば、疑れたる俺們が、明證も其所に立べからん。時分過たる夕饌の、さぞ欲けくはあろけれど、飯櫃の底なる冷糧飯を、こゝでこゝろ得たり。宿六案内をし給へかし、といふをあるじは聞あへず、そは宣ふな、まゐらせたらんより、福富殿へゆき給はば、美饍珍味で管待し給はん。和子も且く辛防して、彼處で夜食をたうべ給ひね。爾らんには夜の深ぬ間に、誘給へ案内をせん。とかくに女子は女子同志、阿可加も共にゆくこそよけれ。衆叟達留守爲兼に、かへり來るまで俟給へ。可加よ、挑





灯出せし歟、といはせも果ず、こな人は、晝より明き這月夜に、挑灯引提て何にせん。客人達も金剛を、といひつゝ簀子の下搔探りて、とり出す草履二雙を、直すを阿夏は推退けて、こは憚りで侍るかし。珠よ、お禮を申さずや、といはれて戴く珠之介、玉より風の吹かはる、峰の颷それならで、落ればおなじ言の葉も、みな身勝手の人ごころ、然らば吉左右俟んず、と目送る衆人、出てゆく、あるじ夫婦も相槌の、槌で帚く庭、門口詛、阿夏親子は諜々しさに、應するのみ、鐘冴る、五更の比に立出て、富には人のよるの道、名も慕しき福富の、宿所を投て急ぎけり。

第十回

關帝廟に少年義を結ぶ
福富村に幼女別を惜む

却說阿夏珠之介は、宿六夫婦を先に立して、ゆくこと凡十町許、福富村に來にければ、いと苛めしき衡門の、左右は幾十間なる、土塀を折遶らしたる大莊宅、前面に見えたり。登時阿可加は阿夏等に、日今伴ひまゐらする、福富ぬしは那首にこそ、といふ間にはや近づきつ。外面より又見るに、這土塀の那方には杪高く古たる松杉の、幾株か叢立たる、這方に塹を穿繞して、

橋には、長くて廣やかなる、石二枚を渡したり。引るゝ隨に母も子も、角門より進み入るに、母屋まではなほ遙にて、一ト町にあまりつべし。建つゞけたる土庫は、月影に白壁光りて、字母號も定かに讀まる。山腹なる村落にも、かゝる豪家のありけるよ、と今さらに驚き思ふ、阿夏は珠之介を引著て、玄關の傍なる、竹垣の下まで來にけり。登時宿六は、阿可加を急に呼とゞめて、そなたははやく後堂へゆきて、綷云々と報まうしね。吾儕はこゝで客人達と、倶に回答を俟んず、といふに阿可加は頷きて、そはこゝろ得て侍るかし、且く俟せ給ひね、と阿夏親子に會釋をしつゝ、庖湢口にぞ進み入る。然程に阿夏等は、阿可加を俟に良ありて、それにはあらぬ兩三箇の、老僕小厮等うちまじりて、玄關の側なる、戸を推開つゝ紙燭を抗て、宿六叟は其首にやゐ給ふ。旅の女中をこなたへ、といふに宿六誘々と、阿夏親子を急して、倶に老僕にうち對ひて、迭の口誼、言訖れば、老僕は阿夏珠之介を、引て客房に赴くにぞ、宿六も從ふて、阿夏等が次にをり、こゝには座席の上下に、菊燈臺を置れしかば、明きこと晝に似たり。老僕は、既に退きて立代る小厮等が、茶をもて來つ、乾菓子もて來て、阿夏珠之介に薦めけり。茶碗は對の錦手にて、菓子皿も亦鄙俗たる物にはあらず。珠之介は饑に堪ねば、件の皿を引よして、いくらともなく抓み啖ふを、阿夏はしば〳〵尻目にかけて、意をもて禁れどもその甲斐

なし。左右する程に、阿可加は奥より出て來つ、宿六にうち對ひて、件の一議を奥ざまに、云云と報まうせしに、家公もはやく聞給ひて、歡び給ふこと大かたならず。今對面してその玉を、見まくほし、と宣ひき、といふ間にあるじ大夫次は、うち吃きつゝ客房に、出て上座に推處り、宿六夫婦にうち對ひて、旅人を案内の實義を勞ひ、次に阿夏等にうち對ひて、こは初ての見參にこそ候へ。老拙は當所の莊役、福富大夫次と呼るゝもの、大かたは宿六夫婦の物がたりにて聞れしならん。女中は都人でをはするよし、倘總角なる子息を倶したる、旅宿の艱苦さぞあらん。扨老拙が最愛の、孫女の候が、今玆はやうやく七歳にて、名をば黄金と喚做たる、渠が秘藏の五色の玉あり。いぬる日それを失ひて、いと惜むこと限りもあらで、夜も日もうち泣くのみなれば、蟲もや生らん、病もやせん、と婆々共侶に胸を苦しめ、人を替、術をかえて、賺もしつ索もしたれど、玉の往方を知るによしなし。爾るに女中も五色の玉の、相似たるを所持し給ふよし、宿六の内義に聞にき。その玉果してわが孫女の、愛するものと似たらんには、價はいかばかりにても厭しからず。携給はば見まほしけれ、といふに阿夏は膝を進めて、その事は宿のあるじに、傳聞て侍るから、誘引れつゝ夜を犯して、見參に入り侍り。妾が玉はこれで侍り、と應て衣領に掛たりし、護身嚢の紐解抜きて、出して見する五顆の玉を、大夫次やをら手

に受て、懐紙皮の間より、取出す眼鏡の紐を、左右の耳に糾被けて、引よする燭臺の、火光に翳して彼此と、見つゝ思はず膝うち鳴して、奇なる哉、吁妙なるかな。這玉は是黄金が玉と、組緒の色まで些も違はず。抑おん身は這玉を、何處より得給ひたる。藏弆久しき事にはあらじ、と詰れど阿夏は阿容たる色なく、疑ひ給ふは理りなり。その玉はわが親より、相傳のものにもあらず、又購取たるものにもあらず、けふ來る途にて拾ひしなり。先や具に告まつらん。昨夕の宿を今朝たちて、ゆくてに多き岐道に、迷ふて山路に口を鎖し、剰山豪に赶れたる、路次の危難に其處ともわかず、脱れてこなたへ來る程に、枯殘りたる芒花の下に、花の木實歟、草蓏歟、いと美しきもののありしを、心ともなく見出して、立よりつ取あげて、視れば則その玉なり。山豪に赶れしとき、行李も盤纏も喪ふたるに、これを售なば些ばかりの、盤纏にならん、と思ひしかば、膚神符なる嚢の中に、斂めて今宵の宿りに著にき。有右而あるじの不問自語に、おん身の噂、玉の事、そを索ねわび給ふといふ、緣由さへ定かに聞て、妾が拾ひしその玉の、ぬしなるべしと思ひしかども、食言多き人ごころ、世には相似てその物に、あらざるも亦尠からぬを、人傳にては返しがたかり。先やその主に對面して、いはるゝ趣違はずは、その折に返しまゐらせん、と思ひし事の空しからで、はや疑ひの釋け侍り。然りとて報ひを望む

にあらず、舊へ返すは本意なるに、受納められんこそ、妾も歡び侍るなれ、といひ迷したる漫語口狀、とは知るよしもなき大夫次は、聞つゝいよ〳〵感じて已まず。現律義なる女中ぞかし。人の遺せし物と知りつゝ、突倒しても搔取るが、今の世には多かるに、既に盤纏を喪ひながら、貪婪の心なかりしは、實に見あげし賢女なり。玉はこの儘受納して、かばかりの報はしつべし。宿六阿可加も親切に、女中の案内せられたる、歡びは翌いはん。所要あらば還り給へ。先はや玉を孫に見せて、婆々にも媳婦にも歡ばせん。女中は子息共侶に、翌も逗留し給へかし、といひつゝ掌うち鳴らして、婢妾們は何してをるぞ、はやく夕餼をまゐらせよ。風爐の准備はいかにぞや。且く許し給ひね、と阿夏親子を慰めて、宿六夫婦を勞ひたる、歡び氣色にあらはれて、玉を抱けど罪もなき、老人氣質せわしくて、立て後堂にぞ退りける。當下宿六阿可加等は、阿夏が玉を返したる、歡びを述、別を告て、三池の宿所へ還る程に、奴婢等は餼をもて來つゝ、阿夏珠之介に夜食を薦め、中酒の盃 抓殺、田舍に似げなく美味多かり。殊に饑たる珠之介は、鳧肉の羹、鹽鰤の炙ものの、露も餘さず、骨さへ舐りて、飯は數椀を累ねても、いまだ足らざる面色なるを、阿夏はさらなり、給侍の奴婢も、傍痛く思ひけり。扨夕餼の果しかば、一箇の婢妾が案内をしつゝ、阿夏親子を誘ひ立て、浴室に准備の風爐に浴れて、湯を增し垢を吹き

などしたる、管待いよ〳〵叮嚀なり。既に沐浴の果し比、あるじ大夫次は、又奥より立出て、阿夏等にいふやう、嚮に返し給はりたる、玉を黄金に取らせしに、今まで泣たる愁の眉は、忽地歡びの笑貌となりて、幾遍となくうち戴き、愛玩ほと〳〵餘念なく、且くも手を放さず。只是おん身の賜なれば、老妻媳婦もおん見に被りて、この歡びを述んと欲す。夜ははや亥中に近かるに、長途の疲勞もあるべきを、心つきなき所行に似たれど、翌といはんは俟わびし。後堂にて薄茶を進らせん。子息共侶誘給へ、といふに阿夏は推辭難て、思ひがけなき今宵のおん宿、酒食も風爐も叮嚀なる、おん欵待に物足りて、旅路の憂苦を慰め侍りき。然るを又奥さま達の、おん目を給はるよしなるを、いかでか辭ひ侍るべき、と回答をすれば大夫次は、含笑ながら頷きて、誘ひ立て奥まりたる、褊室に伴ひけり。こゝは妻子の出居の室にて、大夫次が妻屯倉、媳婦の阿鍵、孫女の、黄金も遺なく聚合てをり。登時大夫次は、上座に進み坐して、妻と媳婦とに阿夏親子を、引あはしつゝ云々と、いふに屯倉も媳阿鍵も、膝推向けて慇懃に、初對面の口誼を演、喪たる玉をゆくりなく、返されたりし歡びの、蘩き言葉も一樹の蔭、他生の縁と緣頰の、障子を背に謙退る、阿夏は止宿の管待の、歡びを述などしたる、辭の間にこの席なる、人々を熟視るに、屯倉は齢五十許、痩肉にして辭寡し。阿鍵は既に二十の上を、五ッ六ッに

やなるべからん。容止は尋常なるに、そが女兒の黃金のみ、肌膚潔らかにして玉のごとく、眉目容貌の杜に優れる、卵の中なる春の唐鳥、尙二葉なる花もみぢの、後の色香を思ひやられて、人の子ながら愛々しさに、ものいひかけて慰れば、屯倉阿鍵も珠之介が泛々ならぬ標致を譽めて、その身の例に招き近づけ、名を問ひ、又年歲を問て、壺なる菓子を取らすれば、黃金も亦珠之介を、愛歡べる面色にて、岩齡架の下に措れし、繪卷の箱をうち披きて、珠之介に見せしかば、珠之介ははやくも狎て、黃金と俱に燈燭の、下によりつゝ遊びけり。登時大夫次は、又阿夏にうち對ひて、寔に不思議の緣しにて、人のうへにも誠ある、おん身の志を感ずるのあまり、件の玉の來歷を、詳にいはん聞給へ。今よりは十稔になりぬ。永正六年の夏の比、老拙一日草野に出しに、蛇夥多蟠りて、高く卷たる栲繩に、相似たるを見し事あり。是なん世にいふ蛇甑にて、甑の中には寶貨あり。倘これを得たらんものは、富榮ずといふことなし、と豫て聞たるよしもあれば、快らぬものにしあれど、欲の爲には些も厭はず。單衣の袖卷揚て、羣蛇の中へ手をさし入れ、搔撈る程に果して物あり。心歡びとり出して、つら〳〵見れば件の玉なり。初は五顆連りて、早には放がたかりしを、そが儘宿所にもて還りて、妻に示しなどする程に、奇なるかな件の玉は、おのづからに離れしが、紐徹の穴いで來にけり。軈て眞紅の緖に串

きて、人手にかけず祕藏しつ。是よりの後、吾家の、生業年々に幸ありて、耕作交易、牧馬の利まで、五倍十倍の贏餘あり。かくて三四年を送る程に、媳の阿鍵は有身て、はや臨月の過れども、分娩すべき氣色なければ、其身はさらなり、老拙夫婦も、安き心は奈加新田なる、醫師に見せて藥を徵め、加持も祈禱もせざるにあらねど、十二个月に及ぶまで、いまだ產の紐を得解かず。有如之程に行僧を、一ト宵宿せし事ありき。殊勝の老僧なりければ、廼媳婦の事を告て、安產の祈禱を請ひしに、件の聖うち聞て、そはいと易き藥方あり。竊に蛇脫を、煎じて媳御に飲し給はば、安產疑ひなきものなり。祈念祈禱は效なし、と教て次の日出てゆきにき。現然る事のありもやせん、と思ひにければとかくして、求得たりし蛇の衣を、阿鍵には告ずして、煎じてこれを飲せしに、その夜猛に產の氣つきて、安らに產しは女の子にて、則これなる黃金なり。母さへ子さへ健に、肥立て恙あることなし。こは初孫の事にしあれば、婆々共侶にこの身の歡び、愛慈みつ、年も稍、二ッ三ッになりし比、寵愛のあまり件の玉を、とり出してもたせしに、黃金は大く愛歡びて、餘の玩器は手にだも觸れず、唯玉をのみ身に引つけしを、取らんとすればうち泣きたる、穉兒に勝よしのなければ、護身囊と共侶に、年來腰に著さしたるに、喪ひしときは泣く孫より、泣立られし老拙が、愛惜の心は彌まして、憂苦に得堪ずあり

けるに、玉はおん身に拾れて、はからず今宵返されし、歡びを亦何に譬ん。こは天縁といはまくのみ。思ふに玉は竊みしものゝ、穿鑿大かたならざるに、怕れて途に捨たる歟。然ずは祈禱の利益にて、その偸兒奴が遺せしならん。爾りともおん身の如き、寡慾の婦人にあらざりせば、誰かもて來て主に返さん。感ずるになほ餘りある、誠心こそいと有がたけれ。かくいへば何とやらん。身のうへ話に似たれども、老拙一箇の孩兒あり、廼娘婦の良人にて、福富大夫五と呼れたる、今茲は二十七歲になれり。今戰國の習俗にて、耕すものも鋒を舞し、商賈も太刀を帶たり。かゝればわが兒大夫五も、唯武士をのみ羨て、生業を旨とせず、をさ／＼武藝を嗜しかば、老拙緊しく意見を加えて、教訓數回に及びしかども、些も用る氣色なければ、一旦の怒に乘して勘當して見かへらず。こは懲艾の爲なるを、子は思はずや娘阿鍵に、休書を遺し措て、往方も知せずなりしより、既に三稔を歷たりけり。母の愁嘆、阿鍵が悲泣、さこそと思へば老拙も、後悔せざるにあらねども、孩兒が所在の知れざれば、召返さんとするに由なし。然ども娘婦は貞女にて、老たる舅姑に、仕へて黃金を護育ん、と誓ふて再醮を肯はず。只大夫五がかへり來るを、いつ／＼までも俟んといへり。抑わが兒大夫五が、農商牧馬の活業を、嫌ふて武士にならまくせしは、素よりその所以なきにあらず。老拙が大父の時まで、世々鎌倉なる

管領家に由緒ありて、扇谷殿に仕へしを、多病によりて退隱し、この地は先祖の舊里なれば、故の農家になりたるなり。因て彼御内にも、又當國の守の家臣にも、ふるき親族のありけるを、或は路遠く、或は世を隔しにぞ、今は迭に疎濶になりぬ。又その家の絶たるもありけり。そが中に、この兩三年、わが家に寓居る鷲津爪作、日高景市といふ、兩箇の總角あり。渠等が親は當國の守、佐々木氏高頼朝臣の家臣にて、老拙が爲には母黨の、親類で候ひしを、倶に愆る事ありて、身の暇を給はりつ。浮流の中に時疫にて、うちも續きて身まかりにき。そが母も皆世を早くせし、孤兒曹なるをもて、彼も此も養ひとりて、去歳より手習讀書の爲、本郁なる黄檗山、傳燈寺へ遣すなり。子息に年も等しかるべき、總角等で候へば、遊戯敵によきものならん。さばれ渠等はいぎたなくて、はや寢まりたりとかいへば、翌對面し給へかし。老拙不才不能なるに、幸ひにして衣食住に、乏しくもあらぬ身なれども、患る所は孩兒が事のみ。察し給へ、といひかけて、思はず嘆息したりしを、側聞する妻屯倉と、媳の阿鍵は堪かねて、涙のやる瀬なかりけり。畢竟あるじ大夫次が、これらのよしを說出して、又甚麼なる話說かある。抑この囘はなほ長やかにて、數楮を累るにあらざれば、輙く當局を果しがたかり。よりて題目と綉像に、その大かたを見すのみ。なほ輯を續ぎ卷を易て、第二輯十一囘に、解分るを俟て聽ねかし。

美少年錄第二輯總論螟蛉詞

博覽羣書尋故典。旁搜野史錄新聞。講談盡合三朝格。褒貶咸遵律令文。按捺姦邪尊有道。讃揚忠孝削讒人。零裁錦繡篇篇好。碎剪氷霜字字眞。春夏秋冬排景致。風花雪月按時新。丁當擊玉敲金字。剔透蟠龍綉鳳紋。壯似秋風吹戰壘。淸如夜雨上松林。助添豪傑英雄氣。感激忠臣烈士心。美玉良金思巧匠。高山流水待知音。當場告稟知音者。忙裏偸閒試一聽。　自從神代鴻蒙判。生民一治還一亂。政子治世天地陂。等持累葉綱常變。兩倫烏兎往來忙。五行正閏循環換。忠良姦佞本無嘗。上帝分明有成算。

文政己丑年。小滿前二日。杜鵑初鳴朝。書于神田著作堂。

曲亭老人

附ていふ、大約草紙物語の剰入画を看て、その好歹をいふ者は、画の巧拙をのみ論じて、本文の意に違ると、違ざるとを思はぬも多かり。縦その画は巧なりとも、蛇足の爲に画れしは、唯是作者の面目を、損ざるものあること稀なり。かゝる故に、予は画を學ざりけれども、とし來著す物の本は、必手づから画稿をものして、その趣を画者に示して、もて画せずといふものなし、然けれども画工の意をもて、そを潤色する處、動もすれば本文の意に、違ふ事なきにあらず。譬ば這書の前輯なる、掲針山の画中にも、叉その次なる巻の画にも、いかにぞやかくはあらじ、と思ふ画像のありけるを、よく觀る人は知りぬべし。纔一巻に三頁なりける、剰入画すらかくの如し。況本文に至ては、誤脱を正し漏せるも多かり。總て印本は人に誂へて、書せ画するものなるに、叉板木師の刊遺し、鐫愆るも少からず。然るを書肆にいそがれて、挍じも果ずおし出して、後に悔しく思ふのみ。おのが綴りし巻々は、心に熟し目になれて、讀といへども傍訓などは、わきて誤脱を看遺すことあり。さば

れ燈下の戲墨なり、しうねく脊戀すべくもあらねど、しかすがに是も亦、書籍のかたちせしものなるを、みづからはやくかいやり捨て、苦心を空にせんはいと惜し。よりて前輯の巻毎に、誤寫あるを補正して、この下、第六葉の左なる、あまれる紙に記すになん。

上にいへる、前輯に誤寫あり。そを按じ遺せるを、抄錄するもの左の如し。
第一の巻二十六丁の左に水泊水虎云々とある、水泊は河伯を寫し誤るなり○第二の巻四丁の右に、俳佪とあるも誤寫なり。當徘徊に作るべし○第三の巻第十三丁の右三行に、然れば、とある、傍訓のしはさの誤にて、さればなり○第五の巻初丁の左第八行に、かつらぬものはものはとある、下のものはは衍なり。同巻三丁の左に、薩埵の埵を陲と誤寫したり。陲は音坐、邊界なり、危なり彊なり、と字書に見えて、埵と同じからず。この誤寫は、同巻五丁の左十七丁の右十八丁の右に、もあり。當に薩埵に作るべし。又同巻十一丁の右第十行に、獨女の傍訓、ひとりむすめを、ひとむすめと寫してりの字を脱せり。又同巻十三丁の右第三行に後見の傍訓うしみとあるは、うしろみのろを脱せしなり。是等は皆筆工の誤なるを、按じ遺しにき。この餘同巻十二丁の右阿夏が珠之介に、過こしかたを説示す條に、そなたが三歳の秋捌月、とあるは誤にて、夏肆月といはざれば、歳月の違ひあり。こは筆工の誤にあらず、作者の不圖思ひ違へしなり。捌月は木偶介が、妻と子ど

もを携て、京師を起行せし月なるを、興房が周防へ還されし、歳月と取たがへたり。後に心つきしかど、はや製本の折なれば及ばず。再刷の日に改正すべし。昔人いへらく、書を挍ずること風塵落葉の如し、隨て拂へば隨てあり。とにもかくにも文人ばかり、胸休からぬものはあらずかし。

第二輯 巻之一

第十一回

舊情西を慕ふて阿夏起行す
遠謀程を警めて福富贐を分つ

復説、福富大夫次は、その宵阿夏珠之介等を欵待て、黄金が愛る五色の玉の、來歷を説示し、語次に、獨子なる、大夫五が往方もしらず、なりにし事さへいひ出て、思はず嘆息したりしかば、妻の屯倉も媳阿鍵も、禁め難たる涙の間に、屯倉は聲を隱らして、喃阿夏どのとやらん、過世ありてやうち解て、初對面より恥しくも、哀しき事さへ聞れ侍り、吾兒を譽るにあらねども、大夫五はこのとし來、酒も嗜まず、色も好まず、愆とてはなかりしを、相應しからぬ武夫の、技に耽りて活業に、懈りしより爹々公の一轍、勸解も意見も聽給はで、追出したる今では後悔、況や吾儕が心の中を、然こそと猜し給へかし。西も東も戰ひの、絶ぬ浮世に立んとて、武家に仕へてわれからに、修羅の街に死を爭はば、撃れはせずや、痍は負ずや、鄙語にいふ生兵法は、現大疵の基なりき、と悔しく思はば懲もせん、疾かへれかし還らずや、とかへらぬこ

とを麻環の、繰返しつゝ物思ふ、親の心を子は知らで、ある皺なき皺の藻鹽草、かきも口説かば益なし、と思はれやせん鈍ましや。といひつゝも目を押拭へば、阿鍵も涕をうちかみて、心つよきは大夫の、性なりとても小動の、いそぢを既に過ぎ給ふ、二親のうへ、仂き、この子の事も思はずに、他處に光陰を送られんや、恢ぬまでも舊里の、宿の檐下に近づきて、人を憑みて賠話もせず、天ゆく鴈の翼にも、けふまで信聞えぬは、今諸州に多しと聞く、新關守に留められて、心に任せ給はぬならん。然とて恙あるべきや、深くな思ひ屈し給ひそ、と慰る身も安からぬ、胸の痞のやる瀬なく、壓手憚る繻子の衿、皀と苦勞の眞身衣、汚れめ見えぬ媳姑の、美し過てあはれなり。阿夏はこれをうち聞て、よろづに足らぬ事もなく、いと優なる方ざまも、盈れば虧る浮世の自然、御こゝろの中推量られて、いと痛しく思ひ侍り、爾りとも父母君と、妹伕の中さへ遠離て、いつまで外におはすべき、況かくまで愛々しき娘さまのましますを、心つよきも事にこそよらめ、一日も千秋をふる郷の、空なつかしく慕しく、思召べき該ながら、そは奥さまの宣ふごとく、新關などに留められて、思ふにも似ずをはすめり。然んには遲かれ速かれ、還らせ給はぬ事やはある、別れても又あふといふ、樂みあるだに悲しきに、妾が良人は七稔前に、人に撃れて世を逝り侍りき。そが讐敵も自滅して、怨霽けくなりしかど、この身

ひとつで穉兒を、養育し艱難劬勞を、推も量らせ給へかし、終には京師に住不樂て、鎌倉なる些の由緣を、心あてに赴き侍り。さばれ年來世の亂れにて、迭に音耗絕たれば、今もなほ恙なくて、彼處にある歟あふまでは、落著きがたき旅宿に侍り、西國には珠之介が、父がたの叔父侍れども、路遠ければ訪ふに由なし。かう憂しき形なき、この身に思ひ比べ給はば、なほ憑しく侍らずや。といひつゝ淚さしぐみたる、他の歎きに復袖濡らす、屯倉阿鍵は共侶に、歎息の外なかりけり。そが中に大夫次は、つく〴〵と聞果て、噫、女中は思ふに優て、薄命なる人なりき。その鎌倉なる由緣とやらんの、疎遠で過せしうへならば、遙々索ねて赴くとも、今なほ恙なからん歟、其處までは測りがたかり。且今茲は去歳よりも、寒氣は一入早かるに、遠からずして雪も降るべし。是彼もつて女中の長旅、前路を急がば後悔あらん、春までこゝに逗留して、やよ、寛やかに赴き給へ。なほ詳には翌相譚ん、要なき身上的話して、人を泣しつ泣きもせしは、噫われながら愚痴なりき、息子は睡げに見えたるに、母御も勞れさぞあらんを、心くまなく夜を深しぬ、とく〳〵臥房へ入り給へ。といふに屯倉は後方なる、侍婢を見かへりて、東のかたなる褊室に、阿客の臥簟を備てあらん、案内をせよ、と分付れば、阿夏は聽てあるじ夫婦と、阿鍵黃金に恭しく、歡びを述て、珠之介を急し立て侍婢に、引れて臥房に赴きけり。却

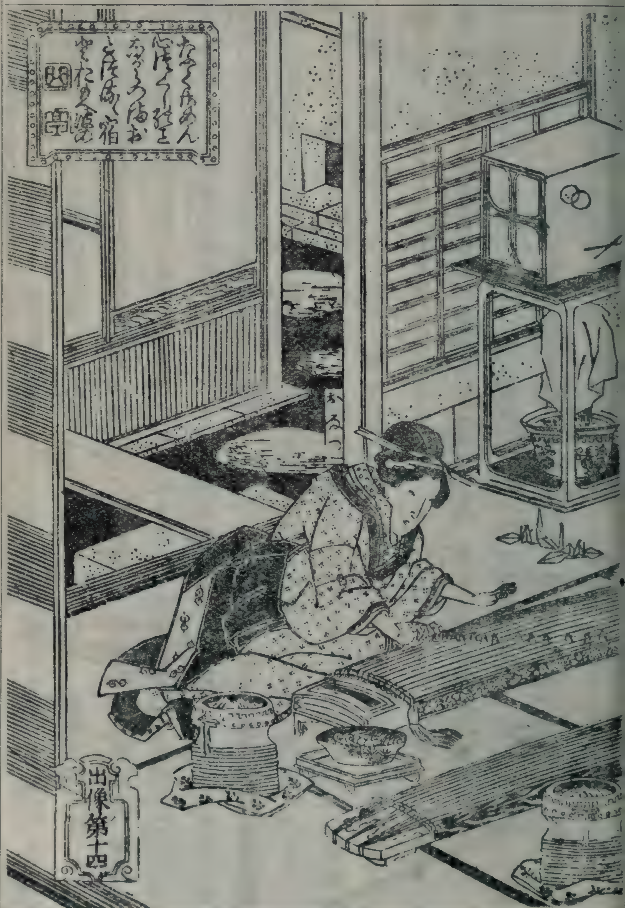
說阿夏は思はずも、這福富の資を得て、こゝに逗留する程に、その次の日も次の日も、屯倉阿鍵は懇に、阿夏母子を慰めて、放遣るべうもあらざれば、阿夏は心に思ふやう、鄕にあるじに問れしとき、鎌倉なる由緣許、ゆかんといひしは當座の慢語、彼處に所要なき身なれども、京師とても憑しき、親類もなく友もあらず、いぬる夜の夢まくらに、立せ給ひし聖の示現に、親子が厄の釋るとも、故鄕へかへりがたからん、と宣はせしを今さら思へば、且くこゝに留りて、春にもならば周防まで、よき伴侶のいで來もせん、是も亦測りがたかり。凡慮の曁ぬ所には、只御佛の引接に、任し奉るに優ことあらじ、と尋思をしつゝ立働きて、あるじ夫婦の機を執しかば、屯倉はさらなり阿鍵まで、明暮坐邊に掖著て、辭敵にしたりける。然程に珠之介は、這家の寄食兒なる、鷲津爪作、日高景市といふ兩箇の總角に、對面せしその朝より、相驩ぶこと大かたならず、然でも年來深山なる、孤屋に生育て、世にも人にも疎かりしに、かゝる豪家の客になりて、親に觸るゝもの耳に聽くもの、珍かならずといふことなければ、日每に遊戲れて、よき友垣を締びにけり、と思ふものから山賊に、養れたる祕事は、後々までもいはざりけり。とかくする程にはや、今玆も冬の中になりつゝ、この月は都も鄙も、人の親はその子の爲に、著袴解紐とか唱へたる、社詣の祝壽あり。富たるはなほ有に儘して、驕るが人の習俗なれば、大

夫次屯倉は豫てより、黄金が解紐の准備にとて、京様の衣裳綺羅を盡して、裡衣までも流行を旨とす、そがうへに玉の釵兒、玳瑁の櫛いへばさらなり、京攝より購求めし、物整ずといふことなし。如之而十五日になりしかば、黄金に装飾らして、城隍廟に參らせ、かへさに里の家々を、うち巡らせし光景は、從者さへに華やかなるを、人僉目覺しく思ひけり。この折にこそ大夫次は、嚮に五色の玉の爲に、遠近となく奔走したる、村人等が軒別に、餅一盒を贈りたる、そが中に宿六をのみ、酒宴の席末に招きよせて、手織布一反を、牽出物にぞしたりける。こは一事兩用にて、一ッにはいぬる比、阿夏を案内致したる、辛苦を勞ふべく、又一ッには這回黄金が、解紐の祝義ぞ、といひ知らするさへ誇貌なり。錢ある人の費を歎ふて、かゝる事にも吝なれど、勢利に附き下風に立つが、なべて世の人の情なれば、鄰の貨を數るまでに、羨みこそすれ譏るは稀にて、愛たしとのみ稱へけり。是より先に大夫次は、屯倉阿鍵等と相譚ふやう、前々なる酒宴には、鄰村に瞽女ありて、筑紫琴をよくせしかば、招きよせて興を添しに、近曾彼瞽女身まかりて、さる技をするものはなし。黄金が爲には財を惜まず、かくまで物の整ひながら、翌の酒宴に管絃の、准備なきをいかゞはせん。むかし平新皇將門が、相馬に内裡を造りし時、諸司百官を置れしに、暦日博士のなかりき、といふにも似たる心地ぞする、そ

なた手段はなからずや、とうち戯れて潛めき問へば、屯倉も哈々とうち笑ひて、阿鍵は何とおもふやらん、華洛人は貴き賤き、みな遊藝を旨とすなれば、近き比より弄ぶ、三絃とかいふものすら、彼處にはやく流行りき、といふは實事であらんかし。よりて思ふに阿夏女郎も、然る技には疎くもあらじ。故鄕は京ぞ、と聞たるに、只今召て問ばや、といふに阿鍵は有理と應て、既に立んとする程に、阿夏はかくとしらねども、朝化粧して來にければ、大夫次屯倉は含笑ながら、坐邊へ招き近づけて、箇云々と說示し、倉卒ぞと思はれんが、おん身は必管絃の、貯藝のおはするならん。翌は黃金が解紐の、壽きの爲客を聚合て、賀酒を酌んと欲す、願ふはその折一曲奏でて、酒宴の興を添給はば、田舍料理も光を增て、あるじのみかは賓達も、こよなき幸ひならんかし、この義を賴みまうすなり。彼三絃はなけれども、琴は大小一面あり、笛も鼓もあるなれば、好みに任して出し置ん、承引給へ、と他事もなく、三人齊一請求るを、阿夏は聞つゝ含笑て、寔に推量せられし如く、糸竹の技はしも、稚き時より習ひしかども、久しう捨て侍りしかば、心もとなき事ながら、賴せ給ふを默止がたかり、筑紫琴こそよかゝめれ、寢緒になりなば斷もやせん、そこらの准備をし給へかし。といふに得たりと皆歡びて、なほ又示し合せけり。却說次の日の晡時より、五个合保の村長等、優得の百姓、牧士馬買、福富が親

類の、男女も是彼來にければ、儲の席に聚合して、前段後段と美味を盡せし、饗饍の種々なるを、くだ〳〵しさに、具にいはず。男客にはあるじ大夫次、女客には屯倉阿鍵が、薦たる盃の、二度三度と巡る程に、冬の日はやくも暮果て、處陜まで點したる、燭燈の花も亦愛たし。登時あるじ大夫次は、席の眞中に膝を進めて、袴の襵を左右へひらかせ、扇を笏に聲ふり立て、諸君遺なく聚合せ給ひて、黃金を祝き給へばこそ、斯鬧しき夜飮に及べり。いと辱く歡しさは、限りもあらず候へども、然とてさせる欵待なし、聞も及ばせ給ひし歟、屬京より子を携て、この地を過る旅の婦人を、以ありて留置るが、糸竹の技に疎からず、と聞しのみにて某も、いまだ本事を知らねども、俊陰の女兒にも、劣らじとこそ思ふなれ、一曲聽せ給はんや、といふに衆皆笑坪に入て、そは興あるべき事になん、かく叮嚀なるおん管待に、物足りて候に、又京女郎の調子を聽かば、錦の上に花を添る、意外の快樂なるべけれ。とく〳〵、と促して、膝折直して俟程に、阿夏は屯倉が取したる、新しき衣いくつか被て、奥のかたより出て來つ、衆人にうち對て、壽を述安否を諮る、もののいひざま愛敬づきて、容を鄺さぬ進止は、舞子の餘風顯れし、姿の花は後れても、初櫻より匂やかなる、吉野の高峰に立顯れて、五節の袂を翻しけん、天津少女の姉ならずは、三穗の浦曲に天降りて、彼羽衣を松に掛たる、玉女の果歟と驚き




出像第十四

おもふ。村長豪農牧士等まで、猛に貌を更めても、訛たる聲音を笑れじとて、應答すら慇懃に菩薩を拜む心地せり。當時阿夏は後方に措れし、筑紫琴を推直して、拎操す指の運びは、細小川の瀬を渡る、蟹の歩みに彷彿たり。節奏緩急その度に稱ひし、且祝言の組唄を、聲妙に歌ひ果て、酒盛の間々に、京師で流行し梛節を、爪音高く歌ふを聽ば、むかふとほるは熊野道者歟、笠に挿たる梛の葉と、繰返し又くり返す、されば席上生醉の、呂律廻らぬ管も卷れず、雜譚閑口、水涕と、共に流るゝ感涙を、啜揚つゝ譽にけり。阿夏は原是歌妓の、客に熟たる昔の杵束、粉挽歌すら田舍兒の、機を執る調子おもしろく、琴に合しつ果は又、扇拍子に浮さるゝ、藝なし猿の客あるじ、素人同志の膝舞踏、犬居牛飲狐拳、負腹立で獻々と、數獻累る亂酌酩酊、奴婢も散動て幾遍となく、腹を抱へて笑へども、鷄のみぞ啼く八聲の比に、酒醺やうやく果にけり。衆客齊一辭し去て、初て風の凪たるごとく、樂竭て哀來たる、倘已時なる幾十疊の、席薦は酒に汚されて、膩蠟燭の眞斷る時に落にけん。鹿兒斑毛に焦たるあり。況庖厨で取辷らして、うち摧きたる椀碟小鉢は、蓋も留めず芥埒へ、放下して見かへるものもなし。貨悖て入るときは、悖て出る自然の勢ひ、富る家にはかゝる事、世にも又多かるべし。間話不題その次の日に、大夫次屯倉阿鍵等は、齊一阿夏を勞ふて、その音曲に捷れしを、褒ること大かたな

らず。そが中に屯倉がいふやう、おん身の爪音の妙なるを、あれ程までにあらんとは、かけても思はざりけるに、現梁の塵も墜べく、汀の鶴も檐に來にけん、聲といひ節といひ、如此藝者は京鎌倉にも、儔多かるべくもあらずかし。いかで黄金に教てたべ、明年ば八歳になり侍れば、切て小曲子の三四章も、習せたうは思ひしかども、こゝらには然る師匠なし、頼れ給へ、と他事もなき、辭に携る阿鍵さへ、共に勸めて已ざりし。人のこゝろに悖らじ、と思ふ阿夏は微笑て、寔に不測のえにしにて、今茲をこゝにくれ竹の、子さへ親さへなすこともなく、杖を駐めて侍るなる、御蔭を思へばおほけなし。然ばかりのおん報ひは、願ふてもせまほしけれ、吉日を擇み給へかし、といふに頷く媳姑、そは歡しき事に侍り、きのふ暦を見たりしに、翌は開で下段もよし。糸竹の技はしも、寒稽古とかいふことあれば、翌より教へ給ひてよ、まづはや黄金にこれらのよしを、聞え知らして歡せん、といひつゝ立もいそしげなる、孫に使れ、子に甘き、恩愛情致相似たる、大夫次さへにこの日より、なべて阿夏を師匠と稱へて、乾淨たる褊室を、彼等母子の部室とし定めて、欵待日ごろに彌倍たり。却說今茲は果敢なく暮て、春如月の初旬、一日大夫次は屯倉と共に、阿夏珠之介を招きよせて、茶を薦め果子を薦め、世の風聲に傳へ聞たる、東國なる軍の勝負を、說示す話次に、大夫次がいふやう、師匠さま聞給へ、お

ん身は豫て春にもならば、鎌倉なる由縁許、諮て行んといはれしが、彼處は戰馬の蹄に荒て、今も軍は絶ずと聞ゆ、然るを遥々赴かば、憑む樹下に雨漏て、後悔其處に立がたからん。黄金はおん身の丹精にて、稍彈法を覺しに、切て二とせ三稔の程、敎を受なば物にもならん、吾身勝手をいふにあらねど、他處によすがを求んより、いつ〳〵までも玆にをはせよ。おん身の標致の世に捷れたる、懸想するもの多かるべし、再醮の歡しからずは、緩やかに壻を擇て、身の落著を料りてん、この議に從ひ給ひね、といふに屯倉も共侶に、辭ひとしく口說けり。阿夏はこれをうち聞て、肚裏に思ふやう、吾儕は豫て周防なる、山口とやらんへ赴きて、瀬十郎ぬしに今一トたび、あふて珠之介を遞與ん、と思ふこゝろの急れしを、今又思へば東のみかは、西國も亦彼此に、軍起りて路程、難義にあはばいかゞはせん。左ても右ても七八稔、音耗絶たる陶ぬしを、今玆是春訪ずとも、妹佚の緣し竭ずもあらば、環會ふ日のなからずやは。いまだ時節の至らぬを、急ば還て禍あらん、加以ぬし達の、斯懇切に留め給ふを、推辭てこの春出てゆかば、情は仇となるまでに、盤纏も多く得がたかるべし。且一兩年こゝに居て、時を俟こそよかめれ、と尋思をしつゝ答るやう、宣ふごとく鎌倉は、今さら便宜の里に侍らず、且由緣ある人の、存亡も料りがたければ、有繫に心進ねども、ゆかまく欲しきは周防なる、山口に侍る

なり。彼處には珠之介が、親にも優たる一箇の叔父あり、年來疎遠なりとても、鄙語にいふ親の泣會、なほ憑しく侍るべし。しかはあれども懇切に、留め給ふを心つよく、固辭ば恩を知らぬに似たり。娘さまの器用なる、一兩年の程にして、奥印可までまゐらせん、と豫て思へば朝夕に、こゝろを用ひ手を煩て、教まゐらせたりけるに、末まで得遂ぬおん別れを、妾も本意なく思はざらんや。今玆は思ひ留りて、仰に從ひ侍るべし、然とても子を携て、よすが求ることなどは、願しからず侍るなり、なほ且く珠之介が、事をし頼み奉る、といふに歡ぶ屯倉より、大夫次は幾遍となく、うち頷きつゝ含笑て、おん身の了簡寔によし、しからばこの月初午より、息子を傳燈寺へかよはして、爪作景市等と倶に、手習讀書を學ばすべし。あの子は今玆十歳ならずや、はや年比になる童を、遊してのみ置く事かは、吾儕に任し給ひね、といと正首に相譚しを、老たる人の癖なれば、よろづに心せはしくて、その日老僕を黄檗山傳燈寺へ遣して、珠之介を教育の、叓の趣云々と、住持に憑みまうしけり。これにより大夫次は、珠之介が手習の、机硯の類より、實語經さへ購求めて、准備はやくも整ふ程に、初午の日になりしかば、大夫次は珠之介を將て、みづから件の寺に赴き、則住持に對面して、束脩の沙金一兩を進らせ、爪作景市等に等しく、教育の事をたのみまうすに、住持はいかでか異議すべき、大檀那の

事にしあれば、快く承引て、貧道豫りたらんには、凡心の及ぶまで、教導き候はん、貴意休かれ、と應をしつゝ、茶を薦め果子を羞めて、他事なく欵待給ひけり。かゝる故に珠之介は、稻荷祭の太鼓も得打ず、この日を本意なく消せしかば、快らず思へども、さてあるべきにあらざれば、詰朝より爪作等と、共に傳燈寺へ赴きつ、住持の手本を賜りて、安積山浪速津の、歌より習ひ刱めけり。阿夏は是等の恩義を感じて、いよ〳〵實を入れて、黄金に琴を誨へたる、只この技のみならで、結髪化粧何くれとなく、黄金が事は他手に被ず、嬭母のごとくものせしかば、これを歡ぶ大夫次屯倉、阿鍵も共に珠之介が、稽古のうへには物を惜まず、紙まれ筆まれ乞ふに任して、錢を取らして買せにければ、爪作と景市は、去歳の春より手習入りして、渠が爲には師兄なれども、勢ひ雲壤の差あるに似て、還て珠之介に筆を貰ひ、紙を貰ふを歡ぶのみ、日每々々に連立て、傳燈寺へぞかよひける。然程に珠之介は、件の寺に赴きて、住持の教を受ること、一トとせあまりになる隨に、初の程こそ愼みて、手習讀書に實を入れたれ、後にはやうやく怠りて、住持の教訓を物とも思はず、爪作景市をそゝのかし、動もすれば外に出て、山に遊び水に戯れ、己が隨に擧動ふを、住持に報るもののあれども、皆是大檀那に由縁ある、總角等なるをもて、罵りも懲しもし給はず。沙彌喝食にもこの意を得さして、做書の折に

は爪形して、その上を摹寫せしを、褒美の高點許多ものして、宿所へもたして歸し給へば、大夫次屯倉阿夏等まで、かゝるべしとはしらずして、その上達を感じて已ず、折々人にも說誇りて、件の徴書を見せしかば、譽ぬものなんなかりける。有如之程に珠之介は、一日爪作景市等と、傳燈寺の庭に遊びて、潛やかに譚ふやう、吾子等は何と思ふやらん、今戰國の世に生れて、手習學問何にせん。願ふ所は弓馬兵法、奥義を遺なく極めなば、遂にその身の運に乘して、一國一城の主にもなるべし。昔源の牛孺丸は、鞍馬寺にありし時、夜な〳〵出て彼山なる木石を敵手にして、自然に劍法を煆煉しつゝ、平家を滅したるにあらずや。世に志氣あるものは、身ひとつでだに右のごとし、今吾黨は總て三名、こゝらに遊戲れて、徒に日を送らんより、いでや武藝の試撃して、共に青雲の足代に、なさずは後に悔しからん。縱師匠はあらずとも、一心凝りて懈らずは、何でふ牛孺に劣るべき。この議は誰何、と聶けば、爪作景市歡びて、こは微妙くもいはれしもの哉、俺們は素武士の子なり、弓馬は家業の事ながら、不幸にして親を喪ひ、孤となりしより、農家に人となるべきを、いと朽をしく思ひしに、この企は本意に稱へり、然らば准備をすべけれとて、山の樹を伐り竹を斫て、鎗とし木刀を製作して、試撃を旨とする事、只一ヶ日にあらねども、こゝは山蔭林の中にて、方丈へも所化寮へも、その間近からね

ば、住持はさらなり法師們も、かゝるべしとは思ひもかけず、素より遨遊を常にすなる、總角等の事なれば、机に倚るは稀なるを、怪むものもなかりけり。これよりして珠之介等は、誰教るにあらねども、日をかさね月を累て、試撃に懈ることなければ、やうやくに自得して、此彼迭に優劣あり、そが中に、鎗は爪作に及ぶものなく、撃劍は景市捷れり、珠之介は組撃にのみ、偶勝を攬ることあるのみ。その餘の技は渠等に及ばず、いと朽をしく思ひしを、氣色には顯さで、獨つら〳〵深念をするに、吾は深山の孤屋にて、養育せられたりければ、嶮岨の奔走自由なり。且年七ッ八ッの比より、半弓を手馴して、兎をも射つ鳥を射て、射藝を自得したれども、こゝらにはさる弓箭なし、大門のこなたなる、關羽の廟の内にこそ、ふりたる弓箭を掛たるは、人の奉納せしならん、折もあらばとり出して、わがこの本事を見せんず、と思ふものから便宜を得ざれば、爪作にも景市にも、いまだかくとは告ざりけり。表話不題爪作は、一口珠之介景市等と、試撃の折に相譚ふやう、俺們は這兩三年、武藝に心を委ねし甲斐に、大刀條は良自得したれど馬上の術はいまだ知らず、この寺の南なる、山鵞野といふ地方には、牧の雛駒いと多かり、こはわが翁大夫次をいふの牧もあり、他領の牧も合聚たり、いかで牧童等を誘へて、馬に乘習はばおもしろからん、といへば珠之介頷きて、そは究竟の計較なり。鎗劍法は士卒の所

爲のみ、弓馬にあらずば誰かよく、大將の任に當らん。とくその牧へゆきて見ん、といふを景市推禁めて、やよ不覺にな早り給ひそ、彼野は他領と合保たれば、俺們が自由にならず、縦吾翁の馬なりとも、人の騎ることを禁ぜられて、そを戍る牧童孤屋に在り、何でふ貸て乘らせんや、といふに爪作頭を傾け、然ばとて乘らずもあらば、何の日にか馬術をよくせん。我今一ツの計あり、彼牧の童等に、錢を取らせ酒を飲して、相譚はば這事成るべし。とばかりにして錢なければ、せん術もあらずといふを、珠之介聞あへず、そこらは吾儕に任し給へ、箇樣々々にわが母を、よくこしらへなば錢を得つべし。この議は誰何、と聶き示せば、爪作景市手を拍鳴らして、その計略極めて妙なり、よくしね氣曉られ給ふな、と諜し合しつうち連立て、軈て宿所に還りたる。その宵珠之介は母にいふやう、けふ師の聖の仰あり、翌は大文字の復學をさせん、唐紙各十枚あまりと、大きなる筆を准備せよ。さばれ村にはあることなけん、價銀をもて來ば所化達に、買取らして得させんず、努な忘れそ、と宣ひき。このよし家公へまうしてよ、と寔しやかに欺くを、阿夏は知らず頷きて、そは大造なる復學なり。そなた一箇の事のみならぬ、爪作どのも景市どのも、おなじ稽古の事なれば、今宵奥さまに願ふて得させん。いかばかりの價をもて、その楮毫を買るゝやらん、と問へば珠之介、さればとよ、一人別に銀三兩、と

長老さまの仰られたり、この義もこゝろ得給へかし、といふに阿夏は眉を顰めて、いと多なりと思へども、住持の分付給ひし事を、多少は論じかたかるべし、と思ひかへしつ云々と、屯倉に告て九兩の銀を、乞得てその詰朝、三箇の總角等に遞與しにければ、珠之介はいふもさらなり、爪作も景市も、意中笑つゝ受戴きて、草紙と共に袱に、推包み搔抱きて、倶に宿所を立出しが、傳燈寺へはゆかずして、軈て山蠶の牧に赴き、こゝにをる牧の童、五六名を皆召聚合て、汝達は豫より、認來にぞあらんずらん。俺們は福富なる、爪作景市珠之介なり。わが村には友もなし、よりて交を結ん爲に、聊折乾を齎したり、受納せられれば幸ひならん、といひつゝ紙に裹みたる、二兩の銀を取せにければ、牧の童等僉歡びて、俺們何等の德ありて、稚子の友にせらるゝや。加以思ひがけなく、この一ト包を給はるを、辭しまうさんは無禮なるべし、所要あらば何事まれ、承らん仰よと、いと叮嚀に應をしつゝ、件の銀を收めしかば、爪作等も亦歡びて、俺們殊なる望はなし、牧の馬を貸し給へ、乘習んと思ふのみ、といふに件の牧童等は、一議に及ばず承引て、そはいと易きことになん、近屬牧士が乘狎したる、よき馬の候に、いづれになりとも騎せ給へ、といひつゝ軈て兩三人、彼此へ走り去しが、程しもあらず牧の馬、三疋を牽もて來つ、鑣子を被け鑣を取て、三箇の總角等に乘らするに、初の程は鑣に附て、靮捌

送に好む技きと鞍こゝろを、叮嚀に指南して、徐方を宗としたりしに、爪作景市珠之介等は、是より先に日毎に遲速を爭ひけり。是より先に渠等が復學なれば、漸く日數を經る隨に、劣らず優さず騎走らして、日毎に遲速を爭ひけり。

阿夏等は、その曛昏に珠之介等が、水もて濡せし幾册の、草子を抱きて還りし時、渠等が復學の大文字を、見ばやと豫て思ひしかば、まづそのよしを諮るに、珠之介は些も騷がず、けふは終日墨を摺たり、翌は書くべし見給へ、と應てその宵を過せしが、翌は何とか答ん、と思へば有繫に胸安からず、次の日竊に爪作等に、よしを告謀し合して、又黃昏に歸り來つるを、阿夏は遲しと俟つけて、復學はいかにと諮るを、三箇の總角辭齊一、されはとよその事なれ。俺們終日精竭して、夥ものせし一行書を、師の聖に見せまつりしに、長老怒り罵り給ひて、汝等が懈怠勝なる、這書ざまは何事ぞや、なほ半年も十个月も、習ふてふたゝび書て見せよ。是を宿所にもて去して、福富殿に見られんは、汝等よりも吾恥なり。噫無益しやと敦圍て、皆裂て捨させ給ひき。俺們なりとて月比日ごろ、懈りし事はなけれども、機嫌の歹き折にやありけん、面目もなきことにこそ、と辭ひとしく欺きて、俱に頭を搔てをり。阿夏は是を實語として、それを見よ、日屬いはざる事歟、爪さまも景さまも、懲給ひなば友吟味して、をさ〳〵精を出し給へ、といふに三人は阿唯々〳〵、と答て軈て立ときに、面を見合し舌を吐て、庖湢のかたに退

りしは、夕饌食ん爲なるべし。阿夏はその肯珠之介等が、いひけることの趣を、あるじ夫婦に聑報しに、大夫次屯倉はうち笑ひて、童ごころの正直なる、現さることもありけんかし。師の長老の折檻は、灸灼するより利方よし、それに懲なば實を入れて、この後はよく習ふべし、紙筆はいかばかり、費すとも惜からず、と應て掛念せざりけり。然程に珠之介等は、只分釋の爲にのみ、日毎に傳燈寺へ赴けども、手習讀書はよくもせず、けふも亦早卒業、翌も亦早卒業、といひこしらへて寺にはをらず。走馬擊劍に身を運動せば、腰辨當とか倡へたる、割籠のみでは足らずとして、郷に謨りて得たりし銀の、あるに任して彼此なる、酒肆に立よりて酒食を貪り、その餘れるを山鬘の、牧へをり〳〵もてゆきて、彼童等に取らせしかば、僉歡びつ樂みて、珠之介等に使れけり。これにより珠之介は、軍の進退を習んとて、草刈る童さへ喚集めて、牧の童と倶に士卒に擬らへ、その身と爪作景市は、大將に擬へて、馬に騎り相わかれ、迭に陣を布備て、木刀をもて挑み戰ひ、追つ追れつ日を消すを、興ある事に思ひけり。既にして珠之介等は、件の銀を酒食の爲に、遺なく用果せしかども、なほ惡ことをしらざれば、筆墨草紙の料にとて、親をも老僕をも詐欺りて、飲食に費す錢の、寡きにあらねども、富たる家の癖なれば、そを疑ふて禁るものなし。只傳燈寺の法師等のみ、これを知りて云々と、長老に報まうせしか

ども、住持は慈善を旨として、人の悪をいふことを歡び給はず。況や渠等は總角なり、そをものものしく福富へ、聞え知らせんは大人氣なし、年十五六になりもせば、みづから先非を悔べきぞ、知るとも知らぬ面色して、諜々しくいふことなかれ、と竊に諭し給ひけり。寔に出家の情狀なるべし。されば這黄檗山傳燈寺は、本堂の西のかたに、關帝の廟宇あり。禪家に關羽を祀るよしは、昔後漢の普靜長老玉泉山に在せし時、關羽の靈を濟度し給ひしより、唐の高宗の時、勤州黄梅寺なる、五祖弘忍禪師の徒弟。六祖神秀禪師、抖藪行脚して、玉泉山に錫を駐め、遂に伽藍を建立して、關雲長を祀り給へり。これよりして彼土はさらなり、本朝にも亦黄檗宗の寺院には、關羽の廟を建ること、件の故實と聞えたり。神秀禪師の一條は傳燈錄より出たり 閒話休題、一日爪作景市珠之介は、這傳燈寺なる、關羽の廟のほとりに出て、礫打して遊戲れしを、事果てもなほ去らで、廟の閾に尻うち掛たる、爪作後方を見かへりて、吾子等はいまだ知らずや、抑這關羽といふ猛者ば、漢土三國の時、蜀漢の名將なりき。初漢の世の、いたく亂れたるを討治んとて、劉玄德張飛と共に三名、義を桃園に結びしとぞ、曩に師の長老のおん物語にて、その大略を聞くことを得たり。今俺們も亦三名、年來志同うして、骨肉に異ならず、縱關羽に及ばずとも、なすことなくて老朽んや。誘然らば、今この像前にて、誓を立義を結びて、

久後までも相忘れざる、異姓の兄弟とならまく欲す。この議に同意せられんや、といふに景市も珠之介も、ひとしく木像を見かへりて、關羽の事は我等も聞にき。惜かな當初、彼曹操に從はで、見る影もなき蜀を佐けて、只義勇にのみ誇りしかば、終に呉人に謀られて、綁首を刎られたり。そはとまれかくもあれ、俺們三名義を結びて、善悪共に辭することなく、苦樂を等しくなすことあらば、後々までも憑しからん、一味合體勿論なり、といふに爪作歡びて、爾らば一ト月一ト日なりとも、先に生れしを兄とせんとて、且その年歳を諮るに、爪作と珠之介は、この時十二になりたるが、爪作は秋生れ、珠之介は冬生れたりといふ。又景市は一歳後れて、今茲は十一なりければ、爪作則配制して、然らんにはわれは是、第一位の兄なるべし。わが次は珠どのよ、その次は景公なり、といへば景市頭を掉て、何でふ年歳の多少をもてせん、百歳の翁でも、愚なるものはいよ〳〵愚なり。先やこの像前にて、大刀撃の勝負をもて、兄とし敬ひ、弟と倡る、甲乙を定むべし、といふに珠之介頷きて、その議寔に爾るべし、さばれ鎗も大刀撃も、皆是士卒の所爲なれば、勝といふとも兄たる德なし。且この處は本堂へも、所化寮へも遠からねば、大刀音を聞咎められて、禍其處に起りやせん。見給へこの廟内に、奉納の弓箭あり。弓箭は是大將の兵具なり、さればこそあれ武士たるものを、世に弓とりといふにあ

らずや。いで〳〵といひかけて、はや廟内に進み入り、柱に携り攀登りて、掛たる弓箭を取卸して、出て左右に挾み、兄弟達よ聞給へ、今這前面に的を立て、誰にもあれよく射るものを、第一の兄とせん。然るときは、物音聞えず、これ彼以便宜の所行なり、この議に從ひ給ひね、といはれて爪作景市は、頭を搔きつゝ苦笑ひして、そはよき事はよけれども、俺們はけふまでも、射ることをいまだ習はず、そをいかにしてよくせんや、といふに珠之介莞爾と笑て、弓箭に疎きは大將の、器とすべからず、然らば本事を見すべきぞ、その折爭ひ給ふな、といふ辭いまだ訖らず、頃は如月の下浣なりければ、皈り後れて天飛ぶ雁の、こなたを投て來にけるを、珠之介佶と瞻て、今彼雁の多かる中にて、一隻落して得させんず、といふよりはやく弓に箭刺ふて、仰ざまに彎固め、遣も過さず瞟と發せば、冤差はで一隻の雁の、胸より背へ縫留られて、弦音と共侶に、地上に蓊と墜てけり。今この綷の爲體に、爪作も景市も、驚き感じ舌を卷きて、兩人齊一額をつき、俺們思ひ足らざれば、おん身の射藝に捷れしを、かゝるべしとは思ひもかけず、慾に長短を、論ぜしことこそ悔しけれ。けふより兄とし下風に立て、志を盡すべし、といふを珠之介聞あへず、しかいはるゝは分に過たり、心もとなきことながら、約束なれば辭するに由なし。とく〳〵準備をし給へ、といふに兩人こゝろ得て、爪作は遽しく、身を起し走りゆき

て、隕たる雁を引提來るに、既にしてはや死したり。その間に景市は、廟内なる粢裝の大土器を、折敷と共に取出せば、爪作は箭を拔きて、雁の鮮血の竭るまで、土器に受させて、更に又件の折敷に、雁を載て贄としつ、倶に形を改て、關帝を伏拜み、鮮血を啜り義を結びて、珠之介を兄とし敬ひ、次は爪作、次は景市、異姓の兄弟と倡へたる、歡び限りなかりけり。登時珠之介は、弓箭を又故のごとく廟内に掛歛めて、爪作等に誡くやう、雁をこゝらに措たらば、道人等に怪められん。然ばとて棄るは惜かり、門前なる酒肆を賴みて、煮さして俺までたうべずや、といふに爪作領きて、いはるゝ趣き宜きにあらねど、然ではけふの要に得立ず、この儘售るこそ捷徑なれ。吾儕に任し給ひね、と應て雁を搔抱きて、立出るとき大土器の、血に染たるを人には見せじと、左手に取て見かへり／＼、墓所のほとりの垣に結れし、竹叢の中にぞ棄にける。却說光陰荏苒して、阿夏母子は福富の、宿所に在ること四とせあまり、はや五稔になりしかば、珠之介は十三歲、あるじ大夫次が孫女、黃金は十一にぞなりにける。されば阿夏は正月のころより、心ひとつに思ふやう、わが身圖らずこの家に、逗留してより既にはや、五とせの春を迎へたり。あるじ夫婦の親切なる、始終の爲になるよしありとも、久しきときは初に似ず、六日の菖蒲となるものは、なべての人のこゝろなり。瀨十郎ぬしに別れしより、はや十

わが身あまり一稔の、長き月日を歴たれども、尚壯りなる齡もて、恙あるべうもあらずかし。わが身はとまれかくもあれ、珠之介は彼ぬしの、正しき胤であるものを、一トたび周防へ赴きて、見せもせず見もせずは、親たり子たる甲斐もなし。これらの事は豫より、思はざるにあらざりしを、恩義の枷を被られて、留められつゝ心にも、あらで今茲になりにたり。よしや老少不定なる、彼地に異なることありとも、身は野ざらしの草枕、旅に命の終るとも、かくまで思ひ決めしを、ゆかで止なば後までも、冥土の障りになりぬべし、三月の比に首途せん、と思ふこころをそれとはなしに、珠之介に說示せしは、この春二月の比なるべし。扨大夫次と屯倉等に、縡云々と別を告て、身の暇を請ひしかば、あるじの夫婦黃金さへ、よしを聞別を惜て、一ト日一ト日と留る程に、春も三月になりにけり。かくてあるべきにあらざれば、阿夏はしば〳〵大夫次等に、立まくほしきよしを告て、かくいへば何とやらん、情をしらぬに似たれども、珠之介が親類とては、周防の叔父より外に侍らず、さるをこの春兩三夕、夢に見たるが心にかゝりて、頻りにゆかまく欲くなりしは、道祖の神さへ誘引せ給ふ歟。一トたび彼地へ赴きて、叔父公に對面したらんには、時宜に依り立かへりて、ふたゝび御庇に預ることの、あらじとは定めがたかり。枉て放ち遣らせ給へ、なほ此うへのお情ならん、と辭を盡して已ざれば、大夫次屯

倉阿鍵さへ、今さらに禁めかねて、しからんには力及ばず、黄金はおん身の丹精にて、奥印可まで得たりしを、なほ教えよといふに由なし。首途の准備をし給へとて、やうやくに承引しかば、阿夏はふかく歡びて、珠之介にも如此々々と、告て起行を急ぎけり。既にして翌ははや首途と定めたる、その日大夫次は、聊送行の酒食を儲けて、阿夏と珠之介を、出居の一ト室に招きよせて、屯倉阿鍵黄金等と、倶に留別の盃を勸めつゝ、久後の事までも、譚ひて慰めける。語次に大夫次がいふやう、寔に不測の値偶により、苟且ながら滿四歳、外ならず交參ひしは、過世ありての事なるべし。況黄金は糸竹の、技をしも教られて、都の手ぶりを會得したるは、全くおん身の資に依れり。渠が爲に師なり弟子なり、年を累ねし親みの、今さら歎きとなるまでに、別を惜む渠が心を、いはでも推量せられたらん。知らるゝ如く大夫五が、在處は今に知る由もなし、世になき人ぞと思ひ絕て、かへり來ぬるをなかく〳〵に、心當にはせざれども、然ばとて世繼の事を、脊念せざるにあらずかし。黄金も今茲は十一になりぬ、なほ三四年俟つけて、招壻せんと思ふのみ。爪作も景市も、みな嫺類の孤なれば、渠等をがな、と思へども、農家となすべき性にはあらず、見屆けがたきよしもあれば、なきには優すべく、あるには劣れり。農家おん身の息子は眉目美しく、女子にして見まく欲き、優質なれば是も亦、農家には相應しから

ねど、年來黄金と中よしにて、童男童女の差別なく、遊敵でありければ、屯倉阿鍵と商量したり、いかで黄金が兄品にして、盃を取替させなば、後々までも憑しからん、といふに屯倉も共侶に、幼稚き時に妹と伕の、縁しをはやく結びても、迭に年長人と成て、外に優華のいで來るものの、末遂がたきは世に多かり。その類にはあらずして、兄公と倡へ妹と喚ば、人と成ての後々まで、障りあらじと思ふにこそ、といへば阿鍵も正首に、良人が妻を妹と呼べるは、即女弟に擬へたる、親みに由る故と歟聞にき、然らば夫婦を妹伕といふは、兄と妹の義ならんかし。これらのよしもあるなれば、同胞もなき黄金が爲に、後々までの背盾に、頼んとての所行に侍り、この意を得させ給へかし。と等しく諭す人の誠に、阿夏は貌を改めて、數にも足らぬ珠之介を、然までに思はれ奉る、おん慈愛の辱さよ。翌より別れ奉りて、山海萬里を隔ると も、一トたび結びし好あらば、なほいつまでもこのおん宿所に、侍る心地のすべかゝめれ。珠よ、虛々外視なせそ、今の仰を聞たる歟、歡しうは思はずや、といふに頷く珠之介は、現々然なり、とばかりに、物あらためて云々と、いふよし知らねば默したり。大夫次は莞やかに、吁めでた、阿夏女郎、卽坐に應せられしは、いひ甲斐ありて滿足せり。やよ喃阿鍵盃を、といふに阿鍵はこゝろ得て、軈て黄金と珠之介に、兄妹品の盃を、酧酬さしつ共侶に、久後かけ

てぞ頼ける。且くして大夫次は、准備の金拾兩を、とり出し紙に載て、これを阿夏に贈りていふやう、こは最些少にあなれども、贐に進らする。この寡きにも謂あり、西も東も旅路には、護摩の灰とか喚做さるゝ、騙兒なども多かるべく、人を害して盤纏を奪ふ、山豪も亦なきにあらず、爾るをふかく思はずに、夥の金を腰にせば、是殃危を招くものなり。周防に到て便り惡くば、速に歸來ませ、こは往返の路費のみ、這拾金も母御一箇の、腰に纏はばなほ危し、五兩は珠之介の腰に卷して、分ち置こそよかゝめれ。その故を誰何とならば、萬一路に禍ありて、母御の金を奪るゝとも、五兩は無事に殘るべし。只これのみにあらずして、奸智に長たる騙兒といふとも、十五に足らぬ總角が、夥の金を腰にはせじ、と思ふてその懷を、視被ざらんは必定なり。これらの愚案あるをもて、財囊もふたつ進らする、この議に從ひ給ひね、と說諭しつつ長やかなる、纏腰囊を取すれば、阿夏は共に受戴きて、思ふに優たる御親切、いかにしてこのおん贐の寡きに侍るべき。況旅路の用心まで、遺なく教諭させ給ふを、いかでか背き侍るべき。珠之介も歡びを、とくまうさずや、とこゝろを付て、件の金をふたつに分ちて、兩箇の財囊に斂めつゝ、一箇はそが儘珠之介の、膚に著纏して、遺る一箇の財囊をのみ、その身の懷に挾めしを、大夫次うち見て、それでよし、息子も絆のこゝろを得て、懷披て人にな見せそ。

要譚は且言果たり、屯倉よ、爪作は何處にをる、景市をも召給へ、渠等は年來珠之介と、俗にいふ手習朋輩なり。遊敵でありければ、さこそ別れの惜からめ、圓居に加て物食せんず、といふに屯倉は掌鳴らして、婢妾們に云々と、こゝろ得さして爪作と、景市を召聚へけり。然程に爪作景市等は、珠之介が母と共に、遠く周防へ赴くよしを、聞にし日より別を惜みて、是首に立、彼首に聚合て、その事をのみ聶きしを、今この團坐に招れて、本意あることに思へども、あるじ夫婦の目前にて、事改りし酒讌なれば、飲食ひすらこゝろに任せず、いふべき事もいひ難て、をり／＼痿痺を捺るのみ。人の背を盾にして、珠之介と聶きつ、目を注しても果しなき、長坐に殆困じてをり。長閑き日影も此彼の、もの譚ひに時移りて、はや黄昏になりしかば、阿夏は屢盃を、辭して珠之介と共侶に、歡びを述退きて、翌の首途の物とり集る、用意に更闌し、その夜を果敢なく曉しけり。前路の事も豫より、大夫次が指揮して、陸は新關の障あらん、水行をこそ、と定めしかば、老實なる一箇の小廝に、浪速の浦まで送れとて、これらの准備もしたりける。又爪作と景市は、久禮畑まで送らんとて、共侶に起立て、僉共侶に朝出立の、箸とるだにも心のみ、共いそぎしてよくもたうべず、黄金も未明に臥房を出て、大父大母の坐邊にをり。登時阿夏珠之介は、行裝を整へて、あるじ夫婦阿鍵母子、この餘年來親し

立出る折戸口には、爪作も景市も、身裝して俟てをり。又緣頬のほとりには、立盡したる大夫次かりける、奴婢等にも別を告て、烏の森を離るゝ比、草鞋ゝ笠よと遽しく、送人を從へて、屯倉、阿鍵黃金に奴婢居多、皆再會を契りつゝ、目送る人もゆくものも、共に名殘をなしか棲む、有繫に春の山里を、花なき宿となす心地して、齊一嘆息したりける。畢竟阿夏珠之助等が、遠く周防へ赴きて、又甚麼なる話說かある、そは次の卷に解分るを聽ねかし。

第二輯　卷之二

第十二回

憂苦訴難く泣て歸帆を俟つ
繁華親易く漫に遨遊を事とす

紹前齣復說、宿六阿可加は、初阿夏を福富の、宿所へ汲引せしものなれば、彼等が訪來る折每に、年來親しうものいはれたる、阿夏は這回の遺褁にとて、或は櫛笥硯筥、旅行には要のなき物を、件の夫婦に取せにければ、宿六阿可加は受歡びて、翌は夙めて送らんとて、用意をする程に、宿六はその曛昏より、猛に風邪に冒されて、次の日も臥てをり。この故に阿可加すら、阿夏母子の啓行を、看立ることも得ならねば、本意なしとのみ聞えたり。却說阿夏珠之介は、爪作景市等に送られて、うち相譚ひつゝゆく程に、久禮畑といふ鄕まで來にけり。這人家盡處に最寂寥たる、酒と飯とを賣る家ありて、門に立たる腰障子に、云々と記したり。既に亭午になりしかば、聊先に進みたる、阿夏は從者共侶に、這鄽前に立在て、後れて來ぬる珠之介と、兩箇の總角等を招き近づけ、こゝにて袂を分たんとて、齊一裡面に進み入りて、牀几に尻をうち

掛れば、あるじと見えたる一箇の老人、遽しく出迎へて、阿客さまがた酒をや召るゝ、飯を進らすべうもや、と問ふを阿夏は見かへりて、竹葉は勿論飯もたうべん、菜羮は何々ぞ、と問かへされて、さゝ候、炙鮒に泥鰌の濃汁、獨活の酢茹も候、といふに阿夏は頷きて、吾儕は泥鰌を好まねども、あらん限り肴を出しね、前路を急ぐ旅なれば、竹葉も飯も這人數に、合してはやく頼むぞや、といふにあるじは聲ふり立て、誰そ來よ、お客の急せ給ふに、疾燒ずや、と呼れば、妻にやあらん應と答て、奥のかたより出て來つ、且阿夏等に口誼を述て、竈に蒼柴折燒て、はや羮を烹かへす程に、あるじは手はやく酒を盪め、折敷に肴を安排て、且阿夏等が身邊にもて來つ、程しもあらず妻共侶に、五前の飯を盛ならべて、誘とて軈て羞めにけり。そが椀碟の垢染たる、鼠色なる高盛の、飯に折數の猫脚は、相應しからず、とうち笑ふ。珠之介はいちはやく、蓋とる汁は半椀澄て、鏡に似たり。人貌の、うつれば替る旅なれや、鹽梅さへに田舍備たれど、飢餓たれば霎時も措ず、酒を喫み飯をたうべて、腹十分になりにけり。かくても爪作景市は、別を惜み立難て、珠之介と相譚をるを、阿夏は急に推禁めて、和子達はとく還り給へ、家翁の俟わび給はんに、といふに爪作景市は、思はずも嘆息して、阿母公は周防へ赴きて、何日か又かへり來ますべき、日は長かるになほ一チ二里も、送らして給ひね、といふを

阿夏は聞あへず、しかいはるゝは誠心見えて、欽しう侍れども、よしや何處で別るゝとも、遺憾さはおなじかりなん、宿六叟の來ましなば、かへさも心やすからんを、十五に足らぬ總角達の、路次を思へば影護かり。よしや是首にて別るゝとも、再會の日のなきにはあらじ、吾儕を苦しめ給ふな、といふに珠之介も嗟嘆して、母御の遠慮寔に以あり、爪公も景公も、豫ての盟約を忘れずは、今の別は惜むに足らず、迭に年長時を得ば、全聚ることなからずやは、とくとく還り給へかし、といはれて頷く爪作景市、やうやくその意に任しけり。有然而阿夏は晝餉の價を、あるじに問ふて錢を取らせ、誘とて齊一外に出て、やよ和子達よ、忘れずに、家公にも奥ざま方にも、遺なく傳語を稟してたべ、さらば〳〵と、先に立つ、母に引るゝ珠之介、從者さへに口誼を舒て、西を投てぞゆく雲水の、世は暄き春の日も、秋の夕の心地せし。爪作と景市は、姑く其處に立在て、見えずなるまで目送りけり。然れば母子はその次の日に、京師邇く來にけるを、阿夏は心に思ふやう、舊里ながら彼處には、親類もなく友もあらず、名所古迹を見まくほしとて、花鳥に浮れあるく、旅にしあらば邁もせん、年歴にけれど京師には、見しれる人のなほあらんを、憖に立よらば、恥かゞやかしき所爲なるべし、と尋思をしつゝ京へは入らで、直に浪速に赴きけり。しかはあれども暮春の旅の、前路は揔て花盛にて、民の門傍も

野も山も、眺望に遑なきものから、心は其處にあら田打つ、細輪の田井に蛙鳴く、黄昏毎に宿りを累て、はや三四日といふ程に、蘆葭が角組む浪速津の、船長の宿に著しかば、縡云々とよしを告て、便宜の出船を索るに、明後の比は、周防へ皈る船ありといふに憑しくて、且く是處に逗留しつゝ、扨福富へ遣すべき、歡びの消息を書寫め、又陶瀨十郎に贈んと思ふ、些の土產を買とりなどして、をさ〳〵その日を俟程に、翌は夙めて船を出す、と聞えたる甲夜の間に、阿夏は客賃を亭主に取らして、水行の足を問定め、福富より隷られて、この所まで送來たる、從者を勞ひて、件の書簡を委ねにけり。春の夜なれば果敢なく明て、追風よしと罵騒ぐ、舟人等に急されし、阿夏は珠之介共侶に、いそしく三枚にうち乘りて、そが弘舸に赴くを、從者は水際に看立て、簏子を遞與し船に移して、母子のうへを水主楫取等に、憑むとすれど陸と水、告別すら浦風に、吹かどはれてぞ別れける。然程に、阿夏珠之介等が乘たる船は、浪速を出て幾日もあらず、順風はいと罕なりけるに、濕氣さへうちも續きしかば、是首の港口彼首の漁村と、歇船にのみ日來を歷つゝ、春過ぎて夏もはや、陸月の某の日に、辛くして周防なる、山口に著にけり。長き水行に頭病せし、母さへ子さへ歡しさに、再生たる心地しつ、船より出て程近き、湊の町に休ひて、鄕導の爲にとて、人を傭ひ簏子を負して、大內家の城下なる、鶴峯に赴

きつ。粟津屋祥八とか喚做したる、客店に宿を投めて、僅に疲勞を慰めたる、阿夏はその宵逆旅主人祥八を招きよせて、此の國主の御内人に、陶瀬十郎といふ刀禰あらん、そがおん宿所は何處ぞや、と問へば祥八眉を顰めて、否然る人は知り候はず、大かたはなきなるべし、といふに阿夏も亦訝りて、いかでかはあることあらん、こゝの亭主は知らずといふとも、巷に出て人に問はば、ぬしの宿所のしれざらんや。疎鹵なりきと肚裏に、思ふものから推かへして、身の程輕き武士ならば、人に知られぬ事しもあらめ、國主の御内で一二を争ふ、御侍の子息と聞にき、よく問定めて給ひね、と頼めども猶こゝろ得ねば、生應して退りけり。却説阿夏はその次の日に、巷に出て彼此人に、戀しき人の宿所を問ふて、とせんかうせんと思ひつゝ、起出し朝より、心地猛に常ならず、立ば忽地瞑眩きて、歩の運びのわれにもあらねば、思ふにも似ず臥てをり。さりとて已べきことならねば、珠之介を喚近づけて、けふは夙めて儞の叔父公を、諮んとのみ思ひしに、猛に心地の病しくて、一ト歩も得運し叵かり。こは月來の舟行に搖れし、疲勞にこそあらんずらめ。いかで儞は吾儕に代りて、出て叔父公の宿所を索ねよ。陶瀬十郎興房ぬしと、そこらに多かる人毎に、問はば定かに知るよしあらん、卓午は特さら暑かるに、やよ菅笠をもてゆきね、といふに頷く珠之介、いはるゝ趣こゝろ得侍り、藥たうべて俟給へ。さ

はとて軈て身を起す、童の足の逸はやく、菅の小笠を引提て、外面望て出にけり。夏の日消し俟わぶる、親の心を知らぬ子は、その曛昏にかへり來つ。母御よ、けふも暑かりしに、阡陌を隈なくうち巡りて、或は人の門に立より、路ゆく人をも呼留めて、云々と諮ねしかども、陶瀬十郎といふ者は、僉知らずとのみ答たり、と報るに阿夏は起直りて、そは不審しき事になん、今はその名を更られて、初の如くならずとも、陶氏の人なからずやは。翌より日毎に外に出て、叔父公の宿所の知るゝまで、問ふをその身の務にせよ、親に孝行のみならで、摠ては儞の爲なりかし。やよ等閑になものせそ、と教諭して送る日の、一ト宵も千夜と安からぬ、身の病著は瘥らで、誰は留ねど籠の鳥、啼ぬは泣くに彌ませし、苦しさ際なかりけり。是よりの後珠之介は、日毎々〳〵に街衢に出て、神社佛閣に遊びくらし、又あるときは田樂雜劇の觀場にさへ立入りて、餘念なき日の多かるに、童は友に狎るゝにはやく、是首の坊彼首の市に、遊戯敵のいで來にければ、樂しき事に思ふのみ。果は漸々に懈りて、瀨十郎が事はしも、人には問ずなりにけり。さりとは思ひかけざりし、阿夏はいかで興房の、所在を知らんと思ふ心の、且くも已ときなければ、復粟津屋のあるじ酢八にも、そが家の奴婢等にも、陶瀨十郎といふぬしの、おん宿所はいまだ知れずや、守の御内に相識あらば、問質してよと時々に、賴みし甲斐も夏過て、そ

の柴月の中澣より、阿夏が病著良瘥りて、起居自由になりしかば、翌はみづから外に出て、城がたの人に近づき、情郎の存や亡や、問決んずと尋思をしつゝ、初て結髮したる日に、逆旅主人祥八が、阿夏の身邊に來ていふやう、曩に屢憑せ給ひし、陶瀬十郎ぬしの事、やうやくに便宜を討めて、最も定かに聞得たり。そは當館の權臣にて御座せし、陶遠江守政房大人の嫡男なる、駿河守興房ぬしの事なるべし。件の刀禰は初名を、津守と喚れ給ひにき。今より十四五年前つ比、一ト稔上の（大内義興をいふ）おん伴にて、京師に陟り給ひし折、障ることのあればにや、大約在京四稔の程、通稱を改られて、瀬十郎と唱しとぞ。爾るに彼ぬしは、愆る事やありけん、上の御氣色を蒙りて、猛にこの地へ追返され、垂籠ておはすること、大約百日ばかりにして、御免しを被りて、御館に出仕し給ひけり。有之し程にそがおん父、遠州政房世を逝り給ひしかば、軈て家督を承嗣て、駿河守に任ぜられ、奥さまをさへ娶り給ひき。扨その次の年にやありけん、男兒生れ給ひしかば、房子丸と名づけ給ひつ、今茲は八歳歟九歳歟、十可にもやなり給はん。爾るに和泉州左界の城は、往る永正六年の春、當おん館（義興をいふ）菊池武俊征伐の忠賞として、前將軍義稙公より賜りたる、加恩の地なれど、上には御在京年來（永正十五年秋八月二日）を歷て、管領職を辭し給ひ、遂に當國に歸城ありしより、阿波の三好等時を得て、動もすれば左界の




出像

城を、襲略んと欲するよし、その聞えあるにより、こゝにも軍議を凝し給ひて、迺おん身の諸給へる、彼陶駿河守興房ぬしを、左界の城の大將になされ、軍兵三四千名を隷られて、彼地へ遣されしかば、興房ぬしは妻をも子をも、皆悉く携て、左界に在城し給ふなり。こは永正十六年、己卯の春の事なりければ、今ははや四稔になりぬ。然るをおん身は彼ぬしの、京にて喚れ給ひたる、通稱をのみ聞覺て、瀬十郎とたづね給ひしかば、人も我も知らざりき。等閑とな思ひ給ひそ、と報るに胸は塞りて、こゝに望みを失ひし、阿夏は霎時應も得せず、困じ果たる額を拊て、沈吟じつゝ扨いふやう、然る縁由は毫知らで、近江の盡處よりはる／＼と、來し甲斐もなく飛禽の、鵤の觜と齟齬ふ、人の往方の憾しさよ。豫て左界におはするよしを、夢になりとも知るならば、遠き旅宿はせまじきに、幾宵荒磯に船よせて、目睡難し波枕、安からざりし胸にのみ、おもひは海と山口の、宿も空なる日來歷て、戀しき人にあは津屋と、なりも果なん祥なるべきを、神ならぬ身の初より、悟らざりしぞ悔しけれ。什麼いかにせん、とばかりに、袖もて目皮を拭へども、涙のやるせなかりしを、思ひかへして貌を更め、こはわれながら愚痴にも、とり紊して侍るかな、遇まくほしき陶ぬしの、往方知れずといふにはあらで、所在を定かに告られしは、歎きの中の歡びなり。翌はこの地を立去りて、左界へ赴き侍るべし、といふ

を祥八推禁めて、愆り給ふな、とばかりならで、報べき事のなほあるに、歎きを制めて聞給へ、といふに阿夏は膝を進めて、そは何事で侍るぞや、とせわしく問れてさればとよ、今玆は京師も五畿内も、波風暫く靜りて、四民安堵の思ひをなすよし、こゝへも注進ありければ、當おん館聞食て、しからんには左界へは、交代の大將を遣して、陶興房を召返し、渠が年來の勤勞を、慰め得さすべきものなり、と仰出されたりけるは、いぬる月の事にして、件の交代の大將は、既にうち立給ひしとぞ。俺們は町人の、事にしあれば、然るおん制度を、知るべうもあらざりしを、皆是上の御内人に、正しく聞たる事なれば、違ふべくもあらずかし。然るを愆りて又さらに、彼地へ赴き給ふとも、亦蒐錯ふて陶大人の、左界にをらずなり給ひし、比にしゆかば悔しからん。大人の還らせ給ふ日の、遲速は測りかたけれども、這烁をやは過ざるべき。この議に从ひ給はずや、といと正首に說諭すを、阿夏は聞つゝ歡びて、そは憑しき事に侍り。世は塞翁が馬とやらん、今の歎きの今の間に、歡びになりぬるは、母子のうへを神佛の、捨させ給はぬものなるべし。倩ものを按ずるに、寔に宣ふ言の如く、待ば甘露の降る日もあるに、左界で遭んは不定なり。猶も姑く逗留して、厄會にこそなるべけれ。就て疎にも思はれんが、こころ得がたき事侍り。當おん館と宣ふは、曩に京師に御座したる、管領さまのおん事ならん。

お家に例なしと聞く、重き職を辭せ給ひて、この地にかへり給ひしは、以こそあらめ、いかにぞや、と問へば祥八微笑て、浮世に疎き近江路の、山里より來ましたる、女中と聞けばさる疑ひの、釋がたくこそ有つらめ。一五一十を說つらねなば、言長やかになるべけれども、けふは聊暇あり、詳に告ん聞給へ。近曾京都の將軍家、義植公とまうせしは、東山殿（義政）のおん弟、今出川殿（義視）のおん子なりしを、東山殿養ひ立て、將軍になし給ひにき。（時に十二歳）然るに管領政元ぬしの逆意にて、伊豆の勝憧院政知卿（義政の弟）の御二男なりける、義澄公（初名は義通）をとり立て、將軍になし進らせ、前將軍義植公を、いとも稠しく推籠て、家臣物部某甲が、宿所へ預置きたりしを、辛くも脫出させ給ひて、この山口に渡御まし〳〵、館を賴せ給ひしかば、義興卿は精悍しく、興復の軍議を凝して、姑く時を俟給ひしに、永正四年夏陸月に、政元ぬしは浴室にて、家臣に殺され給ひにけり。因て京師は靜ならず、と間諜者の報まうせしかば、當おん館義興卿、猛に大軍を催して、義植公を補佐しまゐらせ、軈て京師に攻陟りて、戰ひ捷利を獲給ひけり。然れば將軍義澄公は、近江の岳山へ落させ給ひて、三稔彼處に御座せしが、竟に世を逝り給ひにき。この時にこそ義植公は、御本意を遂られて、ふたゝび將軍に拜任せられ、故のごとくに世を治めて、政事給ひけり。皆是當おん館、義興卿の大義大功、儔多かるべうもあらざれ

ば、冠位三位に陟されて、管領になり給ひしなり。抑京鎌倉の管領は、將軍家の御親族、志波細川畠山上杉の人々ならでは、成され叵き事なりしに、鎌倉の管領憲實ぬし、世を厭ひ入道して、當おん館に身を寓給ひ、長門州深川なる、大寧寺に御座しければ、この入道長棟菴主を、館の御養父と稱まうし、則執事職を受紹ぎて、管領になり給ひき。さるにより、篠圈爵の幕の紋さへ、憲實主より讓られて、今なほこれを用ひ給ふ。是より在京年を歷て、當館のおん權威に、肩を比るものはなけれど、應仁の兵亂以來、公武等しく衰微して、物足るべうもあらざれば、軍役の雜費、その餘の事まで、館の賄ひ給ひしかば、財用竟に續かずして、難儀に及び給ふ事多かり。加旃御領國には、野心のものも往々いで來て、隙を覦ふと聞えたり。この故に當おん館は、いぬる永正十五年、秋八月初旬に、管領職を辭し給ひて、當所に還り給ひしなり。是より京師はふたゝび亂れて、畿内に戰ひ已ときなく、三好の黨跋扈して、主を主ともせざりしかば、義植公は去歲大永元年の春、三月の下浣に京師を出て、淡路に沒落し給ひければ、世の人なべて彼公を、嶋の將軍とまうすとぞ。是より先に義植公は、故將軍義澄公のおん子なりける、義晴君を養嗣として、播磨に處らし給ひしかば、義晴公は去歲の陸月、猛に上洛し給ひて、その冬十二月二十五日に、將軍に任ぜられ、室町の御所に在ませども、おん年纔に十一

なれば、將軍は只名のみにて、世間いよ〳〵穩ならずといふ、風聲此處へも聞えたり。若る亂世なりといへども、當おん館の御武德にて、山陽道は異なる事なく、國豐にして民肥たれば、京師の亂れに住不樂たる、公卿上達部の搢紳家も、這山口に移住みて、當おん館に身を寓給ひ、又近國なる坊賈工匠も、各々生活の便著を求めて、皆この處へ來集つゝ、市中に軒を相連ねて、屋の上に屋を加え、港口の來帆絕る日なければ、諸國の名物輻輳して、自由ならずといふことなし。然れば世の人この地を稱へて、西の都と喚做たり。かくまで愛たき福地にあなれば、錢ある人は珠を炊ぎ、桂をもて薪になすとも、容易かるべき事ながら、物の價の廉からぬは、只是繁華の沿習ぞかし。客店なンどもよろづに準じて、おん身母子の日每の客貨も、銀六錢日給るを、貴しとな思ひ給ひそ。褊室なりとも他客を雜へず、賃際にせし座席料は、勘定外にて輸てあり。駿州さま陶興房ないふを諮給ふは、由緣ありての事なるべきに、左にも右にもこしらへて、這地に杖を駐め給へ。彼大人は先祖より、代々御家老筋なれば、威勢といひ所領といひ、多く得がたき舊家なり。さは鄙語にもいふことあり、立よらば巨樹の蔭、長き物には卷れよとぞ。嗚盆もなき長物がたりに、思はず時を移したり、といひつゝ呵々とうち笑へば、阿夏も倶にうち咲て、現詳なるおん物語に、ことのこゝろも定かに知られて、日來の憂を慰め侍り。既に

推量せらるゝ如く、陶ぬしには大かたならぬ、舊き縁しの侍るなる、彼人さまに對面せば、求めずとも資はあらん。然るときは定めの外に、些の報ひをせざらんや、といふに祥八、又うち笑ひて、吁めでた、吉左右を、今より倶に俟んのみ、といふ聲聞てや女房が、家公〳〵と呼子鳥、おぼつかなくも出て來つ、女客には仂なく、親しうものをいはせじ、と思ふに似たり。ともすれば、疼ぬ腹を捞らるゝ、祥八はやく見かへりて、應と答て遽しく、納戸の方に退りけり。然程に珠之介は、この日も城下の町に遊びて、黄昏にかへり來にければ、阿夏はそが儘呼近づけて、嚮にあるじに報られたる、緈の趣如此々々と、首尾りを說示し、かゝれば今より遠からず、叔父公に遭して見せもせん、見もせんその日を俟給へ、といふに珠之介も歡びて、そは言事を聞給ひぬ、爾らば翌より港口に出て、叔父公の船の著くといふ、風聲を聞定めてん、優かに待ておはせといふ。應答ばかりは大人しく、姑く親を慰めけり。俟ば久しき秋の宿に、きのふとくらし、けふと明して、捌月も三十日になりし比、阿夏が懐にしたりける、五兩の金を用盡して、纔に二三ゝ分殘りたり。現その該もあらんかし、阿夏は原是歌妓にて、世帯未熟の癖なれば、錢を使ふに心を用ひず、只是のみにあらずして、母子の客賃を一チ日に、銀六匁と定めたれば、月に百八九十匁の沒匁あり。逗留既に二个月餘り、七八十日になりしかば、

今宵財囊を揮ふても、債なきにはあらざめれど、曩に福富村を、辭し去んとしたる比、大夫次が計ひて、贐の金十兩を分ちて五兩は珠之介が、膚に纏したりければ、倘賴もしくて憂とも思はず、件の金の竭る比には、陶氏の船著ぬべし、しからんには資を得て、盤纏に物を缺べからず、と豫て深念をしたりけん、阿夏はその宵珠之介を、傍に招きて潛やかに、珠よ、儞は思はずや、旅宿久しくなりしかば、吾儕がもて來し五兩の金は、月來の客價に竭たゝ、福富ぬしの計ひて、儞に持し給ひたる、金のみなるぞ、母におこしね、長々御苦勞々々、といひ被て手をさし出せば、珠之介はうち騷ぐ、胸を鎭めて、嘀母御、搭膊は今も腹に卷て、舊の儘にて侍れども、金は使ふて些もなし、といふに阿夏は呆果て、腹立しさに淚ぐみ、噫大膽なる、彼金を、儞に用盡せとて、福富ぬしの賜んや、こゝに宿りを定めし比、とく受取んと思ひしかども、吾儕なりとて女流なり、世に憑しき合宿なければ、賊難はなほ測回かり。儞は日々に出あるきて、宿にをること稀なれども、福富殿の教を守りて、所要あるまで儞の膚に、預置なばなかなかに、安かるべしと愚痴にも、思慮りし悔しさよ。什麼彼金を何にかしたる、惡ず報よ、いかにぞや、甚麼ぞや、と怨ずれば、珠之介も目を擦赤めて、母御よ、さまで怒らずに、みづからおもひ給へかし。叔父公の宿所を諳よとて、出されしより日每々々に、京師にも優す繁華の

地を、明るより暮るゝまで、走り巡るにいかにして、纔に五十や三十の、仂鈔もて湯も水も、幾回か得飲るべき。茶價晝食是彼に、一分兌せば日南の氷、忽地消て又一分、二分や三分は夢より果敢なき、五兩の金の使ひ方、手簿にはまだ志ねども、その大かたは知れてあり。人集する所には、人粒も亦多かれば、叔父公の宿所を知りたる人の、ありもやせんと思ふばかりに、歌舞妓の木門に立よれば、田舍兒ぞと侮られて、思ひかけなくしたゝかに、錢を取られし折もあり。神社佛閣に參りては、叔父公の所在を知らし給へ、と念じて投る十二銅、賽錢初穗も濫りては、一チ二貫の事にはあらず。或は鼻緒を踏斷らして、草履を買し日も多く、足の爪を蹴放ちて、賣藥店に憩し日もあり。夕立の傘、渡舟、錢の沒る事のみなれば、果はおん身に叱られん、と思ひながらも早晩に、用盡して侍るかし。これ見て疑ひ給ふな、といひつゝ懐に手を入れて、解出したる空搭膊の、口さへ輕き布の目に、漏るとは見えし虚涙、なき事までも有貌に、竝立つゝいひ釋くを、阿夏は聽かず、聲戰して、噫、口功者にいへばとて、そがいひ譯になるべき歟。寔に錢鈔の沒ることありとも、吾儕に隱して汝が隨意、使ふて辝の濟とやおもふ、いかにすべきと敦圉て、權しの火箸拿るよりはやく、背を礮と打懲せば、走りも退かず泣沈みて、母御よ、免し給はずや、路費を用盡しても、叔父公に對面し給はば、外にのみ見てや

はをはすべき。客貨の債もその折に、賞ふ事の易からんに、その日をまたれぬよしやある。親一トはしら子一人の、おん身に痛く憎れては、世に立甲斐のあらずかし、されば覺期を究めたり。南無阿彌陀佛、と唱へも果ず、側に措きし纒腰嚢を、みづから項へ卷被て、はや縊んとする程に、阿夏は吁嗟と推禁めて、やよ珠之介短氣をすな、いふ事あり、とやうやくに、挑取る財嚢で、目を押拭ひ、日今儞にいはれし如く、物乏しきも霎時の程にて、叔父公に再會したらんには、母子のうへは安かるべし。よしや儞に喪れたる、五兩の金はその儘ありとも、叔父公の資を得るよしなくば、豈二个月とや支んや。其處に心はつきながら、子をのみ責てわが愆を、思はざりしは愚痴なりき。水行の程はとまれかくまれ、こゝへ宿りを定めし折、件の金を受取て、吾儕の腰に纒て措ば、かゝる口舌はなからんを、後々までも福富ぬしの、誨を固く守りしは、船に契して劍を索め、琴柱に膠するとかいふ、諺にも似て侍るめり。然りとても錢鈔なくては、一ト日も送り回かるに、叔父公に再會せん日まで、吾儕が衣裳髮の飾を、沽却して所要に充ん。さばれこれらの趣を、宿の夫婦に知られなば、そは懷を見透されて、憑し氣なくなりぬべし。儞この誼をこゝろ得て、翌明後の比潛やかに、市にもてゆきて售ねかし。これより外に手段はあらず、と誨き示すを珠之介は、聞つゝしばしば頷きて、嬉しや免し給ひし

な、その賣物の事はしも、是首の町にも、彼首の市にも、認來なる人多かれば、售とも質に典るゝとも、おん身の隨意相計てん。あるじはさらなり、家の内の、奴婢にも知らする事にはあらず、吾儕に任し給ひね、と潛めき答る少年の、良らぬ事には怜利なる、したり貌には機も屆かでや、示し合する親心、臥簟の行燈搔起しても、子ゆゑの闇に片明り、丁子頭は陶ぬしの、歸帆の兆歟、と母と子が、心祝ひも夢の世や、寢よとの鐘の響く比、倶に枕に就きにけり。

第十三回

垂柳橋に客婦絃歌を賣る
侯鯖樓に洛人舊妓を認る

却說阿夏はその次の日に、櫛笄と好衣の、旅には要なき物をのみ、篋中より取出して、袱に推包み、誘とて珠之助に遞與けり。示合せしことなれば、珠之介はこゝろ得て、竊に市にもてゆきしを、いかに相譚濟しけん、思ひの隨に沽却して、若干の銀を得たれど、そが仂銀をば推掠めて、皆飲食に使ひつゝ、親には價を詭りて、氣色にも顯さねば、阿夏はさりとも知らずして、爾後もしのび〲に、要用ならぬ物を售ること、四五回に暨びしかば、件の篋は空しうなりて、今ははや親も子も、身に著たる衣の外に、貯祿はあらずなりしかど、陶が資を心當に、

又祥八にも問など、なすこともなく日を送れば、紙窗撲つ風の音、簀子の下なる蟲の聲も、朝な夕なは膚寒き、秋も僅になるものから、左界の便り聞えねば、阿夏はいよ〳〵侘わびて、又祥八に問ばや、と思ふものから事繁き、人を呼んはさすがにて、なほ躊躇て在りけるに、この日も港口へ遣したる、珠之介がかへり來て、忙しげなる聲高やかに、母御よ、大變の侍るなり、叔父公の戍り給ふと聞えし、左界の城はいぬる比、敵の爲に攻落されて、士卒はさらなり大將も、戰歿をしてければ、こゝより交代に赴きたる、大將は期にあはで、引返せしといふものあり。言の虛實は知らねども、よしをおん身に報んと思へば、飛が似くに還りにき、といふに阿夏は胸潰れて、立まくしたる腰うち拔して、姑くはものも得いはず、纔に心を推鎭めて、珠よ、儞は何とか思ふ。然る風聲のあらんには、幾遍となく憑みたる、祥八どのが今までも、知ざることのあるべきや、知らばはやくも報給はんに、その義なければ虛說ならん、とは思へども心もとなし。儞はふたゝび外に出て、言の虛實を問定めよ。吾儕は亦彼人に、問ふて疑ひを霽すべし。とく〳〵ゆきね、と急せば、珠之介は寔に然なり、と應も果ず衝と立て、裳を褰げて精悍しく、港口を望て走りけり。折からあるじ祥八は、外面よりかへり來つ、この日何處へゆきたりけん、

阿夏に貸たる褊室の、邊を過りて遽しく、納戸の方に赴くを、阿夏はやゝと呼留て、おん事繁くおはさんが、問まうしたき事こそ侍れ、といふを否とはいひかねし、祥八はそが儘に、立よりて坐を占れば、阿夏は聲を低して、問まく欲きは他事ならず、日來しば〲憑まうせし、左界の人の事になん。けふしもわが兒が港口にて、ある人に聞にきとて、如此々々と告侍り、勿論童が人傳に、聞とりていふことなれば、實語なりとは思はねども、心にかゝり侍るかし。おん身はいまだ聞給はずや、と問れて頷く祥八は、いと困じたる面色にて、現然ることのありけるなり。某が聞たるは、四五日前つ比なれども、はじめは虛實定かならず、然るをおん身に報知して、驚かさんは要なき所行ぞと、思ひかへして候ひき。爾るにけふは所要ありて、上の御內人許まゐりしかば、語次に諮まうして、既にして實を得たり。抑當將軍義晴公、世を治給ふ初より、和泉は管領武藏守高國ぬしの領地になりぬ。これにより左界の城をも、豪奪せんと計られけるを、城の大將陶ぬしは、權威にも懼らず、心つよく答まうして、承引べくもあらざりければ、高國のぬしいよ〱怒りて、尼崎なる從父弟尹賢、播磨の浦上なンどに謀し合して、大軍をもて左界の城を、短兵急に攻たりける。しかはあれども陶ぬしは、些も騒ぐ氣色なく、且く防戰ふ程に、內應のものありて、忽地城に火を放たれば、遂に防禦の術竭て、はや落城

と見えしかば、陶ぬしは憑切たる、士卒二三百名を從へて、後門より突て出、寄隊を東西に撃靡けて、一條の血路を殺開き、妻子を扶導きて、濱里のかたに走りつゝ、准備の快船十艘に、一箇も漏さずうち乘せて、洋中遙に漕ぎ去折から、只是運の窮にありけん、猛に風濤吹暴れて、そが八九艘は覆りて、幾百箇の士卒眷屬、大魚の腹に葬られ、亦一二艘は風のまに〳〵、往方もしらずなりしとぞ。然程にいぬる比、興房に代れとて、遣されたる大將は、彼地まで到著かで、途にてよしを聞しかば、驚きながらかへり來つ、撃漏されし城兵も、漸々にこの地へ脱れ來て、具に注進してければ、上にもこの義を聞食て、惜ませ給ふこと大かたならず。左界は敵地に夾れたる、最も危き孤城なれども、將軍義植をいふ京師に在ます程は、後やすしと思ひしに、世の形勢の俄頃に變りて、權威他人に推移りしも、昨今とはいひながら、其所に心のまだ屆かで、嚮には交代の大將を遣したるもわが愆、況興房を喪ひしは、なほ愆を累ねしなり、と御後悔ありとなん。こはその筋なる方ざまの、物がたりで候へば、浮たる言に候はず、といと正首に說示せば、阿夏はよゝと泣沈む、涙の雨に憂みの蟲の、枝に離れし心地して、わくかたもなく歎きしを、拶あるべきにあらざれば、やうやくに思ひかへして、涕うちかみて貌を更め、世に薄命なる女子の、昔も今もなきにあらねど、吾儕にまずもの多からんや。舊里に住わびて、出

にし比は夫を喪ひ、又いひがたき情由ありて、怨を隱して仇に隨ひ、果は近江の山里に、留められつゝ年を歷て、戀しき人をたづね來し、甲斐も汀渚の片便り、磯うつ波もかへり來ん、日を僂て俟けるに、討擊るゝは武夫の、沿習なりとはいひながら、かゝるべしとは知ざりし。うたてやぬしは大洋の、底の水屑になりにき、と人傳に聞くけふよりは、誰に憑ん身のよすが、進退谷り侍りたり。あふても別れは悲しきに、あはで別れし本意なさを、さこそと思ひ給へかし。哀しきかな、と聲立て、ふたゝび撲地と泣沈めば、祥八も立かねて、なほ叮寧に慰めつゝ、やうやく奥に退りけり。されば阿夏は今さらに、身の措處を定めかねて、淚の間にとさまかうさま、久後を思惟るに、走るものは必速く、死たる人はかへることなし。陶ぬしの事はしも、生涯慕ふて歎くとも、その甲斐あるにあらざれば、思ひ絕なば絕もせん。只當然る身の難義は、既に盤纏の竭たれば、近江へは得還りがたかり。然りとて馴染もなきこの鄕にて、何をして世を渡るべき、身ひとつであるならば、火燒水汲む奉公しても、扨ありなんを慭に、尙總角なる珠之介を、携ては羈となりて、そも今さらに倣しがたかり。又渠には商賈許、仕へて小厮になれといふとも、保人に立つ人も得がたく、爲人も亦心もとなし。彼福富の吝嗇なる、百金にもなりぬべき、五色の玉を返せしに、五稔といふ長き月日を、思ひの儘に役使ふて、孫に琴さへ

教させ、奥印可まで取らせながら、世に定式の謝義なゝどは、夢にだも見せもせで、別るゝ折に十金の、贐をすら恩がましく、賸五金を珠之介が、腰に纏さしたりければ、役にも立ずなりにたり。那折玉の價ぞとて、切て百金贈られなば、かゝる時にも心つよくて、ともかくもすべかるを、遣て恨を述んにも、海山千里を隔をる、旅にしあれば阿宅言ながら、天飛ぶ雁の侶に後れ、山の獼猴の林に離れし、憂にもませし親子の往方を、定め難るも彼人の、心穢きによりてなり。さはあらずや、と肚に問ひ、腹に答つ身の幸なさに、人を怨みの愚癡妄想、歸るよしなき近江なる、籠勝手の神ならで、僉私勝手は、浮世の人情、腹立しさと哀しさに、衣引被ぎて臥てをり。且くして珠之介が、ふたゝびかへり來にければ、阿夏はやをら頭を擡て、枕方近く侍らしつ、嚮に祥八に聞得たる、左界の實說如此々々と、報知しつゝうち歎けば、珠之介も當惑の、手を叉きて咲嘆に堪ず、倶に頭を病するのみ。素よりその性老實ならぬ、總角なればかゝる時、商量敵になすよしもなき、阿夏はさしもいふ甲斐なくて、心いよ〳〵安からず、その通宵寢られぬ隨に、獨熟思ふやう、盤纏はさらなり、携來つる、物みな喪ひたりければ、客價の債をいかゞはせん。こゝに處るにも居りがたく、出てゆくにも去易からず。いと面ぶせなる所行ながら、あるじ夫婦に懷を、著して憑まば承引て、憐るゝこともありもやせん。告ずは

人のこゝろも知れじ、と尋思をしつゝ次の日に、祥八夫婦がうち揃ふて、納戸にをるを窺ふて、そがほとりに赴きて、きのふ左界の實説を、報知されし歡びを、竊に述て、扨いふやう、陶ぬしはわが亡夫の、親族で侍れども、道遠ければ年あまた、音耗絶て侍りしを、この春猛に思ひ起して、こゝにたづねて來つるなり。彼人京師に在せし時、預まゐらせし金あれば、盤纏も多く携へず、十金許侍りしを、半分は路の用心に、わが兒の膚に纏措せしを、遊び耽りつ何の間にか、失ふたればせんすべあらず。只陶ぬしを心當に、行篋の物を售などしつゝ、けふまでは侍りしかども、彼人空くしなり給ひては、頼む樹下に雨漏りて、何處に立ん樂浪の、近江へも還りがたかり。然ればとて馴も習はぬ、薪水の技を做まくするとも、人の役には立べくも侍らず、初京師に在し程、糸竹の技はしも、人なみにせし事なれば、鄙語にいふ藝は身を、資るよすがになりもせん。翌より日毎に街衢に出て、多かる人の門々に、歌曲を賣て親子の口を、餬んとこそ思ひ侍れ。客儭の債のあるべけれども、御心ながく取りてたべ。願ふはけふより生賃にして、留め給はば幸ひならん、とおもひ入つゝかき口説く、涙ぞいとゞ進みける。妻はさらなり祥八は、つく〴〵とうち聞て、慰めかねて頭を傾け、噫おん身親子の薄命なる、今聞く如くならんとは、思ひかけねばうち驚れて、痛ましさも彌増たり。おん身が男子ならんには、

言品もあるべけれど、同行すら十五に足らぬ、弱息なるをいかがはせん。三十のうへを多くは過じ、と見ゆる女房盛なれども、この地に相識なしと聞けば、一期の事は馴染をかさねて、後にこそいで來もせめ。陶大人に由縁ある、女中なりせば門謠の、その日ぐらしは朽をしく。心裏恥しくも思はれんを、人の落魄といひながら、然までに尋思し給ひし、心の中さへ推量れば、歎息の外候はず。然ばとて今までの如く、阿客にしては措がたきに、おん身は且おん身の隨意、掙了給ふもよかるべし、弱息は晝も留置て、或は水汲み走使ひの、小要を逹さするものならば、彼子の客貨は取らでもよし、といへば又女房も、共侶に咲嘆して、家三代の客店なれども、かく哀れなる客人を、留めし事は聞も傳へず、縁あればこそ損をもせめ。今さら出てゆき給へ、といはれぬは前つ世の、約束にもやあらんずらん。近属上の御家中へ、給事にまゐらせたる、女兒が穉かりし時、手ふるしたる三絃あり、樫棹なればよき物ならねど、貸まゐらせん歟。いかにぞや、と問慰めて他事もなき、夫婦齊一情ある、言葉の露に又袖濡らす、阿夏はいかでか推辭むべき、且感じ且歡びて、珠之介がうへをのみ、只管憑む親心、誰もかくこそあるべけれと、思ふも不樂し朝獵の、獵箭取る身にあらねども、鮮八夫婦は窮鳥の、懷に入る心地して、猶も姑く慰めけり。却說阿夏はその次の日より、彼三絃を借取て、笠深くしつゝおぼつかなくも、

鵠峰なる城下を、其處ともわかず門諸に、今樣早歌說經の、節も章句も都備し、聲は涙に隱口の、はづかはしくも朽をしき、浮世渡の憂業も、日を歷る隨に稍熟て、西の都の幾町々を、遺なく唄ひ遶れども、一聲價一錢の、手の內なれば藻鹽草、搔集めても一チ日に、錢一緡は得易からず、況雨の日雪の朝は、一椀の糧も空しかるべし。初京師に在りし比、物足らざりし折々に、木偶介が小夏を將て、四條河原に立くらしたる、事しもこゝに思ひ出て、彼子がこの世に在るならば、資になるよし多からんを、繼女兒には劣りたる、男兒ばかり母の爲に、ならぬものかな、と呟くのみ、人に告べき事ならねば、心で泣ぬ日は稀なる、母はさらなり、珠之介は、宿の庖湢に役使れて、習ぬ技に暇なく、はや初冬になりしかば、霜柱たつ朝にも、とく起されて水を汲み入れ、北風寒き夕には、氷を摧きて、浴桶を焚く、艱難いふべうもあらざれば、人をも怨み親をも恨みて、阿夏が宿にをる折には、身の憂事を數へ立て、吾儕が近江に在りし日は、手習讀書を務にせしのみ、三度の膳も人に齊眉させ、飽までたうべ暖に衣て、心にかゝる雲もなく、樂しかりける事多かりしに、不覺に慫りしおん身の淺慮、生る歟死せる歟、定かならぬ、周防の叔父公にあはせんとて、水行艱苦の旅宿をかさねて、遙々來つる甲斐もなく、叔父公には得遭ずして、辛き日にあふ朝な夕な、かくては命も續がたかり。赤貝の口開たる似き、

這皸を見給はずや、親子乞食になり果るが、おん身は本意歟、樂しき歟、と飽まで親を窘むれば、阿夏も得堪ず、聲ふり立て、又しても不孝もの、吉も凶も皆是時の、星煞であるものを、今さら不足をいふことかは、福富殿の貺りし、五兩の金をあの儘に、儞に使捨られずは、よしやこの地を夜逃にしても、近江へ還る路費はあらんを、己が隨なる事しつくして、親に乞食をさしながら、庖働きすればとて、さばかりの事せざらんや、と罵りつ又罵らるゝ、親子角口仂なく、血で血を洗ふ煩惱の、瞋恚の燄に照されて、黑かりし耻も赤うなる、顏の楓葉かつ散るまでに、負じ魂人は僉、傍痛く思ひけり。しかはあれども親子の恩愛、阿夏は竟に諍ひ負ても、言と意は表裏にて、その兒を憎しと思はねば、脆くも折るゝ柞樹や、颪寒き詰旦も、亦生活に出にけり。不題、鸛峯の城を距ること、東のかた十町許に、柳町と喚做したるは、最熱鬧しき地方なり。こゝに一條の川ありて、渡せる梁を垂柳橋といへり。橋の盡處に年ふりたる、柳樹あるによりてなり。この地は夏を旨として、船よりも歩よりも、群つゝ人の遊ぶこと、譬ば京師の四條に似たり。然れば茶店もいと多にて、飲食を宗とすなる、商賈の家尠からねど、冬になりては生業を、轉じて寂寞たるのみなるに、垂柳橋の邊なる、侯鯖樓といふ酒樓のみ、年中客の絕ることなく、冬は賞雪の船を寄せ、春は觀梅の轎子を、這廟前に卸させて、卽席

の酒肉の爲に、嚢中を盡しても、恨みとせざる風流士多かり。閒話休題、阿夏は件の侯鯖樓に

の、熱鬧しきを稍知りて、日每に來つゝ門に立て、小曲子を妙に歌ひにければ、醉ふて矮樓に

散動める客の、懷俗に錢を包みて、投與るも稀にはありけり。如之而日來を經る程に、有一

日這酒樓に、客の小絕し折とも知らで、門に阿夏が立けるを、あるじは竊に呼入れて、卒爾に

は思はれんが、儞は世に凋落て、さる生活をするにやあらん、この地の人とは見えざるに、他

鄕より來て侶を喪ひ、せんすべなさの技にあらずや。何處を宿にし給ふぞ、と問れて阿夏は歷

むによしなく、こは憑しくも問せ給ふ、おん情の程推量られて、いと歡しう侍るかし。妾は京

師のものなりしを、身の幸なさに近江なる、山里に移住て、憂歲月を送りつゝ、其處にすら又

住わびて、この地の所親を心當に、尙總角なる兒を携て、はる〴〵來ぬる甲斐もなく、その親

族はこの地に侍らず、剩近曾身まかりにき、と風の便りに聞えたり。とかくする程に盤纏竭

て、いかにともせん術なければ、わが兒を宿に預措て、かく淺ましき生活しつゝ、一日々々

と送りぬる、宿はこゝより西のかた、博勞町なる粟津屋と、問せ給はば隱れはあらじ、恥しさ

よといひかけて、顏に翳の袖牆や、聲も淚も籠りけり。あるじはこれをうち聞て、さればこそ

思ふに違はね、その身のみかは子を携て、よるべの舟の楫を絕し、旅宿の艱難然ぞあらん。縹

致といひ歌曲といひ、門諸には惜かるべき、妙音妙手は以あるかな。就て一條の商量あり、知るゝ如くわが家は、日毎に客の多かれども、冬はこゝらに歌妓なし、そを又所望せらるゝ折、他町へ人を走らして、呼迎るも煩しく、火急の要には立がたかり。和女郎わが家を宿にして、客人の需に應じなば、霜枯なりとも門諸の、挊了には優ことあるべし。彼粟津屋の祥八は、宮島講中なるをもて、俺等素より相識なり。這商量をよしとおもはゞ、宿にも絆のこゝろを得さして、出なほして又來給へ。疑ふにはあらねども、彼處の旅人に紛れなし、と一筆示しおこされなば、いよ〳〵後やすかるべし、といふに阿夏は歡びて、そは有かたきまで忝き、おん計ひに侍るかし。よしを祥八ぬしに告て、翌より御庇に立侍らん。妾は夏と呼れ侍り。まだおん目にはかゝらねども、奥さまにも願ひ侍り。宜く傳へ給ひね、と口誼を述て遽しく、粟津屋へかへり來て、祥八夫婦に如此々々と、侯鯖樓のあるじにいはれし、絆の趣を告しかば、祥八も女房も、共侶に歡びて、その議寔にしかるべし。侯鯖樓は講夥計にて、心ざまも克知たり、人に慈善の性なれば、爲になること多からん。手簡を遣すまでもあらず、翌ゆき給はゞ人を跟て、云々といはせんのみ、と他事なき答に首尾を歡ぶ、阿夏は猛に心いそしく、珠之介を呼立して、件のよしを說示し、祥八夫婦に渠がうへを、なほ云云と憑みけり。かゝりしかば次の日に、阿

夏は詰髪化粧して、侯鯖樓に赴きつ。姑くこゝに寓居て、客の招を俟程に、あるじはさらなりそが妻も、情あるものなりければ、客に薦めて生活に、暇あらせじとおもへども、巽二は杪を拂て、雁陣長列り、青女は橋を粧ふて、鶺鴒氷を渉る、冬の日子の事なれば、果敢々々しき客なかりけり。とかくする程に今茲は暮て、春正月の中浣、有一日うち連立たる兩箇の武士、各々一箇の從者を將て、何處にゆきたるかへさなりけん、侯鯖樓に立よりて、晝飯をたうべ酒を喫むに、こゝには歌妓ありと聞て、軈て阿夏を呼登し、謌はせもしつ酌を執して、盃を飛し笑ひ樂む程に、春の日ながら尙短くて、下晡になりしかば、件の武士等は酒席の價を、あるじに取して遽しく、かへり去んとしたりける。そが中に一箇の武士、年才は三十あまりなるが、出んとしつゝ又立皈りて、霎時あるじに聶きけり。畢竟這武士、あるじに對ひて、いかなることを相譚ひけん、そは次の卷に、解分るを聽ねかし。

第二輯 卷之三

第十四回

苦雨初て霽て殘花春に遇ふ
樂地空しからず赤繩更に繫ぐ

再說彼武士は、その友人と共侶に、醉ふて侯鯖樓を出てゆく時、獨猛に立歸て、主人を招きて聶く程に、一夥なる武士は俟に得堪ず、嗤ひ訇り俊僜て、扇拍子を拿ながら、河原に添ふてゆく隨に、間遙になりにけり。有如之程に是首には、密やかに相譚濟して、又遽しく立出つ。外面に跪居たる、從者を見かへりて、誘とばかりに前路の人に、追著んとて走りたる。されば生醉本性案はで、腰に帶たる兩口の、刀に諸手をかけたるは、鞘脫らせじと思へばなるべし。旣にして侯鯖樓には、この日烹灸に暇ある折、主人は妻を身邊に招きて、嚮に彼客にいはれたる、縡如此々々と聶き示して、儞この議を何とか思ふ、善と思はば試に、傳へて胸を問給へ。縡成るべくはその折に、われ媒妁して得さすべし、といふに女房含笑て、聞くが如きは歹くもあらぬ、商量で侍るめり。摠ては彼子の爲なるに、善は急げといふことあれば、日今召て告侍

らん、おん身も共に聞給へ。そが捷徑で侍らずや、といはれて主人は幾遍となく、うち頷きて、寔に然なり、今宵と約束せられしを、今さらに猶豫しがたし、とくこの處へ召よせ給へ。やよとく／＼、と急しけり。この時阿夏は天井なる、是方の柱に身を倚せて、飽まで客に浮られたる、酒の醉を醒してをり。齢は既に玉鉾の、みそぢあまりになりしかど、妖艶たる姿の花は、今もなほ衰はで、閏三月の遲櫻、若葉に恥ぬ風情あり。斯暇あるときだにも、役使はるゝ了鬟が、忙しげに走來て、やよ阿夏さま、御室さまの、召し給ふにとくゆき給へ。家公も納戸にをはするぞ、といふを阿夏は見かへりて、そはうち揃ふて何事やらん、と問せもあへず、さればとよ、何事やらん知らず侍れど、とく將て來よといはれたり、といふに阿夏は眉を顰めて、常にはあらぬ主人夫婦に、召るゝはこゝろ得がたし。愆しつとは覺ねども、叱らるゝにはあらずや、とおもふものから思ひ難て、軈て納戸へ赴きけり。登時あるじの女房は、良人を見かへり聲を潛めて、喃阿夏どの、今呼せしは家公の分付、然りとても餘の義に侍らず、此商量の侍るなる。やよこなたへ、と他事もなく、側に招き近づけて、人のこゝろもまだ知らで、媒妁めきたる言ながら、襄におん身を呼登したる、兩箇の阿客は武家がたならん。そが中に年紀、三十あまりとなぼしきが、かへさに家公に聒きて、おん身の事の根穿り葉を欲り、問れにければ

隱すによしなく、有つる儘に報給ひしに、彼人竊に嗟歎して、そは痛ましき事なりかし、渠もしその身をうち任して、人の妻にならまく欲せば、われ娶らんと思ふなり。この義を相譚ひ給ひね、と繰返しつゝ正首に、憑れ給ひし事しもあるを、吾儕は如今聞侍り。おん身のこゝろいかにぞや、と問れて阿夏は沈吟じたる、肚裏に思ふやう、わが身千辛萬苦して、この地へ來つるは陶ぬしに、珠之介を委ん、と思ひし事のあればなり。爾るに情願画餅となりて、あふよしは絶果たるに、又誰が爲に節操を守りて、一生涯を愆つべき。とばかりにしてけふまでも、こゝによるべのあらんとは、思はぬ人に思はるゝ、吾儕はとまれかくもあれ、珠之介が爲にしならば、推辭べき事ならねども、人の底意は測りがたかり。よく問質して後にこそ、と深念をしつゝ頭を擡て、思ひがけなき婚縁を、かくは執持給はする、そは耳よりの歡びなり。然とて宿所も告られず、名さへ氏さへ定かならずは、初見參の酒興に乘せし、浮たる言に侍らずや、といふに主人は膝推向けて、さればとよ、その事なれ。俺とても彼客人を、何處の誰と知らざれば、今わが妻の說示したる、一條のみにては、媒妁すべき事ならねども、且聞給へ後段あり、㧞彼人のいはれしは、某渠をけふ初て、脊戀てかくまで賴むにあらず、渠には舊き緣しあり、相別れしより既にはや、十稔あまりになりしかば、心ともなく面忘れして、迭に知らでありける

に、阿夏といふ名に心ずきて、熟視れば看る隨に、それなるべしと思ふよしあり。渠いかにしてこの地に來て、又歌妓になりたるやらん、問ずは疑ひ解がたかり、と思ひにけれど席上には、大く醉ふたる友人ありて、便宜を得ざれば默止たり。さるを猶疑ふて、渠云云といふ事あらば、これらのよしを傳へ給ひね。思ひ合する事あるべし、といはるゝに推辭がたくて、その義はこゝろ得候へども、阿夏には總角なる、男兒ありて博勞町なる、客店に今なほをり。客戲の債も多かるべし、この義はいかが、と問せも果ず、彼人莞爾とうち笑て、そは聊も歎しからず、わがいふよしを承引かば、左にも右にもせん術あらん、よく誘へて給へかし。われは宿所へ立かへりて、今宵亦來て囘答を聞ん。只管憑む、といはれたり。有如之者酒興に乘されし、浮たる言にはあるべからず、と思ふによりてわが妻に、よしを告商量して、言のこゝに及べるなり。唯是儞の爲にもがな、と妻にもいはれ、われもおもへど、後々までの吉凶は、神ならぬ身の測りがたかり。みづから擇み給ひね、と妻共侶に眞實だちて、聶き示すをうち聞たる、阿夏は頭を傾けて、彼人妾に舊緣あり、といはれしは誰にかありけん、早には思ひ出ねども、そは又對面せん折に、問はば定かに侍るべし。然る賴しき人ならば、おん媒妁を願ひ侍り、といふに夫婦は歡びて、なほ彼人の噂をすれば、影さす窻の梅の花、春の横日の暖き、黄昏近くな

りにけり。却說阿夏は退きて、とさまかうさま思へども、思ひ難たる彼人の、舊き緣しのありとしも、いはれしは什麼誰なりけん。初京師に在りし時、纔に一二度酒宴の席で、ものいはれたる客なる歟、近江の人か知らねども、今さら思へば何處でやらん、見たりし人の面影ながら、その名は思ひ出がたし。いはれしことの違はずは、とく來て名告あひねかし。然らば左いはん右いふて、身の憂事をつけの櫛、鬢の後毛搔揚て、人まつ緣の夕化粧、鏡も刀自に借物と、うち向へども影暗き、日は沒果て燈火の、こゝへ屆かぬ片ごころ、かゝる爲にと貯の、坐席遺りの蠟燭も、流れ渡りの身にしあれど、よろづよき日と曆手の、茶碗を覆す糸底に、建て彩る脣燕脂の、篠色も香も知る人に、見せなんとての所爲なりけり。春の夜なれば短くて、はや樓上に客もなく、門の戶卸す初更の比、彼客ふたゝび來にければ、主人ははやくこゝろ得て、且丫鬟に案內をさして、矮樓に登し茶を薦め、又盃を勸めけり。こゝは奥まりたる褊室にて、只一ト基なる燭臺も、いと趣ある心地はすめれど、彼客のこころ酒にあらねば、はやく主人の出て來よ。何といひけん阿夏が囘答を、聞まくほしといへばえに、岩越す波は連歌の額の、画を瞻仰て俟程に、主人は手づから一ト碟の、炙雞蛋をもて登り來つ。これを彼客に羞めていふやう、おん約束では候へども、魚肉は旣に用竭して、聊野菜の遺れると、これらの外は候はず、

一チ度過させ給へかし。曩に竊に賴ませ給ひし、縡の趣を遺もなく、阿夏に傳へ候ひしに、身ひとつならで子を携て、他郷に流浪へ侍れるを、舊き緣しのあるよしにて、娶らんと宣ふは、轍の鮒の江に放され、枯たる苗の雨にあふ、幸ひで侍れども、おん戲れ歟と思ひ侍り。來まさばふたゝびおん目にかゝりて、妾がうへを告まゐらせ、郎の素生もおん誠心も、定かに知せ給ひなば、いかでか推辭侍らんや、と如此まうしてこそ候なれ。這意を得させ給へかし、と告るにさこそ、と彼客は、膝の進むを覺ぬまでに、一ト言毎に應をしつゝ、感謝に堪ず聞果て、そは歡しき事になん、斯速に縡整ふも、畢竟足下の有功なるに、心祝の盃せん、といひつゝさすを辭ひかねたる、主人はそが儘受戴きて、傍に向て了鬟に、半分盛して喫む程に、肴しつべし等給へ、と制めて手はやく懷より、圓金一ト枚とり出して、鼻紙に載て取らせけり。物得て怒る人なければ、推辭ながらも是さへ受て、歡びを述壽きて、扱盃を返していふやう、彼一ト條は云々と、只今まうせし首尾なれば、阿夏をこゝへまゐらせん。在下とても淚脆さに、去歳の冬より呼とりて、さて擇了て見たれども、一升胡盧は一升なる、薄命人で候へば、おん愛願を願ふのみ、といひつゝ傍を見かへりて、子等よ、おん銚子の冷つらん、溫更てまゐらせずや。とくとく立ね、と急して、先に立して歩下の、紙屑拾ふあるじ態、現生活に脫落なき、

口も八調手も八調に、又一挺の蠟燭の、眞さへ截て退りける。春の宵の、夢とし覺て果敢なくも、立し浮名は一十稔、かはり果けん面影を、認られしより草枕、客宿に結ぶ妹と伏の、緣しも神の隨意ならば、花さかずとも浮萍の、浪のうねく\根を絕て、誘ふ水こそよるべの岸と、人はいへども嶋通鳥、うき瀨ながらの西東、さして往方はまだしら張の、かさ屋阿夏が細骨の、痩さへ見えて撓げなる、片手に銚子携て、登る階子に左褄、拿るだもわびし太織の、今の晴衣は、昔の房衣、端磨目だつ帶の眞、折隱せども恥しき、燭臺を徐と引退て、背を陰に上坐なる、客に對ひつ、うち微笑て、おん約束の違はせ給はで、今宵よくこそ來ましたれ、銚子を更てもてまゐりぬ。おん盃を抗給ひね、といはれて客も笑しげに、喃阿夏、嚮に主人に傳られたる、儞の囘報は詳に聞にき、認らぬ中ではなかりしを、われは持病の逆上によりて、去歲の春より秋までも、大く顏瘡を患しかば、主君に姑く暇を賜り、有馬の溫泉に浴みしつ、辛くして愈たれども、まだ疥迹の耗ざれば、面かはりして忘られけん、かゝれば儞を薄情なりとて、恨ん由もなきものから、彼陶氏を送らしたる、人の情は深草なる、茶店の首尾まで忘れし歟、といはれて阿夏は驚きながら、客の面をつくづくと、うち目戍りつゝ且恥て、原來おん身は陶ぬしの、親しく參り給ひたる、日野西さまの御侍、辛踏ぬしでをはする歟、と問へば莞爾とうち笑て、

然なり、辛踏光四郎なれ、これは〱、とばかりに、暫時辭も奈末與氏の、甲斐ある今宵の再會に、疾や初の疑ひの、忽地解し迭の歡び、光四郎は猶聲を微めて、喃阿夏、僂れば十あまり二稔になりぬべし。爾は良人に伴れ、二箇の子供を携て、鎌倉へとて啓行にき、と人の噂に聞たるに、この地へ來つるは陶氏に、再あはんと思ひしならん。彼木偶介はいかになりたる、繼子の小夏は恙なきや。故こそあらめ、いかにぞや、と問るゝ阿夏は涙ぐみて、かさね〱て薄命なる、この年來の艱難劬勞を、告まうさんは心にず、いとゞ面なく侍れども、花の洛に住わびて、立出し比足引の、山擀する暴惡雄の、そが禍事にあふみ路にて、木偶介も、彼小夏さへ、命はかなくなり侍り。妾は不測に刃を免れて、尚幼き珠之介を、鞠も育し千辛萬苦は、言一朝に盡しがたかり。かくて其後情ある、里人の家に身を寓せて、去歳まで其處に侍りにき。舊里ながら京師には、憑しき親類なし。おん身には知られたる、情由も侍れば陶ぬしに、あふて珠之介が久後を、いかでと思へど路遙にて、盤纏なければ思ふに任せず、こなたの空を年毎、瞻めくらしつやうやくに、情願稱ふて來し甲斐もなく、ぬしはこの地に在さず、朧左界の戰ひ敗れて、波路に沈み給ひし、と風の便りに聞えし折は、やる方もなき歎きして、倶に死まく思ひしを、子に羈されて殘る世に、盤纏も物も容儭の爲に、用盡してせん術なきを、人の情に歇船、

かゝる憂身は室津海の、底より深き宿世の罪障、哀れと思ひ給ひね、といひかけてよゝと泣沈めば、无四郎も亦嗟歎して、思ふに倍たる儞の薄命、そを慰るよしもなき、陶氏の陣歿は、われも京師で世の風聲に、傳へ聞てとく知れり。爾るに這回この地に來つるは、是私の所要にあらず、廼主君のおん使にて、大内殿へ年始の佳儀を、述させ給ふによりてなり。嚮に共侶にこゝへ來て、酒も遊びし一人ゝは、萬里小路賢房卿より、これも亦大内家へ、遣されたるおん使にて、某甲と呼るゝもの、旅亭は俺と一所にをれり。彼人は大く醉ふて、還ると軈て熟睡をしたるに、町宿なれば出居も易かり、然るにより伴をも倶せず、ふたゝびこゝへ來つるなり。儞が京師に在りし時、相見たる日は多からで、兩三回に過ねども、その折にはや心地迷ひて、世に生れて男子たるもの、斯美しく風流たる、女子を娶ることあらば、彼十五城にも易つべし。いかでと思ひ染にしかども、折からわれは新參にて、殿住ひなるそがうへに、京師に名たゝる歌妓の、良人すらありと聞えし花を、いかにして手折得べき、企及ぶべからず、と思ひ絕て在けるに、陶氏と情由ある事の、聞えたる比深草にて、圖らず儞に遭ひしかば、吾儕果さぬ戀草の、憂かりし事を身に摘て、人の別れの哀からんを、想像りつゝ汲引して、儞を陶氏に値せしは、老婆親切に似たれども、只一朝の情にあらず、有右而儞も良人と共に、他鄕に移住にき

と、又人傳に聞えしかば、いよ〳〵戀は絕果て、さて在りけれども妻をも娶らず、わが親は陸奧なる、陝布の鄕の鄕士にて、農業を旨とすなるに、われは京師の手ぶりを慕ふて、國學詠歌を好みしかは、親には熟くいひこしらへて、京師に陟り所緣に就て、兼綱卿に仕まつれど、戰世の衰にて、主君幽に在せば、身を立るよすがもあらず。舊里よりは年々に、とくかへり來よと聞えしを、なほ田舍には優よしあれば、ふり捨がたくて今茲に及べり、雖然わが親の、齢七十を越給ふに、何時までかかくて在るべき、一トたび故鄕へ立かへりて、親の心を休めんず、と思ふによりて去歲の冬、主君によしを聞えあげて、身の暇を請まうせしに、然あらば明春大内家へ、年始の使を勤て後に、舊里へかへれかし。この年來老實に、應に仕へしものなれども、知るゝ如く不如意にあなれば、取らすべきものもなし。この義明春別紙をもて、周防へ賴み遣さば、京兆をいふ義興必賜ものあらん、急ぐは要なき事にこそ、といと叮嚀に制め給へば、有がたきまで忝くて、御意に隨ひ奉り、故鄕へは云々と、君命を傳知らしつ、春立朝の霞をわきて、當國主に由緒をはします、萬里小路賢房卿のおん使と、共侶に京師を出て、いぬる日這地に著たるなり。かくて鶴峯なる城に到りて、主君のおん消息を呈しまゐらせ、城下の旅亭に退きて、且く逗留せし程に、ふたゝび城中に召入られて、國主の見參に入り奉り、則おん報

翰を遞與されし折、内々の義をもつて、思召旨あるよしにて、某には折紙附たるおん刀と、時服一襲に、沙金五十兩をとり添て賜りたり。是併わが君の、おん計ひによるものなれば、時の面目この身に餘りし、歡びをまうして退りにき。かゝればこの地の所要は果たり。翌隔翌の比立去らばやとて、賢房卿萬里小路のおん使と、勾當などする程に、彼おん使のいへりしは、垂柳橋の邊にこそ、名たゝる酒樓ありと聞たれ。京師の曩に誘給へ、今より其處に赴きて、倶に醉を盡すべし、といはるゝにわれも亦、路の向寄に所要あれば、共侶に旅亭を出て、こゝに來て見れば、果して違はず、客歌妓さへありといへば、召登して絃歌を聽くに、その面影も聲ざまさへ、笠屋阿夏によく肖たり。それかあらぬ歟、とばかりに、進止にこゝろをつけしに、その名を夏と呼るれば、いよ〳〵違ざりけり、と思ひながらも亂酒の最中、一夥なる人に憚あれば、樓上にては問も果さず、かへさに門より立戻りて、主人に問へば良人はあらず、珠之介とか呼れたる、獨子ありて他所にをり、阿夏が流浪の顚末は、箇樣々々と報られたり。こゝに至てわが疑ひの、半分は解けし春の雪、ながれ〳〵てゆく水と、人の往方の定めなく、東路にとのみ聞にしを、西の都に在明の、月にも優て思ひきや、十稔絶にし戀風の、復這浦に起んとは。わが身にはまだ妻もあらず、相譚よりて緣しを結ばゞ、舊里へ將てかへらんず、と思ひにけれ

ば些も擬議せず、軈て主人を媒妁にて、とく娶んといはせしは、豈一旦の浮氣ならんや。赤き心をその折に、はやく儞に知せん、と思ひし義のあればなり。陶氏のうへはしも、俺も一面の交りあれば、悼みおもはぬにあらねども、逝者は日に疎く、流るゝ水は去て返らず。儞年來彼人を、思ひし如く今よりして、吾儕を思ふ誠あらば、天にも地にも誓を立て、後の世までも夫婦にならん。從るゝ歟、甚麽ぞや、と問つ口說つ風流士が、風流女子に色深き、情を色のかへり咲、散らまくをしき相譚ひに、阿夏はいとゞ遣る瀨なき、感淚を稍拭ひ斂めて、賴しきかな辛踏ぬし、然までに思はれ侍らずとも、否とはいへぬ稻船の、最上の川も遠からぬ、その陸奧なる舊里へ、伴んとまで聞え給ふ。神をかけたる誓言に、十稔の憂苦を慰め侍り。然けれども伯勞町なる客店には債あり、珠之介も彼處に侍るを、いかにかすべき、と問せもあへず、その義も心安かるべし。嚮に主人の云々と、告られしによりて既にはや、この方寸に分別あり。われ幸ひに大內殿より、賜りたる金あれば、客館の債を償ふべし。又珠之介は儞と共に、京師まで將て還りて、爾后に亦せん術あらん。よしや今より吾兒として、舊里へ將てかへるとも、猒しからぬ事ながら、如右なしがたく思ふよしあり。わが親は理に強き、古代氣質の翁なれば、儞は這囘主君より、賜りたる女房なり、といひ瞞めなば障はあらじ、さばれ總角なる子さへあ

る、孀婦なりきと告まうさば、外聞も妙ならず、親も戯けきものとし怒りて、口舌これより起りやせん。然るときは儞の爲にも、珠之介の爲にも歹かり、因て且渠がうへは、主君に願ひ奉り、姑く京師に遺し措て、緩くわが家に召とるべし。腹料は是のみならで、這回儞を伴んに、賢房卿のおん使と、共侶には還りがたかり。吾儕は病に假托て、且彼人を急して、出し遣らんと思ふなり。この義も後やすかるべし、といふに阿夏は歡びて、綷遺もなきおん身の計ひ、京師は妾が舊里なるに、珠之介を那里に留めて、豫て知られ奉る、西の御家卿兼顯に聞えあげ、仕へまつらし給はらば、陸奥には憚の、關の門鎖を許され傳、將てゆきがたく侍るとも、妾が心は安かりなん。霜の撫子雪の松、左にも右にもおん愛顧もて、浮世の春に遇し給はば、親のみならで渠も亦、幸ひにこそ侍らめ、と憑む言葉の露の間も、最蕭やかに相譚ふ折から、忽地階子の轔む音して、主人はふたゝび陟り來つ。奈何那おん商量は、整ひて候歟、と問つゝ圓居に入る程に、阿夏は急に席を讓りて、鈍ましかりき親方さま、このおん客は京師なる、日野西さまの御内人、辛蹈ぬしと呼れ給ふ、素より由縁の侍りしを、おん顔瘡の迹耗ずして、面かはりさへし給へば、見つゝ惑ひて侍りにき、といふに又无四郎も、猛に辭を更めて、只今阿夏が報たる如く、吾儕は兼顯卿のおん使を奉りて、當國主へ參向したる、辛蹈无四郎寧成なり。主

用も綷果たれば、阿夏母子を相伴んといふ、歸京の商量決著したり。渠は素より脱れがたき、由縁のものにあなれども、相別れてより十稔あまり、迭に信絶たれば、その窮阨を拯ふに由なく、きのふまでも知らでありしに、幸ひにして資られたる、和殿の俠氣、感ずるにあまりあり。いかばかりなる報ひをなすとも、嗛るべくもあらざるを、旅にしあれば愚意に任せず、陶氏在京たりし時、友垣締びし事さへあれば、懷舊の長談に、「思はず小夜を深したり、といふに主人も歡びて、原來京家のおん使なる、刀禰們にてましませし歟、然る方ざまとは知ずして大く無禮を仕りぬ。彼子をこゝにて摔了せたりとも、本錢を容たる事にもあらぬに、誰にか謝義を受候べき。幸あるようすがを歡ぶのみ、吁愛たし、と祝ぎて、復盃を勸れば、无四郎殆笑坪に入りて、阿夏と共に獻つ酬れつ、ふたゝび盃を巡らす程に、はや眞夜中になりしかば、无四郎は別を告て、客舍にかへらんといひけるを、阿夏はさらなり、主人も禁めて、路次の程心もとなし、今宵はこゝに曉し給ひて、翌は未明にかへらせ給へ、といはるゝも憎からず、素より望む所なれども、有繋に早には從ひ難て、幾回となく立まくしつゝ、やうやくその議に任しけり。この時丁鬟は皆睡りて、呼べども人の來るものなければ、主人は手づから盃盤を、とり斂めて辭し去りつ。阿夏は臥簟を布儲け、无四郎が爲に枕を薦て、絶て久しき慾界の、快樂

に曉る天を恨みけり。烏虖痴なる哉這狂漢、譬諭してもて箴とす。彼花を偸むが爲に、その枝を折るものは、己が身の先枉るを思はず、然れば海人の股を劈くは、その珠を藏すが爲なり。瞽女の脛を顯すは、その蚤を拂ふが爲のみ。人見てこれを笑へども、その醜體を羞ざるは愚に近し。且舊たる陶器を愛るものは、その缺たるを瑕とせず、好みて敗衣を買ふものは、新しきをもて妙とせず、飽溫の飢寒を羨み、名利の多事を憂るは、皆惑ひのみ。是等すらいと恠しきに、世に迷憎の病あるものは、善惡の差別に闇く、驕暴の患あるものは、その身を忘れて、他の惡を聞まく欲す。人の嗜慾のさま〴〵なる、阿夏が恥なき、いふにしも足らねど、旡四郎が事を好みて、世の捨物を拾へるは、彼迷憎の病あると、敗衣を好みて被拔と稱へ、且その直の廉かるを、掘出といふ類なるべし。

第十五回

青蚨厄を釋て子母故鄕に還る
黄門情を察して艷童西家に留る

却說辛踏旡四郎は、黎明の比旅亭に還りて、竊に臥簞に入てをり。一夥なる使者はかくとも知らで、起て旡四郎を呼覺すに、豫て計りし事なれば、旡四郎答て、否、某は昨宵より、酷しく

腹痛みて、水瀉しば〳〵なりければ、通宵寐も睡られざりき。憶にきのふの宿醒にて、輕症にあるべけれども、兩三日も保養せずは、長途の旅行心もとなし。然ばとて定めある、歸京の日期を等閑にして、御邊も後れ給はんは、綷の宜きにあらずかし、俺うへには祫念せで、とくとく歸路に赴き給へ、といふに件の使者眉を顰めて、そは心憂き事になん、藥を用ひ給ひし歟、城中へよしを告て、醫師をや招くべき、といふを无四郎聞あへず、藥はこゝに貯あり、醫師を請ふに及ぶべからず、各々主君の爲にすなるに、御邊愍に拘づらひて、猶豫せらるることしもあらば、俺心安からず、願ふははやく歸京して、俺邸中の雜掌達へ、よしを傳達し給ひね、さらば咎を免るべし、それまでにも至らずして、速に本復せば、遠からず赶著て、倶に京師へ還りてん。この義をこゝろ得給ひてよ、といはるゝよしの理りなれば、沈吟じつゝ頷きて、倶に京師を出たるに、一夥の病臥をふり捨て、歸途を急ぐは心にず、朋友の義に背くに似たれど、私の旅ならぬ、主用なるをいかゞはせん、某醫師にあらねども、血色を看て猜するに、實に霜露の病にこそ、日ならず瘥り給ふべけれ。豫ては翌共侶に、立去るべしと契りしかども、御邊病臥の趣を、傳達のよしもあれば、けふ晝起にすべけれとて、猛に從者を急しつ、客裝を整て、无四郎が從者と、その宅旅亭のものどもに、看病藥餌の事までも、叮嚀に心つけて、

別れて歸洛に赴きけり。既にして无四郎は、後やすくなりたれども、人の思はんことのをしくて、この日は猶も臥てをり。扨次の日になりしかば、病著のはや瘥りたりとて、從者を將て博勞町なる、粟津屋に赴きつ。あるじ祥八に對面して、姓名を告り來意を告て、阿夏母子に由緣あれば、那窮阨を見るに忍びず、その故は箇樣々々と、侯鯖樓にてゆくりなく、阿夏にあひし縡の趣、渠等が客僦の舊借を、償んとて來つる事、且珠之介をも共侶に將て、京師に還らんと思ふ事情を、辯舌爽に演しかば、祥八聞つゝ歡びて、いかでかは異議すべき。特に國主へまゐらせられし、京家の使人なるよしを、告られしより駭き怕れて、その欵待大かたならず。妻もろ共に口誼を舒て、珠之介にも恁々と、報て无四郎に遞與しけり。是より先に珠之介は、母の阿夏が消息して、件の事の趣を、箇樣々々と知せしは、既にきのふの事なりければ、放生會にあふ桶の魚の、讀經を聽る心地しつ。是よりして无四郎が、資を貟み心侈りて、あるじ夫婦に使れず、動もすれば外に立て、彼人遲しと俟程に、果して无四郎が來にければ、呼るゝ隨に座席に造りて、恭しく對面す。當下无四郎は、傍に招き近づけて、這回母親共侶に、京師へ伴んとて來つるよしを、懇切に說示しつゝ、額髮を押撫て、相別れしは十稔あまり、爾が三歲の比なりければ、俺在としも知らざりけん、母御に再會せし折に、爾の事も詳に聞にき。日來の

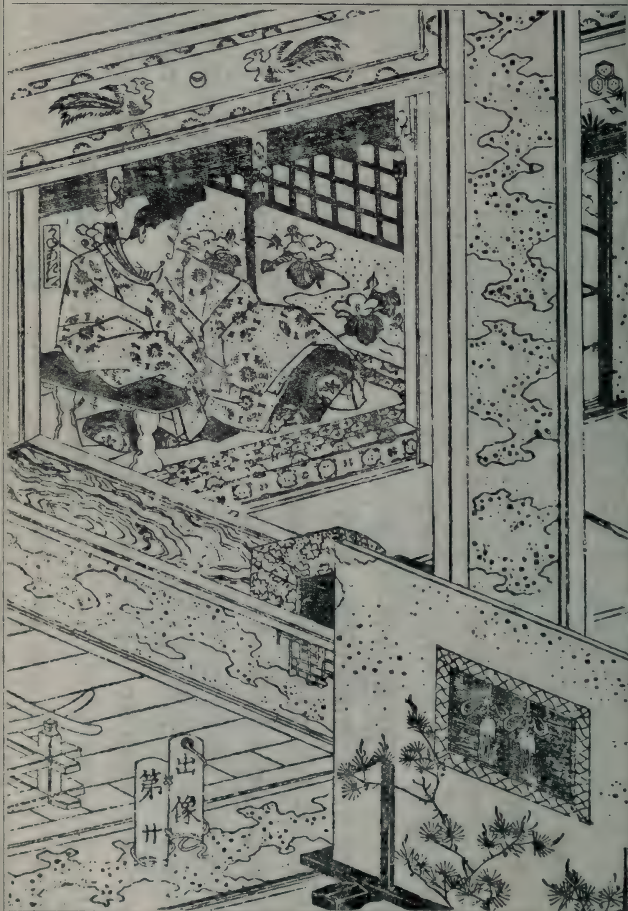
艱苦さぞあらん、今より吾儕が後見して、人の爲に門をば掃せじ、心つよく思ひね、といひ慰る愛々しさに、珠之介は恩義を感じて、そが儘傍に侍りたり。然程に无四郎は、阿夏が客僦の舊借を、祥八に問ふて金を取らせ、別に准備の一封金は、二分歟三分か謝義として、阿夏が爲に贈りしかども、祥八は薄氣味惡さに、敢又これを受ず、客僦も三分之一を輸て、手實を書て遞與しけり。縡はや遺なく果しかば、无四郎は祥八夫婦に、歡びを述、珠之介を携て、侯鯖樓に赴きつ。昨今の首尾恁々と、阿夏に囁き相歡びて、主人には沙金三兩を、贈りて媒妁の謝物とす。返すを忌むといふよしあれば、主人は固辭ことを得ず、庖丁に術を盡したる、酒宴を張て饗應けり。登時あるじの女房も、无四郎に對面しつ、阿夏にはわが衣の、新しきをもて贐とす。扨あるべきにあらざれば、无四郎は多く喫まで、盃を辭し別を告て、阿夏珠之介を將て旅亭に還りぬ。こゝも町宿なりければ、かゝる事すら後やすかり。一兩箇の從者には、東西を取らせその意を得さして、忌憚ることなかりけり。既に一夥なる彼人に、二日路後れし甲斐ありて、かくまで本意を遂たれども、女子を作ふ旅なれば、水行こそよかめれとて、その日便船を討るに、浪速へ歸る船ありければ、そは究竟と歡びて、次の日旅亭を立去て、僉共侶に湊に赴き、件の船にぞ乘にける。這回は日毎に順風にて、浪路に障りなかりしかば、はやく浪速津に著に

けり。是より阿夏を客轎に乘し、珠之介を從して、翌日京に入る程に、五條わたりなる相識許、阿夏母子を留措て、西の君所へかへりまゐりつ、歸京のよしを聞えあげけり。賢房卿の使人は、陸路をかへり來にければ、无四郎には日數後れて、仲春の初旬、やうやく京著してければ、契りし事の空となりしを、いと悔しくぞ思ひける。又无四郎は那地にて、病著に臥したれども、歸京の日期に後れじとて、水行を歸まゐりしに、日每に順風なりしかば、思ふに優て逸速く、歸洛仕りぬ、と聞えあげて、大内殿の報翰を呈し進せ、彼君より賜りたる、東西恁々と披露して、その歡びをまうせしかば、君邊の首尾よかりけり。その次の日に兼顯卿は、无四郎を召近づけて、周防の消息を問ひ給ふ。是等の言の便宜を得たる、无四郎は山口にて、思はず阿夏に再會したる、縡云々と告まうして、渠は君も知食たる、二代の名妓で候ひしに、大く薄命なる女子にこそ候へ、今より十稔あまりさきつ比、馴し華洛に住わびて、鎌倉へとて赴く道中、山豪に跟られて、良人と繼子は命を隕し、その身は珠之介と喚做したる、嬰兒を扛抱きて、辛くも脱れて近江なる、山里に身を寓つ、年來其處に候ひしに、なほ身の憂患に堪ざりけん、山口の繁華を傳聞て、去歳の春その子と倶に、周防に赴きたりけるに、由緣の人は世を去りて、盤纒さへ竭果しかば、進退其首に究りて、垂柳といふ橋の上より、身を投んとせし折に、某は

からず邁あはして、見るに忍びず推留め、容子を問へば別人ならず、むかし相見し京師の歌妓、件の夏で候ひし。渠は陶興房にも、疎からざりしものにして、君にも知食たれば、いとゞ哀れの彌増て、意見を盡し死を禁め、その子珠之介共侶に、歸京の船にうち乘して、この地に相伴ひ候ひき。さばれおん使を、奉りたるかへさなり。陸路ならば倶しがたき、もの共に候ひしを、船中は親疎となく、乘合するも尠からねば、如右計ひて候、と實言虚談うち雜て、密やかに告まうすを、兼顯卿聞給ひて、そは不便なる事ぞかし、舊里にはなほ親族あるや、その夏が子はいかにしたる、と問せ給へば、さン候、京師は渠が故鄕なれども、親類もなく憑しき、友もあらずとまうすなり。又夏が子なる珠之介は、儔稀なる美童にて、年十三四にもやなり候はん、愚にも見えず候へば、某が代として、召使せ給ひなば、こよなき彼身の幸なれども、賤きものの子なるをもて、申上ヶ難候ひき、とおそる〳〵まうすにぞ、兼顯卿は頷き給ひて、今戰國の世にしあれば、一チ藝あるもの、素姓によらず、發迹たるも多かれば、よしや夏が子なればとて、嫌ふべき事にもあらず、それのみならで彼少年は、襁褓の中に在りし比、陶興房が愛せしよしを、われ人傳に聞しことあり。曩に周防へ赴きしは、彼興房が庇に立ん、と思ひし事もありつらんに、その比左界の戰ひに、興房入水の聞えあれば、これ彼以不便なり。夏共侶に召よ

せよ、密やかに渠等を見て、汝がまうす如くならば、留置くともけしうはあらず。こゝろ得たる歟、と叮嚀に、示し給へば无四郎は、歡び面に露れて、言受しつゝ退出けり。然ば辛踏无四郎は、その日五條へ消息して、君命の趣を、阿夏珠之介等に告しかば、阿夏はさらなり珠之介も、歡ぶこと大かたならず、倶に身のざまをとり繕ひて、次の日无四郎が宿所に來にけり。阿夏は山口を辭し去るとき、侯鯖樓のあるじの妻が、贐にとて贈りたる、小袖を袿にしたれども、珠之介は袴もなければ、无四郎が被替を借て、長やかなるを折返しつゝ、忙しく穿せなどす。縡既に整ふ程に、无四郎は君所にまゐりて、かくと聶きまうしゝかば、兼顯卿は閑室にて、渠等を召よせ給ひけり。その事の爲體、綠巽亭にて酒宴の折には、似るべうもあらずして、掛わたしたる彼此の、翠簾の錦はふりたれども、重席薦の上座に、彼卿をはしましたるが、最も尊大く見え給へば、阿夏珠之介は畏みて、額づきたる儘進み得ず。登時兼顯卿は、頻りに招き近づけて、一別以來年闌たる、夏は恙もあらざるよし、歡び思ふ所なり。爾れども幸なくて、良人を喪ひ落魄して、近屬他郷にありけるよしも、寧成が噂に聞にき。陶興房と疎からざりけん、事をしこゝに思ひ出て、懷舊の情禁めがたかり。見るに汝が產たる子は、現美しき少年なり。當家に隨身の願ひあるよし、そを允さじといふにはあらねど、知るゝ如き麿に仕へて、いかば




出像
第廿

かりの事やはある。いまだ宿所もなきよしなれば、且くこゝに留措て、左も右もなさばなしてん。夏もよすがをまだ定めずや、思ふに優てなほ弱かり、今こそかくて在りもせめ、女子は總て素性によらず、氏なくて玉のこし方を、昔語になす日もあらん。思ひな屈しそ、と慰め給ふ、仰懇切なりければ、阿夏はいよゝ忝さに、只阿とばかり平伏て、果敢々々しくは答まうさず。折から阿夏等に案内をしつゝ、畫壁の下に侍りし、无四郎急に進み出て、いと有がたき御懇命、某さへに面をおこす、渠等が幸ひこのうへや候べき。向にも申上ヶたる如く、夏は京師に頼しき、親類も候はず、只陸奥には父がたの、舊族の候へば、彼處へゆかまくほしとまうしき。這回某身の暇を賜りて、故郷へ還る便路なれば、送り届んとこそ思ひ候へ。然けれども珠之介さへ、將てゆくことの輙からねば、おん給事を願ひしに、その義御許容まし〳〵たれば、さこそ安心仕らめ。須彌より高き御恩にこそ、と阿夏に代りてまうせしを、兼顯卿ははやく猜して、心に思ひ給ふやう、原來寧成は戇にも、夏に惑ひてこの地に伴ひ、亦舊里へ將てゆきて、妻になすべく思ふならん。われ初より事情を、訝しく思ひたるに、今の辭に顯れたり。主の使に立ながら、女子を倶して來つるすら、大かたならぬ越度なるに、主にその子を委ね置て、身を振やすくせまく欲する、伎倆の程こそ鈍ましけれ。信と罪すべきものなれども、今の世は

貴賤となく、忠信廉直罕なれば、理義を守るを古物と唱へて、笑ざるものあることなし。況這寧成は、年來よくわれに仕へて、這回の外に愆なし。然により渠が隨意、暇を取らする今に至て、その罪を糺彈せば、誰か仁者の所行といふべき。曩に陶興房が、夏に浮名の立たるを、傍痛く思ひしに、今又かゝる事こそあれ。衆人醉ふて醒ざれば、粕を舐るにますことあらじ、と臆度怜しき長袖の、寛仁大度惻隱なる、心に祕て咎め給はず。知れどもしらぬ面色して、現寧成がまうす趣、夏が爲には便宜なるべし。むかし文屋康秀が、三河掾にて赴く折、小野小町が色衰て、ありけるを誘引て、倶してゆかんといひけるを、小町は推辭こともなく、

わびぬれば身をうき草の根をたえてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ

とよみて、從ひにきと物に見えたり。康秀と寧成と、文字は異なれ訓は似たり。夏は小町の後身歟。いと〳〵奇なり、と笑ひ給へば、无四郎阿夏は堪ぬばかりに、且怕れ且恥て、又いふよしもなかりけり。且くして兼顯卿は、又无四郎に宣ふやう、豫ての約束なるにより、汝には身の暇を取らせん。はやく故郷へ赴きて、親の心を慰めよ。珠之介はこゝに留めて、近習のものに預措ん。有右者夏が心も安く、よすがを討るに便よからん。寔に不測の再會ながら、又別れなば西東、都の花に鄙の月、相見ることは難かるべし。みづから愛して珠之介が、諸ゆく日を

佚ねかし。今はしも是までなり。寧成局へ案内して、物はませよ、と宣へば、阿夏は頻りに感涙の、進むを袖に推禁め、珠之介共侶に、无四郎が後に跟て、退き出るこゝろの中に、兼顯卿は世に稀なる、粋の又粋、粋中の粋なる君ぞと感じける。

第十六回

三碗の清茶暗に元盛を動す
一箇の湯銚克く國友を悅しむ

辛踏无四郎寧成は、君命の首尾思ふに優て、珠之介を留置れ、その身は豫て願ひのまに〳〵、致仕の暇を給はりければ、天に歡び地に喜びて、阿夏を五條にかへし遣し、絆の障りのなからん程に、はやく京師を辭し去るべしとて、客裝を急しつ、準備はやくも整ひしかば、兼顯卿に見參して、洪恩を謝し奉り、朋輩に別を告て、その明日五條に赴き、頃日阿夏を預置たる、相識に東西を贈りて、渠を將て故鄉にかへる、絆の趣を告などす。阿夏はこの日の起行を、逆无四郎の報たりければ、他事なく用意して、昨より佚てをり。且无四郎が世才に長たる、縦傭足でも、從者ありては費多かり。行旅は驛々なる駄馬に負して、ゆくこそよけれ、と尋思をしつゝ、馬を牽して來にければ、誘とて倶にたち出けり。珠之介は那日より、西殿兼顯卿の

いふ邸に留りて、近習の子舍に在けるが、暫時の暇を賜りて、藪の下まで送りけり。子に教ゆべき親ならねども、阿夏は別の悲しさに、おなじことのみ繰返しつゝ、只云云といふも果敢なし。現生れしより昨けふまで、片晌も離ずして、苦樂を倶にしたりける、母なり子なる珠之介も、桓山四鳥の懷ひあり。哀々たる涙の玉、戀憐たる別の觴、爭ひがたき骨肉の、情狀言外に見れて、慰むべくもあらざるを、无四郎諫奬して、遂に袂を分ちけり。何時をあふ瀬と揣られねば、ゆく親は笠に手をかけて、うち仰ぎつゝ屢見かへり、又遺れる子はなほ立在て、人は霞にうち紛れ、遠くなりゆく馬の鈴の、果は聞えずなるまでも、惘然として目送りけり。凡人の子たるもの、いまだ親に告ずして、娶るを非禮の禮といふ。かゝる野合に所を得たる、男女の情慾果せるかな、現身を捨る溝壑はなし、只子を棄る藪の下あり。知るも知らぬも逢坂の、後人話柄になさんのみ。无四郎阿夏等が事、話是下になし。是よりして珠之介は、兼顯卿の第にをり。近習の弱輩に從ふて、日毎に諸禮を見習ふに、華洛の手ぶりは夢にだも、知らぬ田舍兒の事にしあれば、左に就ても右に就ても、不敏ならぬ節もなくて、只笑るゝのみなるを、いと朽をしく思ふになん、心を切てこれを習ふに、素より愚魯ならざれば、幾程もなく會得して、もののいひざま進止まで、優美にぞなりにける。是れによりて兼顯卿は、珠之介を召出して、

身邊近く使ひ給ふに、よろづ主の機を攬て、命ぜざれどもその意を悟り、誨へざれどもその義を辨ふ。特に怜利き少年なれども、その性便佞利口にて、進止に表裏あり。且容貌の柔從にて、女子めきたる艶色なるも、そが眼中に煞氣を帶て、角睞睛なるも世に異なり。善惡邪正は今よりして、料知るべき事ならねども、この者成長したらんには、いかにしてわが爲になるべき。倘禍を惹出す、事しもあらば臍を噬とも、後悔其處に立がたからん。とく遠離るに優ことあらじ、と心に疎み給へども、させる愆あるにもあらぬに、追出さんはさすがにて、思ひ煩ひ給ひけり。有如之程に、一日管領高國の權臣に、香西四郎左衛門尉元盛と喚るゝもの、稟承るべき事ありとて、兼顯卿を訪まゐらせけり。這元盛が主なりける、武藏守高國は、民部少輔政春の嫡子なり。その家にては庶流なれども、近曾京都將軍家、廢立の義によりて、義稙を廢して、義晴を立たるなり管領に補せられしより、威勢肩を比るものなし。家臣多かるそが中に、件の香西元盛と、波多野備前守稙通と、柳本彈正忠國友は同胞なり。這兄弟三名は、丹波一國を分領して、權威をさく〳〵、主の高國に減らず。譬ば鎌倉管領の權臣なりし、長尾太田等を世に稱て、内管領といひしに相似て、稙通は丹波なる、八上の鄉に在城し、元盛と國友は、在京して主の執事たり。就中國友は、初少年なりし時、容止猗々しかりければ、高國これを寵愛して、衾を倶にせし夜

多かり。既にして今ははや、壯年になりたれども、その餘波とて寵衰へず。然によりこの年來、權を弄び威を振ひて、兄を兄ともせざりしかば、元盛懊憤りて、牆に鬩ぐの懐ひあり。さばれ華洛も戰馬に荒たる、人僉安危を定難て、鬼胎を抱く折なれば、恨を祕して言に出さず。聊歌を嗜みしかば、公卿上達部に親みて、資にせばや、と尋思をしつゝ、日野西殿へも疎からず、をり〳〵に訪まゐらせて、晤譚に時を移す日も多かり。間話休題、この日中納言兼顯卿は、元盛に對面して、うち譚ひ給ふ程に、珠之介は茶の給侍して、元盛に薦ること、兩三回に及びしかば、元盛しば〳〵見かへりて、卒爾には候へども、那少年は從來の、扈從達に候歟。その名を何と召るゝやらん。是までは見も熟ざりし、美童にこそ候へ、と含笑ながら問まうせば、兼顯卿頷きて、渠は末松氏にして、珠之介と喚れたり。譜第のものの子にはあらで、近屬まで侍りける、舊臣寧成といふものに由縁あり、孤なりと聞えしかば、姑くその代として、こゝに召措き侍るのみ。その心ざま愚魯ならず、見らるゝ如き美童なれば、何處まれ薦遣して、武辯の家臣になさばや、と思はざるにあらねども、いまだ便宜を得ざるなり。世に薄命なる者なりき、と微やかにぞ報給ふ。登時元盛思ふやう、那末松珠之介とやらんこそ、多く得がたき美童なれ。わが主君に薦まうして、その左右に侍らせなば、弟國友が權を奪ふ、こは究竟

の方人ならん、とはやくも胸に計較たる、心ともなく膝を進めて、賢慮仰のごとくならば、在下預り奉りて、ともかくも仕らん。この義を允させ給はんや、と辭せはしく問まうせば、兼顯卿歡びて、足下もし麿になり代りて、渠を執立給はらば、こよなき彼身の幸ひなり。さばとて軈て珠之介を、身邊近く呼よせて、件の縡の趣を、云々と説示し給ひて、汝今より身を委ねて、香西氏に從はば、こゝに在るには八入にまして、漸々に福ひ多かるべし。勉よかし、と諭し給へば、珠之介は席を避て、あるじの卿と元盛に、身の歡びを述にけり。これ亦異議のあるべきならねば、兼顯卿はさもこそとて、元盛が乞ふに任しつ、翌は夙めて珠之介を、おくり遣すべけれとて、約束をし給へば、元盛ふかく歡びて、固く契りて退りけり。却說末松珠之介は、香西が宿所に赴きて、身邊近く使るゝに、亦よく主の機を揣りて、意に悖ずといふことなし。元盛はその初、渠を高國に薦揚て、柳本彈正が、權勢を折んと、腹策をしたりしに、そが男色に心惑ひ、便佞利口に蕩されて、惜きものかなと思ふにぞ、愛する心ふかくなりて、放遣るべくもあらざれば、豫の密計空となりて、夜每に臥房に侍らせつゝ、遂に龍陽にしたりけり。現戰國の風俗にて、男色雞姦の婬樂に、耽らぬもののなき世なるに、珠之介が標致人に捷れて、且よく媚て世才あれば、元盛いよ〳〵寵愛して、姑くも左右をはなさず、初に主の高

國へ、進らせばやと思ひしことは、言に出さでありければ、珠之介すら知るよしあらで、主を不足に思ふことなく、歯を染紅粉を施して、身には綾羅を被飾るを、過世ありけりと歡びしも、漸くに心侈りて、その意に慊ぬものあれば、あしざまに執成て、罪なきを追退け、又よく阿諛ふものあれば、功なきも主に薦めて、祿を增こと往々ありけり。元盛陪臣なりといへども、丹波數郡の地を食みて、且管領の家宰なれば、下風に立んと願ふもの、必先珠之介に、東西を贈り好を締て、その執成を賴ぬはなし。只是一箇の少年に、從類老黨阿容々々として、なべて頭を擡得ず。彌子瑕が衞君に愛せられ、鄧通が漢皇の、寵恩に誇りしと、和漢その差これあるのみ。惑溺濫賞異ならねば、人目覺しく思ひけり。とかくする程に三稔を歴て、大永五年の夏肆月、香西元盛が主なりける、管領武藏守高國は、四十二の厄たるにより、猛に祝髮入道して、松岳道永と號しけり。後に法名を改めて常桓といふ この歡びをまうさんとて、元盛君所へ出仕しつ、曛昏にかへり來にけるが、その面色常にかはりて、只顧歎息したりしを、珠之介訝りて、けふは御館の御剃髮にて、祝席を開れ、酒宴を賜ふと傳聞しに、かゝる愛たき折にしあるを、いかなる事の候ひて、うち惱せ給ふやらん。こゝろ得がたく候、と問れて元盛貌を更め、さればとよ聞候へ。嚮に御酒宴事果て、都鄙賞罰の群議あり。汝はいまだ知ざるべし、阿波の三好希雲等は、

當館高國をいふと同宗なる、前管領澄元主の、執事の老黨たるにより、當館を擊退て、主を京師へ還さんとて、いぬる永正十七年、庚辰の春正月、大軍を催して、遂に京師へ攻登り、一旦勝利を得たれども、この年暮春の比に至りて、三好はいたくうち負て、降參をしたりしを、その子三好孫四郎長則、芥川孫二郎長光等と共侶に、絏首をぞ刎られける。そが降參を許容しつつも、この義に及び給ひたる、當館のおん計ひを、三好の黨ふかく怨みて、鏃を礪ぐと聞えたり。かゝる故にいぬる比、左界の城を敵に略られて、四國の通路不便になりぬ。件の希雲は不義の老禿、那鬪戰より前一チ年、永正十六年渠が爲には君宗にて、一ト隊の大將に執立たる、淡路守成春ぬしを、弑したりける天罰にて、滅亡はさる事ながら、希雲居士が嫡孫なる、薩摩守又筑前守元長は、理義に聰しき良將なれば、私の怨を思はず、當家と和睦のこゝろあり。われさきつ比間者をもて、これらのよしを知るゆゑに、館に薦め奉り、阿波へ使ひを遣して、元長を招き給へ。某この義を奉りて、彼地へ發向仕らん。元長なほも疑ふて、這回の和議を承引ずとも、左界の城は返すべし。然るときは御方に利あり。時は得がたく失ひ易し。その故は慿々と、綷詳に演しかば、館はしばしば領き給ひて、既に許容の面色なりしを、年來不和なるわが弟、柳本國友のみ、この議を拒み說破りて、三好は御家僕に等しきを、今さらに腰を折めて、

弱みを示す事やはある。然るを元盛が執成まうすは、敵に香餌を食されて、主を賣んと欲する歟。こゝろ得がたく候、と聲苛めしくまうしゝかば、館は彼奴に惑されて、遂にわが議を用ひ給はず、剰面目を喪ひて、立しほもなく退りたり。他人はとまれかくもあれ、弟の爲に辱られて、そを訴る所なき、懊惱胸に滿て、思はず歎息したるなり。慷慨事にあらずや、と卿言がましく聒くを、珠之介うち聞て、昔も同胞不和なりしは、頼朝義經を首として、幾人も候べし。なれども運は尊卑によらず、兄は弟に及ずして、從ふも往々これあり。君同胞は然るにもあらず、君は外事を掌り、舍弟彈正國友ぬしは、內事をものして寵臣たり。その職役に甲乙なければ、胞兄弟和睦し給ひて、內外をよく理め給はば、衆人いよ〱下風に立て、威勢三好に等しかるべし。此に御心つかずして、年來不和になり給ひしは、甚麼なる故に候ぞ、と問れて元盛駭嘆しつゝ、後方を見かへり聲を潛めて、適微妙くも問つるもの哉。國友が動すれば、われに無禮の言を出すは、寔に以あることぞかし。抑遠山松と名けたる湯銚は、珠光が遺愛の名物にて、わが家に祕藏せり。そを國友が得まく欲して、乞ふこと屢なりしかど、嫡家相傳たるにより、決して與へざりければ、渠この事を痛く恨みて、不快の色を見したり。是より今に至るまで、骨肉竟に睦しからず。こは國友が無理ならずや、と告るをつら〱うち聞たる、

珠之介はものとも思はず、然ばかりの義に候はば、賢慮を惱し給ふことかは。速にその湯銚を、贈りておん和睦候へかし。烏滸がましくは思さんが、某彼處へ赴きて、和議を整候はん、といはせもあへず元盛は、呵々とうち笑ひて、愚なり珠之介、天地は反覆することありとも、不義の弟に手を降て、さしも親より讓られし、得がたき貨を贈らんや、と敎鬧猛くいひ懲すを、珠之介は又推返して、仰では候へども、世に最稀なる墨迹道具は、得がたきをもて人に誇れど、そは泰平の寶にて、錆たる鎗、狂へる弓にも太く劣りて、戰國の、要に立べきものにあらず。はやく贈り遣して、胞弟和睦し給はば、阿波へ使節を命ぜられて、左界の城を得給ふべし。左界は都會の福地にて、遠山松の湯銚よりも、その利萬々たるべきものなり。加旃三好の黨、恩義を感ずることあらば、贈ものも多からんを、狐疑して便宜を失ひ給はば、御後悔もや候はん。賢慮を回し給はんことのみ、願しくこそ候へ、と阿容たる氣色もなく諫しかば、元盛有理、と初て曉得て、感ずること大かたならず、思ふに倍たる汝が意見、その議に從ふべけれども、年なほ二八の小孺子が、よく國友に說得んや、といふをば聞かず微笑て、某近江に在りし時、師の坊に從ひて、和漢の故事を粗聞たるに、むかし武内紀宿禰は、年十三なりし比、天子の密勅を奉りて、北陸道を巡歴りつ、民の邪正を問攷へて、治めて還りまゐりしとぞ。又唐山な

る秦の甘羅は、年甫て九歳なりしに、呂不韋が爲に使して、大功を立し事あり。有如之ば年の多少によらず、才を擇みて任用すべし、といはれし師說も候へば、機に臨み變に應じて、御本意を達せん事、胸中に覺あり。枉て遣し給ひね、と頻りに請ふて已ざりければ、元盛やうやく頷きて、年に倍たる汝が才幹、なす事あらじと思はねども、わが弟は權に誇りて、人を見ること狗子のごとく、我意に募りて辯說を、よく信容るゝものにあらず。等閑にな思ひそ、と叮嚀に、警て、次の日件の湯銚を、袱に包み筥に斂めて、珠之介にこれを齎し、心利たる從者を、多く隷てぞ遣しける。畢竟珠之介が、柳本へ使して、後の話說甚麼ぞや。そは次の巻に、解分るを聽ねかし。

第二輯 卷之四

第十七囘

狡豎利を說て季孟を和ぐ
墨吏勢を負て役夫を屠る

話表、柳本彈正忠國友は、日每の出頭時めきて、暇なき身は、宿所へも、詣來ぬる人々の、名簿苞苴の多かるを、見もせん、よしをも聞んとて、たま〳〵家に在りける折、執達の若黨が、遽しく主の身邊に來て、香西殿のおん使、末松珠之介と名告れるもの、拜謁を請まつりぬ。いかゞ計ひまうさんや、と告るを國友見かへりて、わが兄ながら快らぬ、尉殿いふの使ならば、對面して何にせん。且その來意を諮ねよ、といふに若黨こゝろ得て、客房のかたに赴きたる、程しもあらずふたゝび來て、則御意の趣を、彼おん使に聞え知して、稟さるゝ事あらば、承らんといひしかど、些もうけ引氣色なく、否、一大事の議に侍れば、人傳には述がたし。とく見參を許し給ふが、御主君のおん爲なり、とまうすばかりに候、と報れば國友冷笑て、そは情剛き奴なりかし。面魂もさぞあらん。幾十歲許の男ぞ、と問へば若黨、さン候。年尙二

ば、實に大事の使なる八可なる、女子にして見まほしき、美少年にて候、といふに國友眉を顰めて、いひおこさるゝならば、出頭の老黨もて、いはせらるべきことなるに、相應からぬ小孺子もて、いはいよ〳〵訝し。然ればとて猶あはじといはば、憶しにけりと思はれん。者共來よ、と呼立て、近習二名を從へつ、童扈從に大刀を持して、出て珠之介に對面す。登時末松珠之介は、携來つる一包の、湯銚を傍に措て、國友を見て、手を膝に、かけたるのみにて額をもつかず、なほ自若として在りしかば、國友怒れる聲高やかに、汝は尉殿の使なる歟。京師も近属事多くて、旰食、宵衣を被るまでに、公務をこの身の任とすなれば、使者にあふべき暇はなけれど、大事の一議なりとかいへば、枉て對面を許せしに、無禮の擧動奇怪なり。憶に汝は乳臭き、小孺子の分際で、主の使をよくせんや。こは必わが兄の、猛に病痾に犯されたる、亂心の沙汰なるべし。無益なりき、と敦圉て、はや身を起し席を跟立て、奥に入らんとする程に、珠之介は衝と寄て、袴の裙を引とゞめ、やよ刀禰暫時等せ給へ。在下、刀禰を侮りて、拜することの遅きにあらず。今日前の利を思はずに、同胞睦み給はぬを、歎くのあまり禮に違ひて、不敬の罪を得たるのみ。在下不肖なりといへども、賤者は貴人を、敬ふ可の禮儀は知れり。爾るに刀禰は在下が、不敬を咎め給へども、子としては親を敬ひ、弟としては兄を敬ふ、その義を忘れ

給ひし歟。同胞年來疎遠にして、その使だも憎み給ふを、人たる道といふべきや、といはれて國友驚きながら、且く佗と見かへりて、思ふに優たる汝が諫言、只一句にしてその意を得たり、と稱へてふたゝび坐を占れば、珠之介も退きて、故の處に侍りしを、國友近く招きよせて、目今汝が意見の趣、理りあるに似たれども、われ豈年來兄を疎みて、胡越のおもひをなすものならんや。われは總角なりし比より、館に昵近し奉りて、今なほ寵臣たるにより、わが兄これを娼しとして、うち解られねばおのづから、疎濶にもなりなられしなり。然るをけふ思ひがけなく、こゝへ使を立られたる、その故をまだ知らねども、目前の利をおもはず、と汝がいひしは要こそあらめ。具に告よ。いかにぞや、と問れて珠之介阿容たる色なく、その義は問せ給はずとも、必しも申シあぐべき、一大事にこそ候なれ。抑君御兄弟、迭に權を爭ふて、快らず見え給ふを、いと愚なる俺們すら、宜き事と思はねば、況心あらんもの、親きはこれを歎き、疎きは譏るも多かるべし。尉の殿は近き比、この義に御心つかせ給ひて、御後悔大かたならず、わが身弟と不和になりたる、事情を按ずるに、その初わが弟が、欲しといひける遠山松の、湯鋘を與ざりける、是等の所以のあればならん。兄弟は猶人の身に、手足あると是同じ、よしや稀なる名器なりとも、他人にこれを贈るにあらず、弟の所望に任しなば、猶わが家にあるに


末松たまの介


出像第二十二
珠之丞使
志く巧手
困友ホ説く
柳本だん正

等し。譬ば右手に持たる物を、左手に易るに異ならず、倘わが弟に讐あらば、身をも祿をも見かへらで、立地にその冤家を、撃亡さんとすべかるに、かばかりの物を惜みて、兄弟不和になりし事、今更慚愧に堪ざるなり。汝那首に赴きて、彈正に對面して、わが意を告て、這湯銚を、贈れるよしを傳へよかし。かくても渠はうち解けずして、贈ものを受じといはば、直に館へ推參して、入道殿いふ高國を愁訴せよ、然らば館の驚き給ひて、彈正を諭し給はん。主君諭解給ひなば、渠も澁ることを得ず、必和談は整ん。こは萬一の事ぞかし、さばれ重立たる老黨を、這使にとて遣さば、なかなかに言改りて、疑るゝこともあらん、よりて汝に命ずるなり。よくせよかし、と叮嚀なる、仰なれば辭するに由なく、膽太くも虎威を犯して、見參を請まつりき。賢相願ふは骨肉の、實情を信容て、おん和睦ましましね。然らば使を奉りたる、在下等が幸のみならず、なべて御方の歡びならん。さは思さずや、と爽に、舒る言葉の花紅葉、遠山松の湯銚の、袱をはやく解拔きつゝ、蓋拿る手さへなよやかなる、紐より脩き六尺袖に、匂ひ溢るる愛敬は、武家の扈從の進退應對、柳條の袴の襞襀よりも、折目正しく國友の、身邊へやをら措にけり。有如之程に國友は、初は思ひ侮りたる、珠之介に說諭されて、且羞且呆るゝことと半晌許、肚裏に思ふやう、わが兄猛にうち解て、秘藏の名器を贈られし、胸中測り叵けれども、

なほ疑ふて受收めずは、珠之介は御館へ參りて、入道殿に愁訴をせん歟、熟視るに這少年は、縹致といひ才といひ、尋常のものにあらず、不慮に館のおん目にとまりて、召使るゝ事しもあらば、わが寵遇の害になるべし。只速に和睦して、這奴を還すに優ことあらじ、と尋思をしつゝ微笑て、あはれ微妙き使の口狀、尉殿さまでに某を、愛させ給ふを知ずして、不悌の罪を得たりしすら、後悔こゝに立がたかるに、特に秘藏の遠山松を、賜ればとて受られんや、と固辭を珠之介推返して、刀禰今和睦し給ふとも、這湯銚を受給はずは、何を證據に仕らん。世に隔なき友の、千々の黃金も辭せざるを、斷金の交とて、愛たき例にいふものあり。況原是一腹なる、兄弟にましませば、得がたき貨なりとても、受も授けもし給ふべけれ。然るを今さら固辭せ給ふは、なほも疑ひ給へる歟、と詰れば國友脫るゝ路なく、困じ果つゝ額を拊て、寔に汝は才子なり。爾らば這遠山松は、この儘預り措べきか。何を報いに進らせん、と問かへされて額をつき、海なす御こゝろならざりせば、在下なゝどが稟すよしを、信容て且問給はんや。果して愚意によらせ給はば、おん報ひには及ぶべからず。きのふ仄に傳聞にき、尉の殿の議し給ひたる、阿波の三好を招んとある、おん使の義を御同意ありて、那議に任し給ひなば、是目前の大利なり。在下が云々、と向にまうせし一條は、この事にこそ候へ、といふを國友聞あへ

ず、そは亦汝がいふ事ながら、三好が御方に參りなば、その利なきにあらねども、渠もし御掟に從はずは、勞して功なきのみならで、敵に柔弱を示さんのみ。然でも利ある歟、いかにぞや、とせわしく問れて、いよ〳〵騷がず。その義も豫て尉の殿の、間者を彼地へ遣し給ひて、定かに撈知し召れぬ。縱三好はなほ疑ふて、御掟に從ひまつらずとも、左界の城を返すべし。倘又縡の障ありて、左界の城を返さずとも、那地に到らば敵の强弱、そが兵士の多寡までも、知らで還らせ給はんや。既に敵地の案内を、よく知るときは攻るに易かり、渠が由斷を覦ふて、一擧に左界を攻擊ば、手に唾して城を拔くべし。左界は都會の福地なり、曩に喪ひ給ひしを、ふたたびおん手に入ることとあらば、こよなき利潤に候はずや。この義を上に（高國を云ふ）執成給ひて、縡就ときは尉の殿の、獨功あるのみならず、刀禰も御感に預り給ひて、共にその利を受給はん。こゝに御こゝろつかずして、同胞合體ましまさざりしは、憚ながら千慮の一失、御同意あらば公私の大幸、この上や候べき。はやく賢慮を回して、熟く計らせ給ひね、と利をもて薦る奸佞の、萠はこゝに顯れたり。國友も亦貪りて、飽こと知らぬ性なれば、一ト言每にその意を得て、感ずること大かたならず、吁奇なるかな、少年に罕なる計略、わが意に稱へり。翌は夙めて出仕して、件のよしを執達せん。尉殿も出仕して、御意を伺ひ給ひね、とわれいひにき、と傳へ

只是汝が奇才によりて、同胞和順合體の、這歡びあるのみならず、計るが如く那利を分たば、現愉快き事なるべし。且く留めて歡びの、盃をすべけれども、わが兄の俟給はんに、とく立かへりてよしを傳へよ。是もてゆきね、といひかけて、童扈從に持したる、刀を牽手物に取らせしかば、珠之介は左右の手に、受戴きつゝ腰に帶び、額つき拜して恭しく、その歡びを述にけり。一議やうやく果しかば、國友は遠山松の、湯銚を近習に持して、徐に奥に入る程に、珠之介は執達の、若黨に送られて、出る玄關の眞砂路に、衞ならねど發と立つ、從者を將て意氣揚々と、靮も夏の天色に、卯花月毛折にあふ、馬の足掻を早めけり。嗚呼輭弱の一少年、主家の胞兄弟を相和解て、遂に莫逆ならしめしは、忠にして功あるに似たり。さばれその說く所、利に誘ふて義に疎かり。是奸佞の所行にして、智ありといふとも用ふべからず。譬ば絳の急に臨みて、門を毀ちて薪となし、井を塞ぎて臼となすもの、頓智即功あるが如し。一旦事の要をなすとも、豈長久の術ならんや。然れば那利を貪る爲に、主從倶に不測の罪に、陷ることのなからずやは、と識者は竊に評しけり。間話休題、この日香西四郎左衞門尉元盛は、柳本許遣したる、末松珠之介を俟程に、日ははや西に傾く比、珠之介はかへり來て、那首の趣恁々と、國友と問答の、

首尾遺もなく演說して、牽出物に得たりける、刀をとう出て見せしかば、元盛斜ならず歡びて、さしも執念深きわが弟の、速に和順して、阿波へ使節の宿望さへ、一時に本意を遂んこと、皆是汝が大功なり。吁わが家の諸葛孔明、丹波數郡の所領をもて、賞するともなほ足らず、來世の後の後までも、比翼の契りを忘るゝことなく、連理の誓に背んやとて、そが儘傍に果らして、撫つ捺りつ餘念なき、寵愛日來に彌增けり。却說香西元盛は、次の日出仕する程に、國友は先だちて、那首に兄を俟てをり。きのふ遠山松の湯銚を、贈られたる歡びを、叮嚀に述、疎遠を賠話て、阿波へ使節のおん願ひを、向には制めまうせしかども、熟思ふに三好の黨、非如意命に應ぜずとも、敵の强弱地理までも、撿するときは御方に利あり、この義を館へ（高國をいふ）聞えあげしに、御合點にて候なり。誘給へ共侶に、君邊に伺候せば、那地へ發遣の仰あるべし。時日を規定仕らん、といふに元盛歡びて、きのふ使のかへりしより、和殿の心底具に知られて、雀躍に堪ざりき。さはとて軈て共侶に、主の身邊にまゐりしかば、道永禪門（高國の法名）席を正して、元盛を招き近づけ、前日汝が議しまうしたる、三好を招き降すの一條、よしやその事成がたくとも、敵地の容子は定かに知らん、かゝればはやく發向して、なほ計略を旋すべし。謀るが如く事成て、左界の城をとり復さば、卽這回の賞として、元盛汝に賜んず。勉よかし、と仰れば、

元盛滿面笑を含みて、君恩を謝しまうしけり。登時國友膝を進めて、既に御諚に依るときは、一ト日もはやく元盛を、那地へ遣し給はんことを、願しくこそ候なれ。時日を移さば世に知られ、敵に聞えて絆の障りに、なるべうもや候はん。然ばけふより三日を限りて、京師を出て攝津州なる、尼崎より乘船せば、日ならず阿波に到るべし。勿論隊兵の多かるときは、敵疑ひて騷動せん。然ばとて士卒なくば、路の程も亦危し。因て士卒は百名あまり、二百名に足らざるをよしとす。前より是等の用心も、あらまほしく候、と眞實たちてまうすにぞ、道永禪門頷きて、その議寔に爾るべし。元盛はこの意を得て、速に進發せよ。今よりこゝに吉左右を、俟のみなるぞ、と促して、御教書を遞與し給ひしかば、元盛面目身にあまりて、言承しつゝ退出けり。これを見これを傳聞く、諸士等は適名譽や、と羨むもあり或は又、阽むものも多かりけり。然程に元盛は、はやく逆旅の准備をしつゝ、珠之介をばその身に等しく、轎子にうち乘しつ、隊兵一百餘名を將て、黎明の比首途す。使節の命を稟しより、第三日とぞ聞えける。素より驕れるものなれば、その路すがら民を虐げ、非法の課役を負せしかば、苦しみ怨まずといふものなし。その宵は守口の宿りに著て、酒宴遊興に曉るを覺ず、是も亦珠之介を、寵愛深き惑ひより、渠が客舍の徒然を、慰んとての所爲なりけり。現錦綉を裀にしつゝ、歌儛艶曲の俗樂に、

娥媌靡蔓の害あるを知らず、又粱肉に鼎を陳ねて、七鞲八珍の飲膳に、農夫辛苦の畊を思はず、慾多ければ貪れども足らず、驕れる故に鄙吝なり。冠すといふ猴ならずは、虎の威を借る狐に似たる、這元盛が狼貪鴟張を、知るも知ぬも憎みけり。かく行ひて適く程に、その次の日に攝津州なる、尼崎にぞ著にける。この時尼崎の城將は、有馬介尹賢なり。抑件の尹賢は、高國入道道永の、實方の叔父なりける、中務丞春供の二男にて、彼身の爲には從父兄弟なり。親しき族なるをもて、道永これを一方の、旗頭にはしたるなり。然るにより尹賢は、這回香西元盛を、阿波へ使節の路次云々と、京より通達せられしを、こゝろ得がたく思ふものから、兼は管領の權臣にて、且國友が兄なれば、宜く管待すべけれとて、豫て士卒に下知しけり。さばれ屬日件の城は、修復に工匠奔走して、しかるべき坐席なかりしかば、よしを元盛に斷りて、二佛山中間寺といふ、城下の寺院を旅館としつ、三度の饗饌美を盡して、香西主從を款待しけり。元盛はこの地方より、速に船に乘て、阿波へ渡らんと欲するに、卯花降し晴間なき、風雨の爲に抑留せられて、心ともなく日を彌るに、雨はやうやう霽たれども、なほ順風を得ざりしかば、日々に港口へ催促しつゝ、揉尻してぞ居たりける。有如之程に珠之介は、旅泊の徒然を慰難けん、有一日兩三箇の從者を將て、その身は馬にうち乘りつ、寺より出て城下のかたへ、漫

城へ入らんとする程に、鱗る車の音高く、轟轟轟と地を響して、迅雷に異ならねば、珠之介が乘たる馬、忽地に駭き怕れて、屬强をしてければ、主は鞍にも堪かねて、墜んとしつゝとり駐めたる、怒に堪ず聲ふり立て、こは奇怪なる白物等が、よしや車の走ればとて、武士に對ひて避もせず、剰馬を駭せしは、これ狼藉にあらざらんや。者共彼奴を脫すな、と貌に似げなき敦圉猛く、鞍坪敲きて下知すれば、兩三箇の從者等、承ると應もあへず、走り蒐りて前なる車を、推留めつゝ摺擇す。當下車力の夫役等は、些も怯ず諸聲立て、そは理不盡なり何をかする、武士にもあれ公家にもあれ、城主の御用で推ゆく車を、其方の馬が騷げばとて、推留らるゝ事やはある、妨げすなと罵りて、禁るを手々に搔遣り衝退け、各車の前後に立て、牽もて去んとする程に、珠之介はいよ〳〵怒りて、馬を馳寄せ刀を拔て、右手に立たる一箇の夫役の、小鬢の外を丁と砍る。雖然淺痍なりけるに、車力の夫役は多人數にて、一輛每に四人あり。五輛合して二十許人の、夫役はなほも怯ずして、那斫たるぞ擊留めよ、と諸聲烈しく詈散動きて、車に積たる手來の材を、手に〳〵引拔きうち振りて、競ひ蒐れる勢ひに、當るべくもあらざりける。珠之介が從者等は、

手ともいはず腰ともいはず、はや頻大に撃悩されて、不捷放せ、とばかりに、迯吼しつゝ亂走す。この光景に珠之介も、駭怕れて物も得いはず、馬の鼻づら牽回らして、捨鞭拍てぞ迯たりける。元盛はかくとも知らず、是時港口に准備の船より、順風になりぬ、纜を、解くべうもや候はん。乘れ候へ、と告來じければ、さはとて士卒を急しつ、珠之介を諮るに、物見ん爲駄馬に乘て、城下のかたへ出たるが、いまだ還らずと聞えしかば、爾らば途にてあふべきなり、衆皆出よと焦燥て、居多の士卒を前に立し、後に從へ旅館を出て、ゆくこといまだ幾ならず、と見れば前面より、馬を飛して來るものあり。是則別人ならず、珠之介主從が、那夫役等に赶撃れて、迯てこゝまで來つるなり。鬢の短髮の紊れたる、髻さへに振放されし、その爲體の慌しげなるに、況三箇の從者は、薄瘡淺疵を負ぬもなく、流るゝ鮮血を拭ひもやらで、後走にぞ走著ける。然程に珠之介は、遽しく馬より降て、主のほとりに跪き、目今かゝる事こそ候へ。その故は箇樣々々と、城の夫役の車力等が、狼藉の縡の趣、彼よりしかけし事のごとく、身の非を飾り人を咎めて、言語巧に告しかば、元盛聞つゝ勃然と、眼を瞋り齒を切りて、そは安からぬ事なりき。縦城がたの夫役なりとも、管領家のおん使を奉たる、元盛が從類を、打擲せしは言語同斷、もし是をしも忍ぶべくは、武士たる甲斐もなしといはれん。未だ遠くは

ゆくべからず、とく赶蒐て撃留よ、と聲も烈しく下知すれば、慓雄の士卒、齊一應て、或は弓箭、或は短鎗、各々武器を引提て、逸足踏て駈んとす。是により珠之介は、氣を直し力つきて、ふたゝび馬にうち跨り、先に進みて舊來し路へ、驀直に乗返すを、案内に衆皆後れじとて、街衢を投てぞ走りける。再説、那夫役等は、珠之介主從を、思ひの隨に赶走らして、故所に立集合ひ、更に又車を推て、ゆくこといまだ十町に及ばず、中間寺の方よりして、客裝せし一隊の武士、その數凡一百あまり、是方を望て赶近づくを、夫役等齊一見かへりて、彼は正しく那少年の、一箇隊なる武士ならん。原來屬日中間寺に、旅宿すと聞えたる、京家の人々なりけるぞや、擒籠られてはかなふべからず。はやく逃よと罵りて、車を棄て城のかたへ、走り躱れんとする程に、元盛の士卒等は、透もあらせず咄と嚏て、遠きものは箭を射出し、近きは短鎗を晃めかして、矢庭に四五人突伏けり。是にぞ夫役はいよ〳〵怕れて、西へ走り東へ脱れて、往方もしらずなりにけり。有如之かども元盛は、怒氣なほ盛なりければ、士卒に下知して件の車を、推竝べ火を放さして、竹木共に燒棄けり。これに聊慰めて、今はしも是までなり、介殿尹賢をいふにまうすべき、恨なきにあらねども、はや纜を解くといふ、けふの順風は多く得がたし。この儘阿波へ渡海して、功成名遂てかへさにこそ、必思ひしらせんず、と飽までに罵

りて、珠之介を慰め、士卒を從へ、港口を投て急ぎつゝ、准備の伴舟二艘には、士卒等を分乘らしつ、その身の船には珠之介と、近習のものを果らして、管絃を奏し酒うち喫て、稍熱腸を冷せしかば、笑ひ樂み酩酊して、寢るとも知らず珠之介が、膝を枕に臥たりける。案下某生再説、那時に、擊漏されたる夫役等は、辛く城中に逃入りて、卽緯の趣を、慇々と訴けり。城主尹賢よしを聞て、家臣を城外に走らしつ、且元盛を索るに、那人々はその折に、港口へ赴き船に乘て、士卒も倶に漕出たれば、こゝには一人も遺るもの、候はずと人僉いひけり。よりて擊れたる夫役等が、亡骸を撿するに、地方の者のいふよしも、那訴に違ふことなく、元盛が權に誇りて、車を燒棄、城主を恨みて、罵りたる事までも、この時定かに聞えしかども、元盛をらずなりしかば、然とてもせん術あらず。家臣は城にかへり來て、有ける隨に報にけり。尹賢これをうち聞て、腸を斷可なる、慍怨に堪ざりしを、つくぐ\と思ひかへせば、元盛は管領の、普第恩顧の權臣にて、使節の命を稟たるを、今私の怨をもて、擊果しなばその咎め、亦わがうへに係るべし。然とてよしを訴て、讞斷を請まうすとも、元盛の弟なる、柳本國友は、入道殿の寵臣なれば、渠が爲に讒言せられて、還て不測の罪を得ん。抑元盛國友が、年來民を虐げて、驕恣なるを、入道殿はなほ曉得らで、國家の大事を任し給へば、下情通ぜず、

怨るもの多かり。勢ひかくの如くなれば、怨を秘して謀るに不如、と深念をしつゝ夜となく日となく、思を潛め枕を摧きて、元盛を亡すべき、計策をぞ旋しける。

第十八回

讒を信じて道永嬖臣に誓ふ
怨を秘して尹賢香西を陥る

話表、右馬介尹賢に仕へたる、矢野宗好といふものありけり。原是阿波の人氏にて、三好希雲が右筆なりしに、希雲は高國に撃れし比、その身は尹賢に降參して、いと正首に仕へたり。初阿波に在りし時、執筆を宗としたるにより、大約三好の黨の、花押印章を寫し覺え、些も違ることなしとて、折々人に說誇りしを、尹賢は不圖思ひ出て、こは究竟と獨悅び、軈て件の宗好を、閑室に招きよせて、東西多く取らせつゝ、元盛を亡して、怨を復さんと計れるよしを、遺もなく囁き示して、三好が元盛に答る書翰の、僞筆をぞ書せける。既にして宗好は、主命默止がたかるに、思ひがけなき賜ものの、多かるを歡びて、一議に及ばずいはるゝ隨に、件の書翰を書寫め、左界の敵將、三好越後守勝時、並に嫡子左衞門佐勝長等、父子連署の花押すら、些も違へず贋たりければ、尹賢望こゝに足りて、歡ぶこと大かたならず。却說この比、尼崎なる獄

舍の中に、繋れたる偸兒あり。原是左界の人なれば、尹賢これをも用ひんとて、獄長にこゝろ得さしつ。その宵奥庭に牽居さして、尹賢竊に、這偸兒にいふやう、汝が罪過重ければ、首を刎べきものなれども、わが密計に從ひて、左界の三好勝時等が、間諜者と陽倡へて、這囘京師へ牽れなば、われ又竊に計ひて、汝を放遣るべきなり。その故は恁々なりとて、香西元盛を亡さん、と計較たりし意中の機密を、詳に囁示せば、件の偸兒歡び承て、命助り候はば、何事まれ仕らん。左も右も計せ給へ、といふに尹賢も歡びて、いふべき事を誨などしつ、這偸兒を怪しげなる、旅客に打扮して、更に又緊しく縛め、その詰朝士卒に牽して、みづから京師に走陟り、高國入道道永の、邸に到り對面して、請ふて左右の人を遠ざけ、側に寄て囁くやう、扨も香西元盛は、莫大の御恩を仇にして、叛逆の企あり。渠が阿波へ赴くとて、船出せしその黃昏に、怪しげなる旅客を、城兵等が搦捕しかば、いとも緊しく責問せしに、そが懷に密書あり、三好越後守勝時等が、左界の城より密使をもて、元盛に答る狀なり。これ閲せ、といひかけて、懷にしたりける、僞書をとう出て道永の、膝のほとりにさし寄すれば、道永禪門驚きながら、取揚て披き見るに、その書の略に、

去逆歸順、便是勇士所庶幾。足下近內應本州、討滅道永法師、將令聰明丸、

故管領源澄元之子爲管領。來翰披閲、幸甚幸甚、然山海脩阻、猶隔靴搔癬也。因本月渡海事、企望稍久。某以戍左界、身不得預其席、遣愚息勝長、欲叙來會之驩。尺素不易盡言、聊以布親串。大永五年、戊辰夏四月日。越後守三好勝時、左衛門佐三好勝長等再拜。香西左衛門尉殿

とあり。筆談といひ花押と云、疑ふべくもあらざれば、道永禪門呆果て、しば〳〵これを讀復しつゝ、思はずも太息を吻て、豈料んや元盛が、かゝる逆謀あらんとは、敵の使はいかにぞや、と問れて尹賢、さゝ候、綷の證人なるをもて、こゝまで牽せ候、といへば道永頷きて、然らば我等闚窺して、そのいふよしを聞くべきなり。庭上へ牽せ給へ、と指揮に尹賢こゝろ得て、遠侍に退きつ、士卒にかくと命じけん、舊の席に著程に、尹賢の士卒兩三名、那癖者を牽もて來て、縁頬近く推居たり。登時尹賢進寄り、癖者にうち對ひて、罪人知らずやこの處は、管領の御館なり。尼崎にて首伏の、趣を又云べし。管領聞せ給はんとて、翠簾の那首にをはするぞ、といひつゝも目を注すれば、癖者ははやこゝろ得て、かくなるからは幾遍も、問るゝ毎にいはざらんや。某下雜兵たるにより、具なる義は知らねども、いぬる比香西殿より、左界へ密書を贈られたれば、その回報をせんとある、主命を受て尼崎なる、旅館まで來にけれど、香西殿は

既にはや、渡海の船に乘走らせし、と聞えにければ勞して功なく、歸去らんとしつる折、巡邏の兵士等に、怪められて生拘られ、呵責に堪ず首伏の、趣は前後違はず、命運こゝに竭たれば、今さら娑婆に愛惜せんや、はやく首を刎給へ。覺期極めて候、と卑怯もせぬ勇氣の辯舌、道永禪門竊聞して、尹賢を招き近づけ、今癖者がいふ所、那書と吻合せしうへは、元盛が逆謀疑ふべからず、とは思へども三好等が、反間ならんも測がたかり。よりて那癖者は、且く和殿に預措ん、はやく尼崎へ牽もてかへりて、元盛が歸帆を覘ひ、手便をもつて一箇も漏さず、皆生拘て注進し給へ、必悠りて殺すべからず。倘又元盛歸帆の日に、船を倍し敵を隱して、城を襲んとすることあらば、渠等を陸に陟することなく、推捕籠てこれを擊つべし。加勢の軍兵四五百名、翌此方より遣さん。和殿ははやく立かへりて、そこらの准備肝要ならん、と潛やかに示されたる。尹賢は欣然と、命を承暇を請ひ、士卒に癖者を牽退して、その身も續きて退りけり。この日柳本彈正國友は、聊恙ありければ、終日宿所に臥てをり。かゝる故に尹賢の、密訴のよしを知らねども、道永はとさまかうさま、渠等が事を想像るに、元盛誅滅せられなば、國友も又われを恨みて、必他鄕へ立退くべし。縱逆臣を討滅して、京師は無爲に治るとも、相も狎れたる國友に、別れん事の哀しさよ。要こそあれ、と深念をしつゝ、手づから七頁の誓

誌をものして、神文に血を沃ぎ、をさ〳〵渠が出仕を俟しに、その次の日に國友が、病著はやく痊りて、巳の左側に出仕せしかば、道永禪門歡びて、故意閑室に在りて對面しつ。きのふ尹賢の密訴の趣、綷悉々と說示して、三好勝時勝長等が、元盛におくりしといふ、密書を取出て見せしかば、國友驚き且怕れて、席を避つゝ罪を請ひしを、道永さま〴〵に慰めて、ふたゝび身邊に招近づけ、元盛野心ありとても、われは儞に疎意あらず、世に在る限り、等しく存命、死なば共侶にとのみ思ふなる、誠心を知らせん爲、寫め置たる物こそあれ。後々までも證据にして、心つよく思ひね、とかへすぐ〳〵も慰めて、件の誓書を取らせしかば、國友は稍安堵て、謹て披き見るに、這回元盛が叛逆の事により、連坐の罪を負しなば、吾身は天雷に撃碎れて、死して冥府の呵責を稟ん。この事一毫も食言ならば、日本國中大小の、天神地祇、氏神八幡大菩薩、云々と書しるしたる、神文に血を沃ぎて、しかも七頁ありければ、國友ひとつ〳〵戴き拜して、感涙を押拭ひ、君かくまでに淺からず、微臣を思召るゝ洪恩、九の世を易るとも、報ひ奉るに足らざるべし。兄はさらなり九族を、罪なひ給ふ事ありとも、いかでか叛きまつらんや。いよゝ忠勤を抽て、國家の無異を揣りてん。尊慮をな惱し給ひそ、と言承をまうせしかば、道永禪門怡悅に勝ず、きのふ尹賢に約束したれば、加勢の士卒五百名を、尼崎へ遣すべし。

この義を計ひ候へとて、世に隔なき主命に、國友いかでか異議すべき、承り退きて、猛に軍兵を鳩め、よしを傳へて、尼崎へぞ遣しける。有恁程に尹賢は、尼崎へ立かへりて、快船夥准備しつ、且兵士の部して、元盛主從歸帆せば、脱すべからずと下知しける。既にして京師より、加勢の士卒も來にければ、尹賢是等を後陣と定め、港口の方に隱し置て、元盛がかへり來るを、今かく〳〵と俟たりけり。話表更題、香西四郎左衛門尉元盛は、渡海の船中異なることなく、阿波州に著岸して、那城に到んとする程に、三好筑前守元長、このよしを傳聞て、老黨を召集め、高國入道道永は、わが大父の冤家なり。況その家臣元盛は、民を冤げ驕を極る、烏滸の小人なるものを、招待の使と稱て、さし來されしこそ奇怪なれ。汝等士卒を將て、路次に推駐め、速に追返すべし。異議に及ばば一箇も漏さず、撃て棄よ、と下知せしかば、三好が老黨その意を得て、軍兵多く從へて、港口を望て走たりければ、元盛は升陸して、まだ一宿も歷ざりしに、三好が士卒に捕篭られて、一步も進むことを得ず。その隊の大將三好孫六郎秀一、馬を乘居聲ふり立て、香西元盛等慥に聞け。汝が主なる道永法師は、嫡家を追退けて、管領職を横領し、又詐を行ふて、吾先君を害したり。こゝをもて元長主、阿波の御所の公達を、將軍になし奉り、故京兆澄元朝臣の、嫡男に御座す、聰明丸に管領職を、紹しまゐらせんとての、軍議に暇なき

折から、使節と倡へて推参せしは、這地の容子を知まく欲する、反間者にぞあらんずらん。皆悉生拘て、頸を刎べき奴原なれども、汝等が如き斗筲の小人。幾百人撃捕とも、又何の益かあらん。そが儘に追返せとある、寛仁大度の下知によりて、三好秀一向ふたり。命惜くはとく／＼立去れ。異議に及ばば目に物見せん。いかにぞや、と呼れば、その隊の士卒三四百名、鬨を揚簸を敲き、素破といはば射て仆さんとて、素彎をするも多かりければ、元盛大く駭怕れて、陳謝の辭を盡せども、秀一いかでかそれを聴くべき。矢庭に追立駈立て、はやく港口へ推戻せば、元盛はせん術もなく、珠之介に目を注して、倶に船にぞ乗りにける。況や百餘名の從者は、主より先に簇々と、僉伴舟にうち乗て、纜を解帆を揚て、初て息をつきにけり。元盛は豫より、計りし事の畫餅となりしを、且羞、且怕れて胸安からず。雖然弟國友の、資あれば執成して、主君の怒りを和解やせん、手を空うして還らんより、播磨の室へ船を歇て、そこらの土産を買集め、京師の裏にすべけれとて、遂に播磨に赴きて、室の津に逗留しつ。東西多く買取ければ、更に一艘の船を傭ふて、積登したるにより、初は三艘なりける船の、是より一艘殖たりけり。かゝる程に元盛は、珠之介と密談しつ。尼崎に到りても、又京師にかへりても、實には告ずして、人にいふべき事などを、從者に示し口を合して、今はかうと思ひしかば、尼崎を投て乗か

へすに、この日順風なりければ、巳の比及に船ははや、港口に入らんとする程に、忽地暗號の烽火とおぼしく、一道の火氣天に沖りて、その聲耳邊に響く程こそあれ、居多の快船漕顯れて、一艘毎に三十餘名の、兵士弓箭短鎗を携へ、その勢無慮二三百人ン、元盛が四艘の船を、八方より捕籠て、逆賊元盛とく出よ。汝は三好に內應して、敵を誘入れん爲、那地へ使節といひこしらへて、阿波に赴き密談したる、伎倆は既に發覺たり、この故に管領家の、おん下知によりて汝が歸帆を、俟こと既に久しかりき。覺期をせよ、と異口同音に、罵りつ漕よせて、はや撃捕んと競ひ蒐れば、元盛亦復駭慌て、こは什麼いかに、とばかりに、おそる〳〵船窓より、半身を顯して、人々さのみ慾り給ふな。某素より野心なし、そは恨みあるものの、讒言にこそあらめ。この身京師に赴きて、まうし解き候はん。やよ等給へ、と叫べども、討手の士卒等いかでか聽べき。愚なり元盛、汝が船は三艘なりしに、その數多くなりたるは、敵の兵士を隱し乘したる、その證据分明なり。ものないはせそ撃捕れと、諸聲高く罵りて、手に〳〵鈎竿を打かけて、乘移らん、と鬩きたる、勢ひ制むべうもあらざれば、元盛主從已ことを得ず、且戰ひ且漕ひらかして、船を水際に寄せんとすれば、陸の方には大將尹賢、京師より差來されたる、加勢の士卒を從へて、手繁く射る箭に透間なければ、元盛主從度を失ひて、射られて水に

論むも多かり。かくは元盛、水陸の、討手の爲に擒籠られて、免れがたしと思ふになん、ふたたび船を漕返して、澳なる敵と戰ふに、後氣憑たる癖なれば、しいだしたる事もなく、一百餘名の從類は、遺り寡く撃捕られ、その身も數个所重瘡を負ふて、竟に首を捕られけり。そが中に珠之介は、戰ひ危く見えたる折、上衣袴を脱棄て、手來の板子を掻抱き、舷より身を跳らして、海に入り潮に任して、浮つ沈みつ流れけり。然ども討手の兵士は、戰ひに暇なき折なれば、これを見るものあることなく、香西が從類を、一箇も漏さじとのみ、競蒐りし勢ひもて、そが船をさへ乘沈め、室の津より傭れ來たる、物積船も共侶に、打破られ水に沈みて、楫取水主等は撃れにけり。然ば右馬介尹賢は、一時の奸計行れて、元盛を亡し怨を復せし、意中の歡びいふべうもあらず。加勢の士卒を勞ひて、元盛が首級を實撿して、その餘重立たる首級共も、翌京師へ陟せんとて、士卒を纒め列を正して、馬上優に徐々と、城中に還りたる。その夜尹賢は、矢野宗好をもて、獄舍の内に繋し置たる、那偸兒にいはするやう、這回の密計行れて、元盛滅亡したる事、汝が功を第一とす。是により金百兩を給はりて、前約のごとく放遣るべし、と仰らる。竊に逃去るべし、と正首に聶き傳へて、獄舍より扶出し、件の金を遞與せしかば、偸兒は歡び受て、恩を拜し別を告、遂に城中を潛び出て、ゆくこと凡十町あまり、一ト叢繁き

林のほとりを、過らんとする程に、忽地後方に弦音高く、一條の征箭飛來たつて、偸兒を射倒しけり。灸所の深痍なりければ、叫びもあへず仰反て、血に塗れつゝ息絶たり。此は是尹賢の、豫て計りし事にして、件の偸兒を助け措かば、渠が口より密謀漏れて、身の禍になることあらん。竊に殺して根を斷べし、と尋思をしつゝ矢野宗好に、謀計を授金を齎し、一旦渠を放遣りて、途にてかくは撃せしなり。有恁者矢野宗好は、偸兒の武を接て、林の中にてこれを射殺し、その頸を捕り、件の金をもとり復して、城中にかへり來つ。竊に尹賢に見せしかば、尹賢卽賞祿として、金をば宗好に取らせけり。是より先に尹賢は、腹心の士卒に下知して、這回の遺恨は元盛が、龍陽珠之介とかいふ奴より、事起りたるよしなれば、もし少年と見たらんには、一箇も漏さず撃留よ、と竊に命じたるにより、事果てその屍を、これ彼と撿するに、童扈從とおぼしきもの、兩箇ばかりありけるを、知れるものに見せて問ふに、珠之介にはあらずといへり。然ども陸の戰ひならねば、脫れたるものありとも覺えず。多くは水中に砍沈め、みづから海に飛入て、死したるもありければ、珠之介も入水して、亡びたる事疑ひなし、と士卒等が皆いふにより、尹賢も然あらんとて、遂に索ず已にけり。却說、その詰朝、尹賢は、加勢の士卒共侶に、京師に陟り道永に見參して、元盛伏誅のよしを演說し、豫ては擒にせよといふ、

仰を受候へども、渠は三好が隊兵を、別船に隱し乘せて、初には倍す多勢なりしに、元盛主從必死を極めて、手強く防戰ひしかば、擊漏さじと思ひつゝ、已ことを得ず皆擊果して、首級を齎し候なり。又觸に生拘りたる、三好勝時等が間諜者は、戰ひ果してその夜さり、獄舍を破りて逃亡せしを、雜兵等が趕蒐て、擊留にきとまうすにより、那奴が首級をも持しまゐれり。その餘の者は云々と、報て實撿に入れしかば、道永禪門詰るによしなく、その有功を賞するのみ。又柳本國友は、主の誓書に感服して、辱しと思ひしかば、事の虛實を召問はで、兄元盛を討れしを、聊も怨とせず、還て尹賢を勞ひければ、尹賢は思ふに優たる、緈十二分の首尾を得て、身の暇を賜りつ、尼崎へぞかへりける。扨も香西元盛は、大く驕れる佞人なれば、不測の罪に陷りて、從類と倶に亡びし事、寔にその所なり。さばれ又尹賢も、譎を行ふて、私の怨を復し、又密計を行せたる、偸兒を欺き殺して、その隱慝を漏さじ、と底深く計りしは、是戰世の惡俗の、奸詐に長たる情狀なり。その本元を推ときは、道永禪門理義に暗く、男色龍陽の惑ひより、柳本香西等の、佞人を親愛して、國の大事を任したる、最屓の沙汰の致す所、一チ人ン貪戾ならざりせば、一國亂を興さんや。この後三好長慶義長、陪臣にして主を制し、二世國命を執るに至る、是その緈の張本なり。案下某生再說、末松珠之介は、曩に討手の大勢に捕籠られて、主

従危窮に及びし折、免れ果じと思ひしかば、板子を抱き入水して、潮に任して流るゝこと、いくばく里なるを知らず。身は最大う疲労つゝ、心地死ぬべく覺し比、磯打浪に搖揚られて、おもはず濱邊に寄たりければ、板子を棄て臂近なる、岩に手をかけ取留めしが、忽然と息絶て、爾後の事を知らず、助る人のなかりしかども、こゝに絶せぬ命根なりけん、おのづから甦生りて、四下を見るに日は暮たり。何國の荒磯なるを知らず、多く水を飲みたるにや、腹の中瓦刺めきて、苦みに堪ざりければ、岩頭に腹を押當て、頭を低て推す程に、夥しく水を吐きしより、やうやくわれに復りしかども、事問ふ浦の苫屋もあらで、夜半の月のみ鮮明なり。單衣の潮垂れしを、搔よせて彼此と、絞るに力なきものから、五月の初旬なりければ、袂涼しく凌ぐに易かり。人家ある方に赴きて、こゝは敵地歟、外嶋歟、地方の名をも諮ぬべく、一椀の飯をも乞めとて、月を燭に覺束なくも、人家を索て辿りけり。畢竟珠之介が、這海濱に流寓て、又甚麼なる話説かある、そは次の巻に、解分るを聽ねかし。

第二輯 卷之五

第十九回

茂林社に悪少捕らる
三石城に叔侄再會す

再說、末松珠之介は、纔に危窮に及びし折、脱れ難つゝ大洋へ、身を捨てこそ浮む瀨の、あれば荒磯に流れ寓て、死ざることを得たれども、人にも遇ず言問ん、浦の苫屋もなかりしかば、覺束なくも辿々て、ゆくこと幾十町なるを知らず。夜は最いたう深たる比、前路遙に燈火の、光隱々と見えて幽なり。原來那首に人は住むらめ、呼覺し宿りを投めて、一椀の飯をも乞ふべく、地方の名をも問ばや、と思へば疲勞れし足も進みて、辿り著つゝこれを見るに、人の家にはあらずして、茂林の中にいと舊りたる、社に點せし常夜燈の、樹の間を漏りて見えたるなり。そを守る人もあらざれば、進み近づき月光に、且その檐を瞻仰るに、辨才天と書したる白字の匾額ありけるに、この社の造りざまも、皇國と神社佛閣に、異なることのなかりしかば、こゝも猶、外嶋にてはなかりき、とやうやく猜して、建たる篇子を、推ひらき進み入り、恭く合掌

して、南膜摠持能與辨才天、わが窮阨を救せ給へ、と數回祈念して、又彼此と見かへるに、神戸帳のほとりに獻供たる、一土器の夏桃と、野鼠の啖殘したる、一枚の餅ありけり。久しく餓て堪がたかるに、よき物得つと遽しく、とり卸して是を食ふに、日來は美味に飽たりしも、かゝる時には何まれかまれ、皆甘からずといふことなければ、霎時も置ず早に盡して、聊饑を凌ぎしかば、坐して曉るを俟程に、とさまかうさま思惟るに、こゝはいと乾淨たる、茂林の中にはあなれども。神前に供物あり、常夜燈さへ置れしを、おもへば人家の遠くもあらで、晝は詣る人もあるべし。天も明ばそこらに到りて、哀み告なば情ある、人の資にあふことの、ありもやせん、と尋思をしつゝ、身による彪脚を拂ふ手の、果は動ずなる隨に、疲勞て熟睡をしたりけり。浩處に、夜行の雜兵兩三名、非常に備る爲なるべし、この夜城外なる村落を、彼此とうち巡りたる、かへさに件の辨才天の、社のほとりを過る程に、人の鼾の聲せしを、忽地に聞つけて、怪しと思ひて立よりて、准備の燈罩もて、見れば果して一箇の少年、熟く睡りてありければ、原來癖者ござんなれ、脫しはせじと潛めきて、戸を蹴ひらきて犇々と、押へて索をかけにけり。珠之介は思はずも、雜兵等に綁められて、こは什麼いかに、とばかりに、且駭き且呆れて、夢かとぞ思ふ苦しさに、慌たる聲をふり立て、人々懲し給ふな。某犯せし罪あ

らず、と叫ぶを聴で異口同音に、這偸兒が悍々りさよ。面の色は白かれど、年に似げなく膽太き、癖者にあらざりせば、守る人もなく里遠き、茂理の中なる古社を、臥所にして熟睡をせんや。抑汝は何處の人ぞ、とせはしく問るゝ珠之介は、事の實を告難て、それはとばかり一句も出ず、黄蘗を舐りし啞子に似て、只脣を動して、睛を睜るのみなりければ、雜兵等は冷笑ひて、その身の出處を得いはぬは、問でもしるき敵がたの、間諜者にあらんずらん。誘城中へ牽もて還りて、御𧪫斷に任しまつらん。とく〳〵出よ、と索とり詰て、僉共侶にゆく程に、途にして天は明たり。却說件の雜兵等は、珠之介を牽もてかへりて、縡云々と聞えあげ、城主の出るを俟けるに、この日は民の訟の、生平よりもて多かりければ、城主はその事稍果し、未の比に珠之介を、問注所の坪の內へ、牽入させてよしを問ふに、雜兵等はこの曉がたに、茂林の辨天の社にて、搦捕たる縡の趣、箇樣々々と遺もなく、猶又具に述けるを、城主は聞つゝ頷きて、やをれ癖者、と呼かけて珠之介を左見右見つ、人はその貌をもて、邪正を定めがたけれども、汝は只その容止の美しきのみならで、身のざまも賤しからず、何の故にか夜をこめて、古廟の中に獨臥たる。抑當國なる人の子歟。又他郷より來つるもの歟。その身の素生姓名を、愼ず告よ。いかにぞや、としば〳〵問れて珠之介は、沈吟じたる頭を擡て、御諚のごとく在下

は、當國のものにあらず。故郷は近江の某村なれども、はやく二親を喪ひて、よるべなき身となりしかば、筑紫の由緣を心あてに、浪速の浦より便船して、遙けき浪路をゆく程に、暴風にその船碎けて、皆大洋に沈みし折、在下は幸ひに、板子に携り潮に任して、流れて洪波に打揚られ、この地の浦に寓るとそが儘、一旦息絕候ひしを、又幸ひに甦生りて、四下を見るに苫屋もあらず、其處を何國と知るよしなければ、人にあはんと思ひつゝ、月を燭に幾十町をか、來つゝ疲勞れて樹間なる、社に憩ひてゆくりなく、霎時目睡たる程に、夥兵達に怪められて、搦捕られ候ひき。在下素より犯せる罪なし、衣の濡れしを乾たれども、潮氣は耗せずなほ濕れり。これを證に賢察ありて、宥させ給へ、とわびしげに、實語虛說うち雜て、哀み告るをうち聞たる、城主は頭をうち掉て、入水の事はとまれかくまれ、揔て汝がまうす趣、實しからず胡論なり。愿ず稟せ、いかにぞや、と問ふを珠之介推返して、御諚では候へども、いかでか詐詭を申しあぐべき。幾遍問せ給ふとも、外には情由も候はず、といはせも敢ず聲ふり立て、這奴甚大膽なり。その舊里は近江なる、某村にして父母を喪ひ、身のよるべなき隨に、筑紫の由緣を訪んとて、渡海の便船せしものならば、賤き民の孤にて、尤難義の旅なるべし。爾るに身のざま相應しからず、上には練の單衣、膚に著しは越後麻の、襦衫にこそありつらめ。言と形狀と

齟齬せるは、是諂言の明徵なり。憶ふに敵の反間諜歟。然らずは別に情由あらん。今飽までに毆懲さずは、いかにして實を吐くべき。者共其奴に笞を當よ、と烈しき下知に雜兵等は、承りつ、と應も果ず、左右齊一珠之介を、引捕へ推俯て、笞を揚て二三十、背をいたく打しかば、珠之介は皮破れ、肉ひらけたる苦痛に堪ず、細れる聲をふり濇りて、申シあげ候はん。笞を放べ給ひね、と叫べばさこそ、と雜兵等は、引起して推居たり。登時珠之介は、息を吻き跪きて、又上座にうち對ひ、この地を何國とまだ知らねば、なほ後難を測かねて、一旦欺きまうせしかども、賢察の明なる、鏡に向ふに異ならねば、隱し果べうも候はず。いでや實事を告奉らん。在下は末松氏、珠之介と呼るゝもの。年十六になり侍り。管領高國入道の、權臣で候ひし。香西四郎左衞門尉元盛に、身邊近く使れて、年來京師に候ひき。爾るに主なる元盛は、阿波へ使を承りて、彼地へ赴きてかへり來つ、在下等も倶せられて、船を尼崎に返せし折、元盛逆謀あるよしを、人に讒言せられけん、數百の討兵を差向られ、陸にも寄せず船中にて、主從凡百名あまり、討捕られ候ひき。その折に在下は、はやくも海に飛入て、脫れてこの地へ流寓りたる、その縡の趣は、向にまうせしに違ふことなし。一旦詭りいひしは、この所も亦管領の、御方の城地ならん歟、と竊に阽み思へばなり。なれども元盛逆謀なし、よしや些の越

城主は驚きて、原來汝は管領の、權臣と聞えたる、香西が扈從なりけるか。こゝは則備前州、三石の城にして、赤松家臣の采邑なれば、故管領澄元ぬしに、舊姻の好みあり。知ずや先君、赤松政則朝臣の後室は、勝元朝臣の息女にて、洞仙院尼卽是なり。かゝれば高國入道には、遺恨こそあれ親しからず。さばれ件の元盛は、民を虐げ驕を極めし、佞者ぞと人傳に、豫て聞たる事しもあれば、そが滅亡はさることながら、われ亦その非を正すにあらず。竊に京師の光景を、問まく思ふよしあるに、汝詳にいふべきや、と問へば珠之介歡びて、原來この地は備前なる、三石とやらんに候歟。只今の仰にて、再生たる心地ぞする。何事なりとも問せ給へ。知たる限告まつらん、といふに城主は頷きて、やよ夥兵們、這少年に、飯を食せ勸りて、奧庭なる折戶の邊に、將てゆきて、わが出るを俟べし。渠本心を傾けて、問るゝ每に愿ず報なば、命を助るのみならで、厚く惠みて盤纏を取せん。然るをなほ詭りて、われを欺く事あらば、近屬得たる新刀あり、立地に頸擊落して、その銳鈍を錬んのみ。且よくこの義をこゝろ得て、姑く索を放すべし。然ばとて由斷して、とりな逃しそ。こゝろ得たる歟、と示せば雜兵一議に及ばず、又遽しく左右より、珠之介を引立て、外面投て出にけり。卻說城主ち退きつ、日は稍末

牌過る比、件の刀を携て、獨奥庭のあなたなる、緣頰に出ければ、雜兵等は既にはや、折戸の裡面なる樹下に、珠之介を將て來てをり。遽しく引立て、緣頰の下に推居るを、城主は見つゝ雜兵等にうち對ひて、われ今竊にこの少年に、問んと思ふ事多かり。汝達は退きて、庭門を守れかし。とく／＼と急がせば、僉こゝろ得て退りけり。當下城主は珠之介に、京師の光景世の雜說を、これ彼となく諮るに、珠之介は凝滯ぜず、彼は恁々箇樣々々と、曲々に答るを、城主は聞つゝ勃然と、怒れる聲を苛立て、そは皆汝が虛言なり。われいぬる比間者をもて、那首の光景風聲まで、定かに撈り得たるをもて、今試に汝に問ふに、その言摠て同じからず。かかれば嚮に元盛が、扈從なりき、といひけるも、亦是汝が詭辯にて、われを欺くものなるべし。是をもて推すときは、汝は敵の刺客、われに近づき刺殺さんと、欲するにこそあらんずらめ。今はしも免しがたし。觀念せよ、と敦圉て、足踏被る庭下駄の、音いと高くをり立て、引提たりける素鞘の、刀を晃りと拔手も見せず、珠之介が目前へ、刀尖丁と突著れば、吁嗟、と思へど必死の覺期に、覘つめて些も騷がず、霎時氣色を闚ふて、見かへりもせず冷笑ひ、刀禰そは理なき御短慮ならん。在下が聞僻め、見違へたる歟知ず侍れど、問せ給ひし京師の事を、今さらに詭飾りて、何でふ刀禰を欺くべき。然るをなほ疑ふて、手づから撃んと敦圉給ふは、吾

命運の竭る所。逃るとも脱し給はじ、覺期を究め候なり。とく／＼首を召れよ、と項を伸し合掌しつゝ、悍く答てついゐたり。城主は猶も憖起て、いふにや及ぶ、と刃を引て、後に立つゝ聲をかけて、撃んとすること兩三回、いよ／＼動せぬ珠之介を、左見右見つゝ感嘆して、姿態優美しき少年の、有繋に武く勇しく、命惜ぬ今般の進止、現興房が猶子なりき、と譽る辭に珠之介は、訝りながら見かへりて、今興房と宣ひしは、大内殿の家臣にて、左界の浦の戰ひに、澳の水屑になりにき、と風の便りに聞えたる、そが舊名は瀬十郎、陶駿河守興房ぬしの、事にしあらず候や、と問ふ間に遽しく、刀を斂め引よせて、やよ珠之介われこそは、爾が叔父なれ、興房なり。鄕に爾を責問ひし折、末松珠之介と名告りしかば、こはわが猶子にあらずや、と思ふ心を得もいはで、且その面をよく見るに、果して眉上に黑子あり。こゝをもて綁の、索を解しつゝこの奥庭へ、召よせて又その手を見るに、思ふに違はず右手の甲に、かの一文字の痣さへあれば、疑ひは稍解たれども、倘淺ましく生育て、心穢く浮世めく、ものにしあらば名告るも要なし、錍して見んと、尋思をしつゝ、陽には強顏もてなして、殺さんとまで權せしに、武弁の家に仕へたる、甲斐あればこそ必死を究めて、刃に怕れぬ丈夫の心魂、吁感するに餘りあり。相別れしより十といひて、四稔になりぬ。汝が二親は、恙もあらで京師に處る歟。母の

阿夏が云々と、わが事も叉手の甲なる、痣をよすがに叔侄の、名告をせよ、と誨へけん、兆徴は是ぞ、と珠之介が、右の手首引よせて、その身の左の手の甲と、合して見せつ、見れば現、割符に似たる假黑子、一字千金、二手合體、三千世界に類なき、是再會の像見にこそ、と潛めき告る骨肉の、誠はこゝに顯れて、怺へ難つゝ共侶に、落る涙の珠之介も、歡しさと哀しさに、手を携かはしうち向上て、原來おん身は小父の刀禰、興房ぬしにておはしけり。こゝは備前の三石ならで、冥土の阡陌三途河の、ほとりにははべらずや。おん身は四稔前つ比、左界の戰ひ敗れし折、船覆りて波の底に、沒給ひき、と聞えしに、思ひがけなき再會なり。故こそあらめ顚末を、告て惑ひを解してよと、せはしく問へばさもこそと、霎時四下を見かへりて、現理りなる爾が疑ひ、世には死せり、と思はれし、興房が存命て、四稔をこゝに送る事、詳に告ん聞ねかし。往時左界の退口に、御方の船は風波に、或は破られ覆りて、妻子從類士卒まで、うたてや魚腹に葬られ、只興房が乘たると、雜兵の船と二艘のみ、命つれなく眞金ふく、吉備の前なるこの地の浦に、辛くも流れ寓りしかば、いかでわれ會稽の、恥を雪めて左界の城を、再とりも復さずは、主君に見參すべからず。況周防へ阿容々々と、信をせじと思ひつゝ、潛びてけふまでこゝに在り。扨も這備前州は、赤松家義村よりその子政村に至るの采地なれば、家臣浦上掃部助

宗村これを支配して、その子浦上備前守隆宗をもて、三石の城主にはしたるなり。彼宗村は豫てより、わが主君大内殿へ、内附の志を顯して、他事なく聞えしよしもあれば、われゆくりなく隆宗の、資を得て城に逗り、合戰の義を謀るといへども、戰世の沿習にて、赤松家も亦多事なるに、宗村は又京師へも、疎からずもてなして、首鼠兩端の意味あれば、わが爲にのみ力を用ひず。この故にわが宿望は、畫餠となりつゝ栲繩の、長き光陰を送るになん。近屬かくと周防へ聞えて、歸參れ、と叮嚀に、仰下されたりけれども、倚しいだしたる事もなきに、今さら歸參は面ぶせなり。いかにせまし、と思ふ程に、這三石の城主なる、浦上隆宗は所要ありて、播磨へ赴きたるにより、興房城を預りて、敵地の備由斷なく、民の訴をさへ聽定めて、隆宗の還るをまつ折、別れて夥の年を歷て、迭に面を認らずなりたる、爾に名告會たるは、是切てもの事にして、死ぬを不幸と思ひしに、存命ずはけふ相見んや。その歲月は異なれども、叔侄共に入水して、等類はみな死したるに、其身々々は恙なく、おなじ備前の三石に、流寓りしは奇なるかな。歡しきに就て又、みやこの天もなつかしきぞや。爾はいかなる由緣ありて、那香西に仕へたる。その身の來歷親の事、詳に知せよ。いかにぞや、と問つ答つ武夫の、猛きこゝろも恩愛と、情義に脆き袖の露、置くとはなしにいと繁き、言の葉末にあまりけり。珠之介は

つく〴〵と聞つゝ瞼を押拭ひて、有如之べしとは知ずして、母御と共に最大う、苦しき客宿をせし事あり。そはこの次に告まつらん。仂かりしその比の、親の苦勞は年長て、傳聞たる事ながら、おん身が猛に山口へとて、返され給ひし年の秋、家尊と異母ある女兒さへ、非命にこの世を去り侍り。是より後は近江なる、福富といふ片山里に、憂歳月を送りたる、母御の艱苦、吾儕のうへの、首をいへば箇樣々々、と木偶介が事小夏が事、阿夏がうへに忌むべき事は、皆省略ていはねども、大夫次が情にて、年來那首に養れたる、そこらの事は遺もなく、周防の客宿に盤纏竭て、困窮至極したりし折、料らず辛踏无四郎に、環りあひ資を得て、母子京師に伴れ、阿夏は又无四郎が、故鄕へ還るに伴れて、陸奥のかたに赴き、珠之介は兼顯卿の、愛顧によりて京師に留り、職原諸禮を見習ふて、且く彼卿に仕る程に、香西元盛に懇望せられて、又その家に仕へたる、この幾條の長もの語の、始終りを漏さず增さず、わきて周防の一段は、今見るごとく辭を連ねて、いともあはれに告しかば、興房は聞く事毎に、或は驚き或は感じて、且歎息すること半晌ばかり、又きたる手を稍釋きて、憐むべし木偶介小夏は、山豪の手にかけられて、命はかなくなりけるよ。是よりの後阿夏が艱難、人の情に身を寓せて、爾を守も育たる、數年の苦勞然ぞあらん。加以周防まで、母子諮て來し甲斐も、あふよしもなく人傳に、訃

音の聞えし折の、心の中を今さらに、汲見ては彼室津海の、千仭の底も數ならず。われもし那地に在るならば、面會憚ありとても、左も右もして取らせんに、悔て返らぬ事ながら、甚麼なる星の循り來て、活み殺しみ祟りけん。しかはあれども幸ひに、辛踏氏に再會して、伴れたるそがうへに、阿夏は其處によすがを定めて、渠が故鄕へ赴きたる、事の情を猜するに、本意にはあらじ、さりながら、かの木偶介に別れしより、十稔あまりの艱苦を辭せず、久しき寡婦の穉兒を、守育しは興房に、見せもしつべし、見られもせん、と思ひし事の空となりて、よるべ絕たる身のすべなさに、再緣しを結びけん。情義に疎しといふべからず。那无四郎はわが舊友、永正の比深草にて、心しられしよしさへあれば、竟にその身を任しけん。是も亦いとあはれなり。さるにても、那福富とかいふ鄕氏が、阿夏母子を養ひしは、尤俠氣なるもの歟。兼顯卿のおん庇袱は、それにも優て有がたきまで、辱きも今さらに、そが歡びをまうすべき、便著もあらずなりにたる、わが薄命のみならで、爾もおなじ流寓の、定めなき世に定めなき、身の往方こそ悲しけれ。嗚呼何とせん、とばかりに、憂苦に堪ねば藻鹽草、かき口說たる壯士が、あはぬ恨みを得ぞいはで、阿夏が事を思ふのみ。佛生山に七稔の、仇を兩箇の夫かさね、又无四郎に遣し夜の、情由を知らねばわけ迷ふ、歎きの霧ぞ深かりける。叔父の心を推量る、珠之

介は涕うちかみて、いとおほけなき御述懐。然る御こゝろにましまさば、今よりこゝに留りて、左界の城を攻め給ふ日に、第一番に先駈して、戰歿せば那塹の、埋草になり侍りてん。この義を允し給ひね、と勇むを興房推禁めて、噫聲高し。何をかいふや。左界は主君のおん爲に、孤城なれば戍りがたかり。そを攻ることあるべからず、といぬる日仰下されたれば、又いかにともせん方なし。おもへば四稔先つ比、わが妻をも及獨子なる、房子丸をも那浦にて、水屑となしたる是より以來、心の憂苦は淡雪の、消ぬるばかりに積れども、そを慰るものもなし。爾るに爾と不憶く、再會せしは迭の歡び、今は世に只叔父ひとり、侄ひとりなる事にしあれば、養ひとりて弓箭を傳へ、家を紹するものならば、幸なき中の幸なれども、左界の城を喪ふたる、愆に身を恥て、他郷に蟄せしわれなるに、わが私の家の爲に、子を養はば貳ごころ、これあるに似て不忠なり。縱この義を免されて、養るゝよしありとても、爾をこゝに留めがたかり。そはわが心に羞おもふ、舊愆あればなり。やよ必な恨みそ、といはれてほゐなき珠之介は、沈吟じたる頭を擡て、吾儕をこゝに留めがたし、と宣はする事情を、定かに知るよしなけれども、いかなる過世の約束なりけん、仂きとき別れたる、亡親よりもなつかしく、思ひしおん身に一チ日も、親しく事へまつらずば、侄たる甲斐もあらずかし。枉て許させ給ひね、と口説

くを聽かず頭を掉て、愚なり珠之介。武運めでたく年老て、坐席の中にて身まかるならば、末期の水をとらせんず、と逆思ひし妻と子を、先だてて今遺る身に、再會測りがたかるべし、と思ひし侄にあひながら、追遣るものゝあるべきや。そを遠離るは武士の義理。公道人情兩ながら、全うしがたきものなるを、愛惜せんは惑ひなり、とは思へどもつれもなく、只今出てゆけとはいはず、相別るゝとも爾が久後、心にかゝらぬわれならねば、東國へ薦遣して、仕官の途を開くべし。故管領憲實ぬしは、わが主君に身を寓せ給ひて、長門の深川におはしませしが、いぬる比世を逝り給ひき。されば是等の内縁もて、今の鎌倉の兩管領も、興房あるを知せ給へり。就中扇谷朝興朝臣の藩中には、年來相識る者多かり。那家やうやく衰へて、今は武藏と上野のみ、所領二箇國に過ざれば、武の河踰に在城して、なほ北條家と戰ひ給へり。然けれども舊家にて、世々管領の貴族なれば、關東の武士これ彼と、志を運ぶもの、少からずと聞えたり。かゝれば又遠からず、鎌倉に還住して、威勢舊の如くにならん。よりて爾を紹介して、河踰へ遣すべし。朝興朝臣を主とし憑みて、名を揚家を興しねかし。かゝれば又今よりして、東西千里の別にあなれば、相見んことは輒からず。就て警むべき數个條あり。われつらつらと爾を見るに、その容止醜からず。世に美男たるものは、色の爲に生涯を、愆こと往々多

かり。これ亦その身の不幸といふべし。又爾は能辯にて、頓智才覺ありとおぼし。多辯は是德の害なり。默して德を脩るに不如。才あるものは自負て、行狀宜しからざるが多かり。周公の才の美なるも、驕且吝ならば、その餘は見るに足らずといはずや。爾が主なる元盛も、驕且吝にて、忠義に疎きものならずは、那滅亡に及ぶべからず。爾もそれを見習ふて、貪り驕を賢しと思はば、一旦權を執ることありとも、又元盛のごとくなるべし。世に浮薄なるものは、色を好み貨を愛して、恥をしらざる故に禮儀に疎かり。禮は是、貴賤を序る曲尺なり。一分は則寸に及ばず、一寸は亦尺に及ばず。且よくこの義をわきまへて、分限を守るべし。かくはいへどもわれも亦、少かりし時愆多かり。わかき時の愆は、世に免さるゝことありとても、改ずは何の益かあらん。これを譬ば嫩樹の幹に、細小なる疵をつくるが如し。その樹大きうなるときは、疵も亦隨て、大きうならずといふものなし。かゝればわかき時の愆を、はやく改めざるものは、その愆大きうなりて、死後まで疵の亡ざるなり。わが今悔る所をもて、聊爾に示すのみ。智仁勇の三德も、忠信孝悌の八行も、自然と人の心に備る。なれども學で磨ざれば、五常八行顯れず、悪趣に染り易きもの、和漢今昔一致なり。興房が少かりし、その比の愆を、今は知る人なしといふとも、竊に心に恥ざらんや。その愆を知るをもて、今は

愆鮮きのみ。この餘は爾みづから擇て、よしや忠信の狗となるとも、亂離の人となることなかれ。こゝろ得たる歟と說諭せば、珠之介は胸前を、錐もて刺るゝ心地しつ。慚愧後悔限りなく、畏りてぞ土居たる。登時輿房は、外面にうち對ひて、掌をうち鳴らせば、庭門に退き居たる、夥兵等齊一阿と答て、遽しく來にけるを、なほも間近く呼よせて、この少年の來歷を、われ又具に糾問せしに、素是東國のものにして、その親はわが舊友なり。よりて翌人を隷て、舊里に送遣りてん。今宵は城中に留め置て、かさねてわが下知を俟べし。等閑になものせそ、と叮嚀に命ずれば、夥兵等は僉こゝろ得て、珠之介を將て退りけり。有之而又輿房は、腹心の老兵二名に、珠之介が事を聶き示して、笠草鞋の類まで、旅裝の准備を急がし、扇谷家へ紹介の、一通を書寫て、更闌る比珠之介を、竊に召よせて扨いふやう、曩に示せし趣は、今さらに又いふに及ばず。扇谷家へ汲引の、書翰は既に寫め措つ。盤纏も聊取らすべく、老兵二名に送らせん。翌は夙めてこゝを出て、はやく東國へ赴くべし。戰國の常制なれば、路に新關の多かるべく、盜難も亦測がたかり。姿を窶し微行して、非常の患を禦ぐを要とす。就て東國に到ても、今の名字であらん事、有繫に憚なきにあらねば、末松の松を省き、珠之介の玉を除きて、末朱之介晴賢と名告るべし。されば道家の教にも、小人罪なし、玉を抱きて罪あり、とな

もいへりしに、玉篇を除かば、この意に稱はん。只是のみにあらずして、末と陶とは文字異なれども、和訓は等しく是須惠なり。又晴賢と名づくるよしは、天も晴ざれば、宇宙暗く、人も賢ならざれば、理に明ならず。冀くは爾が心術、暗からざる事蒼天の、亮々乎として晴たる如く、世々の賢者に恥ざれ、と今その氏の末かけて、をさ〳〵文字に表せしのみ。這名に羞て行狀を、愼めかし、と解示して、書翰に黄白如干兩を、とり添て取せしかば、珠之介は受戴きて、坐に感涙の進むを禁めあへず。御慈愛深き御洪恩、仰謹てうけばりまつりぬ。膽に銘じ心に勒みて、忠勤を奬みてん。憾らくは路遠くして、訪問容易からざるべし。願ふは自愛し給ひてよ、といふに興房歡びて、しからんには安堵たり。今はしも是までなり。はやく睡りてとく起よ、と急し立れば珠之介は、いふべき事もいひ難て、別を告て臥房に入りしを、その曉がたに那老兵等は、呼覺し饌を薦めて、客裝を整しめ、兩人卽珠之介に相具して、行李を背負ひ笠子を携へ、城を出東を投て、武藏の河踰まで送りゆくめり。こは興房が前の宵に、竊に分付たればなり。是よりして珠之介は、姓名を改めて、末朱之介晴賢とぞ名告りける。

第二十回

享祿の役君臣亂離す
鷹捉山に晴賢麑を逐ふ

且說、尼崎の城主、右馬介尹賢は、香西元盛を讒滅して、竊に怨を復せし後も、心安からざる所あり、獨つら〳〵深念をするに、元盛既に亡びたれども、渠が弟波多野穗通、柳本國友等に、わが密謀を知られなば、絆の難義に及ぶべし。初より件の密議を、知りたるものは兩箇に過ず。そは矢野宗好と、獄舍に繫ぎし偸兒のみ。那偸兒奴は欺撃に、はやく結果けたれば、後産は病ねども、心憎きは宗好なり。過分の賞祿を取らせしに、猶もこゝろに嗛ずや、功に誇れる面色す。然るを知りつゝ由斷して、那奴が口より洩されなば、後悔其處に立がたからん。この禍を禳ふに不如と、腹穢くも思量りて、竊に毒を餌んとせしを、人ありて矢野に告にけん。宗好は驚き怨みて、逐電して迹を埋め、丹波の八上に赴きて、波多野備前守穗通に、尹賢が隱慝の顚末、元盛讒死の祕事を、遺なく訐き告しかば、穗通聞て遺恨に勝ず、矢野宗好を留措て、その身は潛びて京師に赴き、弟柳本國友に對面して、絆云々と報知せ、右典厩（尹賢をいふ）はわが兄の、冤家なること勿論なれども、入道殿（高國をいふ）の淺はかに、讒言を信容て、さしも罪なき家臣を、むごく討せしこそ遺恨なれ。先や謀反の旗揚して、軈て思ひしらすべし。和殿もはやく丹波に還りて、力を勠せよ、と薦めにければ、國友大く主を怨みて、原來いぬる比七枚の、誓書を賜りしも、かゝる事のあればなり。然りとも知らで欺れ、けふまでもよしなき忠義に、兄

の枉死を思ひ易しは、かへす〴〵も悔しけれ。宣ふ趣こゝろ得たり、共に覺期を仕らん、と應て稙通を還し遣し、その日漁獵に假托て、竊に京師を立退つ、神尾の城に盾籠りて、兄稙通と共侶に、近國の武士に諜じ合せ、阿波の三好に一味して、掎角の勢ひを張りしかば、京師の騷動大かたならず。然程に、三好筑前守元長は、稙通國友が、返忠に時を得て、去歳の夏大永四年肆月九日、阿波の撫養にて薨給ひし、故將軍義稙卿の公達、阿波の御曹司義維を、推て大將軍と稱へ奉り、故主右京大夫澄元の獨子、聰明丸元晴を、管領になさんとて、左界の城將、三好勝時、その子勝長等を先鋒の大將として、阿波讃岐の大軍を引卒し、京師を望て攻陟りしかば、道永禪門防ぎかね、將軍義晴卿に俱し奉りて、近江路へ落てゆきけり。三好等卽上洛せしかば、阿波の冠者義維は、左兵衞督に任ぜられ、聰明丸も元服の後、右京大夫になされしかば、晴元とぞ名告りける。是より鬪戰年を累ねて、三好が威勢盛なり。有如之程に、柳本彈正國友は、又晴元に昵近して、をさ〳〵逆威を振ふものから、三好が權威に及ざりしを、娟みて晴元に讒言しけり。この故に晴元元長、主從の間睦しからず。とかくする程に、享祿三年六月晦に、柳本國友は、播磨の依藤を攻ける陣中にて、何ものの所行とも知らず、寢首を搔れて亡にけり。これは矢野宗好が、所爲なるべし、といふものありしを、兄の稙通實事と思ひて、矢庭に宗好

を擊捕りけり。實は讒言なりとぞ聞えし。國友といひ宗好といひ、その身の終りをよくせざりしは、是悖逆の天罰にて、汝に出て汝に返る、因果にこそといはぬものなし。この比高國入道は、法名道永を改て、常桓と號せしが、頻に三好に戰ひ負て、從父弟尹賢と倶に播磨に赴き、浦上掃部助宗村を賴みしに、宗村輙く相譚れて、播磨美作備前、三州の大軍をもて、常桓を援け勝に乘て、晴元を擊靡け、遂に尼崎大物の浦に屯して、四國を攻んと議する程に、三好元長大軍を將て、はやく阿波より推よせ來つ。又宗村が主なりける、赤松二郎冠者政村は、年來宗村に權を奪れて、その身は有れども無が如く、冠履倒に置れたる、鬱憤を散さん爲、陽には宗村の加勢と倡て、みづから隊兵を將て、大物の浦に出陣し、潛に三好に諜し合して、裡所をしたりしかば、常桓尹賢宗村は、只一戰にうち負て、士卒と共に陣歿す。時に享祿四年六月四日、この敗軍を世に傳へて、大物崩と喚做たり。尹賢宗村が擊れし折、高國入道常桓は、辛く脫れてそのわたりなる、紺搔の家に隱れしを、敵の雜兵に搜出されて、廣德寺（大物の庄に在り）に禁錮られ、おなじ月の八日に至て、詰腹を切せらる。常桓死する年四十八。廣德寺の住持埋葬して、法諡を三友院とぞ稱ける。義維晴元元長等の事、話是下になし。抑件の一條は、世の人の知る所、軍記の趣を抄錄して、多く亦作意を雜へず。但高國入道と、柳本彈正等が事

迹、尹賢竝に宗好等が終る所、天理の昭々たるをもて、勸懲の一端とす。又是作者の用心と知るべし。閒話休題、復說末朱之介晴賢は、那老兵等に送られて、廿日あまりの客宿をしつゝ、武藏州入間郡、河踰の鄕に著しかば、城外に旅宿を投めて、衣裳を更め從者を將て、城中に進み入り、管領扇谷修理大夫朝興の家臣、某甲が第に到りて、陶興房の書翰を出し、縡云々と述て對面を請しかば、件の家臣その意を得て、客房に迎入れ、出處來歷を問て、爾後主君に聞えあげしに、陶興房がはるぐ\と、紹介したる少年ならば、疑ふべきものにあらず。よしを興房に答遣して、朱之介とやらんをば、留置くべし、と命ぜらる。是により朱之介が、執袴の望み事整ひ、送り來つる老兵等は、家臣許諾の報書と、朱之介が消息を受とりて、別れて備前の三石へ還りけり。却說扇谷朝興ぬしは、末朱之介が月俸を沙汰して、且子舍を賜り、爾後召出してこれを見るに、艷顏愛すべき少年にて、進止も疎鹵ならねば、近習の後に從して、左右近く使れけり。有如之程に朱之介は、言と行ひを愼みて、精悍しく仕る事、はや一稔になりしかば、朝興いよ／＼愛歡びて、祿を增し格を升して、且くも左右をはなさず、折々臥房に果して、二なきものにぞ思はれける。有恁又燕往き雁來ぬる、春秋をかさね／＼て、大永八年といふ年に、享祿と改元あり。朱之介は既にはや、十九歲になりたれども、骨太からぬ優形な

れば、戰國の習俗にて、いまだ額髮を剃除かず、故の儘にて使れながら、いよ〻出頭して、第一の近習たり。然ども戰場に扈從して、軍功あるにあらざれば、莊園などは賜らず、從僕一兩箇を隷られて、子舍も君所の內にあり。一ト日の休暇を得ざりしかども、そを聊も存念せず、勤勞他事なく見えしかば、主はさらなり老黨も、渠はお役に立べきものぞ、と稱て憑しく思ひけり。これにより朝興は、有一日坐邊邇く侍りたる、朱之介を見かへりて、われこの年來宿願あり。然ども緈の障り多くて、いまだこれを果すに由なし。汝この義をよくせんや、と問れて朱之介些も擬議せず、某ふかく御武德を慕ひ奉り、千里をも遠しとせで、推參仕たる甲斐ありて、いとも親く召使れし、四稔の寵遇故老に倍て、俸祿この身に餘れども、いまだ御恩に報ずべき、一个の功なきを、朝な夕なに羞怕れて、胸休からず候ひしに、かゝる仰をうけ給はるこそ、思ひがけなき幸なれ。及びがたき事なりとも、命にかけて仕らん。仰つけらるべうもや、と眞實たちてまうししかば、朝興ぬし歡びて、言下の承諾奇特なり。予が宿願は別義にあらず。曩に默契道德と喚れたる、抖藪行脚の沙門あり。一稔武藏に飛錫して、愚俗を濟度し給ふ程に、貴賤歸依渴仰して、如々來禪師と稱たり。因て予も城中に請待して、その說法を聽聞せしに、衣鉢飄然として、傳燈白日なきが如く、梵唄殊勝にして、淸響塵俗の心耳を洗淨せり。實に是、

濁世に多く値偶しがたき、人間未曾有の活佛なれば、粤に輪回應報の、理りを了悟して、さらさらと思惟るに、わが家數世戰國に鹿觸して、一方の藩鎭たり。敵を殺し躬方を撃せし、その罪障無量なり。もし善根を栽ずもあらば、生ては子孫に福ひなく、死しては奈落に陷るなるべし。いかでこの如如來禪師に相譚て、勝軍地藏大菩薩、百體を造り奉り、もて一箇寺を建立せば、當身淸果、自他平等、子孫繁昌のよすがならん、とはやくも思ひ決めしかば、卽よしを禪師に告て、造佛の事を憑みしに、禪師許諾の氣色なく、御情願よしといへども、そは只有漏の緣にして、眞實の功德にあらず。縱一寺を建立せず、一佛を作り給はずとも、德を布て民を愍み、仁を施して政を正しくし、殘に勝殺を去り、公道にして、私慾を省き給はば、身後には升天の歡びあり、御子孫長久疑ひなし。無益の所行に國用を費して、民をな苦め給ひそ、と只顧敎化せられしかば、その道理に感服して、且く思ひ止りしが、禪師ははやく東國を去て、今は吉野の山脚なる、六田川の上に菴を締びて、行ひ澄しておはするよし、風の便りに聞えたり。こゝをもて、われ又ふたゝび思以るに、禪師の敎化は尊けれども、われ聖人にあらざれば、いぱれし如くに行ふ事かたかり。佛を造り寺を建るは、よしや有漏の緣なりとも、これを爲さばせざるに優べし。なほ又禪師によしを歎きて、這宿願を果さんず、と思ふ事頻りなりけれ

ども、わが爲に使して、禪師に告て許容せられん、能辯奇才のものを得ず。加旃相摸より、西も南も皆敵地にて、その往還容易からず。然るをよく那地に到りて、主命を傳ふべき、智勇のものも亦得がたし。これらの障りあるをもて、思ひかねつゝ竊に擇むに、この任に稱ふもの、汝が外にあるべうも覺ず。かくなしがたきよしあれども、汝大和へゆくべきや。百十數里の敵地を過りて、主命を傳へ禪師に請ふて、予が宿願を果しなば、その功績莫大ならん。賞は宜く乞ふに依るべし。心を定めて言承せよ、と思ひ入りつゝ聞え給ふを、朱之介はおそる〳〵、聞果て頭を擡げ、弱冠未熟の某を、人がましく思召れずは、かゝる仰のあるべしやは。縱敵地に候とも、凡霜露の降る所、舟車のかよふ所ならば、姿を窶し方便をもて、山をも河をも踰つべし。只心もとなきは、件の如如來禪師とやらん、造佛の義を許容あるとも、老體百里の往還を歎ふて、庵室を出がたし、と宣はばすべなからん歟。尊慮奈何、と問まうせば、朝興のぬし感嘆して、われ初より汝が才幹、かくあるべしと思ひしに、そのいふ所果して違はず。禪師わが意を納得ありて、造佛の義を許されなば、東國へ作ふに及ぶへからず、那處において事を辦め、堂塔も亦彼山の、邊において建べきのみ。よりて這回ば、沙金五百兩と、白布二百反を贈遺して、造佛の料とせん。この餘堂塔建立の諸雜費は、百軀の佛像成就の比、淯て齎し遣してん。

今この件の金と布を、吉野まで運送せんに、道中幾十數の、從者を要するや。捴て汝が望に任せん、宜攷定むべし、と亦他叓もなく急れて、朱之介は脱るゝ路なく、霎時頭を傾けて、逆旅に多人數なるものは、還て人に怪られて、障りになる事候べし。有恁ば布とおん金は、韓櫃二前ばかりに藏めて、是を舁もの七八名、別に宰領一名を添られなば、縡足るべうもや候はん、扨某は山伏の、峯入するごとく打扮て、大約這八九箇の、從者を將て路を急がば、誰か怪みて禁むべき、輙く那地へ到らんこと、何の疑ひか候べき、この義は御心やすかるべし。と憚る所もなくまうしゝかば、朝興のぬし大く感じて、適微妙く計りにけり。むかし義經の奥州落も、主從山伏に打扮て、安宅の關を踰たりと歟。顧ふに汝は今の世の、牛孺丸といはまくのみ、速に准備して、遠からず首途させん。さばれ那首に到るとも、禪師の許容あるまでは、よしや一年十箇月、逗留するともけしうはあらず、倘然る時宜に及びなば、無用の從者等は皆返して、縡の便宜をはやく報せよ。脱落あるべき事ならねども、よろづの進退肝要なり。只管憑む、と懇切なる、主命遺もなかりしかば、朱之介は言承しつゝ、准備の爲に退りけり。却說朝興は、當直なる老黨を召よせて、件の趣を說示し、如々來禪師へ調進の、件々を整へて、はやく朱之介に遞與すべし。その餘の事は恁々と、辭せわしく命じ給へば、件の老黨奉りて、

下知を彼此に傳へしかば、日ならず物みな整ひて、盤纏も多く遞與しけり。そが程に朱之介は、兜巾篠懸金剛杖、摠て修驗者の打扮なる、客裝を整へて、主君に別を告奉り、宰領に立られたる、杖月乃介といふ雜色と、年來その身に隷られたる、坊二郎といふ小厮を將て、四箇の奴隷に、兩前の韓櫃を舁し、遺る四箇を輪遞と定めて、此彼共に十一名、この年の秋捌月の、初旬に起行して、大和路投て急ぎけり。豫て計りし事なれば、通路の城下新關も、障ることなくゆき〱て、その月の望の比、吉野山の麓なる、六田の郷に著しかば、郷の客店に宿投定めて、逆旅主人を呼近づけ、默契如々來禪師の草庵は、何處ぞと諮るに、主人答て、禪師の住せ給ふ處は、這六田川を渡らせ給ひて、北六田と比曾寺字地の間なる、山里で候へば、路程遠くもあらねど、けふははや黃昏たり。今宵より精進潔齊して、夙めて訪せ給へといふ。朱之介うち聞て、渠何をいふやらん、と思へどもその意に任して、敢亦魚肉を用ひず、さばれ兜巾篠懸なンどは、逗留の間に要なしとて、これらは皆脫捨て、野袴を穿たりけり。有恁而その翌旦朱之介は行水して、衣裳を改め、二前の韓櫃を、八箇の奴隷に舁し、先に立つゝ、乃介坊二郎を將て、北六田のかたに赴んとす、登時逆旅主人はさらなり、奴婢等もなべて朱之介等が、眞の修驗者ならぬを見て、疑惑ざるものなければ、よしを乃介に聶き問ふに、乃介答て、否、疑

るゝ事にはあらず、原是大諸侯の使者なれども、輙く敵地を過らん爲に、假山伏になりたるなり、必な怪みそ、と明々地に報しかば、衆皆初て心おちゐて、ふたゝび介意せざりけり。既にして朱之介が、出てゆかんとせし折に、主人はこれを送るとて、急に袂を掖とゞめ、烏許がましくおぼさんが、凡俗のおん身にて、精進潔齋し給ふとも、深信堅固ならざれば、禪師に御對面は愜ひがたかるべし。この義を念じ給へかし、といふを朱之介はよくも聞かず、應とばかりに回答して、はやふり捨て急ぎけり。然程に朱之介等は、六田川をうち渡りて、北六田と比曾寺の間なる、山里にゆきて諮るに、果して禪師の庵室は、里を去ること十町許、樹柆深き岡のほとりにあり。進み近づきて且見るに、這柴門の正中に、空菴の二字を書したる、一ト枚の牌を掛出して、裡面より固く鎖したり。當下朱之介は思ふやう、實に人なき庵ならば、外面よりこそ鎖すべきに、内よりせしはいかにぞや、空菴は虚文にて、必人のをるならん。とく呼門へ、と急せば、從者等はこゝろ得て、聲を合して呼門ども、且くは應せず、呼こと半晌ばかりにして、年十ばかりなる喝食の、奥のかたより出て來つ、戸節の竅より闞窺て、來れるものは誰と問ふ。朱之介は腹立しさに、一入聲をふり立て、是は東路よりはるぐ、と禪師にまうすべき旨ありて、主の使に立たるものなり。このよし聞えあげ給へ、といふを喝食聞あへず、

原來鎌倉の受領家、扇谷朝興ぬしの、おん使に候歟、とふたゝび問れて朱之介は、渠いかにして名をさすまでに、わがうへをはやく知りつらん、と思へば聲を和らげて、いはるゝ如く、某は、朝興の使なり。禪師に見參せん爲に、うち驚し奉りぬ。といふに喝食又答て、わが師は近屬庵を出て、葛城山に籠り給へり。さるにより這柴門に、空菴の牌を掛たり。歸庵の程は測がたかり。とく〳〵東國へ還り給へ、といへども聽ず朱之介は、なほも戶際に身を倚せて、そは本意ならぬ事にこそ候へ、禪師は庵に在さずとも、主命に依て千里を辭せず、こゝまで來ぬるをいかにして、いたづらにやは還らるべき、旅宿に退りて歸庵を俟ん。さても見參に入りがたくば、葛城山にわけ登りて、在處を索ね奉らん、といふを喝食推禁めて、疑ひ給ふな、勞して功なし。わが師の山に入り給ふに、或ときは吉野葛城、或は熊野高野の奧、一ト日も處を定め給はず、はやき時は兩三箇月、遲きときは一兩年、庵にかへらせ給はぬものを、何處を投て索ぬべき。いぬる日わが師の出給ふ折、吾儕を見かへりて宣ひしは、近き日に東國なる、管領扇谷朝興ぬしの使者、末某甲といふ靑侍來訪せん、渠は倘緣なきものなり、速にかへし去せよ、渠疑ふて逗留せば、竟に東國へかへりがたき、枉難其身に黃緣ることあらん、この義を傳へ候へ、と竊に示し給ひにき。有恁者はやくかへり給へ、無益にこそ、と宿めて、跡を旋

らし奥に入て、呼べどもふたゝび出て來ず、朱之介はせんすべなさに、又韓櫃を舁し河を渡して、六田の客店にかへりにければ、主人は遽しく出迎へて、いかに如々來禪師さまに、御對面候歟、と問れて朱之介は慝によしなく、綷云々と說示すを、主人は聞つゝ眉を顰めて、那庵室には喝食なし、初より禪師のみ、獨住せ給ふをもて、他鄕に出させ給ふ日は、空菴の牌あるのみ、留守する者はなき該なるに、そはこゝろ得ぬ事にこそ候へ。憶ふにその喝食と見えたるも、是則禪師さまにて、對面許しがたかるよしを、諷へて示し給ひしにあらずや。とまれかくまれ御逗留は爾るべき事とも覺ず、かへらせ給ふに優ことあらじ、と老實たちて諫しかども、朱之介は從はず。われ主命を禀ながら、いまだ禪師の面を見ずして、何處へとて歟還るべき、もし喝食が禪師ならば、狐狸に等しく化たるならん。本の形であらんとき、急にうち入て對面せば、脫るゝによしなかるべし、といひつゝ從者等を見かへりて、翌よりして汝達は、迭代に那首にゆきて、日々に庵を窺ふて、禪師の庵中に在りと見ば、走りかへりてわれに報せよ。脫落なせそ、と分付れば、衆皆齊一その意を得て、形のごとくにしたりける。有恁程に捌月は過て、玖月中浣になりしかど、禪師は庵にかへり給はず。さらぬだに、旅は寂しきものなるに、日影短き秋の宿、降布く木葉、門の霜、鄰に疎き山里の、晝は松風、夜は鹿の、聲より外に友もな

く、寤ても寝ても徒然に、堪かねたりし朱之介は、懊悩として樂まず、心頻りに焦燥て、肚裏に思ふやう、われ河踰に在りし日は、主君と共に起臥して、鄙話にいふ晦知らず、錢帛を手に取らねども、衣食に餘りありけるに、よしなき使に立られて、客店住ひの不樂しさは、三たびの饌も豆腐のみ、薄き蒲團にこの夜寒を、凌ぎ難るは罪なくて、配所の月を見るに似たり。然ばとて今さらに、かへるにも還りがたき、進退こゝに谷りぬ。いかにすべきと胸にのみ、苦しき日數を歷る程に、忽地に又思ふやう、啓行此の主命に、那地に到て、時宜により、逗留數月ならんには、無用のものを返すべし、と宣ひし事あるなれば、韓櫃舁八名を、四名は返してこれらのよしを、聞えあげなば後々まで、よろづに後安かるべし。さはとて軈て杖月乃介に、商量しつゝ奴隷等に、縡云々と聞えしらして、半分は留り半分は還れ、といふに此彼決著せず、衆皆齊一願ふやう、この日來なすこともなく、僉徒然に候へば、武藏の事のみ思はれて、歸心箭の如くに候に、還るものこそ幸なれ、遺れるものゝいかゞはせん、鬼界嶋に蹉跎せし、俊寛に似ていよゝます〳〵、堪がたくこそ候べけれ。願ふは遺なく返させ給へ。よしや禪師の歸庵ありて、韓櫃を舁ものなくとも、川一ト條を渡すまでなり。その折は里人を、傭ひ給ふて事は濟むべし。一トたび武藏へ立かへらば、又おん迎にまゐりてん、是廣大のおん慈悲なり、承引給

へ、と諸聲に、悲み乞て已ざりければ、朱之介はさもこそとて、又乃介等によしを示して、件の八人を返し遣し、只乃介と坊二をのみ、留めて韓櫃を守らせんといふ、商量決定したりしかば、奴隷們はみな歡びて、別を告て、詰旦、山の端遠くあから引く、東へかへり去しかば、是より人の寡くなりて、いよ〱寂しく慰め難て、せん術のなけれども、朱之介はいぬる比、主君にまうせし事もあれば、今茲をこゝにくらすとも、禪師にあはずは阿容々々と、かへらじと思ひ決めたる、志を勵して、みづから件の草庵の、ほとりにゆきて窺ひつ、又乃介と坊二郎を、間なく時なく遣せども、柴門はなほ鎖されて、些も便宜を得ざりしかば、困じ果つゝおもふやう、われは近江の深山の家に、年九ッの比まで在りければ、日毎に弓箭を手夾みて、獵くらしたりけるに、爾後はさる技もせず、大和は山又山のみなれば、獵夫なども多かるべし。さばれ吉野多武峯は、殺生禁斷の聞えあり、この六田川の北方なる、鷹捉山には異鳥多く、獼猴も兎も少からず、と人のいひしはさもありなん。われ河踰を出る時、路に山賊を禦ん爲、角弓に箭をとり添て、囊に斂め、坊二に持して、來つるものこゝにあり。翌は未明より彼山に、獵して日來の鬱氣を散さん。さはとて軈て准備しつ。その宵乃介に云々と、よしを告留守を委ね、和殿獨で寥しからんが、翌は獲ものゝ鳥まれ獼猴まれ、羹にして酒を飲せん、霎時の程ぞ心をつけよ。

といふを乃介は聞あへず、そは宣はすることながら、如々來禪師の活佛なる、神變不思議の噂あり。こゝをもて精進潔齊、深信堅固ならざれば、かの法顏を拜みがたし、とこゝの主人もいひしにあらずや。然までにはあらずとも、今その歸庵を俟ながら、殺生をして遊びくらさば、禪師はいよ〳〵忌避給ひて、拜顏かなひがたかるべし。思ひとゞまり給へかし、と諫ることの老實なれども、朱之介は才を負て、人を非とする本性の、この時に稍顯れて、陶興房が教訓を、うち忘れけん、冷笑ひて、女々しき事をいふものかな、出家は出家の行ひあり、武士は武士の務あり。殺生は五戒の第一、出家はこれを保べく、破るべからず。在家に何の憚りあらん、禪師を深仰すればとて、戰場に臨み敵にあふても、殺生せじとのみ念じて、敵に撃るゝものやはある。畢竟かゝる理に暗き、愚俗は共に論じがたかり。禪師は實に活佛ならば、この理りに黠頭して、必許し給ふべけれ。さは思はずや、と說破れば、乃介は終に爭ひかねて、寔に然なりと答けり。却說その翌朝、朱之介は、野裝束して、角弓を挾み、坊二には箭を負し、蒉籥の割籠を持しなどしつ、未明より宿を出て、鷹捉山に赴きける。時は十月の中浣なりければ、疎林枝をまじえて、僅に翠黴を見し、白雲出沒して、高く案上にかゝるめり。溪は落葉に降埋れて、音はすれども水を見ず、鳥は古巣を出てゆきけん、聲稀にして影遠かり、羊腸たる樵路

に、枯草を結かけたるは、是何人がせし栞ぞ。嵯峨たる山峡に、怪松の生出たるは、造化の巧
倣せるなり。山靜にして、短景を覺ず、巖累りて、長藤に携る。了得に趣なきにあらねば、下
晡になるまでも、還ることを忘れたり。浩處に左手のかたなる、枯芒花の中よりして、一隻の
麑の走出しを、朱之介は遣も過さず、弓彎固めて瞟と射るに、その箭の寃ひ些し違て、麑の後
足を射削りけん、倒れんとして遂に仆れず、足を曳つゝ逃走るを、なほ脱さじと赶ふ程に、大
約五町あまりにして、何處ゆきけん見えずなりけり。正しく射たりと思ひし物を、走らせしこ
そ悔しけれ、精竭たらば必倒れん、是首歟彼首歟、とばかりに、いよ〳〵山深く入るを覺ず。
されば朱之介は穉き時、深山を奔走したりしかば、かゝる時にも足逸早きに、坊二は後れて陟
り來ず、とかくする程に黃昏たり。かへるに路の遠ければ、朱之介は心慌て、麓へ降らんとて
急げども、舊來し路の定かならで、日ははや暮つ天さへ曇りて、出べき月の出ざれば、又いか
にともせん術なし。頻りに聲をふり立て、坊二々々と呼れども、絕て應をせざりしかば、渠は
麓に俟にやあらん、と思へども心安からず、素より膽太き壯佼なれば、有恁けれども物とも思
はで、腰に著たる囊より、燧を出し火を鑽て、落葉を燒て四下を見るに、彼此に細竹多くあり。




出像第廿六

かたにくるしかりけれ、爰に一條の道あり、地を穿ちて縷の如く、寔ならずの谷の底に著きたるに、はや洞口にいたりにけり。縷たゞ彼處には是究竟と伐とりつ、手ばやく紈ね蕉火にして、路を索てゆけどもく、いまだ麓のかたに出ず、太と見れば前路に石室あり。立よりて熟視るに、洞口は五尺可、奥へ入ること六尺に過ず、古穴居の迹に似たり。この時天晴雲斂りて、隈なき月を瞻仰るに、夜ははや亥中になりにたり。且くこゝに疲勞を毉して、曉なば叉路を索ねて、徐に麓に下るべし、と尋思をしつゝ蕉火を、振滅棄て室内に進入り、弓箭を側に引つけて、坐してその天の明るを俟に、丑三にやとおぼしき比、遠く南の方に當て、女子の叫ぶ聲したり。朱之介は耳を欹て、怪しむべし夜の深山に、女子の泣く聲の聞ゆるは、渠山賊に掻攫れて、將て來らるゝにあらざる歟、もし果してしからんには、この石室はその賊の、巢穴にこそあらんずらめ、さではわれこの儘に、こゝに在りては便りよからず、箭間近く躱ひて、且そのやうを見ばやとて、はやく弓箭をとり揚て、遽しく室より出れば、その聲漸々に近くなりたり。何處にがな、と見かへるに、室の前回に小松繁れる、褊小なる岡ありて、間遠からざりければ、走登りつ弦衡潤して、今かくと俟たりける。畢竟朱之介、癖者を射仆して、件の女子を拯ふや否や、そは第三輯の初の卷に、解分るを俟て聞ねかし。

第三輯 卷之一

第二十一回

獵箭を飛して晴賢麗人を拯ふ
妖獸を追ふて直行少年に遭ふ

再說、末朱之介晴賢は、獵くらしたる鷹捉山に、曉る天を俟つ石室の、内より出て岡の邊なる、樹間隱れに弓箭を刺ひて、あやしき物の近づくを、且く其處に張ふたる、折から時暗の天霽て、玉兎鮮明なる深山路に、叫ぶ女子の聲嗄れて、這裡を投て伴るゝを、但見れば二八可なる、最美しき少女子を、扛もて來ぬる物ありけり。その容貌宛獼猴に似て、身長五尺許なると、四尺あまりなる妖恠の、此彼倶に面赭く、頭は眞白に長毛の、蓬を紊して背に垂れしを、人歟と見れば人にあらず、獸に類して獸に異なる、這物們が件の妙の、手を捉へ足を拘へて、宙に吊もて將て來つゝ、はや石室の裡面に卸して、何言やらん囂々と、相罵るを聞もとられず。妙はなほもちからを究めて、倚るを寄せじと角へども、鷹に捉られし綵烏の、翥くよりも甲斐なきを、恠物們は嘻々と嗤ひて、仰さまに推倒し、一箇は頭の方に跪居て、左右の手を捉拖り、

老大なるは前より進みて、妙の裳を推披き、己が毛臑を露して、且犯さんとせし處を、朱之介は看濟して、克彎固めて𢐕と射る。矢坪違はず老大なる、那怪物を背より、胸前までぞ射徹したる。窮所の深痍に霎時も得堪ず、苦と叫て仰反たり。思ひかけなき獵箭の響きに、頭邊に居りし怪物は、駭怕れ妙を捨て、走りて洞口を出んとせしを、程もあらせず朱之介が、發つ二の箭にこれも亦、吭を箆深く射串れて、叫びも果ず仆れけり。登時朱之介は、弓を戞喱と投捨て、腰刀を拔放ち、引提て洞門に找邇づき、射て仆したる怪物を、是彼共に十々滅を刺して、拭ふて血刀を腰に斂め、件の妙を勦らんとて、さし入る〻月を燭に、立よりてよく見るに、うたてや妙は齒を切り、眼を閉て氣息なし。且今是を救ひ得ずは、龍を屠りて珠を採らざる、烏許人に似たるべし、と獨語つ〻遽しく、腰に吊たる藥籠より、藥を取出て嚙摧き、やをら妙を抱起して、刀に附たる笄枝もて、齒を推開き吹入れて、呼んとするに名をしらざれば、こや喃喃、とばかりに、呼活ること半晌ばかり、その聲纔に耳に入りけん、妙はやうやくわれにかへりて、手足を縮め眼を開き、朱之介を見て、よくも視ず、吐嗟と叫ぶ聲と共に、抱れし手を振放き、膝の上より輾落て、戰慄きながら逃んとせしを、朱之介は含笑ながら、臂を伸して曳留め、婦人さのみな怕れ給ひそ。俺は是變化にあらず。今宵思はずこ〻に宿して、おん身の爲に

這妖怪等を、射て殺したるものなるぞ。且よくこれを見給へかし、といひつゝ指さす兩個の尸骸を、妙はなほもおそる〳〵、左さま右さま見かへりて、又朱之介をつく〴〵と、うち見て胸を撫下し、原來おん身は妾が與に、這禍鬼を禳せ給ひし、恩人にてましますよな。伴をも倶せず只ひとり、深山に宿し給ひしは、故こそあらめ。いかにぞや、と訝問る朱之介、あけていはれぬ情由ならぬ、俺うへは恁々ぞとて、且姓名を告知らし、君命によりて東國より、はるばる來つゝ六田の旅亭に、人を俟わびて日を彌る、徒然に堪ざりければ、けふしもこゝに獵くらし、獲物を貪り路に迷ふて、從僕さへに後れしかば、せん術なさにこの石室に、天の明るを俟たるなり。抑おん身は何處の人にて、這怪物等に捉られしぞ、と問かへされて、さればとよ、妾はこの山の、麓より程遠からぬ、上市の郷に世を渡る、杣木の落葉が女兒にて、斧柄と喚れ侍るなる、孀婦主人にあなれども、家則の嚴にて、牕より外に出されねば、漫行をせしことの、なき身にもかゝる厄難あり。甲夜には母親共侶に、亥中の比まで綿を摘て、臥房に入りて睡りしに、忽地親の外に出てわらはを頻りに喚起す、その聲睡耳に入りしかば、われにもあらで應をしつゝ、遽しく起出て、門の戸を颯と推開けば、親にはあらでおそろしげなる、非常の物が右左より、妾を楚と搔抓みて、宙に吊して走るになん。身は妖恠に捉られにけり、と初て

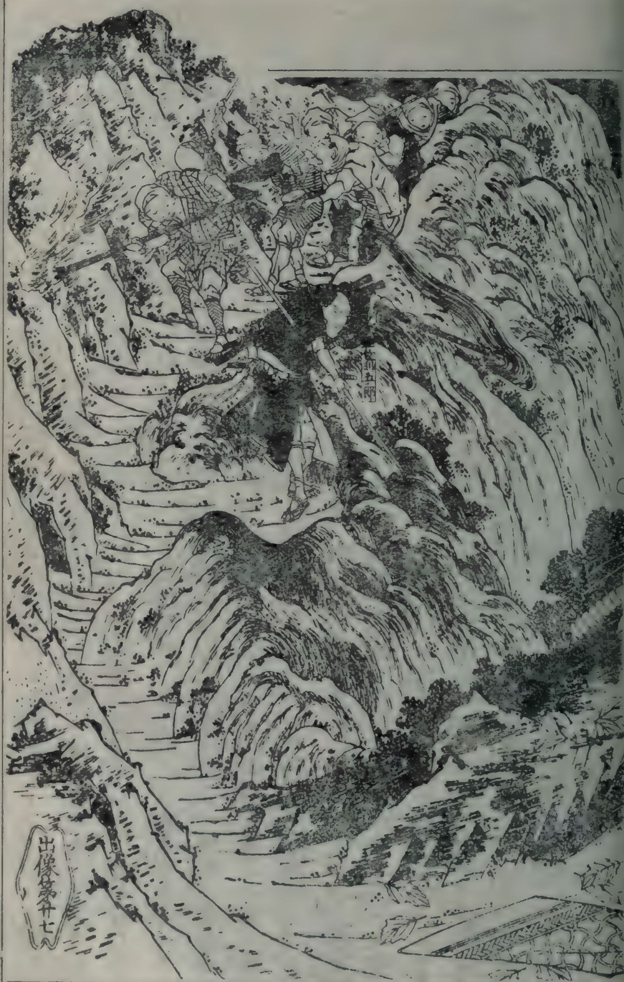
曉得れどその甲斐の、なくより外にすべしらぬ、這山中に扛もて來られて、命も既に危かりしを、はからず刀禰に救れしは、嶺上の松より彌高き、現再生の大恩なり。曉るに程もあらざるべし。家路に送り給はらば、親の歡びこの身の幸ひ、何もの歟亦これに優すべき。おん憐愍を、と他事もなく、憑む言葉の露よりも、脆きは袖の涙なり。長き夜ながら事あれば、深山の奥も明るにはやく、星光扶疎になりしかば、朱之介は山を下らんとて、斧柄を後に立しつゝ、出て捨たる弓箭をとり揚げ、路を徼めて山脚の方へ、赴んとする程に、遙に聞ゆる鉦鼓の、音響々と谺を誘ふ、其人許多蕉火を、振照しつゝ諸聲合して、やよ斧柄喃、おのえなう、と呼聲漸々に近づきて、這裡を望て來にければ、斧柄はさらなり朱之介も、彼は正しく里人們が、迹を蹤ふて來ぬるにこそ、と思へば軈て走り對ふて、應唯々と答へつゝ、手を鳴らし手を抗て、只管に指招くを、山挾皓くなる隨に、うち見て歡ぶ里の衆人、原來斧柄は恙なく、那首に居たり、と散動めきたる。そが中に一個の武士、年齡は三十許なるが、はや先立て近づき來つ、朱之介が弓と箭を、挾みあるを佶と見て、小松を盾に間なく寄らず。忽地に聲をかけて、斧柄に俱して咱們を、招きしは什麼何人ぞ、と問れて朱之介は些も擬議せず。俺は東國のものなるが、六田に久しく旅宿をすなれば、徒然に勝ずして、きのふは這山に獵くらし、路に迷ふてせん術な

さに、那裡の岩室に坐を占て、ひとり天の明るを俟程に、不慮も這婦女子の、妖怪に扛攫れて、將て來られしを見過しがたく、獵箭を飛してその妖怪を、二頭まで射て殺しぬ。俺氏は末、名は晴賢、字を朱之介と喚るゝものなり。和殿は亦是いかなる人ぞ、と問かへされて件の武士は、怯たる色なく小腰を折めて、在下はその女子と、同鄕の退糧人なり。武藝は家業なりといへども、田舍に要なき技なれば、晉算筆を人に誨て、纔に旦暮に給したる、安保箭五郎直行と、喚るものに候なり。しかるに昨夕小夜深し比、それなる斧柄があやしき物に、喚起されけん慌忙しく、立出て颯と推開く、門の戶音に母親は、睡覺て驚きあやしみ、はや追懸て出しかど、何地行けんそこらにをらねば、原來妖怪に喚出されて、將てゆかれしにあらんずらん、と心づきたる老女の推量、四鄰の門をうち敲き、里人們を喚起して、よしを告救ひを求る、事急なれば霎時も猶豫せず。且聚合しもの十人有餘、咸速に准備をしつゝ、何處を投て追索んとて、相議するとき故老のいふやう、這首は山腹なれば、妖怪山魅に少女子の、捉るゝことの稀にはあり。落葉の刀自の令愛も、山魅に捉れしものにやあらん。しからば里を涉獵んより、鷹捉山にわけ入りて、とく索ねよと誨るに、僉こゝろ得て異議もなく、這山に來て涉獵りし甲斐に、はやく斧柄に遭ふのみならで、圖らず貴所の救ひを得て、那妖怪を退治せられ、その身に恙なか

りしは、有がたきまで忝き、洪恩にこそ候なれ、といふを朱之介は聞あへず、和殿の賞美は分に過ぎたり。縡今こゝに及びしに、各位介意せらるゝは、俺この弓箭の故ならん。誘々といひつゝも、弓箭を捨たる恰利さに、箭五郎も里人們も、感嘆しつゝ僉共侶に、斧柄が身邊にうち聚ひて、且恙なき歡びを、述て朱之介が弓箭の修練を、且感じ且謝して、拐石室の邊に赴き、那妖怪の死したるを、是彼倶につく〴〵と、觀るもの舌を卷ぬはなく、駭嘆じ相顧て、こは疑ふべくもあらぬ、山猍にこそあらんずらめ、といふに一人ゝ進よりて、左見右見つゝ退きて、箭五郎斧柄們にいふやう、吾儕は杣木を樵るをもて、山に日を歷ることもあれば、這山猍を見知りたり。杣人の山を出ずして、木を伐ることのある折には、板屋を葺て起臥するに、寒けき冬の夜なく〳〵には、這山猍が突然と、來つゝ地炕の火に當るを、人僉熟て駭怕れず、渠が隨意に煖らすれば、渠も亦害をなさず、默然として曉方には、出てゆくものぞかし。さばれ晝も人なき折には、或は樵夫の割籠を竊み、衣物をも竊去りて、被もし啖ひもすることあり。嘗には好みて谷川なる、蝦を捕啖へるが、婬なることも大かたならず。その高老を歷しものは、里の婦女子を扛攫ひて、犯して後にその血を吸ふ、と豫て聞しに果して差はず。最惜むべきものにこそ、といふに頷く箭五郎は、衆人を見かへりて、這山猍の亡骸を、里へ牽もてゆかんは

要なし。然ればとてこの儘に、うち棄措んも快からず。こゝろ得たるもの兩三名、遺り留りて火をかけ給へ。又壯佼達一兩名は、先へ走りて落葉の刀自に、この爲體を報知らしね。とくとくと、いそがし立て、又朱之介にうち對ひて、思ひがけなき洪恩にて、斧柄を無異にかへすこと、親の歡びいへばさらなり。咱們までも面を起す幸ひで候へば、いかで是より上市なる、宿所に霎時立よりて、渠が親にも對面し給へ、勿論田舍の事なれば、させる饗應こそなからめ、さぞ辱く思ふべけれ。六田に逗留し給はば、路の序次も惡からず。枉てこの議をうけ引て、彼首で休息し給ひね、といふを然なりと衆人も、誘引立て已ざりければ、朱之介は推辭かねて、遂にその意に任しつゝ、ふたゝび弓箭を携へて、そが儘斧柄と共侶に、箭五郎們に郷導をせられて、上市に赴く程に、午の貝吹く比及に、杣木の落葉が宿所に來にけり。却說這上市に、落葉と喚るゝ老女あり。原是主人の女弟なり。十稔あまり前つ比、家あるじは時疫にて、夫婦うち續きて身まかりつ。家に一個の女兒あり、是則斧柄なり。外に憑しき親族なければ、斧柄が成長るまでとて、後見をして繰遶す、世帶車に篗絲の、ながき光陰を織紬ぐ、世渡る業に暇なき、孀あるじでありければ、婢妾一兩名使ふのみ。先代よりの田も園も、人を傭ふて畊させ、富むにもあらず、貧しくも、あらで驕らぬ山里に、足ることを知る衣食住、三四五歲の比より


斧柄を拯ふく
朱之介箭五郎ら


出像第廿七

ぞ、幼稚き姪を護養ひて、今茲二八になりしかば、良壻がねをと擇めども、こゝろに愜ふもののなければ、原の儘にて在明の、月光冴る冬の夜に、斧柄は山魅に捉られけん、臥房に在らずなりしかば、落葉は大く駭き患ひて、時を移さず里人に、告知せ迹を追して、出し遣りても心はおちゐず。いかに／＼と思ひわびて、目睡もせで天は明つ、日は升れども便宜も聞えず。いとゞ心を苦しめて、立盡したる門の杉、日影も眞直になりし比、里の壯佼一兩名、鷹捉山より歸來て、斧柄は恙なかりし事、朱之介が山猱を、二頭まで退治して、斧柄を拯ひし緣の趣、箇樣箇樣と落葉に報て、令弱は今衆人に、倶せられてかへり給はん。咱們は這吉左右を、おん身にはやく知せよ、と箭五郎ぬしのいはれしかば、先だちて走り來つるなり、といふに落葉は憂かりし胸の、日影の霜とうち解けて、天に喜び地に喜び、且壯佼們に茶を薦め、酒をも喫して叮寧に、勞ひてかへし遣し、猛に婢妾們を命立て、扨衆人を管待の、准備に暇なかりけり。有恁程に安保箭五郎は、里人們と共侶に、斧柄を伴ひ、朱之介を誘引て、齊一歸來にければ、落葉は笑つゝ出迎へて、こは病坊の師匠さま、（箭五郎をいふ）みなさまも御劬勞なりけん、寔に斧柄は命めでたく、ある人さまに極れて、妖怪をさへ退治せられし、その緣の崖略は、嚮に壯佼達のいちはやく、かへり來まして報られたれば、悴も瘥て歡び侍り、斧柄はさこそおそろしくも、哀

らう。天の明初きまるらせん。恙もあらずかへり給ひし、令愛の貌を欄して、常闇なりし磐戸より、天の明初は、斧柄を母屋に推戕めたる、陟框に手を掛て、喃家々さま、嗚呼がましくも摠名代に、且壽しくもありつらめ。吾儕も今朝まで立明して、うち歎きてのみありしぞや、といふ間に箭五郎

し心地ならん。衆皆歡びまうすなり、といひつゝ後方を見かへりて、やよ家々さま、那方さまは、鷹捉山にて、大小兩隻の、山猍を射て捕て、斧柄とのを拯ひ給ひし、恩人で候ぞ。いぬる比東國より、來まして六田の客店に、逗留の徒然を、鑿んとて山獵しつゝ、路に迷ふて日をくらし、山路に露宿し給ひたる、その折の事ぞとよ。山より旅亭に還んと、宣はせしを推留めて、おん身に逢しまつらん爲に、誘ひ立て來つるなり、おん管待もありぬべし。且歡びをまうし給へ、と辭せわしく會釋をしつゝ、引汲すれば朱之介は、微笑ながら落葉に對ひて、名告をしたる初對面に、落葉は額さへ手を銜て、思ひがけなき恩人さま、吾儕は斧柄が養母に侍り。小娘の與には命の親、とまうさんもなほあまりある、山路の容子も聞まほし。且はや奥へ入らせ給へ、斧柄ははやく客房なる、表席をみな推卷除て、とく掃淨めて賓客さまを、案内して茶を進らせよ。とく〳〵せずや、といそがして、又衆人にうち對ひて、各々さまにも歡びの、竹葉一盞まるらせん、といへば衆皆頭を掉りて、否咱們は土足なり、倘曳迭せし諸葛菜もあり。乾さ

ねばならぬ綿もあり。葛も蕨も曝さねば、ならぬ小春のけふの日和を、工夫に銷さばいかゞはせん。この隨放遣らるゝが、手釀酒の御馳走より、逈に愛たき饗待なり。暇まうす、と僉いひ捨て、己が隨なる田舍兒の、禁めても留らず動搖々〱と、齊一出てゆきしかば、箭五郎も且宿所に退りて、かへりしよしを妻に告て、出なほして來つべし、といふを落葉も朱之介も、なほ霎時とて推留めしを、後時にと契りて遽しげに、病坊の宿へかへりけり。登時落葉は斧柄と倶に、朱之介に案内をしつゝ、客房の上座に、推居て茶を荐め、豫て准備の酒盃に、殽も種々とり添て、歡びを述恩義を感じて、最叮嚀に欵待したる、人の誠に朱之介は、辭ひ難つゝ盃を、受巡らしてぞ譚ひける。當下落葉は膝を找めて、刀禰はおん年も二十のうへを、まだ踰給はじと見え給ふに、いかなる故のをはしまして、東國よりはる〴〵と、旅宿をしつゝ六田の鄕に、久しく逗留し給ふやらん。おん從者は候はずや、と問れて朱之介は愍むによしなく、否從者は兩人あり。一個は獵に將てゆきしに、渠は後れて陟も來ず。果は饒に侫不樂て、昨夕旅亭に還りし歟。今朝は復那山に、索ね來けんも知るべからず。然ども俺身こゝに在れば、今まで遭ずなりにたり。又某が稍久しく、六田の旅亭に日を累るは、主君の仰を稟まつりて、六田川のほとりなる、如々來禪師を訪ん爲なり。しかるに禪師は菴に在さず。よしや歸庵は遲くとも、對

面をせで東國へは、還りがたき意味あることなり。その故は箇樣〳〵と、いかで件の禪師に請ふて、勝軍地藏一百體を、造り奉らんとある主君の情願、許多の沙金白布を、齎し來たる縡の趣、その韓櫃を舁したる、夫役們は皆願ひのまに〳〵、武藏へかへせし情由までも、酒がいはする自家晤譚に、落葉は耳を側たてて、如々來さまの事はしも、吾儕も豫て人傳に、聞にしことの侍れども、過世の罪障深かるゆゑ歟、まだ法顔を拜み侍らず。誠や障りあるものは、百遍歩を運ぶといふとも、避て對面し給はず、と噂に聞たることも侍れば、おん身も早には允されがたき、以あること歟心もとなし。いとうちつけなる言ながら、御主君さまは東國なる、誰さまにてましますやらん。願ふはおん身の御姓名をも、今一遍聞まほし。嚮に名告らせ給ひし折は、衆人達の訛聲に、勾引れて得聞とり侍らず。六田の旅亭に在さんより、從者達を召聚へて、こゝに逗留し給はゞ、斧柄がうけし再生の、御恩をかへすよすがあり。世に愼しき情由ありとても、吾儕母子の外に人なし。詳に示し給ひね、といはれて朱之介は思ふやう、現この母子はわが恩義を、深く感ずるものなれば、主君の御名もわがうへも、告知らするとも害あらじ、と深念をしつゝ微笑て、問るゝ趣その意を得たり。寡君の姓氏を諦さゞりしは、是敵國に憚る故のみ。さばれその性正しげなる、懇意に顧て東國の事を、詳に說示さん。その換に俺も亦、

問まくほしきことこそあれ。女あるじでをはするよしは、箭五郎ぬしに聞きれども、まだその故をよくも知らず。などてや年來入贅もせず、又令愛に壻をも索らず、恁廣やかなる家の内に、一個の僕をだも使ふことなく、何を生活にし給ふやらん、是第一の不審なり。人の世帶を馴々しく、問ふは要なき所行ながら、一樹の蔭に宿れるも、一河の流を汲むことも、皆是他生の緣とかいへば、今よりして親族の、思ひをなすこともありもやせん。わが疑ひを釋させ給へ、と他事なく問れて涙含む、落葉は瞼をしばたゝきて、おん疑ひは理りなり。舊主人は吾儕の兄にて、杣木斧七と喚れたる、地方に由緒ある農家なりき。二十稔ばかり前つ比、吾儕は幸なく孀家を離れて、兄許寓居るほどに、兄斧七も嫂も、有一歳大く流行たる、時疫にて身まかりたり。迹に遺るは仯かりし、是この斧柄のみにして、外には親き族なし。吾儕は浮世を觀ずるよしあり。女僧にならんと願ひしことの、本意も得遂ず兄嫂の、稚兒をのみ遺し措て、黄泉の客となりしより、恩義の枷を被られて、この家を戍り侍れども、入贅なんどは思ひもかけず、願ふ所は孤なりし、斧柄をはやく成長して、良壻索ていかでわが、願ひの如く世を捨ばや、と思へばながき歳月を、送るに就て家の内に、男たるもの一個も在せず。斧柄が親の遺したる、田園は總て人を傭ふて、畊させ侍るから、所得十分ならねども、亦煩しき事もなし。只旦暮に綿を

摘み、又絲を繰り布さへ織りて、被も售もしてけふまでも、餓ず凍ず世を渡れるは、親と兄との遺徳にて、吾儕が苦心も斧柄といふ、家兄の像見あればなり。現任せぬは浮世に侍り。渠もやうやく身材は伸て、生心つく比なれば、去歳の春より彼此人に、誂て壻を徴れども、片山里の悲しさは、意に擇み篩わけて、見れば是をと思ふ人なし。恁いへば自負がましくて、烏許なるものとおぼさんが、先祖は南朝の忠臣と聞えたる、越智殿の家臣なりけり、と家の口碑に傳へしを、子孫民間に降りしより、世を累ねて家風を喪ひ、賸男兒は絶果て、女の子ひとりになりぬとも、菽歟麥歟も得ぞしらぬ、田夫野人の筋なきものを、壻にすべうは思ひ侍らず。さればこそこの年來、一僕をだも使はぬは、孀あるじの用心にて、斧柄が與にも豫より、注連を引けばなり。かくまで意を用ひ侍るを、人は笑ふて人情に、疎きものぞといはるゝのみ。現任せぬは浮世に侍り。おん身が那如々來さまの、歸庵を俟わび給へるも、吾儕が壻を徴め難るも、今生の事後世の與、所願は同じからねども、隨ならねばこそ物をも思へ。身を摘てこそ又人の、痛さも察し侍るなれ、といひつゝも目を押拭ふ、過來しかたの物がたりを、側聞して涙含む、斧柄が歎きの霧よりも、外の時雨に醉醒て、心裏恥かしき朱之介は、さこそ〳〵とばかりに、猛に貌を更めて、女あるじと見貶せし、似非尊大なる客態を、今さら悔しく思ひけり。

第二十二回

上市郷に斧柄恩人を倡ふ
奇偶を感じて落葉姪女を妻はす

且して朱之介は、膝うち鳴らし感嘆して、思ふに優たる刀自の用心、男魂微りせば、豈よくこゝに至らんや。尚弱冠なる某なれど、爲には後學になること多かり。願ふに所願は時ありて、成就するものなれば、終には良壻どのを、得給ふことのなからずやは。某も亦爾なり。禪師に對面するまでは、この地を去らで俟んと欲す。刀自は才女にをはすれば、俺主君をも猜し給はん。且試にいふて當給へ、といふを落葉は聞あへず、そは宣はすることながら、天見つ山外の片山里より、他を得しらぬ女の身にて、廣き東の武家さまがたを、具にしるよし侍らんや。益なきことを、とうち笑へば、朱之介も亦うち笑ひて、扇を颯と推拔き、刀自且これを見給へかし。俺主君は便是なり。かくてもいまだ悟られずや、といはれて落葉は頭を傾け、原來おん身の御主君さまは、關東の管領とて、こゝらの人も常にいふ、扇谷の殿ならずや、と問れて頷く朱之介は、扇を疊みうち戴きて、寔に推量せられし如く、俺は扇谷修理大夫朝興朝臣の家臣にて、いまだ物數ならねども、末朱之介晴賢と、召るゝもので候なり。俺名は向に

も名告りにき。よく記臆して給ひね、といへば落葉は朱之介を、つら〳〵とうち目戍りて、いと憚あることながら、おん身の語音は素よりの、東人とは聞えず侍り。今より七八年前つ比、大内殿の御内にも、陶氏の刀禰をはしまして、左界の城主なりけり、と這里にも聞え侍りたり。そが氏族にはをはさずや、と問れて驚く朱之介は、答かねしを咳きに、紛らしつ然らぬさまにて、否陶氏に叔父はあれども、俺すゑはすゑものゝ、陶にはあらで本末の、末といふ字を書るなり。原は末松氏なりしを、故ありて末松の松を省きて末とぞいふなる。周防の陶にはあらずかし、といふを落葉は聞咎めて、その末松と唱る地名は、伊勢州なる安濃の津に、程遠からぬ村にも侍り。さるにより那津の町には、近き比まで末松屋木偶介と喚れたる、商賈の侍りにき。後にはその家衰果て、京に陟りて借屋にをり、と唯人傳に聞たるのみ。爾後の事はしらず侍り。原來おん身の御先祖さまも、末松村より出給ひし歟。同苗字の世間に、多くあるべき該ながら、末松ばかりこの外には、まだ聞しらず侍るかし。さはあらずや、と眞實だちて、根穿り葉を欲り問れたる、言葉の末に枝指て、花ならなくに朱之介は、實のある唔譚の興に乘して、更に又深念に及ばず、感嘆しつゝ膝うち鳴らして、奇なるかも奇なりけり。そをいかにして知られけん。那木偶介は俺親なり、とおもはず諦すその身の素生を、落葉ははやく聞とりて、原

來おん身は木偶介どのの、笠屋阿夏に生したる、男兒にてありしよな。氏より育と俗にもいふ、人に捷れしおん身の射藝、二十に足らぬ小腕もて、妖獸二隻射て殺されし、魂胆の逞しかりしを、思へば親には似ざりけり。甚なる過世の福ありけん、東國は武家の多かる中に、特にめでたき管領家、扇谷の御内人と、成發り給ひしも、思ひがけなきことになん。二親達に恙もあらで、倶に武藏にいまする歟。腹こそ異れおん身の姉なる、乙柚はいかになりにけん。心もとなし知らせてよ、といそがしたてて問ふ母親の、辭の間に今ぞ知る、斧柄も膝を推找めて、日ごろ噂に聞えたる、安濃津の叔母夫の子でをはしなば、緣は絕ても刈稻の迹の、鳥の聲聞く心地ぞする。妾が與には從父姊妹なる、乙柚さまは恙もなきや。ふりにし事も聞まほし。今の容子も知してよ、と親子右よりひだりより、倶にせわしく問詰らるゝ、情由はしらねど恥おもふ、顏に秋楓の朱之介、駟馬も及ばぬ口の過、困じ果たる頭を擡て、且右を見つ左を見つ、思はずも嘆息して、はやり給ふな今さらに、亦何事をか隱すべき。親に聞たることなければ、おん身母子は親類歟、由緣ある人歟しらねども、目今乙柚といはれしは、俺姊小夏の事なるべし。俺から言を盡さんは、面正しくもなきことながら、既にお身等に知られたる、親木偶介は咲にほふ、華の洛陽に住わびけん、俺身纔に三歲なりし比、東國にゆきて挊了んとて、姊とわが身を携へ

て、母共侶に起行しつゝ、いく日もあらで禍鬼に、あふみに名だたる磨鍼の、山路踰ゆく折ぞ
とよ。星煞やあし引の、山豪の與にうたてやな、父は命を隕せしとぞ。そが折に亦俺姉も、那
山豪に投屠られて、千仞の谷に陷りつ。骸も留めずなりにしよしは、わが身九歳なりし時、初
て母に聞たりき。是よりして後母親は、憂事をのみ十寸鏡、家も定めず蛉澥ひつ、或は人に身
を寓せて、十稔あまりを送りつゝ、舊識人に誘引れて、陸奥へとて赴きたる、爾後音耗絶たれ
ども、紈袴に休暇なきをもて、安否も訪ずなりにたり。有恁而俺身はゆくりなく、或人に紹介
せられ、遠く武藏へ赴きて、扇谷家に仕ること、まだ三四年に過ざれども、殊に主君の恩顧愛
たく、大事の使に立られたる、これらの事は前にもいひにき。刀自ば原是誰が妻にて、思ひか
けなく俺親と、姉の事さへ知られけん。這地に由縁あるよしを、母のいはねば思ひ惑ひぬ。詳
に示し給ひね、と問かへされてよゝと泣く、母子が袖の玉あられ、碎く斧柄の歎きより、わき
て落葉は颱の、木の丸殿にあらねども、名告をせずは誰が子ぞ、と知らであらんを愁に、その
姉の事親の事、聞くに就ても恨しく、いとゞ哀しく形なき、昔を今に繰返す、涙は瀧のいと切
て、絶入る可歎きしを、思ひかへしつやうやくに、頭を擡げ目を拭ひて、喃末松ぬし。おん身
の母御のわがうへを、告も知らさで過されしは、了得に忌むよしあればなりけん。名告るも面

なきことながら、吾儕はおん身の爹々公の前妻、乙抽といひしは女兒の舊名、小夏が生の母なりかし。言可惜くも聞給へ。おん身の爹々公木偶介ぬし、都がよひの折々に、その此那首に時めく歌妓、阿夏どのにあひそめて、世渡る業も手につかず、足にもつかず心から、身をもち崩して錢帛を、筧の水と年あまた、使ひ涸しつ故郷にも、京にも殘るは借財のみ、債の爲に家をも庫をも、人に取られて神風の、五十瀬に住むよしなくなりたれば、妻子從類四落八散に、なりにし時の悲しさを、さこそと想像り給へ。切て乙抽をとり留めて、親里へ將てかへらん、と思ひしかども世に物固き、兄斧七のうち腹立て、女の子といふとも父に隷て、憂目を見せておもひしらせよ。咱意に違はば女弟にあらず、といひおこされしに力及ばず。年もわづかに四五歳なる、獨女を色界狂夫の、爹々に遞與して身は蛻蟬の、裳脱けしごとく舊里へ、ひとりし歸る浮世の秋の、別れ悲しくなきくらし、泣あかしつゝいかでわれ、尼にならんと願ひしを、それすら兄の允さねば、漁火せぬ夜の歌舟、子ゆゑの闇を照らすべき。よすがもあらず心やりに京師の便り聞く毎に、木偶介ぬしは阿夏どのと、ひとつにをりと聞えし日もあり。又その後は阿夏どのに、男兒を生せし事も、乙抽を河原へ將てゆきて、舞踏しつ、生活の、便著にせられしことまでも、しる人ありて口巧く、都がへりの裹貌に、告られし時は鈍ましく、又哀しさも

彌倍して、一日も胸は安からず。不便や乙柚は五六歳より、河原搾了の疲勞足、跌輾びて怪我せずや。繼母ならずは幼稚き女兒に、搾了せもせじ、出しもせじ。親がひもなき父親の、さまでに恥をしらずや、と思ふ心をいふよしも、泣顏隱す兄嫂に、介意をしつゝ送る日の、たつことはやく這親里へ、かへされしより呉竹の、四とせになりし秋の比、木偶介ぬしは妻子を携て、鎌倉へとて起行にき、と聞えし後は噂する、人しなければ鷄が鳴く、東路遠く想像る、身の憂事の數そひて、兄斧七にも嫂にも、死別れしより、生別れたる、乙柚をおもふ暇もあらず、這家の事、斧柄の事、只身ひとつに承持て、字む姪に母とし呼れ、親と稱へて護養へば、渠も慕ふて孝行なる、恩愛情義兩ながら、迭に隔あることなく、咱子を捨て兄の子を、子とせしも是過世の業因、約束事でありけん、と思ひとりつゝ憂かりしことも、忘れて年を歷しものを、昨夕斧柄が禍鬼に、呼出されし必死の阨を、拯ひし人はわが爲に、故の夫の兒なりき、と知るだにもいとうれはしきに、木偶介ぬしも、乙柚の小夏も、おなじ山路に死天の旅、ゆきて返らぬ人の數に、入りにし事を十あまり、七稔といふけふまでも、知らで今聞く哀傷悲愁、草葉の末に跂ふ蟲に、涙なくともいかにして、子ゆゑに泣ぬものあらんや。哀しきかな、と聲たてて、泣沈みたる姨捨の、月ならなくに慰め難し、斧柄も倶に泣聲立て、幼稚き比は綿摘みあへず、甲

夜寐まどひの目覺し草に、母さまの說示させ給ひし、乙柚さまの事はしも、痛ましと思ひし骨肉の姊品、年闌るとも環會ふ、ことしもあらんとこゝろでは、果敢なきことをたのしみに、俟かひありて異母なる、その舍兄にはあひながら、消にし人は六の花、七歟八歳を一期としけん、扨も命は浪速江の、短き蘆のふしあはせ、逢ずなりしをうらめしの、あふみとは誰が名づけけん。さして往方は磨針の、いともはかなや叔母夫さへ、なき名聞して後々に、物おもへとやつれもなき、神の咎歟佛の罰歟。免れがたきは哀別離苦、世に死生の海なくば、人の心に風波の、起こともなくいつまでも、長閑からんを形きなの、歎きは多く歡びの、寡かりき、とおもふこと、愚痴を倂べてかき口說く、少女ごころも哀れなり。言果しなき母子の悲泣を、朱之介は慰めかねて、且羞て頭を低、默然たること半晌ばかり、叉きたる手を釋きて、落葉母子に對ひていふやう、はじめて聞たる刀自の本末、由緣の端に連りたる、這身にとりても面目なし。慿いへばその子として、親を譏るに似たれども、亡父木偶介の放蕩無賴は、論ずるにも足らざること歟、心ひとつの惑ひにより、產を破り妻子を離別し、後妻に口を餬ふて、恥とせざりしは朽をしくも、亦歎くべきことになん。小生不才なりといへども、今よりおん身親子の與に、力を竭し骨を折て、年來物を思はせたる、俺親の不誼薄情を、贖んとこそおもふなれ。この義倘後

後まで、誓ひに背くことあらば、死して必地獄に墮ん。さのみな怨み給ひそ、と世に頼しき言葉の露に、濡せし袖を又絞る、落葉は涙を掻拂ひて、嬉しき人の誠心や。淡き老婦の悲みに、勝ねばこそあれ、愚痴をもいひけめ。いかでかおん身を疎むべき。過去りしことはしも、皆是夢の浮世に侍れば、好も歹きも五十年、誰かはひとり殘らんや。況非命に世を去り給ひし、木偶介ぬしをいと惜し、と思ひこそすれ怨みはせず。然ればおん身の母御と聞えし、阿夏どのさへ憎しとは、神かけて思ひ侍らねど、只哀しきは小夏とか、名づけられたる乙柚が事のみ。とてもかくても這世では、あふよしもなき女兒の與には、箸折屈む弟なる、おん身にあひしは切てもの、歎きの中の歡びなり。既に斧柄が必死の阨を、拯ひ給ひし恩義を思へば、神所爲なるべき奇緣に侍り。這一事もておん身の爹々公の、舊愆を補ひ給ふに、足るべうは侍れども、いと美しき御心操に、愛て願しきこと侍り。斧柄が心はしらねども、且試にうち出さん。おん身斧柄を妻として、杣木末松兩家の迹を、子孫に嗣し給はらば、木偶介ぬしと緣しは絕ても、二たび夫に見えざる、吾儕が貞操も屆くべく、親と兄との祀も絕ず。これに優たる歡びあらんや。さばれ斧柄を武藏まで、送遣りはべらんは、願しからぬことになん。おん身この地に逗留の程、且婚姻を整へて、扨斧柄をば留おき、功成名遂て仕を致し、この地に老を頤ひ給はゞ、

夫婦全聚る日あり。よしや一チ日半夕の、添臥ししても子を產むものあり。生涯枕を竝べても、子のなきが世に多かれば、子のありなしは人力の及ぶべうも侍らぬにや。峰上隔て宿るといふ、鳥さへあるに東西、妹山伕山と別るゝとも、迭に心變らずは、よしや吉野も武藏野の、田面の里と憑しく、雁の翅に暢する、書簡の便りも疎からで、久後樂しかりぬべし。斧柄は否歟、いかにぞや、と問れていとゞはづかしの、森の下枝の露とだに、應難しをやうやくに、思ひ返しつ潛音に、物の本にも女のうへには、三從とやらんいふ、ふるき誨の侍らずや。幼しては父母に從ひ、成長りては良人に從ひ、老てはその子に從ふを、しかいふとこそ見え侍れ。よろづおん身の御こゝろに、從はざること侍らんや。左にも右にも謀らせ給へ、といへば落葉は笑しげに、又朱之介にうち對ひて、目今聞れ侍るがごとく、斧柄も母と願ひは齊一。この議を承引給ふやと、當面に問ふ妹伕の緣譚、朱之介は含笑ながら、思はずも膝を找めて、そは有がたきまで辱き、御商量には候へども、當りがたきことにこそ。向にも既にいひけらし。初て親の非を知りて、その愆を償ん、と思ひ起したりけるものを、おん身母子の與ならば、よしや火の中水の底に、入るとても辭ふべからず。爾るをいはんやまうさんや、令愛をもて某に、妻せんとあるは意外の幸ひ、身を終るまでの歡びなり。扇价は昨今の、主君にして譜第ならねば、久後とて

も憑しからず。なほ一兩年扈從するとも、用ひられずは退隱して、刀自に孝養を盡すべし。豈五斗米の爲に腰を折めて、馬前の塵を拂んや。この義も御こゝろ安かるべし、と悍く勇る當座の應に、落葉はいよゝ望足りて、且感じ且歡び、それでこそ咱聟なれ。はや熟譚に及びしかども、媒妁なきをいかゞはせん。什麼誰をがな頼むべき。此歟彼歟、と母親女兒、潛めきて霎時相譚ふ折から、思ひもかけぬ次房にも、いつの程にか人ありて、その媒妁は在下が、必つかふまつるべからん。任用し給へかし、といひつゝ隔亮に手をかけて、左右へ颯と推開けば、落葉斧柄も、朱之介も、吐嗟とばかり駭きて、但見れば是別人ならず、安保箭五郎直行なり。登時箭五郎は、且席末に找入りて、あるじと客に報るやう、向に在下は宿所に退りて、晝膳たうべ出なほして、來つゝ次房まで伺候せし折、主客の閑談細やかに、愁歎の聲も聞えしかば、序次わろしとはやく猜して、仂なく找みも入らず。ひとり那首に躊躇て、思はず時を移しつゝ、聞くとはなしに客あるじの、由縁ありける顚末も、又媚談の事までも、一五一十を聞得たり。事の情を按ずるに、聟君はいはでもしるき、鎌倉管領の御内人なり。當家も亦曾祖の時まで、越智殿の家臣と聞えたり。然るを田夫野人をもて、媒妁にせられんや。在下寔に不似といへども、亦是武家の退糧人なり。鷹捉山より誘引來ぬる、縁なしといふべからず。これ彼もつてこの良

嫺の、伐柯とならんもの、咱をおきてそれ誰ぞや。この故に無禮を敎はで、推て團坐に入れるのみ。この義を允し給はんや、と辯舌水の流るゝ如く、鼻盞めかして說誇れば、落葉母子も朱之介も、感嘆しつゝその人を、得たりとおもふ色見えて、且箭五郎に盃を、勸めて媒妁にたのむよしをも、又朱之介が親、木偶介等の事は、聞給ふとも聞捨て、人になしらせ給ひそとて、はやくその口を鉗しかば、箭五郎しば〳〵頷きて、そこらに脊念し給ふな。在下もこれ武士なり。人にしらせて妙ならぬ、こととしりつゝ誰にかいふべき。好事は急げと俗にもいへば、翌明後のころ日を擇みて、とく婚姻を整へ給へ。神無月は忌といふ、人はあれども僻言なり。十月は陽月とて、唐山秦の始皇の時に、正月とせし例もあれば、憖可愛たき折はなし。然はあらずや、と執持れたる、落葉は更に異議もなく、又朱之介にうち對ひて、おん身は翌より這裡に居まして、如如來さまの歸庵の日を、俟せ給ふが便宜に侍らん。然らば那おん布施物も、客店に措んは要なし。這裡には倉庫も二座侍れば、おん身と共に曳とり給へ。從者達は左も右も、おん身の隨意ならんかし、といふを朱之介はうち聞て、その義も尊意に從ふべし。那兩個の從者は、別に遣す所あり、といひつゝ刀を引寄せて、白金の割揷枝と、腰に帛たる藥籠を、遽しくとり出して、扇にうち載せ、箭五郎にうち對ひて、喃阿氷人、這藥籠は、曩に河踰を首途す

る折、主君より賜ひしなり。又揥枝はその已前、叔父の養たるものなりき。旅にしあれば納采に、進らすべき東西もなし。よりて這二種を、朱陳の徴に見られんことを、冀ふ所なり。よろしく傳へ給ひね、といひつゝ遞與すを箭五郎は、恭しく受とりて、左見右見つゝうち咲て、這藥籠には竹林に、群雀の描畫あり。又揥枝には、重花菱の鐫彫あり。割揥枝は阳阴一對、又藥籠には偕老の、仙丹をや籠られけん。千歳の吉兆、當意卽妙。いざ受收め給ひね、と祝して斧柄にさし寄すれば、落葉も倶に歡びを、述て媒妁を勞ひけり。かくて又盃を巡らしつ、且飯を羞めなどしたる、管待に日の闌しかば、朱之介は旅亭に還りて、翌又來つべしとて別を告るに、落葉斧柄はその意に任して、軈て盃を納めけり。嗚呼緣あれば千里も合璧、緣なきときは肝膽胡越、冤家還て壻と成り、姑となり婦となる、それ是天歟、將人歟、月下翁の愆歟。實にあやしき情緣なり、案下某生再說、朱之介の從者坊二郎は、鷹捉山にておもはずも、朱之介に追後れて、索わびつゝ麓に下りて、日の暮るゝまで俟しかど、ぬしは降りも來ざりしかば、原來はや別路より、六田へかへり給ひにけん、とひとりごち路次を急ぎて、その夜更闌し比、六田の旅亭に立かへりて、乃介に問へば、朱之介は、いまだ還らずといふに復訝りて、追後れたるよしを、報知らせ、うち相譚へども、小夜深たればさらに又、那山へゆくべうもあらず。胸安

からねどその夜は就枕て、明朝又旅亭を立出、ひとり鷹捉山に赴きて、朱之介を索ねしかども、鈍や深くはわけ陟らず。朱之介は既にはや、箭五郎們と共侶に、上市へとて別路より、山を下りし後なれば、竟に復索ねも遭で、いよ〳〵訝ります〳〵憂ひて、困じ果つゝ六田にかへりて、よしを乃介に報しかば、乃介も倶に疑念起りて、兩人額を病しつゝ、評議を凝せど下司の智計、果しなき間に冬の日の、景は短くけふも亦、下晡になりにけり。浩處に朱之介は、上市の郷より歸來にければ、坊二郎は乃介と倶に、慌迷ひつ出迎へて、昨夕よりけふまでも、索ねわびたる緈の趣、箇樣々々と且報て、恙なかりしを祝しつゝ、ぬしのうへを又問ふに、朱之介はうち笑ひて、且茶を喫み衣裳を脫更て、扨昨夕鷹捉山にて、麑を追走らして路に迷ひ、せん術なさに露宿をしつゝ、料らずも那山にて、二隻の山猱を射殺して、斧柄を拯ひし爲體を、首より尾まで、今觀るごとく說示せば、乃介坊二は舌を卷て、或は怕れ或は歡び、ぬしの射術に捷れしを、只管譽て已ざりければ、朱之介はいよ〳〵笑ふて、これらはいまだ奇とするに足らず、不思議の事もあるものなり、昨夜俺拯ひ得たる、斧柄の母親はわが爲に、父かたの叔母なりき、僞き時相別れしより、迭にしらでありけるに、思はず環會ひしかば、叔母の歡び大かたならず。翌より那家を旅亭にして、禪師の歸庵を等といひにき。俺おもふに、禪師の歸庵し給ふま

では、なほ且く程あらん。俺は那韓櫃を運移さして、叔母の居宅に宿りを替べし。しからんには汝達の、是首に在らんは徒然なるべし。所詮今茲の暮るゝ比まで、京まれ浪速まれ赴きて、佳宿徵りて遊びて來よ。盤纏はわれよくものせんず、といふは斧柄と婚姻を、しらせじと思ふ胸臆伎倆とは、しらで歡ぶ乃介坊二は、一議に及ばず領諾して、そは情あるおん計ひ、いと忝きことになん。然らば且韓櫃を、叔母御前の宿所へ遣して、俺們は霎時暇を給はり、南都多武の峰吉野はさらなり、竹都の伊勢參宮、京浪速まで偏歷りて、年極の比にかへりまゐらん。この義を允し給へかし、といふに朱之介は頷きて、そは各の隨意なるべし。翌上市なる叔母の宿所へ、韓櫃を遣す事は、別に人を傭んず。汝達は翌朝、こゝよりはやく發足せよ。且盤纏をとらすべし。これもてゆきね、と行囊より、金幾兩か數出しつ、分ちて二人に與へしかば、乃介坊二は受戴きて、歡ぶこと大かたならず。その詰朝朱之介に、恩を謝し別れを告て、旅亭を出てゆきにけり。この日亭午の比及に、安保箭五郎は旅亭に來て、朱之介に對面し、且婚緣熟譚の、歡びを述來由を告て、けふは黃道吉日なれば、今宵婚姻あるべし、と落葉の刀自のいはるるなり、有恁ば和君の行李をも、遺なく上市へ運移して、那裡へ赴き給へかし、といふに朱之介は異議もなく、二個の從者を出し遣りたる、縡の趣を告しらせ、韓櫃を舁く人足を、傭んと

て相譚ふに、箭五郎はこゝろ得て、旅亭主人によしを示して猛に四下の非客を、傭ふて韓櫃を舁しけり。然程に朱之介は、旅亭主人に座席を返して、日ごろの房錢を取せなどしつ、箭五郎と共侶に、韓櫃を先に舁して、杣木の落葉が宿所に來にけり。これを觀る里人們は那韓櫃を塔の衣裳と、調度ならんと思ひけり。されば落葉はこの旦開より、よろづの儲に暇なく、斧柄に結髮化粧をさして、准備やうやく整ふ比、氷人安保箭五郎に倶せられて、朱之介の來にければ、且二箇の韓櫃を、庫中に扛納さして、傭人足們を返し遣し、扨朱之介を、儲の席に著しめて、箭五郎にも茶を肴て、歡びを述などしたる、忙しさはいふべうもあらず。左右する程に日の暮しかば、燭臺二本ばかり措竝べ、斧柄を席に著しめて、朱之介と婚姻の、盃を執結するに、氷人箭五郎が妻なりける、奥手は午の比より來てをり。良人と倶に這婚姻の、席に列り執持て、千秋萬歲とぞ壽きける。綷不用意に出し婚席にて、素より田舍の事なれば、華やかなる儲なしといへども、美女美少年一對に、洞房花燭も光を增ん、錦の上に花を添たる、夫妻にこそと批評しつ、嘆賞せざるはなかりしを、恨る所は心ざまに、美惡賢不肖その差ありて、對すべくもあらずとは、今このときにしるよしなければ、傳聞くもの愛くつがへりて、皆羨しくおもはぬはなし。かくて落葉は次の日に、餠を四鄰の里人と、箭五郎が宿所へ餽遣して、いぬる日

是よりして朱之介は、杣木の宿に起臥しつゝ、なすこともなく日を彌るに、夫婦睦しからぬにあらねど、斧柄はよろづに折目正しく、浮たることは露ばかりもなきを、朱之介はおもひしにも似ず、洞房の間には、趣なきを憾とせり。況落葉は朱之介を、なほ賓客のごとくにして、苟且にもうちとけて、要なき事にものいはず。然ばとて疎くもせず、斧柄が心つきなきことは、蔭に立教諭して、何事も朱之介に、不自由あらせじとて機をつくれども、朱之介は大く困じて、繭絲で頸を絞らるゝといふ、世の鄙語に似たる心地しつ。時々事に假托て、箭五郎許赴きて、うち譚ふをせめてもの、保養なりきと思ひけり。畢竟朱之介が、箭五郎を友として、又甚麼なる説話かある、そは次の巻に、解分るを聽ねかし。

第三輯 巻之二

第二十三回

知母補益して遠志を奬す
車前效を論じて當歸を留む

復說末朱之介晴賢は、思はずも杣木の落葉が、舊き緣しを結び更て、斧柄をもて妻せたれども、素より主君の免許を歷て、その意に任せし事ならねば、額髮を剃除きて、一家の主人になりたるにあらず、晴ては人に名告がたき、只是日陰の花壻なれば、暇ある身の徒然を、慰るよすがもなきに、落葉はさらなり斧柄さへ、その心ざまいと正くて、浮たることは兎毛の頭に、置く露ばかりもなかりしかば、朱之介が辯佞浮薄の、氣質にこれを比れば、氷と炭の合ざるごとく、獄舍中に處る心地して、窮屈いふべうもあらざれど、主客の勢ひ異にして、又いかにともすべからず。いと悔しくも困じ果て、日景短き冬の日を、消し難つゝ在りける程に、安保箭五郎のみ兩三回、朱之介を訪慰めて、わかき人のなすこともなく、憑垂籠てをはしなば、竟に病痾の發りやせん。折々は蔽屋へ、來まして的でも射給へかし。お敵手にはなりがたけれど、在下も

稽古つかまつらん。誘給へとて立ときに、落葉斧柄に恁々と、よしを告て病坊なる、宿所へ倶してゆきしかば、朱之介は籠の鳥の、野に放されし歡びあり。既にして那裡に到れば、箭五郎が妻の奥手は、豫てこゝろを得たりけん。遽しく走出て、朱之介を奥まりたる、褊室に迎入れ、寒暖を述恙なきを祝し、茶を薦めなどしたる、管待態の愛敬づきて、物のいひざま憎からず、斧柄には年歳、七歟八の姉にして、標致も亦二の町ながら、髮の結ざま帶の締ざま、すべて今様なれば趣あり。有恁而、主人箭五郎も共侶に、朱之介を款待して、四面八表の雜談に、且く時を移す程に、奥手は准備の酒を煖め、殽も種々もて出て、朱之介に薦めけり。客もあるじも沙量ならねば、是より酒讌はじまりて、獻つ酬えつ果しなき、議論に興を催したる、朱之介ははや薄醉の、多辯に任して屬日の、欝氣を恁々とうち啣ちて、媒妁の目前にて、かういへばをかしからぬ、不走向に似たれども、岳母は明ても暮ても、苦虫を嚼潰して、四角四面の氣韻高く、斧柄も亦烏と共に、起て糸を繰り機を織る、これより外に所作はなし。今様早唄こそ事ふりにたれ、説經弄齋椰節を、學びたりやと問へば、知らずと答ふ。況て昨今は田舍までも、弄ぶ三絃なンどは、手で彈く物やら、足で搔鳴らす物なるや、夢にだも見たることはあらず。偶然にものをいひ被ても、泣出したげなる面色して、返辭をするのみ餘情もなく、寝るときだに

も三指にて、許させ給へといひながら、蒲團の端へ如恐怖に、枕引よせて就寢なり。畢竟木彫の偶人と、枕を竝ぶるに異ならず。恁ても夫婦といふべきや。粉糠三合有ならば、入贅になりそといひけん、昔の人の格言なるかな。察し給へ、と不樂しげに、意中を盡す酒興の述懷、箭五郎呵々とうち笑ひて、宣ふ趣無理ならねど、世の常言に石上にも、三稔といふことあるならずや。然とて貴所は入壻にして、又世の入壻とおなじからず。今にもあれ主用を、果し給はゞ袖うち拂ふて、武藏へ還り給はなん。爾らばこゝもなほ旅なり。到底は趣のなき、衔妻を旅宿の當分、月傭にせしなり、と思ひ給はゞ不足はあらじ。且く堪忍し給へかし、といへば奧手もうち笑ひて、斧柄さまの光惚子なる、そはその該の事に侍り。焦たる桐も製らねば、良琴にはなり侍らず、煤けし竹も伐てこそ、愛たき笛になるとかいふ、譬諭を女子の諸禮書にて、見しことの侍りにき。斧柄さまも恁ぞかし。氣ながく教育給ひなば、遂に佳音をあらはして、曉每に臥房の窗の、隙よりしらむを共侶に、いとをしみつゝ離れ難ぬる、樂しき中になり給はん。そを教ずして備らん、ことを求め給ふは疎にこそ。然はあらずや、と慰れば、朱之介は手をうち鳴らして、是は寔にいはれたり。現恪別なる才女の御指南、向後その誼を用ふべし。誤入て候なり、といふを夫婦は聞あへず、齊一咄と笑ひけり。登時箭五郎は、朱之介に、な

ほも盃を薦ん爲に、奥手に三絃を彈せ、共に謌ひて、酒席の興を添しかば、朱之介は泥のごとくに、心蕩け魂浮れて、俺屬日の欝腸を、この一席に洗ひにけり、と思へば是より箭五郎を、知己と稱へて隔なく、交り淺からずなりにけり。かゝりし程に朱之介は、思はずも酩酊して、席にも堪ず見えしかば、箭五郎はそが儘に、臥さしめて枕を與へ、奥手に衣をうち被させて、盃盤をとり納め、その醒たる比呼起して、杣木の宿所へかへしけり。是より又四五日を歷る程に、朱之介は思ふやう、いぬる日われは箭五郎夫婦の、欵待を受たるに、酬ひをせずはあるべからず。然りとてこゝへ招きよせては、倒に興なき所行なり。俺復那裡に赴きて、東道をせん、と肚裏に、尋思をしつゝ件のよしを、竊に手簡に書寫し、金一兩可封じ籠て、是を書箱の内に納め、篤實なる人を傭ふて、安保が宿所へ遣しけり。有恁而その次の日の未の比に、朱之介は綷に假托て、箭五郎許赴きければ、待儲たるあるじ夫婦は、歡びて走り出、例の褊室へ迎入れて、管待又細やかなり。當下箭五郎がいふやう、きのふは辱く、尊翰を賜りて、御教諭承知仕りぬ。嚮には聊交遊の、歡びを表するまでに、薄酒を薦めまゐらせしに、その酬としてけふは又、東道せんとて一圓金を、豫て御附屬なされしは、御厚情餘りありて恥るに堪たり。既に刎頸の友垣を、結びたりける中なるに、些の薪水を費したりとも、酬を受んは心にず、辭

ひ奉るべき筋なれども、然では還て好意に悖る、失敬の憚りあり。よりて准備をつかまつりぬ、といふに朱之介は微笑て、豫て知らせ給ふごとく、斧柄はさらなり、岳母も、性として酒を嗜ねば、酒客を見れば非類として、仇のごとくに思ふなる、そが中へ招きまゐらせては、七難八醋ありといふとも、獨酌の白梅と、香の物にもなほ劣りて、興あるべくもあらざれば、漫に失敬を見かへらず、又半日の庖丁を、煩し奉りて、共侶に歡びを、盡さばやと思ひつゝ、酒肉の料を寄せまつりぬ。この義を允し給へかし、といふ間に奥手ははや、盃をもて居たる、殽は又いぬる日の、管待よりも種々にて、手を盡して珍味を擇みし、用意等閑ならず見えたり。これよりして客もあるじも、盃を受巡らして、やうやく佳境に入る程に、迭に口論むづかしく、飲せんとしつ、喫じと角ひて、果は猜拳もて勝負を決する、手段に笑ひ啀めきたる。そが間には又奥手に、三絃を掻鳴させて、艶曲をもて興を添たり。既にして朱之介は、はや七八分醉たれども、猜拳には勝ことしば〳〵にて、頬かき撫て誇りしを、箭五郎慴たる面色して、纔に一杯の酒なればこそ、われはおん身に輸もすれ。よき賭物であらんには、在下必贏べきなり、といふを朱之介は聞あへず、そは一段おもしろからん。何なりとも賭給へ。俺も又好みに任して、賭物を出すべし、といへば箭五郎膝うち鳴らして、こはおもしろくなりにたり。在下は是浪人

の、貯祿薄ければ錢財なし。なれどもこゝに只一箇、身にも換がたき奇貨あり。そを賭物に出さんのみ、といふに朱之介はこゝろ得ず。主の寶貨は甚なる東西ぞ、と問れて箭五郎側を見かへり、在下が身にも換がたき、奇貨は是この奥手なり。渠なくては朝毎に、炊ぎするものなく、目睡難る長き夜を、慰るものもあらず。然れば衣食の兩箇はさらなり、子種を蒔す田地にあなれば、身にとりて被替なき、これ第一の靈寶なり。在下倘輪たらんには、渠を側室にまゐらすべし。是則遊仙崫にしるしたる、張文成が雙陸に、宿を賭にせしこゝろにこそ、といふを奥手は聞あへず、そは亦何をいはるゝやらん。戲れ言も事による。否なることを、と敦圉て、罵りながら朱之介に、目を注せつゝうけ引ね、といはぬばかりに意中の情を、示すを曉得る朱之介は、心迷ひ魂飛で、更に亦些も擬議せず。箭五郎にうち對ひて、宣ふ趣その意を得たり。俺身十一二歲なりし比、師の坊に聞しことあり。むかし聖武天皇は、雙陸の賭ものに、三千貫の錢を賜り、延喜の帝は碁の賭ものに、玉のおん枕をさへ被させ給ひき。至尊すら然るおん遊の、なきにしもあらざるに、われ亦何をか惜むべき。さばれ燕の子安貝、龍の腮の玉なンどいふ、奇貨はわれもあることなし。古書畫古器物の價貴く、得がたきも亦錢帛の、光りに捷ことあるべしやは。貴公内政を、賭物に出し給はば、われは亦金七兩二分を出すべし。便是世話

にいふ、密夫の賄賂なり。此彼良對ならずや、といふに箭五郎は異議もなく、且感じ且歡びて、爾らば黄物先生を、先はやこゝへ出し給へ。然して雌雄を決すべし、といふを朱之介は聞果ず、はや懷中の財囊より、數を違へず賭物を、出して折敷の上に措ならべ、よしや贏とも輸るとも、迭に變易すべからず、と誓ふて名〻默禱しつ。うち向ひ聲を合して、指を拔き指を僂り、且く挑み爭ふ程に、初にも似ず朱之介は、三たび續けて輸しかば、思はずも惴立て、又更めて財を出して、再度の雌雄を爭ひしに、這回の猜拳にも又輸けり。こは朽をしや、とばかりに、且羞ていよゝます〳〵、已ことを得ず又更めて、賭物を出して爭ふものから、終に贏ことを得ざりしかば、牡鹿の角の束の間に、二十二圓金餘を折れたり。今一番とて進みしを、奥手は急に推禁めて、酒興に任せし戲れなりとも、阿漕なりせば角文字の、いせのうらみの基にやならん。且く休み給ひね、と慰めつ推わけて、又盃を薦めしかども、朱之介は醉と共に、興さへ醒て悔しきを、なほ鼻唄に紛せども、胸塞り腹ふくだみて、盃は手にとりながら、又喫べくもあらざりけり。この時既に日は暮て、初更の比になりしかば、朱之介は宿所の首尾も、了得に心もとなければ、とく罷らんとて別を告るに、箭五郎は何の程にか、醉臥て呼べども答へず。登時奥手は件の金を、ひとつにしつゝ紙に包みて、これを朱之介に返していふやう、縱この金あらずと


出像第十九
ふくろ
菊五郎



も、盤纏に事を缺給ふ、おん身にはあらざるべけれど、友垣結ぶ中にして、寶貨を折くよしあらんや。こはもてかへらせ給へかし、といひつゝ遞與すを朱之介は、手にだも取らず頭を掉りて、いかでかは然ることあらん。よしや猜拳には輸ずとも、餽りて衣食の資にせん、と豫てよりおもひにき。俺身幸ひに君侯より、路費の賜もの寡からねば、さばかりの金何にせん、そはその儘に措給へ。主の睡眠の覺しとき、宜く言傳給ひてよ、といと鷹揚に說諭す、言と心は表裡にて、興あらんとて來し甲斐もなく、興盡て還る本意なさを、色にも見せじと塗隱したる、花螺鈿の腰刀、やをら引提て出てゆけば、奥手は紙燭も秉あへず、端近きまで送りたる、四下小暗き竹緣にて、引留つ立ながら、䛫くこと半晌許、背を敲きて別れけり。扨も末朱之介は、思はずも酒興に乘して、二十餘金を喪ひたれども、奥手と情由のあり初しも、那席よりのことなれば、亦箭五郎を疎みもせず、折々那首へ赴きて、猜拳もて件の損財を、とり復さんと欲せしを、箭五郎諫て從はず。和君知らざる所あり。在下故郷にありしとき、猜拳には頗名を得たり。何曾々々目比反掌打、何まれ和君の得たる技もて、復會稽の恥をしも、雪んとならば敵手になるべし。咱のみ贏ては興なし、と親切めかして諭すにぞ、朱之介はその議に任して、然らばまづ、反掌打より刱んとて、這囘は賭物をひとしくしつ、迭に多く酒を喫まで、頻りに雌

雄を爭ふ程に、朱之介は何の技にも、贏ことは稀にして、輸ることの多かりければ、漸々に囊中竭て、竟には彼五百兩の、沙金のみにぞなりにける。その折々に箭五郎は、捷軍の歡びなりとて、酒殽美々しくものして、朱之介を管待しつ。その身も飽まで飲啖ひたる、果はいたく醉臥て、小夜深るまで覺ざりけり。然程に朱之介は、做す技毎に失却ありて、幾回となく損をすれども、箭五郎が醉臥したる、暇あれば思ひの隨に、奥手と姦通せざる日もなく、是にて損は補たりとて、盤纏の有無に眷念せず、虗々として送る日の、今茲も既にくれ竹の、はつかあまりになりしかば、世の人は春の儲に、いそがしからぬものはなきを、朱之介のみ暇あれば、一日又箭五郎許赴きたる、その夜亥中の比及に、杣木の宿所にかへり來つ。落葉は既に臥房に入りぬ。斧柄は良人の還るを俟て、いまだ寢もせでありければ、背門の樞戸引開て、迎入つゝ戸を鎖て、今宵は特に遲かりき。物ほしうはをはさずや、と問つゝ軈て爐に沸起らせし、素湯に出し茶の筩茶碗、汲見てしるき錦手も、美し過ぎて惹氣せぬ、妻にも恥ぬ朱之介は、果敢々々しうは應もせで、稍醉醒の直渇に、茶を汲すること五六碗、飲盡しつゝそが儘に、衣をも更ず就枕りたる、横の裾折り領搔籠し、斧柄は良人の枕方に、悃然として在りけるを、朱之介は頭を擡て、見つゝ竊に冷笑ひて、などてそなたは睡らざる。俺身に恙なきものを、看病さるゝこ

とやはある、といはれて斧柄は潸然と、落る涙を押拭ひて、おん身に恙ましまさぬ、そは素よりのことながら、奴家は屬日一チ日も、痞の發らぬことはなし。病の根は誰が所爲ぞ。皆是おん身ゆゑならずや。折もありなば諫んと、思ふものから強顏さに、とりつく巖もなぎさ舟、波濤に漂ふ心地して、けふまで過し侍りにき。おん身は思ひ給はずや。武藏の盡處より御主君の、使に立し甲斐もなく、如々來さまの歸庵のことは、忘れしごとく虛々と、良からぬ友と交りて、酒に亂るゝ本性の、浮氣はいとゞ增花歟。他の愛樹を手折らんとて歟。賭に耽りつ欺詐かされて、盡る盤纏を惜氣なく、使ひ果させ給ひぬる、惡事千里と俗にもいふ、諺草に漏る露なければ、人にしられてこゝらへも、噂聞えて氣を病したる、奴家のみかは母御さへ、驚れぬるおん身の不行迹、左してやよけん右せんと、母子額を合しつゝ、うち相譚へど術もなき、淺き女子の智惠の海、浮寢の鳥にあらねども、丈夫ゆゑにこそひとり泣く。冬の夜寒く年は暮ても、晦しらずの主なれど、いはねば濟ぬ事侍り。嚮に暇を取らせ給ひし、おん身の從者乃介とやらん、坊二とやらんがつれ立て、けふ還りしとて黃昏比に、こゝへ尋て來にけるを、母さまのこころ得て、そが儘留め措き給ひぬ。倘かのよからぬ風聲を、從者達に聞れなば、武藏へかへり給ふて後の、おん身のうへにあらずや、と報るに駭く朱之介は、橫搔遣りつ身を起したる、氣色

に見ゆる當惑の、初て夢の覺たるごとく、頭を傾け手を叉きて、尋思すること半晌ばかり。嘆息しつゝ妻に對ひて、喃斧柄、面目もなきわが越度、今さらいひとくよしもなし。如々來禪師はけふまでも、歸庵の聞えあらざれば、よしや春まで俟とても、なほ對面は心もとなし。然るを主從三人まで、寡あるじの岳母に、養れてはをりがたかり。一トたび武藏へ立かへりて、よしを君侯に聞えあげ、ふたゝびこの地に來つるとも、そが儘那地に留るとも、時宜によるべきことながら、いと恥しくも查知のごとく、盤纒を用竭せしかば、進退こゝに谷りぬ。作麼いかにしてよからんや、と潜めきて問ふ折から、竊聞しけん屛風の陰より、忽地落葉が聲をかけて、朱刀禰その議はせんかたあらん。さのみな思ひ屈し給ひそ、といはれて吐嗟、と復駭く、朱之介は遽しく、横さへ蒲團を反退けて、孃はいまだ臥し給はずや。思ひかけず、とばかりに、やをら屛風を片よすれば、落葉は徐に進み入り、朱之介にうち對ひて、喃朱刀禰、譽たうても譽られぬ、評判高きおん身の不行迹、諫て武藏へ還さん、と思はざりしにあらねども、その愆を後悔して、かへる心のつくまでは、いふがひあらじと思ひつゝ、俟得て本意あるおん身の怠狀、歸國の事を議し給ふを、聞ては今さらうちも置れず。及ずながら助言して、とくかへさんとて圓居に入りぬ。恁いはば烏滸がましくて、釋迦に說法、孔子に語道の、譬にも似て侍れども

こゝらの童蒙も嘗に讀む、實語教でありけん歟、童子教でありけん歟。水は方圓の器に從ひ、人は善惡の友によるといふ、本文は何も得しらぬ、吾儕にも解しがたからで、思ひ合することも多かり。おん身が這回の愆も、わかき人をそゝのかしたる、これその友によるものならん、と心づきて改め給はゞ、濁れる水も澄ざらんや。かの人さまの人となりは、はじめは吾儕も知るよしなきを、鷹捉山よりその後まで、親切にものせられたる、人柄といひ辯者に侍れば、かゝるべしとは思ひもかけず、內祝言の媒妁に、憑みしを今は悔しく侍り。然とても人さまを、恨むは愚痴の身勝手なれば、そはそれまでと捨措て、おん身の歸國が肝要なり。信心薄きおん身にあなれば、如々來さまを俟給ふとも、拜顏允されがたかるべし。一ト たび武藏へ立かへり、その行狀を改めて、心を擲ち潔齋して、出なほして又來給はゞ、やうやくにして君命を、達するよしも侍らん、と吾儕は思ひ侍るかし。いよく〳〵歸國に決し給はゞ、路費は吾儕がともかくもせん。斧柄に出させたまへかし。うたてや勞して功もなく、竟に別れになりけるよ、といひつゝ嗟嘆したりける。日ごろに似げなき姑の、垂なる訣斷に朱之介は、頭を席薦に推著て、背に流す冬の汗、慚愧後悔限りなく、又いふよしもあらざりしを、やうやくに頭を擡て、額に著たる塵揹落し、貌を改め、落葉に對ひて、世に有がたきおん好情、おそれ入て候なり。路費を

だに貸給はらば、日ならず歸國に赴くべし。さばれ一箇の難義あり。二百反の白布と、沙金を斂たる韓櫃を、舁すべき夫役なし。この義をいかゞつかまつらん、と問へば落葉は頷きて、それも愚按の侍るかし。年毎の十二月、二十二日より五日の間、この里盡頭に馬市の、建ことの侍るなり。翌は二十二日に侍れば、那馬市の初日なり。こゝろ得たる人に誂へて、良馬二疋を買とらせん。かくてその一疋には、二百反の布を駝せ、又一疋をば副馬として、沙金と行李を駝したるそがうへに、主從迭代りに乘るときは、道中の雜費を省く。これに優たる便利はあらじ。この議に從ひ給はずや、と世に憑しく說示す。心利たる姑の、指揮は危窮を資る良藥、無明の醉も醒ぬべき。朱之介は感服して、更に亦異議もなく、數回嘆賞して、適愛たきおん計ひ、仰うけばり候ひぬ。翌その馬のいで來なば、明後は必這地を去て、武藏へ還り候はん。豫ても禀演たるごとく、なほ四五年も勤仕して、用ひらるゝことあらば、四五千貫の領地は得つべし。その折にはおん迎を、まゐらすべう候へば、斧柄と共に東へ來まして、孝養を受給へかし。倘不幸にして用ひられずは、仕を致し退隱して、この家を承嗣ぐべし。とてもかくても今よりして、霎時の程で候へば、みづから愛して恙なく、吉左右を俟せ給へ。これ晚生が願ひなり、といふを落葉はうち聞て、そはこゝろ得て侍れども、流るゝ水と人の久後、量り知られぬもの

なるに、二十に足らぬ後生の、いはるゝことを一トすぢに、憑んとのみ思ふて、斧柄を娶せたるにはあらず。いぬる比山猿に、斧柄が捉られたりしとき、おん身の資微りせば、他豈生て還らんや。かゝれば斧柄が命根を、とり留めしはおん身の賜もの、是その恩義に報ん爲に、後覺束なき妹伕と知りつゝ、緣しを越に結せたり。かゝればおん身は河踰へ、歸城の後に年歷ても、心に任するよしなくて、夫婦の再會かたくもあれ、斧柄は那時鷹捉山にて、死にきと思ひ諦めなば、生涯ひとりくらすとも、恩義の爲に立る操を、天道憐み給ふべし。恁いへば女才ありて、薄情に似たれども、原已ことを得ざるの所行にて、情由の知れたることなれば、斧柄も亦初より、この心にてあらんずらん。思へば奇しき因緣なるかな。吾儕がわかかりし時はしも、おん身の爹々公木偶介ぬしを、幾遍となく諫しかども、都かよひの優花を、妬むゆゑぞと思ひとられて、些も用ひられざりき。然るを今又その兒なる、おん身を諫めて武藏野へ、かへさねばならぬ時宜となりしも、親子二代の劬勞生。吾儕はとまれかくもあれ、小夏が爲には弟なる、おん身を憎う思はんや。斧柄も心を鬼にして、泣顏見せず明後の朝は、起行を看送り給へかし。といふに斧柄は姬百合の、花ならなくに俯向て、側聞せし親の恩、淚の雨にいと重き、頭を擡げ目を拭ひて、大かたならぬおん慈愛、咱身にとりても限りなき、幸ひにこそ侍るなれ。内祝

言のその宵より、別れは豫て覺期の妹と伕、今さら歎き侍らんや、といふをさこそと母親は、左見右見つゝ頷きて、そなたのうへは心安かり。朱刀禰もかならずよ。今の心を心として、後後までも忘れ給ふな。長談義にて更燗たり。霎時なりとも休らひ給へ、といひつゝ立を朱之介は、斧柄と倶に目送りて、感謝に堪ぬ歡びの、言葉の露も冰る夜の、鐘鎬々と丑三歟、響き幽に聞えけり。却說末朱之介は、その詰朝、乃介坊二郎に對面していふやう、今茲も既に暮んとするに、禪師は歸庵し給はず。然るを春まで俟とても、なほ覺束なきことなるに、盤纏も乏しくなりたれば、一圓武藏へ立かへりて、緈の趣を聞えあげ、その後の進退は、上の御諚に依まく欲す。さばれ韓櫃を舁すべき、夫役なければ馬に駝して、翌は這地を立去るべし。汝達も恁こゝろ得て、けふより准備をせよかし、といふに歡ぶ乃介坊二は、齊一笑て額をつき、そは思はずもよき折に、歸りまゐり候ひき。視べき所はみな觀たり。故鄉戀しく思ひしに、恁る御意を得つる事、凍えたるとき火に近づき、渴して泉にあへるが如し。然らば准備をつかまつらん。指揮を願ひ奉る、と應をしつゝその意に任して、那白布を韓櫃より、出して二籠篋に荷作りつ。莚に包みなどするに、冬の日景の短くて、けふも果敢なく暮んとす。されば落葉はこの朝、人に誂へて馬市にて、良馬二疋を買とらせ、荷鞍その餘の馬具までも、遺もなく購求めて、そ

こらの准備も整ひければ、乃介坊二に酒うち飲して、叮嚀に欵待しけり。有恁し程に朱之介は、肚裏におもふやう、俺今猛に歸國の事を、箭五郎には告ずとも、奥手に知らせずはあるべからず。然ればとて人傳にて、奥手には憚りあり。箭五郎にのみ消息せば、奥手も必こゝろを得つべし。さはとて軈て密々に、件のよしを書寫し、事の紛れに坊二をもて、箭五郎許遣しけり。勿論回翰を請ふに及ばず、慥に遞與して來よかし、と竊に示して病坊なる、宿所を指て遣しければ、坊二は只その宿所を覺て、甚なる人といふよしも、何等の所要といふよしも、知らで病坊へ赴きつ。件の手簡を奥手に遞與して、遽しくかへり來つ。扨朱之介に恁々、と報しを落葉斧柄はさらなり、女婢も乃介も知らざりけり。却說落葉は貯祿の、金二十兩をとり出して、朱之介が路費にとて、竊に斧柄に遞與せしを、朱之介は受とりて、只管恩義を感じて已ず。とかくする程に日の暮しかば、落葉は斧柄と共侶に、朱之介が歸國の首途を、祝して盃を薦めしかども、朱之介は愼みて、辭ひて亦多くは喫ず。斧柄は母に奬されて、泣じとすれど禁め難し、涙のやる瀨なければや、燭臺の光の届ざる、小暗き處に侍りたり。登時落葉は朱之介に、道中の用心を、問試たる語次に、おん身這地へ來ませし折、過り給ひし歟しらず侍れど、這首より一チ里半許去向のかたに、車野と喚做す曠野あり。この車野の中央に、岡ありて樹木茂りた

り。その岡を陟ゆくに、這方の坂を前坂と唱へ、那方の坂を向坂と唱たり。そをこゝらなる里人は、車の前坂といふぞかし。那裡は晝も人跡稀にて、引剝に追れし人もありしを、折々聞たることも侍り。翌は且開に那車野の前坂を過り給はん。必な由斷し給ひそ、といふを朱之介はうち聞て、現那車野の前後の坂は、晩生も過りしことあり。岡は曠野の帶に似て、松柏の繁立たる、藪澤さへあれば山賊の、患あるべき處なり。こゝろ得て候、と答る程に寢よとの鐘の、常より冴て音すなり。落葉は耳を欹て、翌は出立の早かるべきに、とく／＼就枕り給へとて、盃を納めつゝ、ひとり納戸へ退きけり。この日朱之介が歸國の事を、里人にしらせなば、送りゆかんといふもの多くて、煩しかりぬべし。曉かけて首途を、と落葉が豫ていひしかば、斧柄は睡らず。朱之介は、纔に就枕て呼覺され、女婢們は炊ぎを急がされて、なほ夜深きに起出つ、時を錯へず烹炙をしつゝ、主從三人に饌を羞めて、晝餉の割籠秣草まで、嚢に斂て出しけり。又朱之介主從は、且白布を馬に駝せ、沙金は分ちて三苞にしつ、その二苞は副馬の、鞍の左右に佶と結著け、一箇は乃介に駝しなどす。副馬にも鞍下の、荷の多かるによりてなり。はや曉方になりければ、主從齊一姿を窶せし、行裝を整へて、別を告て出てゆくとき、乃介坊二は馬を牽き、朱之介は蕉火を、振照しつゝ先に立けり。これを目送る斧柄はさらなり、落葉

も門に立盡したる、女婢們も共に名殘を惜める、墮涙は女子の情にぞ有ける。されば朱之介が大胆なるも、寸功なくて還りゆく、旅路は歩も進み難て、うしと思へど馬を追ふ、榮枯得失身ひとつに、かゝる恨みのます鏡、曇らで缺し冬の月、影さへ寒き曉方の、天を瞻仰て別れけり。
却說朱之介主從は、馬を追ひ里を離れて、ゆき〳〵て車野の前坂まで來にけるとき、東方やうやくしらみつゝ、月光薄くなりしかば、乃介坊二は馬を追ふて、坂を登らんとする程に、馬は二疋ながら鞋を損らして、その緒をながく引たりける。乃介坊二はこれを見て、こゝらに石の多かれば、いまだ二里には足らぬ路にて、はやくも鞋を損らしたり。いで〳〵といひつゝも、そが儘馬を牽駐めて、荷鞍に附たる易鞋を、とりおろし絲をとほして、土居て鞔て前鞋を、結更つゝ共侶に、立あがらんとする程に、誰とは知らず樹間より、弦音高く發つ箭に、憐むべし杖月乃介は、乳の下より脇坪まで、射られて苦と叫びも果ず、身を轉して仆れけり。是にぞ駭く坊二郎も、倶に叶嗟と叫びつゝ、逃んとしたる程しもあらせず、ふたゝび飛來る一の箭の響きと、共に坊二は七九の衿の、あたりを篦深く射串れて、おなじ枕に臥たりけり。そが中に朱之介は、馬に後れしこと一町可り、稍近づくとき從者們が、射られて卽死の形迹を、見るといへども何處より、射出せし箭なりと見も認ず、仇の多少も量りがたさに、寄るとそが儘二疋の

馬の、間ハはやく衝と入りて、馬と馬とを盾にしつゝ、仇いで來なば撃とめん、と思へば騒がず刀の柄を、握り拿身を構て、四下を睨で立たりける。什麽朱之介は今この箭面を、脱るゝや脱れずや。そはこの下に、解分るを聽ねかし。

第二十四回

直行惡方加減を恣にす
晴賢竊嘗て中毒に駭く

登時前阪の樹間より、顯れ出る一個の緕者、拿たる弫弓投捨て、さし招き聲をかけて、未ぬし驚き怪み給ふな。咱眞夜中より和君を俟て、久しくこゝに在りしぞや、といひつゝ徐に阪を下りて、覆面頭巾を脱けるを、と見れば是別人ならず、安保箭五郎直行なり。今この綷の爲體に、朱之介はいよ〳〵、疑惑ふて由斷せず。肚裏に思ふやう、原來彼奴は俺奥手と、情由ありけるを探知て、妻敵を撃んとて、且從者們を射仆して。わが身の翼を芟除き、本意を遂んと計較けん。遮莫彼奴一人を、俺焉ぞ怕れんや。なほ近づかば手は見せじ。撃れし乃介坊二が與に、怨を復さで已べきや、と尋思をしつゝ聲ふり立て、俺從者を遠箭に被しは、山賊の所爲なりけん、と思ひしにも似ぬ蓬き擧動ひ、箭五郎和主でありしよな。恨があらば宿意を述

て、雌雄を決せば武士とも思はん。然るを切所に埋伏して、蜚器をもて從者們を、射て殺せしは卑怯なり。いふよしあらばいへ聞ん。欺撃にせらるべき、俺にはあらず言をかしや、と敦圉猛く罵るを、箭五郎呵々とうち笑ひて、差へり〳〵和君の推量、咱豈怨あるゆゑに、その從者們を殺さんや。射て殪せしは和君へ忠信、こゝに未然の禍を、禳ふて和君を救ん爲のみ。譬ば和君が鷹捉山にて、那山猍を射殺して、杣木の妙を拯ひしと、是同日の情義なるを、恁ても曉得給はずや。才子に似げなきことにこそ、といはれてもなほこゝろ得ぬ、朱之介は沈吟じて、然ばかり聞ては和殿の胸中、敵欺躬方欺猜しがたかり。俺が岳母の資を得て、歸國に赴くを妨して、從者乃介坊二郎を、殺せしをもて俺與に、禍を禳ふといはる。そは疑ふべく信ずべからず。いぬる比わが山猍を殺して斧柄を救ひたる、情義とおなじかるべきや、と詰れば箭五郎冷笑ひて、原來和君はなほ迷ふて、その身の必死を知らざるのみ。然らば具に說示さん。心を鎭めて聽給へ。曩には和君、君命を稟て、這地へ來つるは何の爲ぞ。如々來禪師に佛像を、作らせん爲にあらずや。このゆゑに秋よりして、年極るまで逗留の、雜費に主君の錢財を、いくばくとなく使捨て、竟に禪師の面だも見ず。齎したりける布施物を、そが儘武藏へもて還りなば、菩薩にひとしき君侯なりとも、さばかりの祟なからんや。況從者には暇をとらせて、京

浪速を遊歴せしめ、その身は舊縁あるに任して、里の孀婦の女壻になりしを、暫時は人のしらずとも、奴隷は言の詳なきものなり。問ずがたりにいふことあらば、竟にそのよし主君に聞えて、罪せられん事疑ひなし。縱はじめは君寵に、誇りし和君なりとても、一旦罪を得るに及ば、君の寵愛も憑むべからず。微子瑕も終に首を刎られ、鄧通は餓て死にき。在下この義を思ふをもて、和君を死地に入らせじとて、從者二名を射て殪して、未然の禍を禳ひしは、友たるものの信にして、那山猿を射て杣木の妙を、拯ひ給ひし情義にも、優りこそせめ劣らんや。惑ひを霽し給ひね、と辭せわしく説諭せば、朱之介は忙然と、醉るがごとく醒るが如く、思はずも太息を吻きて、感ずること大かたならず。人もや來ると見かへりながら、捗み近づきうち對ひて、思ふに優たる御邊の才幹、いはるゝ趣その圖に當りて、先見實に差ふべからず。小生河踰より啓行しつる比、主君に稟せしこともあり。主君も必這使を、よくすべきものなりとて、世に憑しく思はれしを、許多の盤纒を費しながら、寸功もなく歸りまゐらば、その罪脱れがたかるべし。よしや君侯はなほ憐みて、重く罪なひ給はずとも、老臣們は諾なふべからず。加以この年來、寵を媢みし朋輩が、折を得たりと讒言して、不測の罪に陷さん、と思ふもの多からん。其處に心のつかずして、乃者盤纒の竭たる故に、逗留難義に思ふ折から、岳母に諫められ

て、その資さへ得たりしかば、只管に歸國を急ぎて、この曉に立出しは、かへすぐ\も淺慮の至り、御邊の好意徹りせば、臍を噬むともいかにして、後悔其處に立べきや。感謝に堪ぬ幸なれども、從者二名を喪ひし、緣由を報ずして、杣木の宿へは還りがたかり。何處に在りて如々來禪師の、歸庵を俟て素懷を遂ぐべき。この義も指揮を願ふのみ、といふを箭五郎聞あへず、そは今さらに女々しげなる、迂遠き了簡なり。禪師は庵へ歸るとも、かへらずとても今は要なし。人を用る戰國の、時に生れて志あり、才あるものがいかにぞや、纔なる祿に繫れて、既に武運の傾きたる、扇谷を戀慕ひ、恁ても果敢なき功を立て、武藏へかへらんと思ひ給ふは、老實過て時務に疎かり。和君今幸ひに、五百兩の沙金あり。且岳父の贈りたる、金もそが儘あるならん。只それのみにあらずして、二百反の白布と、この馬二疋を售るときは、又二三十兩の金を得つべし。そを浪人の貯祿として、大諸侯に仕んこと、三稔とは俟べからず。和君の發迹給ふまで、杣木の母子にはふかく隱して、在下宜舍藏べし。竊にこゝより引かへして、病坊へゆき給へ、今さら躊躇ふことかは、と毒氣を吹入む惡友に、そゝのかさるゝ朱之介は、信悅て異議もなく、御邊の教諭は高論なり。けふより貴宅をあるじとして、祿を求めて良主に仕ん。さばれ乃介と坊二們が、屍骸をこゝに棄措ば、人にしられて禍發らん。什麽何處へか隱すべ

きと、問へば箭五郎後方を見かへり、彼竹籔へ引もてゆきて、棄措くときは人に見られず、ここらに狼多かれば、晝といふとも齅つけて、けふ一日に啖ひ竭さん。在下は又この馬二疋を、近郷へ牽もてゆきて、布をも共に售滾し、よき價を得てまゐらすべし。有恁ば和君は重くとも、沙金の苞を三箇ながら、背駝ふてはやく間道より、蔽屋へ赴き給へかし。人になしられ給ひそといふに、朱之介はその議に任して、馬に附たる沙金の苞と、乃介に駄せしをも取おろせば、箭五郎も手傳ふて、索を引かけて脊駝しけり。有恁而朱之介は、蹟を箭五郎に任しつゝ、笠をふかくし路をかえて、病坊を投て赴く程に、杪を離るゝ朝鳥の、聲彼此に聞えけり。當下箭五郎は手ばやく乃介と坊二郎が、腰刀を奪ひとり、衣物も血に染らぬ、襲なるは咸剝て、疊みかさねつ馬に附て、二箇の死骸を竹籔の、奥ふかく引退けて、又とり揚る弫弓の、弦を外しつ鞭にして、二疋の馬を追ながら、はや前阪を横ぎりて、鷹捉の方へ急ぎけり。原るに、這安保箭五郎直行は、大内左京權大夫義興の家臣と聞えし、安保弦内直根が獨子なり。初周防にありし日は、なほ遊倅なりけるが、放蕩無賴の癖者にて、良からぬ叓をせざることなく、剩鸛峯に程遠からぬ、新室積にて奥手と喚做す、遊女にかよひ初しより、淫樂にのみ身を擲ちて、錢財を喪ふこと、いくばくといふ限りもなければ、親の貯祿いへばさらなり、朋輩にも筋亐き、借

財の債を償はず、果は弦内が預りの、兵庫中なる武器馬具を、竊出し典却して、その金をもて件の奥手を、贖出したりけるに、幾程もなくその事聞えて、罪せらるべきものなりしを、有繫に親の心よわくて、その子を罪過に殺すに忍びず、債はすべて身に引うけ、箭五郎には盤纏を取らせて、大和の方へ落し遣りけり。これにより箭五郎は件の奥手を携て、山口を亡命し、些の由緣を心あてに、大和の上市に落著て、軈て奥手を妻にして、六年以來病坊なる借屋になり、里人の子共、坊賈の小厮なンどに、一算筆を誨え口を餬ふて、幽なる世を渡るものなり。さればこそあれ心ざまは、取るよしもなき惡棍なれども、うち見たるところ人柄よくて、佞辯利口世才あり。こゝをもて里人們は、僉欺れて且くは、好人なりと思ひたり。況落葉は箭五郎の、人となりを知らざれども、壻とりの内祝言に、媒介にすべきもの、渠ならではその人もなきに、鷹捉山より朱之介を、誘引來つる好もあれば、竟にその望みに任して、媒介にしたりしより、禍蕭墻の内に起りて、後の恨みとなること多かり。かゝりし程に箭五郎は、いぬる比はからずも、杣木の落葉が朱之介と、舊にし事を相譚て、迭に素生を說示せしを、初より竊聞して、朱之介が五百兩の、沙金を齎したることとも、盤纏も許多あるべきよしを、具に知て竊に歡び、推て斧柄と婚姻の、媒介になりて好を結び、朱之介には殊更に、いと親しくもてなして、遂に病

坊なる宿所に引入れ、酒を薦め賭に耽らして、その盤纏を奪ふに及びて、渠に後悔あらせじとて歟。知りつゝ奥手に密通させしは、これを釣らんと欲するとき、且香餌を投るといふ、漁父の手段に似たりしを、朱之介が俗才ありて、且奸智に長たるも、年少ければこれを悟らず。いぬる夜落葉に諫られて、武藏へ還らんとするに及びても、なほ奥手を戀憐して、渠に別を告ん為に、箭五郎に消息して、歸國のよしを知らせしかば、箭五郎はなほ飽かず、這回朱之介が河踰へもてかへる、沙金白布をも物せん、と思へばその夜先だちて、車野の前阪なる、邊に來つゝ伏躱れて、兩個の從者を射て殺し、朱之介には利害を述、思ひの隨に說惑して、歸國を禁めて病坊なる、宿所に舍藏んとて遣せしは、豫て計較あればなり。こゝに至て朱之介は、進退すべて小兒のごとく、みづから尋思に及ばずして、綷みなその意に任せしは、これも亦故なきにあらず。歸國は朱之介が情願ならねど、落葉が意見に從ふて、猛に這地を去立るものから、竟に寸功なきをもて、逦遲としてかへるに懶く、安危を定めかねたるに、今箭五郎に說惑されて、亂離の人となることを思はず、渠が宿所に舍藏ん、といはれしにより歡びあり。飽まで奥手と密會ふ、よすがを得たりと思ふのみ。なほその金を奪んと、欲する箭五郎の伎倆を曉得らず、多慾薄情なるものの、動もすれば揣られて、かゝる圈套に陷ること、和漢今昔に尠からず。

こを鑑て誡むべし。閒話休題、然程に朱之介は、竊に箭五郎許赴きて、奥手にあふて、歸國の念を、斷てかへり來つる事、且箭五郎にいはれたる、綷の趣、恁々と、有つる儘に告示して、三苞の沙金を預けしかば、奥手は笑つゝ受取て、そわ歡しきことに侍り。三稔五稔なすことなくて、光陰を送り給ふとも、貯祿匱きおん身にあらねば、何事も後やすかり。いつくまでもわが宿に、をはせよかし、と慰めて、那褊室にて茶を羞め、早飯を羞めなどしつ、爾後は又何をかしけん、舟底形の木枕の、折々轢る音のみして、日の闌るまで相譚けり。有恁し程にあるじ箭五郎は、車野の前阪にて、朱之介に別るゝとき、いひつるごとく那馬二疋を、何處へか牽もてゆきけん、二百反の布はさらなり、馬をも行李さへみな沽却して、かへさに美酒一罇と、殽も種々買とりしを、人にもたしてかへり來つ。將て來し人を門より返して、奥手に酒を煖めさせ、その餘の事も恁々と、辭せわしく分付て、扨褊室に赴きて、朱之介に對面し、布をも馬をも皆售しに、豫て直踏をしたるに違はず、三十餘金になりたりとて、件の金を懷より、とう出て遞與すを朱之介は、受取てこれを勞ひ、その金を十兩許、分ちて且當分の、食料にとて贈りしを、箭五郎は左右なく取らず。そは過たりとて推辭つゝ、やうやくにして收めけり。是より例の酒燕になりて、獻つ酬れつ相勸れども、外を憚るよしあれば、うち笑ふにも聲をたてず。

況奥手に三絃を、彈することなどはなかりけり。折から歳暮なりければ、朱之介はその次の日に、あるじ夫婦の被衣はじめにとて、又五兩の金を出して、これを奥手に贈りしかば、奥手は豫て欲かりし、流行衣裳を新しく、刺立て春を迎たる。正月は貴も賤きも、迭に交加ひ壽きて、なか〳〵にいそがはしきに、朱之介は那褊室に、垂籠てのみをるを、箭五郎は慰めかねて、京へゆく人などにや誂へけん、楊幹弓一具三四張を、何の程にか買とりつ、これを朱之介にすゝめていふやう、垂籠てのみをはさずとも、背門に空地の候に、大的などを射給はば、保養に宜しかるべけれども、外に出給はば人にしられて、杣木の母子に聞えやせん。これも亦影護かり。這楊弓は家の内にて、弄ぶに便よければ、形のごとくに準備をしたり。在下お敵手になるとても、只二人では興なほ薄かり。こゝよりは程遠くもあらぬ、比曾寺（地名）なりの鄕士の子に、二尾復四郎弘澄と喚るゝ少年あり。和君には二才ばかりの、弟にてあらんずらん。聊在下と舊緣もあり。然らでも算術の弟子なれば、生平に親しく來つるなり。扨件の復四郎が祖父は、大内政弘ぬし（義興の父）の被官なりける、二尾加賀守弘直これなり。往る文明の初年、弘直は、主を怨るよしありて、猛に謀反の聞えあり。政弘主の伯父なりける、大内入道道頓を主君と仰ぎて、山口の城を攻んと議する程に、その事はやく發覺れて、弘直は誅せられし、その子二尾加賀四郎弘景

は、大赦にあふて一命を助けられ、遂に追放せられたり。これよりして後加賀四郎は、本州比曾寺の郷に落著て、地方の郷士になりけるが、父弘直の貯藏たる、軍要金許多ありければ、その身他郷にさそらひても、今に至て貧しからず。田園を多く購求め、且里人に金を貸て、貨殖に賢きものにぞありける。那加賀四郎に在下が、母方の族なるをもて、父子倶に疎からず。因てその子復四郎を、在下に從して、算術を學したり。渠には交り給ふとも、影護きこともなく、親は豪家で候へば、おん爲になることとあらん。那復四郎が來ることあらば、勸めて倶に楊弓の、敵手になさば興あるべし、と眞實だちて說示す折から、窻の障子に鳥影さして、那復四郎が來にければ、箭五郎は手をうち鳴らして、奇なり妙なり、と稱へつゝ、軈て褊室へ招きよせて、朱之介を引あはせ、二尾刀禰、この方ざまは、京家の某甲どのの嫡子なるが、繼母の讒によりて家を追れ、この地に閑居し給はんとて、某を賴み給ひき。この方ざまの大人は、某舊交あるをもて、その意に任して留まゐらせたり。さばれ閑居の徒然を、慰めまうさん術なさに、那庭訓往來にも、正月には雀小弓の、舊事あるを思ひよして、楊弓をもてながき日を、消させまゐらせんと欲するに、爾るべき社友なし。和殿は咱舊族にて、よろづに隔あることなければ、この敵手には究竟なり。けふより遊戲の夥計に入りて、わが與に這客人を、慰め給はば幸ひな

らん。勿論世を潛ぶ人にをはせば、外にな洩し給ひそ、と實しやかに說示すを、復四郎はうち聞て、一議に及ばず唯諾をしつゝ、朱之介と名對面して、寒喧を演案否を諮ね、迭に四面八表をうち譚ふ程に、箭五郎は緣頰に的を建、花莚を布渡して、准備はやくも整ひければ、主客三名竝坐して、楊弓を射て優劣を、相試て興すれば、奥手は箭を拑り茶を看め、果は又酒を薦めて、復四郎をも欵待しければ、復四郎は遊戯を歡ぶ、少年輩の癖なれば、是より後も親には隱して、算術の稽古に假托け、日每に來つゝ朱之介等と、倶に楊弓を射たりける。有恁而五六日を歷る程に、有一日箭五郎は、朱之介復四郎等と相譚ふやう、恁日々に遊びくらせば、樂しからぬにあらねども、各々おなじ事をして、勝ても負てもその甲斐なければ、竟には飽て興盡ぬべし。年每の正月には、いともかしこき禁庭にも、賭弓を叡覽あり。贏たるものには錢を賜ふて、賞せらるゝと聞えたり。有恁ばけふより咱們も、賭弓にして興を添てん。この議はいかが、とそゝのかせば、朱之介も復四郎も、しかるべしと應つゝ、迭に數を定め、輸物を出して、終日輸じと射るものから、朱之介と復四郎は、左に右に正鵠稀にて、黄物を失ふこと少からず。素より這兩少年は、いづれも武藝に疎からず。就中朱之介は、射る技の人に捷れて、百發百中の修煉ありしを、楊弓は又格別にて、這回はじめて手にとればや、罕にも贏ことを得ざりしか


朱之介


おくみ
出像第卅一

ば、且羞且惴たちて、輸物を推のぼし、只一日に屬日の、不覺をとり復さんと欲すれども、復四郎には優れるのみ。ひとり箭五郎に掻攫れて、落葉が取せし二十兩も、白布と馬の價の、使殘れるをも抓出して、纔の程に喪ひければ、いよ〳〵まけじ魂の、今さらに已がたくて、又那沙金を兌して、使んと欲するに、箭五郎がいふやう、沙金百兩は、圓金五十兩に當れり。なれども這地方では通用せず、京の三條わたりへもてゆけば、時價宜しと聞たるのみ。路遠ければそれも詮なし、さばれ兌貨をだに數ひ給はずは、咱もてゆきて兌する家あり。おん身の隨意ならんかし。といふを朱之介は聞あへず、兌價は俺決して厭はず。とく兌して給ひね、と憑て奥手に預け措きたる、沙金一苞をとり出させて、そが儘遞與すを箭五郎は、苞を解て包の數を、撿めて受とりつ。何處へかもてゆきけん、俟こと二晌あまりにして、圓金に換てもて來にければ、朱之介は歡びて、心つよしと思ひつゝ、いよ〳〵日々に楊弓を、射れども〳〵生憎に、正鵠はとにかく稀なりけり。以あるかな件の楊弓は、箭五郎が豫て伎倆あり。竊に細工人に誂へて、朱之介と復四郎に、授けし弓には機關ありて、彎固めても發ときに、狂はずといふことなく、箭も亦頭に鉛を籠て、落るにはやくしたりしを、這少年們は楊弓の、精麁をいまだ認らざりければ、その奸計に陷りて、朱之介は沙金をさへ、二三百兩喪ひつ。復四郎も親の財を、

二包金あまりもち出して、果敢なく箭五郎の有にしてけり。こゝをもて箭五郎は、日々に奢ること大かたならず。三たびの膳にも珍味を盡して、一夕も酒燕せざることなく、奥手には髮の飾に、玳瑁をもて頭を背せ、衣裳には和漢を論ぜず、價貴きをのみ被せて、朝より粧り琢せ、猛に女婢二名ばかりを養著て、その一人には薪水の㕝を掌らせ、又一人には楊弓の箭をとらせ、盃盤調度に至るまで、思ひの隨に買とりて、忌憚ることなかりしかば、間近き里人們はこれを見聞て、驚き怪まずといふものなし。左右する程に、復四郎が親なりける、二尾加賀四郎弘景は、これらのよしを傳聞て、駭き怒ること大かたならず。緊しくその子を穿鑿せしかば、復四郎は愿むによしなく、乃者安保の宿所にて、楊弓を射たりしより、思はず財貨を喪ひにき。その故は箇樣々々、と有つるまゝに報たりければ、加賀四郎いよ〳〵怒りて、那箭五郎奴が放蕩なる、周防を亡命したる比、遊女をさへ携て、咱を憑て來にければ、咱舊縁をおもふをもて、且く宿所に留措き、鄰郷に家を求めて、移徙させて六七年、人なみに世を渡れるは、抑これ誰が庇ぞや。有恁る恩義をはやくも忘れて、年なほ少き復四郎を、そゝのかして惡事に引入れ、許多の財貨を喪はせしは、只是騙兒の手段に等しき、言語同斷の光棍なり。その義ならばせん術あり。必思ひしらせんず、と罵りつ敦圉きて、復四郎をばそが儘に、緊しく一室に拘籠て、

緤の准備を急ぎけり。然程に朱之介は、復四郎が來ずなりしより、敵手足らざれば興さへ竭て、又楊弓を射んと欲せず。よしもなき遊戲に耽りて、貯藏をみな失ひつ、沙金も纔になりたるを、今さらに後悔して、鬱々として在りけるを、奥手は竊に慰めて、はじめにかはらず管待しけり。既にして箭五郎は、略るべきものはとり果つ、今はよき比なるべし、と思ふ心を色にも見せず、有一日朱之介に對ひていふやう、在下は要事ありて、翌は平城へ赴くなり。一兩日は逗留すべきに、留守を憑み奉る。徒然にをはすべければ、是でも閲して慰めたまへ、といと正首によしを告て、きのふ上市なる、骨董店にて買とりたる、太秦の草紙の画卷物と、源氏物語の缺寫本の、纔に五六册ありけるを、そが儘とう出て貸にければ、朱之介は受歡びて、そは何事か知らねども、疾ゆきてはやく還らせ給へ。今は日陰の俺身にあなれば、留守にも役には立がたし。さばれ賊難の防禦には、狗に優ことありもやせん、と應つゝ呵々とうち笑へば、箭五郎も亦うち笑ひて、奥手にも云々と、留守を委ねつ、その詰朝、宿所を出て八重櫻、まだ咲ねども名にし負ふ平城を投てぞ急ぎける。然程に朱之介は、去歳の暮より安保が宿所に、躲居れども折の歹くて、家あるじは外に出ず、楊弓を射て共侶に、遊びくらしたりければ、奥手ととけてうち譚ふ、暇だになかりしに、はからずも箭五郎は、平城に所要のあればとて、今朝とく出てゆき

しにぞ、幸ありけりと歡びて、且兩個の女婢們には、東西をとらせこゝろを得させて、酒をも沽べし、殺をも、買もて來よとて出し遣し、軈て奥手を褊室へ、招きよせ掖著て、日ごろいはまく思ひし事を、いひもしつ聞もして、うち譚ふこと半晌ばかり。夜艾までは俟わびしかりけん、そが儘倶に輾宿の、夢を且く結ぶ折から、何の程にかかへり來にけん。思ひがけなぎ箭五郎が、緣頰の障子蹴放ちて、奸夫淫婦を見出したり。其處動くな、と罵りて、走蒐れば朱之介、奥手も共に吐嗟とばかり、胸を潰しつ怕慌て、起んとせしを起しも立ず、登しかゝれる手と膝をもて、楚と押えて准備の索を、腰よりはやく手繰出して、朱之介と奥手をも、犇々と緋て、左右へわかちて緣頰なる柱へ緊しく繫ぐ程に、酒と殺を買もて還りし、兩個の女婢們は這爲體に、駭怕れて逃んとせしを、箭五郎急に呼とゞめて、若們怕るゝことなかれ。そはよき東西をもて來たり。とく〳〵酒を盪めて、咱に喫せよ、といそがしつ。軈て件の酒殺を、飽までに飲啖ひけり。誠や恥をしらざるものも、敗れに及てその非を悔るが、なべて人たる甲斐にしあれば、奥手は勸解とも免されがたし、と思ひたりし歟ものいはず。朱之介は箭五郎を、つくづくと見かへりて、安保ぬしさぞ憎みても、惡み飽なく思はれんが、色は深念の外とぞいふなる。俺愆は今さらに、いひとくよしのなけれども、素より交り淺からざりし、好に頋て命を助け

よ。然らば他郷へ赴きて、ともかくもならまく欲す。願ふは索を解きてよ、と呻つを箭五郎冷笑ひて、這密夫奴が何をかいふ。わが身舊里に在りしとき、夥の金を掠ちて、親に勘當せられしも、皆そのをんな故なるに、そを偸れて阿容々々と、免していなす法やある。立野の陣所へ訴て、素頭を刎させん。覺期をせよ、と敦圉て、そが儘奥手と朱之介を、篏輿に乘し人に舁して、立野の陣所へ將てゆきけり。畢竟朱之介奥手等が、罪の讞斷甚麼ぞや。そは次の卷に、解分るを聽ねかし。

第三輯　卷之三

第二十五回

訟を聽て順政賊情を知る
嫣を陳て落葉恩赦を乞ふ

再說、安保箭五郎直行は、奧手と朱之介を綑て、篏輿に乘し人を傭ふて、舁して立野の陣所へとて將てゆくに、よしを里長にも告知らせず、又四下鄰き里人にも、この趣を告ざりしは、愁に和解られて、縡の障りになりもやせん、と豫て思ひしによりてなり。この時大和の國主なりける、陽舜坊順政は、（榮舜坊順昭の嫡子なり順政一順勝に作る）彼此なる吏の邪正と、民の愁訴を知らん爲に、みづから封内を巡歷して、且く立野の陣所に在り。こゝにて越年せられしかば、箭五郎は件の訴に、遠く本城に赴くに及ばず。軈て陣所へ將てゆきて、縡恁々と聞えあげけり。然程に國守順政ぬしは、この日民の訴を聽果て、はや退かんとせられし折、有司又箭五郎が稟せしよしを、箇樣箇樣と告るにより、そが儘問注所に著坐あり。雜兵をもて箭五郎を、坪の内へ召入れさして、訴訟のよしを尋らる。登時箭五郎は、索拿つめて坪の內へ、朱之介と奧手をも、共侶に牽入れ

つ。找み對ひ額をつきて、姓名を告よしを述て、懐にしたりける、訴書をまゐらするを、一個の有司受とりて、高やかに讀にけり。順政ぬしうち聽て、やをれ箭五郎、汝は何等の好ありて、朱之介を留措きたる。抑他は何處のものぞ、と問れて箭五郎頭を擡、さゝ候這朱之介は、武藏より來つる旅客なり。在下交遊の好あるをもて、宿所に留措き候ひしに、荊婦奥手と密通したる、絆既に分明なり。よりて那奴們が密會の、折を覘ひ挫ぎて、形のごとくに縛めつ。此彼倶に推累ねて、撃果さんは輒けれども、守この處にましませば、そを私に罪なはず、明々地に訴まつりて、御刑伐を願ふものなり。這奴等が頭を刎ならべて、怨を釋させ給へかし、と稟すを順政うち聞て、又朱之介と奥手に對ひて、今箭五郎が稟せしごとく、汝等は密通したるに、素より相違あらざる歟、と問れて羞たる朱之介は、早には答難たりしを、奥手は阿容たる氣色もなく、膝を找めてまうすやう、御諚では侍れども、賤妾は素より朱之介と、不軌せしことはあらずかし。良人は今朝しも平城のかたに、所要ありとてとく出つ。婢們は物買に、出たる隙に朱之介が、賤妾を拘へて挑みつゝ、聽ずは縊り殺さん、といはれしに術もなく、有繋に命の惜しければ、僅にその意に任したる、折から良人のかへり來て、絆のこゝに及べるのみ。一旦他に從ひしは、實情ならず侍れども、その情由には證据なく、會ぬることのみ良人に知られて、

怒の烈しかりしかば、いひとくとも聽れはせじ、と思ふてその綁を、受つゝ口を鉗みたり。かの折一時の怒りに任して、倶に憎しと思ふとも、年來賤妾が心操は、箭五郎ならで誰か知るべき。垂乳母にも優すおん慈悲もて、この義を質させ給へかし、といひ嘴るを側聞する、朱之介は驚くまでに、いと淺ましと思ひたり。且して順政ぬしは、又箭五郎にうち對ひて、目今奥手が陳ぜしよしを、汝も具に聞つらん。思ひあはするよしなきや、と問れて箭五郎頭を傾け、寔に奥手が稟せしごとく、他は年來操正しく、貳ごころなきものなりしかど、朱之介に手籠にせられて、强姦せられたりける歟。その義は覺期仕らず、適守のおん威勢もて、朱之介に問せ給はば、虛實定かに候はん、といへばさこそと順政ぬしは、頷きつ佶と見かへりて、やをれ朱之介、汝は一時の出來心もて、理なく奥手を犯せし歟。些も隱まで首伏せよ。この期に及て詭飾らば、骨を拉ぎて實を吐せん。有つる儘に稟さずや、と緊しく問れて朱之介は、思はずも嗟嘆しつ、跪きつゝ稟すやう、仰うけばり候ひぬ。奥手はそのこゝろより、在下と相歡びて、從ざりきとまうすとも、旣に枕を並べては、五十步逃て百步を笑ふといふ、諺にも似たるべく、何の方にも密通の、惡名は雪めがたかるべし。然ばとて操正しとて、譽らるゝ他妻を、這身と倶に罪なはれなば、寔にこれ不便の事歟。よりて願しき義の候なり。在下が盤纏の爲に、もて

來つる沙金二百兩あまり、箭五郎の宿所にあり。この金をみな箭五郎に、贈りて罪を贖はゞ、操正しき奥手はさらなり、在下も亦罪を免れて、他鄕へ赴くことを得つべし。いかでこの義を箭五郎に、御教諭ありて納得せられば、こよなき守のおん慈悲ならん。只管願ひ奉る、と思ひ入りつゝまうすにぞ、順政ぬし頷きて、箭五郎彼を聞たる歟。朱之介は貯藏の、沙金二百餘兩をもて、汝に納て身の罪を、贖んとて願ふなり。甚麼この義を允すや、と問れて箭五郎思はずも、含笑ながら額をつきて、こは有がたきまで辱き、御諚を承り候ものかな。世に男子たるものが、妻を強姦せられては、忍びがたき情由なれども、朱之介はその愆を、悔てみづから新にせんとて、沙金二百餘兩を納て、罪を贖んとまうすをも、なほ執念深允さずは、守のおん旨にも悖るに似て、いともかしこく候はん。その義に相違なきものならば、ともかくもつかまつらん。なほ御教諭を願ふのみ、といふをうち聞く順政ぬしは、笑つゝしば〳〵頷きて、しからば是箭五郎が、怨訴は既に平ぎぬ。恁ては向後いひ品なきや、とふたゝび問れて、さん候。沙金を遞與すに相違なくば、何しにいひ品候べき。和譚に變改候はず、と答まうせば順政ぬしは、忽地聲をふり立て、やをれ箭五郎、汝はいひ品なしといふとも、われはなほ許容しがたき、一條の罪科あり。誰かある、這奴をはやく綁めよ、と烈しき下知に雑兵四五名、齊一阿と應つゝ、

左右一度に走り蒐りて、はや箭五郎を掖倒し、押へて索を被しかば、箭五郎大く駭慌て、在下犯せし罪あらず、といはせも果ず順政ぬしは、呵々と冷笑ひて、いかでか汝に罪なかるべき。汝はいぬる比よりして、比曾寺の郷士、二尾加賀四郎が獨子なる、復四郎といふ少年を、欺きつ引入れて、賭に事托てその財寶を、許多掠略たるよし、復四郎が親、加賀四郎が愁訴によりて、その事初て聞えたり。因て汝を搦捕して、鞫問せんと思ふ折から、汝は密夫を訴出て、みづからこゝにまゐりしかば、且那一義を閣きて、その訴を聽試しに、その情夫婦耦賊にて、朱之介が所持の沙金を、奪ん爲に妻の奥手に、密通させしものなるべし。有恁ば這朱之介をも、良からぬ技に引入れて、その錢財を掠略り、遺れる金をもみな奪ふて、追出さんと計較たる歟。これも亦知るべからず。今飽までに毆懲さずは、いかにしてその實を吐くべき。笞を當ていはせよ、と辭烈しく下知せられたる、雜兵們は承りぬ、と應つゝ箭五郎を、推伏せつ登し蒐りて、笞を揚て二三十、背をいたく毆しかば、箭五郎は皮破れ、鮮血流るゝ苦痛に得堪ず。絶もしつべき聲ふりしぼりて、まうしあげ候はん。笞を放し給へかし、と叫べば雜兵手を止めて、掖起して推居たり。當下箭五郎は、やうやくにわれにかへりて、跪きつゝ稟やう、守の御明察に違ふことなく、朱之介は盤纏を多く、もてる旅客で候へば、淺からず交りて、遂に宿所に留

措き、しば〳〵良らぬ技を薦めて、その金を畧り候ひしに、敵手足らざる故をもて、那復四郎をも引入れて、箇樣々々に欺きつ。又彼者の有財も、多く手に入り候ひしは、胸算用の外にして、張公酒を喫すれば、李公も醉ひき、といへるがごとく、重中で候ひき。されば絆の初より、女房奥手と謀し合して、色をもて朱之介を、とり留たれば疑れず。奥手も亦朱之介が、美少年なるをもて、辭ふことなく欵待したれば、朱之介はいよ〳〵惑ひて、多く財寳を擲ちたり。しかれども用遣せし、沙金はなほ二百兩あまりあり。それをも畧んと計りしかども、復四郎が來ずなりては、那技をもて奪ひがたかり。他が奥手と密會ひぬる、折に捕へて奪ふべし、と思ふものから他が金を、日ごろ畧りたる人情も候へば、大宅沙汰にあらざりせば、他に那沙金をもて、罪を贖せんと欲するとも、術剛くいひがたき所あり。然るを訴出るに及ばば、渠が怕るるよしもあれば、事立地に成るべし、と深念をしつゝ里長にも、知らさで御陣所へ將てまゐりし甲斐に、豫て計りし胸に差はず、朱之介は那沙金をもて、罪を贖んと願ひしかば、既に十二分の歡びあり。金を奪うて追出さん、と思ひしはそらだのめにて、明なること曇らざる、鏡に等しき憲斷にて、伎倆をはやく察せられし、臢二尾加賀四郎が、訴によりて良らぬ技をなししことさへ發覺れしを、知ざりけるこそ愚なれ。その罪萬死に當るといへども、大慈大悲の大御

心もて、恩赦の御沙汰ましましまさば、歹き心を新にして、良民となり候はん、とかなしみ乞て遺もなく、伎倆を首伏したりける。順政主うち聞て、有恁ば夫婦熟合て、計りしよしは箭五郎が、既にはや首伏したれば、重て奥手を責るに及ばず。且病坊なる里長と、故老の里人們を召聚へよとて、猛に雜兵們に下知ありしに、那裡の里長里人們は、箭五郎が云々の、情由も知らさで女房奥手と、密夫を網めて、立野の陣所へまゐりしよしを、後に聞つゝ皆驚きて、恁る事のあるときは、里長と四隣のものが、必且扱ふて、然でも和談の整はずは、守へ訴まつれるが、なべての里の恒例なるに、那人一時の怒りに乘して、人にも告ず訴出しは、短慮の至り是非に及ばず。遠くゆかずは追留んとて、里長里人共侶に、迹を慕ふて立野なる、陣所まで來にけるを、知れるものありて箇樣〳〵、と這時聞えあげしかば、順政則重長と、故老のものを召よせて、箭五郎が罪戾の趣を、恁々と說示して、這箭五郎が宿所には、朱之介が沙金二百餘兩と、二尾復四郎を欺詐りて、掠略たる錢財の、使用殘れるもなほあらん。そは汝等に預るなり。迭代に渠が宿所を、戍りて失ふことなかれ、と嚴に下知せられしを、衆皆齊一言承しつゝ、家路を投て退りけり。有恁而又順政ぬしは、雜兵等にこゝろ得さして、且箭五郎と奥手をも、獄舍に遣し繫せて、拘遣されてついゐたる、朱之介をつら〳〵見て、汝は武藏の旅人といへれど、

何の鄕の人氏と、いふことも詳に報げず。原是何等の所用ありて、這地に來つゝ逗留したる。且沙金は本州にて、通用せざるものなるに、許多齎したるも不審なり。その身の素生と沙金の來歷、その餘の事も具に稟せ。とくいはずや、と譴問れたる、朱之介は困じ果て、跪きつゝ陳ずるやう、那沙金には來歷あり。這身の素生も疑しき、ものにては候はねど、さしも憚るよしあれば、明々地には稟しがたかり。この義は許させ給へかし、といはせも果ず順政ぬしは、眼を瞋らし聲苛立て、沙金の由來もその身の素生も、愼むは不正の情由あらん。おもふに汝は盜賊歟。然らずは必敵國の、間諜者にてあらんずらん。鞭撻懲して首伏させよ、と敎悃き悍く下知せしを、有司們霎時と推禁めて、おそる〳〵諫るやう、日ははや西に淪みしに、這罪人の譴責は、けふのみに限るべからず。生平にも倍して旰るまで、訟を聽し召れしかば、御疲勞もさぞあらん。今宵は獄舍へ遣して、後日に御詮議あるべきのみ。この義を願ひ奉る、と稟すを順政主見かへりて、然らば彼奴も禁獄せよ。その餘の事は恁々と、叮嚀に宣掟て、この日の廳は果にけり。然程に、箭五郎夫婦と朱之介が、立野の獄舍に繋れたる、縡の風聲隱れなく、はやく上市の鄕へ聞えしかば、斧柄は駭きうち歎きて、思ひ難つゝ母にいふやう、吾所天の禁獄せられしといふ、風聲を聞給ひし歟。あれほどにまでし給ひしに、いふ甲斐もなく武藏へは、か

へらで安保に倡引れけん。彼人許潜居て、又禍を釀しつゝ、その身の破滅に及びしは、自業自得といはまくのみ。しかはあれども妹と伕の、縁しを結びし恩義をおもはで、能はぬまでも救はずは、人たる道に缺なまし。作麼何としてよからんや、と問つゝも目を押拭へば、落葉は聞つゝ頷きて、然なり。那人の風聲は、吾儕も詳に聞たれば、淺ましき事限りもあらず。左さま右さま尋思しつ、救んとこそ思ふなれ。現彼人の薄情なる、慾の爲にはその身の安危も、思はぬ烏滸の白物なりしを、只一旦の恩義に感じて、はやく儞を妻はせしは、うたてや人を知らざりし、吾儕の淺慮、そなたの薄命。箭五郎といひ奥手といひ、睛の寄る方へ目子もよる。これに就ても世間に、人たる人は稀なりけり。とばかりにして人の不實を、怨みて仇の思ひをなさば、共に不實の人となりてん。人の心はとまれかくまれ、今一ト回救ん、と思ひにければきのふ竊に、里正刀禰と故老達に、うち相譚つ願書を、立野の御陣にもてまゐりて、命乞をせん爲に、準備大かた整ふたり。翌は夙早て立野へ參りて、恩赦を願ひ奉らん。心がらでも人は又、命運によるものと歎いへば、果敢なきことを思ひ屈して、病な煩ひ給ひそ、と慰められて又袖濡らす、斧柄はいとゞ胸苦しくも、有慿る時すら脱落なく、雄々しき親の計ひを、且感じ且歡びて、又いふよしもなかりけり。有慿而その詰朝、落葉は里の故老們に伴れて、立野の陣所に

赴きつ。扨問注所に告訴して、緣由を稟すやう、這回禁獄せられたる、朱之介は落葉等が、舊緣あるものにして、武藏の河踰より來にければ、迺宿所に留おきて、女兒斧柄を妻はせたり。又他が齎したる、沙金如干兩は、河踰に施主ありて、如々來禪師に請まうして、佛像許多造らんとて、曩に朱之介が這地に來つる、便りに就て件の金を、齎せしよし聞えしかども、禪師の庵にましまさねば、又いかにともせん術なさに、一トたび河踰へ立かへりて、よしを件の施主に報て、沙金を返さんといふにより、その意に任して起行せしに、箭五郎が惡心にて、竊にその路に出て抑留め、さま〴〵に誘へて、宿所に藏措にき、と世の風聲に聞え侍り。他が惡友に倡引れて、暗からぬ身を暗くしつ、良からぬ技に耽りたる、その罪免れがたく侍れど、なほ少年の思慮淺くて、伎倆の弶に被られけん。これも亦不便に侍り。出處正しきものにして、落葉が女壻で侍るよしは、里正を初として、里人們も皆知れれば、そを證人として願ひまつりぬ。あはれ恩赦の御沙汰をもて、朱之介が禁獄を、免させ給へ、とねがふこと、兩三回に及びけり。かくて又、落葉は獄舍へ日每々々に、食物を餽遺して、恩免を願まうせし、その趣は恁々、と密やかに告しかば、朱之介は歡びて、爾後素生を責問れしとき、落葉が聞えあげたるごとく、招道に及びしかば、やうやくに疑ひ解けて、原來盜賊にもあらず、又敵かたの間諜者にも、あら

ざりけりと定められて、その罪輕くなりにけり。有恁而又、箭五郎奥手も呵責を稟て、その餘の惡事を問れしかども、嚮に朱之介と復四郎を引入れて、賭を事とせし外には、犯したることあらずといふのみ。彼車野の前阪にて、乃介坊二郎を射て殺したる、そこらの事は知れる人なく、箭五郎も朱之介も、死を極めていはざりければ、竟にその事露れず。然けれども箭五郎は、その惡事騙賊に等し。首を刎べしと議せられしに、順政ぬしの母君の、病て久しく瘥り給はず。この比重らせ給ひぬとて、封内に赦を行れて、五逆と人を殺せしならぬは、追放すべしと下知せらる。これにより箭五郎も、猛に死刑を宥められ、他が家財を籍て、沙金二百餘兩と、朱之介が行衣腰刀は、そが儘落葉に賜りつ。この餘の錢財と、家具衣裳の多くありしを、二尾加賀四郎に賜りて、その損財を補せ、復四郎には、その愆を咎めて、怠狀をたてまつらせ、女婢二名には、身の暇を取らせよとて、家は借屋たるをもて、その家主に返し賜り、扨二尾加賀四郎と復四郎と、落葉竝に、比曾寺上市病坊なる、里長と里の故老を召聚へ、罪人恩赦の趣を、云云と宣示して、朱之介は罰杖三十と定められ、背をいたく鞭撻して、そが儘落葉に遞與給はり、奥手も亦罰杖三十にして、もてその向後を懲され、箭五郎は笞の數、一百歐れて奥手と倶に、大和を追放せられけり。抑本州の守順政主は、その先祖、南都の寺家より發起て、彼此を討

の孽け、その父順昭の時に至て、大和一國を平均せしかば、威勢鄰國に盛なり。然けれどもその家門、素より長袖なりければ、戰國にはいと稀なる、刑罰を寛して、しば〳〵恩赦の聞えあり。よりて箭五郎朱之介等は、再得がたき頭を續れて、剰朱之介は障もなく、岳母落葉に遞與されけり。大赦は君子の不幸にして、小人の幸ひなるよし、古人のいひけん以あるかな、と識者は竊に評せしとぞ。閒話休題。却說落葉は、加賀四郎等の後に跟て、國守の恩を拜謝しつ、朱之介を受とりて、退出て軈て准備の徒輿に、乘して笞痛を勦らせ、里正里人とつれ立て、上市の宿所にかへり來にければ、斧柄は歡び出迎て、衆人を勞ふ程に、送り屆し衆人は、里正と共侶に、歡びを述別を告て、皆動搖々々と出てゆきけり。登時落葉は斧柄と共に、朱之介を勦りて、奥なる子舍に休はせ、湯液を與へなどするに、朱之介は幸ひに、笞痛は痛まねども、面目なさに弱り果て、只その恩義を謝するのみ。いふべきこともいひかねしを、斧柄はさこそと慰めて、夕膳を羞めたる、管待日ごろにかはらねば、朱之介はいよ〳〵恥て、この身を日景の雪にして、消も失よと思ひけり。有恁而その甲夜の間に、落葉は朱之介を召近づけて、斧柄をも側に侍らせ、且恩赦の歡びを、演て四下を見かへりつゝ、聲を微めて扨いふやう、朱刀禰諫め甲斐もなかりし、再度の愆を今さらに、咎めて云云といふにはあらず。わかき人の浮氣なる、

世にも多かることながら、それには大く品かはりて、おん身の放蕩は筋なかり。憑しからぬ女壻なれども、女兒の必死を拯れたる、恩を思へば今一トたび、骨を折んと思ひつゝ、斧柄と倶に神に祈り、佛を念じて立野の御陣へ、幾回となく參りつゝ、願ひまうせし誠屆きて、志は致したり。恥を思はぬ性なりとも、これに懲ざることやはある。その心をだに改めて、信ある人になり給はゞ、おん身一己の幸のみならで、吾儕母子の福ひなり。なほ又思ふよしもあれば、今茲一ト稔辛防して、氣ながくこゝにをはせよかし。さばれ心もとなきは、かの乃介とやらん、坊二とやらんの事に侍り。件の兩個の從者の、往方を詳に聞まほし。いかになりたる。甚麼ぞや、と問詰らるゝ朱之介は、はやうち騷ぐ胸を鎭めて、さらぬさまにて頭を擡、實の親も及がたき、かさね〳〵し慈悲鍾愛、骨に徹り膽に銘じて、有がたきまで辱くて、感涙の外は候はず。このうへながら行狀を、愼みて這洪恩を、復しまつらんと思ふのみ。嚮に武藏へ還らざりしは、那惡友に說惑されて、なほも禪師の歸庵を俟て、君命を達せずは、禍この身に及ん、と思ひしにより倡導れて、その奸計に陷りしは、俺ながら愚痴輇才、かへす〴〵も面目なし。且今諮ね給ひぬる、從者乃介と坊二郎は、かの折河踰へかへしたり。その時の口狀に、如々來禪師を俟候に、今に歸庵あらざれは、在下は來年まで、這地に逗留仕らん、と聞えあげよ、と敎諭し

て、注進の爲に遣したれば、いつまでこゝに在るとても、主君の咎めなかるべし。この義は御こゝろ休かれかし、と實事しやかにいひ瞞れば、落葉は聞つゝ頷きて、しからんには安堵たり。おん身今茲は廿歳ならずや、君の御ゆるしを受ずとも、なほ又こゝに在りながら、額髪は似げもなく、外の人視も宜しからず。翌は斧柄に剃除せて、大人になるこそよかンめれ。かくて宿念を果すに及びて、武藏へ還り給ふ日は、復額髪を置んとも、そは左も右もなりぬべし。願ふは心を改めて、深信堅固に時節を俟ね。如々來さまに君命を、達せずは共侶に、盡す心も空なるべし。この義を忘れ給ふな、と諭す誠ははゝそ木の、落葉に袖の露しぐれ、斧柄はよゝと泣に立つ。慈悲と情義の兩條枝に、やどり苦しく悔おもふ、はぢもみぢ葉の朱之介、褐散るばかり不樂にけり。有恁而朱之介はその次の日に、額髪を剃て貌を更め、是より杣木の宿所にをり、なほ且くは落著ぬ、心苦しとのみ思ひしも、落葉母子の誠心に、漸々に化せられて、先非を悔つゝ早晩に、正首に立働きて、斧柄にも睦しく、落葉には特さらに、賢だちたる言語を愼み、させる役には立ねども、心ばかりは脱落なく、家の内の拂掃除、戸の開閉も人手をまたず。或は糸縢の出納、小使錢の日記などを、總てその身の務にして、聊家事を資けしかば、斧柄はさらなり、落葉さへ、愛歡びつ今番は、いひがひありきと思ひけり。然ばはじめは朱之介を、

大く譏りし里人們も、落葉斧柄の儔稀なる、慈善貞實、義理に賢しき、心操を傳聞て、感嘆せざるものなければ、朱之介をも憎まずなりぬ。人の噂も七十五日、と世俗のいひけん以あるかな。善に與する人心、流るゝ水の低きに就くと、亦何ぞ異なるべき。十室の邑にも忠信あり。義姑賢妻の世に有がたき、誠心のよく一鄕を、感ぜしめしにいかなれば、朱之介のみ遂ざりし、末の陶こそうたてけれ。

第二十六回

多金を齎して落葉女壻を遣る
唐布を索ねて晴賢義弟に遇ふ

却說光陰荏苒して、是年も果敢なく暮つ、木芽若やぐ春立かへりて、如月中浣になりにけり。朱之介は河踰の、首尾も有繫に心にかゝりて、獨竊に思量るに、這地の容子を問せんとて、倘又使を立られなば、隷られたりける乃介坊二が、居らずなりしも不便なり。何とか答へまうさんや、と腹に問ひ腹に答て、分別もなく旦し暮すに、曩に東國を立出しより、はや兩周の春を迎へて、三稔といふ今までも、武藏の音耗絕たるは、これも以ある事にして、扇谷朝興ぬしは、山内の管領と和睦しつ、軍を合し士卒を鳩て、相摸なる北條氏と、戰ふことしばゝなり。

この故に朱之介が、久しく歸り來ずなりし、安否を訪するに暇なく、那造佛の一條は、他に任しつ度外に措て、闘戰防禦に秘計を旋らす、軍旅に他事はなかりけり。恁るべしとは知るよしもなき、落葉は一日朱之介を、身邊へ招き近づけて、おん身はいまだ聞給はずや。如々來さまのこの春は、山より還りまし／＼て、御在菴なさるゝよし、吾儕はきのふ傳聞にき。つら／＼おもふにおん身の行狀、心ざまさへ改りけん。久しく俟たる甲斐ありて、禪師の歸菴ましませしも、そこらの故にぞあらんずらん。なほ深信を怠らで、東西整ひなば御菴へ參りて、君命を述許容を得て、めでたく歸國し給へかし、と壽きつ笑しげに、告るをうち聞く朱之介は、それはとばかり當惑の、胸安からず額を病して、沈吟ずること半晌ばかり、やうやくに頭を擡て、そは歡しきことにこそ候へ。只悔らくは這身の愆、沙金も布さへ喪ひしを、今さら贖ふ術もなし。使用殘りし二百餘兩の、沙金ばかりを齎して、枉て那里へまゐるとも、東西と目錄と合ざれば、毛を吹て疵を求る、事損ねにこそ候はめ。作麼何としてよからんや、と潜めき問ふだに不樂しげなる、顏つく／＼とうち目戍りて、そはその該の事に侍り。吾儕なりとて知らるゝごとく、孀あるじの事にしあれば、談合敵になるよしもなき、貯祿多くは侍らねど、倘この時に力を勠して、おん身に本意を遂させずは、女壻宅姑たる義理立ず。斧柄が必死を拯れたる、恩

を忘れしものに似て、心裏恥しき事にし侍れば、よしや田園を地質に典れても、東西整へてまゐらせん、と思ふて昨夜斧柄にも、商量したることぞかし。沙金の不足は三百兩歟。圓金もて換るときは、百五十兩にて整ふよし、これらの事は豫てより、それとはなしに人に尋て、吾儕もこゝろ得侍りたり。さばれ沙金はこの大和にて、通用せざる財に侍れば、京師までもてゆきて、兌せでは整ひがたし、とある人の誨侍りにき。只この不便のみならで、隔昨歳の極月那白布を、おん身が韓櫃より出さして、分ちて苞にせられしとき、吾儕は初て見てけるに、他も咱も常に織る、布にはあらで唐緜布を、二布に裁も分たるなれば、那布も亦こゝらにて、買取らるゝ東西には侍らず。これも沙金と共倶に、京にて買はば整ひてん。那白布は裁分の、二百反で侍るから、這回貲ふ唐緜布の、本幅であるならば、一百反にて足りぬべし。この價をもいぬる比、こゝろ得たる人に尋ねしに、大約は一反二十匁あまりで、買るゝものぞといはれにき。慿ればこれ彼うち合して、百八九十兩の金なくては、整へがたき東西にしあるを、吾儕なりとて二包金の、貯祿はあらずかし。這才覺に胸塞りて、いかにせましと思ふ折から、今朝はからずも里長刀禰の、這裡の門邊を過られしを、遽しく呼入れて、猛に金の要用あり。女壻の出世の筋なれば、借出して給へかし。質には田園を遞與すべし。百金ばかり欲しく侍り、と密やか


朱之介


出像第卅三

に憑みしを、長刀禰の承引て、男子も及ばぬおん身のたましひ、表裏なきは、咱よくしれり。然まで火急の事ならば、貸まゐらせて間を合せん。なれども咱們が金にはあらず。山年貢を預りたる、積金で候へば、券月を違へず返し給ひね。田質の事は要なし、といと憑しくいはれしかば、はやくも胸はおちゐたり。しからば女壻を作ふて、翌おん宿所へまゐるべし。その折遮與し給ひね、となほ期を推してたのみしに、否壻刀禰は來ずともよし。おん身を目標に貸金なり。證文寫て俟べきに、印章をな忘れ給ひそ、と辭せわしく聒き示して、そが儘出ゆき給ひにき。恁れば金は整ふたり。この義をこゝろ得給ひね、と心の祕密うち明て、告るに歡ぶ朱之介は、感涙坐に進むを覺ず。恭しく額をつきて、過世いかなる契りや有けん、かくまで思はれ奉る、身の果報こそあやしけれ。如々來禪師に見參して、君命をだに達しなば、とく歸國して金をとゝのへ、遠からず返しまゐらすべし、といふを落葉は聞あへず、そは益もなき口誼なり。這回の金を返されんとて、取替て間を合する、浮たる事では侍らずかし。斧柄が必死を拯れたる、恩義の爲にまゐらする、金にしあれば返されずとも、そを恩がましく思はんや。そこらの事には掛念せで、只深信こそ肝要なれ、と諭し示しつ、掌鳴らして、斧柄々々と呼近づけて、昨夜話せし事により、吾儕は目今里長刀禰の、宿所へゆかん。葛籠なる、衣物出し給ひね、とい

ふに斧柄はこゝろ得て、取出しつゝもて來ぬる、手織小袖の染紬絹、太織は名のみ痩宍に、帶の端さへあまりある、眞と辛苦をやる瀨なき、表衣ばかりを脱更て、繕ひのなき白踏皮も、水入らずなる親子中。脱し舊衣疊む間に、鼻紙折て懐へ、これもと遞與す印章を、取て藏る袖頭巾、引提て、朱刀禰たのむぞや。斧柄留守を、といひつゝも、背門より出てゆきにけり。是より斧柄もいそしくなりて、洛上りの良人の爲に、笠の紐さへ、脚絆さへ、はや縫果て揃措く、用意も色かえぬ、松の操や松葉茶の、夏織絹の長財布、この餘は杖よ草鞋よ、と婢妾們すら共侶に、東西とゝのふる程しもあれ、落葉はやくかへり來て、朱刀禰斧柄も歡び給へ。那一種は手に入りにき。委細は後に、辛度や、といふをさこそと朱之介、斧柄も倶に慰めて、汲て薦る一ト柄杓、立茶の泡のあはれげに、恩義の爲に使るゝ、親さへ子さへ暇なき、心盡しを心ある、人に見せばや津の國に、ありといふなる武庫の山、壻に榮なき空華の、散りぞしぬべき入相の、山寺の鐘音づれて、燈點し比になりにけり。然程にその夜さり、落葉は女婢們を遠ざけて、朱之介と斧柄をも、側に招き侍らして、けふ借得たる金百兩と、貯祿の金百兩を、とり出しうち合して、朱之介に遞與していふやう、嚮にもいひしことながら、這二百金は鷹捉山にて、斧柄が必死を救れたる、報恩の爲に進らする。是をもて洛に上りて、足らざる沙金と百反の、唐縧

布を買取て、如々來さまへおん使を、めでたく勤め給へかし。吾儕が去歳より預り措たる、沙金は二十一包あり。十兩包と覺れば、不足は二十九包なるべし。これに布の價を加えても、十五六金は殘るべし。京師までの路費には、さばかりは沒るまじけれども、沙金にも又唐布にも、時價の高下あるべきに、多しとてもてゆかずは、不便の事のあらんとき、不足を補ふ貯財の、これなくて後悔せん。皆もてゆくこそよかゝめれ。こはいふまでにあらねども、京師は色の世界に侍れば、目に觸るゝものみな愛たく、耳に聽もの美しかるべし。そを初より警めて、宿遊女の圈套に、入らじと念じ給へかし。憾いへばなき人の、事さへこゝに引出て、窘るに似たれども、おん身の爺々公木偶介ぬしも、都がよひの折々に、意の駒の狂ひ出て、家さへ身をも亡し給ひき。這回も人にそゝのかされて、倘その金を喪ひ給はば、還らんと欲するとも、遂にこの家に入ること得ならじ。吾儕も亦これまでの緣しと思ふて離別せん。心を定めて聞給へ。おん身も豫て知れるがごとく、斧柄は既に有身て、帶する程になりにたり。然とてもその心から、惑ふて金を喪ひ給はば、斧柄はおん身の妻ならず。生れんその子も後々まで、おん身の子とな思ひ給ひそ。譬ば那杜鵑が、鶯の巢へ產棄し、その子ありとも子で子にあらぬ、賴とならば悔しからまし。よしや妻をば棄るとも、慾の爲に子を棄るを、賢人といふべき歟。父只愚人とい

ふべき歟。みづから思ひ給へかし。吾儕もそこらの數には洩れで、乙柚の小夏に生別れせし、心の歎きは今もかも、増りこそすれ忘れんや。そは棄たるにはあらずして、棄させられし母親の、親甲斐もなきをいかゞはせん。わかき人の才あるは、その才の働く隨に、良からぬ行ひするもの多かり。和漢の經書、果敢なき草紙物語にも、忠臣孝子のうへを述て、義理分明なる條を看れば、誰も有理と心に信て、その身の及びがたかるを、悔しく思ふは本然の、善心に侍れども、よしと思ひしのみにして、行ふことの得ならぬは、私慾の爲に天然の、善心を滅却して、一ト日も靜ならねばなり、と或心學の先生のいはれしを、少かりしとき聽しことあり。寔にしかぞ侍るべき。老たる親の意見を聞ても、理に暗ければ腹を立、道理と思ふも得用ひぬは、そを聽ことの等閑にて、行ふことの難かるなり。只善事を好とおもひて、行はずはそのよき事を、よしと思ふも無益にこそ。と兄にいはれしことも侍りき。寔にしかぞ侍るべき。醋も辛も嘗味ひて、よろづに脱落なきおん身には、冷笑はるべき談義に侍れど、洛上りの嚥ぞ、と思ふて腹をな立給ひそ。多辯は傍痛きものにて、わきて女子は長舌の、譏を脫れがたけれども、いはで叵已ぬ後の事、悔あらせじと思へばなり。拙工でも側觀八目の、助言を有理と信容て、いふかひあらば後々に、又いふべきこともなし。倘舊病の復發りて、みづからその身を愆給は

ば、又いはんと欲するとも、これ限りにぞあらんずらん。好ても、いはず、歹ても、ふたゝびいはぬ吾儕が意見の、的中せんも、當らずならんも、おん身の心ひとつにあり。斧柄も慿こゝろ得て、等閑にな聞給ひそ、と言語雄々しく説諭したる、明辯鑿譚に朱之介は、膽を潰しつ、理りながら、腹は立ども返すべき、よしのなければ件の金を、左右の手に受戴きて、今にはじめぬ慈愛教訓、いかでか空に承るべき。御心安く思召れよ。翌は京師へ赴きて、沙金と布を買とるべし。旅路の准備も仕りぬ。この義も御こゝろ安かれかし、といふに落葉は頷きて、郷に暦を見たりしに、翌は社日でよろずよし、と下段にあれば吉日なり。さばれ許多の金を齎して、ひとり遣らんは心もとなし。といふて四下の人を傭ふて、倶してゆかんも倒に、心づかひにあらんずらん。大和山城は鄰國にて、この上市より浪速津まで、十四五里ありとか聞にき。浪速へ出て京へゆくとも、急がば二宿次ならんのみ。那地に到りて布を買取り、沙金の兌し給はば、重驛馬にうち駄して、とく還り給へかし、といふに朱之介は異議もなく、仰こゝろ得候ひぬ。東西速に整ひ難て、京に且く逗留すとも、六七日には過べからず。程なく歸鄕つかまつらん。今宵ははやく睡らせ給へ、といへば斧柄も共侶に、御辛苦も皆報恩の、爲とし思召れぬる。這身ありての故なるに、孝行らしく仕へはせで、かさね〴〵の御丹精、天おそろしく侍るかし、

といふを落葉は聞あへず、噫益もなき。親となり、子となるもみな過世の定業、その子の爲に親たるものが、骨を折ずは誰か折るべき。とく退きて就枕給はずや、といふに夫婦は頷づきて、別を告て呉竹の、ふし處へ入るも短夜や、夢もむすばぬ押縁索の、藪鶯に起さるゝ、黎明にはやなりにけり。然程に朱之介は、斧柄にしば〳〵呼覺され、起て早飯をたうべ果て、行装を整るに、商客の模樣に打扮て、只一刀を帶たるのみ。脚絆甲被に身を固め、那二百金を懷にして、落葉斧柄に辭し別れ、管笠ふかくうち戴きて、都路投て起行けり。迭に別を惜みぬる、逆旅千里の首途ならねば、落葉斧柄はいふべきことを、いひも盡さで出し遣る。離合時あり、前知しがたし。こを生涯の長別離とは、豫てぞ知るやしら梅の、盛過ぎたる竹笆に、北風寒き旦開き、門に置霜踏占て、影見ゆるまで目送りけり。却說末朱之介は、この日頻りに路を急ぎて、日暮て浪速津に宿を投め、次の日の黄昏比に、京の三條なる、客店に著にけり。京師は素より憚りあり。管領家高國入道常桓の方ざま人に、知らるゝことのあらんかとて、影護く思ひしに、朱之介が故主なりける、香西元盛が滅亡せしより、はや五六年を歷て、高國入道の武威衰へ、しば〳〵三好に攻惱されて、伊勢路へ沒落し給ひぬ、と世の風聲に聞えしかば、この明年享祿四年に至りて高國入道亡びたり心安しとおもふのみ。彼西殿にはさまでに怕れず。かくてその明の朝より、洛中を偏歷

りて、沙金と唐布を買んとするに、東西として悉く、輻湊せざることはなかりし、花洛なれども應仁以降、年々の兵火に荒れて、良賈も顚轉したれば、錦繡店にも唐緜布はなく、兌坊にも三百兩の、沙金を藏弆るはなかりけり。朱之介はこの爲體に、且呆れ且憂て、兩三日は洛外まで、隈もなく涉獵しかども竟に亦あることなければ、困じ果つゝ人に問ふに、ある人の誨るやう、和泉の左界なる某の町に、船積荷三太といふ豪家あり。そが家號を、浮寶屋と喚做したり。渠は大内家に由緒あるものにて、周防なる山口にも枝店あり。こゝをもて來舶の唐物多く引請て、買賣せずといふことなし。沙金も亦那里にあり。兌尤自由なり。左界へゆきて徵め給へ、と叮寧に示せしかば、朱之介は歡びて、次の日浪速まで引かへし、こゝにて又人に問ふに、京にて聞しに違はねば、又その次の日左界に到りて、那浮寶屋の市鄽を見るに、店舖は五間ばかりなるを、過半は細骨の槅子にして、小廝五六名居たりけり。登時朱之介は、件の小廝們にうち對ひて、些まうすべきことこそ候へ。俺們は大和なる上市の坊賈にて、朱之介と喚るゝものなり。唐木綿一百反と、沙金三百兩ばかり買まく思ひて、今番京に赴きしに、那里は兵火の爲に荒て、思ひしにも似ず然る東西の、ひとつとして整ざりき。よりてある人の誨に任して、又この津まで來つるなり。且唐緜布を見せ給へ、といふに小廝們はこゝろ得て、しから

ば這里へ找せ給へ、と應て上座に推登して、寒暖を述長途を勞ひ、茶を看めなどする程に、この店の主管とおぼしくて、年齢五十ばかりなるが、奥のかたより出て來つ。朱之介に對面して、口誼を演て、却いふやう、徴め給ふ沙金の兌は、目今にてもいと易かり。但唐縣布は舶間にあなれば、その數速には揃ひがたかり。勿論主人はいぬる比、周防なる枝店へ赴きたり。是則國守へ年始のおん禮の爲、兼ては貿易の爲に候へば、その船遠からず入津せん。さばれ波上の事なれば、遲速はこゝに測るべからず。この餘もなほ所要ありて、逗留を厭ひ給はずは、他に宿を討め給ふにも及ぶべからず。大和は平城、丹波市、五條にも、得意の販子多くあり。この地へ攤販に來給ふ每に、當家に逗留し給ふなり。然りとも歸鄕を急ぎ給はば、且御在所へかへらせ給ひて、三四月の比來給へかし、といふに朱之介は沈吟じて、そは亦折の歹かりき。京にゆきなば東西整ん、と思ひしにより妻子には、とく還らんといふて出しを、よしも知らさで長逗留せば、妻子のものを思ふべく、路費も意外に多く沒るべし。なれどもたま〱來し甲斐に、浦の名所を見まく欲しかり。貴意に任して兩三日、御厄會になるべきのみ。宜く賴み奉る、といふに主管はいと易し、と應て一個の小厮を召て、綷恁々と分付れば、小厮ははやくこゝろ得て、誘とばかりに朱之介を、いそがし立てそが儘に、あるじの居宅へ倡導ひけり。登時朱之

介は、件の居宅に來て見るに、棟瓦いかめしく、坐席幾間もありとおぼしく、工を盡したる豪家の家作は、壁の塗ざま、戸走りに、斜なきにも知られたり。有恁而客房に赴けば、主翁の二男城藏と喚るゝ壯佼、奥より出て對面し、迭に名を告り、恙なきを祝しけり。當下朱之介は、來意を報て、且はからざる寄宿の歡びを演る程に、年十三四なる小斯が、茶を看めなどす。且して城藏がいふやう、討め給ふ唐緜布の、折から艙間にて、早の所要に、立がたきをいかにとはせん、さばれ本店の貿易船の、遠からず入津すべければ、且く逗留し給へかし。勿論得意の商客達は、質素を旨とし給ふにより、宿賃も亦廉なり。故に馳走はつかまつらず。且風爐に浴給へ。爾後飯をまゐらすべし。主翁は他鄕の留守なるをもて、某は尤多務なり。應對疎略失敬あらん。この義を允し給へかし、と辭せわしく口誼を演て、辭して奥へぞ退りける。とかくする程に、又那小斯が案内をして、朱之介に浴湯させ、舊の坐席にかへしをらして、夕膳を羞めけり。この時春の日やうやく暮て、又中酒を薦めらる。塗折敷に取合したる、撮殽は三種に過ず。玆姑の皮剝圓製と、章魚の足の櫻烹をのみ、些し小高く積れたるは、大和に名たたる妹山と、脊山にも似たるべく、金絲鰯の光やかなるは、中を流るゝ吉野川歟と、思へども敵手なければ、酔までに喫べくもあらず。よしや世の中とひとりごちて、三度傾けて茶をこへば、小

断は立にき。浩處に、年倘少き一個の男子、うち咳きつゝ這里へ來て、客人御酒を召れしか。いと徒然に見え給ふに、お問をや仕らん、といふに朱之介は微笑て、誰さま歟しらねども、そは何よりの御馳走なり。いと憚に候へども、獻しまゐらせん。過したまへ、と應て勸る盃を、件の男子は受て戴く、程しもあらせず朱之介は、はやく銚子をとり揚て、酌んとするを、物體なや、と遽しく推禁めて、噫うち置し給へかし。小生手酌に仕らん、と辭ふを朱之介はなを免さず。獨酌にては獻し甲斐もなし。俺們に任し給へとて、推禁る手を拂退けて、膝を我めつなみ〱と、酌とき迭に燈光にて、顔つく〲とうち目戍りたる、これ彼齊一聲をかけて、和君は大哥にあらざるや。然いふ和殿は日高氏。然なり、景市で候ぞや。こは〱思ひがけもなき、再會にこそありけれと、倶に手を拍膝うち鳴らす、歡び限りなかりけり。當下景市は、受たる盃を一吸に、傾盡して返していふやう、相別れしより僂れば、はや九稔になりにけり。小弟は只一向に、大哥は周防の山口に、在するとのみ思ひしかば、這首に來つる初より、出船入船の便りに就て、人に言告て在處を索ね、又這浮寶屋の枝店の、鸛峯の城下にあれば、其處へも賴遣して、安否をしらまく思ひしかども、叔父公の名を忘れしかば、意に便宜を得ずて過ぎにき。などて周防には落も著かで、商旅になり給ひたる。母御は恙ましますや、と

問へば朱之介は聲を微めて、さればとよその事なれ。俺身今は大和の上市に在り。なれども那里もなほ旅なり。曩に母親共侶に、福富翁に辭し別れて、周防の山口へとて起行たる、是より此來無量無邊の、苦樂は一朝に盡しがたかり。久風流なり且喫べし、といひつゝ盃をとり揚て、酌して二三度傾けて、酒息吹て獻す折から、給侍の小厮が汲とりし、煎茶の茶碗を塗盆に、うち載てもて來ぬるを、景市急に見かへりて、丁市よ、這阿客は、俺素よりの知己なれば、姑く盃の敵手をせん。和郎は且這飯の、折敷をのみ退らして、銚子を更てもて來て措ね。殽もこれはあまりに無下なり。何ぞあるべし。庖湢へいて、景市が慇々と、いふたりと告て多くもて來よ。とく〳〵せずや、と急がせば、小厮ははやくこゝろ得て、夜食の折敷と銚子とを、左右にとりて退きつ。更し銚子に兩三種の、殽をとり添てもて來にければ、景市これを受とりて、和郎はこゝにをらずもよし。銚子竭なば又召ぶべし。ゆきね〳〵、と追立したる、蹟は竹馬の友垣や、結鱵の甲斐ありて、料らずこゝに寄胡桃、炙鶏蛋のきみとわれ、毟殽は片身でも、うらめづらしき飲同士の、唔談に時を移しけり。然程に朱之介は、はじめ母親に俱せられて、周防に赴きし比の艱難、叔父には遭ずなりし事、母親阿夏は舊識人に、よすが求めて陸奥へ、携られてゆきし事、その身は京師に留りて、兼顯卿に仕へたる、その事の始より、香西元盛に

扈從せし時、元盛は滅亡して、その身は辛く危窮を脱れ、はからずも叔父興房に、環會ひ資を得て、武藏にゆきて扇谷朝興ぬしに仕へつゝ、恁々の義によりて、迺主君の使として、去々年の秋大和なる、六田川の邊に來つ、如々來禪師に君命を、達せんとせしに障ありて、逗留久しくなりし事、那造佛の事施物の事、鷹捉山に獵せしとき、山猍を射たる事、斧柄が事落葉が事、安保箭五郎夫婦の事、件の禪師に主君より、寄進の沙金唐縣布を、喪ひし事の顛末、岳母落葉の資によりて、沙金と唐布を買んとて、姿を窶し金を齎し、京師を投て來にけれど、東西支ねば引かへして、這津へ來つる終りまで、人に知さぬ祕事も、心しられし景市に、隱すべくもあらざれば、頭を合し膝をまじへて、閑談數刻に及びたる。言果て朱之介は、又景市にうち對ひて、賢弟は亦何等の故に、近江にはをらずして、這豪家に來て仕へたる。福富の翁はまだ死なずや。黃金は大きくなりつらん。はや招壻をせられし歟。爪作はいかにぞや、と問れて景市四下を見かへり、然なり。大刀自屯倉は世を逝り、翁も亦身まかりたり。彼家大く衰へ果て、姨捨山の姨ならねども、とり遺されしば阿鍵の刀自のみ、福富村にひとりをり。大夫次翁の事に就ては、古今未曾有の奇談あるを、且聽給へ、といひかけて、亦復後邊を見かへりて、隔亮を引よせて聶くやう、大哥がをらずなりしより、五稔といふ秋の比、屯倉の大刀自は身まかり

にき。その次の年大夫次翁は、腰痛を湯治せんとて、從者二名ばかりを將て、信濃の筑摩なる溫泉に赴きて、且く逗留する程に、その相宿に一個の金剛禪をり。年歲は三十五六なるべし。一個の孌妾の、二十歲可にていと美しきと、兩個の女童を從へて、倶に日每に浴湯をすなるが、そのをる所は大夫次翁と、重紙門一隔をもて堺としたれば、只いつとなくものいひかけられ、ものいひかけて相譚ひつゝ、他が爲體を熟視るに、携たりける盃盤器物の、總て金銀ならぬはなし。況那孌妾の艶妖なる、いにしへの衣通姫、小野小町は音にのみ聞たれ、そは甚麼なりけん見るによしなし。今這美人の面影を、繪にかくとも筆に及びがたく、文に演るとも寫し易からじ。世に萬々金を積藏て、優なるもののなきにしもあらねど、誰か這歡樂に及ぶべき。いかなる過世の果報ありて、今世に恁る自由を得たる。聞まほしけれ、と思ひつゝ、有一日又江湖上の、もの譚ひせる語次に、大夫次のいふやう、最卒爾には候へども、尊師は作麼何州の先達にて、恁まで富貴を極め給ひける。携給ひし器物さへ、皆黃白ならぬはなし。勦しからずは尊號を、知まく欲う候なれ、といふに那人微笑て、貧道は、京師に程遠からぬ、北白川なる山里にをり。有驗觀主、舌兪道人と喚るゝものなり。先祖に渡唐のものありて、煅金煉銀の一法を傳へたり。よりて黃白に富るのみ、といふを大夫次訝りて、古よりして吉備大臣、安倍仲

麿弘法大師、この他も渡唐の聞えある、賢人名僧多かれども、歸朝の後に子々孫々まで、金銀に富たりといふことをしも聞しらず。抑煆金煉銀とは、いかなる法に候やらん。願ふは教へ給へかし、と又他事もなく請問ふを、舌翕は聽かず、頭を掉て、この義は一子相傳なり。他人の爲に口外しがたし。問せ給ふは無益にこそ、といふを大夫次推返して、そはその該であるべけれども、老拙は田野の愚人、只老實をもて稱せらる。秘法を教諭し給ふとも、人に傳るものにあらず。その交易には何まれ彼まれ、所望の東西を進らせん。枉て示させ給ひね、と頻りに問ふて已ざりければ、舌翕道入叉きたる、手を釋きつゝ頷きて、旅宿ながらにうちとけられて、友垣結びし翁の懇望、深信堅固の人とし思へば、今さらに默止がたかり。勿論無類の祕方にあなれば、必外にな洩らし給ひそ。扨も件の一方は、無上九還丹と名づけたり。是則唐山なる、道士丹客の傳法にて、咱先祖渡唐の日、傳授せられし神訣なり。且その法に遵て、十兩の金を煉取らんと欲するときは、一兩の眞金をもて、これを母金とするなりけり。かくて又九兩の黄銅と汞とを相加へ、別に又藥種を加へて、稍久しく煉るときは、その黄銅と汞と、化して眞金とならざることなし。銀を煉るも、その法これと相同じ。疑しくは咱法術を、眼前に見せまゐらせん。いで〳〵といひつゝも、軈て鑄鍋をとり出して、粟粒ばかりの金を入れ、更に又

黄銅と、汞藥種を相加へて、法を行ひ火に被て、煉ること凡半晌ばかり、火を退けて蓋をとれば、果して黄銅も汞も、化して金にぞなりにける。誰か知るべき此はこれ、縮金の法にして、一兩の黄金を、縮めて粟粒ばかりにせしに、黄銅汞藥種を加へて、稍久しく煉るときは、その黄銅と汞は、盡く消失て、那縮金のみ甦て、いと大きくなれるなり。便是騙賊の術にて、その黄金の殖るにあらず、形の大きくなるのみなりしを、愚俗多くは瞞されて、實に金の殖たるなり、と思はざるものあること稀なり。今大夫次もその類にて、恁る奇特を見てしより、且呆れ且感じて只管に愛羨みて、含笑ながら舌兪に對ひて、祕法寔に至妙なれども、恁きは瑣細の金なり。思ひの隨に數多く、煉取ることのなるべきや、と問へば道人頷きて、そは母金の多寡によりて、いくばくなりとも自由なり、といふに大夫次歡びて、老拙優なるにあらねど、家には些ばかりの貯祿あり。ある限りをもて母金とすべし。願ふはこゝより駕を枉て、俺宿所にて九還丹の、修法を行ひ給はらば、是莫大の高恩ならん。尊師は黄白に富給へども、旅中なれば別に東西なし。叱留あらば幸ひならん、といひつゝ遽しく懷中より、金十兩を取出して、扇に戴て贈りしを、舌兪道人辭ひて受ず。貧道實に這東西多かり。是は盤纏にし給へかし、といふをば聞かず勸解るが如く、納め給へ、とくりかへしつゝ、頻りに薦めて果しなければ、舌

愈はやうやく金を受て、扇を疊て返していふやう、翁の請待黙止しがたかり。さばれ側室と女童們を、且白川へ將てかへりて、別に貴宅へ赴くべし。この儘にては便なし、といふを大夫次は聞あへず、宣ふよしは理りなれども、老人の性急にて、異日の再會は不樂しかるべし。寔に田舍の茅屋なれども、屋敷ばかりは手廣にて、離坐席も候へば、お宿を仕るに便宜なり。脚小達を伴ふて、こゝより光臨し給へかし。三七の湯治にて、老拙が痛所は愈たり。尊師の隨意おん伴しつべし。この義を願ひ奉る、と辭を盡し意を演て、直倡ひに誘引ければ、舌愈道人沈吟じて、貧道宿所に母親あり。俟わびしく思はれんが、懇望あまりに切なれば、枉て同道致すべし、といふに大夫次は歡びて、しからば翌は這地を去て、齊一歸路に赴くべし、とはや約束をする程に、舌愈は孌妾を引合して、渠は小槌と呼做すものなり。且く貴宅に逗留中、御厄會になるべからん。那女童們は、一人は打出、一人は丁兒と喚做したり。おん目を給はり候へ、といふに大夫次は惚々と、小槌を見つゝ叮寧に、向後を契りて遽しく、翌の准備をすべけれとて、其身の坐席へ退きけり。有恁而その詰明、大夫次は件の小槌と、女童をも行轎にうち乘して、この餘の物は馬に駄しつゝ舌愈道人と相倶に、從者二名を隨へて、宿を出て近江なる、福富村を投て急ぎけり。畢竟大夫次が、舌愈を宿所に伴ふて、又甚麼なる說話かある。そは次

の卷に、解分るを聽ねかし。

第三輯　巻之四

第二十七回

仙術を示して舌兪哄騙す
丹鼎を戍りて福富指を染

復説福富大夫次は、金剛禪、舌兪道人と、その側室小槌等を伴ふて、連りに路次をいそぎつゝ、宿所近くなりし日に、一個の伴當を走らして、件の縡の趣を、はやく阿鍵に告たりければ、阿鍵は奴婢們に分付て、形のごとくに准備をしつゝ、今か今かと俟程に、その日晡時の比及に、大夫次は舌兪を倶して、宿所にかへり著きにけり。今朝より迎の爲にとて、途まで出たる里人と、奴婢們の奔走混雜して、いふべうもあらざりしを、大夫次それには目も被けず、みづから舌兪を倡ひ立て、小槌は篼輿に乘したる儘に、庭口より舁容さして、打出丁兒も共侶にとて、離舍へ案内をしたる、主人態等閑ならず。賓客儲は豫より、阿鍵が心を用ひたる、給使の小厮養娘が、茶を看め又果子を薦め、却その後に風爐に浴れ、夕膳酒肉これ彼と、管待丁寧なりけれども、客も主人もしかすがに、長途の疲勞なきにあらねば、舌兪は屢これを辭ひて、はやく枕

に就にけり。恁而その夜大夫次は、阿鍵に舌兪が縁由を、箇様々々と聶示して、那人は清淨を、旨とし給ふ驗者にをはせば、婦女子は憚りあるべき事歟。翌よりして逗留中、日毎の應對は俺做べし。媳婦は萬事に機を屬て、管待をな虧給ひそ。那人はこれ俺家の、活大黑でをはするかし、といふに阿鍵はこゝろ得て、舌兪にも小槌們にも、一番も對面せず。給使も天閹なき、十二三なる養娘と、小厮をのみ侍らして、いよ〳〵疎畧なかりけり。然程に大夫次は、次の朝より間なく時なく、離舍に赴きて、をさ〳〵舌兪を訪慰めたる、語次に煉金の、修法を請ふて已ざりしを、舌兪は然こそ、と頷きて、その義は催促せられずとも、貧道既に用意あり。且八卦爐を造るべし。因て方位を考へしに、這里より五六十歩にして、土庫あるこそ幸ひなれ。乾金坤土相對して、土生金の義に稱ふ。是究竟の處なり。且這里よりも面屋よりも、天井をのみ隔たる、廊下續きで遠からず、日毎の往還に便りよければ、迺那里を用ふべし。快々准備をし給へ、といはれて大夫次怡悅に堪ず、猛可に泥匠を召よせて、塗篭の事云々、と告示しこゝろ得さして、僮僕們には土を採らせ、庫なる東西は遺もなく、出して他所に移さしつ、總て舌兪の指揮に任して、庫内に爐を造るに、形狀を八角にして各寸尺あり。八角は更八卦を表す。皆その法に從ふて、終日にして作り果けり。軈て火をもて乾しければ、はや用るに足れりとい

ふ。薬種は舌兪が携來つる、貯藏のあればとて、只汞を求るのみ。その餘の東西は買ふにしも及ばず。舌兪は恁速に、爐を造られしを勞ふて、翌は黄道吉日なり。今宵母金を丹鼎に斂て、翌より法を行ふべし、といふに大夫次こゝろ得て、所藏の圓金千兩を、竊に手づから取出して、そが儘舌兪に遞與すにぞ、舌兪はなほも指揮して、黄銅をもて造りたる、火函釀鍋碗碟まで、あるべき限り取出さして、件の金と共倶に、汞藥種を相加え、最大きなる丹鼎に斂めて、泥もて厚く封じつゝ、火口二方を開たりけり。綷果て舌兪がいふやう、母金の多寡は千兩なれば、修法によりて十倍の、利を得られんこと疑ひなし。なれども多金は一朝に煉取らるべきものにあらず。八八六十四个日にして、初て成就すべきのみ。その間老實なる、小厮二名ばかり隷置て、晝は三番夜は二度、由斷なく炭を繼して、須臾も火を絶すべからず。その炭を繼ぐ折には、貧道宜く指揮せん。件の小厮二名の外に、爐邊に近づくことを許さず。倘不淨のもの立入るときは、丹鼎の壞るゝのみならず、母金も共に銷散して、臍を噬むの後悔あらん。この義をよく〳〵誡むべし。貧道は翌よりして、一晝夜修法あり。炭も手づから繼ぐべければ、第二日の朝よりして、件の小厮を隷給へ。是より後には所作もなし。翁も折々こゝろをつけて、等閑になし給ひそ、と丁寧に說示せば、大夫次深く感服して、這夜は且土庫を、鎖して倶に退

きけり。恁而その詰旦、舌兪はひとり爐邊に到りて、火を發し法を修して、三たびの儲に向ふの外は、次の日まで出て來ず。登時大夫次が思ふやう、八卦爐の炭繼には、爪作と景市などが、相應しかるべき役なれども、他們は心浮々しくて、老實ならぬものなるに、衍あらばいかゞはせん。仁八三五郎こそよかめれ、と豫て心に擇みつゝ、年十六と十五なる、兩個の小厮に分付て、第二日の朝より、件の爐邊に隷置て、大夫次は舌兪と共に、折々其頭を看輪るのみ。その樂しきこといふべうもあらず。竊に首尾を思惟るに、這九還丹一竈にて、一萬金の所得あり。そを母金にして又煉らば、そのたびは十萬金、凡三番折かへさば、百萬金の富久者にならん。恁手短なる挊了はなし。春蒔で秋刈斂め、冬蒔て夏熟る、田畑は風雨の患ひあり。況綿を採りて、織出す布などは、綿に豐作稀にして、工手間かゝればその利薄かり。又牧の駒などは、有身てより十三个月の、光陰を過してやうやくに、一疋ならでは產も出さず。そも良馬は得がたきに、本錢寡く利の多かる、這仙術の資助に遇ひしは、冥加に餘る天の錫。黃金が一期、いへばさらなり、子ゝ孫々まで相傳へて、その富諸侯に敵すべし。叶愛たや、と肚裏に、目算したる大慾は、無慾に近き守錢翁の、こゝろ祝ひに他事もなく、日毎に舌兪を管待すに、東西の費を些も厭はず。その身も共に酒うち喫て、世の雜談に日を消す。事情を得知らぬ奴婢們は、

疑訝らざるもなく、那爐は不老不死とかいふ、仙丹などを煉るにやあらん。不足なき身もなほ欲がるは、壽命にこそ、とうち笑ひて、心もとなく思ひけり。左右する程に、はや八九日を經たりける。有一日又大夫次は、離舍に赴きて、舌兪小槌に盃を、薦めて只顧欵待す折から、舌兪が北白川なる宿所より、一個の耑人の索來て、却舌兪に報るやう、いぬる比より母君の、風の心地とて臥し給ひしより、やうやくに衰へて、最も危く見え給へば、はやく還らせ給へかし。是等のよしお告まうさんとて、筑摩の湯屋へ赴きしに、那里にはをはしまさず。這里の老爺に誘引れて、倶に立出給ひしよしを、那客店にて聞しかば、迹を慕ふてまゐりにき、といふに舌兪はうち驚きて、そは安からぬ事にこそあれ。俺が母刀自は健にて、持病とてもなかりしかば、旅宿を累ねし由斷は大敵、齢六十にあまれる親の、邪熱に疲勞を增したまはば、然こそ危窮にあるべけれ。什麽いかにせん、と當惑の、眉根を顰め手を叉きて、歎息の外なかりしを、僅に思ひかへしけん、手を解き、大夫次にうち對ひて、日今聞せ給ふが如し。母の病著重かるよしを、傳聞ては一日も千秋、翅なき身を恨るのみ。只速に立かへりて、看とるべうは思へども、愁に賤妾們を、携たれば路の程、愚意に任せず遲滯に及ん。當惑この義に候、といふを大夫次慰めて、不慮の事にて御辛勞、憂を分つよしもなし。遮莫母君はこの年來、無病に御座し



稲富の宿に
命北白河の
音つれを聞く
大夫次
出像第三十五


小つち

たらば、只霜露の輕症にて、程なく瘥り給はなん。然とも急に還らんと思ひ給はゞ、脚小遂を、この儘遺し置給へ。然すれば急ぎ給ふとも、路次の煩雜ひあるべからず。母君本復し給ひて、尊師光臨あるまでは、老拙預り奉らん。この義は甚麼、と他事もなく、いと正首に相譚へば、活兪は連りに感嘆して、そは辱きおん計ひ、貧道方寸既に紊れて、今さら深念に及がたかり。左にも右にも交遊の、貴意に甘へて賤妾們は、なほ且く這許の、御厄會になるべけれ。九還丹の修法には、六十餘日の限りあり。貧道宿所へ還るの後、母の病著瘥らで、萬一の事ありとても、けふよりして五十日の、間には再來つべし。炭繼の事不淨の儆め、おん身們に倣代りて、折々こゝろを屬給へ。炭の加減は小槌も知れり。こゝろ得がたき事あらば、他に問ふても辯ずべし。嚮にも既にいひつるごとく、不淨の警め疎にして、八卦爐を汚穢す愆あらば、法術遂に成就せで、本を喪ふ後悔あらん。この義をな忘れ給ひそ、と辭せわしく說諭して、小槌を見かへり、召近づけて、阿嬬も聞たる趣なれば、又初よりいふにしも及ばず。俺が立かへり來つる日まで、那爐の事に心を用ひて、虛々と日を送るべからず。月の障りは十日の間、籠居て不淨を避よ。等閑にして愆あらば、俺決して阿嬬を許さず。佗とその罪を糾すべし。打出丁兒も這意を得て、側杖受な、と暴やかに、示す言葉の露の間も、去向をいそぐ草枕、行裝も疎

忽疎忽に、告別しつ要用の、行簏を耑人に駝して、風に一葉の散る如く、飄然として出てゆくを、禁め難たる大夫次は、先に立つゝ庭門まで、小槌も兩個の了鬟と、共に別ををし鳧の、居越の浮宿不樂しげに、來ん日を契る妹と伕の、緣頰に出て目送りけり。却說福富大夫次は、舌兪がをらずなりしより、內外の批評の影護さに、離舍に交加して、酒燕などはせざれども、三たびの饍は珍味を擇て、なほ聊も疎略にせず。或は乾果子煎茶の類、名酒名物これ彼となく、京師の便りに誂へて、はる〴〵と買とらせしを、數多く貯措て、日毎に手づから小槌に薦めて、正首に管待したる。有一日又小槌にいふやう、尊師のかへり來ますまで、さぞ俟不樂しくをはすらめ。まだおん目には被らねど、鬼妻にひとしき媳婦もあり、孫女兒も候なり。都の手ぶりを知るよしもなき、田舍兒で候へば、這徒然を慰る、辭敵に得ならずとも、切て他們を陪堂にも、と思ふものから豫より、尊師に緊しく敎諭せられて、炭繼の小厮ならぬものの、爐邊はさらなり這頭へも、立入ることを允されねば、左にも右にもせん方なし。心づきなき事あらば、仰られよ、と懇に、いはれて小槌は笑しげに、寔に不思議のおん緣しにて、物の役にも立ぬ身の、とり遺されて慿までに、御厄會になりしこそ、心苦しき宿りに侍れ。打出丁兒が側に侍れば、徒然なりとは思はねども、離舍のことにしあれば、夜分は殊さら寂しくて、日

睡難る暁毎に、結びも果ぬ夢ごころ、有繫に物のおもはるゝを、猜し給へ、といひかけて、見る目に流す秋の波に、春の心のはや動く、老樹も花の空名草、散まくをしき大夫次は、辱さと恥かはしさに、胷のみ速りにうち騒れしを、やうやくに推鎮めて、そはその該の事なりかし。爾らんには今宵より、咱們爐邊に寢まるべし。這里より那里へ遠くもあらぬに、主人が宿直に立たらば、心つよく思はれて、優に睡り給はんず。這義に任し給ひね、といふを小槌は推禁めて、いかでかは然ることをせん。その義は允させ給ひてよ、と辭ふを聽かず眞實立て、こゝろ得貌に退りたる、大夫次は且くして、炭繼の小厮仁八三五郎に、筑紫琴と三絃を、もたして離舍に遣して、小槌に遣りていはするやう、おん徒然にあるべければ、折々これを搔將して、みづから慰め給へかし。黄金に讀せし策子もあれど、多くは女子の教訓狀にて、肩の張るべき東西なれば、且これのみにこそ、といふ心屬れし口狀を、小槌は聞つゝ琴三絃を、打出丁兒に受とらして、宜くまうし給ひてよ、と答て小厮を返しけり。恁而仁八三五郎は、小槌の返辭を箇樣々々と、大夫次に報しかば、大夫次然こそと頷きて、はや退かんとしたりける、兩個の小厮を呼とどめ、やをれ俟ねいふ事あり。若們はいぬる比より、炭繼の役に宛られて、暇あるに似たれども、夜每に一二度起さるゝと、走行の自由ならねば、倒に窮屈ならん。道人附添居られなば、

別に仔細もなからんを、若們も知るごとく、那人且く這首に在らねば、爐邊の進退心配多かり。倘毫ばかりも愆あらば、年歳甲斐もなき俺が面を、道人に虧くのみならで、人の得しらぬ失脚あらん。恁れば俺は今宵より、土庫の内に起臥して、炭も手づから繼ぐべきなり。晝といふとも若們に、うち任せんは由斷に似たり。大抵はわれ心を屬て、用事あらば召ぶべきに、若們は且退きて、母屋擔きせよかし、といはれて歡ぶ兩個の小厮は、一議に及ばず應をしつゝ、そは辱きおん計ひ、こゝろ得て候なり。日毎に炭を繼ぐ折は、必召せ給へかし。時刻にならば身を淨うして、おん指揮をこそ受べけれ。吁愛たや、と自祝して、狙公の檐に繫れし、狙猴の山に歸るが如く、うち連立て母屋なる、僮僕隔室にぞ罷りける。爾後又大夫次は、件の縡の趣を、阿鍵にも說示して、是より夜毎に只ひとり、那土庫にうち臥して、爐の炭さへに折々に、手づから繼ぐは豫より、こゝろに計校あればなり。然程に、小槌は大夫次が遺りたる、筑紫琴も三絃も、素より愛る東西にしあれば、做す事もなき手游みに、間なく時なく攪挊せども、晝は憚りなきにあらねば、密奏にて些も歌はず。はや日は暮れつ甲夜過てより、殊さら調を高うして、聲最妙に歌ふを聞けば、京師で流行る艶曲なり。母屋へは程遠ければ、洩て聽とは聞えねども、大夫次が臥簟へは、側にありて奏るごとく、枕に暢ふ妙音佳曲に、心浮れて宿も寢られ

ず。拙技歟高手歟知るよしなきも、愛る耳には黄金が師なりし、阿夏に劣るべくもおぼえず。左さま右さま思へども、思ひ難たる無分別、男子と生れし甲斐ありて、那風流婦と一宵の、夢を結ばば老後の想得、いかにせまし、と肚に問、腹に答て膽向ふ、心の惑ひは御垣戍る、衛士の燒火にあらねども、夜こそ燃れ身内の、溫熱をやるせなかりけり。扨も這大夫次は、その性貨殖に賢くて、酒に亂れず、色に耽らず、浮たる方には苟且にも、誘るゝことなかりしかば、曩に阿夏を四五稔、宿所に留置たれども、些も心を動さで、最正首にものせしに、六十のうへを幾歳か過して、孫の黄金が年もはや、二八になりし今さらに、小槌が色に惑ひしは、始終の氣質融らずして、狂人の沙汰に似たれども、見識卑き俗骨人には、恁る事亦なきにあらず。却又阿夏がをりし比、大夫次には妻の屯倉在り。且その子大夫五が、逐電したる歎の霧の、まだ霽間もなき折なるに、阿夏は名たゝる淫婦なれども、總角なりし子持にて、佛生山なる兩賊に、いたく懲たるそがうへに、瀨十郎に遭んとのみ、思ふ心の移らねば進止に愼て、主人夫婦に仕へたり。これらの故に大夫次は、色をも香をも見かへらず。只利の爲に張梱し、心石より固かりしに、嚮に屯倉が世を去りしより、老ても鰥夫の寢寐寂しく、思ふ折から騙賊の爲に、魅されて心神浮れ、戲けき心の發りしは、その家應に亡ぶべき、命運にもやありつらん、と後に

識者の評せしとぞ。こは此作者の自注にて、景市が說く辭にあらず。看官宜く察すべし。間話休題、大夫次は情慾の、猛火連りに身を焦して、いと堪がたく思ひしかども、打出丁兒が側にあらば、便り歹しと思ひかへして、且く時を移す程に、琴のしらべの音絕て、子二刻比になりしかば、折こそよけん、と起出て、離舍に赴きつ。且障子に唾を塗りて、指もて穴して闚窺るに、那了鬟們は枕を竝べて、既に熟睡をしたれども、小槌はいまだ臥簟に入らず、孤燈の下に道中記を、獨閲してありしかば、やをら障子を推開て、呼も得かけず招くにぞ、小槌は驚き見かへりて、こは思ひがけもなき、什麽何事のをはしまして、小夜深たるに來ませしぞ、と問れて大夫次、さればとよ、今宵よりして炭繼の、小厮們を休らはして、咱們が炭を繼んとせしに、聊加減をとり忘れて、心もとなく思ふになん。そを問んとて來つるなり。いまだ睡らせ給はずは、那里へ來まして炭の加減を、覷し給へかし。この義を賴み奉る、といふ聲さへに胴戰して、困じ果たる面色なるに、小槌は否ともいひ難て、そは亦便なき事に侍り。且く俟せ給ひね、といひつゝ紙燭に火を移して、携ながら身を起せば、大夫次は三尊の、來迎よりも尊げに、紙燭を受とり先に立て、丹爐の頭へ伴ひけり。登時小槌は徐に居よりて、且はや炭を繼んとせしに、炭は既に繼てあり。加減に異なる事もなければ、思はず吻々とうち笑ひて、噫をかし。是

程までに、爐裏に火はあるものを、何を見よとて人迷しに、益なき事を、と呟きて、立んとするを大夫次は、抱き禁めて些も緩めず。脫齒に漏る聲戰はして、年にも羞ず慥いへば、面なき所行に似たれども、實におん身に迷ふたり。憐とおもふて一宵の、情にあはし給はらば、死するとも恨なし。やよ喃よ、と口說立て、放つべうもあらざれば、小槌は困じて嗟嘆に堪ず。ややうやくに見かへりて、今宵のみかは日屬より、淺くもあらぬ御心操を、空には思ひ侍らねども、妾は人の側室なるに、道に違へる枕を薦めて、主のかへらば爭何ん。且這八卦爐の頭にて、些も不淨の事あれば、丹鼎壞れて法術成らず、と誡められしこともあるに、猥りがはしき事をせば、後に悔しく侍らまし。又よき折もあるべきに、放ち給へ、と諫るを、大夫次聽ず火起て、瘦骨高き頰髯を、素き項に搨著々々、そは宣ふな豫より、千も二千も承知なり。非如丹鼎は破損ねて、財寶冥利の竭るとも、乘懸たる這弘誓の船を、渡さずは冥路の障りにならん。救せ給へ活菩薩、利益にあはで已べきやとて、相撲ふがごとく引立て、理なく臥簞へ伴ひけり。慳而小槌はその曉方に、起別れんとしつるとき、大夫次も共侶に、身を起し伏拜みて、既に日屬の想ひを遂て、魚水の契りを結びたる、君の爲にはいくばくもなき、餘命をいかでか惜むべき。心の花の香を留て、老樹なりとて嫌れずは、夜每々々のかよひ路を、猶いつまでも祈るのみ、と

いふを小槌は聽あへず、そは宣はするまでも侍らず。濡ぬ先こそ露をも厭へ、引くに曳れぬ小車に、重き情を乘せられて、主の祟も這身の科も、思はぬまでにいと欲しき、男女の色情は、老曾の森に若松の、立添ふ例も世に多かり。願ふは今の御心の、變らせ給はぬものならば、獨宿もせじ寢せもせじ。然ども妾が側には、打出丁兒が臥てをり。他們が熟睡して後の、暗號をな忘れ給ひそ、と契る辭の虚情、虚には承ぬ大夫次は、廊下續きの後朝も、別をしかの草の床、離れがたさを放ちてぞ、離舍へ還しける。是よりの後大夫次は、小槌と密會ふをのみ、身の樂にしたりしかば、内外の人の誹謗をおもはず。活業は皆老僕に任して、丹爐の事すら等閑なれば、折々に只炭を繼ぐのみ。願くばいつまでも、舌兪がかへり來ずもあれ、と思ふばかりに小槌の色に、溺れて痴情に堪ずやありけん、盤纏の爲にとて、竊に金を贈りしを、小槌は推辭て手にだも觸れず、豫も知らせ給ふが如く、良人は黄白自由に侍れば、妾も東西の匱しきことなし。只何時までも御こゝろの、變せ給はぬものならば、それに優たる歡びあらんや。こはとり收め給ひね、といふを大夫次推返して、恁思はるゝはおん身の實情、いと辱きことなれども、多ければとて邪魔にもならぬは、なべて浮世の錢帛なり。髮の上の飾、衣裳なゝどを、贈らば外の視に立て、那道人に疑るゝ、媒介になる東西なれば、思ひながらも進らせず。切て是でも

受られずは、何をもて俺心の、誠を表すよしあらんや。枉て寸志に從ひ給へ、と賄話るが如く推薦めて、或は五兩、或は三兩、囊中を費すこと、兩三番に及びけり。左右する程にはや、舌兪が北白川へかへりしより、四五十日を歷にければ、九還丹の煉法も、滿足の日に近づきたり。登時大夫次は思ふやう、仙傳無上九還丹は、八八六十四个日にて、初て成就すと聞しに、その日子も既にはや、三四日の程になりにたり。俺身小槌と土庫にて、夜每に此の情由ありとても、爐の頭へは屛風を建て、不淨を避たることとなれば、丹鼎に障りあるべからず。那道人はかへり來ずとも、その日に至りて丹爐を披かば、一萬金の大利を獲つべし。又そがうへにも造化宜しく、道人暴に病痾に嬰りて、洊這地に來ること克はで、竟に身まかることなどあらば、謝禮に金を分るに及ばず。㥘て小槌を側室にせば、そは十二分の造化なり。萬事に幸ひある折なれば、是等の事も知るべからず。思ふごとくになれかし、と計校む智の愚痴妄想も、慾には限り奈麻與美の、甲斐の白峯に起といふ、浮べる雲の富貴自在、樂しさ比類なかりけり。㥘思ひしより三四日を經て、舌兪は兩個の徒者を、倶して白川よりかへり來にければ、大夫次はあらずもがな、と思ふものから然氣なく、離舍に赴きて、はやく舌兪に對面して、且その老母の安否を問ふに、舌兪は思はず嗟歎して、されば候俺が母親は、鍼灸藥餌の效もなく、身まかりし

日はいぬる比、耑人の這里へ到著せしと、これ彼同日なりければ末期にあふよしなかりける。遺憾さは今さらに、亦いふべうも候はず。道中にてはかくあるべし、と知らざりければ夜を日に繼て、宿所にかへりし甲斐もなき、哀傷悲泣に堪ざりしを、却あるべきにあらざれば、安葬の事、過七々の、追薦讀經に日を送りて、けふまで貴所へ疎濶になりたり。なれども修法成熟の、日子も既に近づきたれば、四十九日を過すとそが儘、祓禊をしつゝ又首途して、夙に起晩く宿とり、一日片時も由斷なく、飛が似くに來つるなり。今日則吉日なれば、快々丹爐を披くべし、といはれて大夫次一議に及ばず。且その不幸の悼を演て、母御の憂に了らせ給ひて、追慕の袖も乾かであらんを、這方の事すら恁までに、御こゝろに掛られて、時日を違へず來ませしこそ、大かたならぬ御深切、實に感佩仕りぬ。八卦爐の事は貴教の如く、今までも由斷なく、折々に炭を繼たれば、心安く思召れよ。俺のみならで小槌刀禰も、了鬟達も矦不樂て、徒然にのみありけんを、けふは一時にとり復して、恁は迭に恙もなき、對面は那骨にあふ、水母はものかは筋力屬まで、さそな嬉しく思はれけめ、といへば小槌も膝を找めて、いぬる比より稍久しう、御厄會になり侍りたる、妾が爲に歡びを、まうさせ給へ、と會釋をすれば、舌翕は然こそ、と頷きて、曩には思ひがけもなき、火急の歸村に已ことを得ず、遺し措きたる娥姿

們を、召とらんとは思ひしかども、喪中にあればこゝろに任せず、是すらけふに及びしこと、かへすがへすも意外の趣舍、なほ寬やかに謝しまつらん。誘共侶に那里にゆきて、丹爐を披きて修法の財寶を、とり出さんず快々、といふを大夫次勞ふて、長途の疲勞を猜しまつれど、日限あれば貴意に任せん。爾らば這方へ來ませとて、はや土庫へ伴ふにぞ、小槌はさらなり、打出丁兒も、修法の奇特を見まくほしとて、迹に跟きつゝ共侶に、丹爐の頭へ赴きけり。

第二十八回

姦を詰りて有驗觀爐を破る
慾に耽りて大夫次家を亡す

却說舌僉道人は、大夫次と共侶に、土庫に赴きつ、丹爐の頭に坐を占て、且その炭の繼ざまと、爐內の容子を得と見て、うち驚くこと大かたならず。慌たる聲ふり立て、噫無慙や八卦爐の、丹鼎は太く壞れたり、といふに大夫次も亦駭きて、そは宜はすることながら、敎のごとく炭を絕さず、日夜由斷はなかりしに、然ることのあるべうもおぼえず。こゝろ得がたきことにこそ、といふを舌僉は冷笑ひて、陳じ給ふな論より證據。是見給へ、と慕やかに、腰なる鐵如意拔出して、丹鼎の泥土を彼此と、突崩し打墮して、蓋とり揚れば果して違はず、何の程にか丹鼎は

壞れて、黄銅汞いへばさらなり、那千兩の母金すら、耗て些もなかりしかば、大夫次は直と呆れて、これは〳〵とばかりに、眼を睜り舌を吐きて、面色蒼くなるまでに、胸を病して默然たり。登時舌兪は敦圉猛く、又大夫次にうち對ひて、足下の懇望已ことを得ず、俺交遊の義を以、家傳の秘方を修したるに、俺が白川へ還りし後、惡魔の爲に傷られし歟。只是足下の怠慢にて、自業自得といひながら、こは權著なる不淨をもて、丹爐を汚穢せし故にはあらじ。必男女密會して、這災を釀せしならん。炭繼の小厮們を、快この處へ召よせ給へ、といはれて大夫次推辭に由なく、身を起しつゝ庭に出て、仁八三五と呼立れば、母屋の奴婢が呼續けん、件の仁八三五郎は、土庫の頭へ來にけるを、舌兪は招き近づけて、やをれ三五郎仁八とやらん、汝達はいぬる比より、這爐の炭繼に隷られしに、爐頭にはをらずして、何どて母屋へ退りたる。さる怠慢のあればこそ、丹爐は不淨に犯されて、俺が法術は破れたり。隱さず報よ、俺がをらぬ日に、做せし惡事のありつらん、快々報よいかにぞや、と緊しく問れて兩個の小厮は、頭を掻きつゝ目を注して、共侶に答るやう、否、俺們はいぬる比より、炭繼の役を免されて、母屋掙きしたりしかば、這爐の事には與らず。夜も日もひとり東人の、手づから繼せ給ひにき、といふに舌兪は頷きて、それにて情由を猜したり。這疑ひは小槌にあり、といひつゝ屹と見かへり

て、やをれ衒妻、俺が這丹爐を、破りしものは汝ならん。甚麼なる奴と這里に宿て、秘方の丹爐を汚穢したる。快詳に招道せよ。いはずは目に物見せんず、と罵りつ鐵如意を、振閃めかして撻んとす。最も烈しき勢ひに、小槌は吐嗟、と駭怕れて、逃んとするを遣りも過さず、なほも撻んと身を起せば、大夫次慌忙きて、推隔携禁めて、尊師の腹立理りなれども、こは此女中の科にはあらず、皆老拙が愆なり。いかで愆過の科を屬て、老拙御勸解を仕らん。先且怒を納め給へ、と辭を盡し推寛解て、仁八に聶き、恁々、と事情を得さすれば、仁八は屢應をしつゝ、走りて母屋へ赴きけり。且くして一個の老僕が、土庫の戸口へ來つるを、大夫次はやく見かへりて、身を起し找み向ひて、もて來し金を受とりて、舊の席に立かへりて、おそるおそる件の金を、舌愈に贈りて却いふやう。こは最薄義に候へども、過愆の料に受させ給ひて、小槌刀禰の許されなば、歡びこれに優すことなし、と賠話つゝ包みし紙を解く。金は七兩二分ありけり。舌愈はこれをよくも見ず、亦復大く性起て、こは何事ぞ淺ましや。寄夫の試價を、七兩二分とか俗にいへばとて、俺かばかりの債金を、受て小槌を允さんや。畢竟咱們を簸にせらるゝ、這等の和譚言語同斷、恁てはいよ〳〵一身立ず。那衒妻奴を撻懲して、招道さして奸夫と俱に、推併て四段にせん。其首退き給へ、と敦圍て、罵り狂ふを大夫次は、又やうやくに

推鎭めて、なほ外面にをりし老僕に、恁々と分付て、ふたゝび金を取よして、一足躍に數を增て、五十兩にして遞與せども、舌兪は承引く氣色なく、いよゝますゝゝ罵狂ひて、綷果べうもあらざれば、大夫次は內外の者に、聞れんことの胸苦しさに、幾遍となく件の老僕を、母屋へ返し遣して、漸々に和解の、金を登して、思はずも、二百金に及しかば、舌兪は僅に頷きて、俺は豫も知らるゝ如く、黃白を殖す事、自由自在なるをもて、錢鈔を見れば餓鬼に等しき、世の人と素より異なり。然るを翅纔なる、這二裹の金をもて、面を歐んとせらるゝとて、許容すべうは思はねども、苟且ながら謬て、友垣を結びし老人に、飽まで恥を燿せんことも、亦長袖の本意にあらず。この故に胸を捺りて、乞るゝ隨に、要なき東西を、受て小槌を將てゆかん。大夫次和老とは絕交なり。この再生の洪恩を、忘れなせそ、と窘めて、いひたき儘の似非廣言を、唱きに喋く騙賊の魂膽、件の金を懷へ、楚と納めて、快立ね、と頤で誨て相槌の、小槌と倶に打出丁兒を、先へ立しつ悠々と、離舍へ退きて、却兩個の從者に、綷恁々と囁示せば、一個の從者こゝろ得て、走りて外面へ出たるが、豫準備をしたりけん、はやく四個の轎夫に、行簇輿二挺吊せしを、伴ふてかへり來にければ、舌兪は小槌をいそがし立て、打出丁兒は相轎にとて、件の簇輿に乘する程に、又一個の從者は、小槌が其領へとり散したる、衣も調度も一所に

裒て、手ばやく二裹に荷造りしを、分ちて軈て此彼二名、楚と駝ひて身を起せば、舌兪も草鞋の紐引締びて、朱鞘の兩刀背めしげに、巨手を振りつゝ庭門より、皆共侶に出るとき、舌を吐き冷笑ひて、造化精妙、といへばえに、巖斫融す苔清水。迹は濁せど底深き、伎倆に乘せし篠葉舟の、往方も知らずなりにけり。有恁けれども大夫次は、なほも惑ひの覺ざれば、俺が那母金千兩を、喪ひしは寔に所以あり。那事なくば思ひの隨に、十倍の利を得べかりしに、思念の外とはいひながら、俺が身上の傷となる、大損をせしそがうへに、六十餘日饗應の、雜費も少尠の事にあらず。臆又二百金を、折きて無異に治めしかども、這外聞を爭奈はせん。悔しき事をしてけり、と蹉跎しつゝ藻にすむ虫の、われからに身を恨るのみ。こゝろの秘密うち諦て、いふよしもなき氣を腐らして、人にあはんは面なさに、獨納戸に垂籠て、且くは得も出ざりけり。然程に闔宅の奴婢們は、咸這椿事に膽を潰して、這首に聚合那首に停佇、主の噂に口を鎖す。その事隱れもあらざれば、阿鍵もよしを傳聞て、驚きつ且呆れて、心苦しく思ひけり。とばかりならで這次の日に、當國の守佐々木高賴の陣代なりける、捉山柴太郎玄縄と呼るゝ武士、夥兵二十餘名を從へて、呼門もせで福富の、宿所へ直と推寄せ來つ。前後の門より亂入りて、御諚ざふ、と呼かけ呼掛、玄關客房、書院褊室、庖廚中間僮僕隔、浴室雪隱、薪木場土庫、離

舍に至るまで、奥ともいはせず、端ともいはせず、遺る隈なく撿宅したる、騒動いふべうもあらざれば、奴婢們はさらなり、老僕さへ、景市爪作、甲乙となく、駭怕れ捫擇しつゝ、隱れんとして度を喪ひ、十手に背を撻惱されて、吽嗟と叫ぶも多かりけり。當下福富大夫次は、慌惑ひつ納戸より、走出て玄縄の、身邊近く跪く、膝節戰へて慄れたる、訛聲高くふり絞りて、殿達霎時等せ給へ。在下福富大夫次なり。何等の御用か知らねども、這身にとりて撿宅せらるる、罪ありとしもおもほえず。人たがへには候はずや、といはせも果ず捕手の頭人、玄縄信と疾視て、默れ大夫次。科なくて、俺這處へ向んや。こはいふまでにあらねども、守よりおん下知の趣の、大畧を告示さん。近く找みて承れ。近屬菊池武俊が殘黨に、野衾鍛治郎有廉と聞えしは、綽號を鐵屑と喚做ものなり。他叛逆の志あるをもて、竊に修驗者に打扮て、有驗觀主舌兪道人と僞稱へて、一個の淫婦と、兩個の了鬟を相携へ、京畿五个國を遊歷して、豪農富商を倡惑し、專錢帛を貪畧て、軍要金にせまく欲す、と世の風聲に聞えしかば、他當國にも來ることあらん、と守の賢慮あるにより、豫密々のおん下知を、玄縄等も亦奉りて、その物色を探る折から、いぬる比より汝が宿所に、那野衾の鐵屑鍛治郎、並に等類の賊婦們を、留置くよし知るものありて、慥に告訴しつるにより、俺速にうち向ひ、不意に起て件の逆徒

はや逃せし歟、隱せし歟、那鐵屑們は影だも見えず。什麽何方へ隱したる。快々稟せ、いかにぞや、と辭せはしく責問れたる、大夫次いよ〳〵駭きて、初て曉得る騙賊の奸計、後悔今さら恁々と、いひ釋くよしもなきものから、いはで已べきことならねば、おそる〳〵頭を擡て、御諚では候へども、在下素より件の舌兪を、逆賊なりとは夢にも知らず、嚮に筑摩へ赴きて、且く湯治したる折、他も亦おなじ宿りに、日を累ねしよりうち解られて、かへさに這里へ立よりつ、逗留せしこと七八日、折から他が在所と聞えし、洛北白川より耑人到著して、そが母の病著の、重かるよしを報しかば、はやく宿所へ還らん爲に、小槌と喚做す孌妾と、兩個の了鬟を遺留て、猛可に出てゆきしより、五十餘日に及びたる、きのふやうやくかへり來て、老母の身まかりたりしかば、思はず疎濶に過せしとて、歡びを述告別して、三個の女子を携て、遽しげに立去りしは、昨未牌の比なりき。恁れば在下いかにして、那徒を落し遣るべき。隱せし事も絕てなし。菊池の殘黨ならんとは、知るよしもなく遭際の、宿せしのみに候ひしを、賢察あらば這身の大幸、只おん慈悲こそ願しけれ、と啣言がましく陳ずれば、立縄聲を苛立て、那修驗者の逆徒なりしを、知らずといふとも證据なし。そをいひわけになるべきや。加旃疑しきは、今俺が展撿したる

そが中に、離舍の頭なる、土庫の内に造りし爐あり。鑄竈のごとく塗籠しを、突碎きたることく見ゆるは、何等の爲ぞ。尷尬なり。この義も稟せ。いかにぞや、と問れて大夫次彼はとばかり、困じて答難しかば、玄繩いよ〳〵苛立て、那爐の事すら推隱す。野心は既に顯れたり。兵們這奴を緬めて、鞭撻懲して招道させよ、と最も烈しくいそがしたる、指揮に從ふ夥兵們、承る、と應も果ず、はや兩三名衝と立て、走り蒐りつ大夫次を、犇々と緬めて、背を痛く撻惱せば、大夫次は老人の、苦痛に堪ず恁々、と那煉金の綷の趣、鈍くも舌兪に説惑されて、一千金を喪ひたる、一五一十を首伏す。玄繩聞つゝ冷笑ひて、非如異國の傳法なりとも、寡き金を煉殖して、十倍に做すよしあらんや。倘その術のありとても、私に財寶を造らば、赦されがたき國賊なり。一文不通の愚民でも、然ばかりの事は知りたらんに、大夫次は十个村の、邑長でありながら、そを辨へぬ事やはある。この義も亦胡論なり、況野衾の鐵屑們を、留置たるのみならで、這期に及て走らしたれば、汝もその罪同じかるべし。且く獄舍に繫置て、なほ責問ふて實を吐せん。覺期をせよ、と罵懲したる、理に責らるゝ大夫次は、後悔の外なかりけり。この時阿鍵は次の間に、竊聞しつゝ驚きを、かさねて憂苦に堪ざりし、淚を拭ひ走り出て、兩三個の老僕と倶に、玄繩にうち對ひて、大夫次が爲に云々と、辭を盡して勸解れども、玄繩頭をうち掉て、若們何

と稟すとも、大夫次が罪重ければ、後々までも願ひは稱はず。那鐵屑が逆謀に、與せずといふことの、僞りなくば彼方を索ねて、搦捕て將てまゐれ。その事成らずは若們迄、等類の罪免れがたかり。愆ればあるじ大夫次が、罪科の讞斷定まるまで、家内の奴婢們一人ッたりとも、叨に離散すべからず。皆謹て籠居よ。等閑にせば若們が、越度ならんず。後悔すな、と辭緊しくこゝろ得さして、却四下に近き里の故老を、幾名か召よせて、大夫次が罪科の趣、箇樣々々といひ知して、幾座かある土庫の、鎖を遺なく封じ籠て、若們里人と示合して、由斷なくよく戍れとて、掟て軈て大夫次を、牽立さして久禮畑なる、陣所を投て還りけり。然程に、福富の宿所には、阿鍵黄金が憂患悲歎の、やるかたもなかりしを、愆る時には親族緣者も、寄に憚りて憑しからず。矧奴婢們は連係の、科を怕れてしのび／＼に、只活路を求るのみ、商量敵にならんと欲する、ものとてはなきそが中に、獨小忠二と喚做たる老僕あり。その心ざま老實にて、進止に表裏なく、主の憂ひを共に憂ひて、阿鍵黄金を慰めたる、語次に聒くやう、左ても右ても鐵屑の、舌兪が往方を搜索めて、告訴仕るにあらざりせば、家公を救ひがたかるべし。舌兪が宿所は洛北なる、白川なりと聞えしかども、そも搗鬼でありけん歟。心もとなきことながら、某北白川へ赴きて、その物色を探りなば、萬に一ッ手がかりを、得ることも候はん是

より外にせん術あらじ、といふに阿鍵は頷きて、儞の了簡寔に以あり。はやく那里へ赴きて、便宜を聞かし給ひね、と頼めば小忠次こゝろ得果て、准備をしつゝ潜出て、北白川へ赴きけり。爾後阿鍵は尋思して、爪作を召近づけ、おん身今玆は十八ならずや。既に男になりたるに、正しく大人をいふ大夫次の親族なれば、密議の使を憑むなり。俺身つら〳〵思惟るに、千金の子は市に死なず、と世の人の口順む、故事もあるなれば、久禮畑の陣所なる、有司に人情を贈りて、竊に恩赦を乞まうさば、大人の爲なる善根功德、地獄の製度も金に依る、利益にあふて獄舍の呵責を、脱れ給はんと思ふなり。この義を相計給ひてよ、と密やかに相譚ふて、金幾兩か遞與せしを、爪作は數へ見て、宣ふ趣理りなり。恩を受たる家翁々の窮阨、救るゝものならば、いかばかりに骨を折るとも、素より願ふ所なれども、這金にては尚寡し。五十兩も給はらずは、振被足らず候はん、といふに阿鍵は異議もなく、その意に任し數を增して、ふたゝび金を遞與せしかば、爪作これを受とりて、その曛昏に後門より、出て久禮畑へ赴きつ、便りを求めて大夫次が、禁獄中の安否を問ふに、他は觀音寺の城へ送遣られて、這首にはをらずと聞えしかば、件の金を些も散さず、次の日の夜に紛れ、福富の宿所に還りて、竊に阿鍵に報るやう、某久禮畑の陣所にゆきて、相識者に便りを徵め、件の金もて罇酒菜、卷衣なんどを買とりて、その餘

の東西も形のごとく、彼へも此へももののしつゝ、家翁々の事を頼みしに、家翁々は那首の獄舎より、觀音寺の城内へ、送られ給ひき、と聞えたり。はやくこの義を聞知らば、東西を贈らで還んに、知らぬ事とて五十金、費せしこそ益なけれ。とばかりにして已ときは、彌勒出世の折にあふまで、家翁々は赦されがたかるべし。いかで觀音寺へ赴きて、又一手段仕らん。なれども守の御座す、本城の事なれば、有司もさぞあらん。よりて愚意をもて推量るに、百兩にてはまだ足らず、二百金も費さずは、便宜を得がたく候はん、と辭巧にそゝのかせば、阿鍵は眉をうち顰て、そは又便なき事なりき。いくその財寶を費すとも、救取らるゝものならば、惜むべき事ならねども、曩には大人の思ひ惑ふて、一箱あまりの大金を、舌兪に掠奪られ給ひし、そがうへに又土庫を、守より封じ給ひしかば、俺が臂近に然ばかりの、閒財はなけれども、あるべき限り搔集めて、翌又おん身に遞與すべし。同州の内なるも、觀音寺までは遠かるに、太義ながら快ゆきて、事をな愆給ひそ、といへば爪作領きて、その義は御心安かりてん。咱們宜く誘へて、吉左右を聞せまつるべし。それ將金の多少によるぞ。整へ給へ、と期を推して、己が子舍にぞ退りける。恁而又その次の日に、阿鍵は爪作を招きよせて、きのふ密に相譚ふたる、一義によりて藻塩草、搔裒めてもいはれしごとく、金二裹は整ねども、百兩あまり侍るなり。

寡からんがこれをもて、左も右もして給へかし。這一裹の外なるは、おん身の盤纏にまゐらする、數展撿めて受とり給へ、といひつゝ遞與すを爪作は、受納めて亦異議に及ばず。豫も知らせ給ふごとく、俺が親は佐々木家の、陪臣で候ひしを、故ありて身の暇を賜り、退糧してより幾程もなく、兩親共に世を去りにき。俺が仂き比なりければ、那藩中に面を識られし、人とてはあらねども、名告らば了得に舊縁を、おもふもの多かるべし。其們に因て相譚はば、やうやくに便宜を得て、家翁々を救ふ據とならん。且く逗留すべければ、かへり來る日の遲くとも、御心をな勞し給ひそ、といと正首に慰めて、却退きて密やかに、行裝を整て、景市にのみ恁恁と、聶きつこゝろ得さして、その黄昏に潛び出て、ゆくこと僅に二里許、一村落に宿を投て、臥つゝ肚裏に思ふやう、這番俺が翁の罪惡は、叛逆人を引入れて、留置たるそがうへに、討兵の向ふを聞著て、逃せしならんと疑れたる、そこらの紛解立がたくは、這一裹の金を散して、竊に便宜を徼るとも、いかにして免さるべき。その首伏の科によりて、那鐵屑と一味のよしに、定められなば三族を、夷げらるゝ祟あらん。俺も亦愸に、翁の舊族なるをもて、共に頭顱を刎らるゝ、事しもあらば爭何はせん。縱其首までに至らずとも、大厦の覆らんとするときに、一木のよく拄んや。又只這意味あるのみならで、俺が親の佐々木殿に、仕へて觀音寺の城内に

在りしとき、犯せし罪の免れがたくて、景市が親と共に、久しく獄舍に繫れしを、幸ひにして恩赦に遇ふて、遂に追放せられしよしを、傳聞ぬることしもあるに、俺今那首へ赴きて、親の子なりと名告らずとも、萬に一ッ知る者ありて、守へ訴へ奉らば、立かへりの科を糾彈されて、縲絏に及ぶ事もあるべし。是等を思へば忠も義も、這身ありてのうへなるに、石を抱きて淵に臨み、薪を負ふて火に近づくより、なほ危きを見かへらで、憂を分ちて禍を、俱に禀んは愚なり。阿鍵刀禰より預りたる、金は一百五十兩、こはわが爲の奇貨にして、この外にもなほ盤纏あり。今この折に影を隱して、身の安穩を料らずは、後悔其首に立がたからん。噫爾なり、と計校む惡心、分別はやく定りければ、その詰朝宿りを出て、往方もしらずなりにけり。這次の日、福富の宿所には、北白川へ赴きたる、老僕小忠二がかへり來て、竊に阿鍵に報るやう、在下那地に赴きて、古俞の宿所を詢ねしに、里人すべてこれを知らず。多くは皆是石工にて、修驗めきたるものとては、絕て一人もあることなければ、忽地望を失ひて、なほ彼此と涉獵しかども、終に便宜を得ざりしかば、又さらに疑惑ふて、倘洛東なる白川橋の、頭ならずや、と思ひつゝ、なほ又京師に赴きて、その投すかたを索ねしに、素よりあるべき事ならねば、古俞の在處は知れざりき。爾るに在下洛外に逗留の日、世の風聲に聞し事あり。野衾有旅と喚做す

ものは、卽菊池の家臣にて、舌俞とは別人なり。那舌俞が原名は、卽鐵屑鍛冶郞にて、いぬる永正六年の春、備中介大江元弘主に討滅されたる、肥後州山本郡、飯田山の賊の頭領、川角頓太連盈が、隊に從ふたる小賊なり。連盈斧鉞に死せし折、他は兩三個の等類と共侶に、はやく山寨を逃亡て、彼此に濳びてをり。或は廻國の修行者に打扮て、宿せし家の東西を竊とり、或は野に伏山に立て、旅客を趯威し、年來猖獗の惡行を、事とせしものなるが、近屬は又修驗者に打扮て、仙傳丹鼎の奇法を倡へ、貪婪多慾の豪農富商を、迷してその錢を奪ふに、一個の美婦を媒鳥とす。件の美婦は鍛冶郞と、深く契りし遊行女なり。鐵屑竊に件の遊女に、奸計を說示して、豫そのこゝろを得させ、却その妓院の親方に、多く金を取せ遊女を借て、そが使ふ小三板をも、相携へて遊歷す。この故に那遊女を、久しく返さぬ事もありしを、妓院にては鐵屑鍛冶郞の、賊なるよしを知らざれば、央錢の多きに顧て、饒して放遣るといふ。恁れども件の美婦は、何地の柳巷の遊女なるらん。これを巨細に知れるものなし。恁りし程にこの風聲、やうやくに世に聞えて、京にても鎌倉にても、追捕の沙汰はありながら、戰世の癖なれば、攻戰軍旅に遑なくて、今に及ぶと聞えたり。おもふに舌俞の鐵屑鍛冶郞は、出沒不測の手段あり。こゝをもて、世の人遂に聞僻めて、菊池の殘黨なりといへども、その言は實ならず。南朝の武

臣達は、一箇も忠義ならぬはなし。この故に殘黨餘類の、飢渴に迫りて死に至るまで、綠林白波の儔と做て、惡名を世に遺せしも、亦一人としてあることなし。這義をもて推量るに、那鐵屑鍛治郎は奸賊なり。他豈菊池の殘黨ならんや。初他が頭領と仰ぎたる、川角頓太連盈も、亦是肥後州にあり。當時那連盈は、武俊に從ふて、後に逃去りたるものなれば、此彼竟に相混じて、菊池の黨といふにやあらん。いと淺ましき誣言なりとて、宿の主人にある人の、うち譚ひしを紙戸隔に、在下聞得て胷の內に、件の遊女の出處を知らば、那鐵屑の活兪が往方を、索る據あるべし、と思ひしかども風を追ひ、影を捕ふる街談衢說に、拘づらひて日を彌るも、亦益なしと深念して、立かへりてこそ候なれ、といふに阿鍵はうち驚きて、然るおそろしき殘賊と、友垣結びて筑摩の湯より、這里へ伴ひ給ひたる。薄情や日屬は萬のうへに、用心深くものし給ひし、大人の氣質に似げもなく、冤屈の縲絏を釋くよしも、あらずなりしは這家の、滅却ぬる時節歟、と口說立つゝうち歎くを、小忠二も理りと、思へば共に慰め難て、嘆息の外なかりけり。當下阿鍵は爪作を、觀音寺へ遣したる、事情を恁々と、小忠二に說き告て、千條の綱は斷たれども、這一條のみ果敢なくも、なほ憑しき心地ぞする。快かへり來て吉左右を、聞せよかし、と指を折て、專爪作を俟程に、二旬あまりを經にけれども、その信だもなかりしかば、

やうやくに疑心起りて、二十に足らぬ後生の、許多の金を懐にして、只獨行く旅なれば、山客などに跟られて、撃れはせずやけふまでも、かへり來ぬこそ不思議なれ、と獨言つゝ侘不樂て、一日も胸は安からず、又一層の苦を增して、悔しく思へば、小忠二を、迎に遣んと欲せし折から、有一日久禮畑の陣所より、捉山丟繩の下行狀到來して、阿鍵竝に福富の家の老僕們と、里の故老を召よせて、丟繩則下知するやう、大夫次は罪ありて、獄に禁獄せられしに、獄舍の内にて身まかりたり。他は菊池武俊が殘黨と聞えたる、鐵屑鍛治郎野衾有廉を、久しく家に隱し置たる、そがうへに當所より、討兵向ふと聞知て、那有廉を逃したる、罪叛逆に異ならねども、いまだ招道致さずして、身まかりたれば、寬仁の御沙汰あり。その子大夫五も家に在らば、父と同罪たるべけれども、他は曩に亡命して、往方知れざるよしなれば、措て重て問ることなし。這餘は大夫次が媳婦の鍵、孫女黃金なゝど、皆是婦女子の事なれば、緣坐の讞斷に預らず。奴婢們も總て進退は、主從の隨意たるべし。なれども大夫次が罪輕からざれば、莊園家作雜具まで、遺なく沒收せらるゝものなり。故老們遺漏すことなく、籍て聞えあげよ。皆是守のおん慈悲なれば、辱く思ひ奉りて、このおん旨を得よかし、と最嚴に告示せば、衆皆齊一言承して、うち連立てぞ退出ける。然程に福富の家の奴婢們は、阿鍵が久禮畑の陣所よりかへり

來て、御諚の趣云々と、告るを聞つゝ膽を潰して、猛に事の起りしごとく、籍られぬ間にとて、哨が東西主の東西ともいはず、各々手ばやく搔攫ひて、暇を請ふも、請ぬもあり。慌しくも出てゆく、綷の紛れに景市も、金二三十兩竊せしを、犢鼻褌に結著て、身裝はしたれども、投てゆくべき、親里なければ、阿容々々として留りたる、けふより後の身の往方、心もとなく思ひけり。此に就彼につきても、阿鍵黄金が心裡哀しさは、石崇誅せられて、妻子離散し、糜竺死して窮鬼歡ぶ、盛者必衰、有爲轉變、いふもさらなる事ながら、身に從ふものとては、只小忠二と景市のみ。幾間ともなく建つらねたる、家さへ庫さへ遺し措て、里盡頭なる人の空屋を、購求めて移りたる、この比の煩雜は、目も當られぬ光景なり。剡牧も田も畑も。戸帳に照して闕遺なく、沒官られたりけれども、なほ幸ひに隱田あり。主僕四五人ゝの衣食の料に、なりぬべきものなれば、里の故老の私意によりて、只これをのみ殘されたり。慾る折にはいとどしく、子をおもふ親の脱落なき、阿鍵は老僕小忠二と、里の故老に商量して、黄金を和泉の左界なる、浮寶屋へ預んとて、移徙したる次の日に、黄金を行幐にうち乘して、老實なる里人と、景市を隷て遣しけり。阿鍵が是等の用心は、今の僑居の荒々しきに、親子の零落を侮りたる、歹人などが不測の所行を、做すこともやあらんかとて、慾計ひしと聞えたり。然ば左界の

巨商、浮寶屋荷三太は、船積氏にて阿鍵が叔父なり。黄金が爲には從母、大叔父なれば這寄ありしを、荷三太は驚きながら、阿鍵が書簡をつら〳〵と、見つゝ黄金を受とりて、景市も鰯を煮たる、鍋に類するものなればとて、そが儘他さへ留置て、里人をのみ返しけり。却又阿鍵は大夫次の、亡骸を乞せん爲に、小忠次に盤纏を取らして、觀音寺へ遣しければ、小忠二は夜を日に續て、走りて那里へ赴きつ。術よく主の亡骸を、乞求め煙となして、白骨を壺に斂め、そを携てかへり來にければ、阿鍵は胸且塞りて、はふり落ぬる涙の間に、件の壺を受とりて、一夕家廟に容措つゝ、香華を手向看經して、通宵戍りて、次の日に、香華院へ安葬して、密々に追薦の、法筵讀經形のごとく、丁寧に執行ひて、日を經て墓表の石を建けり。這時までも爪作が、信絶てなかりしかば、阿鍵はさらなり小忠二も、いよ〳〵横死と思ひ決めて、大夫次が過七々の、好事を執行せし每に、亦爪作が菩提さへ、弔ふも涙の袖の雨、霽ぬ歎きに日を彌る、阿鍵は良人大夫五が、事をしいとゞ思ひ出て、憂苦に堪ずや、動もすれば、うち臥てのみありけるを、小忠二に奬されて、這年の冬の比、些の店鋪を修理ひて、酒を沽り油を鬻ぎ、隱田の畊作には、莊客二名を使ふて、その事を掌らせ、この餘一個の炊妾と、一個の小廝と主僕六口、半商半農の世の經營に、女あるじの事にしあれば、小忠二は精悍しく、後見をしたりけ

る。現古川には水涸ずといふ、世の諺は虛語ならず、その家一旦亡びたれども、幸ひにして地方を去らず、榮枯得失反覆しつゝも、なほその迹の絕ざりしは、大夫次が性の慳くして、且狡かりしかど、克數个村を差配して、暴戾殘忍の行ひなかりき。只その積て散すことを、知らざりし故に祟あり。因て識者の評すらく、大夫次は當初、途に蛇皺あるを見て、撈りて五色の玉を獲たり。是より猛可に發迹て、富一鄕を傾けしも、その亡んとするに及びて、舌兪が爲に謀られたり。舌兪は即蛞蝓にて、俗になめくじりと唱るもの、蝸牛に似て殼なく角なし。蛇この虫に黏るゝ時は、身を縮して動き得ず、竟に死に至るといふ。この事いまだ經驗ざれど、蠱毒の術にありとかいへば、その所以なしとすべからず。且舌兪は鐵屑鍛治郎なり。鐵も亦蛇の怕るゝもの、此彼共に相尅の義あり。物その尅に遇ふときは、利あらずして必衰ふ。亦奇ならずや、といひしとぞ。因に作者も自評すらく、朱之介が大和にて、箭五郎に謀られて、その妻奧手と姦通して、多く金を喪ひしと、大夫次が舌兪に哄されて、その妾小槌と密會て多く金を奪れしと、相似てその趣おなじからず。又落葉が朱之介に金を齎して、京師へとて遣せしと、阿鍵が爪作に金を齎して、觀音寺へ遣せしと、相似て用心亦異なり。譬ば那能因と賴政と、白川の關の歌の相似たるも、非等類の判あるが如し。看官疑似の眼を拭ふて、よく翫味せば分明

ならん。閒話はとまれかくまれ、畢竟黄金が、船積許赴きて、後の話說甚麼ぞや。そは次の卷の首に、解分るを聽ねかし。

第三輯 巻之五

第二十九面

諫を遺して景市西都に赴く
璧を分ちて黄金東行を辭ふ

却說黄金は思はずも、和泉の左界に赴きて、母黨の大叔父なりける、船積荷三太許寓居る程に、主人夫婦の所望によりて、這年の冬十二月、その子棧太郎に妻せられ、遣嫁の儲に一金だも、費すに及ずして、居ながら豪家の媳婦になりけり。抑浮寳屋の主人船積荷三太に、兩個の兒子あり。件の棧太は次郎なれども、正妻雄波の腹なりければ、軈て總領に立られたり。太郎は則城藏なりしを、こは庶子なりければ、貶して二男にしたるなり。又城藏が實母には、曩に身の暇を取せて、近鄕なる小賈、某乙の妻に倣したるが、幾程もなく身まかりけり。現天道は盈るを虧く。棧太郎は富たる家の、總領には生れしかども、心ざまいと愚にて、菽麥だにも辨識らず。目には才に五色をわかち、身には寒暑を覺しのみ、是すら黄金が不得意なりしに、他を娶りし次の年、棧太郎は年二十一にて、痘瘡を患て危かりしを、良醫の匙に救れて、命ばか

りはとり留たれども、相貌醜うなりて、眼包引吊鼻歪み、肌膚は灸卵を、灸過して焦せし似く、聲頻嗄れて鼻へ漏る。三十二相一箇として、缺ぬ處もなくなりたれば、黄金はいよゝ淺まし、と思ふものから親里は、昔にも似ずなりにしを、知りつゝ這里を出てゆきて、一個の親にものを思はせ、再富饒き人の妻に、なるよしなくば悔しくて、世の胡盧になりぬべし。左ても右ても這身の薄命、良人は痴漢でも醜郎でも、手鍋引提ず常綺羅で、夥の奴婢を使ふを思へば、痛苦忻て身の爲に、灸灼て觀る山ふたつ、出の字を已るに優ことあらじ、と尋思をしつゝ初に變らで、陽ばかりは睦しげに、萬事良人に機を屬て、その足らざるを補ひければ、船積の二親は、歡ぶこと大かたならず。俺が媳婦は尙弱けれども、今の浮世に多く得がたき、貞女にこそ、と竊に稱へて、願ふははやく初孫を、產出せかし、見まく欲し。いかで〳〵と朝な夕な、子ゆゑに祈る親心、神ならぬ身の情由知らで、間ある閨の空枕、背合する妹と脊が、片緒癖つく耳既の、疼みを悟るよしもなき。荷三太が妻の雄波は、年來血暈の持病あり。是より又餘病發りて、目を病煩ふこと一稔あまり、晝は日影の厭しきに、夜はなほ物を見ること克はず。近屬は又逆上にて、耳さへ踈くなりしかば、日暮奥に籠りてをり、家内の事はしも、乙より拾まで黄金に任して、心安しと思ひたり。又荷三太は棲太郎が、心ざまの鈍きを知れども、片羽な

る子は不便さの、彌增す夜の鶴の脛、斷まく惜しき恩愛の、やる方とてもあることなければ、只折々に敎訓して、役に立んと欲するのみ。然るにより這春は、周防の山口へ將てゆきて、大内殿へ見參を、請まつらんとて親子共侶、正月の初旬に首途したるが、且交易買賣の、所要を兼たる旅なれば、那地の枝店に逗留して、春闌るまで歸り來ず。その際左界なる、店鋪には主管あり。居宅は二男城藏に預措て、內外の差配を任せしに、城藏は兄に似ず、今茲は二十五歲なるべし。男態苦味ありて、奴婢の長と做すに宜く、辯舌水の流るゝ如く、浮薄ながらも應對に、よく人の機を攬りしかば、日每に親の名代に、得意の武家をうち巡りて、その所要を承るに、諸家の評判歹からず。他は親にも優たりとて、每より利潤多かりけり。却是までは景市が、浮寶屋の居宅なる、客房にて朱之介に、聶き告る福富氏の、慾に迷ふて自滅を取りし、その迹旣に零落したる、絆の顚末遺もなき、長物語にぞありける。當下又景市は、朱之介に聶くやう、福富氏の滅れし時、俺が年十七なりければ、額髮だにまだ剃らず。這里へ來て後にこそ、稍男にはなりたれども、小猴子なれば搾きなかりき。那折からに竊したる、金は僅に三十兩、その年の冬阿鍵刀禰の、安否を問へとて福富村へ、遣られたりけるかへるさに、霎時京師に旅宿して、一夕柳巷壯觀より、忽地に病著て、遊女の爲に那金を、夢の似くに使果して、又身ひとつ

になりしかば、西へも東へも振がたさに、なほ又這里に歇舟、內外の機通間を拿樹でも、底涼に誘引水もなく、そを慰る友綱も、あらで過せし滿三年、料らず長兄と對面の、這春宵は一刻千金、殽はなくても味酒の、三輪の謠曲にあらねども、晝こそ見えね夜を深す、再會湯の卽效にて、瞶の生たる欝胸を、塵も遺さで漏らしたり。且飲給へ、と獻す盃を、朱之介は取抗ながら、數番嗟歎して、思ひきや福富翁の、慾に耽りて可惜しき、富も榮も五十年、家さへ身さへ一炊の、夢物がたりにならんとは、袷といひ恰と云、世には相似て對すべき、奇事なきにしもあらずかし。上にも既に話せしごとく、俺が箭五郎に謀られしも、福富翁の酉俞とやらんに、哄されしも亦到底は、皆騙姦の手段にて、その圏套に入りたるなり、といへば哄市頭を掉て、只一向に聞くときは、似たる像く思ふもあらんが、緈の趣同じからず。そをいかにぞと推ても見給へ。色に迷ふて密通財を、使ふは凡世間の、後生に多かれば、長兄が安保に謀られしも、憎うはあらずその所なり。又福富の愆は、是貪慾の致す所、那騙姦に遘ずとも、既にはや一千金を、竊接られしよしを悟らで、密夫に墮て二裹の、金を添しは阿餽なり。總て世の吝嗇家の、驕奢を好む心から、淫を貪らざるもの稀なり。然ればとて賣色は、財の惜しさに措て講ぜず。又姦にも費あり。第一に家々が怕しさに、是等の慾も竟に果さず。こゝをもて

些ばかりも、鈔を使はで竊せんとて、薄情き人の妻妾の、羽籠に羂りて意外の錢を、他が隨意く豪奪らるゝは、原是鄙吝の算盤錯誤、長兄の愆に比れば、雲壤の差別あり。豈同日の論ならんや。是によりて彼此の、情狀虛實を猜するに、奥手とやらんは實情あり。譬ば猫兒が主の爲に、鼠を捉て啖ふが如し。素より主の爲なれども、好む所に高味あり。雖然綷の敗に及びて、勢ひせん術なき隨に、遂に良人と併びしならん。又箭五郎も恁ぞかし。他は根生の騙賊にあらず。長兄の盤纏の多きを見て、猛可に起りし惡心なれば、損したりとも饒すべし。又小槌には實情なし。譬ば猴が狙公の、爲に勉て儛踏るが如し。觀者只管愛れども、素より他が得意にあらず。その情なきを知るべきのみ。又舌俞の鐵屑は、最怕るべき奸賊なり。初よりして豪家の財を、騙奪んと欲する伎倆あり。福富一人に限るにあらねど、運歹くてその騙術に、乘せられたるは寔に所以あり。箭五郎とやらの儔にあらず。はやく曉得て損せずとても、那奴は決して饒すべからず。況一千二百金を、公然として掠奪たる、その罪阿保と廷逕あり。當否は知らず俺が臆度もて、評する處かくのごとし。然はあらずや、と說誇れば、朱之介うち頷きて、俺はけふまで那奥手が、宿反りたるを怨し、と思ひしは淺慮にて、和主の諭しは高論なり。さるにても爪作は、横死したる歟、逃亡せし歟。倘山客に跟られて、命を其處に隕しなば、いと憐む

べきことこそ、といふを景市慰めて、鷲津の生死存亡は、咱們も知るよしなけれども、他が觀音寺へ首途の、折から咱們に悉々と、別を告し辭の端に、狐烹られて兎憂ふといふ、古語もあるなれば、といひかけて後をいはざりき。是等を思へば連係の、祟を怕れて逃たるならん。盤纒の多寡は聞ねども、虛々として山客の、爲に死すべき男子にあらず。そを那折に阿鍵の刀自も、小忠二も共侶に、鷲津は横死しつらんとて、菩提を弔れし事情の、後に這里へも聞えしを、傍痛く思ひたり、といふに朱之介は又頷きて、謂を聞けば然もあらん。そはとまれかくもあれ、黃金が這里の咱婦になりしは、是第一の異聞なり。いかで和主の汲引によりて、相見ることのなるべしや、といへば景市含笑て、そは左も右もすべかるを、咱們は翌の朝船に、乘て周防へ赴くなり、と報るを朱之介は聞あへず、術のよき事をいふものかな。搗鬼ならずや。甚なる故ぞ、と問ば景市、さればとよ。搗鬼にてはあらずかし。きのふ山口の枝店より、東人の書翰到著して、這春は當所にて、溫疫の流行病あり。折から主管も小厮們まで、八九名病臥たれば、枝店の生活不便なり、景市は游客なれば、三四個の小厮と共に、はやく出船に乘走らして、由斷なく來著せよ。この故に俺も亦、速にはかへりがたかり。城藏這義をこゝろ得て、快快せよ、とありければ、咱們も猛に夫に差れて、三四個の猴子と共に、翌の旦開に首途の、准

備は既に整ふたり。長兄の這首へ來ますとも、一日遲くば再會の、據もあらで猶何時までか、迭に知らであるべかりしに、料らず對面の歡びを、盡す間なく袂を分つ、這便なさを爭何はせん。今宵は既に更闌たれば、御新娘に告るに由なく、翌は首途の早ければ、起出るゝを俟間なし。這義を猜し給へかし、といはれて有理、とばかりに、朱之介は困じ果て、沈吟ずること半晌ばかり、思ひ難たる頭を搊て、和主も豫知れる如く、俺と黃金は兄妹の、約束せられしよしさへあるに、相別れてより八九年、舊緣なほも竭ねばこそ、思ひもかけず這里へ來て、あはでいなんは本意ならず。什麽いかにして可らんや、と眉根を顰めて相譚へば、景市然こそ、とうち笑て、いたくな思ひ屈し給ひそ。咱們は汲引しがたけれども、なほ又便宜なきにあらず。這里の奧にて澳路と喚做す、一個の養娘あり。他は御新娘の意に愜ぶて、鍼妾にも優す出頭なり。咱們と些の情由あれば、翌は夙めて起出て、私に首途を目送るならん。その折他に長兄のうへを、聶き示しこゝろを得さして、奧へ通達致させてん。澳路が橋を渡すまで、心長閑けく俟給へ。然とて隱す事にはあらず。曩に長兄が母御と倶に、周防へ赴き給ふ折、福富夫婦阿鍵の刀自まで、黃金を長兄の妹品に、と約束しつゝ盃を、とり酌されし緣故は、咱們が折々いひ出て、噂をしたる日の多かれば、這里でも知らぬものはなし。又只這意味のみならで、姑孃

は耳疎く、目も亦見えねば垂籠て、鳥こそ追ね對王丸の、母御前に似たる廢人なれば、黄金刀禰に對面の折、そこらに影護きことなし。又城號は親の外代に、日として出ぬ事もなければ、後安きに似たれども、親み過ぎては第一に、黄金刀禰の爲歹かり。澳路が進退すべければ、對面は只一兩度にて、買んと欲する東西整はば、大和へ還り給へかし、と辭せわしく眞實たちて、又他事もなき密談に、朱之介は異議もなく、思はず滿面笑を含て、いはるゝ趣こゝろ得たり。情寵にも宜く賴むのみ。勿論女才はあるまじけれど、俺が大和にて杣木氏の、女壻になりたる事などは、誰にも祕していはぬがよし。只本意なきは異姓の兄弟、九个年以來相別れて、再會は這一夕歟。願ふははやくかへり來て、世に落著ぬ俺與に、商量敵になり給ひね、といへば又景市も、愀然として嗟歎に堪ず。むかしは長兄が周防なる、山口へとて首途の、折から咱們と爪作と、俱に送りて別を惜み、今は咱們が周防なる、山口へとて赴けば、長兄に別を惜るゝ。思ふ同士なる中を劈く、那里は劍の山口歟。是より迭に發迹て、竟に寶の山口と、なるよしある歟、前知しがたき、人間萬事塞翁が、馬の足搔に齎たる、日月は立ことはやくとも、なほ春秋に富たれば、後會は又いくらもあらん。那大和にて人質の、事を誰にか知らすべき。俺はいはねど口走らして、馬脚を露し給ふな、と辭を放ちて勵せば、朱之介は忽地悟りて、然なり離

合は必時あり。縦賢弟は周防なる、枝店にて日を累ねずとも、俺亦武藏へ還去かば、あふことかたき天の一方、歎くことかは、是より別れん。船行の無異を祈るのみ、と祝せば景市頷きて、翌の首途に作侶あれば、再別を告ずして、暁かけて立出ん。なほ後會の折もあらば、遺れる意中を罄すべし、といふ間に中房なる、土圭の轔るを僂れば、夜ははや八鼓にぞなりにける。景市四下を見かへりて、扨も今宵は夜の短さよ。興に乘せし長物語に、更闌たれば小廝們は、饒されてはや就寢りにけん。長兄も休らひ給ひね、といひつゝ手づから盃盤を、取て遽しく退きつ。程なく夜具を出し來て、臥簟を儲告別して、その身の子舍へ罷る程に、朱之介は幾番となく、歡びを述勞ひて、淨手に立て、墨本粘の、屏風をやをら建輪して、軈て枕に就きにけり。却說その暁がたに、景市は三四個の、小廝們と共侶に、行裝を整て、左界の港口へ赴きつ、周防へ還る船に附て、西を投てぞ走らせける。又朱之介は小夜深て、睡りにければ貪宿くて、其頭の事に掛念せず、日ははや高く昇りし比、やうやくに起出て、肚裏に思ふやう、黄金に對面せん折に、些の土宜を齎せずは、當座の墨付歹かるべし。其も何をがな贈るべき。綾も錦も高麗物も、商賣柄で鄽にあらん。又玳瑁の櫛笄、白銀の指紈なども、皆高麗物に隷く東西なれば、珍しげなく思はれん。要こそあらめ、と尋思して、且早飯をたうべたる、爾後街

衢に立出て、料帋になるべき修善寺紙、鼻紙にすべき陸奥紙、葦手歌繪を畫きたる、紈扇と共に總て三種、價を鞁はず二具一對、皆極品を購求て、檀紙に裹せ、紅白なる、水引の紙撚を締て、名字を寫し袖に抱きて、遽しくかへり來つ、又客房に獨をり。澳路が出て來る歟とて、起て見居て見、俟不樂て、果は欠伸に涙吒む、睡氣覺しに隔亮を開て、鄰坐席を見亘せば、花も丹楓も浪速なる、浦の苫屋の秋ならぬ、長き春の日傾きて、下晡になりにけり。浩處に奥のかたより、年十七八可なる、一個の女子出て來つ。是則澳路なり。朱之介にうち對ひ、恭しく額をつきて、おん客さま長き日ぐらし、さぞ徒然にをはすらめ。景市主の恁々と、いはれしによりおん身のうへを、具に聞知侍りにき。獨那人のみならで、賤妾が主にも兄品にて、をはせしものを、外々しく、うちも過して禮なかりしは、奥と面亭と隔りて、聞こと遲き故なればいかで允させ給へかし。則よしを新奥さまへ、聞えあげ侍りしかば、うち驚かせ給ふまでに、おん歡びは限りも侍らず、思ひがけなく義兄の君の、來ませしは什麼夢にあらずや。はやく對面せまく、ほしきに、おん案内をせよかし、と宣はせしによりてなも、おん迎にまゐり侍りにき、と告るをうち聞く朱之介は、含笑ながら膝を找めて、原來おん身は澳路刀禰。景市の噂にて、緣起來歷咸承知、恙もなくていとめでたし。獨黄金の刀自のみならで、おん身も亦俺爲に、女

弟といふとも怪しうはあらじ。這義によらば介意なく、後々までも憑しからん。就て這二裹は珍しげなき東西なれど、上なるは御新娘へ、一箇はおん身にまゐらする。折敷を貸させ給へかし、といひつゝ遞與すを受取て、思ひがけなく賤妾にさへ、御こゝろ屬れしおん土宜の、既ものは最有がたう、戴き侍り、と歡びを述てそが儘携て、誘とばかりに先に立つ。けふよりしての友衞、かよひ熟けん長廊下なる、船底張の板疊、拭磨きて塵もなき、春の澳路に引れゆく。朱之介は既にして、黄金が便室の頭に來にけり。登時澳路は朱之介を、程よき處に留置て、走りて納戸に赴きつ。那一裹を漆折敷へ、手ばやく載て遽しく、黄金の身邊へもてゆきて、箇樣と披露をしつゝ、却朱之介を見かへれば、朱之介はこゝろ得て、衣領かき合しうち咳きて、徐に席に找み入りて、軈て黄金に對面す。當下黄金は席を避て、上坐に請薦るを、朱之介は屢推辭て、寒暖を述恙なきを祝し、別後の口誼細やかなるに、黄金は羞て應をするのみ。いふべき事もいひ難しを、澳路はこゝぞと精悍しく、朱之介に茶を肴め、果子を薦めて欵待けり。且くして朱之介は、茶を喫ながらつらつらと、黄金を見れば魂浮れて、思ふに倍たる美人になりぬ。むかし見たるは含の花、今は盛の楊貴妃櫻、外に儔は仲秋の、鮮明き月にも譬ふべく、肌膚湾らに衣通りて、富士峯の雪に似たるべし。清亮たる聲音を聞ては、迦陵頻伽も恁やと覺

え、徐々たる進止を覘へば、金蓮足下に開く歟と疑る。那神泉苑に雨を禱りて、歌を詠ぜし小野小町も、滋賀寺に車を駐めて、迷ひを覺せし京極御息所も、倘存命て相遇ば、必顰に傚ひてん。正是月宮殿の女仙謫せられて、遂に下界の凡胎に、降誕せしにあらざりせば、佐保龍田なる野山の神の、楓妖花精を走らして、後宮三千の顔色のあらずなりにし、風流少女も、是歟とばかり目を驚す。朱之介は今さらに、媢きことといふべくもあらず。聞くが如きは這良人なる、棧太とやらんは醜郎にて、取るよしもなき白物なるに、縱過世の果報なりとも、名花を手折て馬槽に、活て眺る烏許の嬬、產靈の神の愆歟。和漢今昔不平の事、美人醜郎を抱きて睡り、駿馬痴漢を騎て走る。若これをしも忍ぶべくは、亦孰をか忍ざらん。憐むべし〳〵、とくり返したる胸裏に、快らず思ひたり。登時黃金は朱之介に、三種の東西を贈られたる、歡びを述る語次に、澳路にも亦種々なる、愛たき東西を賜りしとて、他も歡び侍るなり。母御許は恙ましまさずや。今は陸奥にをはすると歟、いとなつかしく思ひ侍り。奴がうへは景市刀禰に、大抵聞せ給ひけん。舊里の事はしも、見果ぬ夢の心地して、いと恥しくいと哀し。その折からの憂かりしを、思ひ出れば幾十里、距てひとり殘し置く、母親の事心にかゝりて、今も今とて一日も、胸安からず侍るかし、といふを朱之介は慰めて、そはその該の事ながら、壯なる者は必

衰ふ。貧富得失各々時あり。咱們も亦這八九年、彼此と流浪して、今とてもなほ落著ず。曩には母と共侶に、遙けき周防へ赴きしに、叔父には得あはで母にすら、生別せし艱難憂苦は一朝に說罄しがたかり。爾後東國に由緣を求めて、一大諸侯に仕へしかども、又故ありて遠ざけられ、大和に旅宿しつること、兩三年に及びたり。竝べいはんは烏許なれども、俺が薄命に比れば、おん身は過世歹からず。故鄕は初に似ずもあれ、恁る豪家の所望にあふて、計らず媳婦になり玉へば、歡びこれに優ことあらじ、といふを黃金は聞あへず、はやくも顏に緋櫻の、はづかはしさを紛かす、袖の刺著苧引拔て、そは宣はすることながら、家は富ても物足りても、心に任せぬこと多かり。返らぬ昔の戀しきのみ、といふ間に幾箇の、女婢が手繰にもて出す、准備の湯羹、酒殽、處陝まで安排べつゝ、澳路が量酒に、盃を、薦る賓主の席を改め、管待丁寧なりければ、朱之介は景市に、いはれしよしを思ひも出さず、獻つ酬れつ半醉に、はやくも本色を露して、浮世雜談、迷語秀句、婦女子の機を攬る辯佞利口に、艷語をまじへて興ずれば、黃金はさらなり澳路まで、齊一笑ひ愛覆りて、樂しき事に思ひけり。左右する程にはや、這日も旣に暮れしかば、菊燈臺の蠟燭まで、光を增したる珍客に、欵待はなほ半酣にて、又夕饍の准備あり。澳路は時分をこゝろ得て、辭して庖厨へ退りしかば、傍に人のをらずなりたる、

朱之介は折を得て、竊に黄金を挑みしを、黄金は聽かず振拂ひて、こは淺ましや何事ぞ。おん身は奴が兄品ならずや。調戲も人にぞよらん。要なき事を、と窘れども、朱之介は些も怯まず。なほ生憎に紆りて、兄品素より承知なり。倘わが妹にあらざりせば、主ある人を何とかすべき。曩に別れに及びし折、おん身の母御にいはれしよしを、はやくも忘れ給ひし歟。良人が妻を妹と呼べるは、卽女弟に擬へたる、親みに由る故なれば、夫婦をなべて妹兄といふも、妹と兄の義なるべし。同胞もなき黄金が爲に、後々までの後盾に、賴むとありしはけふ再會に、結び添てん妹兄の天緣、是その語の讖ならずや。若嫌れずは百稔の、命もいかでか惜むべき。おん身の心いかにぞや。應を聞し給ひね、と辭巧に義理ならぬ義理の柵搔遣難て、思ひ迷ひし女子の水性、黄金はいよ〳〵心動きて、又いふよしもなき折から、澳路が饍もて來とおぼしく、足響近く聞えしかば、朱之介は驚きながら、故の席に快退きて、大くも醉て臥たる像く、陽睡して呼べども起ず。登時黄金は澳路にいふやう、義兄は大く醉給ひしに、姑く睡らしまゐらせん。夕饍は且退けて、這盃盤も取納めよ。客房へは昨夜のごとく、義兄の臥簟を儲よ、と小廝們に吩咐て、儞も今宵は休めかし、といふに澳路はこゝろ得て、いはれし隨に計ひつ。朱之介が身邊へは四折屛風を建輪して、辭して子舍にぞ退りける。然程に小夜深て、曉近くなるまでも、

朱之介は起出て、客房へは赴かず。遂に黄金と倶に宿て、通宵相譚暁しつゝ、黎明の比起別れて、その身の臥房に入りにけり。噫姦淫は人の大悪、三尺の童子といふとも、その非を知らぬものはなきに、性悪なれば、情を裂き、慾を禁る事をおもはず。朱之介が浮薄なりしは、又論ずるに足らねども、黄金も亦是不貞の婦、舊焦木には移るにはやき、火と土性の相生あり。只是のみにあらずして、朱之介とは幼稚き比より、一所に育ちし親み深く、年歴て再會しつるに及びて、艶冶妖麗相歡びて、法曹借さず、禽獸に、等しき罪人となるよしを見かへらず。是併前世の業因、脱れがたきよしさへあるを、後にぞ思ひ合されける。閒話休題、是よりの後朱之介は、夜毎に黄金と密會ふて、迭にその情慾を、放にしたりしかば、大和へかへることをすら、虚々として忘れたり。然けれども主人の妻、雄波は目も瞽耳も疎くて、何事も聞知らず、朱之介は黄金が爲に、兄品なりといふよしの、豫聞えしよしもあれば、遂に疑ふこともなし。又城藏は日毎に出て、屋敷巡りに暇なければ、恁るべしとは思ひもかけず。這他奴婢們の防禦には、澳路が進退脱落なく、その身は常に黄金が臥房の、次房に宿にければ、その姦淫を相資けて、些も外へ露さず。原這澳路も景市と、密通したる情由ある故に、主の爲はわが爲ぞ、と念じて如之は相計ける。かゝりし程に有一夕黄金は、朱之介にいひけるやう、おん身は




おきぢ
朱之介
出像第卅八
船積の宿
朱之介
黄金と酒
會

豫徴め給ふ、那唐布の手に入らば、東へ還り給ふならん。憖に相遇ふて、後の別を爭何はせん。然ばとて伴れて、奔てこゝを出てゆかば、故鄕に在する母刀自の、さぞな歎せ給ふらん。不義と不孝を身に駄て、なほ浮々しきおん身にすら、棄らるゝことあるならば、悔ともいかでか及ぶべき。いぬる夜おん身が共侶に、東へ奔れと宣ひしを、左右なく承も引ざりしは、陷むよしのあればなり。恁れば這番は且相別れて、かさねて遇ふ日を俟んのみ。就て預けまゐらせん、と思ふ東西侍るなり。是を認りてをはせる歟、といひつゝ軈て肌膚守なる、嚢を拿てうち披き、はやとり出す五顆の玉を、鼻紙臺にうち乘せて、喃末主、曩に這玉の失せし折、おん身の母御に拾れて、不思議に返し給はりし、奴が祕藏の東西なるを、いまだ忘れでをはする歟。仇かりし比よりして、一日隻時も身に放さねど、今這玉を三顆分て、おん身に預けまゐらせん。誓ひ給ひし言の差はで、後々までも奴ぞ、と思ふて夜も日も身に著て、喪ひ給ふことなくは、かさねて這里に來ます日に、倶に奔りて妹と兄の、緣しを共處に結ぶべし。その誠心を見るまでは、親をも身をも思はずに、伴はれては出がたかり。この意を忘れ給ふな、とくり返しつゝ囁示して、玉は好みに任せしかば、朱之介は感じて罷ず。肚裏におもふやう、俺いぬる夜の私語に、黃金に倶して走らん、といひしは素虧て見つるのみ。非如納得せらるゝとも、只今はなほその

義に便なし。爾るに後日の約束に、他が愛する玉を分ちて、預けんといへるをもて、その實情を知るに足れり。俺且武藏へ立かへりて、那里の首尾を繕ひて、事に假託け再來て、その折攫ふて將てゆかん。是に優たる分別あらじ、と尋思をしつゝうち頷きて、いはるゝ趣理りなり。這玉の事はしも、その傳來まで俺よく知れり。おん身の愛るものなるに、いかにしてうち忘るべき。こを後會の識にとて、預けらるゝはこよなき眞實、おん身と思ふて肌膚に著て、念じて後の便著を俟ん。因て思ふに這番は、獨東へ立かへりて、又出なほして來ぬるとも、一兩年に過べからず。いで〳〵といひつゝも、五色の玉を彼此と、擇みて三顆を手に拿て、白と黑きは陰の色、黃なるは土にて又陰なり。俺この三顆を預るべし。迹に遺るは赤きと靑きと、則陽の色なれば、咱們と思ひ給ひね、と諭して聽て件の玉を、その身も持る膚附の、護身嚢に斂めけり。這夜は雨の蕭やかにて、迭に罄ぬ睦語に、七鼓は過て明るに易き、別を惜む情慾の、安濟の浦に曳く鯛ならで、たび累りしうへなれば、城藏竟に齅著て、娟きこと限りもあらねば、有一日澳路を竊に召て、目には睨めど聲潛やかに、やをれ澳路、俺今汝に問ふことあり。嫂御は乃者朱之介を、夜每に臥房に掖入れて、忌憚らず樂まるゝは、汝が妁せしならん。俺は主人の次男にて、親と兄との留守を預る、身に太役を承たるに、閨門瀆れし不義淫奔の、緈の始

末を聞知りては、汝も倶に饒しがたかり。兄の爲に妻敵を、討て怨を雪んず。匿まず告よ。いはずや、と勢ひ猛く責問れたる、澳路は顏色土の如く、駭怕れて一句も出ず。免させ給へ、とばかりに、身を戰して且くは、頭を擡得ざりしを、城藏呵々と冷笑ひて、俺が憤は恁なれども、又汝が挊きにて、主を拯ふてその身にも恙なき手段あり、われとても初より、嫂御に執心なきにあらず。左ても右ても兄の東西を、他人に賞翫せらるゝならば、俺も賞翫せざらんや。今宵は俺身朱之介に、先だちて嫂御の臥房に、潛びゆきて本意を遂ん。その折嫂御が不承知の、不の字だもうち出さば、汝も倶に覺期して、命はなきものと思へかし。もし又嫂御が承引て、咱們を慰め玉はらば、朱之介にも半分讓りて、一宿代りに嫂御にあはせん。俺がいふよしは神かけて、毫ばかりも鬼話なし。汝この議を嫂御に談じて、首尾整へて命を助かれ。等閑にして後悔すな、と飽まで權し懲さるゝ、澳路は慌迷ひつゝ、言承しつゝ退きて、黃金が側に人なき折に、城藏にいはれたる、縡の趣箇樣々々と、報るに黃金もうち驚きて、困じて今さら謀の、出る所を知らねども、まだ日も暮ぬに朱之介を、招きて商量すべくもあらず。主從共に氣を悶て、左さま右さま思惟るに、才に智略を得たりける。黃金は澳路に詳くやう、那城號の難題を、聽じといはば俺のみならで、儞も側杖打るべし。その殃危を脫れんには、儞と俺身と臥房を易

て、今宵竊に睡るべし。願ふは儞俺が身代りに、謀りて那人と一夕宿よ。然らば昔の忠臣義士
にも、劣らぬものと思はなん。この義を頼む、と他事もなく、拜ぬまでにかき口說けば、澳路
は眉を顰して、綷の難義を知りながら、推辭まうすは忠をも義をも、思はぬものに似たれど
も、その事ばかりは曉させ給へ、といふを黃金は聞あへず、儞が澁りて承引ぬは、景市と情由
あればならん。其頭の事も月來日屬、知らざるにあらねども、知りつゝしらぬ面色せしは、
儞を愛する心の誠、然とはおもはで主の難義を、救はじとならば今面前に、刃に伏してわれ死
なん。さる鬼々しき心とは、知らで早晚儞の與に、外視禦ぎてひともじの、臭きに蓋せし悔し
さよ、と淚吒つゝ怨ずれば、澳路は困じてやうやくに、思ひかへしつ嗟嘆して、さまでに思召
ならば、そは左も右もしはべりてん。いたくな怨み給ひそ、と勸解れば黃金は歡びて、爾らん
にはおちゐたり。景號はいぬる日に、周防の枝店へ赴きて、這里に在らねば那人と、宿るとも
後安からずや。他し枕を易すとも、身をこそ任せ心まで、任せざりせば疵つかず。迹の減るべ
きものならねば、術よく謀りて城號に、努曉得られな頼むぞや。然らば恁せん右し給へ、と課
し合する主從の、密談數刻に及びけり。憶ふに蛇は、その性淫なり。むかし大內義興の、燒亡
せし蛇に大小ありて、煙の內に顯れたり。恁れば城藏澳路們も、亦那小蛇の後身歟。薄情かり

ける邪淫なり。

第三十回

閨門を闢して荷三太客を逐ふ
妓院に宿して朱之介禍に値ふ

然程に日は暮れつ、這夜も既に時移りて、音四との鐘の響くにぞ、澳路は黄金と約束を、錯へずはやく臥房を易て、宿ばやと思ふ程に、毎にはあらで主人の妻の、雄波が猛可に所要ありとて、いそしく人もて呼せにければ、折歹かりと思へども、いなで罷べきことにしあらねば、走りて納戸へ赴きしを、雄波は招き近づけて、喃澳路、甲夜過たれば夜務は退て、はや就枕でもあるべきが、霎時肩癖を鑿て給。黄昏比より小女子們に、迭代に撃せしかども、小腕なれば些も利かず。果は孰も睡臥て、物の役には立ずかし。御新嬢に使るゝ、儞を召て夜深しに、俺身の按摩を執らするは、最も無心の所行ながら、且く頼む、と他事もなく、いはれて澳路は推辭によしなく、そはいと易き御用に侍り。賤妾とても指頭に、力なければ御こゝろに、稱ふべくは侍らねども、抓み療治に疲勞るゝまで、且阿肩より刱侍らん。允させ給へ、とさし寄て、撃つ肩癖の手拍子も、人こそ知らね間の歹き、今宵の事の胆向ふ、心ひとつに掛りても、又せん

術はなで肩の、機轉利手に拈りては、立つに立れず、立で母の、腹には有繫易がたき、脊筋徐に拊降す、炙灼の潰痂這頭歟、と思へば避て右へ引く、七の兪九の兪苦の世界、十指の運動き暇なみ、十二三より使れし、根柢の主と宅母君の、所要に小夜の深ぬれば、那約束は脇に倣る、穴所も知らで章門の、出し後れにならんか、と氣さへ心を揍勝手、手前勝手は人慾の、私雨にあらねども、外へはふらぬ鈴の間の、土圭も胸も狂ふとは、知らぬ雄波は笑しげに、やよ喃淡路太義々々、やうやく肩の輕う覺えて、重擔を卸せし心地ぞする。今宵は睡り易かるべし。慊いはば附もなき、問ごとに似たれども、面亭に在す逗留客の、朱之介刀禰とやらんは、黄金が爲に兄品の、好みなりといふよしを、豫も傳聞たるに、黄金が對面すべきや、と問れし折には氣も屬かず、年來疎遠なりとても、義理ある兄公の來ませしならば、對面せん事勿論なり。宜く管待し給ひね、と允せし事は允せしかども、逗留もあまりに長かり。棧太郎も家老爺も、周防へゆかせ給ひたる、旅宿の留守の事なれば、其首に女才はあらざめれど、親み過して幾番も、對面は入らぬもの、其麽黄金は爾後も、兄公に對面しつる歟、と問れて淡路は赧うなる、顏は瞽者に見えねども、片輪車も心あれば、轟く胸の苦しさに、推手も緩む迹戻り、言も訥りて姑くは、答難しを、然氣なく、否那大和の阿客人は、商賣用の多ければとて、彼へも此へも

赴き給へば、宿にいますは稀なり、と聞えしは現爾ぞ侍らん。新奥さまはいぬる日に、對面なされてその後は、といふても雄波は耳疎ければ、屢〻はしてうち頷き、然ばかりにまでせられずとも、よき事はよけれども、わかき人達の心つきなく、思ひたがへもあらん歟、とて却儕には問ひしなり。序次もあらば御新娘に、俺身が恁々いひつるは、と報るともけしうはあらず。夜は深たらん休みねかし。臥簟は甲夜に布してあり。俺身はこの儘就枕りてん。火の用心を頼むぞや。太義々々、と勞ふて、養るゝは遲き身の暇、澳路は思はず吻とつく息の、曇りに冴ぬ鐘の音も、拍子脫して立つ腹を、横に臥さして横かけて、告別して遽しく、走るも外へ憚りの、竊步しつゝそが儘に、黃金が便室にぞ赴きける。却說黃金はその甲夜の間より、いかで術よく城藏を、欺んとのみ思ひしかば、二更の土圭の響く比、速りに澳路を呼びしかど、他にはあらで一個の女婢が、澳路は目今納戸へ召れて、老奥さまの肩癖を、撃まゐらせて侍るなり、といふに默止して稍久しく、等ども等ども出て來ず。今にもあれ那人が、潛びて來なば爭何はせん。非如儕身ひとつを、澳路が臥房へ避たりとも、代りて這里に宿るものあらずは、何をもて那人の、手を空しうしてかへり去べき。這里と那里と近ければ、躱るゝとても見出されん。左やすべき、右やせまし、と思ひ難つゝ安からぬ、胸うち騷ぐを鎭んとて、衣引被ぎて臥てをり。浩

處に城藏は、嚮に澳路を酷く懽して、今宵ゆかんといひしかば、他が必黄金に報て、綷のこころを得させしならん。われ朱之介に先だちて、日屬の想ひを遂んず、と尋思をしつゝ人定りたる、その夜亥中の比潛やかに、黄金が臥房に來にければ、黄金は吁嗟と駭きながら、聲を發なば怒に乘して、殺しやすらん、と思ふにぞ、有繫に物のおそろしければ、身を縮して息もせず。城藏は這光景に、首尾こそよけれ、と含笑て、衾の内にぞ入りにける。噫嘻閨房の濫、中冓の言、牆に生ぬる茨に似たり。拂ふべからず說くべからず。その說べからざるものを、說くは則小家の珍說、こゝ勸懲を示すに在り。姦夫淫婦の恥を知らざる、人形にして獸慾なるもの、那一隻の牝狗を趕て、群狗喘ぎて亂走するなると、又安ぞ異なるべき。現容止は美人にして、心の惡女なきにあらず。姿の美なるは人僉見れども、心の醜は人に見られず。その見る所の美惡より、見えざる所に美惡多かり。類して美惡を心に擇まば、疇か黄金の美を羨み、誰が黄金の色に迷ん。便是張文成が遊仙崛、紫氏の源語の餘涎を舐りて、時好に筆を曲るにあらず。看官こゝに見るよしあらば、作者の辨を俟ずして、無明の醉を醒すもあらん歟。閒話休題、再說その夜艾、澳路はやうやく子二刻比に、納戸より退き來て、黄金の臥房に入らんとせしに、こはいかに何の間にか、黄金は既に城藏と、枕を竝べて臥てをり。淺ましき事今さらに、

いふべうもあらざりしを、はやくも其首を退きて、次の間なるその身の臥簞に、還り入りつゝ思ふやう、今宵に限りて生憎に、納戸へ召れて更闌るまで、引著られてありしかば、那約束の時刻後れて、心ならずも新奥さまの、御難に遇せ給ひけん。俺身の役を免れしは、歡しきに似たれども、いひ甲斐もなく牲に、做せしとて怨み給はなん。鈍ましきことしてけり、と臍を噬まで悔しきを、祐る神はなけれども、祭渡りし筑摩鍋、神輿を安措て睡一睡、翌快起て賠話せん、と思へば、帶を解捨て、軈て枕に就にけり。恁りし程に朱之介は、夜每に澳路が暗號して、黄金が臥房へしのばせしに、這宵は小夜の深るまで、絕て音づれなかりしかば、いかにく〳〵と俟不樂て、睡らんとするに宿も寢られず。つく〴〵と思惟るに、黄金が臥房の頭には、澳路ならで宿るものなく、導引に夜來を累ねしかば、他はやうやく懈りて、睡忘れたるに疑ひなし。おなじ居宅の内にして、這里と那里は遠くもあらぬ、廊下傳ひの案内は、他に緣らずも俺よく知れり。眞夜半ははや過ぬらんに、今宵を空に過さんや、とひとり焦燥つ情慾の、禁むべくもあらざれば、襪搔遣りつ起出て、廊下を過りて例の杉戸を、そと推す隨に開きけり。其處よりやをら潛び入りて、黄金が臥したる枕方なる、屛風を聊推開きて、進み入らんとする程に、と見れば思ひがけなくも、旣に一個の男子ありて、黄金と俱に臥てをり。驚きながら遠火光の、

刺すを便りに熟視れば、這密夫は別人ならず。主人の二男城藏なり。淺ましくも腹立しくも、心惡くも、鈍ましくも、その娼きこと堪がたければ、抓著まく思へども、俺とても俺が東西ならぬ、他の妻の重夫累姦を、咎めて捷ん理はあらず、黄金に情由を問もせで、性起らば不覺を取ることあらん、と深念をしつゝ阿容々々と、外面へ退きて、惆然として又思ふに、那城藏は俺より先に、嫂と情由のありける歟。大槩は然もあらで、俺と黄金と情由あるよしを、那奴は誰にか聞知りて、這宵竊に拔駈して、不意に起て短兵急に、攻著て竟に乘取りけん。寔に夜擊の城藏が、陣法智略の素速さよ。若果して爾らんには、黄金は實情ならねども、他が意に任せずは、事の敗にならんかとて、俺が爲にこそ從ひけめ。澳路に問はゞ是等の意味の、具に知るるよしあるべし、と思ひかへしつそが儘に、又次の間に赴きて、見れば澳路は熟睡して、搖覺せども毎よりも、遲く臥したる睡端の、春の短夜貪宿く、青年女子の癖なれば、應するだに夢ごころ、時移るまで覺ざりける。寢貌を熟うち目戍りて、是を黄金に比れば、二の町過ぎて三の町、四月初旬の初堅魚と、五島鮪に似たれども、黄金は既に先客あり。這宵はこれを名代雛妓、手を空くして客房へ、罷りて獨宿るには優ん。原景市の情人なれば、亦是緣なき衆生にあらず。こを濟度して持にせん、と腹に計較む浮氣の惡性、行燈を風と吹滅して、その懐に入

りしかば、澳路は忽地駭覺て、城藏なりと思ひしかば、鬼に取らるゝ心地して、念じて些も聲を得立ず。然るにてもこゝろ得がたきは、這宵の約束齟ふて、城藏主は既にはや、新奥さまのおん臥房に、潛び來まして共侶に、宿給ひにきと思ひしが、鈍や夢にてありける歟。もしその事の夢ならば、這里は俺が身の臥房にあらで、入替りてこそ睡りけめ。爾らざりせば城藏主の、新奥さまぞと思ひ違へて、わが方に來ますことやはある。嚮には免れて嬉しや、と思ひしは空憑めにて、竟に脱れぬ腐緣、せん術なし、と覺斯をしても、思ひ惑ひし事なれば、朱之介とは知らずして、空に枕を竝べつゝ、天の明る比やうやくに、城藏ならぬを悟りしかども、世に亦儔多からぬ、艶冶郎なる朱之介と、結びし假寐の夢なりければ、覺るを惜しと思ふのみ。知れども知らぬ面色して、後々までもこの事を、祕して黄金に報ざりけり。是よりして城藏は、朱之介と一宿替りに、黄金が臥房に暢ふこと、此彼共に懈怠なし。勢ひかくのごとくなれば、黄金は朱之介にのみ、會んと欲すること克はず。譬ば阿夏が佛生山にて、夜行太黑藏二名の賊の、耦配の妻にせられて、左右に媚たる爲體に、相似てなほも甚しき、濫行邪淫に恥を知らざる、白物們の癖なれば、城藏と朱之介は、やうやくに和睦しつ。交り柳巷に相伴ふ、嫖客に異ならず、迭に祕すべき閨房の、祕事さへに隔なく、公然として相譚つゝ、日毎に晝は酒うち飲て、

夜は淫樂を事とせしかば、朱之介は虞々と、大和へ還ることを思はず。城藏は親の外代に、出る活業をうち忘れて、莫逆知己と唱るのみ。家事理らず臭聲聞えて、世の胡盧になりぬべき、事情を原るに、城藏が朱之介を、忌嫌ずして親しうすなるは、他か黄金と情由あるにより、その破隙に跟入りて、謀りて本意を遂たるに、俺のみ獨竊せんとて、强顏丁らば黄金も怨みて、俺が自由にはならざるべし。一宿代りに他に讓て、迭に慾を分つ時は、黄金も俺を女才にせず、非如世にいふ强饗なりとも、生涯よく畔を讓りて、竟に一畝も失ずといふ、諺に似て俺に利あり。倘親兄に這事聞えて、發憤しくなるとても、その折には朱之介に、口を開せず塗著る、活路あり、と尋思して、後々までも忌まず嫌はず又朱之介は是より先に、城藏が事の趣を、黄金に聞て腹は立ども、今さら他と長短前後を、爭ふときは俺が事敗れて、黄金と長き別れにならん。黄金が他に從ひしは、俺に別れん事の惜しさに、恁々といひし誓言は、是實情の致す所、且く城藏と和睦して、一宿代りに餌を養はゞ、他も亦望足りて、俺が身の爲になることあらん。宿遊女に譬ていはゞ、他は客なり、われは間夫なり。そを娼んは倒に、胸陜き所爲なるべし、と思ひにければこれらのよしを、黄金に聶きこゝろ得さして、形のごとくに相計ひつゝ、陽情ばかりは城藏と、莫逆になりたるなり。左右する程に春は過て、四月も下浣になりけるに、黄金

は季春の比よりして、二个月月水を見ず。乳頭の色も黒むにより、懷胎にもや、と心に掛れば、朱之介に聶き報て、倘有身たらんには、おん身の胤で侍れども、良人の旅の留守なれば、いひときがたき所あり。什麼いかにしてよからんや、と問ふを朱之介は聞あへず、世に八月出生もあるなれば、月足らずとも棧太郞が、還らば塗著給へかし。倘又久しう還らずは、城藏に商量して、竊に墮胎すもよかるべし。實に俺か子歟城が子歟、正かに知るよしなきものを、他も亦然ばかりの、骨を折るとて恩でもなし、苦勞にすべき事にはあらず、といとも易げに慰めて、些も掛念せざりけり。然程に、主人船積荷三太は、今玆正月の初旬より、その子棧太郞と共侶に、大内家の城下なる、周防山口の枝店に赴きて、逗留旣に三四个月、快にも還るべかりしに、那里の主管小厮們が、流行病に犯されて、久しう起も得ざりしに、剩棧太郞もおなじ病症にて、うち臥したること一月あまり、やうやく四月の中旬に暨て、主僕搓り果しかば、初て進退自由を得たり。この故に左界より、景市竝に小厮們を、三四名召とりて、その闕たるを補ひしに、枝店の小厮兩三名、病痾によりて親里へ、遣したるはいまだ還らず、身まかりたるもありければ、景市をも及左界より、來つる小厮をも枝店に留めて、荷三太と棧太郞は、左界へ還らんと欲するに、棧太郞は幼稚き比より、質弱多病なりけるに、今又病後の事なれば、陸

路を從輿にて還れとて、他には從者兩三名を、隷て前日に起行せ、荷三太は左界より、將て來つる從者を、才に一名隨して、浪速へ赴く海船に、便りを求めうち乘て、浪路を風に儘せしに、日毎に順風なりければ、歇舟することは稀にて、思ひしよりなほ速に、左界の港口へ乘著しは、肆月二十六日の眞夜半比の事にぞありける。又棧太郎は初旅の、かへさは親と立わかれて、獨自由を得たりしかば、這里に立寄、那里に憩ひて、專遊山翫水の、爲に日數の後るゝを、迎に人を出されて、やうやくにしてかへり著けり。是より先に荷三太は、港口へ船の著し時、眞夜半なれども居宅まで、五六町に過ざれば、又那從者一名を將て、宿所へかへり來にけるに、小夜深たれば熟睡をしけん、奴婢們をな鬧せそとて、潛やかに背門より入りて、雄波に對面しつるのみ。黃金にも城藏にも、かへりしよしをいまだ知らさで、そが儘納戸に就寢りたる、詰朝快起て、早飯を果せし比、且はや黃金に對面して、棧太郎も恙なく、かへり來ぬるよしを報んとて、黃金が便室に赴きしに、昨夕は朱之介があふ夜にて、曉かけし私語に、些も睡らで明さん、と思ひしかども、夏の宵の、人貪睡き比なれば、思はず倶に熟宿して、既に天は明日の出て、窗の戸節に刺す影を、枕に受てもまだ覺ず、とは知らねども荷三太は、這光景に快らず、青年女子の癖なればとて、咱們親子が長旅の、留守に朝宿はよからぬ事なり。快覺さんと思ひ

つゝ、黄金々々と呼びながら、建たる屛風に手を掛て、二折許引開て、と見れば思ひがけなくも、黄金は一個の後生と、枕を並べて臥たるが、この時俱に驚覺て、起んとしつゝ男女齊一、無慙や主人と面を照して、怕慌つ避易したる、朱之介は度を喪ひて、吁嗟とばかり平張術すを黄金は透さず襖うち被て、頭顱隱せど尻辨の、歹き科とて術もなく、綻びけらし寢間衣も、繕ひがたき大難義、折もあし邊の蟹ならで、穴はなき歟、と思ふのみ、身の置どころなかりけり。恁りけれども荷三太は、素より思慮ある老煉の、なほ堪忍を旨として、駭きながら罵も咎めず、手ばやく屛風を引輪らして、足はやに退きつ、軈て納戸に立かへり、妻の雄波にうち對ひて、逗留客の有やと問ふ。當下雄波は朱之介が、事の趣恁々と、聞つる隨に報知して、那大和なる商旅は、黄金が爲に兄品の、舊き好みのあるよしなれど、對面は只一度のみ。日毎に彼此出あるきて、宿には在らずと聞侍りき、といへば荷三太冷笑て、目さへ耳さへ疎き渾家の、何事をかよく知るべき。身の正直に思ひ比べて、人毎に皆正直ぞ、と思はゞ不覺の事あらん。そは城藏に問ふべけれと、呟きつ掌鳴らして、城藏召べとて呼せけり。然程に城藏は、昨夜半に親荷三太の、歸鄕を夢にも知ざりしに、今朝は未明に呼覺され、よしを聞起出て、そが儘父に對面して、留守中の所要を述、損益を論じなどして、その身の子舍へ退りしに、且くして又召

れしかば、走りて納戸へ赴きしを、荷三太身邊へ招きよせて、やよ城藏聞くに黄金が兄品なる、朱之介といふ後生が、大和より尋來て、久しく逗留せらるゝならずや、何等の故に三四个月、留めて大和へ返さぬぞ、と問れて城藏さん候、那人は一百反の、唐布をも買とるべく、沙金も多く兌せんとて、尋ねて這里へ來つるなり。爾るに知らせ給ふごとく、唐布は船間にて、その數足らず候へば、入津の日を俟んとて、逗留遂に今に及べり。勿論嫂御の兄品にて、總角の比母親と、共に福富の宿所にをり。爾後他鄉へ赴きて、疎遠に過せしよしなれども、又苟且の客人ならねば、出てゆけとはいひがたさに、その意に任し候ひき、といひ瞞るを荷三太は、聞つつ頭をうち掉て、そは生活の爲なりとも、家には妻子もあるべきに、長逗留は要なき所行なり。況今玆は唐布の、新渡なければ荷は整はず、縱何時まで俟るゝとも、望の稱ふべくもあらねば。這義を報てけふ速に、出し遣ることそよかンめれ。然とも那人疑ふて、還らじといはゞせん術あり、畢竟和郎も由斷なり。等閑にな思ひそ、とこゝろありげに吩咐れば、城藏は瘢もつ足の、臑毛拔るゝ心地して、痛入たる親の裁斷、倘俺がうへさへ知られはせずや、と思へど色にも顯さず。只阿唯々々、と言承して、その身の子舍に退きつ、朱之介を竊に招きて、只今親にいはれし趣箇樣々々と囁き告て、この事必謂あるべし。親爺は昨夕眞夜半比に、船著きたりとて還られ

たり。爾るに嫂御は今までも、昨夕の儘に起ても出ず。女婢們に諮ねしに、持病の癪もや發りにけん、とばかりいふて誰も得しらず。思ひ合する事はなきや、と問れて朱之介は愚むによしなく、さればとよ、その事なれ。今朝は咱們も黄金さへ、例の時刻を宿遺れて、日の出るまでありける程に、鈍や親公に見られたり。その爲體は恁々なりき、と今見るごとく聶き示して、かの折咱們は親公と知らぬを、黄金が目注で諭せしかば、撲仆して逃んはさすがにて、われにもあらず狼狽て、活たる心地もせざりしに、罵も咎めずその儘に、親公の退き給ひしかば、透を得たりと脱出て、客房にかへり來にけれど、左ても右ても這里にはをられず、逃去らばや、と思ふものから、那唐布の一義もあれば、和君に商量して後に、と思ひかへしてありけるに、遂出さるゝのみにして、事治らば且めでたし。しかはあれども唐布と、沙金の二種手に入らざれば、大和へとては還りがたかり。いかにせまし、と陶惑の、密議に城藏又駭きて、それにて事は稍解せたり。然のみな思ひ屈し給ひそ。沙金の事は今でも易かり。唐布は新渡なし、と親爺のいひしはこゝろ得がたかり。哥々を出し遣るべき爲の、搗鬼にもやありつらん。程なく船の入るべきに、左も右もしてまゐらせん。哥々は這里より程遠からぬ、攝津州住吉の社頭なる、岸松屋といふ客店に、宿易をして俟給へ。那岸松屋の主人とは、咱們相識ならねども、その名

は這里へも聞えたり。今その旅亭を定るは、後日に音耗せん爲なり。這義を忘れ給ふな、と世に憑しく慰れば、朱之介はうち頷きて、いはるゝ趣こゝろ得たり。黄金はいかになるべきや、と問へば城藏沈吟じて、哥々のうへだに無異なれば、親のこゝろを推量るに、兄棧太郎の歸郷を俟て、離緣を薦めて親里へ、還さんとこそ思はれけめ。この義も安危の定る日に、俺亦はやく報まうさん、といふに朱之介は歡びて、爾らんにはおちゐたり。且宿易を急ぐべし、と聶き果て遽しく、客房へ退きて、旅行の打扮故のごとく、特に手ばやく整て、却城藏等に別を告て、浪速津投て立出けり。是よりの後城藏は、竊に怕れ身を阽みて、黄金が事を思ひ絶けん、猥褻がはしき擧動せず、俺幸ひに美日にあふて、朱之介只一人を、損代に出せしは、このうへもなき造化なり、と思ひにければ後々まで、閨門おのづから理りて、制せざれども牆に鬩ぐ、外の侮りなかりけり。遮莫黄金は初より、實情をもて城藏に、兩路かけし契りにあらねば、そこらの事は倒に、物怪の幸に似たれども、心にかゝる朱之介が、出て徃方と身の久後も、測りがたきは舅の胸衷、罵りもせず咎めもせねど、面目もなき愆を、いひも釋れずその朝より、持病の癪に假托て、臥房籠りに長き日を、消し難つゝ不樂しさに、壁に向ひてつく〴〵と、おもひ疲倦れて苦しくも、吻とつく息は雲となり、雨となりにし夢の跡、結びも果ぬ妹と兄の、山外戀

しと歎きたり。案下某生再說、朱之介晴賢は、思はず左界に逗留して、邪淫の爲に家路を忘れ、虛々として在りける程に、竟にその事發覺れて、主人船積荷三太に、逐出されて又さらに、進退其首に谷りしを、城藏が云云と、慰めしをのみ心當に、且攝津州まで退んとて、住吉を投てかへりゆく程に、肚裏に思ふやう、俺唐布を買ん爲に、左界に杖を留めしに、折の叵くて手に入らず。なれども春より三个月の、僦賃あるを取られねば、わが金は故の儘にて、なほ二裹こにあり。大和へかへること克はず、武藏へ歸參しがたくとも、是だにあれば往さき每に、四海皆兄弟なり。又憑しき友達いで來て、落著く處のありもせん。そは已ことを得ざるの所爲にて、俺が本意ならぬ事なれば、且城藏が意見に任して、黃金が安危も聞知るべく、唐布も買るならば、買て大和へ還るに不如、と尋思をしつゝ急ぐ程に、はや住吉へは半里ばかりも、あるべからんと思ふ比、物欲しくなりしかば、その路の傍なる、村落酒肆に立よりて、尻掛酒を喫ながら、酒肆の主人を見かへりて、翁よ問まくほしき事あり。住吉の社の頭に、岸松屋といふ客店あるや、と問れて主人は頭を傾け、那社頭には海船の、宿する客店多くあり。岸松屋も姬松屋も、有としならばありもせん。己は聞知り候はず、といふに朱之介は疑心起りて、なほ云云と詰る折、後の凳に尻を掛て、憩をりし一個の男子あり。朱之介を呼かけて、客人咱們

は住吉の人氏なり。抑何等の所要ありて、岸松屋を問給ふぞ、といはれて朱之介は駭きながら、急にその人を見かへるに、身長高く全體肥て、面は薄赭色なるが、年歳は四十有餘なるべし。身には仁田山紬の大縞なる夾衣に、皂紗綾の裏衣領とかいふものを被たるを、二領ばかり襲著て、腰には白金の重帶したる、苛物作の長腋刀を横佩たり。若是角力士にあらずは、必地方に名の賣れたる、俠者なるべしと思ひしかば、遽しく會釋をして、原來和君は住吉の、里人でをはする歟。咱們は大和の旅客なるが、左界の所親許赴きて、目今はかへるさなり。爾るに人と約束せしことあり。その人誨て、住吉なる、岸松屋に逗留して、音耗を等、といはれしかば、その旅店に宿を投ん、と思ふものから不知案内にて、心もとなきよしもあれば、且這主人に問たるなり、といへばその人頷きて、いはるゝよしはこゝろ得たれども、和主知らざる所あり。那岸松屋は年々に、活業やうやく衰へて、借財多くなりければ、債を償ふこと克はず。この故に家を鎖して、門に賣居の紙牌を貼出し、外の借屋へ轉宅せしは、四五日前の事なりき、といふに朱之介は駭歎じて、そは亦的が違ふたり。約束せしは岸松なるに、外の客店に宿を投て、俟とも使の索わびて、遂に屆かずなりぬべし。さても〳〵、とばかりに、困じ果たる面色なるを、件の俠者慰めて、然らんにはせん術あり。咱們は十三屋九四郎と喚れたる、地方で

岸松屋の舊宅の、東鄰は咱が宅にて、西鄰は空地なり。こゝをもて岸松屋一二の俠者なり。那岸松屋の舊宅の、東鄰は咱が宅にて、西鄰は空地なり。こゝをもて岸松屋を、訪來るものの一人として、わが宿所に立よりて、他が往方を問ぬはなし。咱們は客店ならねども、けふより和主の宿すべし。然らば約束せし人より、異日に使を來さるゝとも、索當ざる事やはある。この義に從ひ給はずや、と他事なかりける俠氣の、いと憑しく聞えしを、朱之介は承歡びて、そは思ひがけもなき、好意にこそ候なれ。晩生は大和なる、上市の商旅にて、朱之介と喚るゝものなり。宜く計ひ給ひねかし、と頼めば九四郎異議もなく、然らば咱們と共侶に、日の暮れぬ間に急ぎ給へ。けふは這頭に所要ありて、來つゝ咱們もかへさなり。酒をも喫つ思ひの隨に、憩ひにければ誘ゆかん。やゝ快々と急ぐにぞ、朱之介は遽しく、酒肉の價を主人に取らして、菅笠引提て九四郎が、後に跟きつゝ出にけり。恁而十三屋九四郎は、朱之介を伴ふて、はやく宿所にかへり來つ、女房乙藝に恁々と、朱之介が事を告しかば、乙藝は軈て朱之介を、褊室に休らはして、茶を看め饌を羞めて、最丁寧に管待けり。是より日々に朱之介は、主人の進止を見て知りぬ。その活業は櫛挽にて、店舗に職匠兩三名をり。そは皆乙藝に任用して、九四郎は活業を旨とせず。年來地方の後生們の、頭梁品に立られて、鬩諍の捫擇、夫婦の離別、或は人の子の勘當せらるゝを、和解て舊へ納るを、己が任にしたりしかば、宿所に

在ること稀なりけり。然程に朱之介は、思ひがけなく九四郎が、俠氣をもて主せられて、をること一旬にあまりしかども、城藏が浮薄なる、亦音耗をすべくもあらぬを、いかに〳〵と俟不樂て、狐疑して安からず思ふ程に、有一日九四郎がいふやう、咱們は嚴島の辨才天の、百味供の講頭なれば、翌は船路を安藝へゆくなり。勿論和主の逗留は、何時迄なりともけしうはあらねど、商旅の事なれば、本錢も盤纏も多かるべし。懷にせし金あらば、咱妻乙藝に預け給へ。爾らば手實をまゐらすべし。咱們が這里にあらんには、非常の怕れなけれども、旅宿の留守には他鄕の客を、侮るもののありもやせん。故にこの義に及ぶのみ、といふを朱之介はうち聞て、肚裏に思ふやう、現這主人の俠氣なる、惡心あるべきものにあらず。然るをなほ疑ふて、所藏の金は多からず、と僞りて預けずとも、夫婦に賊心あらんには、殺して畧んも易かるべし。いはるゝ隨に預措かば、倒に後安かりなん、と尋思をしつゝ一議に及ばず。心屬れし親切の、歡びを述金を出して、九四郎に預けしかば、九四郎受とりて數撿るに、百九十五兩ありけり。初落葉が朱之介に、遞與せし金は二百兩なり。そを二兩は京師と左界にて、路費と贈東西などに用ひしを、今又盤纏の爲にとて、三兩遺して預けしなり。登時九四郎は、女房乙藝を身邊へ召て、綷縩々と言示し、金預りの手實を寫て、朱之介に遞與しつゝ、そが眼前に件の金を、乙藝

に簞笥へ藏めさせて、緊しく鎖してその鍵を、乙藝に預けて、留守の間の、用心を教諭しつ、その詰朝幾十名の、講夥計と共侶に、海船にうち乘りて、安藝を投てぞ走らせける。是よりの後九四郎が、義弟乾兒の後生們は、日每に立替り入代り、詣來て留守の安否を諮ね、或は東西を贈るもありて、朱之介にも親しくなりけり。慣りし程に朱之介は、いかで日頃の鬱胸を、霽さばやと思ひつゝ、有一日酒を沽ひ、魚肉を徵め、件の後生們に薦め團坐をさして、四表八面をうち相譚せて、をさ〳〵笑ひ樂む程に、後生們がいふやう、客人は這頭に名高る、乳守の里を觀給はずや。江口神崎は衰へたり。京師の外に乳守に優たる、柳巷は又あるべからず。誘給へ。俺們案內を仕らん。よき家裏にあらずや、と言語齊一そゝのかせば、色好みなる朱之介、然らでも醉たる癖なれば、聞つゝ連りに雀躍して、ゆくべし〳〵。行ざらんや。咸共侶に、と身を起すを、乙藝は屢禁れども、朱之介は聞ぬ態して、蹉跎きながら立出たり。そが中に二三名、乙藝に叱られ呼禁られて、遂に得ゆかずなりしかど、六市四摠と喚做るゝ、此彼兩個の後生は、そが儘朱之介に從ひて、乳守の里に赴きつ、柳巷內を那這と、且く浮れあるく程に、朱之介は今宵初て、路柳牆花の美麗しく、鄭聲艷曲の狡猾しきを、目擊したる事なれば、魂さらに身に附はず、誘青樓に登らんとて、獨をさ〳〵進みしを、六市四摠は酒の醉と、共に興さ

へ稍醒て、天明て倶にかへりゆかば、牽出せしを科にして、いよゝ嫂御の腹を立て、哥々が還らば必告ん。紛て戻るに優ことあらじ、と思へども然はいひ難て、浮世袋屋と喚做したる、乳守第一番なる、名樓へ案内をしつゝ、件の二人は引外して、逃て宿所へ還りけり。且くして朱之介は、六市四捴が迯たるを、知るといへども今さらに、出てゆかんはさすがにて、妓有に引れて樓上にうち登り、目擇て本樓第一と聞えたる、今樣といふ名妓を央けり。獻酬の玉觴、初會の式禮事訖れば、いまだ客なき遊君們、幾名歟聚來て、歌僊艶曲の技を盡し、或は馬潑六して興を催す快樂の歡會いふべくもあらず。その席上の光景と、洞房の趣は、每輯格數に際限あれば、具に述るに遑あらず。看官宜く猜すべし。恁而更闌席散りて、朱之介は了鬟に、倡導れて臥房に入りぬ。綾羅錦綉の重衾、沈麝鷄舌の香の薫亦人間の東西としもおもほえず。身は遊仙の崛に、神女と睡る歟と疑はる。俟こと稍久しくして、那今樣は臥房に來にけり。然ども痞の發りしとて、うち解もせずそが儘に、背を抱せたりければ、朱之介は艴として、その無禮なるを咎めしかども、然しもいふ甲斐なかりしかば、思ひしにも似ず興盡て、醉に堪ねば熟睡をしたる、その間に今樣は、朱之介が脇挿の、刀を竊に引抜て、みづから吭を串きつ、俯たる隨に死にけり。この故に朱之介は、濡衣を被せられて、領主の廳に牽れつゝ、緊しく獄舍に繋

れけり。その緈の趣を、なほ詳に知まく欲せば、そは編を繼ぎ卷を易て、第四輯の開場に、解分るを聽ねかし。

近世説美少年録續編（新局玉石童子訓）

東都　曲亭主人口授編次

巻之一上册

第參什一回

自傷の落花衆人を惑しむ
無明の臺月正婦を繋ぐ

在昔孰の御時、孰の國に歟ありけん、槐の郷蟻宮村といふ一村落に、架空先生と喚做たる生儒ありけり。原是京家の學士にて、江家の流を汲む者なれども、其性清白に過て、世と推移ることを得ず。竟に這頭に流寓ひて、里の總角等に、手迹を教るをもて、生活にしぬる程に、客を愛する癖あれば、手習兒等皆辭し去て、最徒然なる折は、田夫山妻、這那となく訪來ぬる毎に、其好む處の稗史小説を説和げ、或は古人の賢不肖、善惡邪正を論辨して、善を薦め惡を懲し、自警め他を誡ること多かりければ、郷黨等相喜び信て、皆其話説を听まくす。然ば架空先生

は、有一日畊作の暇ある莊客等が、うち連立て來にけるを、集へて是に告て道く、俺昨宵奇妙なる夢を見たり。夢は果敢なき者なれば、泡沫夢幻と浮屠家も說にき。遮莫周禮に占夢の官あり。上古唐山姫周の時、原夢をもて事の吉凶を判斷したり。然れば我大皇國も、遂古は貴賤夢を取る事あり。崇神天皇の四十八年春正月己卯に、天皇詔して、兩箇の皇子、豐城命と活目尊の、各獨しし夢によりて、天日嗣を定め給ひし事、日本紀に見えたり。又欽明天皇は、初皇子にて在しし時、瑞夢空しからずして、後竟に大位に卽給ひにき。悉れば丁固の腹に、松生たりと夢に見て、後竟に三公に登りしといふことも、誣たりとすべからず。俺見し夢は是等と異なり。各位も聞つらん。近會世に隱れなき、那惡青年、末朱之介晴賢が人成りはさらなり、大知の由緣を立去りて、浪速の浮世袋屋にて、不測の禍を釀したる、其事の起りまでは、既に世に聞えたれども、其後の事は甚麼ぞや、是を知るよしなかりしに、所云昨宵俺夢に、他が上に就て、其後の事いへばさらなり、兩善童年と聞えたる、大江茂林四郎成勝、峯張柒六郎道能等、主僕出世の顚末まで、具に是を知り得たり。汝等が爲に說出さん歟。言長くとも听ずや、といふに大家歡びて、そはこの年來日屬より、渇に水を欲する如く、聞まく思ひし事に侍り。いかで〳〵、と促せば、架空先生えたり貌に、書案引よせ扇子を笏に、其物語にぞ及びけ

る。却說、末朱之介は料らずも、住吉なる、十三屋九四郎許旅宿の程、酒癖の舊病禁め得ず、當晩那乳守の里の妓院なる、浮世袋屋に名もしるき、今樣と枕を竝べて、一夜の夢を結まく欲せしに、憶ふにも似ず今樣は、猛可に痞發りぬとて、背推向け、陽睡して、呼び搖動せども應せず。是等の事の趣は、前輯第三十回の、結末に寫し出したれば、今又こゝに具にせず。然ばこそあれ朱之介は、月瞻る宵の雨障り、雲と做るべき樂みの、いまだ央ならずして、酒の醉さへ興覺て、腹立しさは涯りなきを、罷戀さんはさすがにて、左さま右ざま思ふやう、俺青樓の遊樂は、只是今宵創なれば、意氣地とやらゝに疎けれども、這奴何等の所以ありて、今業平ともいはれぬる、咱等を慘刻背著けん、情態寔に解がたかり。非除是等の空華は、色香を殫して靡くとも、路の柳、牆の桃のみ、黃金が客顏眞實情に、豈優らんや。最烏滸なり。恁とは知らで浮れ來て、可惜錢を費しにき。悔しき事をしてけり、と思ふ兀自宿も寢られず。薦見なき夜は忘れ草、忘るゝとにはあらねども、歎息盡て短夜の、深ゆく隨に心疲れて、寓處なき宵は船底の、枕外すを覺ぬまでに、竟に熟睡をしたりける。恁而丑三の時候にやありけん、朱之介は睡覺て、寐返をせまくするに、最腥き血歟、水歟、流れて枕兒を浸せしかば、訝りながら頭を擡げて、其頭を佶と見かへるに、噫無慙やな、今樣は、刃に吭を刺串きて、俯して我身邊に在


日月燈江海油風雷鼓板
天地間一番戲場
架空先生



架空先生
夢物語の
開場
堯舜旦文武末莽操丑淨
古今來許多脚色

り。那身はさらなり、襀兒も蒲團も、皆是朱に染做て、亦生べうもあらざりける。今這事の光景に、朱之介は且驚き、且慌て聲を惜まず、事あり、事あり、と叫びつゝ、屏風を連りに打鳴せば、左右の坐席に臥したりける、嫖客も娼妓も駭き覺て、倶に間の重紙戸を、怕と推啓き闚覦て、吁嗟とばかり聲も得たてず、怕れて又夜衣を被ぎて居り。有斯る折から一個の妓有が、客の間毎の行燈の、油を遺なく篩足さんとて、油壺を携て、廊下傳ひに來にける程に、今朱之介が事ありとて、叫ぶ幾聲にうち驚きて、走りて軈て开里に來て、開く障子と屏風さへ、隻手を掛て差覗く、臥簞の裡の大變に、膽を潰しつ、怕れ惑ひて、二たびはよくも見ず。そが儘踵を旋して、走り出つゝ檀階子を、墜るが像く降り來つ、主人の臥房に赴きて、今樣が橫死したるを、看一看ける隨に告しかば、主人夫婦の驚き、いへばさらなり、一家兒なる奴婢等皆起出て、相呼くのみ、せん術を知らず。叉手在べきにあらざれば、主人は只得兩人の妓有に、手燭を秉し先に立せて、徐に樓上に升り來つ、今樣が臥房の外面より、且其事の光景を見るに、果して今樣は橫死して、鮮血流れ横はり、膝を容るべき處を知らず。客は則青年兒にて、膝を組み手を叉きて、噪色なく端然たり。當下主人はおそる〳〵、朱之介にうち向ひて、客人何等の怨ありて、今樣を殺し給ひたる。小可は當屋主人、浮世袋屋暖簾次是なり。思ひがけなき這

爲體、人を殺せば身も殺さるゝ、素より覺期の上なるべし。抑御身は那里の人ぞ。出處來歴、怨の顚末、一事も遺まず告給へ。天も明ば訴まつりて、守の御讞斷を仰ぎまつらん。いかにぞやいかにぞや、と急迫しく問ども毫も噪がぬ、朱之介荅へていふやう、主人の推量酷く錯へり。俺豈何等の怨ありて、かゝる暴虐を做す者ならんや。俺は大和の旅客にて、末朱之介と喚做す者、いぬる比より住吉なる、十三屋九四郎許、淹留止宿の徒然に堪ざれば、九四郎の乾兒なる、六市四摠と喚做したる、一二の壯佼を相倶して、今宵這里に浮れ來つ。解語花を酒菜にして、夜と共にと思ひしを、いまだ佳境に入ざるに、六市四摠は逃去りて、鈍や俺のみ這里に在り。這今様を呼取しに、自餘の娼妓も聚合來て、艷曲歌儛に慰められし、其席稍竟りて、臥房に入りては趣もなく、俺敵手なる這今様は、持病の痞發りぬとて、背向に臥て呼べども荅へず。浮の空吹く風暢ふ、出口の楊柳ならねども、靡くを恒なる河竹の、意にうき節ありとても、財貨に儘する一宵妻が、客を客ともせざりける、無禮しさは憎かるを、罵懲さんはさすがにて、俺さへ醉に勝ざれば、そが儘に熟睡して、小夜の深るを知らざりける。枕血臭く衣濡て、肌膚に堪ねば驚き覺て、枕上なる這行燈の、光に就て四下を見るに、思ひがけなき今様は、俺脅挿の行刀もて、自殺して俯て在り。最淺ましき凶變に、うち驚きつゝ聲を泝りに、妓有等を呼びし

は這故なり。いかで亮察あれかし、と詞徐に說示すを、暖簾次聽つゝ沈吟じて、いはるゝ趣眞なりとも、鄙語に云死人に言なし。今さら御身の片言もて、何でふ疑ひを解くよしあらんや。闇き處には神明あり。明き處には王法あり。一も入らず二も入らず。里長に告、且訟まつりて、虛實は曇らぬ鏡做す、守の御明案に依んのみ。這方へ來ませ、と兩個の妓冇に、朱之介の兩手を捕せて、推立しつゝ乾淨たる、老鴇子舍に屛居て、人を附てぞ守らせける。左右する程に、早天明に做りしかば、客は皆かへり去りて、娼妓等をも其頭に在らせず。然らでも早開は靜悄なる、青樓然しも寂寞たり。只朱之介をうち守る、妓冇、及常傭の蔫兒とかいふ、究竟の壯佼等、四五名其里に集合居り。爾程に暖簾次は、猛可に人を走せて、這事の凶變を、里長に告知らせつ。又住吉なる、十三屋へもこの義を告て、朱之介は那里にある、旅客なるや、と問せなどす。是により乳守の里長故老們は、浮世袋屋に聚ひ來て、先令樣の亡骸を、撿し果て却朱之介の、いふよしを聽正し、告訴一通に載ざることなく、暖簾次と共侶に、三好の陣館へ訴けり。是時京都の管領、高國入道常桓は、屢三好海雲と戰て、沒落して伊勢に在り。この次の年享錄四年に至りて、高國入道は、攝津の國大物の戰に敗死す、事は前輯第二十六回に見えたり左界竝に浪速津は、新管領右京大夫晴元の領地にて、家臣三好筑前守、元長入道海雲の一族なる、三好木工頭職善は、一隊の士卒を從へて、

則浪速の陣館に在り。この日乳守の妓院なる、浮世袋屋暖簾次が、里長們と倶に訟にて、娼妓今様が横死の事、其客朱之介の事の趣さへ、詳に知られしかば、職善則其隊の頭人、悳嶋皆人頼紀を使として、事の虚實を撿せしむ。頼紀則伙兵を將て、浮世袋屋に赴きつ、先今様の屍骸を撿して、他が出處を諮に、暖簾次答へて、這今様は、出處西國なりと聞しのみ。その親里は詳ならず。今より七八稔前つ比、浪速に乾父候て、その手より十稔期に買取りし、娼婦にて候へども、其乾父某甲は、前つ年身故りて、外に縁處は候はず。又今様を害したる、青年兒は旅客歟、旅客ならぬ歟、知らず候へども、熟客には候はず、と報るに頼紀點頭て、却朱之介を召よせて、事の顚末を質問ふに、朱之介は阿容たる色なく、嚮に暖簾次に說示し、其事の顚末を、一句も錯へず陳ずれば、頼紀聞あへず頭を掉て、其言究めて胡論なり。非如熟睡をしたりとも、枕を竝べて臥たる娼妓の、自殺を知らざることやある。且今様が身を傷りしは、儞が帶たる刃ならずや。それのみならで儞が衣と、身にも流血塗れたり。袷と云恰と云、這娼妓を殺せしは、儞にあらで是誰そや。疾綁めよ、と暴やかなる、聲共侶に伙兵等は、承りぬ、と應へも果ず、走り蒐りつ、朱之介を、緊しく結扭りて推居けり。免れがたき禍鬼の、冤屈に係るゝ、朱之介は慌て惑ひて、跪きつゝ頼紀に、うち向ひて陳るやう、御疑はさること

ながら、小人實に今樣を殺さず。家は大和の上市に在り。孀婦主人落葉が女壻にて、妻は那家の女兒に侍り。小人はいぬる比より、生活の爲左界に來つ、這頭に人を待よしありて、十三屋許宿にしぬるのみ。且左界なる船積荷三太と、其子城藏には舊緣あり。城藏を召よせて、問せ給はば分明にて、御疑は解けつべし。いかで〳〵、と辭かへすを、賴紀听かず、冷笑ひて、大和に岳母ありとても、又左界なる荷三太等に、舊緣ある者なればとて、人を殺さずといふ、分說になるべきや。いふよしあらば陣館へ、參りてこそ、と叱禁めて、却乳守の故老等を見かへりて、儞等は忽く住吉に赴きて、這朱之介が宿なりといふ、九四郎を將て廳へ參れ。九四郎倘家に在らずは、還るを俟て明日將て來よ。急げ〳〵、と赶立遣りて、卒や浪速へ退んとて、朱之介を牽立させて、軈て樓上を下り來ぬれば、暖簾次里長いへばさらなり、浮世袋屋の主管妓有爲兒までも、主の安危心許なしとて、准備の裏飯を一兩個の、小厮に駝せ相從ふて、陣館へぞ參りける。爾程に惡島皆人賴紀は、日景敍く時候かへり來ぬる、三好の陣館なる局の內へ、朱之介を牽入れさせて、伙兵幷に、暖簾次里長等に守らせつ、那身は則後堂に造りて、三好木工頭職善に、娼妓今樣が橫死の爲體、罪人朱之介が、陳じし言の趣を、箇樣〳〵、と報しかば、職善听て、爾らんには、俺出て听べしとて、其備をいそがせらる。有斯し程に暖簾次里長

等は、廳の局の片隅に、等こと半晌許にして、三好職善出席あり。有司悳島頼紀等、侍座して且朱之介を、檐の下に牽居させて、職善みづから、其罪を質問ふに、朱之介又答る事始のごとく、今樣は自殺にて、小人が害せしならず、といふを職善叱禁めて、儞は只管冤枉を唱へて、云云と陳ずれども、今樣を刺殺ししは、則儞が行中刀にて、其身も鮮血に塗れたれば、かばかり正しき照据はなし。儞が數日の宿なりといふ、十三屋九四郎と、左界の城藏をも召よせて、事の虛實を鞫問ん。又娼妓今樣は、乾父既に世を去りて、緣所なき者ならば、其亡骸は暖簾次等、形の如くに執措べし。猶も詰る義あらば、異日亦復召よせてん。この意を得よ、と宣示して、身の暇を賜りつ。朱之介をば丌が儘に、緊しく獄舍に繫せけり。恁而木工頭職善は、この次の日も朝より、地方の民の愬訟を、听定めて在りける程に、昨日悳島皆人頼紀に吩咐られたる、乳守の故老等は、住吉なる里長と共侶に、十三屋九四郎が女房乙藝、幷に九四郎が乾兒、六市四揔を將て詣來ぬる由聞え、又左界なる浮寶屋船積荷三太は、活業の爲に、いぬる日其子棧太郎と倶に、周防の山口なる枝店に赴きて、今は家にあらず。又二男城藏は、昨今惑冒の疾病にて、うち臥て候へば、只得主管鼠七と喚做す者、揔代として參り候ひぬ、と聞え上けり。この時前廳果しかば、職善則局の内へ、乙藝鼠七、六市四揔、其地の里長等はさらなり、朱

之介をも獄舍より牽出させて、先鼠七に詰るやう、鼠七儞は、這朱之介を認れりや。他既に陳じて、荷三太城藏等と、舊緣ありといへり。實に然るや。甚麼ぞや、と問へば鼠七額衝たる頭を擡げて、傍なる、朱之介を見かへりて、然ゝ候、這青年兒は、さきつ比、大和の旅客なるよしにて、沙金と唐布を買んとて、左界の店に來にける折、唐布は舶間にて、いまだ入津せざりしかば、姑且止宿を饒せしに、淹留一向を經ぬる隨に、好らぬ噂のありもやしけん、主人荷三太歡ばず、猛可に辭て、立去らせ候ひき。但是止宿の旅客にて、荷三太親子に舊緣の、これある者には候はず、といへば職善點頭て、やをれ朱之介聞たる歟。今鼠七が稟す所、荷三太等に舊緣なし。儞が詐偽知るべきのみ、といはれて朱之介頭を擡げて、御諚では候へども、小人荷三太城藏等に、緣ある者に候はねども、那家の新婦黃金には、正しき舊緣候なり、といはせも果ず職善は、怒れる聲を震立て、默れ濫妨兒舌長し。儞嚮には荷三太親子に、舊緣あり、と陳じしに、今鼠七になしといはれて、又其新婦に舊緣あり、と言を變人を易て、佯陳ずる賊情分明。最烏滸なり、と叱懲して、敢又多辯を饒さず。職善當下、橋廊に侍りたる、惡島皆人賴紀を見かへりて、住吉なる里長等は、何どて九四郎を倶せずして、妻と乾兒を將て來たるや、と問へば賴紀額き承て、然ゝ候、九四郎は、前日講夥家と共侶に、安藝の嚴島なる、辨財天へ詣ん

とて、船出して候へば、亟の召に充がたかり。この故に里長等相計つ、九四郎が妻乙藝、同宿なる兩個の乾兒、六市四摠と喚做す者を、倶して參り候なり。件の六市四摠等は、前夜朱之介に案内して、浮世袋屋に適きし者なり。勿論夙く辭し去りて、止宿せずと稟せども、連係なき者にあらねば、召倶させ候ひき、と告れば職善又點頭て、軈乙藝と六市四摠を、擔頭近く召よせて、先乙藝に諮るやう、儞が良人九四郎は、素是何等の由緣ありて、朱之介を留在せたる、と問へば乙藝答ていふやう、否、緣も好も侍らねども、他はいぬる日、奴家が家の隣なる、岸松屋てふ客店を、宿にせんとて來にけるに、其岸松屋は近き比、生活既に衰て、他鄕に移りて在ずなりしかば、他は困じて云云と、いひしを良人の俠氣もて、不便にや思ひけん、そが隨留在せしに、九四郎は人に誘引れて、安藝へ出船の留守の程、思ひがけなき禍鬼に、胸のみ潰れ侍れども、九四郎在ねば、この餘の事は豫より、聞たる事は侍らずかし、といへば職善又點頭て、然らば又六市四摠は、朱之介と共侶に、娼妓の席に連りながら、何どて忩く辭し去りたる、と問へば六市四摠等は、言語齊一答るやう、然ゝ候、かの折に、朱之介が醉に乘して、乳守に行て復喫んとて、誘引立て放さねば、已ことを得ず共侶に、那里まで行しかど、乾父にて候九四郎は、任俠を磨く心もて、小人每を警て、四下近き艶鄕に、止宿を饒し候はねば、後に知られんこと

を怕れて、辭し去りてこそ候なれ、といふを職善うち笑ひて、非如止宿せずもあれ、其席に連りて、猶云云と陳ずるは、五十歩をもて百歩を笑ふといふ、古語にも似たるべし。开は左まれ右もあれ、實に朱之介は旅客ならば、九四郎が宿所には、必他か行裹あらん。若們それを知らざるや、と問れて乙藝は答るやう、否、朱之介が行裹は、雨衣菅笠のみにして、然せる東西は候はず。但盤纏は圓金にて、一百九十五兩ありしを、九四郎が起行つ折、他が手より預りて、奴家に藏置ねとて、开が儘遞與し侍りにき、と告るを職善うち聞て、开は最多かる盤纏なり。儞其金をもて來ぬるや、と問へば答へて、御諚の如く、這義を問せ給ふことのありもやせん、と思ひしかば、里長達に商量して、そが隨懷にして參りにき、といへば職善微笑て、开はよくこそ心つきたれ。其金を疾見せよ、といはれて乙藝は遽しく、項に掛たる財囊の紐を、解拔きつゝ件の金を、裹し隨に呈すれば、悳嶋賴紀受拿て、軈て主君に進するを、職善やをら机案に登して、一二襲に裹たる、紙を徐に解開きて、先其金を得と見つ、又其金の裹紙を、押伸しつつ是をも見て、眉を顰めつ頭を傾けて、乙藝這裹紙は、始よりこれある歟。然らずは又九四郎が、裹て儞に遞與しし歟、と問へば答て、否、其紙は、朱之介が裹る隨にて、良人が預り侍りにき、といひも果ぬに職善は、机案を撲地と拍鳴して、怪むべし這紙には、有驗觀主活愈道人と

寫してあり。やをれ朱之介、是は爾が手迹なるや、と緊しく問れて朱之介は、深念に及ず、答るやう、現に然る事も候ひき。曩に小人、船積荷三太許逗留の折、人に聞しこと候なり。近會舌兪道人と喚做す者あり。他煉金の哄騙をもて、豪農巨商を惑して、幾千金を掠奪りぬる、其術無量なりといふ、異聞怪く奇しければ、後亦人に夜話する折、其名を忘れざらん爲に、懐紙に書寫ししに、果は忘れて我金を、九四郎に預る折、猶懐にしたりける、其紙をもて重裹して、遞與たるにぞ候なる、とありつる隨に聞え上れば、職善聞つゝ冷笑ひて、それにて事皆亮察したり。近會有驗觀主舌兪道人と喚做す奸賊あり。他は肥後國飯田山にありける、山賊の頭領、川角頓太運盈が殘黨にて、鐵屑鍛冶郎卽是なり。他洛外に脱れ來て、東西となく徧歴しつゝ、愚にして慾深き豪家の主人を哄誘すに、那煉金の術をもて、幾千金を掠略るといふ、風聲豫聞えしに、其後他が往方を知らず。爾るに件の鍛冶郎は、支黨と共侶に、今茲は周防の山口に在り。又煉金の哄騙をもて、人を謀まく欲せしに、其事竟に發覺れて、那身は搦捕れたりといふ。この事往日大内家より、急遞脚の密使をもて、左界の城へ告られしかば、俺も聞知ることを得たり。因て憶ふに、朱之介は、必鍛冶郎が支黨にて、這頭に止宿しぬるならん。倘しからずは相應しからぬ、其身は獨行なるに、百九十五金なる、盤纏を懐にするよしあらん

や。然ば他、浮世袋屋に止宿の夜分、醉て不覺に懷なる、密書を今樣に見られなどせしかば、已ことを得ず殺ししならん。今打つ鎚は外るゝとも、這公案は違ふべからず。速に招了して、呵責の笞を免れよ、と聲苛高く譴問へば、朱之介は驚きながら、跪きつゝ稟すやう、御推量では候へども、小人が盤纏多きは、大和なる岳母の、沙金唐布を買取れとて、齎したるにて候へば、不正の東西には候はず。いかで大和へ御下知ありて、岳母落葉を召よせて、問せ給はゞ出處來歷、立地に相知られて、御疑は解つべし。況舌倫が支黨にて、今樣さへに殺せし歟、と思召は憚りながら、御疑の深き故にて、冤屈にこそ候なれ、といはせも果ず職善は、怒れる聲を震立て、這奴究て胆太し。前にも漫に頼陳じて、船積荷三太城藏に、舊縁ありといひつる如く、今又其路近からぬ、大和なる岳母落葉を、照据兒に做まくするとも、幵を孰か實事とせん。這奴酷く撻懲さずは、竟に實を吐くべからず。笞を中よ、と劇しき下知に、局の左右に土居たる、伙兵等益く衝と寄て、朱之介を推伏て、幾つともなく鞭ち責れば、然らでも兩手を縛られて、頭枷さへに身を締る、朱之介は苦痛に得堪ず、聲を涯りに叫ぶのみ。呼吸も絶べく見えしかば、伙兵は鞭笞を止めて、曳起しつゝ退けて、水を飲せなどせしかば、やうやくに我に復りて、死ざることを得たりける。當下三好職善は、仡と乙藝等を狭視て、約莫この條の

疑は、獨朱之介のみならず、九四郎も耦賊にて、鍜治郎が支黨なるべし。故何とならば、他は面善兒ならぬ、朱之介が索ね來ぬる、岸松屋があらずなりしとて、事を好みて朱之介を、己が家に禁めしは、必是情由あらん。然ども九四郎は、今西國の逆旅に在らば、還るを俟て召捕てん。其折まで女房乙藝と、六市四揔を禁獄せば、こも亦要ある保質にて、縱九四郎を求猶ずとも、他異日名告て出ん、兵毎索を被ずや、と思ひがけなき再度の下知に、乙藝六市四揔等は、胸を潰しつ怕れ惑ひて、戰れたる齒も合ず。亓は情なき御裁斷、九四郎は人に知られたる、俠者にて侍るものを、何でふ其歹人の、舌俞とやらんの伙計なるべき。里長を首にて、照人は多かるに、この義を思召れずや、と叫べば六市四揔等も、倶に冤屈を叫ぶのみ。饒さるべきにあらざれば、伙兵は十手を揮閃めかして、益なき謼言、默らずや、と背肩尖此彼となく、撻惱しつゝ推竝べて、結扭りて軈て牽居けり。當下住吉の里長等は、膝を拺めつ、おそるゝ、悳嶋皆人に稟すやう、畏けれども勸解奉る。十三屋九四郎は、𨛗方に久しき俠者にて、善に與し惡を拉ぎ、威勢あるにも諛らはず、錢財あるにも從はず、乾兒義子弟の多きのみ。鍜治郎と鴃いふ歹人に、交るべうも候はず。這義を仰上られて、乙藝六市四揔等を、饒させ給はゞこの上の御仁慈にこそ候はめ、と願ふを職善うち聞て、愚なり里長等。千似の海は測とも、人の心は

量がたかり。四九郎が仁義を倡へて、陽には俠者と誇るとも、陰には邪術奸虐の、交を做すや做さずや、何人歟よく是を知るべき。若們夙く惑ひを覺して、九四郎が還り來ぬる日に、欺きて將て參らば、是第一の忠節にて、時宜によらば賞祿を得させん。然るを猶惑ひを取て、諄諄と願言せば、若們も饒すべからず。無益にこそ、と叱懲しつ、才に言を和げて、左界の間丸荷三太が、老僕鼠七承れ。荷三太父子は、朱之介に、舊緣ある者ならねども、賣買の便宜にて、止宿を饒せしのみならば、又諮ぬべき事もなし。追出て異日城藏が、疾病痊り果る折、參りて其義を聞え上よ。大家都て心得たる歟、と言鷹揚に宣示せば、罷立ね、と賴紀が、烈き聲に鼠七里長、故老等も皆共侶に、唯々とばかりに額衝承て、うち連立てぞ退出ける。爾程に、嶋皆人賴紀は、伙兵獄卒等に下知を傳へて、男女四名の罪人を、丌が隨獄舍に遣すに、朱之介を首にて、六市四揔を一牢にす。乙蘂は女流のことなれば、別に禁獄せらるゝなるべし。丌が中に朱之介は、素是奸人ならねども、這囘の罪過は冤屈にて、自作せる孽にあらず。況乙蘂六市四揔は、毫も犯せる罪あらで、疑獄の縲絏に繫るゝ、那身の憂苦甚なるべき。時の不幸といひながら、一毫こゝに謬れば、差ふに千里を以すと云、易緯の格言果せるかな。耳を貴み心を師と做す、職善も後に覺なば、遂に悔く思ふなるべし。

續編　卷之一下册

第三十二回

書刀を畀して弘元母子を托す
寺僕に憑て兩少義姑を知る

却說、職善疑似の惑ひにて、纖芥も罪なかりける、乙藝六市四揔さへ、倶に獄舍に繋れしかば、九四郎が宿所なる、櫛工們は居ことを饒されず。里人等是を守りて、九四郎が安藝の嚴島より、かへり來ぬるを待なるべし。爾程に九四郎が乾兒等は、這禍鬼に驚怕れて、皆憮しく思へども、亦連累の罪を怕れて、謀の出る所を知らず。只里長等に相譚ふて、獄舍に飯を餽るのみ。有恁事をば知るよしもなき、九四郎がかへり來ば、必捕搦られなん。非如日數は歷ぬるとも、還ず欲得、とうち不娛て、路遙なる西の盡處へ、言告遣らん春の雁の、翅なければ徒に、心苦しく思ふもあり。或は己が蜂吹く故に、祟を怕れ夥計別して、深切始の如くならず。事に假托け他所に移りて、疎濶になるも多かりける。この餘は憂を分つに足、然るべき親族なく、只九四郎に一個の弟あり。峯張柒六郎通能と喚做して、今玆は十八歲の少年なれども、年來其兄と

同居せず。這故に連累の、罪を免れたりけるを、住吉の里長等は、是切てもの幸なり、と思へば浪速の陣館へ、この者あるを聞えも上ず。柒六郎も憂苦を忍びて、兄の宿所へ來ぬる事なく、深く躱て便宜を俟けり。然ば是時、住吉の里を距ること、十町許なる村落の、字を小松と喚做したる寒村に、由來山孟林寺と號する、一座の小梵刹ありけり。住持木隱和尚は、安藝國の人氏、備中介大江弘元の、庶兄なりければ、この寺大江氏に由緣あり。先住木隱和尚は、近曾遷化して、今は其徒弟、木玄道德住持たれども、猶昔の餘波にて、大江氏と疎からず。今も其坊料あれば、師檀の好み絶ることなし。こゝをもて、弘元の四男なりける、大江四郎成勝は、この孟林寺に寄宿して、安藝へかへることを饒されず。こも亦二八ばかりの少年にて、弓馬の技に疎からず。武藝文學其師に就て、手習讀書は幼稚より、怠る事なかりしかば、竟に文武の達者になるべき、久後憑しきのみならず、才も貌も世に捷れて、現に美少年なりければ、見る人譽ぬはなかりける。爾るに這四郎成勝は、親胞兄弟に相別れて、這頭に長と成ぬるを、看官訝り思ふもあらん。こも亦故ある事なりかし。抑十三屋九四郎、峯張柒六郎弟兄の親を、峯張九四藏通世と喚做して、素是信濃退糧兒にて、岐岨路を去て浪速に來つ、兵法七書を人に敎て、僅に口を餬ふ程に、其妻に三個の兒子あり。初子は則女子にて、名を億祿と喚れたる、年既に

二八ばかりにて、心操いと怜利しく、標致も亦人に勝れたり。次の兩個は男子にて、九四郎と柒六なり。當時大江弘元は、尙壯年なりければ、京師の光景をも覘ひ知るべく、東國の治亂をも探らばや、と思ひつゝ、伴當一兩名を將て、悄々地に浪速に來つ、小松の孟林寺を宿にして、淹留年を累る程に、那峯張九四藏が講に入しより、他が旦暮の足ざるを資などして、斷金の思ひ淺からざりければ、九四藏も其恩義を感じて、主の旅宿の徒然を、慰る爲にとて、則女兒億祿をもて、弘元の側室にす。是よりの後弘元は、折々九四藏許止宿しぬる程に、億祿は早く有身て、男子を生にける。四郎成勝卽是なり。弘元安藝には嫡室あり、兒子あり、冢子興元、後に備中守に任ず。こは不幸短命にて、父に先だちて身故りけり。興元にも子あり。幸松丸といふ。是も亦早逝す。この故に、弘元則二男少輔太郎音就を嫡子とす。三男少輔二郎元綱と共に、安藝國高宮郡、治比鄕の館に在り。是時は、弟兄皆髫歳なるべし。閒話休題、爾程に弘元の四男、四郎腋子、三歳になりける秋の時候、弘元京攝の密要果しかば、悄地に安藝へ還らまくす。其別に逮て、九四藏夫婦、億祿九四郎等に告ていふやう、俺故鄕へ還りては、再會究て料がたかり。然ば四郎と億祿さへ、將てゆかばや、と思へども、故鄕には嫡室あり、兩三個の兒子あるに、苟且の旅宿の程に、側室に子さへ生せしとて、倶していなんはさすがに

て、面正しくもなき所行なれば、只得四郎は這隨に、億祿と俱に留在せん。この子の性美しく、敎ゆべくは、外祖父外祖母、爲に文武の師を擇て、敎導長と成して、武士になるべき者ならば、その折安藝へ將て來よかし。俺亦折を見合て、妻にも及兒子にも、この子あることを說示して、術よくこゝろを得させてん。然ば障りなかるべし、といひつゝ豫寫したる、親子の照書一通を、一裹の金と共に、懷より拿出しつ、又作當に持せたる、大小の兩刀を拿よせて、裹し袱を解開きて、共に九四藏に遞與して、又いふやう、其一通は俺自筆にて、四郎と親子の照書なり。縱俺身なき後なりとも、是をもて安藝に造らば、四郎が兄等の疑はで、弟ならずとて拒む者なかるべし。又この兩刀は、俺先祖大膳大夫廣元朝臣より、世々相傳の名刀なれば、四郎が爲に貽裹にす。成長後他に取しね。又這金子は、俺盤纏の餘財にて、僅に是一百兩あり。こは稚子を養育の爲に、貽置く者なり。然れどもこの金子のみにして、久後遠き母と子の、衣食に足るべうもあらざれば、其折には俺兄なる、孟林寺の木隱和尙に、告て資助を乞ねかし。俺往日老和尙にこの密義を、明々地に、告て御後を憑しかば、伯父坊必憐て、四郎が資助になる事あらん。恁はいへども浪速と安藝は、水陸共に路近からぬ、各天の一方なり。矧今戰國の時にして、脚力使札自由ならず。是に加るに、人の命數は涯りあり。老少各不定なり。四郎

が長と成るをまたで、俺命終なば、億祿を巣守に做さんこと、是も亦不便なり。是よりの後音耗絶て、再會何時と期がたくは、億祿は相應しき依著を求めて、他妻になるとても、俺決て怨なし。こゝろ得てよ、と叮嚀に、示し諭しつ他事もなく、告る別の理りなれば、九四藏夫婦は、感涙の、進むをおぼえず照書と、大刀さへ金子さへ受戴て、答口納る幵が中に、億祿は涙禁めあへぬ、膝に睡りし稚子の、顔さへ濡て共音泣くを、敲著つゝ横抱に、軈て乳首を含すれば、そが儘睡る夢の夜や、覺ねばこそあれ豫より、別は然しも知ながら、昨日は過てあすか川、明日といはれて今さらに、驚かれぬる愛惜の、歎ぞやる瀬なかりける。女兒の心思ひ汲む、母親も涕うちかみて、慰難つ云云と、倶と別を惜むのみ。是時は年尚少き、九四郎さへに愀然と、頭を低手を叉きて、倶に其言をうち聞居り。姑且して九四藏は、弘元に向ひていふやう、仰承り候ひぬ。君幾までも這浪速に、在すべきにあらざりしを、苟且ながら四稔以來、親く交り奉りしのみならず、賤小娘億祿が、枕席を、薦め侍りしより程もなく、男子さへに擧けしは、是餘ある歡びにて、久後までも憑しかり。況心を用ひられたる、三種を腋子に畀賜る、そをしも推辭まつらんや。君今臣等親子に、惠給ふに誠をもてす。臣等又君に答るに、忠心をもてせずもあらば、不義の奴といはれんのみ。君御心安かるべし。四郎君は左にも右にも、護養育


留別の酒盃
九四藏弘元
を歎待を
九四藏
九四藏の妻


ひろもと
おろく
九四介
四郎

て長と成して、安藝へ倶しまつりてん。非如其事幸なくて、得遂がたく候とも、億祿は腋子の母といはれて、この儘に身を終なば、富榮ぬる他妻に、做るには優て本意なるべし。然るを今別に臨て、聞だにも忌々しき、他妻になれなンど、宣するは情なし、と怨じて傍を見かへれば、億祿は涙を推拭ふて、爺々さま、いしくも宣ひけり。縱令より年闌て、二親在らずなり給ふとも、倘兩個の舍弟あり、女弟品さへあるものを、寡居も寓處あり。いかで腋子を守育て、長と成しまつらん、と思ふ心を知らず貌に、他妻になれとある、御諚こそ恨しけれ、といひも果さずよゝと泣くを、叱り禁むる二親も、おなじ思ひをいへばえに、嚙斫流す溪水の、淺からざりし誠心は、清き言葉に見れけり。當下弘元感じて已まず、憮然として答るやう、今に創ぬ親子の實情、丼を知らざるにあらねども、正開の花を萎むまで、人にも見せず埋木に、做なんことの最惜さに、思ひ憶ず云云と、いひしは口の過なりき。今は千萬いふとも甲斐なし。再會は只、天に儘せん。四郎が上を憑むのみ、と慰められて本意ある親子が、心才に解ぬべき、春の淡雪ならねども、松に祝ふや留別の酒盃、准備の酒盃拿出て、九四郎さへに圓坐しつ。是時は年十五六にて、乙藝と喚做す食客女に、酌を執する東道態に、弘元も稍うち笑れて、献つ酬つ飾程に、酒外せぬ粂六は、是時年僅五にて、四郎君には二歲の兄ぞ、と窘されて大人やか

に、餬ふ餚に累掌の、愛々しさに弘元も、主人夫婦も共侶に、憶ず笑局に入日刺す、紙牕ある次の間には、弘元の伴當等、既に九四郎に召登されて、殘饗餘殽の管待あり。各飽まで飲啖して、俱に薄醉ならぬはなし。恁而在るべきにあらざれば、弘元は幾番となく、酒盃を辭し茶を請ふて、告る別の詞寡く、刀をやをら搔拏て、立去まくする程に、九四藏夫婦は留難て、只再會を契るのみ。億祿は胸のみ塞りて、いはまくほしき事をしも、得いはで四郎の手を掖立て、俱に目送る庭門なる、片折戸の頭には、兩個の伴當褄袺して、跪居て主の出るを待けり。當下九四郎は、那御寺まで送らんとて、出るを弘元推禁めて、伴當を將て遽しく、孟林寺へかへり來つ。この宵行裝を整へて、木隱和尙に年來の、止宿の歡びを舒相別て、曩に安藝より從ひ來つる、伴當僅に兩名を將て、其曉天に浪速なる、馬頭上に造り便船して、水路を西へいそぐ程に、又峯張九四藏通世は、其子九四郎と共侶に、甲夜より夙く這里に來て、弘元を待て在り。弘元が來ぬるに及びて、准備の裏飯簞酒を開きて、又酒盃を薦る程に、九四郎は女兒億祿の、弘元へまゐらする、書翰一通を呈閱す。左右する程に、横雲低き水や天、風波噪ぐ黎明時に、今纜を解くと叫ぶ、舵工の詭聲屢高ければ、便船の行客等、驚かされて聚ひ來つ。弘元主僕も遽しく、俱に其船に乘程に、峯張九四藏九四郎は、於是僅に水送の、志を致せども、

惜む別の果敢なさに、立盡しぬる浦曲の松の、待としいへど歸來る、時は幾ともしら浪に、任せてぞゆく澳津帆の、見えずなるまで目送りけり。抑這箇一條は、前に寫しし朱之介乙藝等が、囚牢に繫れし段より、十四五年上の昔話にて、大江四郎成勝、峯張朶六郎通能、主僕兩少年の出處來歷を、備に寫し出せるなり。是より下も、又孟林寺の段に復までは、右に續ける過去來の、話說なるを知るべし。因て憶ふに、本傳に說く所、昔年陶瀨十郎興房が深草の茶店にて、情妓阿夏と、其子珠之介に、相別るゝ折の事の趣と、今又大江備中介弘元が、側室億祿と、其子四郎に留別の事の趣と、相觸るゝ所あらで、君子小人貞女淫婦の情態、恰雲壤の差別あり。彼は則祕密の哀別、親子手の甲に黥印して、再會の徵にせしも、後竟に本意を遂て、骨肉相逢ふのみならず、最後に其子家を紹て、時と志を得ぬれども、這親子の行狀。邪淫に起りて、邪淫に盡。這故に天鑑饒さず、事敗れて滅族の、禍なきことを得ざるべし。又弘元の做す所、億祿が是に仕ふる所、倶に邪淫の行ひなし。其相別るゝ時に臨て、弘元則其子に畀すに、照書一通と、先祖相傳の兩刀をもてす。武士たる者の眞面目、人に對して說がたき、意中の祕事毫もなし。しかはあれども夫婦父子、命の長短各差あり。後竟に再會の、本意を得遂ずなるとても、其子は果して兩個の舍兄を、資けて家を興す事あらん。是則善を勸め惡

を罷る、本傳作者の大關目、隱微を開きて看官を覺まくす。那阿夏朱之介母子の、猥褻、邪慾を旨と綴りて、時好に具る筆ならぬを、いまだよく見果ずして、評する者もあらん歟とて、漫に贅言しぬるのみ。然とて天機を漏すにあらず、只是老婆深切ならん歟。閒話休題、弘元安藝へかへり去りしより、光陰又梭の如く、四稔許を歴ぬる程に、大江四郎は年七になりしかば、外祖峯張九四藏其師を擇て、手習讀書を教へ創るに、九四藏が季子柒六郎は、是時年九歳なり。他をば腋子の陪堂にとて、倶に讀書手習させて、四郎が其師許ゆく折には、必伴に立せけり。是より又鴻雁かへり玄鳥來て、四郎が九歳といふ春の時候より、弓馬撃劍何くれとなく、武藝を學するに、柒六も相從ふて其師を倶にす。折から戰國の習俗なれば、市井村落にも、武藝の師たる者に匱からず。矧又大江四郎は、生ながらに文武の才あり。柒六も亦愚魯ならねば、いまだ久しからずして、手習學問いへばさらなり、大刀合する技なども、人に勝れて見えしかば、九四藏夫婦の歡びはいふべうもあらず。億祿も是に慰て、猶久後を俟かひもなく、弘元が安藝へかへり去りしより、六稔有餘を歴ぬれども、風の便は一たびも、こゝには絕て浪速なる、浦の出船も入船にも、外の噂を聞のみなれば、億祿は單幾となく、思ひ細りし氣積の疾病、積濫て後竟に、病の牀に就しより、鍼灸藥餌の驗なく、倘杪若き二十五の、菩薩や迎へ給ひけん、

其曉の夢覺て、那身空しくなりしかば、二親胞兄弟の歎きはさらなり、四郎は九歳の童なれども、孝順特に淺からねば、母親枕に就しより、間なく時なく身邊を離れず。或は手を撫、腰さへ摩りつ、湯液を薦め粥を薦めて、看病りし甲斐も涙の種の、果は流て逝水の、かへらぬ人に做りしより、倶に死べく哭泣たる、孝子の薄命憐むべし。幸なきは只是のみならで、其次の年三月の時候より、九四藏夫婦は、瘟疫にて、うち續きて身故りけり。九四藏は年六十、妻は五十有餘なるべし。尙憑しく思ひたりし、九四郎渠六乙藝等の、哀悼悲泣は凡庸に過て、里人も是が爲に、絃歌を禁め相弔ふて、柩を送らざる者なかりけり。然ばこそあれ、大江四郎は、賴む樹下に雨漏て、哀戚の袖乾く間なきを、やうやくに忍び得て、七七の墓參も、九四郎渠六等と倶にすめり。既にして、九四藏在ずなりしより、兵法の弟子は、胡越の如くなりもてゆきぬ。是時九四郎は、いまだ定めたる活業なければ、小松村の邊には、親の購求めて、人に預けて畊せぬる、些の田園あり。貯祿も亦なきにあらねば、次の年の孟夏、住吉の里に、人の賣屋あるを購得て、軈て其里に移徙して、木櫛を賣て生活にす。且乙藝をもて妻にして、をさ〳〵内を任せけり。這婚姻の事はしも、二親生平に九四郎に、云云といひし義あり、其遺言に依てなるべし。爾はあれども九四郎は、疎人にて文學を好まず。擊劍白打は人並にて、其性素より

義俠あれば、武家に仕へて、五斗米に、腰を折る事を樂はず。然ばとて又商賈の、來ぬるを迎へ、還るを送る、利潤を屑とも思はず。この故に外看ばかりの、店舗には僅に一兩個の、傭櫛工を在らせて、他等に櫛を賣するのみ。闔の多からぬを患とせず。九四郎が行狀、大槩はかくの如く、親九四藏に同じからぬに、且這夫婦尙少ければ、四郎腕子の事はしも、九四藏豫九四郎に、定しける遺教あり。九四郎も亦孝順なれば、敢親の遺言に違はず。是年の秋の時候、單孟林寺に詣て、木隱和尙に云々、と四郎の上を遺もなく、初弘元の別に臨て、契りし言の顚末と、照書の事、兩刀の事、養育料の金子の事まで、自他となく呫き告て、旣に知らせ給ふ如く、大昨年より打續きて、俺姉も二親も、世に在らずなりしかば、尙年少なる小人夫婦が、よく守育べくもあらず。然らでも腕子は名家の胤なり。民間に人と成さんは、可惜しき事ならずや。衣食は小人餽りてん。今より御寺へ召執て、教育あらば亡親姉の、遺言を果すのみならず、大江大人の教にも、稱ふべくや候はん。這義誰何と談ずれば、木隱聞つゝ點頭て、其義寔にしかるべし。四郎が事は弘元に、うち聞しより久しくなりぬ。他は俺侄なるに、何でふ衣食の賄を望ん。心に係るは弘元が、安藝へかへり去りしより、今に至りて信なし。那地に異變あらずや、と思ふものから海山千里を、隔てぞ居戰世の、不自由なるを爭何せん。然ばとて俺弟の、

頼みし事を今さらに、不の字をいふべき拙僧ならず。この義は心安かるべし。なれども四郎は總角なるに、那身單を寂莫たる、寺に在らせんは不便なり。和殿の弟桀六をも、共倶におこし玉へ。客ある折に茶の給仕には、豫より欲かりき。好食客にこそあるなれ、と又他事もなき老和尙の、答に九四郎歡び承て、明日と契て退りけり。却説峯張九四郎は、其宵四郎と、桀六乙藏を喚聚へて、今日孟林寺の木隱和尙に、商量しける事の趣を、箇樣々々と說示して、明日は黄道吉日なり。四郎腋子に、桀六を傅まゐらせて、御寺へこそ遣すべけれ。其頭の准備をし給へ、といふに大家諾なひて、誰か亦異議すべき。この次の日も天よく晴て、事の障りなかりしかば、九四郎は晝餉を果して、四郎桀六主僕を將て、孟林寺へ送りゆくに、四郎には父弘元の畀たる、兩口の名刀を帶させて、且其護身囊には、弘元の自筆なる、父子の照書を藏めて、警るに失ふことなきを要とす。又桀六には、親九四藏の紀なる兩刀を取せて、主僕に袴を穿などす。乙藏は亦四郎桀六が、夏冬の衣夜物と、硯册子四書五經、兵法七書は書櫃に、藏めたる隨にして、木隱和尙に餽進する、餠子煮染東西を、折小櫃に裝たるを、大袱に分包みつゝ、擔造て傭從僕に遞與などす。是時四郎は年十一歲にて、桀六は十三なり。主僕迭に今の別の、惜からざるにあらねども、孟林寺は鄰村にて、訪問るゝに便よければ、倶に志を奨して、最大

人しく乙藝等に、告別して出てゆくめり。爾程に孟林寺の住持木隱は、九四郎が約束を違へず、侄の四郎と他が弟柒六を、送て住吉より來ぬるに及びて、軈召入れて對面す。迭の口誼さぞあるべし。言省て備にせず。當下九四郎は、這童子主僕の上を、木隱竝に徒弟なる、一兩個の靑法師等に憑聞えて、賫たる折小櫃と、四郎柒六が、衣裳調度を渡し果て、傭奴を將てかへり去ぬ。是よりして木隱和尙は、方丈の次の間なる、小室を掻拂せて、四郎主僕の子舍とし定めて、手習讀書を學せらる。然ればとて、這兩童子は、僧に做すべき者ならねば、武藝も亦原の如く、其師許往還して、習ふ事を饒せしかば、四郎柒六は相歡びて、晝は出て武藝を習ふに、敢一日も懈ることなく、夜は又入て手習讀書を事とす。乙藝も手倘少けれども、其性老實なりければ、那習學の懈怠なきを、傳聞毎にうち笑れて、折々餠果子、飯の菜蔬などを、煮もし茹もして、餽遺す事屢なり。或は又四郎主僕の不斷衣、木隱師徒の敗衣さへ、折々解洗して、老實にものせざる事なし。又九四郎は月毎に、孟林寺へ詣來て、四郎柒六が爲に、旦暮錢を遞與などす。然ば這童子主僕は、內外にかくの如き帮助あるに、倶に其才に匱からねば、文武の學術年に從て、薦ずといふことなし。爾程に這主僕、寺に在る事四稔有餘、五稔といふ秋の時候、木隱和尙遷化して、其徒弟、木玄道德、後住に做りぬ。這木玄も老實兒にて、師父の遺敎に叛くことなく、四

郎粱六等を相憐て、管待初に變ねば、四郎はさらなり粱六も、倶に憑しき心地して、いよく武藝を勵みけり。恁而其次の年、峯張粱六は十八歳にて、大江四郎は十六歳に做りぬ。是時主僕自撰て、四郎は其名を成勝とす。粱六郎は通能と名告ぬ。又只この義のみならず、大江四郎は孟林寺にて、長と成ぬる少年なれば、人或は綽號して、孟林四郎と喚做しけり。然るを後にてみづからも、茂林四郎と稱する日もあり。又俗字に從うて、杜四郎ともいひけり。譬ば峯張九四郎が綽號を、十三屋といふが如し。九と四を合すれば十三なり。孟林は大江の廟號にて、其茂林といひ杜といふも、是に由て知るべきのみ。閒話休題、是年の夏四月盡に、十三屋九四郎は、講夥家と共侶に、安藝の嚴島へ詣るとて、四郎粱六、木玄道德に、告別に來にけるに、其後いまだ久しからずして、那家に不測の祟あり。往日より十三屋に止宿の旅客、朱之介と喚做す青年兒が、乳守の里の妓樓にて、今様と歟いふ娼妓を、刺殺したりければ、那身は矢庭に擒捕られ、其歌店主人、九四郎の妻乙藝、乾兒六市四摠さへ、浪速の囚牢に繋れしを、住吉の里人等が、悄地に孟林寺に來て報しかば、四郎粱六の驚きいへばさらなり。木玄道德も眉うち顰て其事の顚末を尋るに、實に是疑獄にて、那旅客朱之介とやらんを除の外、乙藝六市四摠等は、冤屈なる事疑ひなし。こゝをもて粱六は、浪速の陣館へ推參して、この義を陳て嫂等

の、赦免を請まつらんとて惴りしを、住吉の故老推禁めて、其義究て無用なり。ゆかば必禁獄せられん。九四郎大哥のかへり來ざるは、反て幸なるものを、和郎倘出て自訴しなば、毛を吹とて疵を求んのみ。其故は箇樣々々、如此々々の情由ありとて、那鐵屑鍛冶郎の舌兪が、哄騙の事の顚末を、聞たる隨に呫き告て、他は近曾周防の山口にて、搦捕られにき、といふ風聲あり。この故に三好の刀禰は、朱之介さへ大哥さへ、舌兪が伙家ならずや、と御疑ひの深ければ、嫂々を當坐の保質にとて、そが儘禁置るゝなり。然ば大哥も朱之介も、鐵屑が伙家ならずといふ、正しき照据徵りせば、彌勒の出世に遇ふまでも、嫂々を救ひ出しがたけん。其頭にこころし給へ、と呫き示してこの後は、孟林寺へ訪も來ず。柒六にも四郎にも、白晝は面を顯して、住吉の里にだに、往還することを饒さねば、這兩個の少年は、又一層の憂を增て、いかにせまし、と相譚のみ、謀の出る所を知らず。暮るゝを俟て悄々地に、住吉の里へ赴て、乙藝等の安危を撈りて、賴て囚牢へ飯を餽るも、人傳なれば自由ならず。左右する程に、五月は過て、暑熱彌增六月も、旣に中旬になりぬれど、九四郎はいまだ還らで、講伙家の甲乙のみ、歸村の噂あるを探聞に、九四郎は治比なる、相識許立よるとて、一路人と別れたり。然ども五六日を經ば、必かへり來つべしといふ。こも人傳に聞えけり。安否を知るは本意なれども、かへ

りぬと聞えなば、召捕らるゝ事のなからずや、と思へば是も胸安からず。只那犯人朱之介は、大和なる上市の、郷より來にける旅客にて、舊里には妻もあり、岳母もありといふ、其事僅に聞えしかば、四郎栾六は、この義を住持木玄に、咡き告て、咱等悄地に大和へゆきて、那朱之介が宅眷を訪ふて、他が禁獄せられしよしを、詳に告もしつべく、他が出處來歴と、路費の金の多かるを、搜訂さば俺嫂の、罪を償ふに足りもやせん、とは思ひ候へども、其宅眷とは、知る人ならぬ、少年の俺們が、那地に造りて談ずるとも、訝りて實を報られずは、こも亦勞して功なき所爲なり。御意見もや候、と問へば木玄點頭て、幵は究竟なる人こそあれ。和殿等も知る如く、前月より當山へ、新參なる奴隷柹八は、大和の上市より、老後挊了にとて、這頭へ來ぬる者なりと聞にき。他に問はゞ知るよしあらん、といひつゝ掌うち鳴して、件の奴隷を召よせけり。當下四郎と栾六は、柹八にうち向ひて、那朱之介が事の顚末を、箇樣々々、と說示して、汝舊里に在りし時、件の朱之介を知らずや、と問ば柹八、然ン候、宣する朱之介と、小可は面前ならねど、那人の事はしも、人の噂に聞しこと多かり。首をいへば云々なり、尾は箇樣箇樣なりとて、朱之介が事の顚末、他は東國なる管領家の使にて、如々來禪師を訪し事、又山猍を射て殺して、少女斧柄を救ひしかば、落葉に女壻にせられし事、他が放蕩無賴のこと、安

保箭五郎に哄誘されて、主君より預り來ぬる、許多の沙金白布を、失ひしより東國へは、得かへりがたく做りしかば、逗留三稔に及びしこと、落葉が慈善、斧柄が貞實、其崖畧を聞たる隨に、說示して又いふやう、那家は杣木氏にて、原は豪家で候ひしに、不幸にして先主人、夫婦うち續きて身故りしより、迹には一個の女兒あり。斧柄といひしは卽是なり。然るを主人の女弟なる、良人の家衰果て、離別せられて、伊勢の津より、かへり來て在りしかば、只得守に居られて、稚幼姪の斧柄女郎を、愛慈み長と成す。婦女主人で今もかも、家風を亂さぬ賢女なるを、里人知らぬ者ぞなき。落葉の刀自は卽是なり。又那末朱之介は、落葉の刀自の離別の後、故夫が後妻に、生せたりける孤なりしを、初對面の折に知られしかば、刀自は舊緣恩義を感じて、斧柄少女を妻せて、入壻にせられしに、那青年兒は猶飽かで、酒に耽りつ奸淫賭博の、債は多く做りけるを、落葉の刀自が賍ふて、術よく理めたりといふ、噂も聞候ひき。是等によりて思ひ惟るに、落葉の刀自が所以ありて、那青年兒に金銀多く、齎して東西を買せんとて、浪速津へ遣したる、事しもなしとすべからず。是よりの外舌兪とやらん、鐵屑と欺いふ歹人の、噂は聞ず候ひき、と一五一十を說盡せば、兩少年も老和尙も、倶に耳を敧て、うち含笑つゝ听果て、更に便宜を得たりける、其歡びはいふべうもあらず。姑且して桒六がいふや

う、今聞所をもて推ば、朱之介は鐵屑が、支黨にはあるべからず。這柿八に汲引させて、夙く上市に赴きて、落葉に告て那金子の、出處正しき照据を取て、三好殿に聞え上なば、疑獄は解て朱之介の、罪輕くなるときは、俺嫂は赦免せられて、家に還さるゝ事を得つべし。這義什麼と請問へば、四郎も然なり、と頷きて、俺們大和へ起行せんに、先住吉なる故老等に、告て心を得させずは、事ある折に不便ならん、と議するを木玄うち聞て、开は勿論の事なりかし。和郎達晝は憚あり。日暮て先住吉へ、所要を果して翌の旦開に、柿八を將て大和路へ、起行こそよからめ、といふに兩少年諾ひて、逆旅の准備をいそぎけり。畢竟四郎柒六主僕が、是等の事の便宜を得て、後の話說甚麼ぞや。开は下回に、解分るを聽ねかし。

續編　卷之二上册

第三十三回

穴隙を鑽て二賊夜師徒を脅す
生口を呈して兩少年疑獄を解く

再說、大江杜四郎成勝、峯張柒六郎通能は、料らずも柹八が話說にて、事の便宜を得てければ、先住吉の故老們に、這義を告てこゝろ得させて、明日は大和へ起行せんとて、是日黄昏の比及より、主僕編笠を戴きて、倶に孟林寺を立出るに、折から六月中旬にて、晝は酷暑に堪がたかるも、夜は涼しき反畝路、天よく晴て月淸く、隈なき景に送らるゝ、路の去向の草蒸溽、冷ては處得貌なる、馬追いそぐ轡虫、鳴く音は人の跫响に、一霎時絕ても堪がたき、憂は浮世の哀愛苦勞、早稻の葉並も短夜の、深ぬ程にといそぎけり。然れば又、この宵孟林寺の住持木立は、大江峯張兩少年主僕の、住吉へとて出てゆきしより、必久しからずして、かへり來つべし、と思ひしかば、梵僕柹八に吩咐て、旣に前門は鎖せども、角門は閉たるのみにて、門を打せず。他等がかへり來て敲きなば、疾開て入れよ、といはれしかば、柹八則こゝろ得て、

己が小子舎の窓推開きて、蚊退火しつゝ月を燭に、明日起行の、用意に、脚絆雨衣傘領ふ、笠の紐縫ひ草鞋の、絺を融しなどしつゝ、睡らで兩個の少年を俟に、短夜なれば更闌て、既に亥中になりぬれど、他等はいまだかへり來ず。いかに〳〵、と思ふのみ。果敢なく打肫を催して、寐とも知らず在りし程、子二刻時候になりぬべし。折から人の礑々と、角門を敲く音す。柹八宿耳にうち聞て、是必青年達の、かへり來にけり、と思ひしかば、一聲高く應と答て、遽しく身を起しつゝ、板金剛を撈りよせて、足に曳穿外に出て、刀禰們還り給ひし歟、と問つゝ軈て角門の、掛鎖をやをら外して、開くを遲しと外面より、突然と找み入る者あり。四郎樂六主僕にあらで、小皁の像き兩個の濫觴兒、身の材五尺八九寸、涅染なる廣袖の、單衣を裾短に被做したる、圓括の帶尻高に、紈結びし那腰には、銅鞋卷なる山刀の、二尺七八寸許あるを、鐺下りに挿做て、重裡なる草鞋を、紐短に穿たりける、面魂の鬼魅しきに、蝮蛇かとぞ思ふ圓なる、眼赫奕一對の、威勢當るべくもあらねば、柹八は吐嗟とばかりに、叫んとするに聲立ず。逃んとせしを一個の強盜、走蒐りつ項髪を、搔抓み揉什して、背を踏へて動せず。這奴倘聲を立なば、只一刺に息の音留ん、と晃哩と引拔く刃の光に、眼を射らるゝ柹八は、更に生たる心地せず。許給へ、といふ聲も、脫齒に漏て術なきを、然もこそあらめ、と蹴返せば、一個の強

盗立替りて、起んと蠢く柹八を、起しも果ず兩手を捉て、腰なる麻索掖出しつゝ、最も緊しく結扭けり。當下又一個の強盗は、柹八にうち向ひて、やをれ老耄兒命惜くは、住持の臥房へ案内をせよ。然るを今さら頭を掉らば、其首卽坐に撃落さん。𨗈く立ね、と推立すれば、柹八は事の勢ひ、從はざることを得ず、阿容々々と先に立て、引て住持の使室に至るに、件の兩個の強盗は、引提し刃を鞘に斂めて、含笑ながら迹に跟。闇き二間の坐席を過て、燈火見ゆる垂蟵の、臥房の邊へ近づく程に、所化子舍に臥たりける、兩個の沙彌は驚き覺て、來ぬるは誰ぞ、と問せも果ず、一個の強盗刀を拔きて、蟵の吊緒を斫墜せば、いよ〳〵噪ぐ兩個の沙彌等は、盗兒入りぬ、と稍知りて、迯躲れまく欲すれども、蟵に那身を包まれて、網羅の鶉に異ならず、術も夏野の草枕、夢になれとぞ念じたる。程もあらせず強盗は、甲乙倶に膂力に任せて、沙彌等を慘刻蹂躙れば、憐むべし兩個の沙彌は、叫んとするに息絕て、死活は知らず倣りにけり。爾程に木亙道德は、四郎柒六がかへるを俟て、睡りも得せで在りけるに、小夜深る隨に堪がたき、蚊の多ければ蟵帳に入りて、軈て枕に就冗自、心に懸れば宿も寢られず。旣にして更いよいよ闌て、子の時ならんと思ふ比、盗兒や入りたりけん、平ならぬ物の响、所化子舍のかたに聞えしかば、驚きながら敢噪がず。軈て悄地に蟵帳を出て、吊緒を解きつ行燈の、燈心を增搔

起て、蒲團小筵搔遣りつ、趺坐して徐に數珠爪繰て、念佛して在りける程に、旣にして兩個の強盜は、跫音高く找み近づく、住持の臥房は思ふにも似ず、一個の法師怕るゝ色なく、端然として在りければ、撃蒐らんはさすがにて、倶に刃を引提て、金剛神の暴たる像く、雙立つゝ疾視たり。有恁りし程に、大江峯張兩少主僕は、甲夜に住吉の里に造りて、故老等の宿所を訪ふに、他は里長許赴きて、いまだ還らず、と聞えしかば、只得還るを俟程に、憶ふにも似ず小夜深て、遂に亥中の時候に及びて、其人かへり來にければ、則事の便宜を告て、云云と相譚ふに、夏の夜なれば短くて、子の時近くなりしかば、遽しく辭し去りつ。明日は早天に大和路へ、趄行の准備はしたれども、這頭に小衣を深ししは、鈍ましかりき、と共儕に、呟きつ路次をいそぎて、子二刻ならん、と思ふ時候、倶に孟林寺へかへり來て、と見れば角門は開きてあり。眞夜半なるに忘れたる歟。柿八が歲老かひなく、最烏滸なり、と思ふのみ。鎖せざれば敲くに及ばず、主僕いそしく内に入るに、庖湢の戸も亦開きてあれば、倶にこゝろ訝りながら、那が儘に找み入るに、庖湢中房所化子舍まで、燈火滅て黑白を分ず。只奧のかたに丁りて、耳熟れぬ人の聲音にて、罵るごとく聞えしかば、いよ〳〵訝る四郎柴六、原來強盜入りたりけん。師父の上心許なし。愕りて愆し給ふな。こゝろ得たりと咡きつ、咡れつゝ共儕に袴の稜を結ふ、單衣の

袖巻返して、刀の琫甘る、准備も倶に精悍しく、熟ては闇きに迷ふことなく、竊歩しつゝ二間の坐席を、過て聲する奥のかた、住持の便室に近づきけり。是より先に兩個の強盗は、住持木玄にうち向ひて、やをれ坊主落著貌すな。今戰國の習俗にて、弱は強に征せられ、小は大に併らる。この義に據て俺們も、人を屠りて東西を略る、山豪榮曜に誇りしも、一比は造化乏くて、獲はあらず。錢竭たれば、今宵和尚に借んと思ふて、白刃で推參したるなり。錢まれ金まれある涯り、出して夙くいなさずや、と兩聲尖く責嚇すを、木玄怕るゝ氣色なく、念珠を止めて答るやう、和郎等偶來ぬれども、开は見る所の錯へるなり。當寺は素より寒院にて、檀越坊料多からず。況今戰世の在俗は、殘忍不仁ならぬは稀にて、塔を供養し、法師に布施する、善男善女あることなし。然るを何等の餘財をもて、和主等に取んや、といはせも果ず甲乙兩個の、強盗は又聲苛立て、唔きたり老狸奴が、縱術よくいひ瞞るとも、昨日も今日も俺們が、晝悄地に來て覘知たる、本堂の光景、阿彌陀の箔、客殿の席薦障子まで、手の屆きたる造作結構、敗鋏經紀に見せたりとも、錢なき寺と誰かいふべき。詩も語も入らず疾身を起して、財庫へ案内をせよ。开を猶惑ふて不の字をいはば、這巨刀もて引導渡さん、いかにぞや〳〵、と刃を席薦へ衝立々々、倶に睨へ哮れども、木玄噪がず推禁めて、小架棚より拿出す、袈裟筥の鎖


成勝通能雙て二賊を生拘る


あくけん

を開きて、圓金五兩を撈出しつ、又強盜等にうち向ひて、和郎等いかばかり譴るとも、是より外に金子はなし。是もてゆきね、と投與るを、強盜等はよくも見ず、怒れる兩聲又震立て、這奴究て膽太し。强情張て時を移して、天を明さまく欲するとも、虛々として其術を喫んや。今はしも饒しがたかり。觀念せよ、と左右齊一、刃を晃哩と震抗る、那時遲し、這時速し、背後に覘ふ兩少年、四郎朱六兩聲に、盜兒等と喚禁れば、驚き見かへる兩個の強盜、敵手は數にも足らざるべき少年なるを侮りて、鷲の兎を鷙る像く、蚤く踵を旋して、撃んと競ふを四郎朱六相迎て物ともせず、引外しつゝ共侶に、拔合したる刀の電光、丁々托地と殺締ぶ、修煉の刀尖撓みなく、岌より蒐る勢ひに、強盜等は膽落て、受刀にのみ做りしかば、甲乙ともに淺痍を負ふて、流るゝ鮮血に大刀筋亂れて、竟に怺へず引外して、逃んとするを寔も透さぬ、大喝一聲、兩少年が、武勇も對の剽姚に、二賊は刃を撃落されて、怯むを得たりと主僕の手術、俱に刀の背撃に、竅所を撲地と撃しかば、二賊は苦と叫びも果ず、身を轉して仆れけり。當下木亥道德は、憶ずヤヤと聲を被て、扇子を開きて兩少年を、うち扇ぎつゝ譽ていふやう、思ふに優たる、和殿等の武藝剽姚、然しも猛かる這奴等を、殺さずして撃仆ししは、出家人たる俺本意に、相稱ふて最愛たし。然とても油斷すべからず。陽滅ならば逃もやせん。蚤く手脚を括らずや、と

心屬れば兩少年は、應をしつゝ左見右見て、强盜每が腰に夾みし、麻索あるを拔拿て、甲乙俱に曳起すに、二賊は窮所を中られたれば、半死半生にて身を動し得ず。當下四郎朱六は、軈て件の麻索をもて、思ひの隨に二賊を結扭て、且檐廓なる障子を開きて、背合に眞柱へ、團々卷に縢著しかば、木玄うち見つ含笑て、それでこそ安堵たれ。和殿們は何等の故に、那里で小夜を深したる。倘一步遲かりせば、俺身は非常に命を果さん。好造化でありけるよ、といひつゝ長く肱を伸して、件の金子を搔拿つゝ、又袈裟筥へ藏れば、四郎朱六答ていふやう、住吉までは遠くもあらぬに、今まで還らず候ひしを、訝り給ふは理りなり。俺們主僕甲夜の間に、故老許ゆきたりしに、水田の樋を修復によりて、里長許參會あり。召れて那里へゆきたり、といふに只得廛主人の、還るを俟こと二時有餘。是等の故に小夜深て、所用を果しつ稍方僅、かへり來ぬれば不慮の賊難、師父に傷損のなかりしは、是切てもの幸ながら、所化達も柿八も、いかに做りけん心許なし。いまだ知らせ給はずや、と問ば木玄然ばとよ、他們が上は酒家も得知らず。疾紙燭して見給はずや、といふに朱六こゝろ得て、蠟燭に火を移しつゝ、手燭を秉て先に立ば、杜四郎も共侶に、刀を引提て出て見る、次の間なる壁際に、結扭て俯したる者あり。是則柿八なり。火光を見つゝ頭を擡げて、腋兒よ咱等を救ひ給へ、と叫べば四郎朱六は、手燭

を抗て得と見て、無慙や是も強盜の、所爲なるべし、と慰めて、軈て其索を解捨れば、柹八は先腕を摩り、腰を敲きつ膝折布て、却強盜に結拑れて、只得案内に立られて、這一室まで來ぬる程に、果は蹴られて、仆れける、首尾を報しかば、木玄も是を聞て、倶に所化子舍にゆきて見るに、兩個の沙彌も死に至らず。嚮に他等は強盜に、蚊帳の吊緒を斫落されて、剰酷く蹉れしかば、一旦氣絕したれども、倶に窮所にあらざれば、姑且して息出て、那身に恙なけれども、又貝物のおそろしさに、出も得やらず在りといふ、事の趣を告しかば、果は四郎も柰六も、仕持も絕ず腹を抱て、倶に無異をぞ歡びける。爾程に柹八は、竈に蒼柴折燒て、茶を煮て四郎柰六と、木玄に夜饌を薦めなどす。左右する程に、曉天に做りし比、件の兩個の強盜は、やうやくに息出て、氣力は我に復しかども、刀瘡痛て堪がたければ、倶に頭を低て在り。當下峯張柰六は、うち見て呵々と冷笑て、虎狼も檻に入りては、人に命を乞ざる者なし。やをれ強盜等、其身に做りしは積惡の、報ならんを思ひ知るや。姓名出處支黨まで、招了して死に就ずや、といはれて兩個の強盜は、頭を擡げ眼を睜りて、這頑童奴が何をいふや。咱等は名もなき山豪ならねど、運盡て乳の臭失ざる、若們に戰ひ負て、恁擒に做りたりとも、招了すべき口は得もたず。烏滸をないひそ、と罵れば、柰六怒て扇子を拿て、撻懲さんとて身を起すを、杜四郎推禁

めて、徐に二賊にうち向ひて、禮正くして諭すやう、今戰國の習俗にて、武士たる者も糧竭れば、响馬剪徑に做る者あり。和郎等も亦其儔なるべし。しかれども法度を犯して、惡を做す者は、律令のある所、刑戮せざることを得ず。こゝをもて天も明ば、國の守の廳へ牽べし。なれども這道場より、罪人を出さん事、豈是出家の本意ならんや。實に已ことを得ざるのみ。非如和主等免れがたくて、頭を法度に喪ふとも、我們必師父に請て、其なき迹を弔ひ得させん。姓名出處を具に告よ、といへば木玄も倶にいふやう、四郎の理言俺意に稱へり。慈悲は阿彌陀の本願なるに、幸にして東西を略られず。俺さへ沙彌さへ一人として、傷損しつる者あることなければ、この儘に和郎等を饒して、放遣まく欲けれども、いかにせん、這義を守に訴ずは、後難も亦料りがたかり。俺自由を得ざる所、法度に憑ずはあるべからず。この故に是なる少年、大江杜四郎成勝がいひつる如く、和郎等免れがたくして、死刑に其身を終ることあらば、俺戒名を授け、墓碑を建て、永久菩提を修し得させん。其名を問しは這所以なりき、と諭せば峯張柒六も、悟りて膝を打鳴らして、爾也々々、俺愆ちぬ。威をもて拷問せまくしつるは、倒に益なかりき。山の刀禰達腹をな立そ。慚愧々々、と慰れば、兩個の强盗うち聞て、爾いはるれば告ざらんや。先這索を緩めてよ、といふに柒六心得て、卷たる索を解復しつゝ、兩手を饒さで

推居れば、一個の強盗陳じていふやう、現に強弓も、其弦斬る時あり。最小の鍼も刺ざることなし。俺心を和る、兩少年の文武才幹、和尙の慈善はいよ〳〵得がたし。俺們も亦人なり。旣に諭を承ぬれば、今さらにいはで已んや。吾等兩個は世に知られたる、鐵屑鍛冶郎が支黨にて、俺は則低杌駝烏太、又是なるは、狸毛吹五郎と喚做されて、去歲より頭領鐵屑に、相從ふて周防なる、山口鸛峯の城下に在り。又煉金の騙もて、人を揣らまく欲しに、其事夙く發覺れて、討隊の士卒向ひしかば、一霎時は防ぎ戰ふものから、終には大刀折れ勢力竭て、頭領鐵屑は搦捕られ、俺們兩個は、虎口を脫れて、便船を得て浪速に來つ、歇店を求めて潛びて居り、といへば吹五郎其語を續ぎて、然ば又俺頭領の、情熟の土妓に、今樣と喚做すあり。他は人に知られたる、乳守なる浮世袋屋の、名妓にてありけるに、過世ありてや鐵屑と、相狎しよりこの年來、暢路の數累りて、相愛する事魚水の如く、死をもて誓ふ妹伕になれば、鐵屑遂には祕密を告て、那煉金の術を做すに、他を媒鳥に使ふ事あり。其折には浮世袋屋の、主人に多く閨房金を取らせて、他が兩個の小三板まで、或は三月小半年、相携て他鄕に遊時、今樣を小槌と喚做し、又那兩個の小三板を、丁兒打出と喚做したり。然れば去歲の九月に、頭領西へ赴く折、今樣は別れを惜みて、幾日も放離たりしを、俺們屢是を諫めて、竟に袂を分ちに

き、といへば駝鳥太又いふやう、然ば又咱等兩個が、周防より脫れ來て、潛びて浪速に居程に、坐して啖へば箱も空しく、盤纏旣に竭しかば、いかで那今樣に、些の錢を借んと思ひて、豫相識る君なれば、往る五月の厶の宵に、咱等浮世袋屋へ赴きて、初會の客なる面色しつゝ、當晚今樣に逢ふことを得て、小夜深け人定りて、却周防にてありし事、鐵屑搦捕られしかば、竟に死刑に處せらるべき、那折俺身は、吹五郎と、倶に這地に來つるよしを、遺もなく呫き告て、路費の資助を乞求るに、今樣は聞も得果ず、流るゝ淚は泉の如く、終夜泣明ししかば、俺も困じて睡ることを得ず。其明日別れに臨みて、今樣淚を止めていふやう、憑ませ給ふ路費の事は、こゝろ得て侍れども、目今は整がたかり。後に必使をもて、御歇店へ齎してん、といふに咱等は歡び承て、俺隱處と坊名と、屋主の名を呫き告て、後便を契りしに、果して其日の曛昏に、今樣は約束違へず、一個の密使をもて、贈來しける消息あり。其書凾に斂めたる、圓金十枚と一撮の、雲鬘を裹添てありしかば、則是を受拿りて、然氣もなく使介を返しつ、其後宿の閑室にて、吹五郎と共倶に、其消息を閱するに、其文其書の美しげにて、俺們が知所ならねど、寫連ねたる事の趣は、哀しからずといふことなく、鍛冶主世を去り給ひなば、誰を所依に苦海の、湍に猶立てながらへん。有斯る浮世にすみ染の、あまになるべきよしもなく、果敢なか

りける一葉の船の、こがれ〱て死なんのみ。單殘りて世にし在らば、竟には那祕事を、人に知られて俺身すら、召捕らるゝ事あらば、恩ありて怨なき、親方までも連累の、罪免れがたくやあらむずらん。給といひ恰といひ、既に覺期を極め侍り。聊ながら御約束の、茶蘼花十枚まゐらする。紀念料とも見給ひね。又この黑髮は、奴が髻結の梢に侍り。いかで紀の高野の御山へ、斂め給はば後の世の、苦を免るゝよしもやあらん。憑みまゐらするはこの事のみ。あなかしこ、とありしかば、開きて悔しき鬼百合も、露の淚に堪ざりしを、卷復して二たびは見ず。只其金子を有員人と、做していよ〱潛びて居り、といへば吹五郎語を次て、しかるに其夜の事なるべし。件の小槌の今樣は、自刃して亡にき、と人の噂に聞えしかば、驚きもしつ不便なれども、那身既に在らず做りなば、俺們兩個を鐵屑が、支黨なりと知者なく、人の口より洩るゝことあらじ、と思へば倒に悍らず。後安くて日を彌る程に、那十金も房賃と、酒肉賭博に使果して、せん術のなき隨に、舊癖發らざることを得ず。這孟林寺は先住より、儉約をのみ宗とすなれば、褊院なれども錢あり、と人の噂に聞知りて、熟し今宵の暴搶ぎ、事十二分なりければ、造化精妙、と思ひしに、鈍や和郎等に雌伏せられて、復生べくも思はねば、今はこの世の遺裹に、有し實事を吐盡して、和郎等が爲に後々までの、夜話種に做せるのみ。是にて滿腹したら

んず、と多辯に誇る歹人も、慈悲と禮儀に勝よしもなき、招了備なりければ、四郎柰六の歡びはさらなり、木立も言意表に出て、一霎時嗟嘆の聲を得たゞず。聞果て二賊に向ひて、聞が如きは那今樣が、鍛冶郎を歹人と、知りつゝ倶に相愛して、他が哄騙の媒鳥にさへ、倣りて其惡を幇助しは、是情慾の惑ひにて、竟にみづから刃に伏ししは、他天罰の免れぬ所、憎むべく憐むべし。遮莫人の懺悔には、五逆十惡も滅るよしあり。然ば汝等の菩提はさらなり、他が剪たる頭髮の梢も、俺必廻向して、蓮華王院へ斂てん。其黒髮はいかにしたる、と問ば駝鳥太答ていふやう、开は辱く承りぬ。今樣が贈りたる、金子こそ使ひ果したれ、其書殼と黒髮を燒却んはさすがにて、今も俺懐なる、勒肚に藏めて在り。疑しくは拿出して、見らるゝともけしうはあらず、といふに歡ぶ四郎柰六、共侶に身を起して、駝鳥太の懐へ、手を指入れて搔撈るに、果して勒肚ありければ、締を解きつゝ曳出して、見れば書簡と黒髮あり。倶に其書簡を讀見るに、今這二賊のいふ所、詭謫ならぬを知るに足る。既に明證を得てければ、意外の怡悅に勝ざりける、四郎は二賊にうち向ひて、汝等懺悔のこゝろもて、其いふ所照据あり。汝兩個が身を殺して、罪なき男女四名まで、死を免るゝ由あれば、其積惡は憎むべく、言の懺悔は賞すべし。聞もしつらん今樣が、自殺の夜艾、初會の客なる、大和の旅客、朱之介と喚做す壯

佼は、分說建ず禁獄せられて、剩鐵屑鍛冶郎の、支黨なるべしと疑はる。這故に朱之介を宿したる、十三屋九四郎の、逆旅の留守なる、渾家と兩個の、乾兒さへ連累せられて、今も猶囚牢に在り、といへば栥六も俱にいふやう、其九四郎は俺兄なり。いまだ安藝より還らねども、嫂乾兒の冤屈の罪を、救ふに由なく一日も、安き心のなかりしに、時なる哉料らずも、汝等兩個の、照兒を得てけるは、日屬念ずる神明佛陀の、靈應利益にぞあらむずらん。陣館へ牽るる折、言を違へず招了するや、といはれて駝鳥太吹五郎は、面を汢し嘆息して、其解屍人の事はしも、風聲により聞ざる事なし。然しも冤屈の分說達たで、皆其首を喪はば、是俺們が身代にて、いよ〱後安かるべし、と思ひしは虛眞にて、反て咱等が其男女を、救ふ奇貨にせらるるは、造化の小兒の所行なる歟。天の網こそ漏がたけれ。不思議々々、とばかりに、呆れて又いふよしもなし。當下峯張栥六は、今樣の書簡と黑髮を、分ちて鼻紙に推裹みて、却木亙に呈閱しぬれば、木亙則其黑髮を受拿りて、書簡をば栥六にかへしけり。左右する程に、茂林を離るゝ鴉の聲して、天は夙く明しかど、杜四郎も栥六も、乙藝等を救ひ拿るべき、照據の二賊を獲てければ、今さら大和へ起行に及ず。先住吉なる、里長故老等に這義を告て、出訴の准備をいそがんとて、俱に庖湢へ退けば、旣にして柹八は、早飯を炊き果て、先這兩個の少年に、

薦めて出し遣まくす。早飯果て楽六は、住吉へ赴きつ、杜四郎は又、駝鳥太吹五郎が、招了の條々を、告文に寫さんとて、料紙硯を携て、單所化子舍に在り。又住持木立は、柹八に吩咐て、大きやかなる握飯に、燒鹽を塗らして、綁りし儘なる駝鳥太と、吹五郎に喫せなどす。こも亦出家の慈悲なるべし。爾程に、この日巳の比及に、峯張楽六郎通能は、住吉の里長故老と、十三屋の近隣なる、里人櫛工們を將て、孟林寺にかへり來にければ、木立 則 召入れて、杜四郎と倶に對面す。登時里長故老等は、四郎楽六の武勇大功を相祝し、且乙藝等を救ふべき、告愬の一義を商量して、陣館へ訟人は、則 峯張楽六と、住持木立の名代には、木訥と喚做したる、沙彌一名參るべし、と定しけり。杜四郎は名家の子なれば、功を祕して、這隊に入らまく欲せず。なれども陣館の門前まで、倶にゆくべしとて身裝す。這小松村は、住吉の枝郷なれば、那里の差配に由らざることなし。這故に村正を置ず、只孟林寺の門前なる、貧民八九名、詣來て伴に立んといふ。商量既に果たれども、生口の二賊駝鳥太吹五郎は、倶に脚に刀瘡あれば、曳立れどもいかにせん、歩より行べうもあらざれば、他等は軈て徬に乘て、貧民們に舁せけり。恁而大家孟林寺を立出て、酷暑を忍びていそぎしかば、既に未の時候に至りて、三好木工頭職善の、陣館へ來にければ、杜四郎は里人櫛工等と倶に、其門前に集合て居り。當下峯

張朶六は、孟林寺の沙彌木訥、並に住吉の里長故老等と倶に、告文を捧げ衙下に參りて、住吉なる櫛賈、十三屋九四郎の弟、峯張朶六等、同宿して小松の孟林寺に在り。昨宵件の寺に推入りたる、兩個の强盜は、鐵屑鍛冶郎が殘黨にて、低机駝鳥太、狸毛吹五郎と喚做す者なりしを、搦捕りて候へば、牽もて參上り候、と聞え上て、則告文一通と、照據の書簡を呈閲ししかば、家臣悳島皆人賴紀、其二書を受拿りつ、生口の二賊と朶六里長等を、廳の局の内へ召入れて、伙兵四五名をもて守らせけり。爾程に三好木工頭職善は、曩に禁獄したりける、大和の旅客朱之介、及連坐の罪人九四郎が妻乙藝、乾兒六市四摠等の、疑獄の虛實を定難て、且朱之介等を、囚牢より牽出させて、拷問の笞を緊しくしたれども、朱之介等は、素より知らぬことなれば、皆只寃屈を叫ぶのみ、倶に承伏せざりしかば、職善いよ〳〵思惑ひて、竟に本月の初旬に至りて兩個の間諜兒をもて、大和の上市へ遣しつ、朱之介は那鄉なる、落葉が女壻歟、非耶、且他が年來の、行狀と、落葉が心術の好歹を、那里人に因りて探らせしに、其間諜兒かへり來て、聞つる隨に告しかば、朱之介が上市にて、放蕩無賴の事の趣、且他は前にも罪ありて、國の守に召捕れしを、落葉が救ひし事の顚末、且這春に至りて、落葉は朱之介の爲に、沙金と唐布を買せんとて、他に金子を多く齎して、京へ遣したりといふ、其崖畧を知られしか

ば、職善疑ひ半分解て、肚裏に思ふやう、然らば那百九十餘金は、落葉とやらゞが朱之介に、東西を買せん爲なれば、是不良の財にあらず。遮莫朱之介は、今樣を殺したる、罪を償ふ所なし。剡又舌兪の鐵屑が、支黨ならずといふ、照据なければ其罪の、輕重いまだ定むべからず。但九四郎の還るを俟て、敲かば知るよしあるべし、と更に尋思をしたりしかば、是より呵責の杖を禁めて、朱之介を牽出させず。就中乙藝等を、獄卒毎に勦らせて、摸稜の手段に效ふのみ。其次の日、船積城藏を召よするに、城藏は是より先に、屢陣館へ召されしかども、猶疾病に推托けて在りしに、今は辭ふに詞なく、軈て鼠七と倶に參りしかば、職善則朱之介がいふ所をもて、他と舊緣の虛實を問ふに、城藏は連累の、罪を怕れて具に答へず。但云、曩にも鼠七が稟上し如く、那朱之介は、當春賣買の事により、賤父荷三太の店鋪に來つ、折から入船を俟よしありて、姑且止宿しぬるのみ。其折まで小人は、他と相識に候はず。況小人の兒、棧太郎の妻黃金と、舊緣あるべくも候はず。黃金の故鄉は近江にて、荷三太が親族の、獨女で候ひしを、迎拿りたる新婦なれば、いかにして朱之介と、舊緣の候はん。皆是他が陳ずる所、佯誑にこそ候はめ、と辯に儘して稟ししかば、職善聞つゝ點頭きて、さぞあらんさぞあらん。曩に鼠七が、答稟しゝと相同じ、然ては伱等に所要なし。重ねて參るに及ずとて、鼠七と共侶に、身

做す者、昨宵鐵屑鍛冶郎が支黨なる、二賊を擒獲たりとて、孟林寺の沙彌、住吉の里長と倶に、件の二賊を牽もて來て、訴まつると聞えしかば、職善則有司を從へて、正廳に著坐しぬる程に、悳嶋賴紀承りて、先伙兵をもて、罪人末朱之介と、乙蘗六市四揔等を、囚牢より召出させて、並て局の内に在り。賴紀則、孟林寺の住持木玄と、峯張桊六等が、連署の告愬狀をうち開きて、聲朗に讀むこと一遍、職善是を聞果る時、賴紀又今樣が、遺書なりといふ、一通を呈閱す。職善みづから是を讀見て、先住吉の里長を、檐廊の下に召よせて問ふやう、今告愬狀に由るに、武功の少年峯張桊六は、十三屋九四郎の、弟なるよし聞えたり。遮莫俺いまだ九四郎に、弟あることを聞知らず。あらば何どて始より、聞え上ざるや、と詰りけり。因て里長答るよしあり。這段は尙長やかなれば、又この次の回にこそ。

第三十四回

賞罰路を異にして乙藝家に還る　九四郎五金を晴賢に齎す

登時住吉の里長は、峯張柒六の上云々と、職善に詰問れて、則答稟すやう、御諚では候へども、柒六は幼稚より、孟林寺に扈從して、兄九四郎と同居せず、小松人で候へば、稟上ず候ひき、といふを職善うち聞て、現柒六は少年なれども、武藝の本事あればこそ、兩個の夜盗を擒捕けめ。やをれ柒六、伱は實に身單にて、這兩賊を生拘たる歟、と問へば柒六答ていふやう、然ゝ候、小人が親、峯張九四藏は、兵法武藝を人に教て、名を知られたる者なりしかば、小人も其大刀筋を、聊學得たれども、實に昨宵の掙きは、助劍の者ありて、俺身の武功に做り候ひき、といふに職善點頭て、件の二賊を執索兒に、牽よせさせて佶と見て、やをれ駝鳥太吹五郎、若們が出處來歴、且今様が自殺の事、都て孟林寺の住持木茲と、峯張柒六が告愬状に、具に載たる條々と、相違あらぬ歟甚麽ぞや、と問れて二賊は些も疑議せず、言語齊一答るやう、然ゝ候、

俺們が、命運の盡る處、這少年等に戰負て、但に痛痍を負しより、生捕れて候へば、何事をか匿すべき。告愬狀に載られたる、首伏の事の趣、些も相違候はず、といふに職善は今樣の、書簡をやをら拿抗て、爾らんにはこの書簡は、今樣が自筆にて、終焉に莅て若們に、贈しは是實なる歟、と問を二賊は聞あへず、开は御尋までもなし、告愬狀に明白ならめ、といふに職善又問やう、然らば這朱之介と、十三屋九四郎等は、若們と相識らず、素より鐵屑鍛冶郎の、支黨にはあらざるや、と問ふを二賊は聞あへず、开は勿論にこそ候へ。他等は何でふ支黨なるべき。疑れしは這人々の、不幸にこそ候はめ、といふに職善嗟歎して、爾らば實に今樣が、橫死は則自殺にて、朱之介が所爲ならず。又九四郎に罪なき上は、乙藝六市四摠等は、赦して放ち返すべき者なり。然けれども、只這二賊の片言をもて、事忽焉にすべからず。明日又暖簾次等を召よせて、相質して違ずは、實に疑を解に足るべし。柒六木訥等は、這旨を得て、明日又當廳へ參るべし。馱鳥太吹五二賊はさらなり、朱之介乙藝、六市四摠等も、這儘獄舍へ返すべし。住吉の里長故老等も、都て這意を得よかし、と最嚴に宣示して、是日の廳は果にけり。却說其詰朝、峯張柒六沙彌木訥等は、住吉の里長故老等と俱に、又浪速の陣館へ來ぬる程に、浮世袋屋暖簾次も、當廳へ召よせられて、今樣に使せたる兩個の小三板、早歌調子と喚做して、今

茲は倶に十二三歳なるを相倶しつ、乳守の里長故老まで、既に局の内に在り。當下悳嶋皆人賴紀承りて、兩個の強人、低杌駝鳥太、狸毛吹五郎、并に末朱之介晴賢、十三屋九四郎の老婆乙藝、乾兒六市四摠等を、囚牢より牽出させて、執索兒等うち守りて居り。既にして三好木工頭職善は、出て公案の上に著座しつ、召人等は皆、檐廓の下に召よせられて、膝行頓首せざるはなし。職善列々是を見て、先暖簾次に問けるやう、爾は這駝鳥太と吹五郎を、認りてぞあらんずらん、といはれて暖簾次頭を抬げて、見つゝ驚く色もなく、否、小人は、この者毎を、毫も認り候はず、といふに又職善は、今様の書簡を拿出て、悳嶋皆人に執接せて、是を暖簾次に見せていふやう、暖簾次其書簡は、今様が、自筆なるや。非や、と問れて暖簾次訝りながら、承戴きつゝうち開きて、讀見て愕然と驚きて、寔に是は仰の如く、小人が認りたる、今様の手迹にて、紛ふべくも候はず、といへば職善冷笑て、爾らば是今様が、横死は則自殺にて、朱之介の所爲ならず。知ずや其首に牽せし駝鳥太吹五郎は、有驗觀主舌兪道人、鐵屑鍛冶郎が支黨なり。爾は他等を知ずといへども、曩に爾が鐵屑鍛冶郎に、娼妓今様を貸て、他郷へ遣しし時、隨卽今様をもて、他が哄騙の媒鳥にせしといふ、駝鳥太吹五郎が招了にて、事既に發覺たり。有恁れば、爾も鍛冶郎の、支黨なること分明なり。素より覺期の上なるべし、といはれて

暖簾次駭怕れて、うち戰慄つゝ陳ずるやう、御諚では候へども、小人何でふ那客の、丐人なりしを知り候はん。乳守の里の恒例にて、身品宜き熟人の客には、所望によりて娼妓を貸て、遊山に從せること間是あり。今より四五稔前つ比、洛北邑倉の邊より、今樣許暢來ぬる客ありて、錢を使ふこと大かたならず。約莫一稔許を經て、今樣を將て筑摩なる、溫泉にゆかんといはれしかば、其間なる身價は思ひの隨に受拿て、貸遣し候ひき。今稍思合すれば、件の客は丐人の、鐵屑鍛冶郎とやらゝなりし歟。然りとは知らで疎忽の至り。今さら後悔仕りぬ、といはせも果ず職善は、眼を瞪らし聲苛立て、里の恒例なればとて、筑摩の溫泉は信濃にて、其路近きにあらざるに、今樣を貸遣す折、僅に兩個の小三板をのみ、隨從せしは甚麼ぞや。最烏滸なり、と叱り懲しつ、暖簾次が俱したりける、又那兩個の小三板、早歌調子を召よせて、詞を和げて詰るやう、曩に若們は、今樣と共侶に、鍛冶郎に俱せられて、筑摩の溫泉にゆきし時、他が煉金の計較を、必見も聞もしつらん。憑ず告よ、いかにぞや、と屢問れて早歌調子は、おそるおそる答るやう、否、筑摩とやらゝへゆきし比は、奴每は年九歟、十ばかりにてありしかば、何事も記臆侍らず。况怪しと思ひしことは、聊もあらざりき。一霎時名をのみ更られて、打出丁兒と喚れしのみ。この餘の事は知らず侍り、といふよしさへに取捨にて、佯誑ならず聞えし

かば、職善は亦是を詰らず。駝鳥太等にうち向ひて、若們はこの年來、鍛冶郎が腹心にて、機密は都て知つらん。暖簾次は始より、鍛冶郎を騙賊なり、と知りつゝ他に相譚れて、其利の爲に今樣を、貸て他鄉へ遣せし歟、と問ふを二賊は聞あへず、そは言新しくこそ候へ。今樣こそ鍛冶郎と、死をもて誓し中なれば、竟に機密を呫き示して、哄騙の囮兒に使ひしのみ。暖簾次なンどがいかにして、知る事に候べき。鍛冶郎は始より、支黨の多きを嫌へり。這故に年許多、他が行ひし騙術の、洩るゝことあらざりき。开を這浮世袋屋さへ、罪せられんは無益にこそ、といふを職善うち聞て、暖簾次は鍛冶郎が、支黨にあらずとも、他今樣を從はせて、其囮兒に做たるを知ざりしは、數日の閨房錢多かるを、利としぬる罪、発るべからず。兵每這奴を縛めて、駝鳥太吹五郎と共侶に、夙く獄舍に繫ずや、と烈き下知に伙兵等は、應も果ず衝と寄て、駭怕るゝ暖簾次の、兩手を背へ捩抗々々、緊しく、索を被にけり。當下職善又いふやう、駝鳥太吹五郎暖簾次等は、猶拷問の義あれば、开が儘獄舍へ遣すべし。又早歌調子等も、今樣に相似たる、其罪なきにあらねども、年尙十五未滿にて、且今樣に從ふて、鍛冶郎に倶せられし、其比は猶幼小にて、善惡邪正を知らずといへば、他等は格別の義を以、里長等に預置てん。乳守の里長故老每、皆這旨を得よかし、といひ渡されて阿とばかりに、答口訥る乳守の衆人、怕

惑ひつ早歌と、調子を倶して外面へ、出て承書一通を、猛可に物して呈すれば、身の暇を賜りつ、早歌調子を作ふて、乳守へ還りゆく程に、吹五駝鳥太暖簾次は、執索郎に牽立られて、囚牢を投て退りけり。登時沙彌木訥と、峯張柒六は、悳嶋皆人承りて、喚登されて檐廊に在り、他は九四郎の弟なれども、孟林寺に扈從せる、寺院侍なればなり。又乙藝六市、四揔朱之介は、一個々々に喚よせられて、並て檐廊の下に在り。亓が中に、乙藝六市四揔三名は、旣に紲縛の索を解饒されて、倶に頭を低て居り。職善先柒六にうち向ひて、峯張柒六、倘少年の小腕をもて、二賊を搦捕りし事、助劍の者ありといへども、其挊きの故をもて、料ずも疑獄を解くこと、其功賞すべし。恁れば那身に所要なし。木訥も這旨を得て、倶に歸寺して木玄に、這義を具に傳ふべし。又乙藝六市四揔は、二賊吹五郎駝鳥太の、招了により實を得たれば、九四郎は鐵屑が、支黨ならぬ事分明なり。九四郎旣に罪なき上は、若們男女三個の者を、權且も留置くべからず。こゝをもて放免す。住吉なる里長故老等も、共侶に這意を得て、九四郎が安藝より還るとも、倶して當廳へ參るに及ばず。只這旨を告知しね。獨朱之介は同じからず。他も亦幸に、罪解屍人を免れたれども、俺いぬる日間諜兒をもて、大和の上市へ遣して、他が那里に在し日の行狀と、二百金の盤纏の事まで、那里人に縁て捞らせしに、朱之介は東國なる、一諸侯の

愛臣にて、主君に使を奉り、大和路へ來て逗留の程、故ありて上市なる、落葉が女壻に做るものから、那身は放蕩無賴にて、主君より預來ぬる、沙金三百兩と白布幾百反を、賭博の爲に喪ひつ、纔同鄕なる破落戸、安保甲某に謀られて、奸濫の罪脱るゝ路なく、國守に召捕られしを、落葉が辛く救ひ得て、又那家に養ひつ、敎訓數日詞を盡して、嚮に他が喪ひたる、沙金と唐布を買せんとて、金三百兩を齎して、京師へ遣したりといふ、其事正可に知れたり。但這舊惡のみならず、他は浮寶屋に止宿の程、做せる惡事のある故に、荷三太怒て追出ししといふ這事も、粗聞えたり。矧又今樣が自殺の夜艾、朱之介が旅刀をもて、吭を刺て死したりけるに、枕を並て臥ながら、开を夢にだも知らざりしは、寔に烏滸の白物なり。袷と云恰と云、有恁る無慙の尷尬兒を、この儘饒して還しなば、何をもて江湖上の、歹人を懲すべき。この故に朱之介は、大和へ還ることを饒さず。又京浪速住吉左界に、脚を留ることを饒さず。背を一百鞭せて、東へ追放すべき者なり。又曩に朱之介が、九四郎に預けし金なりとて、乙藝が當廳へ差出したる、百九十五兩は、朱之介が盤纏にあらず。素是上市なる落葉が、沙金と唐布を買せんとて、他に遞與せし要金なれば、必故へ返すべし。この故に俺既に、使を上市へ遣して、件の落葉を召せにき。異日落葉が來ぬる日に、這義を以他に取せん。柒六乙藝里長等、皆這旨


四郎衆人茶店にて藝を迎ふ
待合
六市


うき八

をこゝろ得て、九四郎に傳示しね。疑獄不思議に氷解したるは、正に公私の歡びなり、と稱て身の暇を取すれば、大家倶に額衝て、唯々と言承したりける。當下賴紀聲高やかに、兵毎悉く朱之介に、笞を中て追立ずや、と劇しく下知を傳れば、執索の獄卒等、承りぬ、と應つゝ、朱之介に被たる索の、小手を饒しつ推伏て、笞を抗て撻懲す、數は百八煩惱の、迷も斯や墮獄の鬼を、冥府の呵責目前に、見るも鬱悒き乙藝等は、傍痛く思へども、然而在るべきにあらざれば、六市四揔いへばさらなり、柒六木訥里長故老、皆身の暇を賜りつ、外面投て退出けり。爾程に朱之介は、背を撻るゝこと一百杖、殆痛苦に堪ざれば、聲を涯りに叫ぶのみ。遮莫俗に云藤身なる歟、皮破るゝに至らねば、獄卒夙く撻果て、曳起して推居けり。登時伙兵兩三名、下知によりて共侶に、朱之介を受拿て、退きて准備しつ、赶立て出んとす。是日浪速の里稍盡處まで、倶して追放すべき爲なり。是より先に、乙藝六市四揔等は、柒六木訥里長に倶せられて、退りて門前に出しかば、大江杜四郎成勝は、柹八を從へて、十三屋の隣人、及九四郎が乾兒櫛工等の、この地に躲在る者と、甲乙都て八九名、其頭の茶店に待て居り。蚤く乙藝等を見出して、走り出つゝ皆共侶に、軈て茶店に誘容て、歡びの聲洋々と、甲一句乙一句、先茶を薦め、簞食を拿出て、開まくする程に、木訥は是を推辭て、衆人に向ひていふやう、師父の待不樂給

はんに、小僧は蚤く寺に退りて、這歡びを告稟さん。大江峯張は格別なり、嫂々を宿所へ送屆けて、明日還るともけしうはあらじ、といふを朱六うち聞て、其義寔にしかるべし。嫂の窮阨解たれども、俺兄逆旅の留守なれば、急ぎて宿所へ送るは要なし。この義を師父へ稟し給へ、といへば亦杜四郎も、木訥にうち向ひて、咱等も亦時宜によりて、明日ならでは還りがたけん。這義をこゝろ得給ひね、と憑ば木訥應をしつゝ、却衆人に別を告て、梆八を將て遽しく、孟林寺へかへりゆく程に、住吉なる里長故老等も、簞食を辭ひて還らまくす。當下隣人等のいふやう、今日は赦免の聞えあれば、妖様の麻衣一襲と、帶と日傘は主の宿所にて、索出してもて來り。被更給へ、と袱包を、渡せば、乙藝は受戴きて、危かりける大厄にて、思ひがけなく大家さまの、御阨會に做侍り、衣のみ蚤く被更ても、顏さへ手さへ垢脂染て、久しく櫛の齒を容れぬ、這頭顱を爭何はせん、といふを乾兒等諾なひて、六市が小母の宿所は、這里よりして十町に過ぎず。こゝにて時を移さんより、那里へ立より給ひなば、身裝は易かりてん、といふに六市四摠等も、聞つゝ倶に點頭て、咱等も如右こそ思ひたれ。卒立給へ、といそがすを、自餘の乾兒等推禁めて、しかりとも午は過たり。皆物發しき時候なるべし。這齋を喫てこそ、左も右もし給ひね、といひつゝ軈て茶博士に、茶を請ひつ簞食を開きて、里長故老乙藝はさらな

り、六市四摠を首にて、四郎柒六以下の毎、手に〳〵簞食を引よせて、裝る果子盆に握飯、迭に世話を燒鹽に、交たる胡麻は色見えて、鹿兒歟、斑竹子は、延て節立生魚脯に、蕗菎蒻の煮染物、裂箸添て配り做す、中酒の壺漿拿抗て、甘き辛きは嘗て知る、口茄子紫の、灰後れざる、糠漬は、半分入たる庖丁の、斫離れよき男同士、女一人を上容にて、晝飯既に果しかば、乾兒櫛工共侶に、食籠小盆拿斂て、裹む袱、中結の、紐は一筋千筋なる、縞の麻衣拿出す、隣人等は帶さへに、乙藝に締更させて、卒とばかりに皆共侶に、身を起す時誰やらん、蹴毬す茶碗の忘れ水、忘れはせじ、と一緍の、錢を出しつ茶博士に、還して出る日晝に、流るゝ汗を絞りもあへず、日蔭索ねていそぐ程に、遠くもあらぬ六市が、小母の宿所に來にければ、里長故老隣人、乾兒櫛工等はこゝより辭ひて、明日は又御宿所へ、參りて歡びを稟さめ、といふもいはぬも誠ある、乙藝四郎柒六等に、目禮しつゝ各々、去向いそぎて別れけり。復說、六市が小母夫は、世話介と喚做たる、小經紀なりければ、この日も又早旦より、生活の爲に出ていまだ還らず。然ども小母は今日六市等を、赦免せらるべしと聞知りて、其歡びに堪ざれば、飯を炊ぎつ湯を沸して、他が立よるを待程に、果して亭午過る時候、六市四摠共侶に、乙藝杜四郎柒六を先に立して、額の汗を拭ひつゝ、背門口より來にければ、小母は遽しく出迎て、こは

六市も恙なかりしや。皆さまよくこそ來ましたれ。先這方へ、と華筵を、坐席に布て請ずれば、大家倶に應つゝ、袂を捲り手拭をもて、各裳の塵埃を拂ひて、倶に母屋にうち登るに、四郎乙藝を上坐にて、柒六六市四摠等は、程よく左右に侍りたり。當下屋主の老婆は、先恭しく乙藝に向ひて、不慮の厄難赦免の歡び、祝せば乙藝も云云と、四郎柒六六市四摠、詞も長き夏の日の、炎暑歎はぬ東道態に、先晝饌を薦んとて、いそしく立まくする小母を、大家急に推禁めて、飯は方僅茶店にて、思ひの隨に喫べたり。いかで嫂々に浴させて、結髪をこそ願はしけれといふに、开はいと易かりとて、庭に雨戸を二枚三枚、うち遶らして大盥を、出して直す假浴室、汲拿る熱湯二手桶、水汲入るゝ大柄杓、一二三四手を入れて、是で加減は吉岡染の、浴衣を出す管待態に、卒とて乙藝に薦れば、乙藝は屢歡びを、野邊の石竹植られて、盛過たる盤片よせて、饒し給へ、と簀子の上に、衣脱措て湯に入れば、老婆は猶精悍しく、襷を掛て手拭を、團めて垢脂を搔まくす。迭の口諠果しなく、鄙語にいふ湯の辭義は、水にやならん、と曝笑、六市四總は身を起して、俺們は街衢なる、湯にも入るべく髯をも剃して、先や男を作らんとて、小母を喚つゝ錢を借て、手拭引提て出てゆく程に、杜四郎と柒六は、吹入るゝ風を待貌に、凭柱に身を倚て、憶ず一霎時打眂たり。恁而乙藝は浴し果て、櫛笥を借て梳る、有繫

に長き雲鬟の、亂れ苦しき憂事を、今ぞ稍解水櫛に、搔下し又撫著て、小指に縢髻結の、締り心も夏の日に、流るゝ臘油厭しく、照す鏡に水髮の、淡きも時を移しつゝ、結髮も亦果にけり。當下主の老婆は、土瓶の素湯に茶を入れて、盧生が枕ならねども、碟子に儲の粟餅を、裝つゝ四郎柒六をも喚覺しつゝ乙藝より、次第に煎茶を薦る程に、六市四總は浴しつ、結髮させてかへり來ぬれば、乙藝は圓座に召入れて、主の老婆に、歡びを舒ていふやう、いそぎて家に還るとも、良人は長き旅宿にて、信いまだ聞えねば、悅るべきよしもなく、かへり榮なき宿ながら、いぬる比より稍久しく、近き邊の人々に、阨會被て守らるゝを、知ず良して在るべくも侍らず。日蔭は程よく出來しに、宿所へ還り侍るべし。御庇によりて浴しつ、髮さへ結て侍るから、恁ては外看歹からず。小父の還り給ひなば、六市等も恙なく、赦免せられし歡びを、宜く稟し玉ひね、といふに老婆は禁難て、开は其該で侍れども、日は尙未の時候ならん、今一霎時憩せ給へ。夕饌をこそまゐらすべけれ、といふを四郎と柒六は、側聞して倶にいふやう、嫂々の量簡寔に好。五保子に留守せらるゝに、幾まで歟這里に在るべき。卒立給へ、といそがせば、六市も禁めあへず、敗たる菅笠兩箇まで、索出しつ其一箇を、四摠に遞與して先に立ば、乙藝は猶も老婆に、歡びを舒て身を起せば、杜四郎と柒六も、詞を添つ青傘を、乙藝に遞與して

各々、菅笠引提て皆共侶に、出るを目送る主の妻に、四揔も亦別を告る、詞短き笠の紐、引伸しつゝ倶しにけり。却說乙藝は四郎柒六、六市四揔に送られて、俺宿にしもかへり來ぬれば、思ふにも似ず店の檐には、生平に變らず十三屋と、染做たる暖簾を掛亘してあり。訝りながら內に入る程に、兩隣の老婆が、莞爾やかに立迎て、こは乙藝さま思ひしより、然ばかり牢瘦もなく、還らせ給ひし愛たさよ。六市四揔兩哥々も、辛き目に遇ひ給ひけん。孟林寺の刀禰達も、炎暮歟はで御苦勞やと、いと喋々しく慰めて、乙藝が右より左より、扇ぐ團扇も深草や、鶉の床に對を思ふ、乙藝は四下を見かへりて、料らざりける禍鬼の、崇は俺上のみならで、皆さまにすら御苦勞を、被ると聞ていとゞなほ、心苦しく侍りしに、稍厄解て還され侍り。一向留守し給ひける、人達は在さずや、と問ば老婆等答ていふやう、然なり、五保達は、迭代りに二人宛、今朝までこゝに在せしが、奴家每が來ぬるによりて、剛才出てゆき給ひにき。今日は此上なき吉日なりけん、斯うち揃ふて還らせ給ふ、赦免の歡びのみならず、巳の比及に九四郎主が、安藝より還り給ひにき。然ば這回の禍事と、今日御赦免の事をしも、こゝに初て聞知りて、其驚きは大かたならず、又歡びも一入にて、先や里長以下の每、故老達にも五保にも、禮稟さんとてそが儘に、出て一鄕をうち巡りて、還り給ひしは午の時候なり。この故に庖厨儲を、奴家

毎が憑れて、倶におん身を待程に、主は疲勞に堪ざりけん、軈て納戸へ退きて、假寐してこそいますなれ、と告るに乙藝は含笑て、そは歡ばしき涯りに侍り。然あらんとは知るよしもなく、幾日ともなく垢脂染て、海松の像くに掻垂し、髪をそが儘結もせで、還りいなんはさすがにて、六市小母様の宿所に立より、憶ず時を移ししは、悔しくこそ、とうち陪話れば、四郎朱六いへばさらなり、六市四摠も歡びて、折から大哥の歸郷ありしは、水母の骨にあふ心地して、斯歡ばしき事はなし。喚覺さん歟、と散動たる、聲に九四郎は目を覺しけん、うち咳きつゝ間なる、重紙戸開きて出て來つ、其頭に程よく座を占て、こは皆恙なかりしや。腕子よ四郎をいふ其首は端近かり。這方へ找み給ひね、といふに四郎は應をしつゝ、乙藝朱六共侶に、折に幸ある歸寧と、大厄解し歡びを、云云といはまくするを、九四郎は聞あへず、否、洒家は纔に還ると軈て、里長刀禰にも故老達にも、逢ふて具に聞知りたり。又只其事のみならず、孟林寺の木訥法師が、陣館より事果て、還る路にて出會しかば、腕子と朱六が武勇の搾き、鐵屑とやらが支黨なりし、二賊を輒く生拘て、竟に疑獄を解きしといふ、其顛末をいへばさらなり、柿八老奴が話説にて、肇て知られし大和なる、落葉とやらが信義老實、聞事毎に感嘆せられて、又いふべうもあらずかし。是に就ても好しからぬは、朱之介が浮薄の本性、人は形貌によらぬ者にて、女にして見

まほしき、艶治郎なりければ、俺慾に他を留めて、薄情や事を惹出されしは、俺思ひ足らざりし、愆なるを爭何はせん。遮莫乙藝も六市四摠も、命芽出たくかへり來ぬるは、是切てもの歡びなり。却俺巖嶋 詣して、料ずも昨今まで、長旅に做し故は、治比の郷に立よりて、大人大江弘元といふに見参したればなり。約莫是等の祕事は、四郎朒子に所要あれども、开は後にこそ告稟さめ、といひつゝ傍を見かへりて、喃妖様達、誂たりける酒餚を、今こそ出し給はずや、といふに兩個の隣妻は、應をしつゝ共侶に、軈て庖湢へ退きて、酒盪めてもて來ぬる、坐著酒菜の二種と、三脚なりし吸物膳を、一個々々に措居るを、六市四摠は執接て、似げなく酌を拿舵や、船切の蕎麥は後段にて、先酒盃を拿揚る、主人の一度を首にて、强飲も沙量も推並て、迭にさしつ瑣小蟹の、蟢子の行ひそれならで、かへり來にける俺夫子の、恙なかりし歡びと、又俺妹子も幸に、寃屈の罪を免れし、其壽きの酒祝ひ、憂を轉す歡びに、過にし事をいひも出、うち聞もしつ時移るまで、迭に醉を盡しけり。當下又九四郎は、乙藝柴六等にうち向ひて、聞が如きは那朱之介は、其性善らぬ者なればこそ、果して禍を醸せしより、乙藝六市四摠さへ、連累の祟にあへり。开は疑獄の所以にして、他がみづから作ししにあらず。然るを乙藝六市四摠等は、厄解て赦にあひしに、他のみ單鞭撻れて、大和へは返されず、そが儘追放せられしは、舊惡の咎なりとて

も、最不幸といひつべし。他百九十五金を沒官られて、鐚一文の盤纏なく、他鄕へ追も放されなば、必路頭に立べからん。俺慾に他を留めて、今其窮阨を救はずは、始ありて終なし。何をもて俠者といはれん。柰六は大義ながら、是もて他を赶ずや、といひつゝ懷なる長財嚢より、圓金五兩を數へ出して、是を柰六に遞與していふやう、俺意ふに那壯佼は、必浪速の鄕稍盡處まで、伙兵達に倶せられて、追放るゝにぞあらんずらむ。八彥爺の這方まで、赶もてゆかば逢こともあらん歟。なれども時既に後れたり。及びかたくはそれまでなり。倘幸に遠く得去らで、他竛竮て其頭に在らば、汝よく俺意を傳へて、其金子を路費に取せよ。こゝろ得たりや、といそがするを、六市四揔もうち聞て、然らば咱等も倶にゆきてん。捷徑こそあるなれと、惴るを柰六推禁めて、已ね〱、和主等は、既に大く醉たるに、倶しなば路の障にならん、といふを六市四揔等は、聞も果さずうち笑て、柰公其義は心安かれ。出なば幾程もなく、夕風に吹醒されて、走る勢生平に增すべし。いで〱、といひつゝも、裳を褰て出まくするを、九四郞ヤヤと喚返して、若們が醉狂なる、倶にゆくとも柰六に、佶と從ふて愆すな、といふに乙蔘も杜四郞も、心を屬开が程に、柰六は件の金子を、懷に楚と夾めて、外套を腰に挾み、兩刀手ばやく帶做て、卒走一走にいて來てん、といひつゝ軈て外に出て、脚半草履穿だにも、心急迫しき夏の日の、

暮れぬ程にと出てゆく、勢ひ奔馬に異ならねば、六市四摠は乒乓く脚を、駐めもあへず、後れじとて、喘々ぞ從ひける。この時晷歛きて、晡時に做しかば、兩隣の老婆は、手に〱運ぶ盃盤を、遺なく庖湢へ退けて、乙藝等に向ひていふやう、奴家每は暇を賜りて、明日の炊ぎも致すべく、汗流の湯をも沸してん。思ひがけなく饗饌の、御欵待に與り侍り、といふに乙藝も九四郎も、共侶に勞ふて、好御幇助を得たればこそ、手をも濡さで內祝ひの、酒盃を濟したれ。明日は又主達を、招きて薄酒をまゐらすべし。宜く稟し給ひね、といふに兩個の隣妻は、應をしつゝ身を起して、左右の宿所へ還りけり。恁而四下に外人なければ、九四郎は恭しく、杜四郎にうち向ひて、和子今こそ聞給へ。小可安藝へ赴しは、今茲が初旅なる兀自、嚴島詣は附たりにて、いかで治比へ立よりて、大人いふ弘元ぬしに見參せまくほしさに、講夥計に相別て、單那里へ推參しけるに、大人は果して遐棄給はず、九四郎よくこそ來つれとて、先一兩日憩せて、遂に拜見を饒給ひけり。折から大人は風濕の疾病あり。なれども大病ならざれば、病牀に在しながら、小可を近く召させて、うち相譚せ給ひにき。曩に別れまつりしより、十稔有餘過にしことを、云云と告まつるに、俺二親夫妻九四藏の身故りし事、女兄億祿は短命にて、事皆畫餅になる兀自、和子をいふ杜四郎は健に生育給ふ事、桼六を傅まゐらせて、孟林寺へ寓居の事、木隱和尚

遷化の事、後住木玄道德の、老實遺敎に背ざる事、和子の才幹、文學武藝に、志厚かる事まで、詳に告禀しゝかば、大人は聞つゝ或は歡び、或はうち歎き給ひて、驚きも又大かたならず。這里にも恁る事ありとて、告させ給ふを承るに、和子の大兄、備中新司興元君は不幸短命にて、三稔前に世を去り給ひぬ。憂は只この事のみならで、興元主の冢子なる、幸松君も四五歲にて、果敢なく殤させ給ひにき。興元主の母上弘元のは、うち續きし御歎きにて、是も亦去歲の秋、暴に黃泉に赴き給ひぬ。なれども和子の兩兄太郞君大江二郞君基は、倶に恙あることなく、既に長と成給ひしかば、小可御目を賜りつ、和子の上さへ叮嚀に、問せ給ふに答まつりぬ。當日大人の宣ふやう、相別しより十餘年、這里にも亦其方にも、鬼籍に入る者多かりける。老少不定の世は夢なり。今戰國の時なりとて、俺一筆の雁書を惜みて、四郞が安否を問せざるにあらず。其故は西七國の守、大內義興主世を去りしより、嫡子義隆少年なれば、佞人稍時を得て、賢者を遠離忠臣を譖ちて、人を損ふ事間是あり、俺は那家の被官ならねども、附庸に似たる小身なれば、從はざることを得ず。こゝをもて近曾は出仕を歇め謹愼を宗として、遠く使札を出す事なし。遮莫荊婦の世に在し日に、他はさらなり音就にも、基綱にも告示して、四郞億祿等母と子の、上をしこゝろ得させしかば其頭に障りあることなく、荊婦は臨終にも、四郞に對面

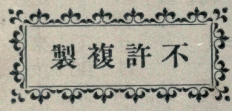
しがたきを、遺憾しとて不娛たりき。況音就基綱は、なつかしくこそ思ふべけれ。然るを俺荆婦はさらなり、億祿は年倘三十に足らで、黄泉の客に做りにしを、今初て知る慨しさよ。俺年年に衰へて、病苦かくの如く身に添ば、魂氣必長かるべからず。この故に再會を、四郎に契る事を得ず。和郎俺爲に言傳せよ。四郎は民間に生出て、且寺院に寓居しぬれは、縱武藝の志ありとも、竟に緇流に化せられて、佛意の凴もやせん。今はしも好時候なり、粂六と共侶に、孟林寺を辭し去りて、武者修行して諸國なる、豪傑に交りて、資助を求るにしくことなし。夫百足の蟲の死して仆れざる者は、扶助多きによりてなり。其も他尊大なるときは、必人に疎るべし。然ば汝弟兄は、四郎が外叔父なれども、粂六は四郎に增す事、僅に二歳の兄ならずや。こゝをもて、主僕の尊卑をいふことなく、倶に胞兄弟の思ひを做して、是を資助の創にせば、竟に武功を做事あらん。其成功を家裏にして、この地に到て兄音就を、輔佐て地を開く事あらば、大孝順といひつべし。這義を四郎に傳てよ、と宣ふ聲も惱しげにて、病苦に堪ず見え給へば、慰難つ唯々とばかりに、言承しつゝ退きて、却兩三日を經て、立去らまく欲せしに、大人は別を惜み給ひて、一日々々と留め給ふに、太郎君二郎君も、倶に孝順なりければ、朝夕枕方脚方に侍りて、慰給ふ、詞敵に、小可をも日每に召させて、放ち給ふべくもあらざれば、憶

はず淹留久しくなりて、三伏の夏闌たり。俺家の事和子の事、心に掛らざるにあらねば、屢身の暇を乞稟すに、大人は竟に禁め難て、看病に侍る女房に吩咐て、鎧櫃に藏措れたる、金二裹拿出させて、刅を小可に遞與させて、且宣ふやう、其一裹は四郎朶六が、武者修行の路費に取せよ。又一裹は、這年來汝夫婦と、孟林寺の現住が、四郎を教育の報ひとす。逆路の重荷なるべけれど、もてかへりて配分せよ、と仰に小可畏み承て、這一裹は左も右も、小可なンどに賜は、當がたく候、と推辭稟せば頭を掉て、そは又要なき口誼なり。病中自由ならざれば、音就に寫せたる、短文の一書あり。其を證据に四郎に見せよ、と言叮寧に示し給へば、太郎君は件の御書を、小可に渡し賜りて、異日を契り給ふにも、身は感涙の外あらず。却あるべきにあらざれば、身の暇を賜りつ、退きて件の金子を、藁苞にして恙もなく、水路の旅宿日數歷て、かへり來て聞けば宿所の凶變、乙藝六市四揔等の、疑獄は和子と朶六の、武功に解たる歡びを、大人には告る由なさよ。先那御書を、と懷より一通を拿出して、杜四郎に遞與す折から、外面に人の脚响して、這方を投て來る者あり。刅は又下の回に、解分るを聽ねかし。

近世說美少年錄上卷終

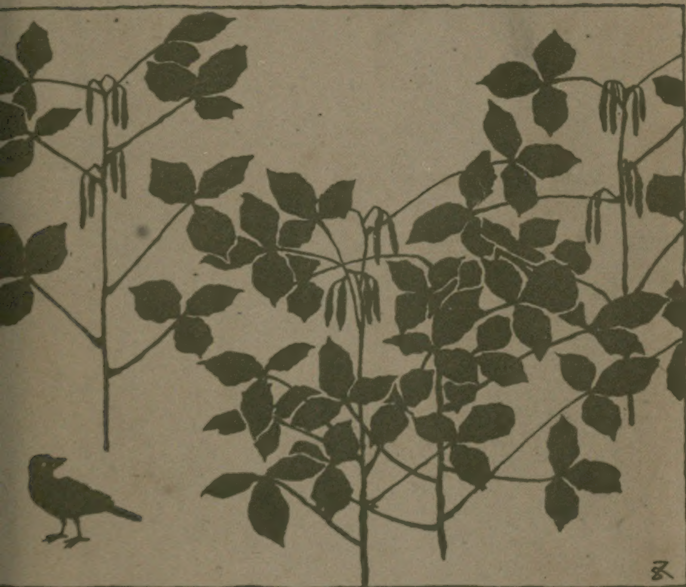
大正元年八月十日印刷
大正元年八月十三日發行

近世說美少年錄上卷

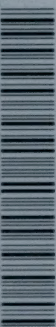


編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店
大賣捌所　東京市神田區裏神保町一番地　三省堂書店
同　大阪市東區南本町四丁目　三宅莊藏書店

（岡山製本）






EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03045 2767